

教科書からみた敬語教育の改善に関する研究
—中国の大学における日本語専攻教育の調査から—

2016年3月

早稲田大学大学院日本語教育研究科

任 麗 潔

目 次

はじめに 本論文の原点—中国の大学における日本語専攻教育	1
第1章 本研究の出発点と目的	10
第1節 本研究の背景	10
1.1.1 なぜ「中国人学習者」なのか	10
1.1.2 なぜ「中国にいる学習者」なのか	11
1.1.3 なぜ「大学日本語専攻教育」なのか	12
1.1.4 なぜ「敬語教育」なのか	13
第2節 本研究の動機	15
1.2.1 学士論文と修士論文の限界	15
1.2.2 問題提起のためのインタビュー調査	16
第3節 本研究の研究目的	22
第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ	24
第1節 本研究に関連する先行研究	24
2.1.1 日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究	24
2.1.2 中国の大学日本語専攻教育に関する先行研究	30
第2節 先行研究の限界と本研究の位置付け	35
第3節 本研究の研究課題と全体構成	38
第3章 学ぶ側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育	41
第1節 調査背景と調査目的	41
第2節 調査方法と分析方法	42
第3節 調査協力者別の事例分析	43
3.3.1 元学習者 C2-01 さんの語り	43
3.3.2 元学習者 C2-02 さんの語り	47
3.3.3 元学習者 C2-03 さんの語り	51

3.3.4	元学習者 C2-04 さんの語り	55
3.3.5	元学習者 C2-05 さんの語り	58
3.3.6	元学習者 C2-06 さんの語り	63
3.3.7	元学習者 C2-07 さんの語り	66
3.3.8	元学習者 C2-08 さんの語り	70
3.3.9	元学習者 C2-09 さんの語り	74
3.3.10	元学習者 C2-10 さんの語り	77
第4節	構築されたカテゴリーの考察	82
3.4.1	敬語に対する苦手意識	83
3.4.2	敬語に関する意識変化	84
3.4.3	高い敬語レベルへの憧憬	85
3.4.4	受けた敬語教育への不満	85
3.4.5	敬語教育の改善への期待	86
第4章	教える側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育	88
第1節	調査背景と調査目的	88
第2節	調査方法と分析方法	88
第3節	調査協力者別の事例分析	89
4.3.1	現場教師 C3-01 さんの語り	90
4.3.2	現場教師 C3-02 さんの語り	93
4.3.3	現場教師 C3-03 さんの語り	96
4.3.4	現場教師 C3-04 さんの語り	99
4.3.5	現場教師 C3-05 さんの語り	103
4.3.6	現場教師 C3-06 さんの語り	106
第4節	構築されたカテゴリーの考察	110
4.4.1	パターン化された敬語教育	110
4.4.2	満足できない学習者の敬語レベル	111
4.4.3	目指したい敬語教育の改善	112
4.4.4	抱えている現実的な悩み	113
4.4.5	教材への強い依存	113

第5章 関連教材からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育	115
第1節 『教育要綱』の分析調査	115
5.1.1 調査背景と調査目的	115
5.1.2 調査方法と分析方法	116
5.1.3 調査の結果と分析	116
5.1.4 調査を通じて見えたこと	122
第2節 教科書の分析調査	123
5.2.1 調査背景と調査目的	124
5.2.2 調査方法と分析方法	124
5.2.3 調査の結果と分析	127
5.2.4 調査を通じて見えたこと	152
第3節 教師用指導書の分析調査	154
5.3.1 調査背景と調査目的	154
5.3.2 調査方法と分析方法	154
5.3.3 調査の結果と分析	155
5.3.4 調査を通じて見えたこと	167
第4節 調査結果に基づく総合考察	170
5.4.1 学習者の意識変化と関連教材における敬語の扱い方	170
5.4.2 学習者の苦手意識と関連教材における敬語の扱い方	172
5.4.3 教育への不満や改善の期待と関連教材における敬語の扱い方	173
5.4.4 教師の現実的な悩みと関連教材における敬語の扱い方	174
5.4.5 敬語教育の実施と関連教材における敬語の扱い方	175
第6章 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の調査結果から	176
第1節 調査からみえてきた敬語教育の問題点	176
6.1.1 一貫しない教育目標	176
6.1.2 不適切な教育時期と期間	177
6.1.3 表現形式に偏る教育内容	177
6.1.4 学習者の主体性を重んじない教育方法	178

6.1.5	再考すべき教材における敬語の扱い方.....	179
6.1.6	敬語教育に苦手意識を抱く教師.....	180
6.1.7	教室内の指導に強く依存する学習者.....	181
第2節	教科書の観点に焦点を当てた契機と必然性.....	182
6.2.1	調査結果からうかがわれる教科書の位置づけ.....	183
6.2.2	先行研究で論じられてきた教科書の位置づけ.....	185
6.2.3	日本語教育教材論における教科書の役割.....	188
6.2.4	中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）における教科書の役割.....	194
6.2.5	教科書の役割の相違から得られた示唆.....	197
第3節	教科書の観点が敬語教育に改善をもたらす可能性.....	202
6.3.1	教科書を通して敬語教育の目標を見直す.....	203
6.3.2	教科書を通して敬語教育の内容を見直す.....	205
6.3.3	教科書を通して敬語教育の時期と期間を見直す.....	206
6.3.4	教科書を通して敬語教育の方法を見直す.....	207
6.3.5	教科書を通して敬語教育の教材を見直す.....	208
6.3.6	教科書を通して教師に気づきを与える.....	209
6.3.7	教科書を通して学習者の自律学習を促す.....	211
第7章	中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するための前提.....	212
第1節	敬語の扱い方を再考することの一般性と個別性.....	212
7.1.1	他の学習項目に共通する一般性.....	212
7.1.2	他の学習項目とは異なる個別性.....	215
第2節	現行の教科書における敬語の扱い方に見られる問題点.....	217
7.2.1	他の学習項目に共通する問題点.....	218
7.2.2	他の学習項目とは異なる問題点.....	218
第3節	現行の教科書における敬語の扱い方の来歴.....	219
7.3.1	内部の要因一『教育要綱』からの影響.....	219
7.3.2	外部の要因一日本国内の日本語教科書からの影響.....	220
第4節	従来の敬語論と本研究の敬語観・敬語教育観.....	222

7.4.1	敬語の扱い方に投影されている従来の敬語論	222
7.4.2	本研究における敬語観	226
7.4.3	本研究の敬語教育観	227
第8章	敬語の基本認識に関する記述の提案	231
第1節	現行記述の実態と問題点	232
第2節	関連する先行研究と本研究の提案	236
第3節	目指したい新たな記述試案例	239
	記述試案例その① 敬語とは	239
	記述試案例その② 中国語の敬語と日本語の敬語	248
	記述試案例その③ 敬語は必要なのか	255
第9章	「語としての敬語」に関する記述の提案	263
第1節	現行記述の実態と問題点	263
第2節	関連する先行研究と本研究の提案	266
第3節	目指したい新たな記述試案例	270
	記述試案例その① 敬語五分法	271
	記述試案例その② 尊敬語とは	277
	記述試案例その③ 語としての尊敬語動詞「お/ご～になる」	282
	記述試案例その④ 謙譲語とは	288
	記述試案例その⑤ 語としての謙譲語動詞「～(さ)せていただく」	293
	記述試案例その⑥ 丁重語とは	301
	記述試案例その⑦ 語としての丁重語動詞特殊形	306
第10章	「敬語表現における敬語」に関する記述の提案	311
第1節	現行記述の実態と問題点	311
第2節	関連する先行研究と本研究の提案	315
第3節	目指したい新たな記述試案例	318
	記述試案例その① 敬語表現における尊敬語動詞「～(ら)れる」	321
	記述試案例その② 敬語表現における謙譲語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただ	

く」	327
記述試案例その③ 敬語表現における丁重語動詞特殊形	334
記述試案例その④ 語彙としての敬語化とは	342
記述試案例その⑤ 表現における敬語化とは	348
記述試案例その⑥ コミュニケーションにおける敬語化とは	352
第11章 教科書における敬語の新たな記述に対する現場教師のフィードバック	361
第1節 フィードバック調査の概要	361
11.1.1 調査目的	361
11.1.2 調査期間と調査協力者	361
11.1.3 調査手順	362
11.1.4 調査内容	362
第2節 フィードバック調査の結果	371
11.2.1 学習者向けの教科書記述試案例について	371
11.2.2 教師向けの指導手引書記述試案例について	381
第3節 フィードバック調査から得られた示唆	389
第12章 まとめと今後の課題	393
第1節 本研究のまとめ	393
第2節 日本語教育分野における本研究の特徴と意義	406
第3節 本研究の限界と今後の課題	410
おわりに—教科書を通じて教師も学習者もともに学ぶ敬語教育へ	412
参考文献一覧	414
謝辞	429

はじめに 本論文の原点—中国の大学における日本語専攻教育

本論文の題目からは、中国の大学日本語専攻教育を一事例とし、教科書の観点から敬語教育の改善を試みる、つまり教科書における敬語の扱い方が本論文の出発点であるという印象を受けるかもしれない。しかし、実は教科書の観点に至るまでには長い道のりがあった。本論文の原点は、筆者が大学時代に受けた日本語専攻教育であった。それがきっかけとなり、中国の大学における日本語専攻教育に問題点を感じ、それを改善しようと思ったのが最初の問題意識となった。したがって、まず冒頭に、本論文の原点である「中国の大学における日本語専攻教育」について説明しておきたい。

国際交流基金の日本語教育国・地域別情報¹ (2014) によると、中国における日本語教育は、教育段階別の状況からみると、初等教育（小学校）・中等教育（日本語を外国語科目として教えている普通中学校、高校と日本語の専門教育を実施している外国語学校及び職業中学校、高校）・高等教育（学部レベルでは日本語専攻、非専攻第一外国語、非専攻第二外国語に分類される）・大学院教育（日本語専攻の修士・博士課程と日本語非専攻必修の第一・第二外国語科目）・学校以外の教育（社会人を対象に行う日本語教室）に分けられる。

その中で、高等教育の日本語専攻教育は、量的にも質的にも大きな特徴を持っているため、中国における日本語教育の牽引役だといわれている。それを更に細分化すれば、4年制大学の日本語専攻教育・専門学校の日本語専攻教育・全日制独学クラスの日本語専攻教育という3種類に大別できるが、本研究は、中国の正規4年制大学で、日本語を専攻とする学部生を対象に行われている敬語教育に焦点を絞るものである。以下では、「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育」と略称する。

筆者は過去に、学習者として4年間、教師として3年間、中国の大学日本語専攻教育に関わってきた。振り返ってみれば、本研究の問題意識は学習者時代から生まれ、教師時代の経験を通しより明確となり、自分の研究テーマとして成長してきた。その後、本研究を遂行する際にも、中国の大学日本語専攻教育現場に戻り、約4年間にわたり研究調査などを行い、本論文を執筆するに至った。

本論文を始める前に、沿革・教育目的・教材など様々な角度から、中国の大学日本語専

¹ 2012年7月～2013年3月に実施された調査である。以下、国際交流基金（2014）と略称する。
<http://www.jpfa.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/china.html>（最終アクセス：2015年6月1日）

攻教育について、簡単な概説を行いたい。なお、ここに記述していることは、主に以下の七つのルートによって集められた情報を総合的にまとめたものである。①筆者自身の経験談。②卒業した元学習者や現場で教えている教師など、中国の大学日本語専攻教育の関係者である知人から聞いた情報。③ゼミや勉強会、研修会などで知り合った中国の大学日本語専攻教育を経験したことのある方から聞いた情報。④国際交流基金によって実施された調査の結果。⑤中国の外語教学与研究出版社によって出版された『中国日語教育概覧 1』²。⑥中国教育部の高等教育機関外国語専攻教育指導委員会によって作成された『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』と『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』³。⑦学会誌や新聞紙などに掲載されている関連論文や記事など。

【中国の大学における日本語専攻教育の沿革】

修・李（2011）によれば、1949年に新中国が成立した後、中国政府に発表された外国語教育重視政策に基づき、北京大学（1946年）、對外経貿大学（1953年）、吉林大学（1953年）、北京外国語大学（1956年）、上海外国語大学（1960年）、北京第二外国語学院（1964年）、遼寧師範大学（1964年）、黒竜江大学（1964年）などの大学で相次ぎ日本語専攻が設置された。しかし、1966年からの文化大革命により、大学の日本語専攻教育も含め、中国における日本語教育全体が途絶え、停滞期に入ってしまった。6年後の1972年に、日中国交正常化により、第1次日本語ブームが訪れ、大学の日本語専攻教育も著しく発展してきた。復旦大学（1971年）、南開大学（1972年）、天津外国語大学（1973年）、北京師範大学（1973年）、大連外国語学院（1978年）、北京語言大学（1979年）など、70年代では全国約30校の大学で、日本語専攻教育が新たに開始された。

そして、80年代に入ると、日本語学習者がますます増え、特に1980年代の半ばから、第二次日本語ブームが始まり、その人気度は90年代に入っても落ちることなく、約20年間で日本語専攻教育が実施されている大学は100校近くまで増加し、中国では日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。2000年以降、コンピュータの普及や日本語アニメなどの影響により、日本語学習者数は急増し、100万人以上に上り、世界1位となった（国際交流基金，2014）。修・李（2011）によると、2011年6月までに中国国内の4年制

² 中国語で書かれているため、原文をなるべく忠実に筆者が翻訳し、引用する。

³ 基礎階段とは、大学1・2年次、高年級階段とは、大学3・4年次を指す。以下では、それぞれ『基礎階段教育要綱』と『高学年段階教育要綱』と称する。また、総称の際、2冊の『教育要綱』と称する。引用の際、『中国日語教育概覧 1』と同様である。

大学計 1108 校のうち、日本語学科のある大学は 466 校で、外国語専攻において英語に次ぐ 2 位となったことから、中国全国半数近くの大学で日本語学科が設立され、日本語を専攻とする学習者が倍増し、そして今後も増えつつあると予想される。

【中国の大学における日本語専攻教育の目標】

時代の変化とともに、中国の大学日本語専攻教育の目標も変化してきた。中国教育部の高等教育機関外国語専攻教育指導委員会によって作成された 2 冊の『教育要綱』では、2000 年以降の中国大学日本語専攻教育の目標について、以下のように述べられている。

基礎段階（1・2 年次）では、学習者が日本語に関する基礎的な知識をしっかりと学び、身につけるよう指導する。「聞く・話す・読む・書く」という 4 技能の基本に関する訓練を行う。学習者の実践的に言語を運用する能力を育成する。学習者の日本の社会文化に関する知識を深め、文化に対する理解力を育成し、高学年段階の学習に向けて堅固な基礎を築くということを目指している。（『基礎段階教育要綱』, p. 1）

高学年段階（3・4 年次）では、日本語専攻の卒業生として、以下の能力を持つ人材を育てる。日本語による確かな語学力と高い実践力を持つこと。日本語言語学・日本文学・日本社会文化（地理・歴史・政治・経済・風習・宗教など）に関する基本知識を備えること。卒業後、専門性の高い職業以外の通訳・翻訳・日本研究や日本語教育などの仕事に適応できることを目標としている。（『高学年段階教育要綱』, p. 1）

しかし、上述した教育目的が規定されてから 15 年近くも経っており、様々な面において中国の大学日本語専攻教育が変化しているといえよう。そのため、教育目標を見直す必要があるという意見も出されている。ここでは修・李（2011）の意見を以下に引用する。

過去の 60 年余を振り返ると、2000 年以降の発展はとりわけ速く、今中国の大学日本語専攻教育は前代未聞の転換期を迎えているといえる。21 世紀に求められる日本語専攻人材の需要に応え、競争の高い就職難関を乗り越えるためには、転換期に生まれた新課題を検討しなければならない。従来の言語能力・言語コミュニケーション能力の育成から、日本語を用い、異文化コミュニケーション力の育成へ、従来の日本語学習が主目的から、日本語を媒体とし、関連知識や技能の獲得が主目的へ、そして従来の日本語関

連の仕事にしか就くことのできない学習者の育成から、幅広い関連仕事に就くことのできる学習者の育成へとといったように、基礎段階をはじめ、中国の大学日本語専攻教育の目的を見直し、学習者の自主学習力や協働的学習力の能力育成に力を注ぐ必要があると思われる。すなわち、転換期にある中国の大学日本語専攻教育は、日本語による異文化コミュニケーション力・日本語+ α の複合能力・日本語を通じ関連知識を学ぶ能力を備える人材を育成することを目標とすべきである。(p. II)

【中国の大学における日本語専攻教育の学習者】

国際交流基金（2014）によると、中国にいる日本語学習者のうち、約6割以上が大学における学習者である。その中で日本語を専攻とする学部生の人数は報告されていないが、修・李（2011）の調査結果を参照すると、約6万人もいると推察され、現在も増えつつあると予想されている。

そのうち、大学に進学する前に初等または中等教育として日本語を学習した者⁴もいるが、大学に進学してから始めて日本語をゼロから専攻として学び始める者が多数である。また、自分の希望として日本語を選び、日本語学科に進学する者もいるが、希望していた学科に受からず、日本語学科に落とされた者⁵もいる。これは外国語専門の大学では少ないが、総合的な大学（北京大学など）、特に理系の大学（大連理工大学など）ではよくあるケースである。実際に筆者の大学時代のクラス（日本語学科）では、約半分の学習者は大学入試の際、日本語学科を希望していなかった。

最後に、国際交流基金（2014）では、中国の大学日本語専攻学習者について、以下のよう

に報告されている。

中・上級レベルに達する学習者が非常に多く、大学入学時に日本語をゼロから始めて、3年次に日本語能力試験N1に達する機関が多い。全体的に研究志向よりも実利志向（ビジネス、観光等）が高く、卒業後は日系企業に就職する学生が多い。また近年は日本語力だけでは就職が難しくなっており、英語、経営、コンピュータなどを併せて学ぶ学生が増えている。二つの学位を取得できるダブルメジャー制の導入や、日本の大学と

⁴ 中国（特に東北地方）では、英語の代わりに日本語を第一外国語とする小学校と中学校もある。

⁵ 中国では、本人が直接希望していなくても、大学入試の成績によって大学は学生の専攻を調整することができる。

提携し、日中双方の学位を取得できる2+2制度⁶などを打ち出す機関も増えてきている。また、日本語専攻を卒業して日本の大学の修士課程に進学し、上記のような語学以外の専門を専攻する学生も少なくない。

【中国の大学における日本語専攻教育の教師】

2000年代に入り、学習者が大幅に増えるにつれ、日本語教師の需要も急速に高まってきている。国際交流基金（2014）では、中国における日本語教師は16752名であると報告されており、修・李（2011）の調査結果を参照すると、大学の日本語専攻教育に携わっている教師は、約4000人に上ることが分かった。そのほとんどが中国人教師であり、彼らの多くは、大学時代中国で日本語を専攻とし、その後大学院に進学し、日本語の修士号を取得している者である。更には、日本の大学院に留学し、修士号または博士号を取得している教師もここ数年定着し始めている。日本で学位を取得していなくても、研修などで訪日経験を持つ教師は多数いる。

一方、日本人教師については、人数は少ないが、日本語専攻を持つ大学の多数が非常勤教師として日本人教師を雇っている。日本人教師の多くは日本語教育専門の出身ではないが、最近知名度の高い大学では、420時間以上の養成講座受講歴、日本語教育能力検定試験合格、日本での教授歴、日本語教育関係の学位または修士以上の学歴など要求されるケースも見られる。ほとんどの大学では、日本人教師は高学年（3・4年次）の会話や作文などの授業を任されている。

国際交流基金（2014）によれば、2013年8月に、中国日本語教学研究会が主催した「教師の専門性の発展を目指す大学日本語中核的教師の研修プロジェクト」の開催を機に、同研究会の附属組織である「日本語教育専門分会」が設立された。今後、日中両国の専門家を巻き込みながら、中国における日本語教育研究及び日本語教育支援事業の持続的・計画的な発展に向けて、中核的役割を担うことが期待される。

【中国の大学における日本語専攻教育の学習環境】

中国の大学日本語専攻クラスは、20～30人からなるものが多いが、外国語専門の大学や師範類大学などでは、一クラスに50人を超える場合も少なくない。教室設備と教育手段に関

⁶ 大学4年間のうち、中国の大学と日本の大学にそれぞれ2年間ずつ在籍する。

しては、近年コンピュータやインターネットの普及、IT技術の発展などにより、マルチメディア教材が導入され、CAI教材の開発も盛んになっている。都市部の大学では、近年プロジェクターなどの設備が整っているところが多く、パワーポイントやマルチメディア教材などの使用が普及されている。一方、地方の大学では、黒板とチョークを主なメディアとして授業が展開されることが多い。

教室以外の学習環境については、大学内外で開催されている「日本語角」⁷などのイベントに参加し、日本人留学生などと触れ合う機会を利用する学習者も少なくない。また、高学年では、ほとんどの大学は日系企業などと連携し、短期の日中貿易会や長期の企業研修などの機会を学習者に提供し、日本語による社会勉強をさせている。

更に、近年海外留学のニーズの拡大と大学間の交流の発展により、大学在籍中日本に交換留学生として派遣される機会も増えている。そして、日本の大学と提携し、多人数の3+1（3年間中国の大学、1年間日本の大学）や2+2（中国の大学と日本の大学、2年間ずつ）派遣制度を設ける大学も多く現れている。

最後に、自律学習の環境として、中国におけるほぼすべての大学では、インターネット環境が完備されており、日本のニュースや映画、ドラマ、アニメなどの文字または映像情報を容易に入手することができる。

【中国の大学における日本語専攻教育の指導要綱】

中国の大学日本語専攻教育は、1992年に設立された中国の教育部高等教育機関日本語専攻教育指導委員会によって推進されている。委員会は数十名の専門家から構成され、全国の専攻教育に関する研究・諮問・指導などを行い、この分野においては最も権威のある組織であるといえる。

大学における日本語専攻学習者の増加にしたがって、委員会は長年の調査及び分析を経て、1990年に『基礎段階教育要綱』の初版を出版し、その後修正を加え、2001年に改訂版を出版した。また、2000年に『高学年段階教育要綱』を刊行した。「基礎段階」は1・2年次を、「高学年段階」は3・4年次を指す。この2冊は中国の高等教育機関における日本語専攻教育を実施するに当たり、指導的な役割を果たし、教育目的・教育内容・教育計画・教材編集及び教育評価などに明確な根拠を与えていると思われる。

⁷ キャンパス内または町の公園などで、日曜日などの休みの日に日本語学習を主な目的とする人々が集まる。

なお、国際交流基金（2014）によると、2013年7月、新しい教育部高等学校外国語專業教学指導委員会が正式に発足し、2017年を目途に大学外国語專攻のシラバスを改定するため、準備に取り組んでいる。同委員会の中に設けられた日本語部会は、基礎段階教育（大学日本語專攻1・2年生）と高学年教育（大学日本語專攻3・4年生）の2チームに分かれ、調査・分析・草案作成作業に着手し、国家基準や教育基本方針の見直しを進めている。

【中国の大学における日本語專攻教育の教材】

国際交流基金（2014）では、中国の大学日本語專攻教育現場で使われている教材について、次のように報告されている。

いくつかの有力大学がシラバス準拠の教材をそれぞれ作成しており、その他の大学はそれを利用することが多い。広く使われている教材としては、『新編日語』（上海外国語大学）、『新編基礎日語』（北京大学）等がある。東京外国語大学の初級用教材（旧版）に中国語の説明をつけたもの（『新編日語』吉林教育出版社、『新日本語』山西教育出版社）も広く使われている。また、1998年に『新日本語の基礎』が、2002年には『みんなの日本語』が、中国国内でも正式に出版された（外語教学与研究出版社）ことから、初級用教材として採用するところもある。

2010年から日本語專攻大学生用の教科書として新シリーズ『基礎日語総合教程』『基礎日語聴力教程』『基礎日語口語教程』『基礎日語写作教程』等、全12冊（高等教育出版社・北京）の出版が始まった。

中・上級は、旧版の『日語』5-8（上海外国語大学）が広く使用されている他、日本で出版された教材や自主制作教材を使用することが多かったが、高学年用シラバスの制定を受け、『総合日語』（北京大学出版社）等これに準拠した主教材が出版された」と報告されている。

以上の調査結果は、筆者の経験談と聞き取り調査で集めた情報とほぼ一致している。補足として、上述したもの以外にも、次の教材を使用する大学もある。1・2年次では、人民教育出版社と光村图书出版株式会社の『中日交流標準日本語』、華東理工大学出版社の『新編日語教程』、高等教育出版社の『新大学日語標準教程』、外語教学与研究出版社の『日語精読』などである。3・4年次では、上海外語教育出版社の『日語総合教程』、上海外語教

育出版社の『高級日語』などである。

【中国の大学における日本語専攻教育の教育時間】

『基礎段階教育要綱』においては、中国の大学日本語専攻教育の授業時間について、以下のように定めている。1年次では、最低でも14学時⁸/週で、1年間総計476学時（14学時×17週×2学期）以上を必要とする。2年次では、最低でも12学時/週で、1年間総計406学時（12学時×17週×2学期）以上を必要とする。3・4年次の授業時間については、『高学年段階教育要綱』においては明確に記述されていない。

筆者自身の経験談と聞き取り調査の結果によると、1・2年次の場合、4学時/日で週に20学時の日本語授業を実施している大学が多く、3年次においては、1・2年次とは異なり、選択科目が導入されるため、大学や学習者の間でバラつきが見られるものの、2学時/日で週に10学時は平均的であると推察される。4年次では、前半のインターンシップと後半の卒業論文が大半を占めるため、授業時間は激減し、平均的に週に2~4学時になる学習者が多いようである。

【中国の大学における日本語専攻教育の履修科目】

【学習者】においても述べたように、中国の大学日本語専攻学習者は、大学に進学後初めて日本語を学び始める者が圧倒的に多いため、授業も50音から扱うのが一般的である。そのため、まず1年次では、発音、文字、語彙、文法など日本語の基礎から全般的に教える授業は、2学時/日で設けられることが主流である。このような授業は、「基礎日本語」、「日本語入門」、「日本語精読」などと名づけられ、基礎段階では主要科目とされており、授業時間に占める割合も最も高い。

このほかに、1年次では、話す練習を主目的とする会話授業と聞く練習を主目的とする聴解授業もほとんどの大学で開講されている。授業時間に関しては、大学によって多少異なるが、会話と聴解は週に4学時ずつで行われる傾向が見られる。

2年次では、上述した3種類の授業がそのまま継続される大学もあるが、会話と聴解の授業時間がそれぞれ半分に減らされる場合もあり、その代わりに、作文などの授業を実施する大学が少なくない。

⁸ 中国の大学では、1学時=50分で、2学時連続で授業を行うことが多い。

3年次では、科目のバリエーションが更に豊富になり、閲読、翻訳・通訳、言語学、文学、社会文化、経済、日本語能力試験対策など多様な授業が開講され、選択科目として学習者は自身のニーズに合わせ、履修することができる。

4年次では、ほぼすべての科目が選択科目となり、就職活動を支援するために敬語やビジネスマナーに関する科目を設置する大学もある。そして、後半では、卒業論文の執筆を指導するための科目が主要となる大学が多い。

また、近年の新動向として、教育内容の多様化に応え、就職などを考え、研究志向から実務志向への転換が多く、ビジネス日本語、経済日本語、観光日本語、科学技術日本語などの講義の増設が目立っている。

【中国の大学における日本語専攻教育の評価・試験】

中国の大学日本語専攻教育の評価方法は、科目によって異なるが、多くの場合1学期間に各科目において、筆記または口頭の間接テストと期末試験が行われ、点数をつけることで学習者を評価する。

また、近年、高学年では、日本側または中国国内主催の日本語に関する試験に参加させ、合格することを卒業条件の一つとする大学が増えている。最も一般的なのは、日本語能力試験（JLPT）と大学専攻日語四級考試、八級考試である。それ以外にも、BJT ビジネス日本語能力テストやTEST 実用日本語検定などが挙げられる。

そして、4年間の最後に卒業論文を執筆し、提出することを要求する大学が多数である。テーマは言語・文学・教育・社会・経済など、日本や日本語と関連するものであれば、学生は自ら自分の興味や関心と合わせ、決めることができる。多くの大学では、学生は最後の1年間で、それぞれの分野に近い教師の下で、グループ分けし、指導を受け、卒業論文を仕上げていく。そして、4年次の最後で、公開審査の形で自分の論文について発表し、評価してもらう。ほとんどの大学では、審査に合格した学生のみ、卒業できると規定されている。

以上、中国の大学日本語専攻教育について概観してきた。これで全体像とはいえないが、本研究は、上述した概観を背景に論を進めていくことにしたい。

第1章 本研究の出発点と目的

「はじめに」でも述べたように、本研究は教科書から出発したものではない。中国の大学における日本語専攻教育に問題点を感じ、それを改善しようと思ったのが、最初の問題意識であった。更に言うと、中国の大学における日本語専攻教育の中で、敬語教育への関心が特に強かった。

というのは、周りの学習者に話を聞くと、大学4年間日本語を専攻として学んだ中で、最も難しく感じた学習項目として、敬語が多く挙げられていたからである。筆者自身も大学卒業当時、日本語によるコミュニケーションはある程度不自由なくできたが、敬語にだけは自信が持てなかった。そこで、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育は、どのように行われており、どのような問題点があるのかというより具体的かつ明確な問題意識が生まれ、本研究の出発点となった。それを研究目的として掲げ、調査を行い、追究しているうちに、教科書の観点にたどり着いたわけである。

以上で述べた経緯を踏まえ、第1章では、本研究の研究背景と研究動機について述べた上で、研究目的を示しておきたい。まず、第1節では、本研究の背景として、なぜ「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育」について研究しようと思ったのか、その理由について四つの問いを立て、筆者の考えを述べる。そして、第2節では、筆者の学士論文と修士論文を踏まえ、問題提起のために行ったインタビュー調査を紹介し、本研究の動機について述べる。第3節では、研究背景と研究動機を踏まえ、本研究において何をどこまで明らかにしようとするのかを示す。

第1節 本研究の背景

1.1.1 なぜ「中国人学習者」なのか

本研究が、「中国人日本語学習者」に焦点を絞った理由は、主に以下の2点である。

1点目は、日本語教育全体において、中国人学習者の占める割合が極めて高いためである。国際交流基金(2014)によると、中国では2000年代に入り、日本語学習者数は大幅に増え、韓国を抜き、世界第1位の日本語学習大国となった。総計約105万人に上り、日本で日本語を勉強しているすべての外国人の約7倍である。また、文化庁の平成25年度国内

の日本語教育の概要によると、日本国内の日本語学習者数⁹は 156843 人となっており、そのうち半数近くは中国出身者であり、2 位であるベトナム出身者の 4 倍近くである。この二つの調査結果から、海外においても、日本国内においても、中国人日本語学習者は極めて高い割合を占め、日本語教育の全体において重要な位置付けとなるといえよう。

2 点目は、筆者自身の日本語学習歴、教育歴及び今後のキャリア志向と深く関わっているためである。筆者は、中国人日本語学習者の一人として、10 年間日本語の教育を受けており、日本語の学習を続けてきた。一方、10 年の間に、日本語学校の専任教師や大学の非常勤講師として日本語教育に携わり、教育の経験も積んできた。学習者の立場からも、教師の立場からも、中国人日本語学習者を対象とする日本語教育を長年経験してきたのである。そのため、双方の視点から中国人日本語学習者をより深く理解し、分析・考察することができると考えられる。また、中国人日本語学習者を対象とする日本語教育を生涯の仕事として目指しているため、本研究の研究成果を自らの教育現場に生かすとともに、日本語教育全体に還元したいと思う。

1.1.2 なぜ「中国にいる学習者」なのか

次に、本研究がなぜ「中国にいる学習者」を対象とするのかについて論じる。

第一に、日本国内より中国にいる日本語学習者が圧倒的に多いためである。国際交流基金 (2014) と文化庁の平成 25 年度国内の日本語教育の概要を参照すると、日本にいる中国人日本語学習者より、中国国内にいる学習者の人数が圧倒的に多いことが分かる。また、日本にいる学習者の中でも、日本語を中国でゼロからスタートし、ある程度日本語教育を受けた人も少なくないことが予想される。すなわち、中国人日本語学習者の多くは、中国にいる、またはいた学習者であり、その後日本語に来て学習を続ける人もいるが、中国国内で学習を終えたまま、直接社会に出る学習者のほうが断然に多いのではないかと思われる。そのため、中国にいる学習者に注目することは、中国人を対象とする日本語教育を考える際、極めて大事な観点であると思われる。

第二に、日本にいる日本語学習者と比べ、中国にいる学習者は学習環境に恵まれていないためである。外国語学習の過程においては、様々な要因が関わっていると指摘されている。例えば Ellis (1994) によれば、【表 1】に示しているように、主に「社会文化的要因」、

⁹ 国・地域別上位 3 位は、中国 (64687 人)、ベトナム (18633 人) と韓国 (10192 人) である。

「学習者要因」と「学習環境要因」という三つの要因群に分けられている。

【表 1】 第二言語習得に関わる要因

社会文化的要因	多言語・多文化との接触、多言語・多文化社会に対する態度、バイリンガリズムへの期待、言語政策、社会階層	
学習者要因	年齢、適性、動機・態度、学習ストラテジー・学習スタイル、性格・情緒、母語、性別、教育経験	
学習環境要因	フォーマル	教師特性、教師教育／養成、教師経験、教授法、教材、教育期間／時間数、他の学習者
	インフォーマル	目標言語との接触、目標言語話者との接触

中国人日本語学習者の日本語学習も、当然上述したすべての要因と関わっているといえよう。そのうち、中国にいる学習者と日本にいる学習者とで最も異なるのは、「学習環境要因」であると思われる。すなわち、前者は後者と比べ、目的言語話者である日本人と接触する機会も限られており、目的言語である日本語に自然にも触れる時間も短いため、学習環境が比較的不利であると予測される。したがって、その不利を補うために教育面・研究面における工夫がかなり重要になってくると考える。

1.1.3 なぜ「大学日本語専攻教育」なのか

次に、「大学日本語専攻教育」に注目した理由について述べる。

中国において、中学校、高校、専門学校、大学など様々な教育機関で日本語教育が行われているが、教育対象や教育時間数、教育目標、使用教材などが異なるため、区別せずに一概に論じることはできない。

国際交流基金（2014）によると、中国における日本語学習者のうち6割以上が大学における学習者¹⁰であり、更にその中で日本語学科の新設や既存学科の定員増などにより、日本語を専攻とする学習者が2000年以降大幅に増加し、彼らの多くは大学入学時に日本語をゼロから始め、3年次に日本語能力試験N1に達し、研究志向よりも実利志向（ビジネス、観光等）が高く、卒業後日系企業に就職すると報告されている。中国国内では日本語高度

¹⁰ 679336人であり、全体の64.9%を占めている。

人材を育成するための主要ルートとされる大学における日本語専攻教育は、他と比べ、教育目標も高く、教育時間数も長く、教育内容も豊富などの特徴を持ち、近年日本語教育に携わっている研究者や教育者の関心を集めている。

また、修・李（2011）によれば、2011年6月までに中国国内の4年制大学計1108校のうち、日本語学科のある大学は466校で、外国語専攻¹¹において英語に次ぐ2位であり、すべての専攻¹²において12位であることが浮き彫りとなった。1949年に新中国が成立した後の大学における日本語専攻教育は三段階に分けられると一般的に指摘されている。第一段階は1949年～1972年であり、北京大学を始め全国いくつかの大学で日本語学科が設立された。第二段階は1972年～1999年であり、日中国交正常化にともない、全国各地の大学で日本語学科が急増した。第三段階は1999年～現在に至り、半数近くの大学で日本語学科が設立され、日本語を専攻とする学習者は倍増した。

修・李（2011）によると、2000年以降の発展はとりわけ速く、日本語専攻教育は前代未聞の転換期を迎えている。また、同書では、言語能力・言語コミュニケーション能力の育成から、日本語を用い、異文化コミュニケーション力の育成への転換、日本語学習が主目的から、日本語を媒体とし、関連知識や技能の獲得が主目的への転換、そして学習者の自主学習力や協働的学習力の育成、教育手段の現代化などの新課題に直面しており、新たな改革の必要性が指摘されている。本研究もこれらの新課題を視野に入れ、中国の大学日本語専攻教育の改革に貢献できればと思う。

1.1.4 なぜ「敬語教育」なのか

最後に、なぜ「敬語教育」に絞ったのか、四つの理由を説明する。

一つ目の理由は、母語には体系的な敬語は存在しない中国人日本語学習者にとって、敬語は極めて困難な学習項目であるためである。表記形態として日本語も漢字を使用しているため、中国人日本語学習者にとって、日本語を学習する上で有利である一方、現代中国語には体系的な敬語が存在しないため、中国人日本語学習者にとって、敬語は最も難しい学習項目の一つであると多くの先行研究において指摘されている（佐治, 1992; 宮岡, 2005 など）。母語の影響により、敬語意識が低い中国人学習者にとって、表現形式も使い方も複

¹¹ 英語 (935校)、日本語 (466校)、ロシア語 (118校)、朝鮮語 (102校)、フランス語 (92校)。

¹² 英語 (935校)、計算科学と技術 (885校)、芸術設計 (731校)、マーケティング (701校)、法学 (614校)、電子情報工学 (602校)、工商管理 (567校)、中国言語文学 (543校)、会計学 (539校)、情報学と科学技術 (508校)、数学 (481)、日本語 (466校)。

雑な敬語は、頭の痛い存在である。確かに、日中両国の文化背景や言語体系が異なることは、中国人学習者の敬語学習を困難にする大きな原因であろう。しかし、それを消極的に受け入れるだけでは何も変わらない。中国人日本語学習者の「敬語難」を少しでも改善するための教育面における支援を探るための研究に積極的に取り組むべきだと考える。

二つ目の理由は、敬語の学習環境に恵まれていない中国国内にいる学習者にとって、敬語教育がより重要になるためである。川口（1991）では、敬語を含む待遇表現は場面の中でしか習得できないと指摘されている。1.1.2 で述べたように、中国にいる日本語学習者の場合、授業以外で日本語に触れる機会も少なく、日本人と接触する場面も限られているため、敬語学習がますます困難になると予想される。確かに、近年インターネットの急速な普及により、海外にいる学習者も日本に関する情報を瞬時にかつ手軽に入手することができるようになった。特に漫画、アニメ、映画、テレビドラマなどを視聴することにより、中国にいる学習者も様々な場面に触れることができ、敬語の習得にも一定の効果をもたらしている。しかし、漫画、アニメ、映画、テレビドラマにおいては、ほかの文型と比べ、敬語の出現率がそれほど高くないため、見聞きする機会はやはり少ないと推察される。したがって、不利な習得環境に置かれている学習者向けの敬語教育を研究対象とする必要性和喫緊性がある。

三つ目の理由は、日本語専攻の学習者にとって、敬語は避けては通れない存在であるためである。菊地（1997）によれば、敬語または敬語的表現は世界の多くの言語に見出せるが、日本語の敬語は<言語体系の随所に広汎に>、いわば<高度に体系的・組織的に>発達しており、世界的に見ても著しい特色を持つ。そのため、日本語母語話者にとっても敬語は複雑で、使いこなすことが難しいといわれている。とはいえ、平成23年に文化庁が実施した「国語に関する世論調査」において、日常生活で敬語を「いつも使っている」と「ある程度使っている」を選んだ人は76.3%もいた。また、敬語を使うことに関して、「使いたい」人は、9割以上であることが分かった。すなわち、日本社会で生活し、または日本人と接触する以上、敬語は欠かせないものであるといえる。大学における日本語専攻生の場合、日本語人材として育成され、卒業後の進路として日系企業への就職や来日留学など、日本人や日本社会との関わりが深いと予想されるため、彼らを対象とする敬語教育は意義深い課題である。

四つ目の理由は、敬語は他の文法項目と比べ、人間関係により影響を与えるためである。多くの日本語現場では、敬語は初級または中級の基本文法の一つとして位置付けられ、他

の文法項目とほぼ同様に扱われている。しかし、「敬語の指針」(2007, 文化審議会答申, p. 63) においては、敬語の重要性について、次の2点が挙げられている。

- ① 相手や周囲の人と自分との間の関係を表現するものであり、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きを持つ。
- ② 相手や周囲の人、その場の状況についての、言葉を用いる人の気持ち（「敬い」「へりくだり」「改まった気持ち」など）を表現する言語表現として、重要な役割を果たす。

すなわち、敬語の使用は、常に人間関係や場の状況と密接に関わっており、コミュニケーションの円滑化及び人間関係の構築に大きな影響を与えているといえよう。可能形や受け身など、他の文法項目をスムーズに使えないことで日本語のレベルを低く見られても、人間関係に支障を与えることはあまりないだろう。一方、敬語をスムーズに使えない場合、失礼な人間だと思われ、その後の人間関係に支障を与えてしまう可能性が高いと思われる。そのため、教育の面においても、他の文法項目と区別し、上述した敬語の特徴を考慮する必要があると示唆される。

第2節 本研究の動機

1.2.1 学士論文と修士論文の限界

筆者も中国の大学で日本語専攻教育を受けた一人として、大学時代から敬語に悩まされてきた。そのため、学士論文では、日本人大学生40名（男女各20名）と中国にいる日本語専攻大学生40名（男女各20名）を対象に、日本人教師との会話場面30個における言葉遣いを選択式で答えてもらうアンケート調査を行った。収集したデータを統計手法で分析し、両者の共通点と相違点について検討した。

修士論文では、日本人大学生200名（男116名、女84名）と中国にいる日本語専攻大学生212名（男100名、女112名）を対象に、敬語の使用意識及び人間関係（上、同、下）と場（正式、非正式）を交差した12の場面における言葉遣いを自由記述式で答えてもらう

アンケート調査を行った。収集したデータを統計手法で分析し、両者の共通点と相違点について検討した。

以上の二つの論文により、中国にいる日本語を専攻とする学習者の敬語意識や敬語使用における様々な問題点が把握できた。そして、日中両国の文化背景と言語体系といった観点から、それらの問題点が生まれた原因を探り、改善するための提言を試みた。しかし、以下の三つの課題が残った。①比較研究であるため、両国の文化背景と言語体系の違いに着目し、問題点が生まれた原因を分析したが、学習者が受けた敬語教育との関わりについて検討しなかった。②問題点を探り、その原因について分析・考察するところに重点を置いたため、解決するための提言をしたものの、教育を行う際、具体的なやり方に関してはあまり言及できなかった。③研究方法として、統計手法を用いた量的調査に限界を感じ、問題点をより本質的に深く掘り下げるためには、その他の調査も視野に入れる必要があると感じた。

そこで、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育は学習者の敬語意識と敬語使用における問題点とどのような関わりがあるのかという疑問を持ち始めた。

1.2.2 問題提起のためのインタビュー調査

1.2.1の疑問に答えるために、2009年12月～2010年1月に、中国の大学で日本語専攻を卒業し（5年以内）、来日している中国人10名（全員日本語能力一級合格者）を対象に、敬語や敬語教育に関するインタビューを行い、意見を収集することにした。

なるべく調査協力者に心理的な負担をかけないように、リラックスした雑談のような雰囲気の中で、母語である中国語¹³を用い、インタビュー調査を行った。調査協力者は以下の10名である。

【表2】 インタビュー調査の協力者

番号	身分	日本語学習暦	日本滞在暦	談話収集日	総談話時間
C1-01	学生	約4年半	約1年半	2009/12/22	0:31:41
C1-02	会社員	約4年	約3年	2009/12/24	0:17:58

¹³ 本節で提示する調査結果は、中国語によるインタビューを筆者が翻訳し、要約したものである。

C1-03	学生	約7年半	約3年半	2009/12/26	0:27:04
C1-04	学生	約7年	約1年半	2009/12/26	0:28:02
C1-05	学生	約4年半	約半年	2009/12/28	0:34:18
C1-06	会社員	約4年	約1年半	2009/12/31	0:14:07
C1-07	会社員	約4年	約2ヶ月	2009/12/31	0:11:24
C1-08	主婦	約6年半	約1年	2010/12/31	0:19:30
C1-09	会社員	約4年	約1年半	2009/12/31	0:14:28
C1-10	学生	約4年	約半年	2010/1/7	0:14:28

以下の八つの質問を中心にインタビューを行った。なお、時間制限も設けず、また語りの流れによっては、臨時に質問の順番を変えることもあった。

- (1) 日常生活において、敬語が必要だと思うのか。
- (2) 具体的に、どんなときに敬語が必要だと思うか。
- (3) 日本語の敬語が難しいと思うか。
- (4) 具体的に、何が難しいと思うか。
- (5) なぜ、そこが難しいと思うか。問題点の原因はどこにあると思うか。
- (6) 中国国内の日本語「敬語教育」が足りると思うか。
足りないなら、具体的にどこが足りないと思うか。
- (7) 大学の時、もっと詳しい敬語教育が必要だと思うか。
必要であれば、具体的にどんな教育が必要だと思うか。
- (8) 中国の日本語教育における「敬語教育」に対する意見を自由に話してください。

録音したインタビューの内容をすべて文字化した後、各質問に対応する回答を分類し、なるべく原意に近い形で集約した。最後に、要点を日本語に翻訳し、【表3】と【表4】にまとめている。10名という限られた人数で語ってもらった意見は、中国にいる日本語学習者の総意とはいえないが、傾向としては捉えることができるのではないかとと思われる。

【表3】 調査協力者（C1-01～C1-05）の回答要点

調査協力者	質問 (1)	質問 (2)	質問 (3)	質問 (4)	質問 (5)	質問 (6)	質問 (7)	質問 (8)
C1-01	とても必要	学校で先生や事務所の人と話すときや買い物の際、店員の話の聞くときなど。	難しい	①「～てもらう」と「～ていただく」の使い方。 ②です・ます体と非です・ます体の切り替え。 ③敬語動詞の各形式の使い分けと使用制限。 ④相手や場面に合わせて適切に使うこと。	①日中の考え方や言語体系が異なる。 ②敬語の使用機会が少ない。 ③教師による指導が不十分。	とても不足 学習時間が短い。	必要 ①もっと早い段階で敬語を導入する。 ②形式重視→使用重視への転換。 ③敬語の必要性と重要性を強調する。 ④初級から敬語のインプットを増やす。	①敬語教育の問題は、中国の日本語教育システム全体と関わっている。 ②従来の教材や指導法は、「人間関係」や「場」に関する説明が足りない。
C1-02	必要	職場で上司や取引先の客と話すときなど。	難しい	①尊敬語と謙譲語の混同。 ②敬語動詞の各形式の使い分け。 ③「お/ご～になる」と「お/ご～いただく」の区別。 ④敬語の過剰使用と過少使用。 ⑤語彙として覚えても、うまく使えない。	①中国語母語話者の敬語意識が弱い。 ②教育上、具体的な使用場面に基づいた使用例が少ない。	足りない 使用場が少ない。	必要 ①敬語が使われている会話を増やす。 ②「お/ご～になる」と「お/ご～いただく」など、類似している敬語は、それぞれの場面で、どのように使うのかを教える。	①敬語動詞の各形式の使い分けを教科書に載せる。 ②学習時間を増やし、敬語の会話練習を増やす。 ③敬語の重要性を強調する。
C1-03	必要	先生や初対面の人あるいは親しくない人と話すときなど。	難しい	①各敬語の表現形式はどのように使うのか分からない。 ②尊敬語の各形式の使い分け。 ③正式の場における「丁寧語」の使い方。	①教科書における敬語の使用例も少なく、話す練習も少ない。 ②中国語話者の母語影響。	足りない 具体的な使い方に関する指導も教材も足りない。	必要 ①一方的な講義式の授業ではなく、敬語の使い方について話し合える授業を取り入れる。 ②「場面」や「人間関係」などの要素を提示し、学習者に考えさせる。	①敬語は相手と距離を置く働きもあることを学習者に教える。 ②人間関係も敬語の使用も固定的ではなく、動的なものであることを教える。 ③中・上級では「敬語表現」や「待遇コミュニケーション」といった授業を設定する。
C1-04	とても必要	学会などの改まった場面など。	とても難しい	①敬語動詞の各形式の使い分け。 ②二重敬語や多重敬語。 ③「お/ご～する」を尊敬語としての誤用。 ④です・ます体と非です・ます体の切り替え。 ⑤「話題の人物」への敬語の使い方。 ⑥親族呼称の使い方。	①日本人の敬語自体にも誤用がある。 ②形式重視の敬語教育。 ③中国語には敬語がない。 ④目上の人日本語を真似する。	足りない 3分類で説明しきれない敬語もある。	必要 ①初級の最初から少しずつ導入する。 ②もっと詳しく、徹底的な教育が必要である。 ③形式だけでなく、場面を多く取り入れ、日本人が実際に使っている敬語例を見せながら指導する。	①場面と切り離さず、使える敬語を指導する。 ②授業中、会社の会議や商談といった模擬活動を実施する。 ③初級の最初から少しずつ敬語を出し、理解させた後、三、四年生になると「ビジネス日本語」のような授業で敬語を詳しく指導し、理解を深める。
C1-05	とても必要	バイト先の客と話すときや学校で事務所の人と話すときなど。	難しいが複雑	①表現形式が複雑で覚えられない。 ②「～をしている」の尊敬語。 ③授受動詞の使い方。 ④理論的な知識が分かっても、うまく使えない。 ⑤禁止、誘い、許可求めなど各場面の敬語使用。	①日中文化の違い。 ②教育が足りない。	足りない 練習が足りない。	必要 ①場面別の敬語指導が必要である。 ②各敬語の使い分けやまとめが足りない。 ③一方的な教え方には限界がある。 ④敬語を使う機会を増やす。 ⑤敬語の必要性と重要性を強調する。	①敬語の各表現形式の使用制限をまとめる。 ②敬語を使って話す練習を増やす。 ③敬語表現の必要性を明示する。 ④各場面における敬語の使い方を教える。

【表4】 調査協力者（C1-06～C1-10）の回答要点

調査協力者	質問(1)	質問(2)	質問(3)	質問(4)	質問(5)	質問(6)	質問(7)	質問(8)
C1-06	必要	職場で先輩や上司、取引先の客と話すときなど。	難しい	授受動詞の「～てください」と「～いただく」。	①敬語を話す環境がない。 ②日中の文化、言語体系の違い。	足りない ①教科書の説明が足りない。 ②話す練習が足りない。	必要 ①もっとたくさん練習が必要である。 ②どんな場面でどのように使うのかが分かるような例文を増やす。	①ロールプレイなど話す練習を増やす。 ②敬語を指導する時間を増やす。 ③日本人も参加するような日本語授業を設定する。
C1-07	必要	銀行や市役所のような公的な場で話すときなど。	難しい	①形式がなかなか覚えられない。 ②どの場面でどの敬語を使うのか分からない。	敬語を使う機会があまりない。	足りない ①指導時間も内容も足りない。 ②使う練習が少ない。	必要 ①初級では、形式や基礎知識について学ぶ。 ②中・上級では敬語を使う練習を増やす。 ③実際に使える敬語を学びたい。	①指導時間を増やし、もっと詳しく細かい敬語に関する教育が必要である。 ②なるべく敬語を使う環境を作る。
C1-08	必要	会社で電話に出るときなど。	難しいが意識不足	①ビジネス敬語の使い方。 ②表現形式を覚えられない。 ③二重敬語、過剰敬語。	①日中文化が違う。 ②敬語の重要性を認識していない。	足りない 基礎知識を学んだが、臨機応変の運用能力が足りない。	必要 ①敬語の必要性を強調する。 ②学んだ敬語が実践できる場が必要である。 ③模擬活動で敬語を実際に使った後、教師から指摘をもらい、皆で考える。 ④初級で基礎知識を教えた上で、中・上級で運用場面を設定し、練習を取り入れる。	①学習者の日本語、敬語に対する興味を引き出す。 ②なるべく実際に日本社会（短期留学や文化体験など）、日本語に触れさせる。 ③敬語の皮肉効果など面白い使い方も教える。
C1-09	少し必要	職場で上司や取引先の客と話すとき、電話応対のときなど。	少し難しい	特定の相手と場面でしか使わないため、なかなか慣れない。	①使う機会が少ない。 ②教育がよくない。	足りない ①暗記中心の教育で、使用場面と結びついていない。 ②敬語の必要性に関する説明が足りない。	必要 ①実際の使用場面を設定し、敬語で話す練習をする。 ②敬語の必要性を気付かせる。 ③テレビ番組などを授業で使う。	①敬語の必要性と重要性、敬語学習の興味を引き出すための教師の仕掛けが大事である。 ②ニュースなどのメディア教育を大いに活用する。 ③初級で導入した後、中・上級で敬語を使う機会を増やす。 ④社会に出る前の高学年で敬語を指導する。
C1-10	少し必要	先生と話するとき、初対面の人に自己紹介するときなど。	難しい	①形式が複雑で、覚えられない。 ②尊敬語と謙譲語の混用。 ③敬語の各バリエーションの使い分け。	①使用も練習も少ない。 ②敬語に興味がない。	足りる	必要 教科書の会話を訳した後、例文を作って終わるのではなく、実際に使える環境を作り、練習する。	①もっと指導時間を増やす。 ②敬語のテストを行う。 ③敬語を使う練習をする。

まず、質問 (1) と (2) の「敬語の必要性」に関しては、調査協力者全員が来日後、学校や職場、アルバイト先など、「日常生活において敬語が必要だ」と答える一方、「敬語が難しい」と答えたのはそのうち7名もいたことが分かる。

次に、質問 (3) と (4) の「敬語の困難点」に関しては、複数挙げられているが、大きくいえば「表現形式が複雑で覚えられない」や「尊敬語と謙譲語の混用」といった形式面における困難と、「です・ます体と非です・ます体の切り替え」や「敬語の各バリエーションの使い分け」といった運用面における困難に分類され、形式面における困難より運用面における困難を訴える調査協力者が多かった。更に、ほぼ全員が「表現形式が分かっても、場面に合わせ適切に使う自信がない」という悩みを抱えていることが分かった。

質問 (5) の「敬語難の原因」について、「日中の文化や言語体系が異なるため、敬語意識が低い」や「中国国内という学習環境で敬語を使う機会が少ない」、「従来の教科書や教育方法に問題点と不足点がある」などの意見が多かった。

更に、質問 (6) と (7) においては、中国の大学で受けた「敬語教育」について、9名は「足りない」、「もっと詳しい敬語教育が必要だ」と答えている。「足りないところ、補足してほしいところ」について語ってもらった結果、「初級最後の短い期間で敬語が集中的に出現しているが、中・上級においても敬語教育の時間を設けてほしい」、「日本人との接触が少ない初級の学習者に、敬語を導入する際、その必要性と重要性を理解させる必要がある」、「従来の敬語教育は表現形式しか扱わないことが多いが、具体的な場面でどのように使うのかについても指導してほしい」、「言い換え・書き換えといった形式面の練習が多いが、敬語を使って話す練習もしたい」などの意見が代表的であった。

最後の質問 (8) の「今後の敬語教育」に対する意見をまとめると、質問(4)～(7)の回答と深く関連する結果が得られた。敬語を教わる初級では、複雑な表現形式を記憶するのが主な難点であったが、次第に様々な場面に合わせ、適切に使うことのほうがより難しいと気づいた調査協力者がほとんどである。殊に中国にいる学習者の場合、日本にいる学習者ほど日本語の環境には恵まれていないため、運用力に重点を置く敬語教育への期待が最も多く寄せられた。具体的には、「敬語教育の実施時間を増やすべき」、「インプットを増やし、敬語に触れる学習環境を作るべき」、「学習者が様々な場面で敬語を使って話す練習を取り入れるべき」、「敬語の必要性と重要性を強調すべき」などの意見が共通に語られた。

以上の得られた意見を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、主に三つの課題が浮き彫りとなった。

一つ目に、従来初級の最後で集中的に行った敬語教育を大学4年間にわたり、継続的に行う必要がある。敬語教育の実施期間について、初級最後の1週間前後で集中的に行われることが多いと推察される。まだ日本語レベルの低い初級学習者は、いきなり形式が複雑で、普段あまり使う機会のない敬語を教わっても、その必要性和重要性を十分理解できず聞き流してしまう可能性が高い。一方、中・上級の学習者は、日本語レベルが上達するにつれ、日本語や日本人への理解も深まるとともに、就職活動や進学面接など、敬語が必要とされる場面に遭遇しやすい。しかし、中・上級において敬語教育を受けた調査協力者がほとんどいなかったことに問題を感じた。

二つ目に、敬語を導入する際、まず学習者に敬語の必要性和重要性を気づかせるような工夫が必要である。敬語教育の授業内容について、「来日してからはじめて敬語の必要性和重要性を知った」と語った調査協力者が多かった。新しい知識を伝授する前に、まずその知識が自分にとってどれくらい重要で、必要なかを理解してもらわなければ、学習者のモチベーションが下がることが予想される。特に、敬語のように母語にもなく、日本語母語話者にとっても難解な学習項目の場合、特別に強調しなければ、抵抗されてしまう恐れがあるだろう。

三つ目に、敬語を固定的なものではなく、常に場面に合わせて動的なものとして捉え、様々な場面において敬語を練習させるべきである。敬語教育の練習方法について、文法形式面を体系的に整理し、言い換え・書き換えといった練習も不可欠で、ある意味では基礎でもあるが、それだけにとどまってはならないことも今回のインタビューで明らかとなった。「ある言葉を敬語形式に変形できたとしても、実際の色々な場面で、色々な相手にどういふふうに適切に表現していけばよいのか、または敬語形式が正しくても、表現としておかしいのではないか」といった運用面における学習者の困惑点と困難点を改善することを目指すべきだと考える。

以上をまとめると、調査協力者らが敬語の必要性和重要性を認識している一方、様々な困惑点と困難点を抱えており、また自分の大学時代に受けた敬語教育に対し多くの不満を抱き、改善の必要性和重要性を強く訴えていることが明らかになった。このインタビュー調査を通し、筆者の問題意識がより明確となり、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を研究対象とする意義が確認されたといえよう。

第3節 本研究の研究目的

ここまで述べてきた研究背景と研究動機を踏まえ、本研究では、主に次の2点を明らかにすることを目的とした。

(1) 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。

あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか。

(2) 問題点を改善するためには、どうすればよいのか。

以上の2点を明らかにすることにより、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の実態を解明し、あり方を改善することを目指したいと考えた。

それに達成することにより、次の4点にもつながると考えられる。

1 点目は、中国の大学における日本語専攻教育の一端を示し、その問題点の究明と改善に寄与することである。本研究では、筆者自身の学習・教育経験と現場で聞いた学習者と教師の声に基づき、敬語教育を着目点として選んだ。しかし、敬語教育が授受表現教育や使役・受け身教育などと区別し独立して存在しているものであるとは考えていない。日本語専攻教育の一部分であると同時に、教育全体を反映していると思われるため、敬語教育を通して中国の大学における日本語専攻教育全体を推察したい。

2 点目は、この研究成果を基にして、更に中国における日本語教育全体、特に敬語教育に示唆を与えることである。1.1.3 で述べたように、大学日本語専攻教育は、教育対象や教育時間数、教育目標、使用教材など、様々な面において、初・中等日本語教育や高等日本語非専攻教育などと異なるため、本研究によって予想される研究結果は、そのまますべての敬語教育現場に応用できるとは考えにくい。しかし、それぞれの現場に合わせ、学習者のニーズなどを考慮し、部分的に参考にできるよう示唆を与えたい。

3 点目は、日本国内における敬語教育、殊に中国語話者を対象とする敬語教育に貢献することである。学習環境などが異なるとはいえ、日本語学習者を対象とする敬語教育という広い意味で見れば、本研究によって予想される研究結果は、日本国内の日本語教育における敬語教育にもヒントを与えられるのではないかと考えられる。そして、母語の干渉なども考慮に入れ、検討を行い、日本国内で行われている中国語話者を対象とする敬語教育にも貢献したい。

4 点目は、海外の日本語教育における敬語教育を考えるための手掛かりを提供することである。第1節で述べた研究背景に基づき、本研究では中国の大学日本語専攻教育にお

る敬語教育に着眼点を置くが、本研究によって予想される研究結果は、中国の大学日本語専攻教育だけに限定されるものではない。習得環境に恵まれていない海外という学習環境にいる学習者を対象とする敬語教育を考えるための手掛かりを提供できるよう、本研究では海外の日本語教育における敬語教育の一つの事例として、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を取り上げたい。

第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

第2章では、関連する先行研究を概観した上で、本研究の立場と位置付けについて述べる。そして、研究目的を達成するために具体的な研究課題を設定し、本論文の全体像を示す。具体的には、第1節では、日本語教育における敬語教育・待遇表現教育と中国の大学日本語専攻教育という二つに分け、本研究に関連する先行研究を概観する。第2節では、先行研究の研究成果と限界点を指摘し、本研究の立場と位置付けについて述べる。第3節では、本論文の全体構成について説明する。

第1節 本研究に関連する先行研究

本節では、本研究と関連のある先行研究を概観していく。なお、本節で挙げるのは本研究の前提に絡むものである。ただし、第3章以後の分析・考察と関わる先行研究に関しては、また各章で挙げることにする。

2.1.1 日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究

敬語や敬語を含む待遇表現に関する教育について、大きくいえば、日本語母語話者を対象とするもの、すなわち国語教育における敬語教育・待遇表現教育と、外国人日本語学習者を対象とするもの、すなわち日本語教育における敬語教育・待遇表現教育という2種類に区分することができると思われる。本研究の研究目的に合わせ、ここでは主に2000年以降の后者に関する先行研究を概観することにする。その結果、以下の研究が浮かび上がった。

胡(2001)は、日本にいる中国人留学生を対象に行ったアンケート調査の結果に基づき、敬語に関する知識を学習の最初から指導を始めるべきこと、また敬語に関する日本社会の常識、風俗、日本人の価値観、言語意識などを具体的な事例で指導し、実際の立場に身を置いて場面会話を行うことが効果的であると主張した。

坂本(2002)では、日本語教育の中で「敬語」、「待遇表現」をどのように扱ってきたのか、そして今後どのような方向で考えていけばいいのかについて、筆者の考えがまとめられている。具体的には、待遇表現の使い分けを体系的に教えることの必要性や、初・中・

上級と進む中で何をどう扱っていけばいいかということ全体を通した形として指導していくことの必要性、敬語の考え方や仕組みは初期から理解させることの必要性、そして、場面の中で使えるように練習させることの必要性など、日本語教育の中で「敬語」、「待遇表現」を扱う際、重要だと思われる観点が示されている。

川口（2002a, 2002b, 2003, 2004）では、台湾での研修会における「事前課題」を分析することにより、海外における待遇表現教育の問題点を指摘した。具体的には、台湾における敬語教育は、待遇表現の普遍性と個別性を日中両言語の対照研究によって見据えつつ、「狭義敬語」の学習から脱し、「いかにして相手への配慮を表すか」という表現の教育へと向かっていく必要があると述べた。また、母語話者教師も複雑な待遇表現の体系の知識について、自然に身に付くものではないため、教師養成や研修においては、待遇表現の実態把握の努力、外国語との対照からみるその普遍性と特殊性への洞察、教授法知識の待遇表現指導への応用試行など、集中した「待遇表現意識化」の訓練が必要であると指摘した。

蒲谷（2003a）は、従来の敬語の教育/学習や待遇表現の教育/学習に対する考え方をさらに発展させるものとして、「待遇コミュニケーション」（「敬語」や「敬語表現」あるいは「敬意表現」、また「待遇表現」や「待遇行動」、そして「ポライトネス」に関する事柄、さらに「待遇理解」の概念を含み、それらを「コミュニケーション」の観点から包括的に捉えようとするものである（p.1）という捉え方を提唱し、「待遇コミュニケーション教育」のあり方及びその方法論について述べている。そして、蒲谷（2003b）では、「待遇コミュニケーション」とは何か、その研究や教育、教育研究とは何か、及び「待遇コミュニケーション」という術語に関する問題点に関する筆者の考えが改めて論じられている。更に蒲谷（2012）は、蒲谷（2003a）の続編として、考察しきれなかった点、あるいは、その後の研究や実践により考えが深化した点、特に待遇コミュニケーション教育の根底にある理念や理論的な枠組み、待遇コミュニケーション教育が目指すものは何かということに焦点を絞って、筆者の考えを述べている。

宮岡（2005）は、先行研究と自分の教育経験を踏まえ、日本にいる中国人日本語学習者を対象に敬語を指導する際、初級から中級にわたって、段階的に分けて指導したほうが効果的であり、日本企業への就職希望者に対して細かな敬語指導を行うなど、学習者のニーズに応じた指導が必要であると提言した。

蒲谷他（2006）は、「敬語表現教育」に関する考え方、そしてその実践方法についてまとめた1冊であり、全5章から構成されている。同書の「はじめに」では、各章の内容に

ついて、次のように紹介されている。(pp. ii - iii)

第Ⅰ章においては、「敬語表現教育」を考えるための基本的な仕組みを中心に、「待遇表現教育」さらには「待遇コミュニケーション教育」へと展開させていくための前提となる考え方について整理し、主に大学での「日本語教育」における具体的な実践から導かれた教育・学習上の留意点などをまとめています。

第Ⅱ章においては、「待遇表現教育は人への配慮の示し方を探る教育である」という観点から、形式を乗り越え、非言語を含めた「コミュニケーション教育」としての「敬語表現教育」と捉える重要性について説いています。日本語の母語話者・非母語話者ともに必要な情報、具体的な実践例が述べられています。

第Ⅲ章においては、ビジネス関係者を対象とした様々な実践から導かれた方法について、豊富な具体例により示しています。様々な事例の背景となっているのは、ビジネス場面にいる「学習者」自身が発見すること、「場面」を重視してコミュニケーションを行うことが重要である、という普遍性の高い考え方です。

第Ⅳ章においては、敬語表現指導上の4つの理論—あくまでも「表現」の指導であること、指導項目が適切に「文脈化」されていること、提示された文脈が「自然」なものであること、表現が適切に「精緻化」されていること—に基づき、日本語教育の「初級段階」における様々な実践例が述べられています。

第Ⅴ章においては、「敬語」や「敬語表現」、「敬語表現教育」に関してつきまとうような様々な「誤解」を取り上げ、日本語の学習者・教師・母語話者が持つ、「封建的」「必要悪」「正しい敬語」などの先入観や偏見をどう乗り越えていけばよいかという方法について、「丁寧」「失礼」などの概念とともに示しています。

駒井 (2006) では、ACTFL-OPI 形式のロールプレイを使用し、日本語母語話者 (98 名) と上級—中以上の日本語学習者 (24 名) の敬語使用における傾向を調査した。その結果、超級あるいは超級に近い日本語学習者の敬語表出は、おおむね日本語母語話者の傾向と似た形を取り、謙譲語や丁寧語も上手に使いこなしていることが分かった。しかし、謙譲語と丁寧語を更に巧みに使用することにより、より日本語らしい日本語になるということも指摘されている。それを踏まえ、敬語教育への提言も行われた。

高澤 (2006) は、自分の教育経験から収集した中国人母語話者による敬語の誤用例に基

づき、「敬語表現」を指導する際の問題点を「非言語行動、異文化の違いを理解させる」、「尊敬語と謙譲語の使い方の間違いに留意する」、「人間関係」「場」をしっかりと把握させる」、「婉曲表現」「間接表現」を理解してもらう、「会話の展開順序に注目する」という五つにまとめている。

呉（2008）の漱石作品を言語資料として行った研究は、日本語教育における学習者の問題点や敬語・待遇表現指導の問題点を探り、その問題点を改善するために、談話分析理論を敬語教育に取り入れる可能性や理論的貢献について論じた。

樋口（2008）では、発話機能をテーマに作成されたビデオ教材を分析対象としてビジネス場面と非ビジネス場面でのどのように敬語が使用されるかを分析した。その結果、ビジネス場面では、「くださる」「いただく」に関連する授受表現が多く使われており、話題の人物（同時に聞き手でもある場合が多い）の行為を話し手への恩恵の授受と位置付けて表現する傾向が強く、特に「いただく」に関連する表現は依頼表現として使われる場合も多く、「…ていただく/いただける」、「お（ご）…いただく/いただける」として優先的に指導する必要があるなど五つの傾向を指摘した。その上で、留学生に敬語教育を行う際、ビジネス場面を意識することの重要性について論じた。

山口（2009）は、初級テキスト・日本語能力試験・教育経験という三つの角度から、留学生を対象とする敬語表現の効果的な指導法について検討した。その結果、敬語を留学生に指導する場合、教師側は暗記させるだけでなく、場面に合わせた使い方、更に T・P・O を考えた使い方、「間合い語」の適切な使い方を敬語指導に入れることが肝心であるということを示した。

林（2009, 2010, 2011）では、中国の大学における日本語学習者を対象にアンケート調査を行い、第三者敬語表現の使用混乱の問題点を指摘している。これらの問題点は教科書の扱い方と関係していることが検証され、敬語教育を行なう際、村上春樹の短編小説を用いた教材開発の必要性を提唱している。

徳間（2010）は、授業実践を行なった「敬語コミュニケーション」科目の受講生である中上級日本語学習者がどのような敬語使用不安を抱いているのかを見るため、学期中に学習者が記入した、不安に関する質問の自由記述内容を資料とし、KJ 法を用いて分析した。その結果、①自分の気持ちと敬語を使う意識の隔たり、②学習の各段階で直面する自分の能力不足と間違いに対する心配、③限られている敬語使用の機会など、七つの島が浮かび上がった。これらの島と島の間を叙述化した上で、学習者の敬語の使用や学習に対する

向き合い方は常に不安定で、ジレンマに陥る可能性と隣り合わせであることなどを指摘した。

山本（2010）では、ロシアで待遇表現教育を受けてきたロシア人日本語学習者のインタビュー調査から、彼らが受けてきた待遇表現教育とは、どのようなものなのかを明らかにした上で、彼らが来日後日本人と接する中で、待遇表現、または待遇コミュニケーションについて感じる困難点など明らかとなった。学習者側からみた待遇表現教育の現状を探るとともに、海外の待遇表現教育の問題点と課題の一例として示した。

また、山本（2011）では、日本語教師へのアンケート調査及びインタビュー調査を行うことにより、ロシアにおける待遇表現教育の現状を教師側の角度から明らかにした。その結果、海外という限られた場の中であっても、教師は待遇表現教育を必要であるとし、ロシアで行われている従来の指導とは異なった指導の工夫を行っていることが明らかとなった。また、待遇表現教育を行う上で、狭義の敬語だけではなく、待遇コミュニケーションに及ぶ様々な困難点、また課題も浮き彫りとなった。

母（2011）では、ポライトネス理論を中国の日本語待遇表現教育に取り入れ、実験群と統制群を設けた1学期の教育実践を行った結果、ポライトネス理論で指導を行った実験群の成績が統制群より有意に高かったことから、ポライトネス理論を取り入れた待遇表現教育の有効性が検証された。

坂本（2012）では、日本語学習者にとって、コミュニケーションを人間関係や場、すなわち「場面」の観点から捉える待遇コミュニケーションを習得することは、重要な課題であると指摘した。その上で、「待遇コミュニケーション教育」の中でも、相互尊重に基づく自己表現という観点を重視した「敬意コミュニケーション」の教育という枠組みで行っている一つの取り組みとして、日本にいる留学生を対象とする「敬語コミュニケーション」という授業の実践報告を行った。その結果、敬語そのものについて知識を得ることや、実際に使えるような運用練習も必要ではあるが、それ以前に、「敬意コミュニケーション」の認識を身につけるという観点が重要であると述べた。

村尾（2013）は、敬語を相対的なものと定型句化したものとは分類し、相対的な敬語には「敬語の距離化」で解説し、定型句化した敬語にはブロック化した解説で対応するという教授法を提案した。そして、提案した教授法を用いて、留学生を対象とする授業で実践した結果、指導の必要性と有効性が確認された。

戸田・小柳津（2013）では、日本にいる留学生を対象とする敬語教育の現状では、様々

な場面の敬語表現を学習させているが、語彙レベルでの指導には問題点も多いと指摘した。また、自身の教育経験を踏まえ、中国人・韓国人・ベトナム人を代表とする日本語学習者の敬意表現の特徴を事例とともにまとめた。更に、学習者の母語を考慮し、社会で機能する適切な日本語の敬意表現を指導するときの問題点と方法について考察した。

ウォーカー（2013）は、海外の日本語学習者が直面している「敬語」学習に関する問題を踏まえた上で、「敬語」を学習する前に、「待遇コミュニケーション能力」を高めておくことが大切だと主張した。そして、その教育には、敬語的な要素を持った表現を用いて「表現教育」を行うことが重要であると述べ、「行動展開表現」などに関する教育方法や指導上の留意点などをまとめた。最後に、「敬語」導入前の「待遇コミュニケーション教育」を実践するために有効だと考えられる表現教育の可能性についても言及した。

最後に、尾崎による一連の研究が挙げられる。まず、尾崎（2006）では、台湾の日本語教育現場に焦点を当て、第三者敬語表現の指導の一試案として、実践の前段階に基本的な概念を習得すべく〈図式誘導表〉を提案した。具体的には、運用の前段階となる構造的側面（深層部）を理解する段階—会話（発話）練習の前段階—に焦点を置き、とりわけ根本的概念の理解を必要とする第三者敬語を扱う場合について、自身が提唱した〈図式誘導表〉という原理を利用して指導する方法を提案した。そして、尾崎（2007）は、台湾で日本語を学ぶ学習者に対して「尊敬語表現」を指導し、その結果に基づいて指導の是非を論じた。指導においては言語理解の面に注目し、場面（場と人間関係）に応じて、どのような待遇意図によって言葉を選び出すかに重点を置いた。教材には筆者が考案した〈図式誘導表〉を改めた「改良版」を用いて、授業実践を通してその価値を検討した。その結果、〈図式誘導表〉（符号）を用いることは、学習者を誘導するための助けとなることが示された。また、尾崎（2012）は、台湾の大学における敬語表現教育の指導の実態と学習状況を把握するために、アンケート調査を行った。その結果、敬語はそれを教えるのも学ぶのも、ともに難しいと考えられていることや台湾での敬語表現教育では中国語の説明と解説が必要とされていること、教師は「敬語の体系」に重きを置き、また「人間関係の認識」に力を入れているなどの5点が確認された。更に、尾崎（2014）では、台湾のある大学で日本語を専攻とする大学生を対象に、自身が提唱する「表現意図を生かした敬語表現の符号化」の実践授業を行い、その成果を示した。結果として、適切な表現へ誘うための誘導ツールと、適切な表現の再認識のための確認ツールとして符号化を用いることで、学習者自らが用いた表現の適不適の判断を付けることができるということが明らかとなった。

以上の先行研究を見ると、中国やロシアなど海外の教育現場に焦点を当てたものも見られるが、日本にいる留学生を対象とするものが多数であることが分かる。また、林 (2009, 2010, 2011)、母 (2011) のような中国の日本語教育現場に着目した研究を見ても、中国の大学日本語専攻教育に絞ったものではないことが分かる。もちろん、参考になるところも多かったが、第1章でも述べたように、教育目標や教育時間、教育内容、更に求められる敬語力などの面において、大学における日本語専攻学生は、中国にいる一般の日本語学習者とは異なるため、特化した研究が必要とされると思われる。

2.1.2 中国の大学日本語専攻教育に関する先行研究

1.1.3 においても述べたように、中国の大学日本語専攻教育は、2000年以降日本語学科の新設や既存学科の定員増などにより、学習者数が大幅に増加してきた。2011年の統計では、日本語専攻を持つ大学は4割以上となり、その後更に増えていることが予想されている。学習者数の多さ以外にも、「教育目標も高く、教育時間数も長く、教育内容も豊富」などの特徴を有するため、2000年以降日本語教育の世界では、徐々に注目され始め、中国の大学日本語専攻教育に関する様々な研究が見られた。

その中で、皮 (1998)、関・山田 (2001)、王 (2007)、曹 (2008)、修・李 (2011) などのように、新中国の成立後、中国における日本語教育を背景に、大学日本語専攻教育を通史的に研究するものが最も多かった。これらの研究によって、中国の大学日本語専攻教育は政治、経済などの社会情勢に深く影響されており、時代とともに変化していることが明らかとなった。また、それぞれの視点に従い、1949年より約60年間の中国の大学日本語専攻教育が時代区分され、各時代の特徴がまとめられている。大きな共通点としては、ほとんどの先行研究では、2000年以降を一つの時代として区分されていることが挙げられる。

修・李 (2011) では、「過去の60年余を振り返ると、2000年以降の発展はとりわけ速く、中国の大学日本語専攻教育は前代未聞の転換期を迎えている。21世紀に求められる日本語専攻人材の需要に応え、競争の高い就職難関を乗り越えるためには、転換期に生まれた新課題を検討しなければならない」(p. II) と述べられているように、中国の大学日本語専攻教育の現状には様々な課題が潜んでおり、それを発見し、解決するためには、教育現場に焦点を当て、丹念に研究を行う必要があると示唆される。2000年以降、中国の大学日本語専攻教育現場に焦点を当てた研究としては、主に以下のようなものが挙げられる。

尹 (2002) では、中国の4大学における日本語学科の聴解授業担当教師にインタビュー

を実施し、その内容を分析した結果、以下のことが明らかになった。①聴解授業は1年次から設けている大学と、1年次の後半あるいは2年次から設けている大学に分かれており、授業内容は4大学とも2年次の後半から日本語能力試験の対策を中心とする傾向が見られた。②指導法については、語彙や文の意味から全体の内容を理解させるような指導をとっている。

于（2002）は、その時々の中日両国の関係が中国社会に要求する実用本位から組んできた日本語教育カリキュラムについて見るとともに、歴史的な理由や地理的な条件に恵まれた大連外国語大学の日本語専攻のカリキュラムを一つの実例として分析した。その結果、従来発音・文法及び語彙の習得に加えて、異文化理解教育への転換の重要性について論じた。

王（2005）では、先行研究の調査結果をまとめ、学習者の「きっと」と「必ず」の使用状況を明らかにした上で、学習者が使用している教科書や辞書などを調べた。また、大学で日本語専攻の授業を担当している教師へのインタビュー調査も行い、その指導の実態を明らかにし、問題点を指摘した上で「きっと」と「必ず」の有効な指導方法を提案した。

譚・陳（2005）は、中国の大学における日本語学部生の作文に見られた約一万点の誤用を文法・表現・語彙・表記の四つに分類した。その後、各点ごとに具体的に種類に分けて統計資料を作成し、調査結果をまとめている。そこから誤用の生じやすい分野と誤用となっている様々な原因を項目ごとに分析した。以上の分析を踏まえ、最後に中国の大学における日本語学部生を対象とする作文指導法について言及している。

見城（2007）では、中国国内で日本語を専攻する大学生の「日本」イメージは、「桜」や「富士山」また戦争等に関わる「歴史認識」だけでなく、それ以上に日本の現代社会・文化などの多方面にそのイメージが広がっていることや「日本について学びたいこと」も、伝統文化だけでなく、現代社会・文化への興味関心が高かったことを指摘した。それを踏まえ、来日した中国人大学生への教育もこうした現実を踏まえて教材等を検討していく必要があると述べている。

曹（2008）では、自身が所属する北京日本学研究中心で実施された「中国の日本語教育における主幹科目「総合日本語(精読)」に関する総合研究」と「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」の成果をまとめた。そして、教育部「十一五」教材出版計画で実施中の新教材編纂のための総合シラバス研究を事例に、中国における大学専攻用日本語教科書作成の現状と課題を論述した。

林（2009）は、中国福建師範大学における日本語教育の現状と今後の変革の方向について検討した。その結果、これまでの日本語教育は中国における外国語教育の縮図と見ることができ、語学能力の向上だけを目標とし、しかも読み書きの練習が中心であった。これからの変革の方向としては、学習者の「聞く、話す、読む、書く」の語学能力を偏りなく向上させ、その上で専門的知識も学べるようにカリキュラムを編成する方針であると指摘した。

東（2009）では、中国の大学日本語専攻教育における縮約形の指導状況や学習者の縮約形の運用能力について調査を行った結果、以下のことが明らかとなった。第一に、中国の大学日本語教育では縮約形は教材に文法項目として導入されてはいるが、運用に関する明示的な指導はほとんど行われていないこと。第二に、教師の多くは縮約形を教える必要があると感じているものの、実際には教えていないこと。第三に、縮約形の指導をあまり受けていない学習者は縮約形に関する知識はあるが、運用能力は十分身につけていないこと。第四に、学習者はより自然な日本語が話せるようになりたいと強く望んでおり、縮約形の使用効果に大いに期待していること。

伊月（2009）では、中国の大学における日本語専攻の学生を対象に、意識調査を行い、使用教科書の満足度を測った。その結果、2000年以前に出版された教科書より2000年以降に出版された教科書への満足度が高く、新教科書において、教育部が目指す「実用的・総合的な運用能力の養成」という目的は、学生に広く受け入れられていることが明らかになった。また、日本語専攻の学生が持つ日本に対する関心の特徴として、日本に関する知識や情報に対して現時性を強く求めていることが分かった。

夏（2010）では、中国における日本語専攻学習者を対象に質問紙調査を行い、彼らの持つ日本人イメージを明らかにし、更に日本人イメージと学習動機との関連を探った。その結果、日本人イメージについて、「開放性」「親和性」「勤勉性」「寛容性」「先進性」「人間関係親密性」の6因子が得られた。学年によるイメージの差異については、「勤勉性」イメージは差異が認められず、「開放性」と「先進性」イメージは学年が高くなるにつれて低くなることが明らかになった。そして、日本語学習動機については、「日本文化理解」「日本語の向上」「日本語への興味」「日本への憧れ」「日本への留学・就労」「就職の有用性」「日本に関係ある人の存在」の7因子が得られ、イメージと学習動機との関連については、「日本への憧れ」と「日本に関係ある人の存在」動機が日本人イメージに正の影響を与えることが示された。

河野（2010）は、中国の大学において日本文化に関する授業がどのように行われているかを探るために、上海の大学で日本文化に関する授業の特徴を調査し、日本語学科の学生にインタビューを行った。その結果、「歴史」が一番多く扱われるトピックであること、特に古代史では聖徳太子が中国文化受容のキーパーソンとして大きく取り上げられていること、また日本は単一民族国家であると教えられていることなどが明らかとなった。更に、学生の約 60%が日本文化の授業は日本についての一般的知識が学べるという点で「役立つ」と評価しており、他の日本語の授業からは日本の日常生活について多く学べると認識していることが分かった。

葛（2012）では、中国の日本語専攻教育スタンダードである二つの『教学大綱』における言語能力観と言語教育観に焦点を当て、その内容を分析し、言語政策の視点から日本語専攻教育の教育理念を考察した。具体的には、『教学大綱』作成の背景と主な内容をまとめた上で、「日本語専攻教育の目的」、「異文化コミュニケーション力の捉え方」、「教育・学習観」という三つの観点から、『教学大綱』の問題点を批判的にまとめた。また、葛（2014b）は、中国の大学日本語専攻教育の現状を把握するために、主幹科目である「精読」という授業の実例を通して、教育現場の特徴と問題を明らかにすることを試みた。具体的には、二つの「精読」授業のサンプル授業を対象に、授業参与観察、授業発話分析、授業評価シート、教師と学習者へのインタビューを通して、量的に、質的に分析・考察した。その結果、「精読」授業は、教師主導の下で単語の意味や文法の伝授を中心に進められており、学習者は文法知識には詳しくなるが、コミュニケーション能力が十分育成されない結果になっていることが分かった。そこで、大学日本語専攻教育の目的である「異文化コミュニケーション能力の育成」を達成するために、主幹科目としての「精読」授業においては、今後コミュニケーション能力の育成及び文化教育の取り扱いについて、教育方針や教育手法などの再考が喫緊の課題であると指摘した。

秦（2012）では、中国の大学における会話授業の改善を目指すことを目的とし、日本語専攻会話授業に事前課題と日本語母語話者の参加を導入したグループワークによる内容重視の会話授業の実践を行った。そこからデータを収集し、学習者が新たなデザインに対してどのような受け止めを形成しているか、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用し、分析した結果、学習者はこれまで受けてきた会話授業と対照しながら、今回の会話授業に対する肯定的な評価をしていたことが分かった。また、秦（2013）では、中国の大学の日本語専攻会話授業において内容上の事前準備は学習者の会話参加をどのように

促し支えるかという研究課題を設定し、授業観察と「事前準備シート」を分析した結果、中国の大学における会話授業への示唆を三つにまとめた。第一に、学習者の既有知識を活かせる内容重視の会話を行うこと。第二に、比較的高度な内容を会話に持ち込むに当たり、学習者の負担を軽減するため、概念化を言語化・発音化から分離すること。第三に、事前に概念化を促すことで授業中は言語化と発音化に注力できるようにすること。

孫（2013）では、中国における二つの大学の外国語学部日本語学科で日本語を教えている中国人教師6名を対象に授受補助動詞の指導方略についてインタビューを行った。その結果、授受補助動詞の提出順序については、教科書どおりに1課の中で3系列の授受補助動詞を「体系的に導入する」方針から、指導する際の「授受補助動詞の解体」を目指し、例えば、「～テアゲル」を導入してから、「～テクレル・テモラウ」をセットで教えようとする方針への変更が窺えるなど四つの傾向が見られた。それを踏まえ、日本語教育への提言も行われた。

王（2014）では、中国の「大学日本語専攻シラバス」を考察対象とし、「基礎シラバス」と「高学年シラバス」における「実質語」、「機能語」、とりわけ「実質語機能語一ところ」を例に取り上げ、分類語彙表・日本語能力試験出題基準に照らしながら、分析を進めた。また、日本語教科書コーパスにおける「ところ」表現にも触れ、大学日本語専攻シラバス、教科書、言語教授における「実質語機能語」など体系化教育の強化を提言した。

田中（2012, 2013, 2014）では、中国の大学専攻日本語教科書と日本の国語教科書を対象に比較分析を行った結果、掲載作品の様式・年代・題材など様々な面において、両者の近似性が見られたことから、日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教科書に大きな影響を与えていることが明らかとなった。この結果を踏まえ、中国の大学専攻日本語教科書への示唆がまとめられた。

劉（2014）は、近年の中国における日本語音声教育の現状及び教師・学習者のニーズについて述べた上で、復旦大学日本語学科における音声教育の取組みについて、「日語語音学」というコースの到達目標、内容、方法、教材開発について報告した。コース終了時にアンケート調査を実施した結果、このコースを通して学んだことについて「自然な発音」、「発音の学習方法」、「音響分析ソフトの利用方法」という回答が上位を占めていることが分かった。それを踏まえ、中国における日本語音声教育が抱えている課題について、計画的かつ継続的な音声指導の実施及び教師養成の必要性を訴えた。そして、中国において日本語音声教育が更に発展していく可能性について述べた。

金（2014）では、中国のある大学の日本語専攻精読授業における協働学習の実践報告を行った。具体的には、研究者自身は精読授業の応用段階で「言葉についての再考」というテーマで協働学習を行い、学生の内省に基づき、授業を振り返ることで実践の有効性について分析した。その結果、協働学習の目標が大体達成されたことが確認された一方、解決すべき課題もあるといこうことが明らかとなった。

谷部（1999b）によれば、中国の日本語教育に関しては、マクロ的な現状—学習機関数、学習者数、教師数などについて調査する研究報告が多く、教育内容の具体的な状況についてはあまり知られていない。しかし、以上の先行研究を概観すると、2000年以降、中国の大学日本語専攻に関する研究が徐々に増えており、特定の文法項目から、学習者の情意面、教科書、カリキュラムなど、様々な角度から研究が行われていることが分かる。中には、学習者へのアンケート調査や教師へのインタビュー、授業観察などの調査法を用い、教育の具体的な状況を探る研究も多く見られた。

以上に挙げた先行研究は、それぞれの着目点が異なるため、一見関連性の薄いものである思われがちであるが、中国の大学日本語専攻教育に関する研究という大きな森の中にある一本であると位置付けたい。したがって、これらの研究成果によって、中国の大学日本語専攻教育に潜んでいる様々な課題が浮き彫りとなり、教育の改善につながっていくといえよう。

以上を踏まえ、筆者は「敬語」という木を選び、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に焦点を当てることにする。その理由としては、1.1.4で述べた4点以外に、本項の概観を通して分かるように、従来の研究では敬語教育はあまり注目されていなかったことも挙げられる。しかし、1.2.2でまとめた調査結果を見ても分かるように、学習環境に恵まれていない中国にいる学習者にとって、敬語は最も難しい学習項目でありつつ、教育上様々な問題点が潜んでおり、その改善が大いに期待されている。以上のことから、敬語教育に着目し、その問題点を探り、改善に取り組むことは、中国の大学日本語専攻教育の全体において、重要な意味を持っているといえよう。

第2節 先行研究の限界と本研究の位置付け

先行研究を概観した結果、主に五つの傾向がうかがえる。以下、それぞれの傾向を示し、

それを踏まえた本研究の立場と位置付けについて述べたい。

傾向その①：2000年以降、中国の大学日本語専攻教育に関する研究が様々な角度から行われているが、中国人日本語学習者にとって最も難しいといわれる敬語に関する教育に着目するものはほとんどない。中国における日本語教育を通史的に研究するものを俯瞰すると、新中国成立後の約60年間の大学日本語専攻教育について、2000年以降を一つの時代として区分されている傾向が強い。学習者の倍増にともない、中国の大学日本語専攻教育は2000年以降発展がとりわけ速く、前代未聞の転換期を迎えているといわれている。そのため、多くの新課題が生まれ、特定の文法項目から、学習者の情意面、教育全体のシラバスなど、様々な角度から研究が行われており、2000年以前より大幅に増えている。これらの研究成果によって、中国の大学日本語専攻教育に潜んでいる様々な課題が浮き彫りとなり、教育の改善に貢献していると思われる。しかし、中国人日本語学習者、特に学習環境に恵まれていない中国にいる学習者にとって、最も難しいといわれる敬語に関する教育に着目し、その問題点を探り、改善に取り組む研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究はその空白を埋めることを目指したい。

傾向その②：日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究が多く見られる中で、その多くは日本にいる留学生を対象としており、中国にいる学習者、殊に大学における専攻学習者に注目する研究はほぼ見当たらない。調べた先行研究の中で、日本に留学生（中国人も含め）を研究対象とする研究と比べ、中国にいる学習者、特に本研究で焦点を当てたいと思う中国の大学で日本語を専攻とする学習者に着目したものが極めて少ない。第1章で述べたように、同じく中国人日本語学習者ではあるとはいえ、日本にいる中国人留学生とは学習環境が異なり、また中国にいる非大学専攻学習者とも学習時間や到達目標などの面において差が大きいため、先行研究の研究成果を参考する価値があるものの、カバーできない部分もたくさんあるといえよう。大学における専攻生の場合、より高い日本語力、敬語力が求められると思われるため、彼らを対象とする教育を他と区別し、研究する必要がある。そこで、本研究は中国の大学で日本語を専攻とする学習者を対象とする敬語教育に特化し、研究を行いたい。

傾向その③：従来の敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、教育経験を持つ研究者による内省研究や、学習者を対象とするアンケート調査を研究方法とする量的研究、また近

年では実践報告が主流であり、教育の当事者の意識面に注目する質的研究は少ない。従来、研究者の敬語教育観に基づいた内省研究、または学習者を対象に行ったアンケート調査などの量的研究、そして近年では実践報告が主流であり、学習者や教師の意識面に注目し、彼らは何を考えているのかを究明する研究は少ない。無論、教育経験を持つ研究者による感想や気づきなどの内省も大事ではあるが、様々な教育現場に携わっている教師らの生の声に丁寧に耳を傾ける必要性もあると考えられる。また、アンケート調査などの量的手法では、なかなか調査協力者の意識を深く掘り下げられないのではないかと思われる。本研究では質的手法を用い、調査協力者である学習者と教師の観点からみた発見や洞察、理解に焦点を当てたい。

傾向その④：敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究には、学習者や教師を対象に調査し、その結果を論文に反映させたものが多く、教科書を中心とする教材に関する議論はあまり行われていない。教育の当事者である学習者と教師以外に、教育と深く関わり、その実施に大きな影響を及ぼすもう一つの要因として、教科書を中心とする教材が挙げられるだろう。教育にとって、学習者、教師、教材は重要な三本柱になっているといえよう。教材は学習者の学習にとっても、教師の指導にとっても重要な意味を持つ要素の一つだと位置付けられている。特に本研究のような海外における教育現場においては、教材の役割は特に大きいと考えられる。しかし、従来の先行研究では、教科書を中心とする教材に関する議論はほとんど行われていないことが明らかとなった。今日インターネットの普及などにより、教材のほかに豊富な学習資源は前より容易く入手できるようになったとはいえ、学習者、殊に中国国内にいる学習者の場合、授業で使用する教科書を中心とする教材は、彼らにとってやはり大きな拠り所となっていることが予想される。そのため、本研究では教育現場で広く使われている教科書を中心とする教材も視野に入れ、分析調査を行いたい。

傾向その⑤：中国人日本語学習者を対象とする敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまる研究がほとんどであり、具体的にどのように実現させるのかについては詳しく言及されていない。先行研究の中では、中国人日本語学習者の敬語使用における誤用を通し、敬語を指導する際の注意点や問題点を指摘し、改善策を提案する研究が多いのに対し、実際の教育現場において、その改善策を具体的にどのように実現させるのかについてはあまり言及されていない。も

もちろん、学習者の誤用を集め、分析することにより、提案を試みることも必要ではあるが、それだけでは、なかなか教育現場に受け入れられにくいのではないかと考えられる。研究成果の実用性を高めるためには、改善策の提案にとどまるのではなく、それを実現させるために、具体的にはどうすればよいのかについても、詳しく言及することで更に一步進める必要があるといえよう。本研究では、「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか」を指摘するのみならず、「問題点を改善するためには、どうすればよいのか」についても詳しく検討したい。

第3節 本研究の研究課題と全体構成

第2節で述べた先行研究の限界点を踏まえつつ、研究目的と照らし合わせ、目的（1）のために、次の四つの課題を設定した。

【課題1】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、学ぶ側はどのように考えているのか（→第3章）。

【課題2】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教える側はどのように考えているのか（→第4章）。

【課題3】中国の大学日本語専攻用の教科書を中心とする教材において、敬語はどのように扱われているのか（→第5章）。

【課題4】課題1・2・3を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には、どのような問題点が存在しているのか（→第6章）。

そして、目的（2）のために、次の二つの課題を設定した。

【課題5】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか（→第7、8、9、10章）。

【課題6】本研究が提案する敬語教育の改善案（教科書における敬語の新たな記述）について、現場教師からはどのようなフィードバックが得られるのか（→第11章）。

以上を踏まえ、本論文は全体として、次の12章から構成される。

第1章では、本研究の研究背景と研究動機について述べ、研究目的を示した。なぜ「中

国の大学日本語専攻教育における敬語教育」を研究テーマとして選んだのか、その理由について筆者の考えを述べた後、問題意識を明確にするために行ったインタビュー調査を紹介し、本研究の動機を明らかにした。そして、本論文の研究目的を2点にまとめた。

第2章では、先行研究の概観、本研究の立場と位置付け、及び全体構成について述べた。まず関連する先行研究を概観し、研究成果と限界点を明らかにした上で、限界点を補うための本論文の立場と位置付けについて述べた。そして、本論文の全体構成を示した。

第3章では、【課題1】「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、学ぶ側はどのように考えているのか」に答えるために、1.2.2の調査を改善する形で、中国の大学日本語専攻教育を受けたことのある元学習者を対象に敬語及び敬語教育に関するインタビュー調査を行い、彼らの敬語及び敬語教育に対する考え方を探り、学ぶ側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を明らかにする。

第4章では、【課題2】「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教える側はどのように考えているのか」に答えるために、中国の大学日本語専攻教育現場で教えている教師を対象に敬語及び敬語教育に関するインタビュー調査を行い、彼らの敬語及び敬語教育に対する考え方を探り、教える側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を明らかにする。

第5章では、【課題3】「中国の大学日本語専攻用の教科書を中心とする教材において、敬語はどのように扱われているのか」に答えるために、敬語教育の実施に大きな影響を与えていると思われる教育現場で広く使われている関連教材（『教育要綱』・教科書・教師用指導書）における敬語の扱い方を分析し、教材の角度から中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を明らかにする。

第6章では、第3章から第5章まで行った調査の結果を総合的に考察し、【課題4】「課題1・2・3を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には、どのような問題点が存在しているのか」を明らかにする。そして、【課題5】「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか」についても考える。

第7章から第10章までは、第6章の考察に基づき、【課題5】「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか」について、より具体的に検討し、本研究が考案する改善案について詳細に示す。

第11章では、【課題6】「本研究が提案する敬語教育の改善案（教科書における敬語の新たな記述）について、現場教師からはどのようなフィードバックが得られるのか」を明ら

かにするために、中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師を対象に、フィードバックを得るための調査を行い、その結果をまとめる。

第 12 章では、本論文をまとめた上で、日本語教育分野における本研究の学術的な特色や研究成果の意義などについて述べる。そして最後に、本研究の限界について言及するとともに、今後更に深めていくための課題を挙げる。

第3章 学ぶ側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

1.2.2のインタビュー調査においては、来日している元学習者10名を対象に、彼らの敬語や敬語教育に関する意見を収集した。この調査を通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に存在する問題点と不足点をいくつか把握することができた。しかし、質問項目の設定やインタビューの時間などに限界があり、深く聞くことはできなかった。そこで、本章では、1.2.2の調査を改善する形で再度調査を実施することにした。

第1節 調査背景と調査目的

1.1.4においても述べたように、現代中国語には体系的な敬語が存在しないため、中国人日本語学習者の「敬語難」を指摘した研究が多く見られる（佐治，1992；宮岡，2005など）。しかし、先行研究を概観すると、学習者の考えに注目し、彼らの視点を重んじる研究は、管見ではほとんど見当たらない。学習者主体が盛んとなっている今日、学習者の観点も極めて貴重なものであると思われる。

そこで、本章では、中国の大学で日本語専攻教育を受けた元学習者10名を対象に、1.2.2の調査に改善を加えた形で、「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育」に関するインタビュー調査を行うことにした。

以上を踏まえた上で、第2章の第3節で挙げた研究【課題1】（中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、学ぶ側はどのように考えているのか）を明らかにするために、以下の3点を調査目的として設定した。

【1】元学習者は、敬語（その必要性和重要性、目指すレベル、困惑点と困難点など）について、どのように考えているのか。

【2】元学習者は、どのような敬語教育を受けてきたのか、それに対しどのように評価しているのか。

【3】元学習者は、中国の大学日本語専攻教育現場で行われている敬語教育に対し、どのようなアドバイスや期待があるのか。

第2節 調査方法と分析方法

2010年8月～9月に、中国各地の大学で日本語専攻を卒業（5年以内）後、日系企業への就職や大学院への進学を経て、現在来日している中国人10名（【表5】を参照）に調査に協力してもらった。なお、調査対象者を来日経験のある元学習者にしたのは、その実体験を生かし、より多くの気づきや明確なニーズを示してくれると考えたからである。

【表5】 インタビュー調査協力者である元学習者

番号	日本滞在歴	日本語学習歴	談話収集日	総談話時間
C2-01	約2年	約9年	2010/8/7	1:04:46
C2-02	約2年	約7年	2010/8/12	1:11:17
C2-03	約2年半	約5年	2010/8/15	1:24:52
C2-04	約2年	約7年	2010/8/17	0:59:08
C2-05	約1年半	約9年	2010/9/10	1:08:38
C2-06	約3年	約8年	2010/9/14	1:07:02
C2-07	約1年	約5年	2010/9/19	0:54:16
C2-08	約1年	約9年	2010/9/20	1:13:51
C2-09	約1年半	約8年	2010/9/27	1:05:24
C2-10	約半年	約4年	2010/9/30	1:35:58

筆者が事前に作成した「研究調査倫理・誓約書」を読んでもらい、「同意書」に署名と捺印をもらった後、調査を開始した。より詳細なデータを得るために、母語である中国語を用い、以下の質問項目による半構造化インタビューを行い、その内容をICレコーダに録音した。なお、時間制限も設けず、また語りの流れによっては、臨時に質問の順番を変えることもあった。

- (1) 今の日常生活で、言葉の面で難しく、また不自由に感じたことがあるのか。

- もしあれば、それはどんなときだったのか。
- (2) 今の日常生活で、どれぐらい敬語を使っているのか。
どのようなときに敬語が必要だと感じているのか。
 - (3) 今の自分の敬語レベルについて満足しているのか。
目指している敬語レベルは、具体的にどんなものなのか。
 - (4) 敬語について難しく、また不自由に感じたことがあるのか。
もしあれば、それはどのようなときだったのか。
 - (5) 敬語に対する考え方が変わったことがあるのか。そのきっかけは何だったのか。
 - (6) 中国で受けた敬語教育を振り返って、よかった/よくなかったところがあるのか。
 - (7) 自分の経験を踏まえて、望ましい敬語教育や有効な敬語学習方法があるのか。
具体的にどんなものなのか。

録音した内容はすべて文字化し、必要な部分に日本語訳をつけ、データを整理した。分析手順は次のとおりである。まず10人のデータを一人ずつ、質問の順番に各質問項目に対応する回答に分別した。次に分別した回答を一文一文読み、そこに含まれる意味を落とさぬよう縮約した。その後、縮約した内容を互いに比較し、データのユニットを仕分け、カテゴリを作った。最後に、構築したカテゴリを整理し、分析・考察を行った。

第3節 調査協力者別の事例分析

本節では、調査協力者別にそれぞれの事例を示し、インタビューにおける語りを引用しつつ、調査結果を報告し、分析を行う。

3.3.1 元学習者 C2-01 さんの語り

C2-01さんは中国の大学で日本語専攻の学士号と修士号を取得後、大学で1年間日本語を教えていた。その後国費留学生として来日し、教育学大学院の博士後期課程に在学している。日本では中国語講師のアルバイトをしているが、博士号を取得後、中国の大学に戻り、日本語教師になることを夢見る。そんなC2-01さんは自身の経験を踏まえ、学習者と教師両方の立場から、敬語や敬語教育に関する考えを語ってくれた。

まず、来日後の生活において最も困っているのは、語彙量の足りなさや敬語の使い方であると C2-01 さんは話している。敬語に関しては、以下のようなエピソードが語られた。

C2-01 さんのインタビューから翻訳引用¹⁴（以下同様）

日本人は「～（さ）せていただく」をよく使うから、自分も真似したくて…ある日、歓迎会の幹事に「招待させていただきます」と言われて、「新生生になったとき、また招待させていただきます」と答えてしまった。相手の一瞬分らない顔を見て、すぐに自分の言い間違いに気づいた。しかし、授業時間になったため、訂正はできなかった。「～（さ）せていただく」は「～する」の謙譲語で自分の動作に使うものだと知っているのに、そのとき頭が混乱してしまっていた。

アルバイト先でお客さんからの電話に慌てて出たら、「～でございます」、「～様でいらっしゃいますか」などの敬語を使いたくてもなかなかスムーズに出てこなかった。考える余裕もなく、意味疎通を優先に敬語を使うのを諦めた。電話を切った後、冷静に考えると、「お待ちしております」とか「かしこまりました」なども使うべきなのに、使えなかった自分がかっかりした。

以上のエピソードから、教師の経験を持つ C2-01 さんでも、来日後の生活において、敬語による困惑点と困難点を感じており、とりわけ尊敬語や謙譲語を思うとおりに使えないことがうかがえる。自分の敬語に対する苦手意識は、大学時代に受けた敬語教育に起因していると C2-01 さんは語り始める。具体的には次のようなことである。

中国の日本語教育における敬語教育は足りなすぎて、もっと強化すべきだと思う。一番の問題点は会話の練習不足だと思う。上海外語教育出版社の『新編日語』を使って精読の授業で敬語を教わった。常用の尊敬語や謙譲語がまとめられた表を暗誦しただけで、練習はほとんどなかった。そのせいか自分も周りのクラスメートも就職活動で敬語が使えなくて悩んでいた。

¹⁴ インタビューは中国語で行ったため、引用する内容は、インタビューの際調査協力者や筆者の発話に基づき、筆者が翻訳・要約したものである。

C2-01さんは、自分の大学時代に受けた敬語授業について、講義式であり、話す練習が少なかったと振り返り、批判的に捉えていることが分かる。表現形式を覚えていても、敬語がうまく使えないということにC2-01さんは大学時代から悩んでいるようである。次に、C2-01さんが敬語の必要性と重要性をどのように考えているのかを聞いてみた。

中国の大学では、先生もあまり敬語を使わないから、敬語の重要性と必要性を認識していない可能性が高い。その影響で学生も敬語を使わなくてもいいと誤解してしまう。自分が敬語の必要性と重要性に気づいたのは大学院3年生だった。通訳のアルバイトとして、ある中日交易会に参加したとき、意味を優先に敬語を使う余裕がなかった自分とは違って、敬語まで完璧に使いこなした相手側の通訳を見て、敬語は本人だけでなく、会社の全体印象を左右するほどの役割を果たせることに気づいた。

来日後の生活においても、友達以外の相手にはいつも敬語を使っている。アルバイト先ではお客さんに、学校では先生や親しくない研究室の人に話す際、常に敬語が必要だ。特に、自分は今博士だから、です・ます体に限らず、もっとレベルの高い敬語（尊敬語や謙譲語など）も使いこなせなければならないと思う。

C2-01さんが敬語の必要性と重要性に気づいたきっかけは、初級で受けた敬語授業ではなく、大学院を卒業する直前に経験したアルバイトであることが明らかとなった。そして、来日後の生活を通し、C2-01さんは敬語の必要性と重要性に対する認識が更に強まったことが分かる。自分の現在の敬語レベルと目指すレベルについて尋ねたところ、以下のよう

に語った。

自分の敬語はあまりよくない、使いこなせていないと思う。今は頭で考えていることを敬語で話すと混乱してしまう。理想のレベルとしては、日本人のように考えていることを頭で整理しなくても敬語で自然に話せることを目指したい。敬語が自然に使える人が羨ましい。

自分の敬語レベルに全然満足しておらず、敬語を自然に使いこなす人になりたいと語るC2-01さんであったが、敬語を使う際、難しくまたは不自由に感じたところを具体的

に聞いてみた結果、以下のことが分かった。

まずは大学時代に教わった敬語は限られているため、「拝受」などを言われると分からなくて困っている。また、習った敬語でも口に出すとスムーズに使えないことで悔やんでいる。例えば電話応対の失敗談は、普段敬語を使うことに慣れていないことが原因だと思う。最初は難しくても、何回も経験したら慣れてくるはずだ。普段、敬語が必要な場面で練習すればだんだん上手になれると思う。

敬語の形式が長くて複雑なので、尊敬語と謙譲語をよく混乱してしまう。謙譲語の「お～する」を他人に使ってしまったこともよくある。言った後にすぐに気づいて、理論上は分かっているのに…「お目にかかる」と「お目にかける」などの特殊形式もなかなか区別できない。

以上の語りから、C2-01 さんにとっての「敬語難」は、主に「表現形式の複雑さによる混乱」と「必要な場面でスムーズに使えない」という形式面と運用面から来ていると思われる。自分と同じように敬語が使えず困っている学習者を作らないでほしいと強く願っている C2-01 さんは、最後に、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に、以下の期待とアドバイスを寄せた。

慣れるために常に使わなければならないと思う。学習者に頻繁に敬語に触れさせるために、まず教科書における敬語の出現を増やすこと。現状では大学3・4年次の教科書では、文学作品がメインとなっている。文学作品を文学の授業にして、その代わりに敬語が使われている様々な場面での会話をたくさん取り入れるべきだ。

敬語を詳しく紹介する授業が必要だと思う。敬語を聞くと、中国にいる学生の多くは読めば意味が理解できるから大丈夫だと誤解しやすいけど、実際に話すとき使えないのは一番の問題だと思う。私が勤めた大学では敬語の授業があったけど、4年生の後半だったため、就職活動には間に合わなかった。3年生の後半のほうが就職活動の直前だからもっと効果的かもしれない。

連続して尊敬語と謙譲語を教わると、記憶の混乱を引き起こしてしまう可能性が高い。尊敬語の後、ある期間を置いてから謙譲語を教えたほうが、尊敬語の復習にもなるし、消化する時間もあって効果的だと思う。

自分の受けた敬語教育は1週間程度でとても短かった。学習者が自ら使えるように、ロールプレイなど話す練習が必要だ。また、1年次で教えた後、2・3・4年次で段階を踏んで復習する時間も欠かせない。特に、就職活動や進学面接の前に、敬語に関する授業や講座を設け、敬語の必要性和重要性を再認識させ、練習させる必要がある。

以上の語りを見ると、C2-01さんは教科書の扱い方、教育の時期と期間、授業内容や練習方法など、大学時代中国で受けた敬語教育に対し、多くの不満を抱き、改善を求めていることが明らかとなった。

3.3.2 元学習者 C2-02 さんの語り

C2-02さんは、外国語専門の大学で日本語専攻を卒業した後、1年間ほど中国の日系企業で就職していた。その後社会科学研究科の修士課程に進学しに来日し、現在和菓子屋でアルバイトをしながら学生生活を送っている。

そんな彼女は来日後の生活において、自分が大学時代に教科書で習った日本語と来日後聞いている生な日本語とは異なっていることに戸惑っている様子であった。「具体的には？」と聞いたところ、以下のことが語られた。

C2-02さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

例えばアルバイト先での敬語の使い方。今までサービス業の経験はなく、大学2年生の授業で敬語を習ったけど、練習はほとんどなかったから、実際に使おうとすると、すぐには出てこない。また、日本人も時々間違った敬語を使うし、最初は母語話者だからきっと正しいと勘違いしていたけど、大学の時教科書で習った敬語とは違って戸惑っていた。

大学で習った敬語は全然足りなくて、ずっとです・ます体がメインだったから、仲良くなりたい相手にもついです・ます体で話してしまうし、もっと高い敬意を示した

くても、です・ます体しか使えなくて困っている。大学時代、先生に対してもです・ます体以外の敬語を使ったことはなかった。でも注意されたりすることはなかった。日本では、です・ます体だけでは、全然足りないから、時々困っている。

「接客敬語」、「日本人の敬語誤用」、「スピーチレベルシフト」など、C2-02 さんにとって「言葉による難しさや不自由」の多くは、敬語と関連していることが明らかとなった。次に、C2-02 さんに大学で受けた敬語教育について振り返ってもらった。

教科書は上海外語教育出版社の『新編日語』で、2 年生の前半で敬語を習った。代表的な動詞に限って尊敬語と謙譲語の形を教えてもらったけど、文脈もなく、具体的な使い方についてほとんど教わっていなかった。

また、日本語能力試験試験の対策授業として、3 年生の時、教科書を使わずに、先生がもう一度敬語の理論的な部分を整理してくれた。効果はあったけど、実際に使う練習はやはりなかった。中国人の先生による伝統的な講義式授業だった。試験対策が目的だったため、すべて書く練習だった。敬語に対する理解が深まったけど、話す練習はほとんどなかった。しかし、来日後敬語で書くより話すことがより多く求められるようになって、とても難しく感じている。

以上の語りから、C2-02 さんが大学で受けた敬語教育は、理論知識に偏っており、会話など話す練習は極めて少なかったといえよう。そのため、来日後、敬語で話すことが多く求められている C2-02 さんは、うまく話せなくて困っているようである。そして、彼女は敬語の必要性について、以下のように語っている。

中国にいたとき、日本語には敬語があることを知っていたけど、使ったことはほとんどなかった。大学の時、敬語を使う必要性を全く感じなかった。たまたまに敬語を使うと周りのクラスメートから不思議な目で見られた。

就職の1年間も、日本人の上司に敬語を使わなくても、注意されたことはなかった。だから、敬語は必要ではないとずっと思っていた。今はそれは自分の誤解だと分かっ

た。日本に来てから周りの人が敬語の使い方を重視していることに気づいた。敬語は時々相手に与える印象を左右する大事な要素となる。敬語を使わなければ相手への敬意を表すこともできないということを知った。

今は敬語が欠かせないと思う。特に将来的に日本語で仕事を行うことが予想される大学日本語専攻学習者にとって敬語はとても必要だと思う。今の自分の場合、まずアルバイト先では、店長や先輩、顧客など、学校では先生や先輩、事務スタッフなどと話すとき、なるべく敬語を使うようにしている。ほぼ毎日敬語を使っている。

来日前と来日後とでは、C2-02さんの「敬語の必要性」に対する考え方が変わっていたことが確認された。彼女にとって、敬語の必要性に気づいたきっかけは、来日後の経験であるといえよう。そして、C2-02さんが敬語を重要なものだと考えていることは、次の語りを通してより明確となった。

敬語はとても重要だと思う。特にサービス業では、言い方によって苦情を言われたり、敬語がうまく使えないことで、店全体に悪い印象を与えてしまったりすることもよくあるから、日本人でもそれを恐れている。

敬語の必要性和重要性を強く認識している C2-02さんは、自分の敬語レベルと目指す敬語レベルについて、次のように語っている。

自分の敬語にはあまり満足していない。大学院進学の面接では、最初と最後の部分で意識的に敬語を使っていたけど、真ん中の話では言いたいことを表現するのに精一杯で敬語を使う余裕はなかった。です・ます体で話してはいたけど、本当は真ん中の部分も尊敬語や謙譲語を完璧に使いたかった。

目指すレベルは司会者の敬語レベルで、必要なときに自由に使いたい。今のレベルでは考える時間が必要で、特に焦るときは頭が混乱してしまって、敬語が出てこない。いつも意味疎通を優先に、仕方なく敬語をはずしてしまう。相手には何も言われていないけど、本当は敬語も上手に使いたい、とても悔しい。

以上の語りから、C2-02さんは敬語の必要性と重要性を強く認識しているものの、自分の現在の敬語レベルにはなかなか満足しておらず、高い敬語レベルに憧れていることがうかがえる。うまく使えない以外に、難しく感じているところについて、語ってもらった結果、以下のことが分かった。

二重敬語の問題。例えば「召し上がっていただいて」や「ちょうだいいたします」のような尊敬語＋尊敬語、あるいは謙譲語＋謙譲語の使い方について、自分は二重敬語で必要はないと思っているが、使っている日本人もいて、使ってよいのかどうかを判断するのが難しい。

「行かれる」とかは使うけど、「サ変動詞＋される」はあまり使わない。正しいかどうか自信はないし、受身とも混同する可能性があるから、他の言い方で意識的に避けるようにしている。アルバイト先で頻繁に使う人もいて、時々便利に聞こえるが、自分はあまり使えない。

「教えてくださって、ありがとうございます」のような「～てくださる」という使い方をよく見るけど、自分は「～てくださる」より、「～ていただく」を使うことが多い。大学の時、主語が異なるという違いを教わっただけで、具体的な使い分けを知らなくて困ったことがよくある。

以上の語りから、C2-02さんは形式面においても困惑点と困難点を抱えていることが見て取れる。自分が敬語を難しく感じているのは、大学時代に受けた敬語教育と深く関わっているとC2-02さんは話す。中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方について、以下のように述べている。

初級の1年次では、敬語を教える必要はないと思う。言いたいこともちゃんといえないのに、いきなり複雑な敬語を習うと混乱してしまう可能性が高い。文法の基礎ができた後の3年次が一番いいと思う。うちの大学では3年次になると古典文学がメインとなって話す練習はほとんどなかった。3年次で敬語を使ってたくさん練習できる

授業を設けてほしい。また、実際の運用練習として、学習者に日本人の先生と敬語で話すよう促すべきだと思う。

授業活動として、企業プレゼンテーションのような模擬練習の場合、企業から日本人を招くのが難しいことから、例えば企業見学して担当者にインタビューを行うなどの実践活動を提案したい。自分が敬語を使わなくても相手に敬語を使われるから、気づきがいっぱい得られると思う。つまり、教科書以外にも学習者になるべく敬語に触れさせる必要がある。

ほかの学習項目と比べ、敬語の場合、特にたくさん体験することが大事だと思う。企業見学やインターシップなどで実際に使ってみるのが一番上達しやすいと思う。間違えたら反省し、少しずつ使えるようになる。やはり敬語は具体的な場面で使わないと身に付かないと思う。これからの敬語教育は、理論に偏らず、運用力の育成を目指すべきだと思う。

敬語教育の時期に疑問を抱き、改善を求めたほか、企業見学やインターシップなどの実体験を通し積極的に敬語に触れ、自然に習得することの大事さを強調している C2-02 さんであった。

3.3.3 元学習者 C2-03 さんの語り

C2-03 さんは、中国の大学で日本語を専攻し、4年生の時交換留学生として半年日本で生活していた。卒業後、留学先の大学の経済関係の大学院に直接進学した。就職した経験はなく、現在何軒かの飲食店でアルバイトをしている。

様々な場面で言葉による不自由を感じている C2-03 さんは、まず、単語量の足りなさや生の日本語が聞き取れないことに困っていると答えた。更に、使役、受身、授受表現と並んで、敬語も言葉による不自由として挙げられた。

C2-03 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

親しくなった日本人と話すとき、です・ます体を外してよいのかが分からず困っている。立場を優先にすべきなのか、親しさを優先にすべきなのかはいつも迷っている。

敬語には「お～になる」など様々な表現形式があるけど、使い間違いを恐れているから、すべてです・ます体で対応し、それ以上の敬語を回避している。アルバイト先ではもっとレベルの高い敬語（尊敬語や謙譲語など）が求められているにも関わらず、正しい日本語を優先に、自信のない尊敬語や謙譲語を使わないようにしている。

以上の語りから、C2-03さんは、スピーチレベルシフトを難しく感じている以外に、尊敬語と謙譲語の使用にも自信が持てない様子が見える。です・ます体以上の敬語も必要としているにもかかわらず、使わないで生活しているC2-03さんであるが、敬語の重要性について、以下のように語っている。

敬語が使えなくてもいいと思う人もいるけど、自分はそう思っていない。敬語を使わないといけない場面もあると思う。例えば同級生の一人は、ホテルの受付を担当している。彼女の話によると、敬語がうまく使えなければ企業や会社全体に不利益をもたらすこともあるようだ。

就職活動の説明会で、他の応募者が完璧な敬語を使っているのを見て、深い感銘を受けた。敬語が上手な人は他人にとってもいい印象を与えるから、自分もその人のように敬語を上手に使いたい。

以上の語りから、C2-03さんは敬語の必要性と重要性を強く認識していることが分かる。このことから、C2-03さんが尊敬語や謙譲語を回避しているのは、使わなくてもいいのではなく、使えないためであるといえよう。しかし、その後の語りを見ると、C2-03さんは最初から敬語を必要かつ重要なものであると考えているのではなく、途中で意識が変化していたことが確認された。

大学の時、周りのクラスメートと中国人の先生には中国語で、日本人の先生にいつもです・ます体だけだったので、敬語を使う機会はほとんどなく、敬語の必要性を全然知らなかった。日本に来てから、アルバイトの面接で敬語レベルについて聞かれて、初めて敬語が使えないことの不利益を感じた。

日本の就職活動では、面接官は面接者の敬語を重視しているという日本人の先輩の経験談を聞いて、改めて敬語の必要性と重要性を実感した。大学の授業では、先生が「会社に入ったら上司に使う」と一言言っただけで、敬語ができないと自分に不利益をもたらすという危機感は全然感じなかった。

C2-03さんは中国にいた頃、敬語ができないことによる不自由を感じたことはなかったことが判明した。しかし、来日後のアルバイト探しや就職活動などの経験を通し、彼女の敬語意識が一変したことが明らかとなった。次に、敬語がうまく使えないことで悩んでいるC2-03さんが目指したいレベルは、どのようなものなのかについて確認した。

今はです・ます体以外の敬語を回避しているが、できれば先日就職活動の説明会で見た質問者のように、敬語を上手に使いたい。日本人と全く同じレベルになれなくても、上司など目上の人と話すとき、正しく流暢に敬語が使えたらいいと思う。

普段の生活では敬語を使わなくても、就職説明会や企業訪問など、改まった場では敬語が絶対必要だから、他人にいい印象を与えられるよう敬語を上手に使いたい。

です・ます体以上の敬語が使えないというC2-03さんの現在のレベルと、流暢に敬語を使いたいという彼女の目指すレベルの間に大きなギャップが見られる。このようなギャップが生じた原因について確認したところ、C2-03さんは自分が大学で受けた敬語教育について語り始めた。

大学の時、「お/ご～なる」、「お/ご～する」のような固定的な表現形式を習ったけど、具体的な使用に関する指導はあまりなかった。教わった表現形式で話してみたら、とても不自然な感じがした。例えば「ご勉強になる」とか、「お着きする」とか、形式上は正しいけど、日本人はあまり使わない気がする。大学の授業では、形式を習ったけど、使えるかどうかは教わっていなかった。

北京大学出版社の『総合日語』という教科書を使って、敬語の表現形式を覚えて、

正しく文を作れば問題はなかった。それを使って実際にどのようにコミュニケーションを行えばよいのかに関する指導はなかった。中・上級になると、文学作品が多くなり、話す練習はますます少なくなった。

中国の教育と日本語の教育とでは、最も違うのはプレゼンテーションだと思う。中国では、先生に従って本文を読んで、単語や文法の説明を聞いて、教科書の練習問題をやるだけだ。学習者主体で自ら敬語を使う練習はなく、受動的に先生の講義を聞くだけでは、敬語を学ぶ意欲は下がると思う。

大学1・2年次では、基本的な文法知識を終え、3・4年次では現実離れの学習をさせられた。就職活動や進学面接などで敬語を必要とするにもかかわらず、関連する教育はなくて残念だった。

以上の語りから、C2-03さんは自分の受けた敬語教育に不満を抱いていることが推察できる。具体的には、場面離れで表現形式に重きが置かれた教育内容、教師主導で学習者のモチベーションが高まらない講義式授業、初級に集中しすぎて敬語が最も必要が時期に敬語教育が行われていないなどの批判意見が寄せられた。では、望ましい敬語教育や効果的な敬語学習方法についてどのように考えているのか、C2-03さんの意見を聞いてみた。

具体的な場面で敬語を教えたほうがいい。例えば、レストランでお客さんとの会話や、会社で上司との会話、会議でのプレゼンテーションといった場面における敬語会話例を教科書で取り上げると、学習者の役に立つと思う。自分がもし大学の時、このように練習できたら、もっと敬語に親しみを感じることができて、今のアルバイト先で敬語を使いこなせたかもしれない。

大学である動詞を尊敬語や謙譲語に言い換え・書き換えといった練習ばかりさせられた。敬語の形に変えたとしても、それを誰にどのように使えばよいのかが分からなかった。使う機会もなく、すぐに忘れてしまった。具体的な場面で使いながら覚えたほうが、もっと定着しやすいと思う。

以上の語りから、C2-03さんは表現形式に偏っている敬語教育が改善されるのを強く望んでいることが分かる。敬語教育は、学習者に表現形式を覚えさせる段階にとどまるべきではなく、具体的な場面において敬語を使わせることも課題として目指すべきだとC2-03さんは強調している。

3.3.4 元学習者C2-04さんの語り

C2-02さん同様、外国語専門の大学で日本語専攻を卒業した後、1年間ほど中国の日系企業で就職経験を持つC2-04さんは、その後社会科学研究科の修士課程に進学しに来日した。現在アルバイトをしておらず、卒業後帰国し、再び日系企業に就職することを志望している。

C2-04さんは、今の日常生活における言葉による不自由について、語彙量の足りなさに次ぎ、敬語が難しいと話している。

C2-04さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

一般的なコミュニケーションはそんなに問題はないけど、敬語の使い方は難しい。例えばアルバイトの時、敬語を使わなければならないが、来日前、特に大学の時、敬語の存在は知っているけど、使ったことはほとんどなかったから、接客用語など敬語の使い方が分からず、困っている。

以上の語りから、C2-04さんにとって、アルバイト先での接客敬語が難しいということが確認された。アルバイト以外のところでも敬語を必要としているのか、C2-04さんの考えている敬語の必要性について聞いてみた。

日本では年輩の人や先輩、先生、お客さんなどに対して敬語を使わなければならないという文化がある。「郷に入れば郷に従え」と言うように、日本に来た以上、それを受け入れるしかない。自分の場合、先生と話すとき、アルバイト先で接客するとき、または先輩と話すとき、なるべく敬語を使うようにしている。

普段の生活においても先生や先輩などに敬語を使い、日本文化の一つとして敬語の重要性を理解しているC2-04さんであるが、このような敬語意識はいつから形成され、また変

化したことがあるのかについて語ってもらった。

それほど大きな変化はなかった。習ったときから敬語の必要性と重要性を認識していた。しかし、大学の時使う機会はなく、たまには授業で触れる程度だったので、実感が薄かった。それでも敬語は正式な場面や年輩の人や上司に使うものだと思っていた。

以上の語りから、C2-04さんは大学時代から敬語の必要性と重要性に気づいていたことが確認された。早い段階から敬語意識が高かったと思われる彼女は、大学でどのような敬語教育を受けたのかについて確認した結果、以下のことが分かった。

敬語に関する基本的な知識は大学ですべて習ったけど、どのくらい消化できたのかは自分でも分からない。上海外語教育出版社の『新編日語』を使って1年次で習った後、3年次の時、受験対策として復習講座を受けた記憶がある。表現形式を中心とする講義式の授業だったので、話す練習はなかった。

当時は先生の説明を聞いて、特に不満に思っていなかったけど、今思えばもっと色々な場面で、実際に話す練習が必要だったと思う。ただ心配なのは、例えばコンビニでのロールプレイを指導する際、コンビニの接客経験のある先生でなければ、難しいと思う。いかにリアルにロールプレイを行うのかを考える必要があるかもしれない。

以上の語りから、C2-04さんが大学で受けた敬語教育も、伝統的な講義式で会話練習はほとんどなかったことが分かる。大学の授業より、来日前日系企業での1年間の就職経験が、C2-04さんの敬語意識や敬語使用に大きな影響を及ぼしたことが、後の語りで明らかとなった。

会社で企画を担当していた。取引先や上司にメールを書く際、「よろしく願い申し上げます」などの決まり文句を使う必要があった。その1年間のおかげで、敬語の読み書きがだいぶできるようになった。特に、ビジネスメールでよく使う敬語の使い方を覚えた。

仕事では、敬語を使って話すことはほとんどなかった。日本人の上司との会話が少なかったし、同僚も中国人が多かったから、メール以外に敬語を使う機会はあまりなかった。正式の会議では、日本人同士や中国人の上司は、尊敬語や謙譲語も使うけど、他の中国人はです・ます体だけだった。本当は自分ももっと高いレベルの敬語を使いたかったけど、使えなかった。

電話対応のとき、最初と最後のところで敬語を使ったけど、真ん中の部分はです・ます体しか使う余裕はなかった。同僚の日本人が電話に出た時、敬語の使い方が上手だったので、こっそりとメモしたこともあったが、なかなか上達しなかった。

C2-04さんは、大学時代敬語を習ったとはいえ、使えるレベルには達しておらず、就職後の練習を通して、徐々に敬語でメールが書けるようになったことが分かる。しかし、敬語の読み書きができてもうまく話せないと話すC2-04さんに、自分の敬語レベルと目指すレベルを聞いたところ、以下のエピソードが語られた。

基本的な文法知識が分かっているけど、例えば「お～する」を尊敬語として、お客さんに使ってしまったことがよくある。書くときは正しく使えるのに、改まった場面にいると、緊張して頭が混乱してしまって、口が回らない。自分は敬語を正しく書けるけど、流暢に話せない。

自分のレベルは目指すレベルとまだまだ差がある。ある日中友好イベントに参加したときのことだった。「参加させていただいて、本当に光栄です」と話したかったのに、緊張のせいか「参加いただきまして」と言ってしまった。すぐに気づいたけど、訂正できなかった。その後も何箇所も間違えて、本当に悔しかった。それから意味疎通を優先に敬語をしばらく使わなかった。

目指すレベルとしては、自分が敬語を使いたいとき、上手に使いこなすレベルだ。例えば、さっき話した日中友好イベントのような敬語が必要とされる場面で、緊張して頭が混乱してしまわないよう敬語を正しく使えるようになりたい。

日中友好イベントの失敗談を通し、C2-04さんは自分の敬語で話すレベルの低さを痛感し、必要な場面において上手に敬語で話せるレベルを目指すようになった。最後に、自分の経験を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育への期待やアドバイスについて、C2-04さんは以下のように語った。

日本人でも最近の若者は敬語がうまく使えないから、外国人に大学の4年間で敬語を完璧に使うことを要求するのは、多少現実的ではないと思う。とはいえ、現状の教育は、あまりにも実践の部分が欠けていると思う。表現形式に関する説明に集中しすぎて、敬語を使う、特に敬語を使って話す練習は少なすぎる。もっとたくさんの実践練習を取り入れることを提案したい。

私が先生だったら、自分の留学経験を生かし、様々な場面を模擬してロールプレイなどの練習を設けて、学習者に敬語で話す練習をさせる。また、敬語が多く使われているドラマを集めて、学習者に見せて、敬語のインプットを増やす。

C2-04さんは日本人でも難しく感じる敬語を大学4年間で学習者にすべて消化してもらうのが非現実的であると考える一方、現状の教育では敬語で話す機会はあまりにも少ないため、今後なるべく学習者に敬語を使ってもらうよう授業を工夫する必要があると主張している。

3.3.5 元学習者 C2-05 さんの語り

C2-05さんは大学を卒業後、上海のある日系企業で社長秘書として2年間働いていた。その後来日し、大学院に進学するために、半年間日本語学校に通っていた。現在、研究生として1年間大学で勉強している。来日後、飲食店の店員と中国語教室の講師として、アルバイトをしている。

C2-05さんは来日後の日常生活において、言葉による不自由はほとんどないが、正式の場面で発表するときの言葉遣いを難しく感じていると話している。具体的には、以下のようなことである。

C2-05 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

普段の生活では特に不自由を感じないけど、改まった場面で発表などをするとき、言葉がうまく出てこなくて困る経験がよくある。例えば、先学期履修した授業の最後に行われたシンポジウムで、私は司会を担当した。台本にある台詞を言うのは問題はなかったけど、突然発生した非常事態を臨機応変に、敬語を使って参加者に伝えることはとても難しかった。

以上の語りを見ると、C2-05 さんは予想しなかった緊急場面で、敬語を使って話すことに不自由を感じているようである。では、普段の生活において、敬語をどのぐらい必要としているのか、敬語の必要性と重要性について C2-05 さんは次のように語っている。

普段の生活では、先生にメールを書くとき、敬語を意識的に使っている。また、今居酒屋でアルバイトをしているが、そこでお客さんとのやりとりで敬語が必要だ。日本人であれ、外国人であれ、敬語が適切に使える人は、全体的な印象もよくなる。ある意味では敬語レベルはその人の日本語レベルを代表しているといってもいいと思う。敬語が使えない人は日本語が上手とはいえないと思う。

アルバイト先では、お客さんにマニュアル敬語を使っている。ただマニュアルに書いていない場合、日本人スタッフはお客さんに尊敬語や謙譲語も使うけど、自分は尊敬語や謙譲語が使えず、です・ます体で対応することが多い。敬語について大体の知識を知っているけど、具体的にどこでどう使うのかについて自信はない。

以上の語りから、C2-05 さんは、普段の生活においても敬語を必要としているが、使い方に自信が持てず、です・ます体にとどまることが多いことが分かる。現在の自分の敬語レベルには満足していない C2-05 さんの目指す敬語レベルは、どのようなものなのかについて尋ねた。

自分の現在の敬語レベルは、目指すレベルとやはり差がある。目指しているのは、日本人と同じぐらい、自分の使う敬語が相手に違和感を与えないレベルだ。今のレベルだと、時々自分の使っている敬語が不自然に聞こえる。相手にどう思われているの

かも正直自信はない。中国語には敬語がないから、使うときどうしてもわだかまりを感じてしまう。

以上の語りから、敬語を使うことに自信を持たないC2-05さんは、今より敬語を上手に使いたく、高い敬語レベルを目指していることが分かる。大学卒業後、日系企業で社長秘書として働いたとき、敬語を使っていなかったのかという質問に対し、以下のことが語られた。

中国の会社と取引が多いので、お客さんとは中国語で話す。敬語を使う相手は日本人の上司一人だけで、基本的にです・ます体で会話をしていた。意味が通じればそれ以上の敬語が厳しく求められたことはなかった。たまには会議の時、尊敬語とかも使おうとしたけど、あまり上手に使えなかった。でも、指摘されたことはなかった。

2年目の時、日本から女子社員2人が入社してきた。彼女たちは日本人の上司に敬語を使うのを聞いて、敬語を意識するようになった。今までは敬語を使うと距離感ができてしまう心配があって、敢えて使いたくない気持もあったけど、2人の言葉遣いを聞いて、敬語に対する考え方が少しずつ変わった。自分も敬語を上手に使いたくて、彼女たちの敬語に気をつけるようになった。

敬語＝距離感と考えていたC2-05さんは、就職2年目に日本人社員の敬語を聞いたことがきっかけとなり、敬語に対する考え方が変わったようである。それまで彼女が敬語をどのように考えているのかについても聞いてみた。

大学の時、周りには日本人がいなくて、日本語で話すことはほとんどなかった。知識として習ったけど、どうして敬語が必要なのかについて考えたこともなかった。日本人の先生と話すときも意味が通じれば、です・ます体を使わなくても許されていた。

面接の時、初めてちゃんとした日本語を使いたくて、敬語で話すように練習した。でも、結局最初の「～からまいりました」しか使えず、その後の面接で敬語を使う余裕はなく、です・ます体で何とか対応した。

就職後、日本人と接触しているうちに、やはり敬語は欠かせないものだと少しずつ気づきはじめた。親しくなりたくて上司にも、です・ます体以上の敬語を使わずに話していた。日本人の女子社員たちと上司の会話を聞いて、敬語は目上に敬意を表す手段だと分かって、自分も使えるように努力した。

以上の語りから、大学で日本語専攻教育を受けた C2-05 さんは、授業で敬語の必要性和重要性に気づくことができず、就職後でも長い間敬語が使えなかったことによる不利益を感じなかったことが分かる。C2-05 さんは大学時代、どのような敬語教育を受けたのだろうか。

初級で敬語を教わったと思うけど、ほとんど覚えていない。当時の先生が自分で書いた教科書を使った。敬語に関しては詳しく書いていなかった気がする。なぜか大学で受けた敬語教育に関する記憶はほとんどない。自分の敬語は、就職してから仕事を通して少し覚えた。

中級でビジネス授業はあったけど、ビジネス文章を読むことがメインだった。読んで訳して、意味が分かれば終わりみたいな授業を受けた。敬語学習には全く意味がないとはいえないけど、実際のコミュニケーションの中で、敬語をどのように使えばいいのかについて、あまり役に立たなかったと思う。

以上の語りから、C2-05 さんは大学時代に受けた敬語に関連する教育には満足しているとは言いがたいといえよう。卒業後、自律学習を通して敬語を少し覚えたと語る C2-05 さんにとって、望ましい敬語教育と効果的な学習方法とはどのようなものなのかについて語ってもらった。

まず、意識面でどうして敬語が必要なのか、どんなに重要なのかについての説明は欠かせないと思う。ただ日本語には敬語があると言うだけでは、日本人の生活と仕事における敬語の重要性は学習者に伝わらない。自分が大学の時、日本人はあまり敬語を使わないと思っていたけど、実際は違っていた。中国語には敬語はないから、日本に

来たことのない学習者に、日本社会における敬語の位置付けをまず理解してもらうのが第一歩だと思う。

敬語がたくさん使われているDVDを学習者に視聴してもらって、敬語に触れさせる。いきなり敬語で話すのは難しいから、まず耳から敬語の環境を作ったほうがいいと思う。それから、誰にどのように敬語を使うのかを考えさせながら、ロールプレイなどの練習を通し、話す練習を学習者にさせる。

実現するのは難しいかもしれないが、夏休みや冬休みに日系企業にインターシップに行かせるのが一番いい方法だと思う。日本語の環境で敬語を見聞きすれば、きっと気づきが得られる。授業では受身的に教えられても、知識を覚えただけで誰にどのように使うのかは理解できない可能性が高い。会議や報告などで他の人が敬語を使うのを見たら、敬語の意識化が促されて、学習者も積極的に使いたい気持ちになるかもしれない。

C2-05さんは、自身の経験を踏まえ、大学で敬語を教える際、まずその必要性和重要性を学習者に理解してもらうことが大事であると話す。また、耳から敬語をたくさんインプットし、練習や実体験によって敬語をアウトプットできる敬語教育をC2-05さんは望んでいることが分かる。最後に、敬語による困惑点と困難点として、以下の意見が補足された。

会話で登場してくる第三者、話題の人物に敬語を使うべきかどうか、いつも迷っている。例えば、同級生とその場にいない先生の話をするとき、「先生、いますか」と「先生、いらっしゃいますか」のどちらがいいのか、日本人も使う人と使わない人両方いるし、分からない。

先日、敬語の授業で「ご説明します」、「説明いたします」と「ご説明いたします」の区別について教わった。第三者との関係だけではなく、相手との関係も考慮しなければならぬという説明を聞いて納得した。以前、このような知識は全くなかった。

「行かれます」と「いらっしゃる」のような二つ以上の形を持つ敬語の使い分けも

できなかった。後者のほうがもっと敬意が高いと聞いたことがあるけど、具体的な人間関係や場面による使い分けが難しい。

敬語は自分にとって遠い存在だった。「日本人はあまり敬語を使わない」、「敬語を使うと距離ができてしまう」といった間違っただ敬語意識を持っていたので、です・ます体以上の敬語を使うことはほとんどなかった。そのせいかなかなか敬語に慣れなくて、使うと自分らしくないという感じがして、使いたくても自信はない。

以上の語りから、C2-05さんの敬語による困惑点と困難点は、運用面・形式面・意識面と広範囲にわたっていることが明らかとなった。どれも敬語教育において重要な課題でありつつも、C2-05さんが大学時代に受けた敬語教育では、あまり扱われていないことが推察される。

3.3.6 元学習者 C2-06さんの語り

C2-06さんは大学を卒業後、日本のあるテレビ局の中国支社で1年ほど働いた後、国際メディアの大学院に進学しに来日した。インタビューを受けた時点では、大学院を卒業し日本で就職して2年目となる。

普段の生活における言葉による不自由については、業界の専門用語が難しい、また自分の中国式の日本語は日本人に伝わらないということが挙げられた。そして、敬語関連については、以下のことが語られた。

C2-06さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

私の部署は中国人が多くて、中国語を使うことが多い。時々日本人宛にメールを書くけど、やはり自分の言葉遣いがビジネスマナーに沿っているかどうか自信はない。例えば、「拝啓」の使い方や「お邪魔させていただきます、伺わせていただきます」は二重敬語なのかどうかも難しい。

商社などでは、入社の際、新入社員を対象に敬語やビジネスマナーの研修を行うようだけど、私の会社はそういうのがなかった。そのせいか、自分の敬語には自信は持てない。電話対応のときやメールを書くとき、インタビューをするときも言いたいこ

とは言えるけど、ビジネスマナーの面ではやはり自信はない。

以上の語りから、C2-06さんは仕事におけるビジネスマナーや敬語の使い方に自信が持てず、不自由を感じていることが読み取れる。C2-06さんは、普段の生活において敬語の必要性和重要性について、どのように考えているだろうか。

普段話すとき、です・ます体を使うことに慣れすぎて、それ以上の敬語と非です・ます体で話すのになかなか慣れない。日本人とほぼです・ます体で会話しているけど、お客さんと話したり、メールでやりとりをしたりするとき、なるべく敬語を使うようにしている。仕事上関係の相手には意識的に敬語を使っている。

仕事上敬語は欠かせないと思う。しかし、今までの職場では中国人との関わりが多く、敬語で話す必要はそれほどなかった。それでも敬語は重要だと思う。職場が変わったら、もっと敬語を使わなければならなくなるかもしれない。

今は中国人に囲まれて仕事をしているため、敬語を使う機会がそれほど多くないC2-06さんも、敬語の必要性和重要性を認識していることが分かる。いつから敬語の必要性和重要性に気づいたのかについて確認してみた。

敬語に関する意識はほとんど変わっていない。大学の時、先生が敬語が重要だと教えてくれたから、それをずっと覚えている。

この語りから、C2-06さんはほかの調査協力者とは異なり、大学の授業で敬語の重要性和必要性に気づいたことが分かる。C2-06さんは大学でどのような敬語教育を受けたのかについて語ってもらった。

1年次の後半に敬語が導入された。授業で習ったけど、使ったことはあまりなかった。仕事を始めてから敬語が必要となって、大学で習った敬語を思い出して、少しずつ試しながら使ってみた。

大学で受けた敬語教育はあまりよくなかった。先生は基本的な知識しか教えてくれなかった。いきなり量が多かったので、十分理解できなかった。まだ初級の頃だったから、日本語に対する理解も不十分で、敬語についてますます消化できなかった。

敬語に関する説明を聞いた後、模範例に従って文を作っただけで、話す練習はあまりなかった。中・上級では、敬語に触れたことはほとんどなかった。就職活動の面接で日本人の面接官に敬語を使いたかったけど、考える時間が長くなってしまって、最後は諦めた。

以上の語りから、C2-06さんは大学の授業で敬語の必要性と重要性に気づいたものの、初級後半の短期間で、伝統的な講義式で、話す練習が少なかった敬語教育に不満を抱いていることが分かる。次に、目指す敬語レベルについては、C2-06さんは以下のように話している。

満点は100点だとすると、自分の目標は90点に対して、今の自分は60点でギリギリ合格。敬語を上手に使うことで、①誤解が避けられる、②日本語専攻として恥ずかしくない日本語力の証明、③他人にいい印象と仕事ができるイメージを与えられる、などの利点がある。だから必要などきに敬語をスムーズに使えるようになりたい。

今自分が使える敬語は、限られていて全然足りないと思う。周りの日本人が使っている敬語を聞くと、私よりバリエーションが豊富で複雑だと感じる。私も使える敬語の範囲を広げて自由に敬語を使いたい。例え敬語がうまく使えない日本人がいても、私は敬語を正しく使いたい。

以上の語りから、C2-06さんは敬語が上手に使えることによる利点を強く認識している一方、自分の敬語レベルに満足しておらず、高い敬語レベルに憧れていることが分かる。それを実現するための敬語教育と効果的な学習方法について、C2-06さんからは以下の意見が得られた。

まず、敬語の指導時間をもっと増やして、体系的に敬語について教えるべきだと思

う。今の敬語教育は時間が短すぎる。敬語の分類や表現形式、二重敬語なども含めて、敬語関連のものをいくつかの部分に分けて、詳しく説明してほしい。

教育用のつまらない映像ではなくて、ドラマなどから、普段の生活や職場など、敬語が自然に使われているシーンを学習者に見せて、まず聞く練習を増やす。

個人発表やロールプレイ、ビジネスメール作成などの練習を設け、学習者が自ら敬語を使ってみるよう指導方法を工夫する。学習者のモチベーションを高めて、彼らが主体的に敬語を学ぶよう仕掛けることが必要だ。

企業見学やインターシップなどで、敬語を使う環境に行かせて、日本人とコミュニケーションすることで、自分の敬語を反省できるし、上達も速くなると思う。

先生は学習者のニーズに合わせて、敬語に関するいい教材を紹介する。授業で知識を教えるだけでなく、学習者が授業以外の時間で自ら学習する意欲を育てるのも先生の役目だと思う。授業の時間は限られているから、学習者の自律学習を促すべきだ。

C2-06さんは自らの経験を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に対し、教育時間、教育内容、練習方法など、様々な角度から改善してほしいと述べている。

3.3.7 元学習者 C2-07 さんの語り

C2-07さんは中国の大学を卒業後、日本の大学院に進学し、現在日本語教育学を専攻している。修士号を取得後、中国の大学に戻り、日本語の教師になるのを目標としている C2-07さんは、今まで就職したこともアルバイトしたこともないという。

まず、普段の生活における言葉の不自由として、日本人の話すスピードが速すぎて聞き取れない、日本人のあいまいな言い方の裏に隠されている意味が読み取れないなどが挙げられた。敬語関連のものが出なかったため、「敬語について難しく感じたことは？」と質問してみた。

C2-07さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

試験で書くのは問題ないけど、実際のコミュニケーションで使おうとすると、やはり難しい。言いたいことに頭や口が付いていけない、敬語で話すと反応が遅くなる。

問題はないわけではないけど、アルバイトはしていないから、先生以外の相手には敬語を使っていない。先輩にはです・ます体でも十分だと思う。

敬語の問題を解くことに難しさを感じていない C2-07 さんも敬語で話すことに不自由を感じていることが分かった。就職の経験もなく、アルバイトもしていない C2-07 さんは、敬語で話す相手は先生しかいないと語っているが、敬語の必要性と重要性について、どのように考えているのかを確認した。

今の自分は先生にしか使わないけど、敬語はやはり重要だと思う。敬語は日本語の中で重要な位置付けを占めている。留学の場合、先生に敬語を使わなければならないし、会社に勤める場合、取引先や上司などと話すときも敬語が必要だ。

今の自分にとって、学会発表や謝恩会など、改まった場で発言するとき、やはり敬語を使う必要がある。また、前にアルバイトの面接を受けたときも、スムーズではなかったけど敬語を使ってみた。

先生にしか敬語を使わないと話す C2-07 さんも、敬語の必要性と重要性を語っているうちに、敬語を必要とする場面がほかにも色々あることに気づいたようである。そして、留学にせよ、就職にせよ、敬語は重要であると話している。そんな彼女は自分の敬語レベルと目指すレベルについて、以下のように述べている。

普段は使わないけど、敬語に関する基本的な知識は知っている。運用力は高くないけど、将来先生として、表現形式の変形ルールなど、体系的な知識を教えることはできると思う。

理論的なことが頭で分かっているけど、使うときはすぐには出てこない。理想はもちろん母語話者と同じように流暢に使えるレベルだ。

使うことが難しい。文法には自信があるから、書くときは正確に書けるけど、話すときは反応が遅くてスムーズに表現できない。

以上の語りから、C2-07さんは敬語に関する理論知識について自信があるのに対し、運用面について、とりわけ敬語で話すことに自信が持てないことが分かる。高い敬語レベルに憧れる一方、以下の考えも確認された。

確かに敬語は重要だけど、常に使う必要もないと思う。時々テレビで日本人の過剰敬語を聞いて違和感を持つ。

日本人でも「お手伝いしてくださる人を探しています」のような間違っただ敬語を言うから、使い間違っても自分を責める必要はないと思う。

日本人の敬語にも時々違和感や不信感を持つC2-07さんに、敬語に対する考えは来日の経験によって変化したことがあるかどうかについて質問した。

変わった。特に敬語の授業を受講したことで変わったのは、謙譲語の性質を「自分を低くする」のではなく、「自分を高くしない」というふうに考えるようになった。他人に敬意を示すのに、どうして自分を低くしなければならないのか、ずっと疑問に思った。

敬語の授業を受講して考えたのは、敬語を教わることは敬語を使わなければならないということではない。気持ちがあればどんな言語形式でもかまわない。私は表現形式より気持ちのほうが大事だと思う。

一方、正式な場面や先生を相手に話す場合やはり敬語を使いたい。気持ちがあっても、表現形式を通し表さなければ、相手に伝わらないと心配している。自分も時々矛盾している。どうしても敬語が必要な場面では敬語を使うけど、使わなくてもいい場面では使わないことを選ぶ。

敬語授業の受講によって、謙譲語の性質に関する考え方など、C2-07さんの敬語意識が変化していたことが確認された。また、敬語使用によるC2-07さんの矛盾した気持ちも示された。表現形式より気持ちのほうの方が大事であると語ったC2-07さんであるが、必要なときに、やはり敬語を使わないと気持ちが相手に伝わらないのではないかと葛藤しているようである。次に、C2-07さんは大学で受けた敬語教育について、以下のように述べている。

北京大学出版社の『総合日語』という教科書に従って、従来のような教え方で尊敬語と謙譲語を学んだ。練習も書くものがメインだったけど、みんなの前で2人ペアで本文を暗記する練習も毎回させられた。

大学2年生の時、日本人の先生が担当する会話の授業で、ビジネス日本語をテーマに敬語を練習するためのロールプレイをした。ある会社から人事部の部長を招いて、模擬面接の練習もした。当時みんなの前で話すのが恥ずかしくて、面倒だと思っていたけど、今となって思えば、敬語をたくさん使えてよかったと思う。ただすべて会社の場面だったので、自分のような就職したくない人にとって、偏りすぎたという感じもする。

大学3年生の時、文法授業で敬語に関する体系的な知識をもう一度復習した。先生による説明がほとんどだった。レポートも書いたけど、会話の授業ではなかったため、話す練習はなかった。そのとき、丁寧語についても紹介してもらったけど、理解できなかった。

日本に来る前は、自分の受けた日本語教育に満足していた。教わった知識がほとんど理解できたから。しかし、日本の大学院に進学してから気づいたのは、頭で分かるだけでは不十分で、使えないと意味がないということだ。敬語教育も同じで、説明を受けただけで、使う練習があまりなかった。

以上の語りから、C2-07さんの受けた敬語教育は、三段階に分けられるといえる。1年次の導入→2年次の実践→3年次の復習、1年次と3年次で受けた教育は、知識伝授を主と

した講義式授業であったが、2年次では、ビジネスの場面で敬語を使う練習もできたことが分かる。それでもC2-07さんは実践練習が少なかったと訴えている。では、どのような敬語教育を求めているのだろうか。

理論と実践が両方必要だと思う。まず理論的な知識を学習者に十分理解してもらえよう教師による説明が不可欠だ。その後、学習者に実際に使ってもらう実践練習も行わなければならない。国内の教育には知識伝授に偏りすぎて、使う機会は少ない傾向が見られる。習ったものを自由に使いこなせるよう練習させることが大事だと思う。

1年次に敬語を導入する際、基礎知識を説明する時間を短縮したほうがいいと思う。3年次になると、インターシップや就職活動が始まるので、実践練習に重きが置かれる敬語授業を受けたい。学習者のニーズに合わせて、すぐに役に立つようにロールプレイなどで敬語をたくさん使わせるべきだ。

C2-07さんは敬語の指導を1年次の知識導入と3年次の実践練習という二段階で行うことを提案している。そして、知識導入を重視しすぎて、実践練習の部分が不足していることや教育時期の不適切さなどについて批判していることが分かる。

3.3.8 元学習者C2-08さんの語り

C2-08さんは中国の大学で日本語専攻の修士号を取得後、1年間ほど貿易関係の日系企業に勤めた。その後、会社を辞め、博士後期課程に進学しに来日し、インタビューを受けた時点では進学するための研究生として大学に通っている。普段、クリーニング屋でアルバイトをしている。

来日後の生活において、言葉による不自由として、母語話者の話が速くて聞き取れない、中国式の日本語で相手に伝わらない、正式の場面における敬語の使い方という三つが挙げられた。そのうち敬語に関しては、以下のように述べている。

C2-08さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

正式の場では、日本人は敬語を使う。大学の教科書で敬語を習ったけど、試験対策のためだったので、その後すぐ忘れてしまった。日本に来て、周りの人が敬語を使っ

ているのを見て、自分も使いたいけど、うまく使えない。

「お見えになる」や「お目にかかれる」のような敬語フレーズがなかなか覚えられない。「～（ら）れる」に適用する動詞と適用しない動詞があるようだけど、ルールが分からない。「～ていただく」をよく耳にするけど、時々主語は誰なのかは分からなくなるし、自分が使うときもよく主語を間違える。

C2-08さんは、来日後の生活において、敬語の使い方に悩まされていることが確認された。C2-08さんにとって、敬語の必要性はどれぐらいあるのかについて聞いてみた。

アルバイト先で接客するとき、敬語を使わなければならない。クリーニング屋で受付を担当することもあるが、他の店員も敬語を使っているから、うまく使えないけど、自分も一生懸命使おうとしている。

学校では講座を聞きに行くときも、敬語を理解できないと困るし、改まった場面や親しくない相手と話すとき、やはり敬語を使う必要があると思う。

以上の語りから、アルバイトをしながら大学に通っているC2-08さんにとって、ほぼ毎日敬語を聞いたり、話したりしていることがうかがえる。そんな彼女は自分の敬語をどのように評価しているのかを聞いたところ、以下のことが分かった。

満足できない。大学の教科書で習った敬語をほとんど忘れていて、あいまいな記憶に頼って使っているけど、正しいかどうか正直分からない。また、常に考えながら話しているので、時間がかかる。使いたいときに、すぐにはスムーズに出てこない。

C2-08さんは大学で学んだ敬語をほとんど覚えておらず、自分の敬語レベルに自信が持てない様子であった。目指すレベルについて語ってもらった。

具体的な目標はないけど、一般の日本人のレベルかな…でも日本人の敬語レベルにも差があるから、あいまいな目標になってしまう。今は学生だから、使えなくてもそ

んなに困らないけど、もし将来就職して敬語が必要になってきたら、頑張って適切に使えるようになりたい。

以上の語りから、将来的には敬語が適切に使えるようになりたいが、今のC2-08さんは敬語ができないことにそれほど危機感を抱いていないことが明らかとなった。以上のようなC2-08さんに敬語に対する考え方は変化したことがあるのかについて確認してみた。

日本に来る前は、敬語は偽りのものだと思っていた。言葉だけではなく、態度で敬意を表すこともできると思っていた。また、中国語に敬語は存在しないから、日本語の敬語に対して抵抗感があった。

日本に来てから、特にアルバイトを始めてから、周りの人がお客さんに敬語を使うのを見て、敬語は日本社会の文化で、日本人の習慣だと分かった。店員は客に対して、丁寧な言葉遣いで話すのは、当たり前だと考えるようになった。

母語の影響で敬語の存在を否定的に捉えていたC2-08さんは、来日後アルバイトの体験により、敬語に対する考え方が変わったことが確認された。次に、中国の大学で受けた敬語教育について、C2-08さんは以下のように話している。

はっきり覚えていないけど、上海外語教育出版社の『新編日語』の第二冊の後半、つまり1年次の最後で敬語を教わった。その後、敬語についての指導は特に受けていなかったと思う。

大学時代の敬語教育はほとんど覚えていない。大体の流れは、先生の説明を聞いて教科書の練習問題をやっただけで、敬語を使うような実践練習はほとんどなかった。

以上の語りから、C2-08さんは、大学時代に受けた敬語教育に対する印象が薄く、あまり高く評価していないことが分かる。大学時代の敬語教育より、卒業後の経歴を通して敬語を覚えたことが、その後の語りで確認された。

大学の授業より敬語を覚えたのは、大学院のとき、日本語教室で敬語を教えた経歴だった。敬語を受講生に説明するために復習したり、参考書を読んだりして、敬語の知識が増えた。

大学院を卒業後、就職活動の面接で、「おります」などの敬語が使えるように練習していた。就職後、取引先にメールを書く際、敬語が必要だから、決まり文句や書式など覚えた。

C2-08さんは、中国の大学で日本語専攻の修士課程を卒業したとはいえ、敬語についてはあまり教育を受けておらず、仕事の中で自律学習で敬語を覚えたことが推測される。自分自身の経験を踏まえ、C2-08さんは次のような敬語教育を望んでいることが分かった。

自分は初級でしか敬語を習っていなかった。例えば大学4年生の時、就職活動をする学生が多いので、自己紹介など面接で使う敬語について授業で練習できたら、きっと役に立つと思う。

ただ言い換え・書き換えを練習するだけだと、時間がたつと忘れてしまう。実際の場面で実践的に練習したほうが印象深くなると思う。一番いい方法は会社にインターンシップに行かせて、他人の敬語を観察しながら少しずつ使ってもらう。

練習のためのロールプレイは、不自然でいつ使えるのか分からないから、なるべくリアルで、現実に近い授業活動のほうがいいと思う。企業訪問やインタビュー調査など、本当に敬語が必要な場面で学べるのが効果的だと思う。

場面と離れて、ただ表現形式を覚えるのはつまらないし、実際にどう使えばよいのかも分からない。まず、敬語を使っている人や映像を観察することから始めたほうが、学習者にとって、分かりやすいかもしれない。

覚えるのが苦手だと話す C2-08さんは、表現形式が長くて複雑な敬語をそのまま丸暗記するのではなく、場面の中で聞いたり話したりすることで、少しずつ敬語に慣れるような

敬語教育がより効果的であると述べている。

3.3.9 元学習者 C2-09 さんの語り

C2-09 さんは、中国の大学で日本語専攻の学士号と修士号を取得後、国費留学生として来日した。現在、教育学の博士後期課程に在学している。就職した経験はなく、レストランでアルバイトをしながら、中国語教室で講師として中国語を教えている。

まず、来日後言葉による不自由について聞いたところ、①生の日本語が速すぎて聞き取れない、②政治や経済など話題にすると、語彙量が足りない、③敬語の使い方に自信がないという三つが挙げられた。敬語に関しては、具体的に以下のように述べている。

C2-09 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

自分の使える敬語は、です・ます体に限定していて、尊敬語や謙譲語など、もっとレベルの高い敬語はうまく使えない。「食べる」の尊敬語は「食べられる」なのか、「お食べになる」なのか、「召し上がる」なのか、形が多くて使い分けはできない。

表現形式は理解して、時間をかければ覚えられるので、難しくないと思うけど、実際に使うのが難しい。敬語で書かれた文章を読むときは、ちゃんと理解できるけど、自分が使うとき、頭の中で敬語表現に変える時間が長くて、反応が遅くなる。それで、途中で諦めて、です・ます体で対応してしまうことが多い。

尊敬語の「～（ら）れる」や「お～になる」、謙譲語の「お～する」にすべての動詞が適用できるとは思わないけど、使える動詞と使えない動詞の整理ができていないから、使っていいのかいつも自信はない。

以上の語りから、C2-09 さんは「敬語難」は、形式面と運用面の両方から来ていると思われる。敬語を使うことに難しく感じている C2-09 さんであるが、現在の生活において、敬語をどれぐらい必要としているのかについて、以下のように語っている。

先生や親しくない相手と話すとき、敬語を使う必要があると思う。アルバイト先では、マニュアルがないから、一緒にアルバイトしているおばあさんから敬語を教えて

もらっている。でも、忙しくなると、敬語で話したくても考える余裕はないから、いつも諦めている。

この語りから、普段の生活において、C2-09さんは様々な場面で、敬語を必要としているが、自分の敬語レベルには満足していない様子うかがえる。具体的には、自分の敬語レベルをどのように評価し、目指すレベルはどのようなものなのだろうか。

自分敬語レベルは40点、不合格。敬語の形が分かっていても、使えない。使いたくないのではなく、形が正しいかどうか分からないし、この場面に合っているかどうか自信はないから、回避することが多い。

敬語を使いこなせることで、他人にいい印象を与えることができると分かっていても、自信はないから、使わないようにしている。時々尊敬語と謙譲語を混用してしまう。「行かれる」、「召し上がる」といった簡単なものが使えるけど、「お〜になる」のような複雑な敬語を使う自信はない。

敬語に自信はないけど、今すぐに完璧に使いたいとも思っていない。まずです・まず体で対応して意味が通じれば大きな問題はないと思う。もう少し長く滞在すれば、自然に敬語に慣れて、使えるようになるかもしれない。

C2-09さんは自分の敬語レベルをかなり低く評価している一方、今すぐに敬語を上達させたいとは考えておらず、自然習得で少しずつ身に付ければいいと話している。以上のような敬語意識の形成について、以下のように述べている。

大学の時、日本人の先生ともです・まず体で話していた。先生も私達の日本語には寛容度が高く、意味が通じれば何も言わなかった。です・まず体以上の敬語は必要ないと思っていた。しかし、日本に来てから毎日敬語に触れているうちに考え方が変わった。です・まず体だけでは足りない場面に遭遇して、尊敬語や謙譲語の必要性和重要性に気づいた。

以上の語りから、C2-09さんは大学の敬語教育を通し、です・ます体以上の敬語（尊敬語や謙譲語など）の必要性和重要性に気づくことができず、来日後の生活において考え方が徐々に変化していたことが分かる。そして、C2-09さんは大学時代に受けた敬語教育について、以下のように語った。

練習が足りなかった。知識として一通り教わったけど、実際に敬語を使って練習することはあまりなかった。丸暗記しただけで、使う機会もなく、半年も経たないうちにほとんど忘れてしまった。

上海外語教育出版社の『新編日語』で敬語を学んだけど、詳しいことは覚えていない。教科書どおりに説明を受けた後は、一通りに練習をやったと思う。中・上級では復習はなかったけど、敬語が出てきたら訳したり、元の動詞に言い換えたりする練習はさせられた。

話す練習が少ないという従来の教え方で、敬語を教わったC2-09さんは、大学で受けた敬語教育に対し、以下のように評価している。

説明も詳しくはなかったし、当時特に不満はなかった。教科書の練習問題を解いたり、文を作ったりして、先生も形が正しければ何も言わなかった。でも、今考えれば、実際の場面で使えるかどうか、またどのように使えばよいのかは教えてもらえなかった。日本に来たことのある先生が少なかったので、きっと先生も敬語がうまく使えないのではないかと思う。

足りないと思う。講義式で試験対策を目的とする教育なので、学習者は受身的に勉強している。学習者が自ら敬語に興味を持ち、主体的に学ぶよう授業を工夫する必要があると思う。

大学時代、敬語をあまり使わなかったため、自分の受けた敬語教育の問題点に気づかなかったと語るC2-09さんであったが、来日後の生活を通し、敬語と場面の深い関連性や、主体的に学ぶことの大切さに気づくことにより、当時の敬語教育をマイナスに評価している

ことが分かる。最後に、C2-09さんは望ましい敬語教育について、以下のように語っている。

一方的に表現形式を説明するより、実際の場面で練習させたほうが効果的だと思う。敬語教育だけでなく、中国国内の日本語教育は、語彙や文法に重点が置かれていて、会話力や運用力の育成にはとても限界を感じる。

外国語学習には環境が大事だと思う。国内の学習者は日本語の環境に恵まれていないから、教師は環境作りに力を入れるべきだ。例えば、敬語を教えるとき、様々な場面で、様々な人間関係が敬語を使っている映像を見せる方法をすすめる。ドラマからでもいいし、教科書より生きた敬語に触れさせたほうが、印象深いと思う。

もちろん体系的な文法知識も基礎だから、必要だと思うけど、自分の受けた敬語授業では、先生の説明がほとんどで、学習者が話す時間が短すぎた。授業の半分以上を学習者の会話練習に使って、ロールプレイなどの授業活動を通して、敬語を使わせるべきだと思う。

中国国内の外国語教育システム全体を改革する必要がある。日本の大学では学習者が自ら調査してまとめた結果を発表するなど、色々な授業活動がある。しかし、中国の大学では、先生がすべての知識を伝授して、学習者が受身的に聞くだけだから、モチベーションがどんどん下がる。

最後に、C2-09さんは敬語教育にとどまらず、中国の外国語教育全体に期待とアドバイスを寄せた。従来の教師主導の授業から学習者主体の授業へ転換すべきだと彼女は強く訴えた。

3.3.10 元学習者 C2-10さんの語り

C2-10さんは中国の大学で日本語専攻を卒業後、社会人文類の大学院に進学しに来日した。インタビューを受けた時点では、大学院の受験を控えた研究生であり、アルバイトをやっておらず、就職した経験もなかったという。

まず、来日後の生活において、言葉による不自由について、C2-10さんは単語量が足りないと目上の相手への言葉遣いが難しいと話している。後者は敬語と関連していると思われるため、具体的に聞いたところ、以下のエピソードが語られた。

C2-10さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

先日、先生宛のメールに「そんなに気を使わなくてもいいんです」を書いたら、「気にかけていただいて、ありがとうございます」と訂正された。「いただく」、「くださる」、「さしあげる」、「申し上げる」などが敬語だと知っていても、どのように使えばよいのかは分からない。

敬語の表現形式を知っているが、具体的にどのように使えばよいのかが分からなくて、困っているC2-10さんは、普段の生活においてどれぐらい敬語を使っているのかについて、以下のように語っている。

自分は先生や先輩にはなるべく正しい日本語、正しい敬語を使うようにしている。今はまだ研究生で、先生との接触も少ないから、です・ます体以上の敬語を使うべきだと思う。その場にはいない先生のことを話題にするときも、「先生は今日いらっしゃいますか」、「先生が研究される分野…」とかなるべく敬語を使う。今の自分にとって、敬語の使用頻度はわりと高く、うまく使えなかった後はとても悔やむ。

自分の生活では、敬語はとても必要だ。先生や知り合いから紹介された初対面の人には敬語を使わないといけないし、学会など改まった場でも敬語を使う必要がある。大雑把で気にしない人は使わなくてもいいかもしれないけど、自分は礼儀正しい人だと思われたいから。後、買い物に行くときも、店員さんに敬語で話しかけられるから、分からないと困る。

以上の語りから、C2-10さんはわりと頻繁に敬語を使っており、様々な場面において、敬語を必要としていることが明らかとなった。そして、以下のことも語られた。

大学1・2年次の時、敬語を習ったものの、なぜ必要なのか分からなかった。3年次

の時、スピーチコンテストに参加しに日本に来た。経済産業大臣など偉い人もいて、出場者の多くが敬語で話しているのを見て、敬語の重要性に気づいた。

大学の時、日本人の先生と親しくなりたくて、敬語を使わなくてもいいと思っていた。3年次になってから何回も市や省、全国レベルのスピーチコンテストに参加した。改まった場で話すことが多くなり、主催者や審査員、他の選手の使う敬語を聞いて、自分もだんだん真似するようになった。

4年次の時、留学申請のことで教授とメールでやりとりをしていた。先生からの返信にはいつもたくさんの敬語が使われていた。自分も使わないと失礼だと思って、一生懸命辞書を引いた。授業で教わった敬語をどのように使ったらいいのかを考えるのに苦労した。

以上の語りから、C2-10さんは、高学年の校外活動を通して他人が敬語を使うのを観察することにより、敬語の必要性和重要性に気づき、徐々に敬語を使わなくてもいいという考え方が変わっていたといえよう。一方、以下のようなことも語られた。

来たばかりの時は、先輩にもなるべくです・ます体以上の敬語を使っていた。しかし、自分が尊敬の気持ちで使った敬語は、だんだん相手とはなかなか親しくならない原因となったことに気づいた。相手に親しくなりたくないというイメージを与えてしまった。ある日の飲み会で、お酒を飲んだ後、ある先輩が敬語を外しましょうと提案した。非です・ます体で話し始めてから、雰囲気も明るくなったし、楽しかった。敬語を外すことで、互いに親しくなれた気がする。

C2-10さんは実体験を通し、敬語は重要であるが、敬語を使うことで距離感が生じ、親しくなれない可能性もあることに気づいた。そこで、彼女は敬語を使うかどうかを判断する基準を以下のように決めていると語る。

私が考えた優先順位は、まずは改まった場面なのかどうか、次は相手は自分より立場が上なのかどうか、更に相手とは距離を保ちたいかどうかという三つだ。改まった

場だったら、相手とはどんなに親しくても敬語を使うべきだと思う。

敬語の必要性を強く認識しており、使い方にも常に気を使っている C2-10 さんであるが、自分の今の敬語レベルを次のように評価している。

80点、優秀には達していない。変形ルールなど文法的な知識は覚えているけど、話すときは、間に合わないことがよくある。「足を運んでいただいて」とか「お目にかかる」とは、冷静に考えると分かるけど、その場ではすぐには出てこない。

自分の敬語レベルに80点をつけた C2-10 さんは、敬語の表現形式を覚えていても、実際に使う際、スムーズに使えないと話す。そして、敬語による困惑点と困難点はほかにもあった。

「～（ら）れる」は受身の形と同じだから、混乱してしまう。言われるときは、受身なのか敬語なのか迷うし、自分も誤解が生じないようにあまり使っていない。

「いただく」、「くださる」、「よろしい」とかはよく聞くから、自分も使っている。しかし、尊敬語の「お～になる」などは、日本に来てからもあまり聞かないから、自分もあまり使っていない。使えるかどうかは自信は持てない。

普段、買い物に行くときや学校の職員と話するとき、敬語をよく使われる。聞いて分かるけど、自分が話すとき、です・ます体と限られた尊敬語と謙譲語しか使えていない。本当はもっとたくさんの変種を使ってみたいのに。

時々尊敬語と謙譲語を混用してしまう。「～（さ）せていただく」の主語は自分だけど、「～していただく」の主語は他人だ。理屈は分かるけど、練習が少なかったから、使うときはいつも頭が混乱してしまう。

以上の語りから、C2-10 さんは敬語を使う際、様々な困惑点と困難点を抱えていることが分かる。そして、C2-10 さんは自分の受けた敬語教育について、以下のように述べてい

る。

『総合日語』という教科書で、初級の最後で敬語を習った。詳しくは覚えていないけど、変形ルールなど文法説明が多かった。会話文を読んで訳して、言い換え・書き換えの練習が多かった気がする。

2年次の時、日本から帰ってきた先生が敬語の部分を担当した。日中比較文化を専攻とする先生だったので、文化の角度から敬語を解説してくれて、分かりやすくよかったけど、話す練習はなかった。

3年次のビジネス日本語という授業でも敬語に触れたけど、読むことがメインで、出てきた敬語を正しく訳せば次に進むみたいな感じだった。

4年次の時、会社から日本人を招いて、ビジネスマナー講座を開いた。これも説明がほとんどで、話す機会は少なかった。時期も遅かったので、あまり効果はなかった。

4年間を貫いた敬語教育を受けたC2-10さんは大学で受けた敬語教育について、総合的に以下のように評価している。

高校時代の授業と同じで、先生は教科書に従って一通りに説明した後、本文暗記のチェックをして終わりだった。後は学習者の努力しただけだった。2年次の時の敬語授業は敬語に対する理解が促されて、よかったけど、ただ話す練習はなかった。実際の場面で敬語を使いながら、学びたかった。

C2-10さんは四段階に分けて敬語教育を受けたものの、どれも理論に偏りすぎて実践練習が少なかったと訴えている。C2-10さんは自身の経験を踏まえ、今後敬語教育の改善のために、以下の意見を述べてくれた。

表現形式を覚えた後、実際の場面で使わないと上達しない。面接や初対面会話、アルバイトの接客など、実際の場면을模擬して練習したほうがいいと思う。また、可能

であれば、日本語コンテスト、インターンシップ、アルバイトなどの実体験を通して、敬語を使わせたほうがもっと印象的だと思う。

自分もそうだったけど、日本人同士が敬語を使うのを見て、多くの気づきが得られた。生の日本人に接触するのが難しければ、ドラマなどから敬語が使われたシーンを集め、学習者に見せることで、敬語の必要性と重要性にも気づきやすいだろうし、敬語の使い方も覚えやすいと思う。

文化の観点も含め、敬語を指導することが必要だと思う。日本社会では、なぜ敬語が必要なのかを学習者に説明しなければならない。また、日本人がどんな場面で、どのような意図で敬語を使っているのかについても、実践練習をやりながら、学習者に理解してもらう必要がある。

敬語は日本語の中で重要な位置付けを占めている。しかし、国内の敬語教育は教師主導で、教科書に頼りすぎだと思う。どんな場面で、どのように敬語が使われているのかを見せたり、実際の場面で敬語を使う練習をさせたりして、学習者の敬語学習意欲を高めなければならない。

実際の場面における練習の重要性以外に、自分自身の実体験に基づき、敬語教育はまず目と耳で観察することから始めるべきだと C2-10 さんは強調している。

第4節 構築されたカテゴリーの考察

バックグラウンドがそれぞれ異なる10名の調査協力者の語りから、「敬語に対する苦手意識」、「敬語に関する意識変化」、「高敬語レベルへの憧憬」、「受けた敬語教育への不満」と「敬語教育の改善への期待」という五つのカテゴリーが浮き彫りとなった。本節では、この五つのカテゴリーを考察していきたい。

3.4.1 敬語に対する苦手意識

調査協力者全員が中国で専攻としての教育を受け、半数以上は日本語関係の就労経験を持つとはいえ、来日後は、言葉の面で難しく、不自由に感じた経験がよくあるという。具体的な場面として、「母語者同士の会話が聞き取れない」、「語彙量が足りない」など、日本語能力全般に関する意見のほかに、「敬語の使い方が難しい」という意見が最も多数であった。敬語による困惑点と困難点については、以下の意見が代表的なものである。

【表6】 元学習者に語られた敬語による困惑点と困難点

意識面	中国語には敬語がないため、日本語の敬語の必要性と重要性を理解しにくい。
	です・ます体以上の敬語 ¹⁵ に嫌悪感と抵抗感を抱き、使いたくない。
形式面	表現形式が長くて複雑で、なかなか覚えられない。
	バリエーションが多くて、混用してしまうことが多い。
運用面	表現形式を覚えていても、具体的な場面でどう使うのか分からない。
	冷静に考える時間があれば使えるが、焦ってしまうと口がついていけない。

そのうち、「頭の中で形式が分かっているけど、使い慣れていないから口に出すと、つい間違ってしまった」、「敬語の一番難しいところは、場面に合わせて適切に使うこと」、「敬語で文章を書くのはそんなに問題ないが、正式の場で発言すると口がついていけない」、「テストで高い点数が取れても、実際に話せないことに困っている」、つまり、表現形式や文法知識として記憶するより、人間関係や場面に合わせて臨機応変に運用することが敬語の難しさの原点であるという意見が、今回の調査協力者の間に共通していることが確認された。

更に、「敬語に対する苦手意識」は大学時代敬語を教わったときから持ち始め、来日した後も克服できずにいることが明らかとなった。表現形式が複雑でバリエーションも多く、混同せずに記憶するのが苦痛であることと、初級の短期間で教わったため、体系知識に対しても使い方に対しても多くの困惑点と困難点を抱えていることに起因し、長い間敬語に対し嫌悪感と抵抗感を抱いている元学習者が多いことが確認された。

¹⁵ ここでは、主に尊敬語や謙譲語などを指す。

3.4.2 敬語に関する意識変化

敬語の必要性と重要性について語ってもらった結果、調査協力者全員が「ほぼ毎日敬語を使っている」と回答し、「留学生の場合、学校では先生や先輩に、アルバイト先では店長や来客に、社会人の場合、会社では上司や先輩、取引先では客に話す際、です・ます体だけでは、物足りない」と感じている者が多かった。また、「自ら敬語を使わなくても、学校の事務室や学会などで、そして普段の生活においても、スーパーや市役所、銀行などで、敬語で話されることが避けられないため、理解できないと困る」との意見も多く出されている。このような語りから、敬語の必要性と重要性は元学習者に認識されているといえよう。

しかし、このような敬語の必要性と重要性に関する考え方について、大学時代の認識の低さ→就職や来日などの教室外の経験がきっかけとなり、少しずつ気づくという意識の変化が共通に見られた。敬語教育を受けたものの、教室内の指導では、です・ます体以外の敬語（尊敬語や謙譲語など）の必要性と重要性に気づくことができなかったという意見が多数であった。

「敬語を教わったとき、難しいという先生の説明が印象的で、必要性と重要性に関する説明がほとんどなかった」、「大学時代、親しみを表すために日本人の先生にも非です・ます体を使っていたが、注意されたことがなかった」、「中国の日系企業で働いたとき、日本人の上司が自分の日本語に寛容度が高く、です・ます体以上の敬語を使う機会はほとんどなかった」、「です・ます体以上の敬語を使わなくても困らなかった」という考えが、「高学年の時、市や省、全国レベルのスピーチコンテストに参加して、ほかの人の敬語を聞いて、反省した」、「大学院の時、日中貿易会のアルバイトで、初めて敬語の重要性に気づいた」、「留学後、研究室の人にいつも敬語を使われているので、自分も真似するようになった」、「来日後、初めてのアルバイト面接で、いきなり敬語レベルについて聞かれたので、敬語の重要性を感じた」といった教室外の場面に遭遇し、使っていない自分への反省が促されたようである。

以上のことから、調査協力者にとって敬語（殊に尊敬語や謙譲語など）の必要性と重要性に気づく契機は、教室内で行われている大学の敬語教育ではなく、教室外（就職や来日など）の実体験であることが示唆される。大学の時、です・ます体以外の敬語を教わったとはいえ、使う機会はあまりなく、使わなくても困らなかったため、尊敬語や謙譲語の必要性と重要性を認識しなかった調査協力者は、就職や来日など、教室外の失敗体験を通し、

丁寧語以外の敬語が使えないことによる不利益を知り、徐々に尊敬語や謙譲語の必要性和重要性に気づき、敬語意識に顕著な変化が見られた。

3.4.3 高い敬語レベルへの憧憬

自分の敬語レベルについて、調査協力者全員が「満足できず、もっとうまく使いたい」と答えていることから、敬語がうまく使えないことで悔やみ、自分の敬語レベルに満足できない様子がうかがえる。不満に感じた理由として、「聞いて理解できるが、先生にメールを書いたり、正式の場で話したりする自信がない」、「頭で分かっている、その場でどう使えばよいのか分からず、口に出すまで時間がかかる」との意見が最も多かった。また、「誤用を恐れているため、使うべき場面でも使わず、意味が通じることを優先に、です・ます体で済ませることが多い」という回避の心理も共通に見られた。

なお、今回の調査では、「敬語は封建的なものであり、身分の差を反映しているため、使いたくない」、「敬語は日本独自の文化で、外国人の自分はそれに合わせる必要がない」などといった抵抗感が見られず、調査協力者全員から敬語に対する積極的な姿勢が見られた。

一方、目指すレベルについては、全員が「今のレベルでは、失礼な印象を与える不安があって、もっとうまく使いたい」と話す。「公な場でスピーチをするとき、うまく敬語が使えずがっかりした」、「会社で慌てて電話に出たら、客にスムーズに敬語が使えず、ショックを受けた」といった失敗談も多かった。「敬語を上手に使う人に好印象を抱き、敬語は重要だと感じ、上手に使いたい」、「人間関係や場に合わせ、適切に流暢に敬語が使える人になりたい」という高い敬語レベルへの憧れが確認された。

3.4.4 受けた敬語教育への不満

大学で受けた敬語教育については、調査協力者全員が「不満を感じ、全然足りない」と語っている。まとめると、主に以下の六つの観点からの意見が共通に語られた。①導入方法：敬語導入の際、難しさばかりが強調され、必要性和重要性に関する説明はなかった、等。②練習問題：言い換え・書き換えといった表現形式の練習がほとんどであった、等。③教育時期：初級の後半に集中しており、中・上級ではあまり触れていなかった、等。④教育期間：1～2週間前後だったため、十分に消化できなかった、等。⑤授業内容：表現形式に重点が置かれ、どのように使うのかについての指導はあまりなかった、等。⑥授業形

態：教師による講義式授業で、受身で説明を聞くだけで、話す練習は少なかった、等。

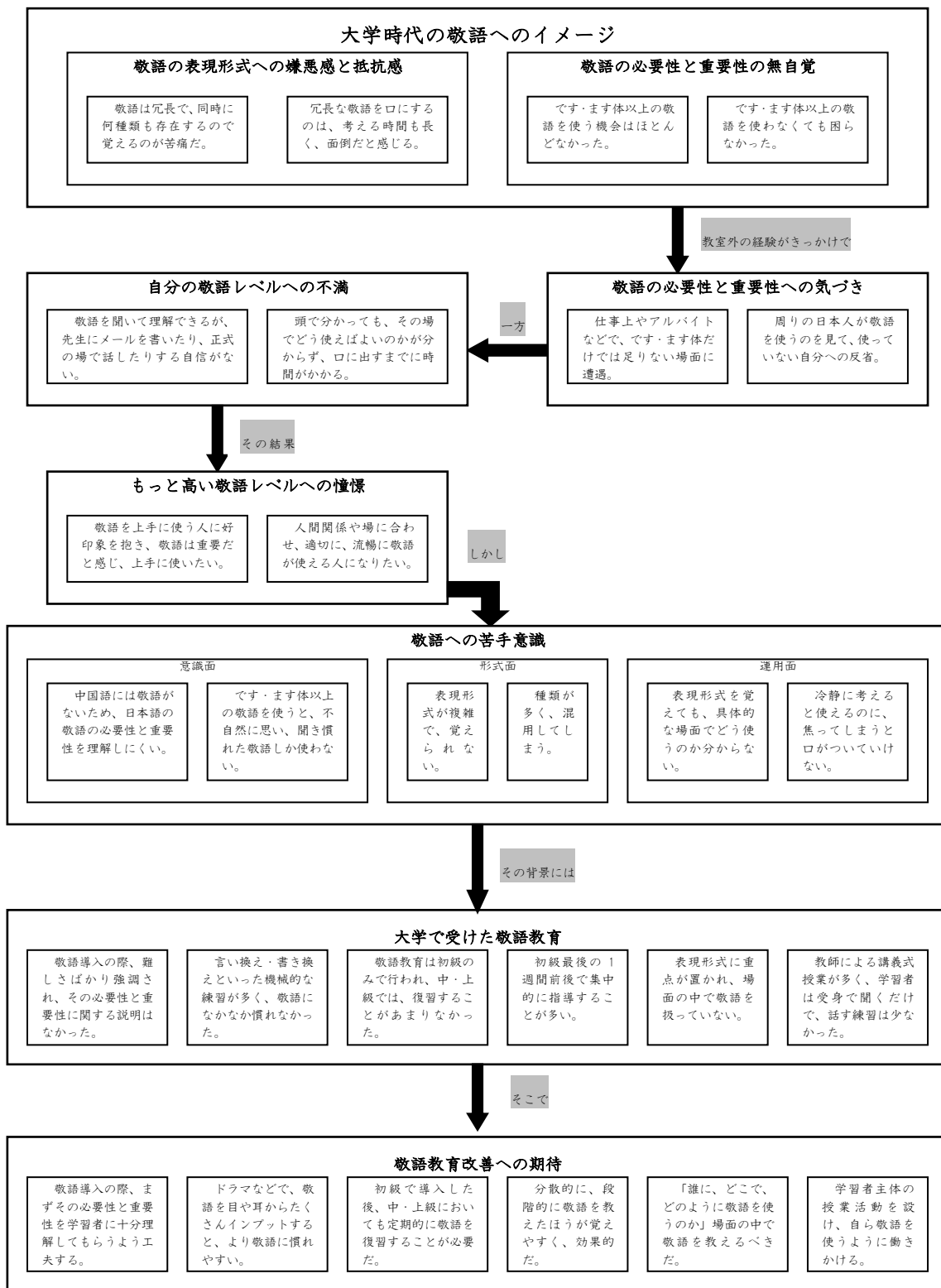
これらの不満は元学習者の抱いている「敬語に対する苦手意識」と深く関係していることがうかがえる。導入の際、必要性和重要性より難しさが強調されたため、学習者の嫌悪感と抵抗感が生まれ、また、機械的な練習が多いため、学習者の自然な敬語使用にはつながりにくいと考えられる。更に、バリエーションが多く、表現形式も複雑な敬語を初級最後の1~2週間程度で集中的に教えるのは、「なかなか覚えられない」、「よく混用してしまう」という学習者の困惑点と困難点を招いてしまう可能性が高い。場面と切り離れた表現形式の練習と教師主導の講義式授業では、学習者が敬語で話す機会が少ないため、実際の場面における敬語の運用力が身につかないのではないかと考えられる。

3.4.5 敬語教育の改善への期待

最後に、調査協力者は自分の体験を踏まえ、敬語教育の改善を強く期待していることが明らかとなった。まとめると、主に以下の意見が共通している。①導入方法：敬語導入の際、まず必要性和重要性を学習者に十分理解してもらうよう工夫する、等。②練習問題：表現形式の言い換え・書き換え練習以外に、聞く・話す・読む・書く全般の練習を扱う、等。③教育時期：初級で導入した後、中・上級においても定期的に・継続的に敬語を復習することが必要である、等。④教育期間：学習者が十分に理解し、消化できるよう、指導期間を延ばし、分散的に敬語を教える、等。⑤指導内容：表現形式にとどまらず、「誰に、どこで、どのように敬語を使うのか」場面の中で適切に敬語を使う指導を行う、等。⑥授業形態：学習者主体の授業活動を設け、学習者が自ら積極的に敬語を使うよう工夫する、等。

以上の改善への期待のいずれも、3.4.4の「受けた敬語教育への不満」と対応して生まれたものであると見て取れる。そして、ほかのカテゴリー（「敬語に対する苦手意識」、「敬語に関する意識変化」、「高い敬語レベルへの憧憬」）とも深く結びついていることが浮き彫りとなり、元学習者らが自らの経験を踏まえ、大学時代に受けた敬語教育を振り返り、不満と期待を語っていることが分かる。

第3章で明らかとなったことを【図1】で表してみた。



【図1】 元学習者の敬語及び敬語教育に関する考え方

第4章 教える側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

第1節 調査背景と調査目的

第3章においては、来日している元学習者からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を把握した。その結果、複数の問題点と不足点が指摘され、改善するための期待やアドバイスも語られた。

一方、これらの問題点と不足点を生み出した様々な教育現場に携わっている教師が、それぞれどのような敬語教育を行っているのか、敬語教育について、どのように考えているのかなど、彼らの理解や洞察を質的に調査することも、敬語教育の課題やあり方を探るためには、貴重な手がかりになると思われる。そこで、第4章においては、中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師から意見を集めることにした。

以上を踏まえた上で、第2章の第3節で挙げた研究【課題2】（中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教える側はどのように考えているのか）を明らかにするために、以下の3点を調査目的として設定した。

- 【1】現場教師は、どのように敬語を指導しているのか。
- 【2】現場教師は、自分の指導に対し、どのように評価しているのか。
- 【3】現場教師は、中国の大学日本語専攻教育現場で行われている敬語教育に対し、どのような意見や期待があるのか。

第2節 調査方法と分析方法

2011年8月に中国の異なった大学で日本語を教えている中国人教師6名（【表7】を参照）に調査に協力してもらった。なお、中国人教師に限定した理由は、現地では敬語が主に「基礎日本語」などの授業で扱われ、それを中国人教師が担当することが多いためである。

【表7】 インタビュー調査協力者である現場教師

番号	日本滞在歴	日本語教育歴	談話収集日	総談話時間
C3-01	約4年	約2年	2011/8/15	1:00:33
C3-02	約5年	約18年	2011/8/21	00:41:04
C3-03	約2年	約5年	2011/8/21	00:31:36
C3-04	約1年	約13年	2011/8/26	00:49:55
C3-05	約2年	約7年	2011/8/29	00:48:45
C3-06	約1年	約29年	2011/8/31	00:52:25

調査の手順は、前章と同様であるため、省略する。質問項目は以下の通りである。

- (1) 勤務先の大学では、敬語をどの段階で、どのぐらいの時間で学習者に教えているのか。
- (2) 敬語を扱う授業を担当したことがあるのか。何回ぐらいあるのか。
- (3) そのとき、どの教科書を使ったのか。自分で補助資料とか配ったのか。
- (4) そのとき、どのように指導したのか。ほとんど教科書どおりに？
それとも自分のやり方で？
- (5) 使った教科書や行った指導法について、よかった/よくなかった点があるのか。
- (6) その時、学習者の反応はどうだったのか。
当時、彼らの成績や敬語能力には、満足したのか。
- (7) 学習者にとって敬語や敬語教育がどれぐらい必要だと思うのか。
- (8) 中国人学習者の敬語における困難点や問題点はどこにあると思うのか。
- (9) 敬語教育におけるいい教材や有効な指導法は、どのようなものだと思うのか。
- (10) 最後に敬語教育に対する意見があれば、自由に話してください。

調査方法と分析手順は、いずれも前章同様であるため、ここで省略する。

第3節 調査協力者別の事例分析

本節では、調査協力者別にそれぞれの事例を示し、インタビューにおける語りを引用しつつ、調査結果を報告し、分析を行う。

4.3.1 現場教師 C3-01 さんの語り

C3-01 さんは、中国の大学で日本語専攻を卒業し、旅行会社に1年間ほど就職していた。その後来日し、経済学について2年間勉強した。帰国後、母校に戻り、日本語専攻の大学院に進学し、修士号を取得した。そのまま母校の日本語教師になって3年間が経った。

敬語の授業を担当した回数は1回のみであった。上海訳文出版社『新編基礎日語』（改訂版）を使用し、1年次の最後の1週間で集中的に敬語を教えたと話している。どのような指導したのかという質問に対し、C3-01 さんは以下のように答えている。

C3-01 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

ほとんど教科書どおりに授業を行った。補助資料は使わなかったが、例文を補足した。辞書からとったり、自分で作ったりしていた。特に、尊敬語と謙譲語の言い換え練習を学習者にたくさんさせた。

まず文法知識として接続などのルールを教えた。それから例文を提示し、復唱させた。その後、例文を作ってもらった。最後に、先生と学生の場面を設定し、ロールプレイではなく、私が言う中国語を一文ずつ日本語に訳してもらった。

文法の説明と練習が終わった後、本文会話に入った。意味を理解してもらった後、暗誦させた。本文の暗誦は宿題の一つでもある。翌日の授業で、まず暗誦をチェックしてから、前日習った敬語文型で単文通訳の練習をした。

C3-01 さんの語りから、彼女の指導では、敬語を文法項目として扱う傾向が強いことが分かる。表現形式の言い換え、例文の復唱、単文作り、中文和訳、本文暗誦など、いずれの練習も実場面との関連性が配慮されていなかった。C3-01 さん自身も自分の教え方について、従来の伝統的なやり方だと語っている。このような教え方について、C3-01 さんは以下のように評価している。

自分の行った敬語指導は、必要であるが、十分だとはいえない。例文を復唱できても、先生の言った中国語を日本語に訳すことができても、日常生活では自分が敬語をどのように使えばよいのか、特にどんな相手に、どんな場面で、どの敬語を使うべきなのかといった指導は、まだまだ不十分だと思う。

以上の語りから、C3-01さんは、自分の敬語指導について、実際の場面で敬語をどのように使うのかといった運用面において不十分であると自覚しているといえよう。自分の敬語指導を受けた学習者の反応や成績などについて、以下のように語っている。

表現形式が多すぎて、いきなり覚えさせるのは無理だと思う。自分にとって、一番使いやすいものを一つ選んで、どんな場面でもそれを使うことを学習者に教えた。一般的には、特殊形→～(ら)れる→お/ご～になるという優先順位で使うことを学習者にすすめた。

学習者は敬語に触れると、面倒そうな顔をしていた。教科書にも集中的に現れているため、1週間前後で一気に教えなければならなかった。しかし、全然消化できない学習者を見て、つい「どうしても使えなかったら、です・ます体でも十分だ」と言ってしまった。

1週間前後で複雑な敬語を消化するのは、学習者にとって不可能であると判断し、優先順位をすすめたり、です・ます体でカバーしたりしているC3-01さんであった。両方とも場面と切り離れた指導法であるといえる。学習者にです・ます体以上の敬語を使わなくてもいいとすすめたC3-01さんに、敬語や敬語教育の必要性について、意見を求めた。

確かに大学1・2年次の時、です・ます体でも十分だと思うが、高学年になると、就職活動などの場面では、それ以上の敬語も必要となってくる。もちろん、仕事内容にもよると思う。中国で就職する場合、上司に対しても、です・ます体でも十分な職場もたくさんある。しかし、日本で就職したいのであれば、です・ます体以上の敬語も使えないと厳しいと思う。

C3-01さんは敬語の必要性と重要性を認めつつも、中国で就職する場合と日本で就職する場合を区別して考えているようである。これは彼女自身の体験と深く関わっていることが、その後のインタビューで明らかとなった。

大学を卒業して、就職して、来日するまでは、尊敬語や謙譲語の必要性と重要性にあまり気づかなかった。大学の先生にも職場の上司にも、です・ます体で話していた。親しさを表したくて、非です・ます体で話したこともある。注意されたことはなかった。しかし、今思えば、相手に不愉快な気持ちにさせたかもしれないととても恥ずかしい。

日本に来てまもなく、日本語が自分より上手なルームメイトから、アルバイト先で敬語がうまく使えず、客と店長に叱られたという話を聞いて、初めて敬語（特に尊敬語と謙譲語）の必要性と重要性に気づいた。その後、自分もアルバイト先でマニュアル敬語を覚えさせられ、客に必ず使うように注意された。

来日当初は、指導教授にもです・ます体で話していたが、事務局の人が先生にもっとレベルの高い敬語を使っているのを聞いて、自分も真似するようになった。その後、覚えた敬語をアルバイト先の店長に使ったら、「日本語がうまい」とほめられ、「敬語力＝日本語力」と思った。

来日がきっかけで、敬語としてです・ます体しか使わなかった C3-01さんも徐々に尊敬語や謙譲語の必要性と重要性に気づくようになり、使うようになったという。自分自身も敬語の使い方に悩まされた C3-01さんは、中国人学習者の敬語における困惑点と困難点について、以下のように語っている。

中国語には敬語はないから、敬語より非です・ます体で話したほうが親しみが表せると誤解している中国人学習者が多い気がする。日本に来る前の自分も先生や上司に非です・ます体で話していた。日本人は寛容度が高いから、嫌でも何も言わない。学習者はそれに気づかずに社会に出たら、とても危ないと思う。

表現形式が難しく、なかなか慣れない。ようやく形を覚えて、テストで正解できても、中国の大学生活では、敬語を使わなくてもいいと誤解しやすいから、わざわざ使わないようにする学習者が多い。

C3-01さんは、中国人日本語学習者にとって、敬語の壁はまず意識面にあると考えているようである。また、敬語の必要性と重要性を認識していないため、使えなくてもいいと誤解している学習者が多いと話している。以上を踏まえ、C3-01さんは敬語教育へのアドバイスについて、次のように話している。

よく考えれば、自分が大学で受けた敬語授業もそうだったが、難しさばかり強調され、敬語の必要性と重要性についての説明は少なかった。そのせいか、学習者は敬語を使おうとしない。今後自分が敬語を教える際、まず必要性と重要性に気づかせることから工夫してみたい。

「他人に物事を頼む」や「先生にメールを送る」、就職活動など、敬語の必要性と重要性が高いと思われる具体的な場面を設定し、練習させるべきだ。そうすると、学習者も敬語の必要性と重要性に気づく上に、敬語をより身近に感じることができると思う。

現場の教師は、敬語を指導する際、教科書に頼ることが多い。今後教科書を作成する際には、敬語の出現を分散させてほしい。また、敬語が多く使われる場面を教科書にたくさん取り入れてほしい。

単に教科書どおりに、表現形式をメインに敬語を指導していたC3-01さんであったが、今後、敬語教育を行う際、授業内容や練習方法など、様々な面において工夫してみたいと話している。また、教科書の改善も強く望んでいることが分かる。

4.3.2 現場教師 C3-02 さんの語り

C3-02さんは、中国の大学院を卒業後、そのまま母校の日本語教師になり、18年間の教育歴を持つ。2006年から4年間日本に留学していたため、インタビューを受けた時点で

は、勤務先の大学に復帰して2年目となる。

十数回も敬語を担当したことがあり、使用する教科書も上海外語教育出版社の『日語』→上海外語教育出版社の『新編日語』→高等教育出版社の『基礎日語教程』と変わっていた。しかし、いずれも初級の最後にあたる1年次の後半、または2年次の前半で、長くて2週間前後で指導を行っていることが分かった。具体的な指導法に関しては、以下のよう

に語っている。

C3-02 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

留学前、中国の教育現場で使われた教科書の種類も少なく、インターネットも今ほど普及していなかったため、日本ドラマなどの素材がそれほど多くなかった。自分も補助資料など用意せず、ほぼ教科書どおりに授業を行っていた。

自分も含めて、敬語を教えるときの流れとして、まず教師から「お/ご～になる」などの尊敬語や謙譲語の表現形式を文法接続のルールを中心に一つずつ説明した後、本文を後について読ませ、最後に教科書の練習問題をやらせて終わりだというのが一般的である。

帰国後、教科書の多様さに驚いている一方、場面設定の単一性に問題を感じた。復帰した後の指導方法として、なるべく多くの場면을提示し、タスク型や活動型の練習を取り入れ、学習者に実際敬語を多く使ってもらうように工夫している。

C3-02 さんにとって、留学は敬語教育の転換契機となったといえよう。留学前は、ただ教科書どおりに指導していたが、留学後、場面の大切さと豊かさを学習者に示し、話せる練習を多く設けるなどの工夫が確認された。では、今まで教えた学習者の反応や敬語力を確認した。

中国の学生は伝統的な講義授業を好む傾向があって、教師主体の敬語指導に対しても満足している様子だった。しかし、敬語が使えるレベルには全然達していないと思う。知識として理解できても、うまく使えない。考えれば自分も大学を卒業してから長い間敬語を全然使えなかった。

先学期高学年の「日本社会」という授業を担当したが、期末にプレゼンテーションを実施した。「発表させていただきます」とかマニュアルのようなものを覚えさせた。発表するとき、ちゃんと敬語を覚えた学生でも、別の場面となると、また敬語の使い方ですら悩む。

以上の語りから、C3-02さん自身も含め、敬語の授業を受けても、敬語が使えるようにならなかったことが分かる。では、使えないとは具体的にはどのようなことなのかについて聞いてみた。

自分の言いたいことを日本語で伝えるのがまだ不自由なのに、その上、敬語で伝えるのはますます難しい。意思疎通のために精一杯で、複雑な敬語変形にまで気を配る余裕はない学生がほとんどだった。

中国にいる学習者にとって、日本語で話す機会も少ないし、敬語で話す機会はますます少ない。知識として理解するのは難しくないが、先生などを相手にして、敬語を使いこなせるのはなかなか難しい。

C3-02さんも学習者にとって、敬語の難しさは使用することであると考え、それを引き起こした原因として、使う機会が少ないためであると述べた。次に、学習者にとって、敬語や敬語教育の必要性と重要性についての考え方を確認した。

大学の教育で司会者が使うような複雑な敬語まで身につけさせる必要はない。まず、敬語を使われたら理解できること、それから自分が使うとき、「いらっしゃる」や「召し上がる」など、基本的な使い方ができれば十分だと思う。

学習者の生活では、敬語をほとんど使わない。また日本のドラマを見た影響で、非です・ます体をたくさん使いたがる。自分もよく学生に非です・ます体で話されているが、注意しづらいし、初・中級の学習者に対して敬語を教えるのは、やはり無理かなど時々思う。

C3-02さんは初・中級においては、敬語がそれほど必要ではないため、無理に使わせることもなく、大学を卒業するまでは基本的な敬語が使えるように教育を行えばよいと考えているようである。それを実現するために、以下のことが提案された。

ロールプレイやタスク型練習を取り入れることによって、敬語を使う練習をたくさんさせる。また、授業だけでなく、インターンシップや交換留学の機会を与えることで、敬語のインプットを増やすことも大事だと思う。

集中的に教えるのではなく、初級から少しずつ導入し、中・上級にかけ、分散して教えたほうがいい。まず初級では語彙として導入し、ある程度積み重ねたら、体系的な知識を伝授する。その後中・上級では、整理と復習をしながら、様々な場面で敬語を使わせる。

今の教科書は、集中した1箇所敬語に関するすべての内容を扱っている。その後の中・上級では、敬語の出現はきわめて少ない。短い期間で日本語のレベルが限られている初級学習者にとって、たったの1~2週間で敬語を身につけるのは、不可能に近いと思う。敬語教育の時期と期間を見直す必要がある。

教科書の場面設定は単調すぎるという感じがする。学生→先生へという人間関係がほとんどで、敬語が必要とされる場面がほかにもたくさんあるのに、全く扱われていない。例えば、初対面の相手や改まった場面など、教科書では敬語を幅広く扱ってほしい。

以上の語りから、C3-02さんの目指す敬語教育の実現は、教科書における敬語の扱い方と深く関係していることが分かる。そのため、現在の教科書における敬語の導入時期や出現箇所、場面設定、練習問題などについて、改善の期待が語られたと思われる。

4.3.3 現場教師 C3-03さんの語り

C3-03さんは中国の大学で日本語専攻を卒業後、日本の大学院に進学した。2年間の修

士課程を終え、現在の勤務大学に就職し、5年間の日本語教育歴を有する。敬語を担当した経験が2回あり、北京大学出版社の『総合日語』を使用している。2回とも1年次の最後に、1週間前後で教えたという。自分の教え方について、以下のように話している。

C3-03 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

敬語は、決まって第二学期の最後一気に教えている。期末なので時間的にはあまり余裕はない。教える順序を変えることはあるが、内容的にはほぼ教科書どおりに説明するだけで、配布資料など補足も一切しない。

自分も伝統的な教え方で教わったせい、敬語を従来のやり方で教えている。まず、敬語に関する体系的な知識、例えば中国語の敬語との違いや敬語を学ぶ必要性、ウチ・ソト関係や上下関係、尊敬語と謙譲語の区別などについて説明する。

最初の2日間で尊敬語に特化し、各バリエーションを覚えさせ、例文をたくさん提示する。それから2日間で謙譲語に特化し、尊敬語同様指導する。あまり時間がなくて、少しだけしかできないが、ドラマから敬語が使われたシーンを学習者に見せる。実生活では尊敬語や謙譲語は、どのように使われているのかを見てほしい。

基本的には教科書どおりに敬語を教えているC3-03さんの語りを見ると、教師による説明がメインであるイメージが強いといえよう。一方、補助資料を用意しないとはいえ、敬語が現れるドラマのシーンを収集し、学習者に見せるという工夫も確認された。しかし、C3-03さんは敬語を教える際にいつもある悩みを抱えていることが、次の語りでも明らかとなった。

同じユニットに集中的に出ているため、1週間ですべて教えなければならない。学習者にとって負担が重過ぎるといつも思う。尊敬語と謙譲語は、それぞれ特殊形、一般形（お/ご～になる、～（ら）れる…）があるので、消化も復習もできない。

1年次の最後にあたるため、前の学習内容が長引いたり、期末の復習で時間を取ったりすると、敬語を駆け足で教えるしかない。練習する時間もほとんどなく、本当は

ロールプレイもさせたいし、もっと敬語のドラマを見せたいが、時間はない。

C3-03さんは学期の最後に現れてくる敬語について、時間的に余裕がないため、いつも思うとおりに指導が行えないという切実な悩みを抱えているようである。一方、C3-03さんによると、勤務先の大学において、敬語を練習させるために、以下の実践活動を仕掛け、実践した教師もいるという。

自分ではなく、過去に同僚の1人が敬語を教えた後、学習者をグループ分けし、担当の先生の家を訪ねさせた。先生や先生の家族には尊敬語、自分には謙譲語を使うように指示した。訪問後、先生にはまたお礼の手紙を書かせた。目的は敬語を使わせることだと思う。

考え方はとても斬新で評価したいが、実施する際、思うとおりにはいかない場合が多いようだ。例えば私の家に来た学習者は、まだ初級なので、簡単な日本語もうまく話せなかった。敬語で話させると、自己紹介で話が終わってしまって、結局中国語で話すことになってしまった。似たような話をほかの先生からも聞いた。

C3-03さんはこのような実践練習を肯定的に評価している一方、実施上の難しさや効果の分かりにくさ、更に時間の厳しさなど、問題点を感じているようである。次に、自分の敬語授業を受けた学習者の反応や成績、敬語力について、C3-03さんは以下のように評価している。

期末試験の前だし、学習者も復習する時間はなく、十分消化できていない様子だった。テストで動詞の辞書形を尊敬語や謙譲語に書き換える問題を出すのが、混用してしまう答えがよく出てくる。敬語は複雑で種類も多くて、覚えるのに時間がかかると思う。仕方ないかもしれない。

以上の語りから、C3-03さんは学習者の敬語レベルについて、あまり満足していないことが分かる。具体的には、学習者の困惑点と困難点について、以下のように語っている。

覚えなければならないものが多すぎて、しかも使う機会もあまりないから、一回覚えても、時間がたつと忘れてしまう。特に「～（さ）せていただく」のような使役やほかの文型と一緒にいる長い敬語はますます覚えにくい。

意識上の問題も存在する。確かに中国の大学では、敬語を使う機会が日本にいるほど多くないが、自分の先生、特に日本人の先生と話す際、敬語を使うべきなのに、使う学生はあまりいない。です・ます体で話したほうが楽だと学生は思っているだろう。更に、親しさを表すために非です・ます体を使う学生もいる。

C3-03 さんが語ってくれた問題点は、形式面によるものと意識面によるものに分類することができるだろう。それぞれの問題点を改善するために、教材や指導法について、C3-03 さんは以下の考えを示した。

今は1週間で終わらせなければならないという緊張感に追われ、あまりゆっくり準備したり、練習させたりする余裕はない。もっと敬語を使う練習を増やして、学習者に使い方を覚えてもらうように指導したい。

同僚の先生のように実践練習もしたいが、なかなかいい案が浮かばない。教師も敬語が苦手な人や自信のない人が案外多いから、もし補うような教科書や練習例があれば、とても助かる。

自分の敬語に対する自信のなさや揺さぶりを何度も繰り返していた C3-03 さんは、納得のいく敬語の指導法をまだ確立していない様子であった。その上、経験不足のせいか、限られた時間で授業内容を終わらせることで精一杯であるため、自分の指導法を内省したり、改善したりする時間があまりないと繰り返している。

4.3.4 現場教師 C3-04 さんの語り

C3-04 さんは中国で日本語専攻の大学院を卒業後、勤務先の大学に就職して10年以上となる。その間初・中級を担当することが多く、敬語を教えた経験6、7回ほどあるという。使用する教科書も吉林教育出版社の『新編日語』→上海外語教育出版社の『新編日語』→

大連理工大学出版社の『基礎日語』と変わっていた。しかし、教科書が変わっても、敬語を教える時期は変わらず、1年次の最後の2週間であると話している。具体的な指導方法について、以下のように語っている。

C3-04 さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

1年次の最後に尊敬語・謙讓語・丁寧語を連続して一気に教えている。2年生も担当したことがあるが、敬語についてほとんど触れていない。今まではほぼ教科書どおりに授業を進めていた。例えば「お～です」の場合、まず文法を中心に説明した後、大量の動詞を与え、言い換え練習をさせる。それから場面を設定せずに、一文ずつ通訳練習をさせる。

例年の教え方だと、教科書における例文も少ないし、表現形式を覚えていても、どんな場面で使うのかなどについて、いつも疑問を感じる。今年授業準備の時、偶然にインターネットで「みんなの教材サイト」を見つけた。そこでは、道を尋ねるときの会話、映画館や空港のアナウンスなど、様々な場面で使われる敬語の模範文が載せられている。そのいくつかを授業に持ち込み、学習者に考えさせる練習として使ってみた。

以上の語りから、一方的に文法説明を繰り返し、主に言い換えや場面離れの通訳練習を実施していたC3-04さんは、「みんなの教材サイト」で場면을重視した敬語の練習例を見ることがきっかけとなり、自分の敬語指導を見直したことがうかがえる。次に、補助資料について、以下のように話している。

基本的には補助資料は配らないが、時々文型を練習するために教科書以外の練習問題を用意する。出題形式として○×問題、選択問題、穴埋めなどがある。敬語の部分も似たような練習問題を配った。すべて筆記問題で、ロールプレイなどやる時間はないから、話す練習はほとんどできない。

教科書以外に用意された練習問題も、表現形式を記憶させるためのものがほとんどであり、実際の場面における話す練習はほとんどなかったことが分かる。使用している教科書

や行っている指導法について、C3-04さんは以下のように評価している。

教科書は何回か変わったが、たいした違いはなかった。文型や文法に重点が置かれていて、具体的にどんな場面でどのように使うのかに関する記述はあまりなかった。今まで教科書どおりに指導を行ってきた、あまりにも実用性が低いと思っていた。今年初めて教科書以外のものを参考に、場面を取り入れてみた。自分は前よりいいやり方だと思っている。

従来のやり方に問題を感じ、不満を持っていた C3-04 さんに刺激をもたらしてくれたのは、「みんなの教材サイト」との出会いであった。敬語使用は場面との関連性が高いことは前から知っていたが、教科書だけでは、どうしても文法重視の敬語教育になってしまうと語る C3-04 さんに、自分の新しいやり方に対する学習者の反応を聞いてみた。

今までとは違って、今年の授業では学習者は楽しそうだった。例えば、「向こうから歩いてきた人に、どのように道を尋ねればよいのか」という場面を設定し、学習者に考えさせ、1人ずつ答えてもらった。互いに刺激を与えながら、一緒によりよい言い方を探していく。授業の雰囲気は前よりよくなった気がする。

今までの教え方だと、テストで正しく答えられても、実際に使うとき、うまく使えない学習者が多かった。表現形式を機械的に記憶できても、誰にどんなときに使うのか分からない。今年のやり方は先日実施したばかりで、まだ効果は十分確認されていないが、運用力の向上にはつながると信じている。

今までの敬語教育は敬語の運用力にはつながりにくいと評価する C3-04 さんであるが、彼女の新たな試みには学習者も興味を示してくれたようである。次に、学習者にとっての敬語や敬語教育の必要性について、C3-04 さんの考えを聞いてみた。

敬語は授業で学んでも、普段使う機会が少なすぎる。教える立場にいる教師もうまく使えない人が多い。自分も敬語を使ったほうがいい場面でスムーズに使えず、悩むことはよくあるから、学習者にとってなおさら難しいだろう。

敬語を使わなくてもコミュニケーションはとれるが、敬語を使うことで教養の高さを示すことができる。日本で1年間研修していたとき、流暢に敬語を使いこなしている事務の人を見て、うらやましかった。すごいと思った。

C3-04さんは、敬語の必要性和重要性を認識している一方、自分も敬語を使う際、自信は持てないと話す。具体的には、中国人日本語学習者の敬語による困惑点と困難点について、以下のことが語られた。

教科書にも書いてあるが、敬語の使い方を間違えると、かえって失礼になる場合がある。それを考えると、使いたいときもこの場面でこのように使っていいのか自信がなくなって、心理的な負担を感じる。

「お～になります」、「～(ら)れる」など、いくつかのバリエーションがあるので、それぞれの区別についてよく聞かれるが、正直自分も使い分けができていない。敬意の程度が違うとか、この場面ではこれをよく使うとか、自分の感で誤魔化すこともある。

「お～になる」や「お～する」などに使える動詞と使えない動詞があるようだが、「1音節の言葉は使えない」としか教科書には書いていなくて、ほかのルールは自分も把握できていない。敬語の本を参考にすることもあったが、時間がたつと忘れてしまう。

意識面・運用面・形式面においてそれぞれ難しく感じるC3-04さんは、教師でありつつも、学習者と同じ困惑点と困難点を抱えていることが分かる。以上を踏まえ、今後求められる敬語教育のあり方について、C3-04さんは以下のように語っている。

敬語の場合、場面は特に重要だと思う。できれば教育期間を長くして、ロールプレイなどの練習も授業でやってみたい。場面設定も自由にしてもらったほうが、色々なパターンが出やすいし、学習者にとって、互いに学ぶいい機会だと思う。でも、現状ではなかなか時間が取れそうもないから、本文を暗誦させるしかない。

教師が一方向的に説明するのではなく、実際に学習者に敬語を使ってもらうよう仕掛ける工夫が必要だと思う。ほかの文型とは違って、敬語は授業で言い換えができて、なかなかうまく使えない学習者が多い。また、使わなくても不自由はないから、ますます使うのを回避してしまうという悪循環がよく見られる。

1年次の敬語教育は、どうしても文型や文法が中心となりがちだ。また、使う機会も少ないから、敬語の必要性和重要性も感じないし、教育の効果はあまり期待できない。できれば、3・4年次のインターンシップや就職の前に、もう一度体系的に復習したほうがいいと思う。

場面が配慮されていない、各バリエーションの使い分けを明記しない、文法的には正しいが、使えない敬語を書いていないなど、教科書の記述には様々な問題点を感じる。教師用指導書にも書いていないから、時々質問されてとても困っている。教科書における敬語に関する内容をもっと充実してほしい。

C3-04さんは、長年伝統的なやり方で敬語を教えていたが、次第に場面の大切さを認識し始め、新たな試みを実践し始めた。しかし、授業時間の短さや教科書の記述不備、自分の敬語に対する自信のなさなどの悩みが、目指したい敬語教育の実現を妨げる壁となっていることが明らかとなった。

4.3.5 現場教師 C3-05 さんの語り

C3-05さんは、中国で日本語教育の修士号を取得した後、勤務先の大学で日本語を教えて7年経つ。2、3年前から在職のまま、日本の某大学の通信博士後期課程に進学した。勤務先の大学では、敬語を1年次後半の1週間前後で教えており、2回その授業を担当したことがあるという。大連理工大学出版社の『新大学日本語』という教科書を用い、補助教材として日本語能力試験の参考書を使用することもある。自分の指導法について、C3-05さんは以下のように語っている。

C3-05さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

基本的には教科書に従って、授業を進めている。尊敬語・謙讓語・丁寧語という順番で説明する。まず接続を覚えさせ、動詞の言い換え練習をさせる。それから敬語の例文を提示し、中国語に訳させたり、中国語を日本語の敬語で言わせたりする。通訳練習が最も多いかもしれない。

通訳練習のほかに、教科書の練習（言い換えが多い）や日本語能力試験の参考書から、敬語に関する問題（選択問題など）を選び、練習させることもある。また、授業ではやる時間はないが、たまには敬語で書かれた文章を読ませて、敬語がどのように使われているのかについて見てもらう。

伝統的な講義式で敬語教育を行っている C3-05 さんは話す。敬語の分類や形式などの説明に大半の時間を使い、練習も教科書のものや日本語能力試験の問題を用いることが多いという。次に、学習者の反応について聞いてみた。

「なかなか覚えられない」、「うまく話せない」という声をいつも聞いている。あまり使わないから、一回覚えてもまた忘れる。練習も少ないし、なかなか慣れない。頭で文法知識が分かって、話すときうまくできない。

尊敬語と謙讓語を混用してしまうこともよくある。尊敬語を使いたいのにな、謙讓語になってしまったり、「お/ご～する」を謙讓語として使ったりする学生も少なくない。口にする前に様々なバリエーションが頭に浮かんで来て、すぐには整理がつかないと思う。

以上の語りから、C3-05 さんは学習者の反応にはあまり満足していないことが分かる。インタビューを続ける中で、C3-05 さんは自身の敬語に対する考え方も語ってくれた。

敬語を教えるとき、いつもより難しく感じていて、苦勞している。私も普段ほとんど敬語を使わないから、正直あまり詳しくない。敬語には様々なバリエーションがあるから、その使い分けについてよく聞かれるが、自分も分からない。私も敬語には自信が持てない。

学習者のみならず、教師である C3-05 さん自身も敬語に苦手意識を抱いているとうかがえる。この苦手意識は、自分が大学で受けた敬語教育と関係していると C3-05 さんは語る。そこで、彼女の受けた敬語教育について聞いてみた。

自分が大学の時受けた敬語授業も伝統的な講義式だった。敬語の 3 種類やそれぞれの表現形式について、先生から一方的に教え込まれた。習った文型で文を作ったりしたが、ロールプレイなど話す練習はなかった。考えれば自分も深く考えずに、今同じようなやり方で敬語を教えている。これではいけないと分かっているのに、なかなか工夫しようとは思わなかった。

C3-05 さんは大学時代教わった指導法で敬語を教えており、悪循環になっていることに気づいた様子であった。C3-05 さんは、敬語や敬語教育の必要性と重要性について、どのように考えているのだろうか。

日本語専攻の学生として、せめて尊敬語や謙譲語の基本的な文型を把握し、自分より目上の相手と話すとき、意識的に敬語を使う必要がある。相手には尊敬語、自分には謙譲語、相手と自分の人間関係に合わせて、正しく敬語が使えるように教育を行う必要があると思う。

その一方、大学の授業で敬語を学んでも、学校で使う機会はほとんどなく、です・ます体だけで十分対応できるのも現状だ。会社に入って初めて敬語が必要となるから、研修の時身につければいいとも考えている。インターンシップから帰ってきて、敬語の使い方がとても上達した学生を何人も見ている。

以上の語りから、敬語や敬語教育の必要性と重要性について、C3-05 さんは矛盾した考えを同時に持っていることが分かる。最後に、今後の敬語教育に対し、以下の改善策が C3-05 さんによって出された。

時間が限られているのも現実な問題。今は 1 年次の説明で終わってしまって、2 年

次では復習する時間はあまりない。今後1年次で種類や表現形式などの体系知識を紹介し、2年次になってからは、話す練習を中心とする復習の時間も設けたい。少なくとも今の倍ぐらいの授業時間がほしい。

今までは私からの説明が多く、学習者の練習時間は少なかった。これからはもっと話してもらうよう時間を有効に使いたい。敬語は実際に使ってみることが大事だ。例えば会社で上司と部下が話す場面を設定し、話させてみたい。その後、模範例を見せて、敬語の使い方について考えてもらう。

毎回授業の最初の10分ぐらいで、学習者に個人発表をしてもらうが、「だ」や「である」体の文章を選び、そのまま発表する学生もいる。これからはこの10分を敬語の練習時間にしたい。「発表させていただきます」などの決まり文句を使ってもらって、発表内容も敬語に関する文章を選ぶよう呼びかけてみる。自分も敬語が使われた文章を集めて、学習者に読ませたいと思う。

C3-05さんは今まで敬語教育について深く考えたこともなく、伝統的な講義式で授業を行っていたが、今回のインタビューがきっかけとなり、自分の従来のやり方に疑問を持ち始めたことが分かる。話す練習を多く設け、なるべく敬語を使ってもらようよう指導法を見直したいと積極的な姿勢を示してくれた。

4.3.6 現場教師 C3-06 さんの語り

C3-06さんは大学の日本語専攻を卒業後、母校の教壇に立ち、29年間日本語を教え続けてきた。初・中級のクラスを担当することが多く、20回以上敬語の部分を担当したという。使った教科書は何回も変わったが、ここ10年間は主に上海外語教育出版社の『新編日語』と上海訳文出版社の『新編基礎日語』という2種類を用いている。教える時期も教科書によっては多少異なるが、大体1年次の後半、または2年次の前半であると語っている。自分の教え方について、以下のように話す。

C3-06さんのインタビューから翻訳引用（以下同様）

学ぶ前に、まず敬語は日本語の中で難しい文法項目だと伝えて、名詞、動詞、文型

などの複雑性を強調し、学習者の注意を引く。それから、敬語を身につけるコツは暗誦することで、覚えれば使えることを伝え、学習者の心理面の負担を和らげる。

表現形式が複雑な敬語は、ほかの文型より難しいので、2週間ほど時間をかけて教えることが多い。単語や文法の説明→本文の説明→練習という順番で、少しずつ授業を進めていく。初級の文法の中では、敬語はもっとも難しく、重要な部分だと思う。

基本的には教科書に従って指導を行う。それ以外に、日常的な場面を設定し、例えば先生と学生の会話を敬語に訳す練習もさせる。目上の人と目下の人に対する言い方が違うということをしかりと理解させるために、尊敬語と謙譲語の言い換え練習をたくさんやらせる。

以上の語りから、C3-06さんは基本的には教科書どおりに敬語を教えているが、教室場における会話練習をさせるという各自の工夫もしていることが分かる。自分のやり方で、学習者の反応や敬語力について、C3-06さんは以下のように語っている。

敬語を学ぶとき、いつもより難しそう顔をする学習者から抵抗感を感じる。知識として理解できても、実際に使う機会はとても少ないと思う。敬語が必要な場面にはあまり遭遇しない初級の学習者にとって、言いたいことも十分いえないのに、敬語はまだ早いかもしれない。間違いを恐れて、なるべく敬語を使わない学習者が多い。

C3-06さんは学習者の敬語に対する嫌悪感と抵抗感を認識しており、彼らの敬語レベルには満足していないようである。このような反応に対し、C3-06さんも、長年戸惑いつつもいい解決案が見つからず、困っていた。色々試した結果、以下の指導法から少し効果を感じ、ここ数年継続して実施しているという。

学習者にとって、敬語が使えるような場面を集め、授業で練習する練習をさせる。例えば「日本人の先生に休みをとりたいとき、どういえばよいのか」という質問を与える。学習者の答えを聞いて、間違いがあれば訂正する。最後にできた正しい答えを暗誦させる。日常生活でよく使う敬語を丸ごと暗誦させるのは一番いい方法だと思う。

似たような場面を遭遇したら、考えなくてもすぐに言えるから。

1クラス30人以上だから、1人あたりの発言時間がどうしても短くなる。そこで、毎回授業の始まりに、3分間の個人発表を実施している。みんなの前で発表するときの言葉遣いを事前に紹介して、実際に使ってもらう。また、発表内容もすべてです・ます体に言い換えるよう敬語を話す練習にしている。

この後のインタビューにおいても、暗誦法と個人発表の有効性についてC3-06さんは何度も強調している。また、ほかの調査協力者とは異なり、C3-06さんは自分の敬語指導について、高く評価していることが明らかとなった。

長年の教育経験のおかげで、学習者の考えていることはよく分かる。どのように敬語を導入し、刺激を与え、練習させるのかなど、自分なりのやり方が確立できている。重要な例文を何回も復唱させ、暗誦してもらう。翌日の授業でもう一度チェックする。忘れたら恥をかくから、学習者は真剣に復習している。

しかし、経験豊かで自分の教え方に自信を持つC3-06さんでも、学習者の敬語力にはなかなか満足できない様子であった。具体的な困惑点と困難点について、以下のように語っている。

学習者は敬語を使わずにです・ます体で話してしまう。授業で習っても、普段全然使わないから、ますます慣れない。使わない⇔使えないの悪循環に陥っている。大学を卒業しても、敬語がうまく使えない学生が多い。理論上分かっているけど、話す自信はなく、使えない学生はほとんどだ。

自分に尊敬語を使って、他人に謙譲語を使うという混用はよく起こる。相手に敬語を使いたくても、考える時間が長くてスムーズに出てこなかったり、うっかりして言い間違ったりするケースもよく見られる。

「いらっしゃる」と「来られる」のような同じ意味を持つ敬語は、相手との人間関

係や場面と合わせて、使い分けしなければならない。これは学習者にとって難しい。どれも同じように見えるが、実は尊敬の程度が違う。

29年間授業で色々と工夫しても、学習者が満足のいく敬語レベルに達しておらず、敬語や敬語教育の必要性と重要性について、C3-06さんは以下のように考えている。

高学年では改まった場面で話すこともあるから、敬語は必要だと思う。特に使用率の高い決まり文句が使えるほうがいい。また、わが学校は師範大学なので、学生は将来敬語を教えなければならない立場になる。その意味では、必要だし、重要である。

一方、大学の授業で敬語がうまく使えるようになるというのは不可能かもしれない。敬語を使う環境もなく、限られている時間だし、使えないのも当たり前だ。自分も大学の時、敬語を面倒だと思って、全然使えなかった。社会に出てから、日本人と接触している中で徐々に覚えるしかないかもしれない。

C3-06さんは敬語や敬語教育の必要性と重要性をある程度認めつつも、大学の敬語教育の限界も強く認識している。最後に、敬語教育をどのように改善していくべきなのかについて聞いてみた。

教科書における敬語の扱いは集中しすぎる。尊敬語と謙譲語のまとめ表を一気に見せられたら、抵抗感が生じるのは当然だ。分散しながら、1・2年次にわたって少しずつ教えて、3年次でまた復習を行ったほうが効果的だと思う。

初級の2週間で扱った後は、敬語はそれ以降ほとんど教科書に現れない。ただでさえ使う機会は少ないから、教科書を通して授業で触れないと、ますます定着しにくい。特に、高学年用の教科書に敬語が使われた文章を多く入れてほしい。

たまには敬語に関する参考書を目にするが、ほとんどは理論に偏るものだという印象を受ける。様々な場面で使う敬語の会話例がまとめられた教材がほしい。敬語がど

のように使われているのかを実際の会話例を通して見せる教材があれば、教師も参考にできるし、学習者の自習用としても役に立つと思う。

C3-06 さんは 29 年間の日本語教育歴を振り返り、敬語を指導する際、常に悩んでいると話す。また、C3-06 さんは敬語教育の改善において、教科書の役割が大きいと述べており、分類や性質など理論知識に偏らず、面接などの場面における敬語の会話例を紹介する実践的な教科書を出版してほしいと強く望んでいることが分かった。

第 4 節 構築されたカテゴリーの考察

勤務先がそれぞれ異なる 6 名の現場教師による語りから、「パターン化された敬語教育」、「満足できない学習者の敬語レベル」、「目指したい敬語教育の改善」、「抱えている現実的な悩み」と「教材への強い依存」という五つのカテゴリーが浮き彫りとなった。本節では、この五つのカテゴリーを考察していきたい。

4.4.1 パターン化された敬語教育

まず、敬語教育が行われる時期と期間について、【表 8】にまとめた。初級に当たる 1 年次の最後、または 2 年次の最初で集中的に行われていることが分かる。中国の大学では 1 コマ=45 分が主流であり、日本語専攻生の場合毎日 2 コマ日本語の授業を受けるのが一般的である。すなわち、学習者は毎日 90 分の授業を 1~2 週間で敬語を学ぶこととなる。

【表 8】 調査協力者の敬語教育概要

調査協力者	時 期	期 間
C3-01	1 年次の最後	約 1 週間 (90 分×4、5 回)
C3-02	1 年次の最後と 2 年次の最初	約 2 週間 (90 分×5、6 回)
C3-03	1 年次の最後	約 1 週間 (90 分×5、6 回)
C3-04	1 年次の最後	約 2 週間 (90 分×4、5 回)

C3-05	1年次の最後	約1週間(90分×4、5回)
C3-06	1年次の最後か2年次の最初	約2週間(90分×4、5回)

また、授業形態については、教師主導の講義式が主流であり、授業の大半は、教師による敬語の種類や働き、表現形式などの説明に費やされており、学習者は受身で教え込まれる立場であることが明らかとなった。更に、授業内容に関しては、敬語はバリエーションが多くて複雑であるため、その一つ一つ説明するのに時間がかかり、どうしても文法中心の授業になってしまうという。練習方法については、表現形式を機械的に練習するための言い換え・書き換えが最も多く、そのほかに敬語が使われた日本語の例文を中国語に訳す練習や、教科書における会話文の暗誦、参考書の敬語に関する筆記問題を解くことなども多いという。

以上の現場教師に語られた「パターン化された敬語教育」は、第3章で学習者に語られた「自分の受けた敬語教育」と合致していることが確認され、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の現状を反映している可能性が高いとかがわれる。そして、以上のことから、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育は、ある程度パターン化されていることが推測される。

4.4.2 満足できない学習者の敬語レベル

自分が用いている教科書や行っている指導法に対し、長年の教育経験を持つベテラン教師も、まだ教育経験の浅い新人教師も含め、調査協力者全員が「不足を感じ、改善すべき」と語っている。その理由として、「今までの敬語教育は、敬語を語彙や文法として扱う傾向が強く、単語や変形規則を覚えさせたとしても、学習者の敬語運用能力は育たない」という意見が共通して挙げられた。

短時間で敬語を集中的に教えているため、学習者が一時的に覚え、テストで高い点数が取れても、実際にうまく使えなかったり、時間が経つと記憶が薄れていたりといった現象が、教師の間で暗黙の了解となっているようである。現場教師からみた学習者の敬語による困惑点と困難点を以下のように整理したところ、第3章で学習者が語った「敬語への苦手意識」と非常に類似しており、やはり意識面・形式面・運用面という三つに分かれていることが分かる。

【表9】現場教師からみた学習者の敬語レベル

意識面	母語にはなく、表現形式が複雑な敬語を面倒だと感じ、使うのを避けたい。
	すべてです・ます体で対応し、それ以上の敬語を使う必要性を感じない。
形式面	バリエーションの多い表現形式をなかなか覚えられない。
	尊敬語を謙譲語として使うなど、混用してしまう。
運用面	聞いて、読んで理解できるが、話すときにうまく使えない。
	テストで高い点数がとれても、スムーズに話せない。

4.4.3 目指したい敬語教育の改善

学習者の敬語レベルに満足できない教師たちは、次第に自分の行っている敬語教育に疑問を抱き始めた。現行の敬語教育の問題点を踏まえ、改善に向けて以下の提案が示された。

①教育時期：1年次後半または2年次前半のみならず、その後中・上級の3・4年次でも敬語教育が必要であり、特に就職活動が近い3年次後半や4年次前半で、実践練習を要する、等。②教育期間：初級の最後の1～2週間で集中的に教えるのではなく、大学4年間を通して、分散的に敬語を指導する、等。③授業形態：教師による知識伝授の時間を減らし、学習者が自ら敬語を使い、主体的に参加してもらうよう工夫する、等。④授業内容：表現形式など敬語の仕組みに関する知識だけでなく、具体的な場面における敬語の使い方も指導する、等。⑤練習方法：言い換え・書き換えといった機械的な練習にとどまらず、ロールプレイなどの授業活動も取り入れる、等。

以上の意見も第3章の元学習者による「敬語教育の改善への期待」と一致していることが確認された。そして、インタビューを通して、教師たちも大学時代に元学習者と類似した敬語教育を受けたという事実が判明した。教師たちによって語られた「満足できない学習者の敬語レベル」と「目指したい敬語教育の改善」が、元学習者によって語られた「敬語に対する苦手意識」と「敬語教育の改善への期待」と結びついたのは、教師たちが過去に元学習者としての学習経験が絡んでいるためであると考えられる。このことから、中国の大学専攻日本語教育における敬語教育の問題点は、改善されないまま、長年にわたり存在している可能性が示唆される。

4.4.4 抱えている現実的な悩み

自分の行っている敬語教育に不満を感じ、改善の必要性を強く認識した結果、自分の指導方法を改善しようとする努力も見られた。「期末にプレゼンテーションを実施し、敬語の決まり文句を覚えさせる」、「ドラマなどから敬語が使われてシーンを選定し、学習者に見せる」、「インターネット上から、敬語に関する学習資料を探し、使ってみる」など、今回の調査を通して、教師各自による改善の試みも確認された。しかし、様々な悩みとして抱えている以下の現実的な問題は、目指したい敬語教育の実現の可能性を低くしていることが明らかとなった。

具体的には、次のような意見が代表的であった。①シラバスやカリキュラムの制限：3年次以降の教科書においては、文学作品が多く、敬語の出現率が低いため、授業で敬語を扱う時間はない、等。②教科書における敬語の扱い方：教科書において敬語は集中的に現れているため、教える順番やペースを変えると不便が生じる、等。③授業時間の限界：限られている授業時間の中で、学習者の話す時間を増やすのはなかなか難しい、等。④教師自身の敬語レベル：大学時代、自分も伝統的な敬語教育を受けたため、正直敬語について自信はない、等。⑤授業準備の困難：教科書の練習問題以外に、自分で色々とアイデアを考えたり、題材を集めたりするのは大変、等。⑥敬語使用率の低さ：大学生にとって使う機会は限られているため、敬語が使えないのも仕方ない、等。

上述した悩みは、現場にいる教師であるからこそ感じる切実な問題であるといえる。中には教材作成やシラバス、カリキュラムなどに関わるため、なかなか教師一人で実現できないものもあれば、工夫すれば個人の努力で改善できるものもあることが分かる。

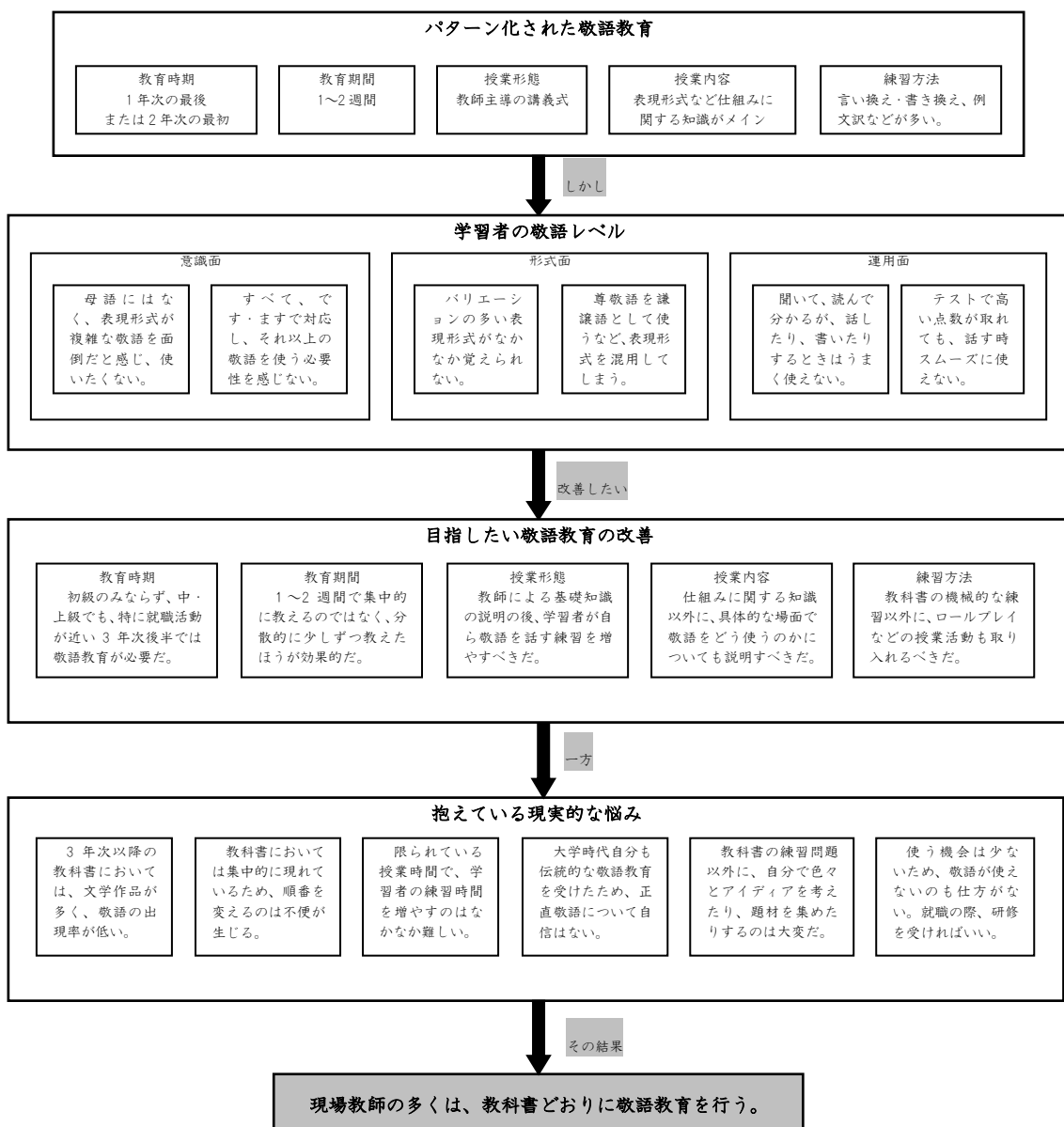
4.4.5 教材への強い依存

現場教師へのインタビューを通し、もう一つ明らかになったことがある。それは「敬語を教える際、教科書と教師用指導書に頼って授業を進める教師が多い」ということである。4.4.3の「目指したい敬語教育の改善」と4.4.4の「抱えている現実的な悩み」の結果を見て分かるように、現場教師は教材における敬語の扱い方には決して満足しているとはいえない。

しかし、4.4.4で述べた現実的な悩みが原因となり、現場教師の多くは改善しなければならぬと思いつつも、最終的には教材に頼って敬語を教えるという最も無難なやり方を選んでしまい、非常に消極的な結果となったといえる。「学習者の反応に不満→自分の敬語

教育を反省→敬語教育の改善を目指す→現実的な悩みにぶつかる→従来のやり方に戻る」という連鎖は、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に存在する問題点が長年改善されず、悪循環に陥ることを引き起こしてしまう大きな原因であるといえよう。このことから、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するには、教材における敬語の扱い方が重要な意味を持つことが示唆される。

第4章で明らかとなったことを【図2】に示す。



【図2】 現場教師の敬語及び敬語教育に関する考え方

第5章 関連教材からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

第1節 『教育要綱』の分析調査

5.1.1 調査背景と調査目的

第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査を通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の拠り所は、使用する教科書であることが推察される。本章では、第2章の第3節で挙げた研究【課題3】（中国の大学日本語専攻用の教科書を中心とする教材において、敬語はどのように扱われているのか）を明らかにすることを目的とする。

「はじめに」の【中国の大学における日本語専攻教育の指導要綱】でも述べているように、中国の大学日本語専攻教育は、教育部高等教育機関日本語専攻教育指導委員会によって推進されている。指導委員会は長年の調査及び分析を経て、1990年に『基礎段階教育要綱』の初版を出版し、その後修正を加え、2001年に改訂版を出版した。また、2000年に『高学年段階教育要綱』を刊行した。「基礎段階」は1・2年次を、「高学年段階」は3・4年次を指すが、この2冊は中国の高等教育機関における日本語専攻教育を実施するに当たり、指導的な役割を果たし、教育目的・教育内容・教育計画・教材編集及び教育評価などに明確な根拠を与えていると思われる。公示されてから既に10年以上も経つが、その影響力はいまだに大きく、2冊の『教育要綱』は中国の大学日本語専攻教育における唯一の「基準」であることは疑いの余地がない（譚他，2008）。

第4章の現場教師への調査においても、中国の大学で日本語を教える際、中国教育部日本語教育指導委員会によって公示された2冊の『教育要綱』に従う必要があり、教科書を編集する際にも、これを参考にする場合が多いということが明らかとなった。以上を踏まえると、2冊の『教育要綱』における敬語の扱い方は、敬語教育の理念や目標、内容、方法などを大きく左右するのではないかと思われる。そこで、中国の大学日本語専攻教科書を調査する前に、2冊の『教育要綱』における敬語の扱われ方について調査・分析することを試みた。

本節では、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

【1】『基礎段階教育要綱』の改訂版¹⁶において、敬語はどのように扱われているのか。

¹⁶ 以下では、『基礎段階教育要綱』と呼ぶ。

【2】『高学年段階教育要綱』において、敬語はどのように扱われているのか。

【3】2冊の『教育要綱』における敬語の扱い方には問題点と不足点があるのか、それは第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査で得られた結果とは、どのような関わりがあるのか。

5.1.2 調査方法と分析方法

『基礎段階教育要綱』と『高学年段階教育要綱』を分析対象とし、具体的な分析手順は以下の通りである。2冊の『教育要綱』から、敬語に関する記述をすべて抽出した後、問題点と不足点があるのかを分析し、更にそれは第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査で得られた結果とどう関わっているのかを考察する。

5.1.3 調査の結果と分析

[1] 『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方

まず、総計29万字の『基礎段階教育要綱』においては、敬語は以下の3箇所¹⁷に現れた。

一、教育対象：省略¹⁸

二、教育目的：省略

三、授業時数：省略

四、教育内容：

(一) 音声：省略

(二) 文字と語彙：省略

(三) 文法

第一学年	省略	形態論	第一学年以外の品詞
			敬語の使い方
第二学年	省略	統語論	テンス・アスペクト・ヴォイス等
			一般的な複文の分析と使用

(四) 文型：省略

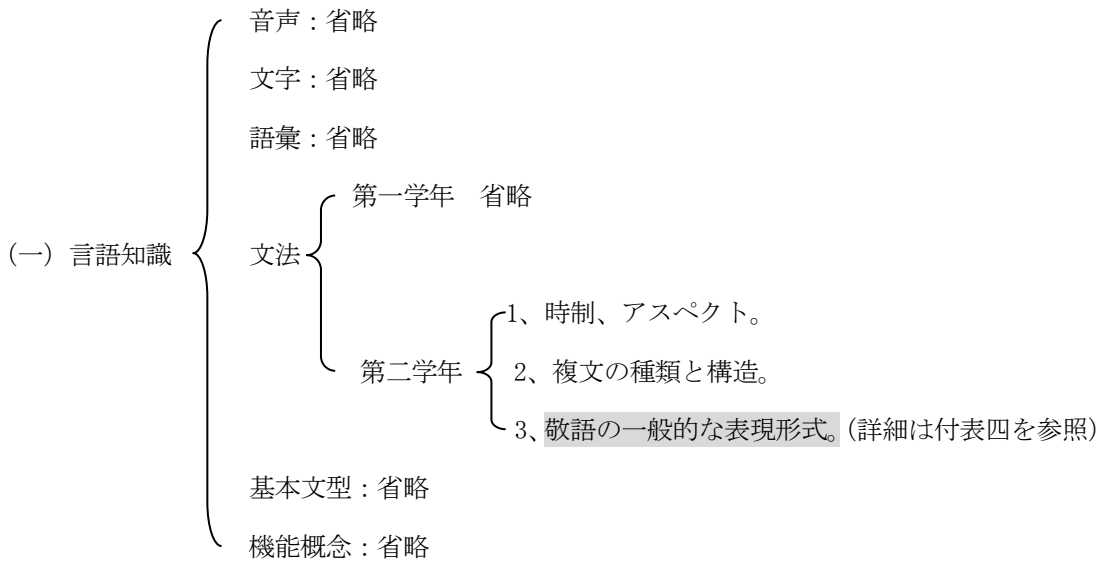
¹⁷ 『教育要綱』は中国語で書かれているため、直接引用できない部分に関しては、筆者がなるべく原文の意味を忠実に翻訳し、引用した。

¹⁸ 敬語に関する内容は記述されていないため、引用を省略する。以下も同様である。

(五) 機能概念：省略

(六) 社会文化：省略

五、教育目標：



(二) 言語技能：省略

六、教育原則：省略

七、その他の問題：省略

八、テスト：省略

付表四 文法表¹⁹

第三部分 敬語の表現形式

1. 尊敬語及び表現形式

表現形式	例
接頭辞	お、ご、貴
接尾辞	さん、さま、がた
名詞	方
動詞	いらっしゃる、下さる、見える、おっしゃる
補助動詞	(て) くださる、(て) いらっしゃる、～なさる
助動詞	れる (られる)

¹⁹ 付表四は三つの部分から構成されているが、ここでは敬語に関する第三部分のみ取り上げる。

その他	お/ご~になる、お/ご~なさる、お/ご~下さる、お/ご~です
-----	--------------------------------

2. 謙譲語及び表現形式

表現形式	例
接頭辞	小、拙、弊
接尾辞	ども
動詞	申す、差し上げる、頂く、参る
補助動詞	(て) いただく、(て) 差し上げる
その他	お/ご~する (致す、申し上げる)、お/ご~いただく、お/ご~願う

3. 丁寧語

3.1

表現形式	例
動詞	ござる、おる、参る、致す
補助動詞	(で) ござる、(て) まいる
助動詞 (敬体)	です、ます

3.2 文体

			常体	敬体	
名詞句	形容動詞句	現在	肯定	だ、である	です、であります
			否定	でない	ではありません
		過去	肯定	だった、であった	でした、でありました
			否定	でなかった	ではありませんでした
	現在推量	肯定	だろう、であろう	でしょう、でありましょう	
		否定	ではなからう、ではないだろう	ではないでしょう	
形容詞句	現在	肯定	~い	~いです	
		否定	~くない	~くありません、~くないです	
	過去	肯定	~かった	~かったです	
		否定	~くなかった	~くありませんでした、~くなかったです	
	現在推量	肯定	~かろう、~いだろう	~いでしょう	
		否定	~くないだろう	~くないでしょう	

動 詞 句	現在	肯定	～る（辞書形）	～ます
		否定	～ない	～ません
	過去	肯定	～た（だ）	～ました
		否定	～なかった	～ませんでした
	現在 推量	肯定	～るだろう	～るでしょう
		否定	～ないだろう	～ないでしょう

以上の記述を分析した結果、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方について、以下の点に疑問を抱いた。

一つ目は、敬語を形態論の中に位置付けるという点である。教育内容に関する記述を見ると、敬語は2年次の文法項目として扱われており、「文法は形態論と統語論を含む」との記述があるが、敬語は名詞、動詞といった品詞やアスペクトなどと同様に「形態論」に属していることが明らかとなった。この扱われ方から、敬語は語彙・文法レベルの学習項目として位置付けられていると推察できる。確かに、「食べる→召し上がる」、「行く→行かれる」、「帰る→お帰りになる」などを学ぶのは、語彙・文法レベルの問題に見えるかもしれない。しかし、第3章の元学習者への調査においては、「召し上がる」や「お/ご～になる」といった敬語の語彙や文法を覚えていても、どんな場面でどういうふうに使ったらよいか分からないという声が多かった。第4章の現場教師への調査においても、尊敬語と謙譲語の特殊形まとめ表を暗誦させたり、一般形の言い換え・書き換え練習を繰り返したりすることで、表現形式を覚えさせたとしても、実際に話す際、敬語がうまく使えない学習者が多いという意見が共通している。

以上の語りから、敬語を語彙・文法として学ぶだけでは、実際にコミュニケーションを行う際、適切に敬語が使えることにつながりにくいといえよう。すなわち、敬語は形態論、統語論、語用論など多岐にまたがる複雑な学習項目であるため、敬語を単なる語彙または文法として規定している『基礎段階教育要綱』の扱われ方には限界を感じる。コミュニケーションの中で敬語を扱う方向性を示すべきではないか。

二つ目は、敬語の表現形式にとどまるというところである。教育目標に関する記述を見ると、一般的な表現形式が身に付くことを主目的としていることが分かる。また、「付表四 敬語の表現形式」においても、3種類の敬語のそれぞれの表現形式が詳細にまとめられて

いることから、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方は、表現形式に重点を置く傾向が見られる。一つ目の疑問点とも関わっているが、果たして表現形式を学ばせることが敬語教育の主な目標なのだろうか。第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査を通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の現状では、やはり表現形式に重点が置かれている傾向が強いということが確認されている。これは『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方と深く関連していると思われる。しかし、敬語教育の現状に対し、多くの元学習者と現場教師が不満を抱き、改善を求めていることから、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方を見直す必要があると考える。

無論、表現形式を学ぶ必要がないと主張しているわけではない。殊に、中国にいる学習者の場合、母語話者や日本にいる学習者と比べ、日常的に敬語を見聞きする機会は少ないため、いきなりコミュニケーションの中で敬語を学ばせるのは現実的ではないといえる。したがって、まず表現形式をしっかりと教えることを敬語教育の第一歩であると位置付けたい。問題視されるのは、この第一歩にとどまり、次に踏み出さないという敬語教育の現状である。繰り返しになるが、この現状は『基礎段階教育要綱』に起因している可能性が高いため、まず『基礎段階教育要綱』における敬語の教育目標に関する記述を再考すべきだと考える。

三つ目は、敬語に関する記述が極めて少ない点である。総計 29 万字の『基礎段階教育要綱』においては、敬語に関する記述は3箇所のみであった。1・2年次の学習項目となる語彙や文法、句型などについて、一つずつ詳しく記述されているのに対し、敬語に関する記述は極めて簡略であるといえよう。具体的には、尊敬語・謙譲語・丁寧語という従来の三分法を取り入れているが、丁寧語には「ござる・おる・参る・致す」とです・ます体が含まれ、美化語は全く扱っていないほか、各種類の働きも明記していないことが確認された。確かに、敬語三分法は日本の学校文法として広く知られており、簡潔ではあるが、これによる困惑点も少なくないことが、第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査において語られている。「ござる・おる・参る・致す・存じる」の丁寧語としての使い方に対する不理解や美化語の性質に対する誤解など、学習者のみならず教師も悩まされているようである。これらの困惑点を解消するためには、教師と学習者の自己学習が期待されているのが現状であるが、それを引き起こした『基礎段階教育要綱』における記述を訂正するのが効果的であると考えられる。

また、各種類の敬語の働きに関する記述の欠落に関しても、『基礎段階教育要綱』にお

いて全く記述されていないため、それぞれの教科書と現場教師に任せているのが現状である。その結果、教科書の説明と教師の認識の不一致が予想され、第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査においても、働きに関連する困惑点が生じたのではないかと思われる。以上を踏まえ、『基礎段階教育要綱』における敬語に関する記述は簡略すぎると思われ、分類を再考し、働きなどに関する記述を補足すべきだと提案する。

[2] 『高学年段階教育要綱』における敬語の扱われ方

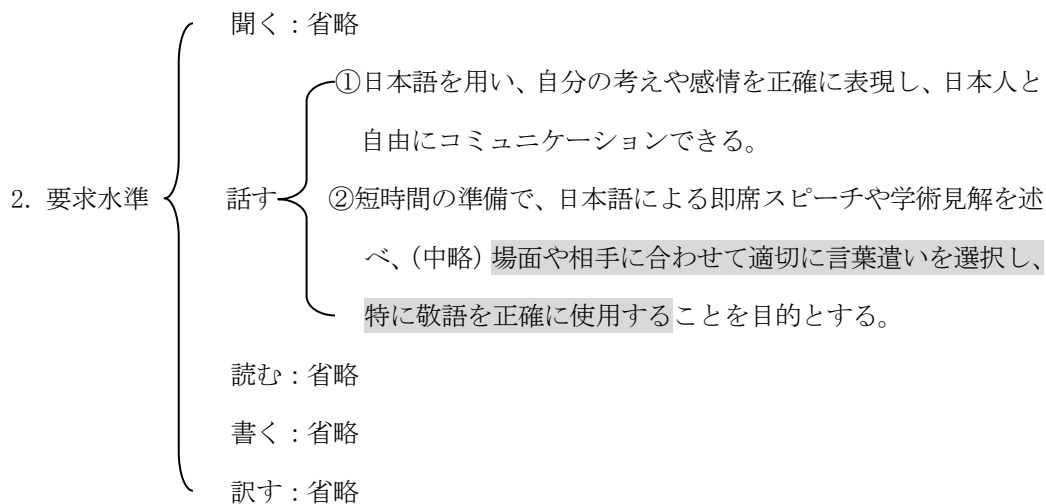
次に、総計 32 万字の『高学年段階教育要綱』においては、敬語の出現は 1 箇所のみであった。

一、総則：省略

二、課程

(一) 日本語総合技能課

1. 到達目標：省略



(二) 日本語言語学課：省略

(三) 日本文学課：省略

(四) 日本社会文化課：省略

三、卒業論文及び実習：省略

四、テスト及び評価：省略

以上の『高学年段階教育要綱』における敬語の扱われ方について、以下の疑問点を抱いた。『基礎段階教育要綱』における「形態論」という扱われ方から一転し、『高学年段階教育要綱』においては、「場面や相手に合わせて、適切に敬語を使用する」能力が要求されており、敬語をコミュニケーションレベルで扱う方針となっている。このような扱われ方について、1・2年次ではコミュニケーションと離れた表現形式を中心に教育を行うのに、3・4年次になりいきなりコミュニケーションに焦点を当てるといった印象を受けた。

2冊の『教育要綱』における敬語の位置付けに関する記述の差異を分析すると、1・2年次では、表現形式を中心に学ばせ、3・4年次では適切に使うことを目標とするという2段階方針がうかがえる。しかし、実際、第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査では、調査協力者が大学で受けたまたは行っている敬語教育は、1年次の最後または2年次の最初に集中しており、3・4年次では敬語教育をほとんど受けていないまたは行っていないという事実が明らかとなった。このことから、『高学年段階教育要綱』に記載されている2段階目の方針が教育現場で反映されず、『基礎段階教育要綱』における1段階目の方針に従って敬語教育が行われ、完結してしまう可能性が高いと示唆される。これは、「表現形式を覚えていても、どう使えばよいのかが分からない」と語る学習者を多く生み出してしまった主な原因ではないだろうか。

そもそも2段階方針にする必要があるのだろうか。第3章の元学習者への調査では、「初級の最後に短い期間で、煩雑な表現形式を集中的に教わり、敬語に対する嫌悪感と抵抗感を覚えた」や「初級では表現形式を覚えても、実際の場面でどう使えばよいのかわからなかった」などの意見が多かった。適切に使うことを教育目標とせずに、初級の最後で集中的に表現形式を中心に敬語を教えるのは、学習者の心理的負担を増やす一方、実用性への認識を低くしてしまう恐れがあるといえよう。したがって、2段階方針を見直し、初級から敬語を適切に使うことを教育目標に入れるよう、2冊の『教育要綱』における敬語の扱われ方を再考すべきだと訴えたい。

5.1.4 調査を通じて見えたこと

本節では、中国の大学日本語専攻教育の実施及び教科書の編集などにあたって大きな拠り所となる2冊の『教育要綱』を分析対象とし、その中から敬語に関する記述をすべて抽出し、分析した。その結果、敬語教育にとって指導的な役割を果たしている2冊の『教育要綱』の指導性は一貫性と具体性に欠けていることが明らかとなった。具体的には以下の

ようなことである。

『基礎段階教育要綱』においては、敬語は名詞やテンスなどと並び、2年次の文法項目として扱われており、語彙・文法レベルの学習項目として位置付けられていることが確認された。また、教育目標に関する記述を見ても、一般的な表現形式が身に付くことを主目的としており、表現形式に重点を置く傾向が見られる。このような扱われ方と第3章と第4章で得られた結果との関連性を考察した結果、次のことがいえる。「表現形式を覚えても、適切に敬語が使えない」という敬語教育の現状に対し、多くの元学習者と現場教師が不満を抱き、改善を求めているのは、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方に起因している可能性が高いと推察されるため、それを見直す必要がある。

また、『基礎段階教育要綱』においては、教育現場では多くの混乱を招いている。敬語三分法を採用しており、各種類の敬語の働きについても明記されていない。このような扱われ方は、第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査で語られた敬語による困惑点と困難点と深く関連しているため、敬語教育の現場に混乱をもたらす原因となっていることが示唆された。

更に、『基礎段階教育要綱』においては、一般的な表現形式の整理と記憶に重点が置かれているのに対し、『高学年段階教育要綱』においては、場面や相手に合わせ、敬語の適切な使用能力が要求されているという異なる扱われ方が確認された。このような2段階方針について、第3章と第4章で語られた事実と照らし合わせて考察した結果、「1・2年次の表現形式中心の敬語教育で終わってしまう」、「適切に使うことより表現形式に学習者の目を向けさせてしまう」、「初級の学習者に敬語に対する嫌悪感と抵抗感を持たせてしまう」などの現状とつながっている可能性が高いと思われる。

以上を踏まえ、2冊の『教育要綱』における敬語の扱われ方に見られた問題点と不足点は、中国の大学日本語専攻教科書の編集にも大きく影響している可能性が高いとかがえる。教育現場で使われている教科書においては、敬語はどのように扱われており、2冊の『教育要綱』からどのような影響を受けているのかについては、次節で検討する。

第2節 教科書の分析調査

5.2.1 調査背景と調査目的

第3章の元学習者への調査と第4章の現場教師への調査を通し、教育の当事者である学習者と教師からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を把握した。彼らの語りによると、中国の日本語教育現場において、「教科書どおりに敬語教育を行っている教師が多い」という事実が明らかとなった。よって、教科書が中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の実施に大きな影響を与えている可能性が示唆される。

以上のことから、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点を調査するには、現場で使われている教科書を対象とする分析は欠かせないといえよう。そこで、本節では中国の大学日本語専攻教育現場で広く使われている教科書を選定し、敬語の扱い方を調査・分析することにした。

調査の目的は、主に以下の3点を明らかにすることである。

【1】現場の教科書においては、導入時期、仕組み（種類、性質、表現形式など）に関する説明や練習問題など、敬語はどのように扱われているのか。

【2】教科書における敬語の扱いは、第3章における元学習者や第4章における現場教師の敬語や敬語教育に関する考え方に、どのような影響を与えているのか。

【3】教科書における敬語の扱いは、2冊の『教育要綱』から影響を受けているのか。

5.2.2 調査方法と分析方法

「はじめに」の【中国の大学における日本語専攻教育の教材】でも述べているように、中国の大学日本語専攻教育現場で使われている教科書について、国際交流基金(2014)の調査において、以下のように報告されている。

いくつかの有力大学がシラバス準拠の教材をそれぞれ作成しており、その他の大学はそれを利用することが多い。広く使われている教材としては、『新編日語』（上海外国語大学）、『新編基礎日語』（北京大学）などがある。東京外国語大学の初級用教材（旧版）に中国語の説明をつけたもの（『新編日語』吉林教育出版社、『新日本語』山西教育出版社）も広く使われている。また、1998年に『新日本語の基礎』が、2002年には『みんなの日本語』が、中国国内でも正式に出版された（外語教学与研究出版社）ことから、初級用教材として採用するところもある。

2010年から日本語専攻大学生用の教科書として新シリーズ『基礎日語総合教程』『基

礎日語聴力教程』『基礎日語口語教程』『基礎日語写作教程』等、全12冊（高等教育出版社・北京）の出版が始まった。

中・上級は、旧版の『日語』5-8（上海外国語大学）が広く使用されている他、日本で出版された教材や自主制作教材を使用することが多かったが、高学年用シラバスの制定を受け、『総合日語』（北京大学出版社）などそれに準拠した主教材が出版された。

以上の調査結果に基づき、本節の分析対象を【表10】のように選定した。なお、なるべく新情報を提供するために、改訂版のある教科書に関しては、初版ではなく改訂版を分析対象とした。

【表10】 分析対象の教科書

書名	出版社	冊数	該当年次
『新編日語 ²⁰ （改訂版）』	上海外語教育出版社	全四冊	1・2年次
『新編基礎日語（改訂版）』	上海訳文出版社	全四冊	1・2年次
『新編日語 ²¹ （改訂版）』	吉林教育出版社	全三冊	1・2・3年次
『大家的日語 ²² 』	外語教学与研究出版社	全四冊	1・2年次
『基礎日語総合教程』	高等教育出版社	全四冊	1・2年次
『日語』	上海外語教育出版社	第五～八冊	3・4年次
『総合日語（改訂版）』	北京大学出版社	全四冊	1・2年次

各教科書から、説明や練習問題など敬語に関する記述をすべて抽出し、ページ順にリストアップ（【表11】を参照）した。その後、調査目的に基づいた分析観点に従い、問題点と不足点を分析した。更に、明らかとなった問題点と不足点は、元学習者や現場教師の敬語や敬語教育に関する考え方に与える影響を考察した。

具体的に以下の四つの分析観点を設定した。

²⁰ 書名同様の教科書と区別するために、以下『上海新編日語』と呼ぶ。

²¹ 書名同様の教科書と区別するために、以下『吉林新編日語』と呼ぶ。

²² 『大家的日語』は『みんなの日本語』の中国語版の書名である。

- (1) 敬語に関する内容は主に教科書のどの部分に現れ、どのぐらいのページ数で紹介されているのか。
- (2) 敬語はどのように導入され、種類や性質、表現形式などについて、どのように記述されているのか。
- (3) 敬語の各表現形式に関する説明は、どのように書かれているのか。
- (4) 敬語に関する練習問題には、どのようなものがあるのか。

【表 11】 『上海新編日語』（改訂版）における敬語リストの一部抜粋

出現箇所	項目	内容
第一冊 pp.136-137	接頭辞 「お」「ご」	<p>意味：尊者や尊者に関わる人物や物、動作・状態を表す語彙の前につけ、尊敬・丁寧の気持ちを表す。</p> <p>用法：和語の前に「お」、漢語の前に「ご」を使う。（例外あり）</p> <p>例文：・先生、お電話です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これは先生のお荷物ですか。 ・ご親切、ありがとうございました。
第二冊 pp.32-33	動詞謙讓語 お/ご～する	<p>意味：客・上司・年上の人、及び会話の中で言及している尊敬すべき人物に敬語を使う必要がある。敬語には尊敬語・謙讓語・丁寧語がある。「お/ご～する」は謙讓語の一種類で、自分から尊敬する人に対し行動する際に使う。「お～いたす」はより丁寧である。</p> <p>用法：お+動詞連用形+する　ご+サ変動詞語幹+する</p> <p>例文：・先生、ちょっとお聞きしたいですが…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お茶は私がお入れします。 ・先生をお宅まで車でお送りしました。 ・後でこちらからお電話いたします。
第二冊 pp.34-35	お/ご～ ください	<p>意味：敬語の表現形式の一つで、相手に行動するよう頼む際に使う。</p> <p>用法：お+動詞連用形+ください　ご+サ変動詞語幹+ください</p> <p>例文：・ご協力ください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうぞご利用ください。 ・しばらくお休みください。 ・どうぞお入りください。

5.2.3 調査の結果と分析

(1) 敬語の出現部分及びページ数

まず、敬語に関する主な内容が、どの部分に現れ、どのぐらいのページ数で記述されているのかを調べた結果を【表 12】に示す。分析対象である 7 種類の教科書のうち、大学 1・2 年次の教科書として使われる 6 種類においては、敬語はすべて 1 年次の最後、または 2 年次の最初に当たる部分に集中的に現れていることが分かる。また、全課数（50～80 課）のうち、敬語に関する主な内容は、1、2 課しか記述されておらず、本文会話や練習問題など全部含めても、平均的には全ページ数の 1%前後にとどまっていることが明らかとなった。一方、3 年次の教科書である『吉林新編日語』（第三冊）と 3・4 年次の教科書として使われる『日語』（第 5～8 冊）においては、敬語に関する記述が確認できなかった。このことから、中国の大学専攻用日本語教科書においては、敬語は初級の後半で集中的・短期的に扱われているといえる。

【表 12】 敬語の出現部分及びページ数

書名	出現部分	該当ページ	ページ数
『上海新編日語』 (改訂版)	第二冊/全四冊 (第 33-35 課/全 80 課)	pp. 266-333	A5 判 68/全 1807 ページ
『新編基礎日語』 (改訂版)	第二、三冊/全四冊 (第 29、31 課/全 60 課)	第 2 冊 : pp. 214-231 第 3 冊 : pp. 1-19	B5 判 37/全 1282 ページ
『吉林新編日語』 (改訂版)	第一冊/全三冊 (第 32 課/全 66 課)	pp. 435-445	A5 判 11/全 1608 ページ
『大家的日語』	第二冊/全四冊 (第 49、50 課/全 74 課)	pp. 194-209	B5 判 16/943 全ページ
『基礎日語総合教程』	第二冊/全四冊 (第 26 課/全 60 課)	pp. 163-165	B5 判 3/1116 全ページ
『日語』	出現なし		
『総合日語』 (改訂版)	第二冊/全四冊 (第 20 課/全 50 課)	pp. 111-159	B5 判 39/全 1474 ページ

もちろん、「教科書どおりに指導を行っていない教師もいる」、「日本で出版された教材や自主制作教材を使用する大学もある」などの可能性も否定できない。しかし、第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査で語られた「初級で終わった敬語教育が多い」や「中・上級にわたる敬語教育が必要だ」といった意見と教科書分析の結果と合わせると、中国の大学日本語専攻教育現場においては、敬語教育は初級の後半で集中的に行われている傾向が強いと推察できる。よって、教科書における敬語の出現部分及びページ数は、敬語教育の実施時期や実施期間に大きな影響を及ぼしているといえよう。

(2) 種類や性質、表現形式などに関する記述

次に、分析対象7種類のうち敬語が現れた6種類の教科書から、敬語の導入、種類や性質、表現形式などに関する記述を抽出し、以下に引用する。

[1] 『上海新編日語』（改訂版）

第二冊の第13課より直接引用²³

敬語の使い方

日本語の敬語には、尊敬語、謙譲語、丁寧語があります。尊敬語は話し相手や話題の人に対して、尊敬の気持ちを表わす敬語です。話題の人や、その人に属する物、事、その人の行為、状態について言う場合に用います。尊敬語にはいくつかの型があり、それによって敬意の程度を表わすことができます。謙譲語は、話し手が聞き手に対して、自分自身、または話題になっている自分の身近な者、例えば家族や親しい仲間などの行為をけんそんして言う言い方の敬語で、話し手側(家族、仲間など)を話題の人にするときに使われる場合が多いので、尊敬語と取りちがえないように、特に注意して話さなければなりません。丁寧語は、話題の人に行方を尊敬して言い表わしたり、けんそんして言い表わしたりするのとちがって、ものごとを丁寧に言うことで相手に敬意を表すことばです。また、ものごとについて上品に、やさしく言い表わす場合にも用いられます。

以上、敬語について説明してきましたが、敬語は、時と場合によって使い分けないと、かえって相手に失礼になることもありますから、気をつけて話しましょう。

²³ 直接引用とは、日本語で書かれた内容を教科書から直接に引用することを意味する。

第二冊の第 14 課より翻訳引用²⁴

日本語の動詞には、特殊形の尊敬語動詞と謙讓語動詞を持つものがある。これらの尊敬語動詞や謙讓語動詞を用い、尊敬或いは謙遜の気持ちを表すことができる。

	尊敬語	謙讓語
いる	いらっしゃる・おいでになる	おる
行く	いらっしゃる・おいでになる・お越しになる	参る・伺う・上がる
来る	見える・お見えになる・いらっしゃる・おいでになる・お越しになる	参る・伺う・上がる
する	なさる	いたす
言う	おっしゃる	申す・申し上げる
食べる・飲む	めしあがる・あがる	いただく
見る	ごらんになる	拝見する
思う		存じる
あげる		さしあげる
くれる	くださる	
もらう		いただく・頂戴する
聞く・尋ねる		伺う・承る
訪ねる・訪問する		伺う・お邪魔する
会う		お目にかかる
知っている	ご存知です	存じている
見せる		お目にかける
分かる・引き受ける		承知する・かしこまる

- ・先生はどんなお話をなさいましたか。
- ・課長はまだいらっしゃいますか。
- ・山田先生は鈴木さんをご存知ですか。
- ・わたしは佐藤先生にそう申し上げました。

敬語動詞を使う際、以下のことに注意してください。

(1) 「あがる」や「見える」など敬意程度の低い敬語を除き、その他の敬語は二重に使わないこと。

×これは社長が日本でお求めになられたものです。

○これは社長が日本でお求めになったものです。

²⁴ 翻訳引用とは、中国語で書かれた内容を筆者が翻訳し、引用することを意味する。

(2) 「ごらんなさい」などは部下や年下に使う命令文で、尊敬の意味はない。

○おいしいから、食べてごらんなさい。

○そんなにいやならおやめなさい。

(3) 女性が非敬体の「いらっしゃる?」「なさる?」を使うのは、尊敬の気持ちを表すためではなく、自分の言葉遣いを上品にするためである。

○来週の音楽会どうなさる?いらっしゃる?

第二冊の第15課より翻訳引用

敬語の表現形式

(1) 尊敬語の表現形式

表現形式	例
接頭辞	お、ご、貴
接尾辞	さん、さま、がた
尊敬の名詞	方
尊敬の動詞	いらっしゃる、下さる、見える、おっしゃる、なさる、上がる、召し上がる
尊敬の補助動詞	(て) くださる、(て) いらっしゃる、…なさる、(で) いらっしゃる
敬語助動詞	れる、られる
その他	お(ご) …になる、お(ご) …なさる、お(ご) …下さる、お(ご) …です

(2) 謙讓語の表現形式

表現形式	例
接頭辞	小、拙、弊
接尾辞	ども
謙讓動詞	申す、申し上げる、差し上げる、頂く、参る、致す、存じる、伺う
謙讓の補助動詞	(て) いただく、(て) さしあげる
その他	お(ご) …する、お(ご) …致す、お(ご) …申し上げる、お(ご) …いただく、お(ご) …願う

(3) 丁寧語の表現形式

表現形式	例
丁寧動詞	ござる、おる、参る、致す
丁寧補助動詞	(で) ござる、(て) まいる
丁寧(敬体)助動詞	です、ます

[2] 『新編基礎日語』(改訂版)

日本語における敬語の使い方は非常に発達しているため、敬語は日本語の特徴の一つともいえる。敬語は中国人日本語学習者にとって難点の一つであるといわれている。『基礎段階教育要綱』において、敬語の一般的な表現形式が紹介されているが、ここでは実例を挙げながら簡単に説明する。

●尊敬語：年上や目上の人の動作・行為に対し尊敬の意を表す。

- ・おじさんは、明日上海をたたれる。
- ・おじいさまは、明日上海をおたちになる。
- ・あの方には、お嬢さん（お嬢ちゃん）と息子さん（お坊ちゃん）がいらっしゃる。
- ・「先生、ほんとうに遠いところ、よくおいで下さいました。」

●謙譲語：話し手がへりくだった言い方を用い、間接的に相手を高めることで、敬意を表す。

- ・お荷物は、私どもがお持ちします。
- ・お荷物は、私どもがお持ちいたします。
- ・ご一家のご多幸を心よりお祈り申し上げます。
- ・息子をつれてまいります。
- ・今度お目にかかれる時まで、どうぞお体をお大切に。
- ・紹介状を、早速ご送付いただき、ありがとうございました。

●丁寧語：話し手が聞き手に対し丁寧に話す際に用いる。

- ・わたくしがやってみます。
- ・このお茶は烏龍茶です。
- ・このお茶は烏龍茶でございます。
- ・毎日秋晴れの好日が続いております。
- ・雨が降ってまいりました。
- ・きょうは幸いにお天気がよろしゅうございます。

丁寧語の中では、丁寧助動詞（敬体）です・ますが最も基本的な表現形式である。

「おる」、「まいる」などは丁寧動詞（補助動詞に用いる場合もある）。

丁寧語（対話敬語を指す）さかために、「おる」、「まいる」などは「丁寧語」と呼ばれることもある。わが国の『教育要綱』は三分法を採用し、「丁寧語」と「丁寧語」を統合している。

1. 敬語の種類

外部や他社の人、年上や目上、自分より地位の高い人に敬語を使う。日本語の敬語は3種類に分けることができる。

- 尊敬語 尊敬される人に尊敬の意を表す言葉。
- 謙讓語 尊敬される人に謙遜の言葉遣いと態度で自分のことを述べ、相手に敬意を表す。
- 丁寧語 相手の立場に関係なく、物事を丁寧に、上品に述べる気持ちを表す言葉。

敬語の使い方は、様々な品詞によって表す。

- 名詞、代名詞：あなた 先生 わたし
- 動詞：いらっしゃる おいでになる なさる めしあがる
- 補助動詞：お帰りになる してください していただく
- 助動詞：れる られる
- 接頭辞：ごぶさた ごくろう おたく
- 接尾辞：さん さま
- 接頭、接尾辞：おばあさん ごくろうさま

2. 尊敬を表す尊敬語の使い方

- お～になる 接頭辞+動詞連用形+になる(補助動詞)

へやにお入りになりますか。

ちょっとお待ちになってください。

- 動詞未然形+敬語助動詞れる/られる

先生は何時におたくを出られますか。

先生はもう学生に話されました。

- お(接頭辞)+動詞連用形+です

もうお帰りですか。

荷物がおありですね。

- 尊敬を表す動詞

なさる(「する」の尊敬語)

どうぞお楽になさってください。

何を研究なさっているのですか。

いらっしゃる（「来る/行く/いる」の尊敬語）

先生はいつも何時ごろいらっしゃいますか。（来る）

きょうはどちらへいらっしゃいますか。（行く）

何をなさっていらっしゃいますか。（いる）

おいでになる（「来る/行く/いる/出る」の尊敬語）

先生はもうおいでになっていますか。（来る）

きょうおくさまはおたくにおいでになりますか。（いる）

めしあがる（「飲む/食べる」の尊敬語）

たくさんめしあがってください。

ごらんになる（「見る」の尊敬語）

絵のてらん会をごらんになりますか。

ちょっとさわってごらんなさい。

3. 謙讓語の使い方

●お～いたす お（接頭辞）＋動詞連用形＋いたす

ご～いたす ご（接頭辞）＋（ぶさた）サ変動詞語幹＋いたす（謙讓語）

長くごぶさたいたしております。

午後の6時までお待ちいたします。

●～させていただく

動詞未然形＋せる/させる（使役助動詞）＋て（接続助動詞）＋いただく（謙讓語）

へやを使わせていただきます。

●謙讓語動詞

いたす（「する」の謙讓語）

ごぶさたをいたしております。

まいる（「来る/行く」の謙讓語）

わたしもいっしょにまいります。

申す/申し上げる（「言う/語る」の謙讓語。「申し上げる」は「申す」より高い敬意を表す。）

よろしくおねがい申し上げます。

うかがう（「聞く/問う/たずねる」の謙讓語）

ちよっとうかがいますが，

いただく（「もらう/飲む/食べる」の謙譲語）

先生からは何もいただきませんでした。

[4] 『大家的日語』

基礎知識に関する記述²⁵なし。

[5] 『基礎日語総合教程』

第二冊の第26課より直接引用

敬語表現

敬語表現は大きく分ければ、尊敬語、謙譲語の2種類に分類されます。

☆尊敬語 相手や話題の主、また、その動作、状態やその所有物などを敬い高めて言う語。

尊敬語の形式：

(1) 動詞

① 特別な形

動詞	尊敬語	動詞	尊敬語
行く・来る		見る	ご覧になる
いる	いらっしゃる	着る	お召しになる
食べる・飲む		する	
寝る	お休みになる	くれる	
言う		死ぬ	亡くなる

② お/ご-V-になる

・お帰りになる ・お話になる ・ _____

・ご訪問になる ・ご卒業になる ・ _____

③ V-れる ・待たれる ・ _____

V-られる ・教えられる ・ _____

(2) 名詞

① その名詞で表される人物を高めるもの

こちら・ _____ ・あちら・どちら・どなた・方・令嬢・ _____

—さん・— ・—氏 ・—方 ・—

② 「お」、「ご」を付けてその名詞の広い意味での所有者を高めるもの

²⁵ 『大家的日語・学習輔導用書』を参照。

「お」が付くもの：お時間、お____、お名前、お____、お手紙

「ご」が付くもの：ご住所、ご____、ご結婚、ご____、ご研究

(3) 形容詞

人の状態を表すイ形容詞・ナ形容詞には「お」、「ご」を付けて尊敬語にするもの

「お」が付くもの：お忙しい、お____、お早い、お元気

「ご」が付くもの：ご多忙、ご心配、ご不満、ご____、ご____

☆謙讓語 自分や自分側にあるものをへりくだって言うことで、相対的に相手に敬意を表す語

謙讓語の形式：

(1) 動詞

① 特別な形

動詞	謙讓語	動詞	謙讓語
行く・来る		見る	拝見する
いる	おる	食べる・飲む	
する		知る・思う	存じる
言う	申す	読む	

② お/ごV-する/いたす

・お借りする ・お待ちする ・ _____
・ご説明する ・ご準備いたす ・ _____

(2) 名詞

その人に関する名詞で表される人物を低めるもの

自分：わたくし・私ども・ _____

自分のもの：拙宅・ _____

自分の会社：弊社・小社

※謙讓語Ⅱとして、丁重語（いたします、参る、申す）という分け方もある。

☆丁重語は、動作の相手ではなく、聞き手に対して配慮する敬語です。

聞き手＝先生 話し手＝学生 Aさん＝クラスメート

○学生 「私からAさんに説明いたします」

×学生 「私からAさんにご説明します」

[6] 『総合日語』(改訂版)

日本語の敬語は非常に発達しており、名詞や形容詞、動詞などほぼすべての品詞で、体系的で複雑なシステムとなっている。その中で、動詞の敬語形式は最も複雑かつ多様で、敬語を表す動詞もあれば、文法的な手段で敬意を表す表現形式もある。日本語の敬語には具体的に、尊敬語、謙讓語、丁寧語、美化語がある。ここでは尊敬語と謙讓語の使い方に重点をおいて学ぼう。

●尊敬語 聞き手や話題の人物、物事へ直接に敬意を表す言葉。名詞と動詞が含まれる。

a. 名詞

一部の名詞（人称代名詞も含む）そのものが敬意を表すことができる。例：

この/その/あの/どの方、こちら、そちら、どちら、どなた など。

名詞の前か後に使う接頭辞、接尾辞。例：

お母さん、お父様、お話、お宅、ご都合、お電話、お礼、先生方 など。

接頭辞の「お」と「ご」は意味上における差異はないが、使用上における区別として、一般的に「お」は訓読みの語彙（和語）の前に、「ご」は音読みの語彙（漢語）の前に用いられる。しかし、例外もあり、特に日常生活において使用頻度の高い音読みの語彙の中には、「お」をつける場合もある。例：

お弁当、お手紙、お返事、（「ご返事」もある）

b. 動詞

敬意を表す動詞：

いらっしゃる/いらっしゃいます = 行く・来る・いる

おいでになる/おいでになります = 行く・来る・いる

おっしゃる/おっしゃいます = 言う

召し上がる/召し上がります = 食べる・飲む

ご覧になる/ご覧になります = 見る・読む

なさる/なさいます = する

くださる/くださいます = くれる

例：(1) 先生はいらっしゃいませんか。

(2) 先生はあしたの授業が8時からとおっしゃいました。

(3) どうぞたくさん召し上がって下さい。

(4) 日本でどんな研究をなさいましたか。

(5) きょうの新聞を**ご覧**になりましたか。

●謙讓語 話し手はへりくだった言い方で、間接的に相手や話題の人物へ敬意を表す言葉。

a. 名詞

一部の名詞そのものが謙遜を表すことができる。例：

わたくし、父、母、うち など。

b. 動詞

謙遜を表す動詞：

参る/参ります	=	行く・来る
いたす/いたします	=	する
おる/おります	=	いる
申す/申します	=	言う
いただく/いただきます	=	食べる・飲む・もらう
拝見する/拝見します	=	見る
伺う/伺います	=	聞く・たずねる・訪問する
お目にかかる/お目にかかります	=	会う
存ずる/存じる/存じます	=	知る・思う

例：(1) では、来週の土曜日にいたしましょう。

(2) じゃあ、まず土曜日のご都合を伺いましょう。

(3) わたくしは李東と申します。

(4) もうたくさんいただきました。

(5) 先生にお目にかかることができ、本当にうれしく存じます。

c. 一般的な動詞の謙讓語表現形式

お+和語動詞の第一連用形/ご+漢字動詞の語幹+する・いたす

「お(ご)～いたす」は「お(ご)～する」より謙遜した言い方になる。

例：(1) 先生：じゃあ、あしたの通訳は、李さん、**お願いします**ね。

(2) 李：先生、こちらこそよろしく**お願いいたします**。

(3) 先生：では、あとで**お電話します**ね。

(4) 李：先生、わたしが**ご案内いたします**。

以上の記述を分析すると、以下の四つの問題点が6種類の教科書の間にも共通に見られた。

一つ目の問題点は、敬語の種類に関する記述の不統一さである。敬語の種類に関しては、【表 13】に示しているように二・三・四分法で紹介されており、「敬語の指針」の公表以降、出版または改訂された教科書においても、五分法を取り入れていないことが分かる。最も多く採用されているのは、従来の三分法であり、「丁重語」と「美化語」の扱い方に関しては統一されていなかった。

具体的には、「丁重語」に関しては、「謙讓語」と分類される教科書もあれば、「丁寧語」と分類される教科書もあることが分かった。『新編基礎日語』と『基礎日語総合教程』においては、「丁重語」の概念を導入し、補足知識として名称を挙げているが、先行研究で指摘された「丁重語」の特徴や「謙讓語」及び「丁寧語」との区別については、十分言及できていないことが判明した。「美化語」に関しても、丁寧語と分類されたり、独立して扱ったり、敬語として扱われていなかったりといった統一性のない扱い方が確認された。

以上のことから、中国の大学日本語専攻教育現場においては、「丁重語」と「美化語」の扱い方が矛盾しており、敬語の種類に関する記述が混乱していることが示唆される。それが教師や学習者の敬語に対する理解の妨げとなっていると考えられる。

【表 13】 各教科書における「敬語の分類」

書名	分類	
『上海新編日語』(改訂版)	3種類	尊敬語・謙讓語・丁寧語
『新編基礎日語』(改訂版)	3種類	尊敬語・謙讓語・丁寧語
『吉林新編日語』(改訂版)	3種類	尊敬語・謙讓語・丁寧語
『大家的日語』	3種類	尊敬語・謙讓語・丁寧語
『基礎日語総合教程』	2種類	尊敬語・謙讓語
『総合日語』(改訂版)	4種類	尊敬語・謙讓語・丁寧語・美化語

二つ目の問題点は、「尊敬語」と「謙讓語」の性質に関する記述の狭小化である。各教科書における「尊敬語」と「謙讓語」の性質を見ると、「尊敬」、「敬意」、「敬う」といった言葉が多く使われていることが分かる。蒲谷他(2010)は、敬語の性質と敬語を使うときの意識とは別のものであり、敬語は必ずしも尊敬の気持ちを表す際に使うものではなく、

「人間関係」、「場」、「内容」などの要素とも連動していると指摘した。「相手と距離を置く」や「改まった場面」、「品格を保つ」などの場合にも敬語を用いることがあるため、性質の記述を行う際、これらの要素も考慮に入れる必要があると考える。

第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査においては、来日前「尊敬していない目上の人には、尊敬語や謙譲語を使う必要はない」、「親しくなりたいから、先生にも非です・ます体で話していた」といった考え方を持つ調査協力者が多かったことが明らかとなった。これは教科書における敬語の性質に関する記述に起因していると推察できる。

また、「尊敬語」や「謙譲語」の使用相手として、「目上」や「年長者」、「上位者」、「外部者」が多く挙げられたことから、現場の教科書においては、「人間関係」（「上下関係」と「親疎関係」）が敬語を使うかどうかを判断する主な基準とされている傾向がうかがえる。しかし、前述したように、「人間関係」は敬語を使う際の大事な要素ではあるが、唯一の要素ではないことも学習者に理解してもらう必要があるのではないだろうか。

三つ目の問題点は、表現形式の示し方の不明確さである。種類ごとに一般化された形を表でまとめるタイプ（『上海新編日語』（改訂版））と、種類ごとに使用例文とともに代表例のみを挙げるタイプ（『新編基礎日語』（改訂版）、『総合日語』（改訂版））と、種類ごとに先に一般化された形を示し、後に使用例文を添えるタイプ（『吉林新編日語』（改訂版）、『基礎日語総合教程』）という3種類の記述方法が存在する。

1種類目の表にまとめるタイプの利点としては、分散して習った敬語の各表現形式を最後に種類ごとにまとめることにより、整理が付きやすいことが挙げられる。しかし、具体的な使い方がイメージしにくいという欠点がある。一方、2種類目の使用例文で示すタイプの利点としては、具体例が挙げられているため、一般化されたものより、具体的にどのように使われているのかを示せることである。しかし、全体像が見えないため、それぞれの表現形式の位置付けが把握しにくいという欠点がある。この意味では、両方を持ち合わせた3種類目の示し方は評価できる部分があると思われる。ただ、『吉林新編日語』（改訂版）における示し方を詳しく見ると、「ご～になる」、「お/ご～する」など主要表現形式の欠如といった問題点が見受けられる。また、『吉林新編日語』（改訂版）、『基礎日語総合教程』、『総合日語』（改訂版）に共通して見られるが、尊敬語と謙譲語しか扱われていないため、敬語の表現形式の全体像を描ききれていないのではないかとの疑問点を持つ。

第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査によると、多くの中国人日本語学習者はバリエーションの多い敬語に悩まされており、表現形式の記憶に苦勞していることが明ら

かとなった。教科書における敬語の表現形式の示し方は、学習者の悩み改善につながるのではないかと考えられる。学習者により迅速に、そして正確に表現形式を記憶してもらえ
るための示し方を検討しなければならない。

四つ目の問題点は、敬語の必要性和重要性に関する記述の欠落である。敬語の導入に
関する記述を見ると、大きく二つのタイプがある。いきなり定義や分類から始まるタイプの
教科書（『上海新編日語』（改訂版）、『吉林新編日語』（改訂版）、『基礎日語総合教程』）も
あれば、冒頭に日本語の敬語に関する概説が書かれたタイプの教科書（『新編基礎日語』（改
訂版）、『総合日語』（改訂版））もある。しかし、いずれの教科書においても、敬語の必要
性と重要性に関する記述は見当たらなかった。

このような扱いは、第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査で語られた敬語の
必要性和重要性に対する認識の低さと深く関係していると思われる。教科書には必要性和
重要性について書かれていないため、教科書どおりに指導を行う教師もそれに触れていな
い可能性が高い。その結果、元学習者の多くは、大学で敬語教育を受けても、敬語の必要
性と重要性に気づかず、就職や来日の経験により、初めて敬語が使えないことによる不利
益や使えたことで得たメリットに気づくと考えられる。

「です・ます体以上の敬語ができなくても不自由はない」、「敬語といえば、難しいある
いは複雑という印象しか持たない」などの考えを持つ学習者を多く育ててしまった原因の
一つとして、教科書における敬語の導入に関する記述に問題があることが挙げられるので
はないだろうか。定義や種類などを紹介する前に、まずは「どうして日本語には敬語があ
るのか」、「なぜ敬語を学ぶ必要があるのか」、「敬語ができることによるメリットは何な
か」といったことをしっかり理解してもらう必要があり、そのための記述は欠かせないと
思われる。

(3) 敬語に関する説明項目の構成

敬語のバリエーションが多いため、すべての説明項目を示すことはできない。ここでは、
尊敬語の代表的な表現形式の一つで、また第3章の元学習への調査において困惑点と困難
点としても挙げられた「お/ご~になる」を選定し、各教科書より関連説明を以下に引用し、
分析を行う。

[1] 『上海新編日語』（改訂版）

「お（ご）…になる」で構成された敬語

村松先生は毎朝六時ごろお目覚めになります。

「お+動詞連用形」「ご+サ変動詞語幹」に「になる」を付ける形は、尊敬する目上の人の行為に用いられる。尊敬の程度は「(ら)れる」より高い。ほぼすべての動詞に適用できるが、連用形が1音節の動詞（例えば「見る」など）には使えない。

- ここでちょっとお待ちになってください。
- 先生はまだお帰りになっていません。
- 先生は何時ごろご出勤になりますか。

[2] 『新編基礎日語』（改訂版）

敬語の表現形式：「お～になる」

「お+動詞連用形+になる」は尊敬語の表現形式であり、行為の主体に尊敬の意を表す際に用いられる。例：

- ・お待ちになったでしょう。申し訳ございません。
- ・山田先生は あした おたちになります。
- ・先生は もう お帰りになりました。

[3] 『吉林新編日語』（改訂版）

お～になる 接頭辞+動詞連用形+になる（補助動詞）

へやにお入りになりますか。

ちょっとお待ちになってください。

[4] 『大家的日語』²⁶

お動詞ます形に になります

²⁶ 『大家的日語・学習輔導用書』より引用した。

尊敬動詞より高い敬意を表す。「みます」「ねます」など、「ます」の前に1音節の動詞と第三類動詞はこの形を作れない。また、特殊尊敬語のある動詞に関しては、尊敬動詞と「お動詞ます形になります」より特殊尊敬語が優先的に使われる。

社長は もう お帰りに になりました。

[5] 『基礎日語総合教程』

第二冊の第26課より直接引用

お/ご-V-になる

- ・お帰りになる ・お話になる ・ _____
- ・ご訪問になる ・ご卒業になる ・ _____

[6] 『総合日語』(改訂版)

第四冊の第19課より翻訳引用

和語動詞(Ⅰ・Ⅱ類動詞): お+動詞の第一連用形+になる
 漢語動詞(Ⅲ類動詞「～する」) ご+ 動詞語幹 +になる

- (1) 遠藤先生、日本語教育の道をお選びになったきっかけを教えてくださいませんか。
- (2) これは山田先生がお書きになった日本語文法の本です。
- (3) 李先生はその問題を詳しくご研究になりました。
- (4) 今回のシンポジウムには、遠藤先生もご参加になりました。

以上の説明には、大きくいえば以下の二つの問題点があるといえよう。

第一に、「お/ご～になる」の使い方に関する説明が不十分である。まず、分析対象の6種類の教科書のうち、「お～になる」しか扱っておらず、「ご～になる」に触れていない教科書(『新編基礎日語』、『吉林新編日語』(改訂版)、『大家的日語』)が半数に上ることが分かる。「ご～になる」に関する説明の欠落は、学習者の「ご～になる」の不使用を引き起こしてしまう可能性が高く、尊敬語動詞「お/ご～になる」の使用範囲を狭めてしまう原因となる。

次に、『吉林新編日語』(改訂版)、『基礎日語総合教程』、『総合日語』(改訂版)という3種類の教科書においては、接続ルールと用例しか示されていないことが確認された。接続

ルールに従い、「お/ご～になる」に変形できたとしても、その形はどのような意味や性質を持ち、どのように使われるのかに関する説明がなければ、学習者はイメージしにくいのではないだろうか。母語には体系的な敬語が存在しない中国人日本語学習者にとって、とりわけ詳しい説明が必要である。

更に、第3章の元学習者への調査においては、「お/ご～になる」による困惑点と困難点として、「尊敬語の他のバリエーションとの使い分け」と「適用できる動詞の範囲」という二つが共通して挙げられた。しかし、分析対象の教科書においては、それに関連する説明を記載しているのは、『上海新編日語』（改訂版）と『大家的日語』のみであり、そのいずれも一文程度でまとめており、表面的な説明にとどまっていることが判明した。敬語を見聞きする機会が少なく、語感が育ちにくい海外の学習者にとって、これらの説明は欠かせない重要な情報であるといえよう。

第二に、提示された用例や例文は、場面と切り離されており、実際の運用にはつながりにくい。各教科書に挙げられた例を見ると、「誰が、誰に、どこで、どのように使っているのか」について不明なものがほとんどであった。「先生」が主語である例文は多かったが、場面に関する情報は全く示されていないことが明らかとなった。このような例の示し方からは、表現形式が正しくても実際に使えるかどうか、また人間関係や場面と合わせて適切に使い分けるといった運用面にあまり目が向けられていない傾向が見られる。第3章の元学習者への調査で語られた「表現形式が分かっているけど、どう使うのか自信がない」、「様々な場面で適切に敬語を使い分けられない」といった意見は、上述した例の示し方の欠陥を裏付けているのではないだろうか。

(4) 敬語に関する練習問題

敬語に関し、主にどのような練習問題が作られているのか、その数を示し²⁷、具体例も挙げる。

[1] 『上海新編日語』（改訂版）

第二冊の第13、14課より直接引用

☆ 次の文を読んでください。(敬語関連3問)

²⁷ それぞれの出題名の後に、(～問)という形で示している。

日本語には敬語があります。同じ内容でも、話し相手によって言葉の使い方が変わります。たとえば友達の李さんと話す時には、「李さん、いま出掛けますか。7時ごろには帰りますね」と言いますが、相手が自分の先生だったら「先生、お出掛けですか。7時ごろにはお帰りになりますね」と言います。

☆ ○に仮名を入れなさい。(敬語関連6問)

例：先生はいつもこの時間にご出勤○○○ますか。

☆ 例のように言い換えなさい。(敬語関連10問)

例：本を読みますか。→本をお読みにになりますか。

☆ 例にならって次の文を完成しなさい。(敬語関連3問)

例：尊敬語は()、尊敬の気持ちを表す敬語です。(話し相手)

→尊敬語は(話し相手に対して)尊敬の気持ちを表す敬語です。

☆ ()の語を適切な敬語表現に変えなさい。(敬語関連10問)

例：そちらにかけて(待ってください)。

☆ 傍線を引いたところの表現を適切な敬語表現に言い換えなさい。(敬語関連5問)

例：佐藤：佐藤ですが。

田中：佐藤さんですね。お待ちしておりました。どうぞこちらへ。

☆ 次の質問に答えなさい。(敬語関連3問)

例：先生はご出勤の前にじっくり新聞をお読みにになりますか。

☆ 次の中国語を日本語に訳しなさい。(敬語関連5問)

例：「对不起，这儿是杨李老师家吗？」「是的。」「老师在吗？」「不在。」「是外出了吗？大概什么时候回来？」「我也不太清楚，大概是五点左右吧。」「那我到时再来拜访。」

[2] 『新編基礎日語』(改訂版)

第二冊の第29課、第三冊の第1課より翻訳引用

☆ 言い換え(敬語関連総計37問)

(1) 「なさる」に関する練習5問

例：待つ→お待ちになったでしょう。

(2) 「お/ご～する/いたす」に関する練習10問

例：午後、お訪ねする。→午後、お訪ねしたいと思います。

(3) 「お～になる」に関する練習4問

例：先生はお酒は飲まない。→先生はお酒はお飲みにならない。

(4) 「お～する」に関する練習 4 問

例：そのことは先生にうかがいます。→そのことは先生におうかがいします。

(5) 「で(は)いらっしゃる」に関する練習 10 問

例：山田先生ですか。→山田先生でいらっしゃいますか。

(6) 「～(さ)させていただきます」に関する練習 4 問

例：久しぶりに郷里の味を楽しむ。

→久しぶりに郷里の味を楽しませていただきました。

☆ 表埋め(敬語関連総計 53 問)

(1) 「お～する」に関する練習 15 問

例：うかがう→おうかがいする→おうかがいしない

(2) 「お～になる」に関する練習 16 問

例：飲む→おのみになる→おのみにならない

(3) 「れる/られる」に関する練習 12 問

例：読む→よまれる→よまれた→よまれない→よまれなかった

(4) 尊敬語・謙讓語の表埋め練習 10 問

例：(尊敬語) なさる→する→(謙讓語) いたす

☆ 中文和訳(敬語関連総計 6 問)

例：王老师，您去寄信吗？我去寄吧。

☆ 応用問題(敬語関連総計 8 問)

例：「お父さん、山口先生がね、『明日 3 時ごろ、お宅へ (1) 』と、今日おことづけになりましたよ」

(1) ① いらっしゃる ② たずねる ③ おうかがいします ④ 来られる

[3] 『吉林新編日語』(改訂版)

第一冊の第 32 課より翻訳引用

☆ 言葉の使い方(敬語関連総計 52 問)

(1) 「お～になる」に関する 10 問

例：へやへ お入りに になりますか。

(2) 「れる/られる」に関する 8 問

例：先生は もう 来られましたか。

(3)「なさる」に関する5問

例：家へ お帰りに なってから、何をなさいますか。

(4)「お/ご〜いたす」に関する2問

例：長らく ごぶさたを いたしております。

(5)「めしあがる」に関する4問

例：何を めしあがりますか。

(6)「ごらんになる」に関する4問

例：絵の てらんかいを ごらんになりますか。

(7)「いらっしゃる」に関する5問

例：きょうは どちらへ いらっしゃいますか。

(8)「おいでになる」に関する5問

例：先生は もう おいでに なって いますか。

(9)「まいる」に関する3問

例：わたしは ことしの 四月に インドネシアから まいりました。

(10)その他の敬語に関する6問

例：「ご主人は いらっしゃいますか。」 「はい、おります。」

☆ まるうめ(敬語関連総計9問)

例：先生○ おたく○○ 何○ いう 新聞○ おとり○ なっていますか。

☆ おきかえ(敬語関連総計30問)

例：本を読みますか。→本をお読みになりますか。→本を読まれますか。

☆ わくうめ(敬語関連総計5問)

例：あなたが いらっしゃるなら、わたしも まいります。

☆ 問いと答え(敬語関連総計5問)

例：あなたは 毎日 運動を なさって いますか。

[4]『大家的日語』

第二冊の第49、50課より直接引用

☆ 練習A

(1)尊敬語に関するまとめ表二つ

例：ききます→きかれます

いきます、きます、います→いらっしゃいます

(2)謙讓語に関するまとめ表一つ

例：いきます、きます→まいります

(3)尊敬語の例文 8 文

例：伊藤先生は さっき でかけられました。

あしたは こられません。

(4)謙讓語の例文 12 文

例：私が かさ を お かしします。

ぶちょう おくり

コーヒー いれ

☆ 練習 B

(1)「お/ご～になる」に関する練習 8 問

例：社長は もう 帰りました

→ 社長は もう 帰られました。

(2)「お～になる」に関する練習 8 問

例：先生は 新しい パソコンを 買いました

→ 先生は 新しい パソコンを お買いに になりました。

(3)「お～ください」に関する練習 8 問

例：この ボールペンを 使ってください

→ この ボールペンを お使い ください。

(4)「お/ご～する」に関する練習 12 問

例：手伝います → お手伝いしましょうか。

(5)尊敬語/謙讓語に言い換える練習 12 問

例：いつ 佐藤さんに 会いましたか(きのう)

→ いつ 佐藤さんに お会いに になりましたか。

……きのう 会いました。

(4)尊敬語の質問に答える練習 8 問

例：どのぐらい 日本に いらっしゃいますか。(3年)

→ 3年 います。

(5)「話題人物」に尊敬語を使う練習8問

例：田中さんは もう 来ましたか

→ 田中さんは もう いらっしゃいましたか。

(6)「～てもよろしいでしょうか」に関する練習4問

例：お茶を飲みます → お茶を いただいても よろしいでしょうか。

☆ 練習C

(1)尊敬語に関する会話練習3問

例：A：①会社を やめられたそうですね。

B：ええ。

A：いつ ①おやめに なったんですか。

B：②2ヶ月まえに ①やめました。

1) ① 新しい 仕事を 始めます

② 先月

(2)謙讓語に関する会話練習3問

例：A：①重そうですね。

②お持ちしましょうか。

B：すみません。お願いします。

1) ① 忙しそうです

② 手伝います

☆ 問題

(1)尊敬語の()埋め問題8問

例：社長は 何か スポーツを (されます) か。

…ゴルフを します。

(2)謙讓語の書き換え選択問題4問

例：お荷物、重そうですね。(持ちます→お持ちし) ましょう。

(3)尊敬語/謙讓語の線埋め問題8問

例：この 本を 書いたのは だれですか。

…わたしの 研究室の 先生が お書きに なりました。

(4)尊敬語/謙讓語の会話文練習5問

例：A：はい、IMC (でございます)

B: 田中と () が、ミラーさんは () か。

(5) 読解問題文章二つ

例: 省略

[5] 『基礎日語総合教程』

第二冊の第11課より直接引用

☆ 表埋め (敬語関連総計9問)

(1) 尊敬語に関する練習問題5問

例: 行く・来る → いらっしゃる (尊敬語)

(2) 謙譲語に関する練習問題4問

例: 行く・来る → いらっしゃる (謙譲語)

☆ 線埋め (敬語関連総計19問)

(1) 尊敬語に関する練習問題15問

例: こちら・_____・あちら・どちら・どなた・方・令嬢・_____

(2) 謙譲語に関する練習問題4問

例: 自分: わたくし・私ども・_____

[6] 『総合日語』 (改訂版)

第二冊の第20、21課より翻訳引用

☆ 文型練習

(1) 尊敬1 (8問)

例: する → なさる → なさいます

(2) 尊敬2 (4問)

例: 辞書を買う (先生)

→ わたしは辞書を買いました。先生もお買いになりました。

(3) 尊敬3 (4問)

例: 田中先生は歩くのが速い

→ 歩くのがお速いですね。

(4) 謙譲1 (8問)

例: 来る → 参る → 参ります

(5)謙讓 2 (8問)

例： スーツケースを持つ (わたし)

→スーツケースをお持ちします/お持ちいたします。

(6)V てくださいませんか (4問)

例： 手紙を出す → 手紙を出してくださいませんか。

(7)お/ごV ください (4問)

例： 京料理を楽しんでください

→京料理をお楽しみください。

(8)くださる・いただき (4問)

例： 先生⇒ (京劇の本) ⇒ 姉

→先生は姉に京劇の本をくださいました。

→姉は先生に京劇の本をいただきました。

(9)さしあげる (4問)

例： 母：これ、京劇のチケットです。どうぞ。

絵の先生：あ、これ見たかったんです。どうもありがとうございます。

→母は絵の先生に京劇のチケットを差し上げました。

(10)V てくださる (4問)

例：友達のお父さん：アルバイトを紹介しましょうか。

わたしの弟：ありがとうございます。よろしくお願いします。

→友達のお父さんが弟にアルバイトを紹介してくださいます。

(11)V ていただく (4問)

例：わたし：あのう、すみませんが、スピーチの原稿を見せてくださいませんか。

先生：ええ、いいですよ。…はい、直しました。

→(わたしは) 先生にスピーチの原稿を見ていただきました。

(12)V てさしあげる (4問)

例：わたし：先生、お荷物をお持ちしましょうか。

先生：そうですね。じゃあ、すみませんが、お願いします。

わたし：はい。

→(第三者に陳述) わたしは先生のお荷物を持って差し上げました。

☆ 会話練習

(1) 尊敬語に関する練習 12 問

例： 来週のシンポジウムに参加する

先生：Aさんは、来週のシンポジウムに参加しますか。

Aさん：はい、参加いたします。先生も参加なさいますか。

先生：ええ。

(2) 謙譲語に関する練習 7 問

例： ① 来週、日本からお客さんが来るんですよ

② わたしが大学を案内する

先生：① 来週、日本からお客さんが来るんですよ。

学生：では、② わたしが大学をご案内します/いたします。

先生：ありがとう。

☆ 発展練習（ロールプレイ 2 問）

例：次のカードを使って、ロールプレイをしてください。

ロール A

あなたは日本語を勉強しています。日本語のクラスで今週末パーティーを計画しています。日本語の先生も誘いたいです。先生に電話をして、話します。

① パーティーの計画を伝える

② 先生を誘う

③ 先生の都合を聞く

ロール B

あなたは日本語の先生です。仕事が忙しく、今週の土曜日は1日仕事をしなくてはなりません。日曜日には仕事はありません。学生から電話がかかります。

☆ 読解文（二つ）

例：旅行のパンフレット（省略）

お礼の手紙：先生へ（省略）

以上の練習問題を分析した結果、以下の三つの傾向が見られた。

一つ目に、模範例にならい、敬語の表現形式に言い換える・書き換えるといった練習が最も多いことが浮き彫りとなった。これらの練習問題は、明確な人間関係も場面も設定されておらず、単文のみで提示され、いわゆるオーディオリンガル法に基づいた機械的なもの

のである。無論、文法形式を練習することも大切であるが、それだけでは日常生活の様々な場面で様々な人間関係に合わせて適切に敬語を運用することができるとは限らないという事は、第3章の元学習者と第4章の現場教師の調査において多く語られている。このような言い換え・書き換え練習は学生の関心を文法形式に向けさせ、実際のコミュニケーションに必要とされる運用能力の養成において限界を感じる。

二つ目に、人間関係が設定された練習問題を見ても、先生と学生の会話がほとんどであり、場面の種類が非常に乏しいことが明らかとなった。確かに大学における学習者にとって、最も身近にいる敬語の使用相手は教師かもしれない。しかし、卒業後社会に出たら、様々な場面で敬語が必要とされるため、大学の授業で予習として事前に触れる必要がある。就職活動の面接や会社での会話など、練習問題を通し、様々な場面における敬語の使用例を示す工夫が求められるだろう。

三つ目に、言い換え・書き換へのほかに、穴埋めや質問応答、中文和訳のように、各教科書の出題形式がほぼ同様であることが確認された。この類の練習問題は、いずれも決められた問いを受動的に答えなければならないため、教師が主体である講義式授業のイメージが強いといえよう。しかし、第3章の元学習者への調査においては、「自分が受けた伝統的な講義式による敬語授業の不満」や「講義式授業と活動型授業を有効に統合すべき」といった意見が飛び交っている。今後学習者が主体的に使いたい相手や見えそうな場面を設定し、敬語が話せる活動型練習問題を取り入れるべきであることが示唆される。

5.2.4 調査を通じて見えたこと

本節では、中国の大学日本語専攻教育の現場において、広く使われている教科書7種類全27冊を対象とし、敬語がどのように扱われているのかを調査・分析した。

まず、敬語に関する主な内容の出現部分、及びページ数に関しては、7種類の教科書を分析した結果、敬語は主に初級の後半で集中的・短期的に現れていることが判明した。これは第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査で語られた敬語教育の実施時期と実施期間とほぼ一致していることが確認された。『基礎段階教育要綱』においても、敬語のすべての表現形式が2年次の学習項目となっているため、教科書はその影響を受けていることが推察できる。しかし一方で、『高学年段階教育要綱』において示されている敬語教育に関する方針は、教科書に反映されていないことが分かる。

次に、敬語が扱われている6種類の教科書における敬語の仕組み（種類、性質、表現形

式など)の説明については、「敬語の種類に関する記述の不統一さ」、「尊敬語」、「謙譲語」の性質に関する記述の狭小化、「表現形式の示し方の不明確さ」、「敬語の必要性と重要性に関する記述の欠落」という四つの問題点が共通に見られた。これらの問題点は、第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査で語られた敬語に対する考え方と重なっているため、学習者の理解を妨げている可能性が高いことが示唆される。また、これらの問題点は、いずれも2冊の『教育要綱』における敬語に関する記述の少なさや不正確さと関係していると考えられる。

更に、数多くの敬語バリエーションの中から、尊敬語動詞一般形の「お/ご~になる」を取り上げ、関連記述を分析した。その結果、「使い方に関する説明の不十分」や「場面との関連性の薄さ」という二つの問題点が見られた。いずれも第3章の元学習者と第4章の教師への調査においても語られた問題点であることが確認された。これは表現形式に重点が置かれており、運用には目を向けていないという『基礎段階教育要綱』における敬語教育の方針から生じた問題点であるといえよう。

最後に、練習問題に関しては、「模範例にならい、敬語の表現形式に言い換える・書き換えるといった練習が最も多い」、「先生と学生の会話がほとんどであり、場面が非常に乏しい」、「言い換え・書き換えるのほかに、穴埋めや質問応答、中文和訳といった出題形式に集中している」などの傾向が見られた。これも第3章の元学習者と第4章の現場教師への調査で語られた敬語教育の指導内容と合致していることが明らかとなった。これも『基礎段階教育要綱』における敬語教育の方針に起因していると思われる。

以上のことから、中国の大学日本語専攻教科書における敬語に関する記述には、様々な問題点と不足点が存在していることが判明した。これらの問題点と不足点の多くは、第3章の元学習者と第4章の教師への調査で得られた意見と重なっているため、教科書は敬語教育の実施に大きな影響を与えていることがうかがえる。同時に、教科書における敬語の扱い方は、2冊の『教育要綱』から大きく影響を受けていることも確認された。

もちろん、教科書に存在しているこれらの問題点と不足点を補い、改善するには、現場教師の役割も期待される。しかし、第4章の現場教師への調査において語られたように、様々な悩みを抱えている教師らにとって、現状ではなかなか難しいようである。そのため、今後、2冊の『教育要綱』における敬語の扱われ方を見直すとともに、問題点と不足点を改善できるような教科書を開発する必要性を強く感じた。

第3節 教師用指導書の分析調査

5.3.1 調査背景と調査目的

前節においては、教育現場で広く使われている教科書6種類における敬語の扱い方を分析し、様々な問題点と不足点を指摘した。しかし、第4章の現場教師の語りによると、敬語を指導する際には、教科書だけでなく教師用指導書を参考にすることもあるということが確認された。

そこで、本節においては、中国の大学日本語専攻教育に携わっている教師の多くが参考にしてと思われる教師用指導書における敬語の扱い方を調査・分析する。

目的は、主に以下の2点を明らかにすることである。

【1】5.2.2で選定された教科書に対応する教師用指導書において、敬語はどのように扱われているのか。

【2】教師用指導書における敬語の扱いは、5.2.3で述べた問題点と不足点を補うことができるのか。

5.3.2 調査方法と分析方法

5.2.2で挙げた敬語が扱われている6種類の教科書のうち、『吉林新編日語』以外の5種類は教師用指導書がある。ただ、『新編基礎日語(改訂版)』の教師用指導書は絶版となったため、本節では、以下の4種類全16冊を分析対象とする。

【表14】 分析対象の教師用指導書

書名	出版社	冊数
『上海新編日語(改訂版)教学指南』	上海外語教育出版社	全四冊
『大家的日語・学習輔導用書』	外語教学与研究出版社	全四冊
『基礎日語総合教程・教学参考書』	高等教育出版社	全四冊
『総合日語(改訂版)教師用書』	北京大学出版社	全四冊

分析観点は、以下の二つである。

- (1) それぞれの教師用指導書において、敬語はどのように記述されているのか。
- (2) それぞれの教師用指導書における敬語の扱い方には、それぞれ対応する教科書で見られた問題点と不足点を補うような記述があるのか。

5.3.3 調査の結果と分析

[1] 『上海新編日語（改訂版）』の教師用指導書

まず、第2節に示したように、『上海新編日語（改訂版）』（全四冊）においては、敬語に関する説明は第二冊の第13課～15課に集中的に現れている。これに対応する『新編日語（改訂版）教学指南』第二冊の部分を調べてみると、敬語に関する以下の記述が見られた。下線を引いた部分は教科書より補足した内容である。

第二冊の第13課より翻訳引用

教育時間：8コマ²⁸

教育目的と到達目標：日本語における敬語の重要な位置付けと敬語に含まれる日本文化を理解し、敬語助動詞と敬語の文型を学ぶ。また、敬語のいくつかの文型の言い換えを練習し、敬語を使いこなす。

教育の基本内容：敬語助動詞と敬語の文型

教育の重点と難点：敬語助動詞と敬語の文型

文法・文型の解説：

1、日本語の敬語

解説：

敬語とは話し手が聞き手や第三者に敬意を表すために用いる表現形式である。日本語敬語には、尊敬語、謙譲語、丁寧語という3種類がある。

尊敬語は、話し手が聞き手や話題の人物に対して尊敬の気持ちを表す際に使われる。

例：◇田中さんは今日はこちらへいらっしゃらないそうです／听说田中先生今天不到这里来。

謙譲語は、話し手がへりくだった態度で、自分または自分側の人物の行為及び関連する物事を言う際に使われる。自分または自分側の人物にしか使えない。例：◇明日お伺いす

²⁸ 中国の大学では、1コマは40～50分である。

るつもりです／我打算明天去看您。

丁寧語は話し手が丁寧に、改まって物事を言うことで聞き手に尊敬の気持ちを表す際に使われる。例：「です」、「ます」など。例：◇あそこは大学の図書館です。わたしはよくあそこで本を借ります／那是大学的图书馆，我经常在那里借书。

2、敬語助動詞「れる」、「られる」

解説：

「(ら)れる」は敬語助動詞である。動詞の未然形に付け、一般の動詞を敬語にする。尊敬する人や目上の人への行為に対する尊敬の気持ちを表す。

接続と用例：

五段動詞未然形+れる 行く→行かれる 読む→読まれる
一段未然形+られる 見る→見られる 出かける→出かけられる
サ変動詞未然形+れる 研究する→研究される 出席→出席される
カ変未然形+られる 来る→来られる

例：◇この方は日本に来られたばかりです／他刚来到日本。

◇田中さんのお父さんは毎朝、散歩されるそうです／听说田中的父亲每天早晨散步。

◇高橋社長はあす天津をたたれる／高桥社长明天动身离开天津。

「れる/られる」の使い方:

①受身を表す。

例：◇兄は怪我をして、病院へ連れていかれました／哥哥受了伤，被送往了医院。

◇寮を出るとき、友達に呼び止められて、用事を頼まれました／从宿舍出来时，朋友叫住我，托我为他办件事。

②可能を表す。

例：◇この動物園では、子供は無料でイルカのショーが見られる／在这个动物园，孩子能免费观看海豚表演。

◇近頃は体が弱くなって、リュックサックさえ持ち上げられません／最近身体弱了，连背包也拿不起来。

③自発を表す。

例：◇月を見ていると、国のことが思い出される／一看到月亮，就不由得想起家乡。

◇何となく肌寒さが感じられる／不知为何，总感到有些凉意。

3、お(ご)～になる

解説：

「お」＋動詞連用形、「ご」＋サ変動詞語幹の後ろに「になる」を付ける、尊敬語動詞になる。尊敬の程度は「(ら)れる」より高い。

接続と用例：

お＋動詞連用形＋になる 読む→お読みになる 教える→お教えになる

ご＋サ変動詞語幹＋になる 心配する→ご心配になる 出席する→ご出席になる

例：◇田中先生は8日にイギリスからお帰りになります／田中老师8日从英国回来。

◇お客さんがお見えになったらすぐ始めましょう／客人一来马上就开始吧。

◇ご家族の方は半額の会費ですすべてのスポーツ施設をご利用になれます／家属可以交半额的会费使用所有的体育运动设施。

4、補助動詞「なさる」

解説：

「お」＋動詞連用形、「ご」＋サ変動詞語幹の後ろに「なさる」を付けると、尊敬語になる。接頭辞の「お」、「ご」を省略する場合もある。省略の形は尊敬の程度が比較的低い。「なさる」は五段動詞であるが、「ます形」は「なさいます」である。

接続と用例：

お＋動詞連用形＋なさる 喜ぶ→お喜びなさる やめる→おやめなさる

ご＋サ変動詞語幹＋なさる 出発する→ご出発なさる 訪問する→ご訪問なさる

例：◇この本をお読みなさるのでしたら、お貸しいたします／你要是读这本书的话，我借给你。

◇お母さんには早くお電話なさった方がいいと思います／我想你还是早点给你妈妈打电话为好。

◇会長が明日10時にこちらをご訪問なさるそうです／据说会长明天明天10点访问这里。

◇そんなにご心配なさらないでください／请你不要那么担心。

5、お(ご)～です

解説：

「お」＋動詞連用形、「ご」＋サ変動詞語幹の後ろに「です」を付けると、尊敬語になる。この形で表現される行為は持続的な状態の場合が多い。

例：◇林先生は信州に別荘をお持ちだそうですよ／听说林老师在信州有座别墅。

◇この問題について、あなたはどのようにお考えですか／对这个问题你怎么看？

◇校長先生は今日の会議にはご欠席です／校长先生不出席今天的会议。

◇(フーズトフードの店でお持ち帰りですか、こちらでお召し上がりですか／(在快餐店)您是带回去，还是在这儿用？

◇この本をお持ちでない方は受付でお求めください／没有本书的人请到接待处索取。

第二冊の第14課より翻訳引用

教育時間：8コマ

教育目的と到達目標：日本語における尊敬語と謙讓語の重要な位置付けと敬語に含まれる
日本文化を理解し、接客の言いまわしを身に付ける。また、尊敬語
動詞と謙讓語動詞の文法を学び、両者の区別を理解し、使いこなす。

教育の基本内容：尊敬語動詞と謙讓語動詞、丁寧語の「ござる」、補助動詞の「いらっし
やる」。

教育の重点と難点：尊敬語と謙讓語の使用、尊敬語動詞と謙讓語動詞、丁寧語の「ござる」。

文法・文型の解説：

1、尊敬語動詞と謙讓語動詞

解説：

日本語には尊敬語動詞と謙讓語動詞を持つ動詞が存在する。尊敬語動詞は尊敬の意を、謙讓語動詞は謙遜の意を表すことができる。

例：◇先生のおっしゃったとおりにいたすつもりです／我准备按老师说的去做。

◇社長は来月中旬にニューヨークへおいでになる予定です／社长计划下月中旬去纽约。

◇そんなにお酒を召し上がったら、体に毒ですよ／喝那么多酒对身体有害啊。

◇田中先生は今度の試験は難しいとおっしゃいました／田中老师说这次考试很难。

◇先生、昨日の開会式、テレビでご覧になりましたか／老师，您在电视里看昨天的开幕式了吗？

◇おととい先生のお宅に伺いました。そして、食事をいただきながら先生のお話を伺いました／前天我拜访了老师家。而且一边吃饭，一边听了老师的讲话。

◇先週、展覧会で田中先生のお書きになった絵を拝見しました／上星期我在展览会上看到了田中老师画的画。

2、丁寧語「ござる」

当日、お客様は何時ごろお着きでございますでしょうか。

はい、よろしゅうございます。

「ございます」は丁寧補助動詞である「ござる」と助動詞の「ます」によって構成される。「です」より丁寧である。

(1) 名詞、形容動詞語幹＋でございます

- このあたりは買い物にはとても不便でございます。
- セーターはみなこのぐらいのお値段でございます。
- 課長の青木でございます。

(2) 形容詞連用形＋でございます

形容詞に「ございます」を使う際、語幹の最後にある仮名がどの段であるかにより、4種類に分ける。

ア段 早い→お早うございます	語尾の仮名→オ段仮名＋うございます
イ段 よろしい→よろしゅうございます	語尾の仮名→ゆ＋うございます
ウ段 暑い→暑うございます	い→う＋ございます
オ段 広い→広うございます	い→う＋ございます

- 先生、おはようございます。
- やり方はいつものようでよろしゅうございます。
- 朝と夜は寒うございます。
- この部屋は広うございます。

形容詞と「ござる」の間に提示助詞「は」「も」を入れる場合、或いは「ございます」の否定形「ございません」を用いる場合、形容詞は連用形「く」を使います。「あります」という表現形式より丁寧である。

- かなり暑くはございますが、ご心配は要りません。
- このりんごはあまり甘くございません。

(3) 存在動詞「ある」の丁寧語

●まだ時間がございますから、どうぞゆっくり。

●お手紙はこちらにございます。

補足：

例：◇田中でございます。どうぞよろしくお願ひします／我叫田中，请您多多关照。

◇(電車の放送)次は新宿、新宿でございます／(电车内的广播)下站是新宿、下站是新宿。

◇こちらのほうがお得でございます／您买这个合算。

◇おはようございます。今日は朝からお暑うございますね／早上好，今天从早上起就很热啊。

◇新年おめでとうございます／新年好；恭贺新年

◇この間の旅行はとても楽しゅうございました／这次的旅行很愉快。

◇色々お話を伺い、たいへんおもしろうございました／听您讲了很多，真有趣。

◇どうもありがとうございました／十分感谢。

◇わたくしは少しもうらやましくございません／我一点也不羡慕。

◇この部屋はあまり涼しくもございません／这个房间也不太凉快。

◇客：このシャツ、Lサイズはありますか／顾客：对不起，这种衬衫有大号的吗？

店員：はい、ございます／服务员：是的，有。

◇お忙しいところをお邪魔して、申し訳ございません／百忙之中打搅您，实在抱歉了。

◇皆様お変わりございませんか／大家一切都好吗？

3、補助動詞「いらっしゃる」

解説：

「いらっしゃる」は尊敬を表す補助動詞である。「体言・形容詞語幹＋で」、または「動詞連用形＋で」の後ろに付けると、「です」、「である」、「～ている」の尊敬語になる。

例：◇雨が降りそうですから、傘を持っていらっしゃったほうがいいでしょう／好像要下雨，所以还是带伞去为好。

◇課長はわたしの家の近くに住んでいらっしゃいます／科长住在我家附近。

◇お元気でいらっしゃいますか／您身体好吗？

◇食べ物は何がお好きでいらっしゃいますか／吃的东西您喜欢什么？

◇こちらは山川さんの奥さんでいらっしゃいます／这位是山川先生的夫人。

4、～させていただく

解説：

敬語表現形式の一つである。話し手が実行したいことについて、相手の同意や許可を求める際に使われる。中国語の「请允许我…」と似ている。より丁寧な言い方は「～せ（させ）ていただけませんか」または「～せ（させ）ていただけないでしょうか」である。

例：◇それでは、自己紹介させていただきます／那么，请允许我做一下自我介绍。

◇本日休業させていただきます／今日(本店)休息。

◇申し訳ありませんが、今日は少し早めに帰らせていただきたいのですが／对不起，希望能允许我今天早点回去。

◇すみませんが、電話を使わせていただけませんか／对不起，我能用一下电话吗？

第二冊の第15課より翻訳引用

教育時間：6コマ

教育目的と到達目標：面接、接待や電話応対といった場面の知識と言葉遣いを学び、使いこなす。

教育の基本内容：尊敬語、謙讓語と丁寧語の使い方

教育の重点と難点：尊敬語の使い方

文法・文型の解説：

3、敬語の表現形式：

(1) 尊敬語の表現形式

表現形式	例
接頭辞	お、ご、貴
接尾辞	さん、さま、がた
尊敬の名詞	方
尊敬の動詞	いらっしゃる、下さる、見える、おっしゃる、なさる、上がる、召し上がる
尊敬の補助動詞	(て) くださる、(て) いらっしゃる、…なさる、(で) いらっしゃる
敬語助動詞	れる、られる
その他	お(ご) …になる、お(ご) …なさる、お(ご) …下さる、お(ご) …です

(2) 謙讓語の表現形式

表現形式	例
接頭辞	小、拙、弊
接尾辞	ども
謙譲動詞	申す、申し上げる、差し上げる、頂く、参る、致す、存じる、伺う
謙譲の補助動詞	(て) いただく、(て) さしあげる
その他	お(ご) …する、お(ご) …致す、お(ご) …申し上げる、お(ご) …いただく、お(ご) …願う

(3) 丁寧語の表現形式

表現形式	例
丁寧動詞	ござる、おる、参る、致す
丁寧補助動詞	(で) ござる、(て) まいる
丁寧(敬体)助動詞	です、ます

以上に示したように、『新編日語(修订本)』の教師用指導書は教科書と比べ、補足された内容は主に二つあるといえよう。一つは教科書には書いていない教育時間や教育目標、教育内容など、教師が敬語を教える際には、指導の基準である。もう一つは教科書に挙げられた用例以外の例文である。しかし、これらの補足記述は前節で明らかにした教科書の問題点と不足点の解決にはつながらないことが分かる。

[2] 『大家的日語』の教師用指導書

『大家的日語』では第二冊の第49課と第50課に敬語が扱われているが、文型→例文→会話→練習が示されただけで、説明は一切なかった。それに対し、『大家的日語・学習輔導用書』においては、具体的な記述が行われている。

第二冊の第49課より翻訳引用

1. 敬語

「敬語」は話し手が聞き手や話題の人物に敬意を表すために用いる。話し手は、聞き手や話題の人物との社会的人間関係を考慮し、敬意を表すべき人に「敬語」を用いなければならない。敬語の使用は主に三つの要素に関わる。(1) 話し手の年齢や社会的地位が低い場合、上の人に対し敬意を表すために敬語を使う。(2) 初対面の際、話し手と聞き手の関係が親しくない場合、聞き手に対し敬意を表すために敬語を使う。(3) 「ウチ・ソト」の関係も考慮しなければならない。「ウチ」とは、家族や会社など話し手が属するグループに属

する人を指す。「ソト」とは、話し手の属するグループに属さない人を指す。話し手は「ソトの人」に「ウチの人」のことについて話す際、「ウチの人」を自分同様に扱う必要があるため、地位の高い「ウチの人」に対しても敬意を示す敬語を使ってはならない。

2. 敬語の種類

「敬語」は大まかに「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」の三つに分けられる。

3. 尊敬語

「尊敬語」は話し手が聞き手や話題の人に敬意を表すために、聞き手や話題の人の行動や状態、所有物などを高めて表す。また、聞き手や話題の人に属する物や人などにも使える。

1) 動詞

(1) 尊敬動詞

動詞の受身動詞と同じ形で尊敬の意味を表す。第二類動詞²⁹に属する。

① 中村さんは 7時に 来られます。

② お酒を やめられたんですか。

(2) お動詞ます形に になります

尊敬動詞に比べ高い敬意を表す。「みます」「ねます」など、「ます」の前に1音節の動詞と第三類動詞はこの形が使えない。また、特殊尊敬語のある動詞に関しては、尊敬動詞と「お動詞ます形になります」より特殊尊敬語を優先に使う。

③ 社長は もう お帰りに になりました。

(3) 特殊尊敬語

それ自身が尊敬の意味を備えている動詞があり、「お動詞形になります」と同レベルの敬意を表す。

④ ワット先生は 研究室に いらっしゃいます。

⑤ どうぞ 召し上がって ください。

[注]「いらっしゃいます」「なさいます」「くださいます」「おっしゃいます」は第一類動詞であり、変形の際「ます形」以外は「ら行」動詞として扱う。

⑥ ワット先生は テニスを なさいますか。

²⁹ 第一類（Ⅰ類）動詞とは、五段動詞を指す。

第二類（Ⅱ類）動詞とは、一段動詞を指す。

第三類（Ⅲ類）動詞とは、サ変動詞と「来る」を指す。

…いいえ、なさらないと 思います。

(4) **お動詞ます形 ください**

依頼や勧誘の際敬意を表すための表現である。

⑦ あちらから お入り ください。

[注] (3) の特殊動詞はこの形で使うことができないが、「めしあがります」は「おめしあがり ください」、「ごらんになります」は「ごらんください」とも言えます。

2) 名詞・形容詞・副詞

動詞以外に、一部の名詞、形容詞と副詞の前に「お」か「ご」をつけ、尊敬語にすることができる。「お」をつけるか、「ご」をつけるかの一般的な基準として、日本固有の和語の前には「お」、中国からの漢語の前には「ご」をつける。

「お」をつける例：	「ご」をつける例：
(名詞) お国、お名前、お仕事 (な形容詞) お元気、お上手、お暇 (い形容詞) お忙しい、お若い	(名詞) ご家族、ご意見、ご旅行 (な形容詞) ご熱心、ご親切 (副詞) ご自由に

第二冊の第 50 課より翻訳引用

1. 謙譲語

「謙譲語」は話し手が聞き手や話題の人に対して敬意を表すために、話し手自身の行為を低めて述べる表現である。敬意を示す相手は目上の人か「ソトの人」である。また、話し手は「ソトの人」に対し、「ウチの人」について話す際も謙譲語を使う。

1) **お/ご～する**

(1) **お動詞 (Ⅰ、Ⅱ類) ます形します**

- ① 重そうですね。お持ちしましょう。
- ② 私が 社長に スケジュールをお知らせします。
- ③ 兄が 車で お送りします。

①は聞き手に、②は話題の人物に、話し手自身の行為を低めて述べる表現である。また、③の行為者は話し手自身ではなく、話し手に属する「ウチの人」である。

なお、「みます」「います」など、「ます」の前に1音節の動詞と第三類動詞はこの形が使えない。

(2) **ご動詞 (Ⅲ類)**

- ④ 江戸東京博物館へ ご案内します。

⑤ きょうの 予定を ご説明します。

これは第三類動詞に使う表現形式である。④と⑤の動詞以外に、「しょうかいします」、「しょうたいします」、「そうだんします」、「れんらくします」などもある。しかし、「でんわします」、「やくそくします」などは例外であり、「ご」ではなく「お」を使う。

[注] (1) と (2) は、行動主体以外に行動対象もあり、その行動対象に敬意を示す場合にしか使えない。次の例文のような行動対象が存在しない場合使えない。

× 私は 来月 国へ お帰りします。

2) 特殊謙讓動詞

それ自身が尊敬の意味を備えている動詞もある。例：

(1) 話し手の行為は聞き手と話題の人物と関わる場合

⑥ 社長の 奥様に お目にかかりました。

⑦ あしたは だれが 手伝いに 来て くれますか。

…私 が 伺います。

(2) 話し手の行為は聞き手と話題の人物と無関係の場合

⑧ ミラーと 申します。

⑨ アメリカから 参りました。

2. 丁寧語

「丁寧語」は話し手が聞き手に敬意を示すために用いる丁寧な表現である。

1) ございます

「ございます」は「あります」の丁寧語である。

⑩ 電話は 階段の 横に ございます。

2) ～でございます

「～でございます」は「～です」の丁寧語である。

⑨ はい、IMCで ございます。

…パワー電気の シュミットですが、ミラーさん、お願いします。

3) よろしいでしょうか

「よろしいでしょうか」は「いいですか」の丁寧語である。

⑩ お飲み物は 何が よろしいでしょうか。

…コーヒーを お願いします。

⑬ この パンフレットを いただいても よろしいでしょうか。

以上の記述を見て分かるように、『大衆的日語』の『学習輔導用書』においては、敬語の分類や性質、表現形式など、詳しい記述が行われている。しかし、これらの記述を分析してみると、他の教科書に書かれていることとほぼ同様であり、前節で指摘した問題点と不足点を補う記述は見られなかった。

[3] 『基礎日語総合教程』の教師用指導書

『基礎日語総合教程』においては、敬語は主に第二冊の第11課で穴埋めという形で記載されている。その形に合わせ、『基礎日語総合教程・教学参考書』も第二冊の第11課で穴埋めの回答を示しているほか、以下の記述は教科書にはないが、『教学参考書』にはあった。

第二冊の第11課より翻訳引用

整理：敬語表現。

教師の活動：

1. 今まで出てきた敬語表現をまとめる。
2. 敬語の分類と敬語の運用を把握する。

学生の活動：

- 考える：敬語の分類と意義。
- する：穴埋めと線埋めを通し、記憶と整理を強化する。
- 話す：文を作ってみる。

(1) お/ごVする

基本：動詞の敬語（謙讓語）の表現形式には、「お・ご」＋動詞連用形＋する」がある。

動詞の主体は第一人称、または第一人称と同一立場にいる人である場合が多い。

・書類は明日お渡しします。（有关资料明天交给您。）

・後ほど部長にお伝えします。（一会儿我会转告部长。）

・大変ご無沙汰しております。（久疏问候。久未联系。好久未见。）

ヒント：自分の行為をへりくだって言うことで、相手に尊敬や丁寧な気持ちを表す。一般的には、接頭辞は「お」の場合が多いが、語幹は音読みの動詞の場合、「ご」を使うこともある。

・来週またお邪魔します。(下周再来打搅您。)

・ご紹介します。こちらは友達の中田です。(给您介绍一下，这是我朋友田中。)

・見学の順序について、担当の王さんからご説明します。(关于参观顺序，由负责人小王给大家做讲解。)

「教師の活動」と「学生の活動」が示されており、謙譲語の「お/ご V する」に関する説明と例文も加えられていることが分かる。しかし、それ以外の記述は見当たらず、前節でまとめた問題点と不足点の解決にはならないといえよう。

[4] 『総合日語 (改訂版)』の教師用指導書

『総合日語』(改訂版)の第二冊第20課で扱われている敬語について、『総合日語(改訂版)教師用書』においては、まず教科書の本文会話と読解文の訳文が示され、次に練習問題の回答が書かれている。教師用指導書において、敬語について説明されているのは、以下の1箇所のみであった。

第二冊の第20課より翻訳引用

教育難点：日本語の敬語システムは非常に発達しており、中国語にはそれに対応する言語形式がないため、学習者の理解に大きな障害をもたらす。したがって、表現形式を学ばせる前に、まず敬語に関する考え方を理解してもらう必要がある。

以上の記述を見て分かるように、『総合日語 (改訂版) 教師用書』においては、敬語はほとんど扱われておらず、本文会話と読解文の訳文と練習問題の回答がメインであった。教育の難点として敬語が挙げられているが、具体的な記述や説明など、教科書の記述を補足するような新たな情報は一切なかったことが確認された。

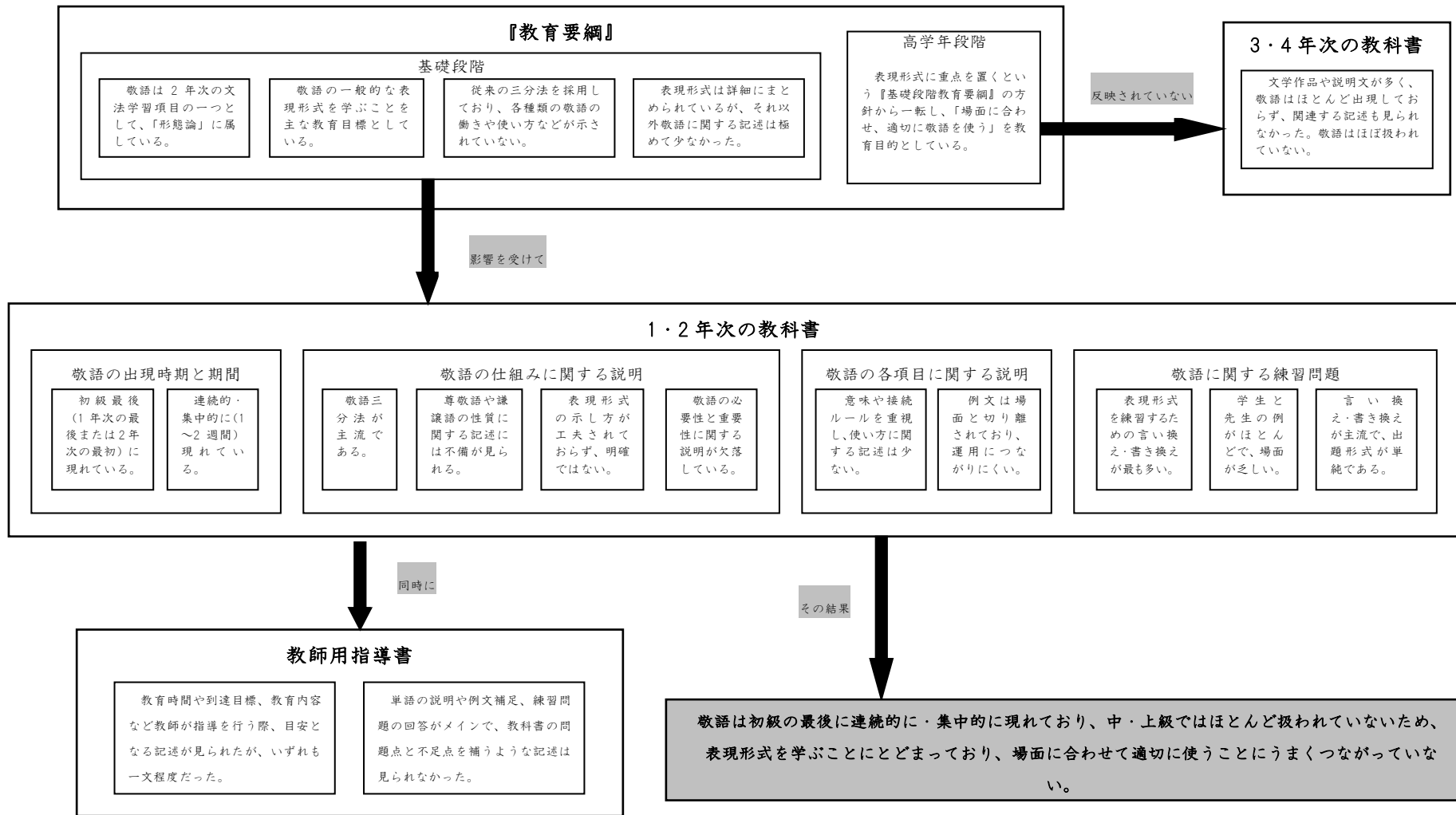
5.3.4 調査を通じて見えたこと

本節では、前節で分析対象である敬語が扱われている6種類の教科書のうち、教師用指導書付きの4種類に絞り、それぞれの教師用指導書における敬語の扱い方を分析した。その結果、教師用指導書の記述には差異が見られたものの、まとめると以下の二つの傾向が見られた。

まず、教育時間や到達目標、教育内容など、教師が指導を行う際に、目安となるような記述が見られたものの、いずれも一文程度であった。また、単語の説明や例文の補足、練習問題の解答例がメインであり、前節で明らかにした教科書の記述における問題点と不足点を補うような記述は見られなかった。このことから、中国の大学日本語専攻教育における教師用指導書は教科書の問題点と不足点をほぼ補っておらず、あまり機能していないことが示唆される。

第4章の現場教師への調査で語られた「様々な制限や悩みを抱えている中、最終的には教科書に頼り、教師用指導書を参考に敬語を教えている教師が多い」という事実と照らし合わせると、中国の大学日本語専攻教育現場においては、教科書と教師用指導書に見られた敬語の扱い方に関する問題点と不足点が、そのまま学習者に教えられている可能性が高く、学習者の敬語への理解を妨げてしまうことが推察される。

第5章で明らかとなったことを【図3】で表してみた。



【図3】 関連教材における敬語の扱い方

第4節 調査結果に基づく総合考察

第3章から第5章の調査結果をまとめた【図4】を見て分かるように、関連教材における敬語の扱いは、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に大きな影響を与えているといえる。具体的には、第3章の元学習者及び第4章の現場教師によって語られたことに本章の分析結果を照らし合わせると、以下の関連性がうかがえるのではないかと考えられる。本節では、第1節から第3節の「調査を通じて見えたこと」において、分散して述べたことをまとめつつ、更に考察を行う。

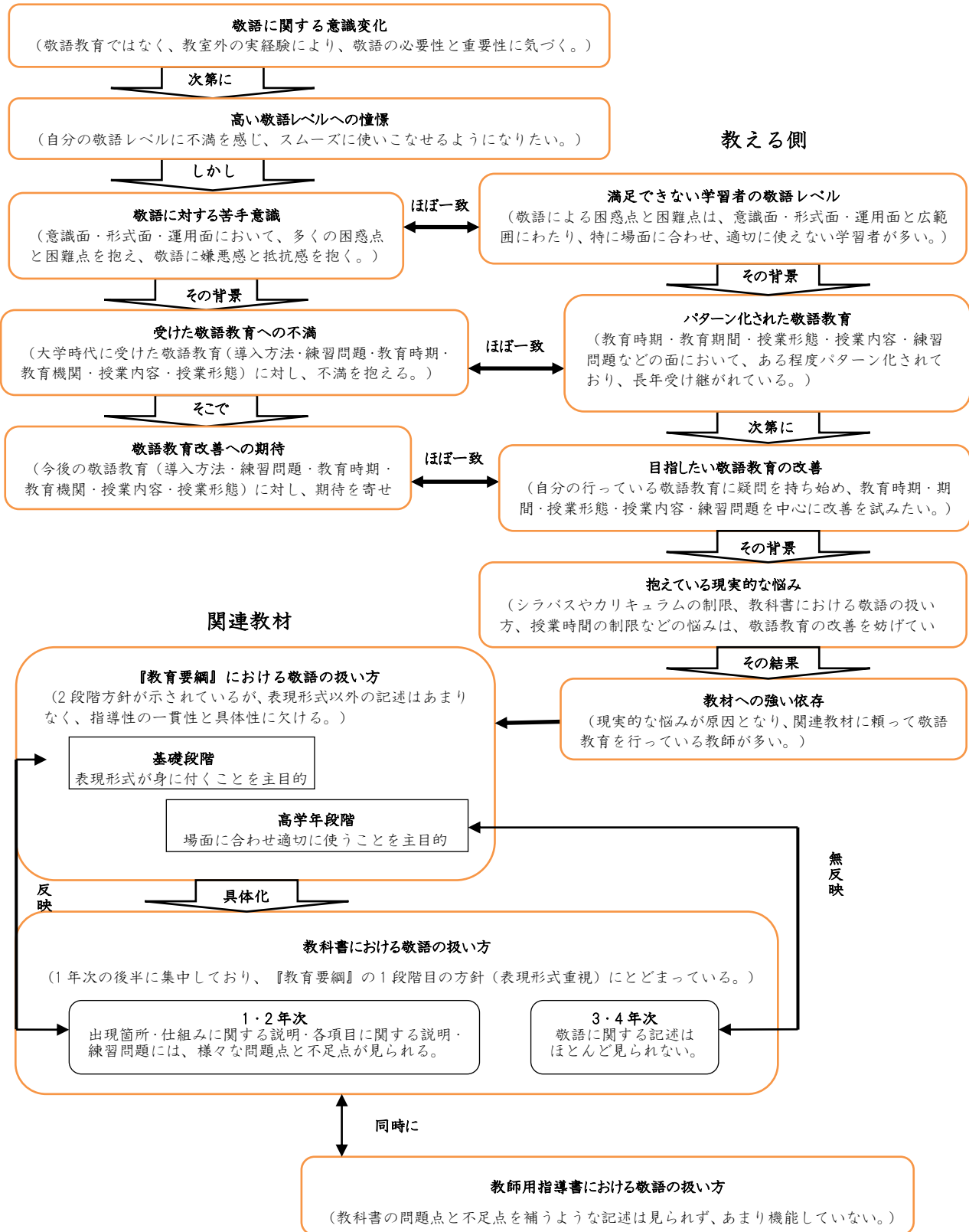
5.4.1 学習者の意識変化と関連教材における敬語の扱い方

学習者の敬語に対する意識変化には、関連教材における敬語の意識面に関する扱い方の問題点が投影されているとうかがわれる。大学時代教室内で受けた教育を通して敬語の必要性和重要性を感じず、卒業後の就職や来日など教室外の経験によってはじめて気づくという元学習者らの敬語に関する意識変化からは、敬語教育の不十分さを窺い知る。確かに現場教師によって語られた敬語教育の実態を見ても、敬語の必要性和重要性など意識面に関する指導がほとんど行われていないことが確認できる。

その裏には、2冊の『教育要綱』をはじめ、教科書も教師用指導書も敬語の意識面について記述を行っていないことが絡んでいるといえよう。すなわち、表現形式に重点が置かれており、意識面があまり考慮されていない『基礎段階教育要綱』における敬語教育の指導方針が、敬語が集中的に扱われている1・2年次の教科書と教師用指導書にそのまま反映されている。関連教材に頼っている教師も形式面を中心に敬語を指導しており、敬語の必要性和重要性などについての指導を等閑視してしまいがちである。その結果、元学習者らに示されたように、大学で教育を受けても、敬語の必要性和重要性に気づく機会が得られず、教室外の経験に委ねることになる。

学ぶ側

教える側



【図4】第3章～第5章の調査結果

もちろん、関連教材において扱われていなくても、教師による自発的な指導や学習者による自律的な学習によって補える可能性も否定できない。しかし、関連教材の不足を見抜き、自ら補うように敬語の意識面について指導するまたは学習することを教師と学習者に丸ごと任せるのは、あまり建設的な方法ではないと思われる。よって、関連教材において敬語の必要性と重要性などをしっかりと扱うことにより、教師の指導を促し、学習者が早い段階で敬語の必要性と重要性に気づくことができると期待される。これはその後の敬語学習のモチベーションを高め、最終的には敬語教育の質を高めることにもつながると予想される。

5.4.2 学習者の苦手意識と関連教材における敬語の扱い方

関連教材における表現形式に偏るといふ扱いは、学習者に敬語に対する強い苦手意識を持たせてしまう大きな要因の一つであるといえよう。元学習者らが自分の敬語レベルに満足できず、高い敬語レベルに憧れており、また敬語に対する苦手意識が強いことは、彼らが受けた敬語教育と密接に関連していることがうかがえる。同時に、現場教師の間で共通して認識されている満足できない学習者の敬語レベルの中身も元学習者の語りと重なっていることから、教師からみても学習者からみても、自分の行っているまたは受けた敬語教育は満足のできるレベルには達していないといえよう。

具体的には、意識面・形式面・運用面による困惑点と困難点に大別され、中には「場面に合わせ、適切に敬語を使いこなせない」という悩みが元学習者らによって最も挙げられており、現場教師の間でも学習者の敬語レベルに対する評価として、共通して語られている。これは関連教材における敬語の意識面・形式面・運用面に関する扱い方と深く関わっているといえる。

まず、5.4.1 で述べたこととも関連するが、2冊の『教育要綱』をはじめ、関連教材において敬語の意識面についてほとんど記述していないことは、教師が敬語教育を行う際、意識面に関する指導を等閑視してしまう大きな原因であろう。その結果、学習者が敬語の必要性と重要性を感じず、尊敬語や謙譲語に嫌悪感と抵抗感を抱いてしまうなど、意識面による様々な困惑点と困難点が生み出されてしまう。

次に、形式面に関しては、関連教材において重点的に扱われているため、さほど問題はなかろうと思われている一方、「多様かつ煩雑な表現形式による記憶難と混同」が集中して語られている。その理由としては、以下の2点が考えられるだろう。①学習者が必要性と

重要性を感じないため、記憶しようとする意欲が低い。②短期間で集中的に敬語を教わるため、学習者の記憶力の限界を超えている。①も②も敬語の扱い方と直接関係していることが明らかである。

最後に、元学習者にも現場教師にも最も問題視されている運用面に関しては、5.1.3で明らかとなった2冊の『教育要綱』における敬語教育の2段階方針が絡んでいると思われる。2冊の『教育要綱』においては、基礎段階では表現形式、高学年段階では運用能力という2段階の指導方針が示されているが、教科書と教師用指導書を見ると、1段階目の方針がしっかりと反映されているのに対し、2段階目の方針が全く反映されていないことが分かる。そのため、初級の最後に集中的に現れている教科書と教師指導書が拠り所となっており行われている敬語教育は、表現形式重視という第1段階にとどまってしまっている。その結果、「表現形式が分かっても、どう使えばよいか分からない」という運用レベルの困惑点と困難点が最も多く出されていると考えられる。適切に使うことを教育目標とせず、初級の最後で集中的に表現形式を中心に敬語を教えるのは、学習者の心理的負担を増やす一方、実用性への認識を低くしてしまうことが懸念されるだろう。

5.4.3 教育への不満や改善の期待と関連教材における敬語の扱い方

学習者が敬語教育に抱く不満や期待も、教師が目指したい敬語教育の改善も、関連教材における敬語の扱い方と深く結びついているといえる。まず、元学習者の敬語教育への不満は改善への期待と対応しており、主に導入方法・練習問題・教育時期・教育期間・授業内容・授業形態という六つの面にまとめられる。一方、教師の目指したい改善は、大きくは教育時期・教育期間・授業形態・授業内容・練習問題という五つの面であるが、導入方法が授業内容に含まれているため、元学習者の六つとほぼ一致していることが分かる。それぞれが関連教材における扱い方とどのように関連しているのかについて見てみよう。

まず、教育時期と期間に関しては、元学習者と現場教師の語りによると、敬語教育は初級に当たる1年次の最後または2年次の最初に、1～2週間で行われることが多いと予想される。この時期と期間は、5.2.3で示した教科書における敬語の出現箇所と合致していることが分かる。このことから、教師は教科書に頼って敬語を指導していることが多く、教科書における敬語の扱いは、教育時期と期間の見直しに大きく関与していることが示唆される。

次に、導入方法を含む授業内容に関しては、元学習者も現場教師も多様で複雑な表現形

式の説明がメインで、文法中心であると語っており、必要性和重要性を扱う導入や運用面の指導への期待が大きかった。5.4.2 で述べたこととも関連するが、形式面に偏っている敬語教育は、意識面と運用面に関する扱いが不足しているという関連教材における敬語の扱い方と直接に関係しているといってもよいだろう。扱いを加えることにより、教師も意識面と運用面に注意を向け、授業内容に付け加えると期待されるだろう。

更に、教師による一方的な説明がほとんどで、知識伝授の講義型授業に対し、元学習者は強い不満を表明し、改善を求めているが、実はこのような現状を改善しようとする考えは現場教師の間でも共通していることが明らかとなった。具体的には、4.4.3 で述べたように、教師による知識伝授の時間を減らし、学習者が主体的に参加できる授業を目指したいと現場教師が語る。しかし、その一方、使用する関連教材は、教師主導型向けであるため、5.2.3 の (1) と (2) で述べたように、学習者に主体的になってもらうための扱い方にはなっていない。そのため、目指したい授業形態を実現するには、それにふさわしい教材を開発することが必要とされるといえよう。

最後に、敬語関連の練習問題については、表現形式に慣れるための言い換え・書き換えに偏るのではなく、運用力を育成するための実際の場面における話す練習も多く設けるといった意見も、元学習者と現場教師が同様であった。しかし、その実現を妨げている要因の一つとして、教科書における敬語の練習問題が挙げられるのではないかと思われる。5.2.3 の (3) で示したように、模範例にならい、言い換え・書き換えといった練習問題が最も多く、その他の練習問題を見ても教師主導型のものが主流で、学習者が主体的に敬語を使う練習は極めて少なかった。元学習者と現場教師の期待に応えるような練習問題を教科書に取り入れ、学習者の敬語運用力を育成することを積極的に検討する必要があるだろう。

5.4.4 教師の現実的な悩みと関連教材における敬語の扱い方

関連教材における敬語の扱いは、敬語教育を行う教師にとって、抱えている悩みを解消してくれる存在ではなく、悩みの一つともいえる。4.4.4 で述べたように、元学習者の不満や期待に共感を持ち、自分の行っている敬語教育を改善しようとする現場教師であるが、その実現を阻害してしまう様々な悩みが存在していることが判明した。

現場教師の語りによると、シラバスやカリキュラムの制限・教科書における敬語の扱い方・授業時間の限界・教師自身の敬語レベル・授業準備の困難・敬語使用率の低さという六つの悩みが代表的であるが、そのいずれも現行の敬語の扱い方によって解消されること

はないといえよう。むしろ、シラバスやカリキュラムの制限（3年次以降の教科書においては、文学作品が多く、敬語の出現率が低いため、授業で敬語を扱う時間はない、等。）、教科書における敬語の扱い方（教科書において敬語は集中的に現れているため、教える順番やペースを変えると不便が生じる、等。）、授業準備の困難（教科書の練習問題以外に、自分で色々とアイデアを考えたり、題材を集めたりするのは大変、等。）といった悩みは、現行の敬語の扱い方と直結しており、それらを解消するために、敬語の扱い方を再考する必要があることが示唆される。

5.4.5 敬語教育の実施と関連教材における敬語の扱い方

5.4.1～5.4.4で述べたことを踏まえると、中国の大学日本語専攻教育現場で行われている敬語教育は、関連教材における敬語の扱い方に大きく準拠していることが分かる。そして、元学習者と現場教師の語りからも「補足資料などほとんど使わず、教科書を中心とする教材に従って敬語を教えている教師が多い」という傾向が推測される。すなわち、関連教材における敬語の扱いは、教師にとっても、学習者にとっても、主要な情報源とであり、敬語教育の最も拠り所となっているといえよう。

教育にとって、学習者・教師・教材は重要な三本柱であるといわれている。ユネスコでは、教育の質を左右するものとして教科書を位置付けているように、『新版日本語教育事典』（日本語教育学会、2005）においても、「学習・教育を実現させようとするとき、有力な手立てとなるものの1つが教材である」（p. 895）と述べている。学習者と教師にとって、それぞれ学ぶためと教えるための重要要素の一つとして、大きな意味を持つ存在であると位置付けられている。

そして、曹（2008）は、「海外の日本語教育では、教科書の役割が大きい」（p. 1）と指摘している。5.4.1～5.4.4で述べたことを通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の実施において、教科書を中心とする教材が重要な役割を果たしていることが明らかとなっている。繰り返しになるが、以上のことをまとめると、以下の4点が示唆されるだろう。①中国の大学日本語専攻教育現場では、教科書を中心とする関連教材に頼って敬語を指導している教師が多い。②関連教材における現行の敬語の扱い方には様々な問題点と不足点が存在している。③これらの問題点と不足点は元学習者と現場教師の感じている敬語教育の不満と関連している。④関連教材の問題点と不足点を改善することにより、敬語教育全体の改善につながる。

第6章 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の調査結果から

第1節 調査からみえてきた敬語教育の問題点

本章では、研究【課題4】（課題1・2・3を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には、どのような問題点が存在しているのか）を明らかにすることを目的とする。第3章から第5章の調査結果から、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教育目標・教育時期・教育期間・教育内容・教育方法・使用教材・教師などの面において様々な問題点が見られた。まず本節では、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つをまとめ、それぞれについて詳しく述べるとともに、それらの問題が生じた原因や改善に向けての取り組みについても考えたい。

6.1.1 一貫しない教育目標

中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の目標については、第5章第1節の分析対象である2冊の『教育要綱』において明記されている。具体的には、基礎段階では表現形式、高学年段階では運用能力という2段階の指導方針が示されているが、現場で使用されている教科書と教師用指導書を見ると、1段階目の方針がしっかりと反映されているのに対し、2段階目の方針は全く反映されていないことが分かる。第4章で明らかになったように、多くの現場教師は教科書と教師用指導書に頼って敬語を指導するため、中国の大学専攻教育における敬語教育が表現形式重視の初級にとどまっている現状を招いた。実際、第3章と第4章の調査においても、調査協力者が大学で受けた、あるいは行っている敬語教育は、1年次の最後または2年次の最初に集中しており、3・4年次では敬語教育をほとんど受けていなかった、あるいは行っていないという事実が明らかになっている。「表現形式が分かっても、どう使えばよいのかが分からない」と語る学習者を多く生み出してしまった主な原因はここにあると考える。

3章の元学習者への調査では、「初級の最後の短期間で、煩雑な表現形式を集中的に教わり、敬語に対する嫌悪感と抵抗感を覚えた」や「初級では表現形式を覚えても、実際の場面でどう使えばよいのかわからなかった」などの意見が多かった。適切に使うこと

を教育目標とせず、初級の最後で集中的に表現形式を中心に敬語を教えるのは、学習者の心理的負担を増やす一方、実用性への認識を低くしてしまう恐れがあるといえよう。したがって、『教育要綱』に起因する一貫しない敬語教育の目標を見直し、初級から敬語を適切に使うことを目指すよう検討すべきだと考える。

6.1.2 不適切な教育時期と期間

第3章と第4章の調査結果を通し、現場教師の多くは、教科書に従い敬語を1年次の最後に、90分の授業×5～10回程度で集中的に指導していることが判明した。日本語レベルもまだ低く、敬語の使用場面も限られている初級段階では、表現形式も使い方も複雑な敬語を集中的に教わっても、その必要性和重要性を十分理解できず、嫌悪感と抵抗感を抱いてしまう可能性が高い。一方、日本語レベルが上達するにつれ、中・上級になれば、日本語への理解も深まり、日本人との接触も多くなると思われる。就職活動や進学面接など、敬語が必要とされる場面にもより遭遇しやすくなるため、学習のモチベーションが高まり、次第に学習効果も上がると考える。しかし、調査結果を見ると、高学年の教科書においては、敬語はほとんど扱われておらず、3・4年次で敬語教育を実施する大学は少ないと推察される。

敬語教育の実施時期と実施期間は、各大学のカリキュラムとシラバスによって規定され、多少異なるとも考えられる。しかし、中国の大学日本語専攻教育が各年次で達成すべき教育目標は、『教育要綱』で明確に示されており、特に、敬語教育が集中的に行われている初級段階では、使用する教科書が違っても、扱うべき学習項目や学習順序、時間配分など基本的に統一されていることが第5章の教材分析で明らかとなった。そのため、第4章のインタビューで語られたように、現場で敬語指導を行う際、教師がその時期と期間を調整するのは容易なことではない。よって、目指したいのは、従来の実施時期と期間を見直し、初級後半の短期間で集中的に行われることの多い敬語教育を更に充実させ、中・上級の会話授業や作文授業、閲読授業などにも取り込みつつ、4年間を通し継続的に敬語教育を行うことであるが、その実現には関連教材における敬語の扱い方の見直しが必要となることが示唆される。

6.1.3 表現形式に偏る教育内容

敬語教育は表現形式の理解と記憶だけでは不十分で、実際の運用能力の向上を目指すべ

きであることは、第3章の元学習者と第4章の現場教師へのインタビューで共通して語られている。もちろん、形式面を整理することは不可欠であり、敬語表現のための基礎でもあるのだが、それだけにとどまってはならない。ある言葉を敬語形式に変形できたとしても、実際の色々な場面で様々な相手にどのように適切に表現していけばよいのか、または敬語形式が正しくても、表現として問題があるのではないかといった運用面における学習者の困惑点と困難点を改善することが敬語教育における重要な課題であるといえる。更に、形式面と運用面のほかに、「日本語の敬語は、なぜ必要なのか」、「敬語が使えることで、どんなメリットがあるのか」といった意識面に関する指導は、学習者の敬語全体に対する理解を促進し、学習意欲にもつながるため、教育内容に入れるべきであろう。しかし、中国の大学日本語専攻教育現場では、敬語の必要性と重要性など意識面に関する指導が省かれており、適切に使うことを目標とする運用面に関する指導も十分に行われておらず、表現形式に偏る形式面に関する指導が敬語教育の出発点及び終結点となっていることは第3章と第4章の調査結果からうかがえる。

このような現状を招いてしまった原因としては、直接には敬語教育を行っている教師に責任があると考えられる。しかし、第4章の現場教師の語りと第5章の教材分析を考察した結果、その真の原因は、関連教材における敬語の扱われ方と深く結びついていることが明らかとなった。具体的に見ると、表現形式に主眼を置く『教育要綱』における敬語の扱い方から影響を受けた教科書も教師用指導書も、意識面と運用面についてはあまり記述されていない。そのため、教材に頼って敬語を教えている教師も形式面に偏ってしまい、意識面と運用面にあまり触れていないという現状を招いてしまっている。もちろん、教科書の不足を補うには教師の工夫が期待されており、実際に教科書に頼らず、独自に敬語教育を改善しようと努力する教師もいるだろう。しかし、第4章の調査結果を見ると、現場では様々な現実的な悩みが改善の壁となり、教師個人の努力がなかなか実らないのが現状であることが分かる。そのため、表現形式に偏る敬語教育を改善するには、現場教師が敬語を教える際、より使いやすくなるよう、関連教材において、敬語の意識面・形式面・運用面をバランスよく記述することが求められるだろう。

6.1.4 学習者の主体性を重んじない教育方法

第3章と第4章の語りによると、中国の大学日本語専攻教育現場では、教師主導型の講義式授業が主流であることが明らかとなった。一方、近年学習者の主体性が注目される中、

その必要性と重要性に気づき、従来の講義式授業に不満を感じ、ロールプレイを導入するなど、様々な工夫を試みようとしている教師の動きも見られた。しかし、現場教師によると、敬語はその他の学習項目とは異なり、体系知識や表現形式など説明しなければならない内容が多いため、限られた授業時間で終わらせるためには、教師主導型の講義式授業になりがちであることが分かった。第3章と第4章の調査結果を見ても、調査協力者が受けたまたは行っている敬語指導は、教師による説明が大半の時間を占めており、練習問題として、語彙レベルの言い換え・書き換え練習、本文の朗読、中文和訳などが多く、学習者の主体性が重んじられていない傾向が見られる。

蒲谷他（2009）、蒲谷他（2010）などで指摘されているように、敬語を使う際、話し手が常に相手や周囲の人やその場の状況などの要素を確認する必要があるため、ただ体系知識が理解でき、「食べる⇒召し上がる」や「ある⇒ござる」のように表現形式を言い換えられるだけでは、特に日本社会にいない中国の学習者は「誰が、誰に、どんな場面で、どう使うのか」がイメージしにくいのではないかと考えられる。そのため、学習者が実際に色々な場面で様々な相手にどのように適切に表現していけばよいのかを主体的に考えたり、練習したりする必要性があり、それが実現できるような授業形態と教育方法への変革が求められる。具体的には、教師による説明時間を短縮し、コミュニケーション場面に重点を置き、模擬面接やレストランなどの場面を設定し、人間関係に応じた敬語使用に関する授業活動を取り入れる。それにより、学習者が自ら敬語を使用する機会が増え、受動的な聞き手から主体的な参加者になることが期待できるのではないかと考える。

6.1.5 再考すべき教材における敬語の扱い方

第5章の教材分析を通し、『教育要綱』における敬語の扱い方には、「教育目標が一貫していない」、「形式面に関する記述の不足」、「意識面と運用面に関する記述の欠落」など多くの問題点が存在していることが明らかとなった。そして、その影響を受け、現場で広く使われている教科書と教師用指導書における敬語の扱い方には、「敬語の必要性和重要性について記述されていない」、「敬語の種類に関する記述の不統一さ」、「人間関係が不明な例文が多く、場面との関連性が薄い」、「言い換え・書き換えといった形式面に着目した練習問題がメインである」など、様々な問題点と不足点が見られた。これらの問題点と不足点は、第3章の元学習者によって語られた「受けた敬語教育への不満」と第4章の現場教師によって語られた「敬語教育の実態」にも現れていることが確認されたことから、関連

教材における敬語の扱いは、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育にマイナスの影響を及ぼしていることが推察され、再考の必要性が示唆される。

また、6.1.1～6.1.4で挙げられた問題点のいずれも、関連教材における敬語の扱い方と深く関連していることが確認された。よって、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するには、関連教材に着目し、敬語の扱い方を再考することが第一に重要な課題であるといえよう。その際、①『教育要綱』に起因する一貫しない敬語教育の目標を見直し、初級から敬語を適切に使うことを目指すよう、教科書と教師指導書にも反映させること、②1年次の最後に集中的に敬語を出現させるのではなく、初級・中級・上級にわたり、段階的に、分散的に敬語を取り上げるよう教材を再検討すること、③表現形式に偏らず、敬語の意識面・形式面・運用面の全般を考慮し、現場教師が敬語を教える際、より使いやすくなるよう、教材における敬語に関する記述を新たに行うこと、④表現形式を機械的に練習するための言い換え・書き換えなど教師主導型の練習にとどまらず、敬語をコミュニケーション場面において扱うことのできる活動型練習も積極的に教材に取り入れることなどが重要なポイントとなるだろう。

6.1.6 敬語教育に苦手意識を抱く教師

第5章の調査結果を通して、教師たちも大学時代に元学習者と類似した敬語教育を受けたという事実が判明した。教師によって語られた「満足できない学習者の敬語レベル」と「目指したい敬語教育の改善」が、第3章の元学習者によって語られた「敬語に対する苦手意識」と「敬語教育の改善への期待」とかなり一致したのも、過去に元学習者としての学習経験があったためであると考えられる。そして、教師自身も従来の教え方で敬語を教わったため、「敬語の必要性と重要性に関する認識の低さ」や「敬語知識に対する理解の不足」、「敬語が適切に使える自信のなさ」などの問題を抱えており、敬語を指導する際、他の学習項目より苦手意識を抱いているようである。

すなわち、学生時代に敬語を教わったものの、初級の短い期間で表現形式に偏っている教師主導型という従来の敬語教育を受けていたため、自分が教える立場になった今でも、学習者と同じような困惑点と困難点を感じている教師が多い。そのため、学習者の疑問に答える知識も足りず、敬語がうまく使える自信もない現場教師は、自分の行っている敬語教育に不満を感じつつも、苦手意識があるゆえに、どのように改善すればよいのかが分からず、最終的に教材に頼って敬語を行ってしまう。これも中国の大学日本語専攻教育にお

ける敬語教育の問題点が、長年にわたり改善されていない大きな原因であると推測される。以上を踏まえ、中国の日本語教育現場に携わる教師を対象に、敬語に関する指導や研修を行う必要があると提案する。具体的には、敬語や敬語教育の専門家を招き、特別講義やワークショップなどを開催したり、現場の教師によって定期的に研究会や勉強会を行い、互いに敬語や敬語教育に関する悩みや心得を共有したりすることが挙げられる。

6.1.7 教室内の指導に強く依存する学習者

第3章から第5章の調査結果からうかがえる敬語教育のもう一つの問題点は、自律学習³⁰能力があまり育成されておらず、学習者の多くが教室内で行われている敬語教育に強く依存していることである。第3章の元学習者の語りを通して、大学4年間、丁寧語であるです・ます体以外の敬語（尊敬語や謙譲語）を使う機会が極めて少ないため、敬語学習は初級の最後で受けた短期間の敬語教育にとどまっている傾向が見られた。多様かつ煩雑な表現形式に嫌悪感と抵抗感を抱いてしまった学習者は、敬語の必要性和重要性に対する認識が低いため、多くの困惑点と困難点を抱えているにもかかわらず、教室外における自律学習をほとんど行っていないようである。また、第4章の現場教師に挙げられた学習者の敬語による困惑点と困難点の多くは、第5章の教科書分析で明らかとなった問題点と重なっていることが分かった。このことから、学習者の敬語学習は教科書の記述と教師の指導に頼っており、教室外における学習を補うために教室外で自律的に敬語学習を行っていない可能性が高いとかがえる。

敬語学習に限らず、中国の大学における日本語学習者は教師主導型の講義式授業に慣れてしまい、自律学習能力が低いということは多くの先行研究（曹，2005 など）に指摘されている。しかし、舘岡(2002)によれば、大学で学ぶべき能力は「自律的な学び」であり、「学習者自らが目標を設定し、計画を立てて遂行し、結果を自己評価する」(p.3) という一連の流れを持った、学習者の生きることから切り離されない学びが求められているという。つまり、大学で育成すべき学習者の主体的な学びには、学習者の「自律性」が必要であることが分かる。今後中国の大学日本語専攻教育も学習者の自律学習能力の育成を重要な課題とすべきだろう。とりわけ恵まれていない学習環境や限られている授業時間などの

³⁰ 自律学習 (autonomous learning) とは、「学習者自身が自己の学習に主体的に関わり、学習を孤立化せず、教授者や教材や教育機関などといったリソースを利用して行う学習」をいう。 (『日本語教育重要用語 1000』, 1998)

不利な状況に置かれている中国の大学における日本語学習者の場合、母語話者にとっても習得困難だといわれている敬語を身につけるためには、教室外における自律学習が特に必要とされ、その能力を育成することはますます重要であろう。また、自律学習能力の向上は、大学卒業後の敬語学習にもつながると思われる。

無論、学習者の自律学習能力の向上に期待するだけで、現行の敬語教育に存在する問題点が解決されるわけではない。中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するためには、まず教室内で行われている教育に見られる問題点の改善から取り組む必要がある。しかし、大学4年間の教育には限界があることも確かである。特に敬語の場合、大学卒業後の実社会における学習も不可欠であると思われる。学習者の自律学習能力は、大学卒業後にも大いに役立つため、その育成も敬語教育の重要課題の一つとして捉えたい。

第2節 教科書の観点に焦点を当てた契機と必然性

第1節では、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点として、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つを指摘し、それぞれが生じた原因と改善に向けての取り組みについても検討を行った。

しかし、指摘した七つの問題点について改めて考えると、敬語教育のみならず、中国の大学における日本語教育全体に共通して存在するものも含まれているということに気づく。また、その原因と改善の取り組みも実に多岐にわたっているため、七つの問題点をすべて解決するには、中国の大学日本語専攻教育システム全体を見直す必要があり、とても容易に解決できる問題ではない。そこで、中国の大学における日本語教育全体の問題点も反映されている敬語教育を改善するためには、まずはどこに焦点を当てればよいのかについて検討してみたい。

本節では、敬語教育の改善を目指すためには、まずは教科書に焦点を当てるべきだという主張に至るまでの経緯について述べたい。6.2.1では、第3章から第5章の調査結果に基づき、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育において、教科書が極めて重要な位置づけを占めていることを確認することにより、教科書に着目したきっかけをつかんだ。

6.2.2 では、教材に関する先行研究を概観し、教材の役割についてどのように論じられてきたのかを探ることによって、教科書に着目すべき根拠を示した。6.2.3 と 6.2.4 では、教育・学習、特に日本語教育の分野と中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のそれぞれにおいて、教材（主に教科書）に対する捉え方やその役割などを検討した。その結果、6.2.5 では、両者に見られた相違点を明らかにした上で、その相違点が生じた原因について考え、更にその背景に潜んでいる問題の所在を探ってみた。そして、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するために、まずは教科書に着目すべきだという主張の必然性を訴えた。

6.2.1 調査結果からうかがわれる教科書の位置づけ

6.1.1～6.1.7 で指摘した七つの問題点は、教育目標から、シラバス、カリキュラム、教師の教育観や学習者の学習観まで、実に多岐にわたっており、中には敬語教育のみならず、中国の大学における日本語教育全体に存在するものもあるといえよう。そのため、これらの問題点をすべて解決するためには、中国の大学日本語専攻教育システム全体を見直す必要があり、とても容易に解決できる問題ではないことを痛感した。しかし、だからといって現状維持のままでは、何の解決にもならないだろう。そこで、本研究では、七つの問題点がすべて解決されることは容易でないとしても、敬語教育の改善を目指すための糸口はどこにあるのか、まずはどこに焦点を当てるべきなのかについて考えることにした。

第5章の第4節でも述べたように、第3章から第5章の調査結果をまとめた【図4】を見ると、関連教材における敬語の扱い方は、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育にとって、重要な拠り所となっていることが分かる。ここで第3章から第5章の調査結果を簡潔に整理すると、次のような関連性が見て取れると思われる。

（第3章）元学習者の多くは、卒業後の就職など教室外の経験により、敬語の必要性和重要性に気づくようになった。しかし、表現形式も使い方も複雑な敬語には大学時代から強い苦手意識を抱いている。それは、大学時代に受けた敬語教育と深く関わっており、特に教育時期や期間、指導方法や授業形態などに対し、元学習者は多くの不満を抱き、改善の必要性を強く訴えている。

↓

（第4章）現場教師は学習者の敬語に対する苦手意識を認識しており、また学習者同様、

自分の行っている敬語教育に対し、多くの問題点を感じている。にもかかわらず、抱えている様々な現実な悩みが改善の妨げとなっている。その結果、各自で改善を試みているが、なかなか定着できず、最終的には使用する教科書に従って敬語を教えるという最も無難なやり方を選んでしまう。

↓

(第5章) 関連教材の分析を通して明らかとなった敬語の扱い方に見られる問題点と不足点は、元学習者の敬語に対する苦手意識や敬語教育への不満と重なっている。そして、現場教師の行っている敬語教育に大きな影響を及ぼしている。すなわち、関連教材における敬語の扱いは、元学習者と現場教師の語っている敬語及び敬語教育に対する考え方と深く関わっている。

以上の関連性を逆にし、再度その因果関係を整理すると、以下のことがいえるのではないだろうか。関連教材における敬語の扱い方に見られる問題点と不足点を把握し、改善することで、現場教師にとって、敬語教育を行う際、拠り所となる関連教材（主に教科書）が今までより使いやすくなり、抱えている悩みや自信のなさも軽減されるといえよう。それと同時に、学習者にとっても、敬語を学習する際、より理解しやすくなり、敬語による困惑点と困難点が解消される効果も期待される。その結果、敬語教育の改善が促進され、現状の敬語教育に存在する問題点の解決につながり、最終的には、よりよい敬語教育の実現に貢献できると考えられる。

以上をまとめると、関連教材（主に教科書）における敬語の扱い方を再考することは、それを拠り所にしてしている現場教師にとって、自分の行っている敬語教育を見直す大きな誘因となる可能性が高いと予想される。このことから、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育にとって、教科書を中心とする関連教材は極めて重要な鍵を握る存在であることが推察され、敬語教育の改善には、まず関連教材（主に教科書）における敬語の扱い方に着目すべきことが示唆された。

なお、第5章でも確認したように、ここまで使ってきた「関連教材」とは、中国の大学日本語専攻教育と最も関連性の深いと思われる『教育要綱』、教科書、教師用指導書という三つを指す。したがって、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善する第一歩として、まずこの三つにおける敬語の扱い方を再考すべきだと主張したい。しかし、第5章の第1節でも述べたように、『教育要綱』の作成に関わったメンバーによる先行文献(宿、

2003 ; 譚, 2004) によれば、作成の背景と経緯として、中国教育部高等教育機関日本語専攻教育指導委員会は、中国における日本語教育の新情勢を分析し、調査、会議、報告、修正を繰り返した上で2冊の『教育要綱』を作り上げたという。このようなスタンダードとしての『教育要綱』における敬語の扱いが変わらない限り、敬語教育の根本を改めることはできないだろう。しかし、それは個人の研究者レベルで実現できることではない。ただし、「はじめに」の【中国の大学における日本語専攻教育の指導要綱】でも述べているが、現在、中国教育部高等教育機関日本語専攻教育指導委員会は、2017年を目途に『教育要綱』の改定を既に計画しており、その準備も行われているとのことである。そのため、本研究で主張している教科書を中心とする教材における敬語の扱い方の再考が、『教育要綱』の改定にもつながっていくことを期待するものである。

以上の理由から、本研究では、主に教科書及びそれに対応する教師用指導書における敬語の扱い方に焦点を当てることにする。また、中国の大学日本語専攻教育においては、一般的には使われていないが、本研究では今後の敬語教育の改善には欠かせないと思われる副教材と補助教材も視野に入れたい。副教材と補助教材については、第2節以降で触れるが、ここからは、教科書、教師用指導書、副教材と補助教材という四つを「教材」と総称し、本研究では、これらの教材を視野に入れつつ、教科書を中心に検討を行いたい。

最後に、第3章から第5章の調査結果からうかがわれる中国の大学専攻日本語教育における教材（主に教科書）の重要性に基づき、敬語教育の改善に教科書の持つ可能性が示唆された。しかし、言うまでもないが、教科書だけを改善すれば、七つの問題点がすべて解決されると主張したいわけではない。教科書を再考すれば終わるのではなく、それを七つの問題点を解決する糸口として、次につなげていかなければならない。具体的に七つの問題点とどのようにつながっているのかについては、次節で詳しく述べることにする。

6.2.2 先行研究で論じられてきた教科書の位置づけ

6.2.1では、第3章から第5章の調査結果の関連性を整理した結果、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育にとって、教科書は極めて重要な位置づけを占めていることが確認された。したがって、第1節で指摘した七つの問題点を解決する糸口は、教科書における敬語の扱い方にあり、敬語教育の改善を目指すためには、まずは教科書に焦点を当てるべきではないかと考えた。

では、教材は教育全体において一般的にどのように位置付けられているのだろうか。実

証調査の結果に基づき、立てた上記の推論の妥当性を理論的に検証するために、本項では、教育・学習、主に日本語教育分野における教材の位置づけに関する先行研究を概観することにした。

岩崎（2008）では、教育は、教師、子ども³¹、教材の三要素を目標という視点から有機的に関連させて行かなければならないと指摘されているように、教育・学習の分野においては、教師・学習者・教材は重要な三本柱であるといわれている。「ユネスコでは、教育の質を左右するものとして教科書を位置付け、教科書の質についての研究が推進されている」（松永，2010，p. 15）。また、松永（2010）では、教材と教科書について、以下の指摘が行われている。

現場の教育の質的向上を実現するためには、国や教科を問わず、教師の力量形成と同様に、教材からの質的なアプローチも重要である。教材の中でもとりわけ学校教育で用いられている教科書は、汎用性が高く、国で策定された教授内容を代弁している。したがって、教科書は、国の求める教育の質的向上を促す重要な因子であると考えられる。
(p. 15)

そして、『教材事典』（日本教材学会，2013）では、「教材は、教育目標を達成するために教育内容を体系的に具体化したものであり、教授・学習において不可欠のものである」（p. 36）と指摘された上で、その機能について、以下のように述べられている。

教師にとっては計画的、系統的に教えるための材料としての機能を持ち、子どもにとっては自ら考え、自ら学ぶための材料としての機能をもっている。もちろん、教育目標の違いにより教材の内容、構成の仕方も異なり、さらに子どもの発達を考え、能力や興味・関心に配慮して構成されている。いずれにしても、子どもが自主的に知識、技能、態度、さらには学び方を習得するのを助ける機能をもっている。（p. 36）

更に、同書によると、英語教育の分野においても、「教材は、日々の授業において重要な位置を占めている。どんな授業でも、よい教材を準備し、授業計画を立案し、授業に取

³¹ 基礎教育に関する論文であるため、「子ども」となっているが、本研究では、「学習者」という言葉を用いる。

り組むことが必要である」(p. 398) というように、教材の重要性が注目されている。そして、教科書については、「教科書は学習者にとっては学習する内容であり、将来心の糧となるものである。一方教師にとっても指導すべき内容であり、指導すべき手段である」(p. 405) と述べられている。

以上、教育・学習の分野において、教材の位置づけに関する先行研究をいくつか挙げてみた。これらの文献からは、教材は教育の質を左右するほど重要な要素であり、教師の教授内容とも学習者の学習内容とも深く連動していることがうかがわれる。では、日本語教育の分野では、教材の位置づけについて、どのように論じられているのだろうか。

『新版日本語教育事典』(日本語教育学会, 2005) では、「学習・教育を実現させようとするとき、有力な手立てとなるものの1つが教材である」(p. 895) と述べられており、更に教科書の役割については、次のように示されている。

教科書とは、ある教育・学習目的のためにデザインされたカリキュラムに従って教育・学習内容を編成し、学習項目ないしシラバスを一定順序に配列し、印刷物などにまとめたものをいう。

教科書は、学習到達目標を具体的に表現したものであり、学習者の予習・復習のよりどころとなる。また、教科書を終了した際の達成感があることなどから、教育指導・学習活動の主軸としての役割を担っている。また、学習者の多様性に合わせ、副教材や補助教材と組み合わせたり、スピーチやディスカッション、作文の指導に発展させたりと、コミュニケーションの素材を提供する役割を担うこともある。(p. 899)

以上の記述からは、日本語教育の分野においても、教科書を中心とする教材は、教師の教育指導にとっても、学習者の学習活動にとっても、大きな拠り所であり、重要な役割を担っているということが一般的に認識されているとうかがえる。これは、第3章から第5章の調査結果で明らかとなった教科書の重要性と重なり合っていることが分かる。

以上、教育・学習、主に日本語教育分野における教材の位置づけに関する先行研究を通して、教材は教育全体において、重要な位置づけを占めているということが確認された。本研究が以上のような経緯を経て、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育からは、七つの問題点が見られた中で、改善を目指すためには、まず教科書という観点に焦点を当てるべきだと主張したい。

6.2.3 日本語教育教材論における教科書の役割

6.2.1 における調査結果の整理と 6.2.2 における先行研究の概観を通して、教材の重要性が確認され、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するためには、まず教科書に焦点を当てるべきだと主張する契機と根拠を示した。しかし、本研究の主張を通すために、「なぜ教科書を第一歩にするのか」、その必然性について更に探る必要があると思われる。

この問いに答えるために、6.2.3 から 6.2.5 にかけて、筆者の考えを述べていくが、本項では、まず日本語教育における教材論を調べ、教材に対する捉え方や果たすべき役割などについて整理してみた。

荒川 (2004) は、「日本語教育が他の外国語教育と比して短期間に急速な発展を遂げたため、教材の開発・出版が多くされたものの、その本質的な研究には至らず、教材論としてのスタンダードな文献はさほど多くない」(p. 31) と述べ、日本語教育における教材論の歴史の短さを指摘している。「日本語教育の多様化が叫ばれた 1980 年代以降、日本語教育教材を体系的に把握しようとした最初は、岡崎敏雄 (1989) の『日本語教育の教材—分析・使用・作成』である」(川上, 2008, p. 11.) といわれている。そこでは、1980 年代以前の日本語教育における教材論について、次のように述べられている。

1980 年代以前の日本語教育において、教材の分野は、教授法の分野に比べればごく小さな領域をなしていたに過ぎなかったといえてよい。当時も教材が重要でなかったわけではない。日本研究を行う大学院生の学生を中心とした学習者が必要とする構文の習得及び読む力の獲得というほぼ単一の目的のために作られたいくつかの教科書があり、これらはコースデザインの機能をも持つ重要な教材であった。しかし重要な教材といえればそれらの教科書だけであった。しかも、そこで問われていたのは教材そのものの質ではなく、目の前にある教材をいかに効果的に教えるか、という考え方の問題であった。

(はしがき—本書の使い方—)

1980 年代に入る以前の日本語教育においては、教材とは、主に教科書及び文法のハンドアウト、そして宿題及び録音テープであった。この時期には、日本の文学・芸能の文献学習のための文法・読解能力の養成を必要とする大学院生を中心としたほぼ単一の学習者像を設定することができた。ニーズが単一のものであったから、教材もまたこの

ような単一のセットで十分機能できたと言える。(p. 10)

以上の引用からは、1980年代以前の日本語教育における教材は、それほど重視されていなかったことがうかがえる。その理由としては、学習者のニーズなども単一であったため、日本語教育における教材そのものがコースデザインの機能を持っており、単一のセットで十分機能できたことが挙げられるだろう。それに対し、1980年代以降に関しては、岡崎(1989)では、次のように述べられている。

1980年代以降では、日本語学習者が多様化し、単一の学習者に合わせて作られた教材ではそもそも日本語を教えること自体が不可能になっている。そこでは、以前と変わって、一方でどの学習者がどのような教材が必要とするかという教材自体の分析や評価が必要となり、他方同じ教材でも学習者に合わせてどうつかうかが問われ、さらにまた学習者にそぐわない場合には新しく教材が開発されなければならないという事態に至っている。このように、急激に進んできているいわゆる学習者の多様化という事態を前に、教材の持つ意味は大きく変化しようとしている。一言でいえば、教材は今日の日本語教育において以前とは比べようのない程重要な役割を持ち始めてきている。今や、そのような教材を用いるかという吟味なしに日本語を教えることはこれまた不可能である。(はしがき一本書の使い方一)

今後の教材・教具の領域が、学習者の多様化に対応していくことを中心的な課題として発展していくこと、また同時にその対応がコースデザインを中心になされていくからである。単一のニーズ、単一の学習者に対して単一の教材・教具のセットが用意されていた日本語教育の時代とは対照的に、学習者の多様化という永続的な課題をになった新しい時代における日本語教育において教材・教具は全く新しい重要な位置をしめる。(p. 6)

すなわち、岡崎(1989)は、1980年代以降の日本語教育においては、教材は今まで以上に重要な役割を果たすことを指摘した上で、学習者の多様化に対応するためには、多様な教材が必要であることと、その対応はコースデザインを軸に考える必要があることを述べている。更に、「学習者の多様化」に対応する一つの方向として「コースデザインの柔軟化

32」が提示されている。

岡崎（1989）が主張する「コースデザインの柔軟化」について、川上（2008）では、「学習者の多様化への対応策を考える視点がある。この多様化する日本語教育に、教科書に基づく固定型カリキュラムでは対応できず、教科書、学習者ニーズ、教師の言語観・言語教育観・言語学習観という3つの視点、あるいは3つの要素の相互関連の中でカリキュラムデザインを柔軟に考えることが重要であるという指摘は、現在の多様化する状況にも当てはまる」（p. 11.）と評価されている。

そして、岡崎（1989）では、コースデザインの柔軟化は教材と深く関わっていると述べられており、学習者が多様化している今日では、教材はコースデザインに従属する一部であるが、コースデザインの多様化を可能にするのできる重要な役割を担っている存在であるということを指摘されている。また、同書では、教科書や副教材の役割について次のように述べている。

学習者が多様化する前の教科書の役割は一言で言えば、「教科書はコースデザインの全て」であったと言えるであろう。今コースデザインを、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかの設計と言い換えるとすると、その時期の教科書はこれら三つの要素を全て提供、支配していたと言っても過言ではない。（p. 45）

学習者が多様化し始めてからの教科書の役割は全く異なっている。一言で言えば、教科書の比重は大幅に低くなってきていると言える。（p. 47）

教科書は教師及び学習者にとってコースの内容や展開の方向性の目安が一定程度示されるという安心感を与えるものである。（p. 48）

教科書の場合と反対に、副教材は学習者の多様化以後新しい意義が与えられ、以前と比べて格段に重い役割を果たすようになってきている。（p. 49）

「教科書を主教材、その他を主教材の不足部分を埋める副教材」とする形から「教科書は安心感を含めたニーズの一部を満たすもの、これまで副教材と言われていた教材は多様なニーズを満たすもの」という新しい役割分担の段階に移っていくと考えられる。（pp. 52-53）

32 単一・固定型の指導に対して、ニーズを中心とする学習者の多様性や教師あるいは教育機関の考え方に応じて、バラエティーやオプションを設定し可変型の運用をすること。（岡崎，1989，p. 15）

教師が教科書を使うことで、学習者に安心感を与え、それと同時に、多様な副教材を学習者に提供することにより、多様なニーズに応じ、コースデザインの柔軟化を実現することができるという岡崎（1989）の指摘は、20年以上も経った今日の日本語教育においても極めて重要であるといえよう。

岡崎（1989）以降、近年の日本語教育における教材論として、『新版日本語教育事典』（日本語教育学会，2005）では、教材は「教育・学習メディア」の一部として紹介されており、本研究と関連していると思われる要点を次のようにまとめている。

■ 教材

学習・教育を実現させるために有力な手立てとなるものの1つである。効果的に授業を行うための道具であると同時に、指導すべき内容を示すものでもある。教材には、そのコースの目的に沿った具体的な教育内容が指導順に配列された、コースの「仕様書」に相当するものと、ある教育内容に焦点を当てて、それがよく学べるように意図して作られたものという二つのタイプがある。教材を使用する際、再現性の可能性（生教材）や配布の必要性和タイミング（写真）、著作権の対応（音声・映像）などの注意が必要となる。（p. 895）

■ 教材シラバス

教育機関の性格や教育目的、学習者を考慮して作られた教材が最も使いやすい。しかし、どんなに優れた教材でも、時間の経過とともに古くなる。最も大きな影響を被るのは語彙シラバスと文末表現形式である。場面シラバスとトピックシラバスより、文法シラバスの変化が緩やかである。視聴覚教材やマルチメディア教材は、メディア環境の変化に大きく影響されるため、選択の際考慮する必要がある。（pp. 896-897）

■ 主教材・副教材・補助教材

主教材とは、あるコースのシラバスと内容の大部分をカバーする教材であり、授業においても中心的に扱われる。主教材の不足を補う、またはより円滑に理解をもたらし、練習を展開するために用いられるのが、副教材（複合シラバスにのっとるコースにおいて、主教材にはないシラバスをカバーするもの）や補助教材（主教材と副教材に示された学習項目をより効果的に学習できるよう作られたもの）である。主教材には教科書という冊子状の印刷物が利用されることが多いが、十分に機能させるためには、CDなどの音声情報を搭載した副教材も備えるといい。また、コースの目的・内容によっては、

教科書を主教材とせず、生教材（新聞、小説など）やマルチメディア材料（演劇、講演など）を主教材とする場合もある。副教材・補助教材には、主教材よりも幅広く、絵、CD、ウェブサイトなど、多様なものが利用できる。（pp. 897-898）

■ 教科書

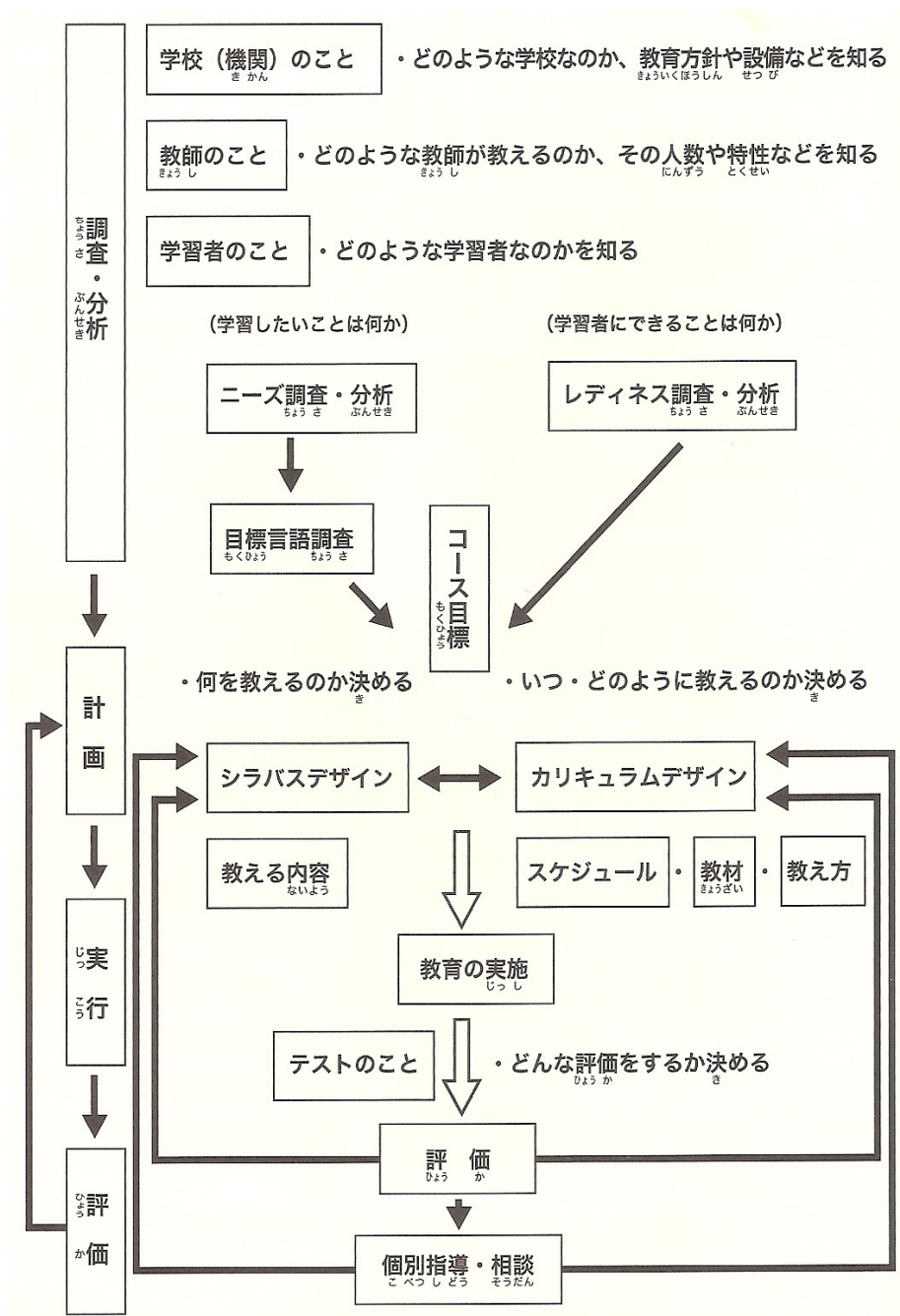
ある教育・学習目的のためにデザインされたカリキュラムに従って教育・学習内容を編成し、学習項目ないしシラバスを一定順序に配列し、印刷物などにまとめたものを教科書という。教科書の役割については、以下の3点である。①学習到達目標を具体的に表現し、学習者の予習・復習のよりどころとなる。②終了した際の達成感があることなどから、教育指導・学習活動の軸である。③学習者の多様化に合わせ、副教材や補助教材と組み合わせたりすることで、コミュニケーションの素材を提供する。

近年、教育の現場では、教師が「教える」ことを主導する立場から、学習者が「学ぶ」ことを重視する方向へと、教育・学習スタイルが変化していった。教師から学習者への知識移転を中心とする一方通行的・静的な学習観から、教師と学習者の相互交流的な学習活動を重視する動的な学習観へと移行するなかで、コミュニケーション能力を培うための有効な教材・メディア利用が求められている。

従来、「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」といわれてきたが、さまざまな教授メディアが選択できる昨今、教師には、「だれが、何を学びたいのか」「そのためにはどう教えるのか」という原点に戻り、主教材・副教材・補助教材を選択することが求められている。（pp. 899-900）

ここでは、教材の重要性や種類、また教科書を中心に記述されている。重要な観点としては、従来のように教師⇒学習者という教師主導型ではなく、教師⇄学習者という相互関係の中で教材について検討することである。すなわち「静的な学習観」から「動的な学習観」への移行を前提にした実践論の中で教科書・教材を捉え直すことの重要性が提起されている」（川上，2008，p. 11.）。

上に挙げた二つの教材論を見ると、教材はコース、シラバス、カリキュラムという三つの概念と深く関わっていることが分かる。この四概念の具体的な関係性について、国際交流基金（2006）では、【図5】のように表されている。



【図5】 コースデザインの流れ

(『日本語教師の役割・コースデザイン』, p. 8)

【図5】を見て分かるように、「コース目標」、「シラバスデザイン」と「カリキュラムデザイン」は、それぞれ岡崎（1989）でいう「何ニ基ヅキ」、「何ヲ」と「イツ・ドノヨウニ」のことである。教材はスケジュールと教え方と並び、カリキュラムデザインの一部として位置付けられており、全体的に見ると、コースデザインの計画段階に属していることが明らかとなった。そして、日本語教育学会（1991）では、教科書とカリキュラムデザインについて、次のように述べられている。

教科書を選択してから、カリキュラムをたてるというより、教科書がカリキュラムそのものであるという場合が多いようだが、これは本来逆になるべきものである。現実には、毎回コースに合った教材を作るということは時間の面からも大変なことであるから、既存の教科書にたよるというのもしかたがないと思うが、それでも主教材はその教科書、あるいはその改訂版を使うとして、副教材はコースに合わせたものを作成すべきであろう。（p. 17）

岡崎（1989）の見解とも重なるが、以上の指摘からは、①教科書がカリキュラムそのものになってはいけない、②副教材を用いることで、学習者の多様のニーズに満たすべきであるという2点が示唆される。更に、田中・斎藤（1993）では、「カリキュラム・デザインは、シラバスをどう学習者に教えるかを考える段階である。ここでは、まずシラバスの各項目を取捨選択、順序づけなどの整理を行い、つぎに学習者に教えるための具体的な活動を計画する。活動の設計には、その活動を行うために使う補助的な材料、つまり教材の選択、作成も含まれる」（p. 26）と述べられている。

以上の先行研究を踏まえると、学習者が多様化している今日では、日本語教育教材論における教材の捉え方について、簡潔にまとめると次のようになるのではないだろうか。教材は、①教師の役割の一つとされるコースデザインの一部である、②シラバスをどう学習者に教えるかを計画するというカリキュラムデザインの段階に属する、③コースデザインの柔軟化を可能にする役割を持っている。

6.2.4 中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）における教科書の役割

6.2.3 では、日本語教育の教材論を調べた結果、1980年代から始まる学習者の多様化の境に、教材の役割も変化していたことが明らかとなった。曹（2008）では、「海外の日本語

教育では、学習環境と教師構成³³の状況により、教科書の役割は大きい」(p. 1)と指摘されている。また、国際交流基金(2010)によると、世界の日本語教育現場における日本語教育上の問題点として、「適切な教材の不足」が最も大きいとされている。この項では、第3章から第5章の調査結果に基づき、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育にとって、教材に対する捉え方や果たしている役割について述べたい。

結論から述べると、敬語教育をはじめ、中国の大学日本語専攻教育全体においては、副教材も補助教材も一般的に使われていないため、教科書及び対応する教師用指導書が主な教材となっていることが推察される。殊に教科書の役割は大きく、ほぼコースデザインのすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配しているといってもよい。すなわち、中国の大学日本語専攻教育(主に敬語教育)においては、教科書はいまだに、6.2.3で示した学習者が多様化する前の役割を果たしている傾向が強いといえる。ここからは、敬語教育を中心に、第3章から第5章の調査結果に基づき、中国の大学日本語専攻教育において、コースデザインの「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」という三つの要素が、それぞれどのように教科書と関わっているのかについて、詳しく述べていきたい。

まず、「何ニ基ヅキ」つまりコースの目標については、敬語教育の場合、現場では学習者に表現形式を身につけさせることが主な目標となっている。第5章の調査結果を見て分かるように、このようになったのは、使用されている教科書における敬語の扱い方と直接関わっているといえよう。運用力を高めたいという学習者のニーズが共通して挙げられているにもかかわらず、教科書では表現形式に重点が置かれているため、現場で行われている敬語教育の目標もなかなか見直されていないと考えられる。また、教師が敬語を教える際の言語観、言語教育観、あるいは言語学習観も、あまり議論されていないようである。それは、教科書が敬語の扱い方を通して言語観、言語教育観、あるいは言語学習観を示す役割を果たしているため、教師はそれに影響され、深く考えずに従ってしまっているためであるといえよう。

次に、「何ヲ」つまりシラバスデザインについては、敬語教育の場合、取り上げられている学習項目はほとんど教科書によって与えられている。敬語の仕組みに関する説明から、各項目の説明や練習問題まで、ほぼ教科書どおりに授業を進めている教師が多いというこ

³³ 非母語話者教師が多い。

とが、第3章と第4章の調査によって確認されている。また、第5章の分析対象となった教科書は、構文シラバスや機能シラバス、話題シラバスなど様々であったが、共通しているのは、教科書がそのままシラバスとして使われていることである。つまり、教師は敬語を指導する際、教科書に書かれている内容を一つ一つ取り上げている。

そして、カリキュラムデザインの一つである「イツ」についても、現場では敬語のどの項目をどの段階で教えるか、または尊敬語→謙讓語→丁寧語という順番で指導するなど、教科書に示されたまま敬語教育が行われている。また、敬語のすべてを初級最後の1～2週間で終わらせないと、半学期間で何課までという教学任務が完了しないというやり方も教科書がカリキュラムデザインを支配している表れである。更には、第3章と第4章の共通意見として、敬語教育の実施時期（初級最後）と期間（1～2週間）に不満が寄せられ、改善してほしいという声があった。以上のことから、敬語教育のカリキュラムがほとんど教科書によって決定されている傾向がうかがわれる。

最後に、カリキュラムデザインのもう一つである「ドノヨウニ」についても、現場では教科書に与えられている本文や練習問題によって、敬語教育が行われている。第3章と第4章で共通して語られた改善への期待として、教師主導型の講義式授業と運用力につながる練習問題を改善してほしいという声があった。その背景としては、教科書における敬語の扱い方が教師主導型の講義式授業に適していることと、言い換え・書き換えといった練習問題が最も多いことがあると推察される。このことから、教科書は「ドノヨウニ」にも大きな影響を及ぼし、それを左右するといってもいいほどの役割を担っているといえるだろう。

以上、第3章から第5章の調査結果と照らし合わせ、コースデザインの観点から、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育と教科書の関係を分析してみた。その結果、教科書は敬語教育のコースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配しているということが明らかとなった。すなわち、6.2.2で挙げられた学習者が多様化する前の日本国内における教材の役割とほぼ同様であることが浮き彫りとなった。

ここで1点補足しておきたいのは、以上の分析から明らかとなった教科書とコースデザインの関係性は、敬語教育には限らない可能性が高いということである。本研究は敬語教育に焦点を当てており、第3章から第5章の調査も敬語教育を中心に行ったため、敬語以外の部分に関しては、裏付けが不十分である。しかし、中国の大学日本語専攻教育の学習

者と教師を共に経験している者からみれば、上述した教科書とコースデザインの関係性は、敬語教育だけではなく、ある程度中国の大学日本語専攻教育全体に共通しているといえる。堀口（2003）においては、中国の大学日本語専攻教育について、「多くの大学では中国の大学で作成した教科書を使い、授業はかなり忠実に教科書に従って進められる」（p. 12）と指摘されているように、中国の大学日本語専攻教育においては、今でも多くの現場では教科書の支配力が依然として大きいと報告されている（曹，2008；葛，2014b など）。このことから、敬語教育を通して確認された教科書とコースデザインの関係性は、ある程度中国の大学日本語専攻教育全体に共通している傾向がうかがわれる。

ただ、6.1.6 の「敬語教育に苦手意識を抱く教師」においても述べているが、現場教師の多くは、自身の敬語に対する自信のなさなどが原因となり、他の学習項目と比べ、敬語を教える際、より苦手意識を抱いているようである。その結果、自分の行っている敬語教育に不満を感じつつも、どのように改善すればよいのか分からず、最終的に教科書に頼りがちになっているという。このことを踏まえて考えると、他の学習項目と比べ、敬語教育に対する教科書の支配力はより大きいのではないかと推察される。

6.2.5 教科書の役割の相違から得られた示唆

6.2.3 と 6.2.4 で述べてきたことを踏まえ、次のような相違点が見られたといえよう。日本語教育教材論においては、教科書を中心とする教材は、教師の役割の一つとされるコースデザインの一部であり、シラバスをどう学習者に教えるかを計画するというカリキュラムデザインの段階に属し、コースデザインの柔軟化を可能にする役割を持つべきだと考えられている。その一方、中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）においては、教科書はコースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配している傾向が見られる。

この項では、まずは以上の相違点が生じた原因について考えた結果、その背景には以下の3点が深く関わっていると思われる。

1点目は、中国の大学日本語専攻学習者の多様化の実情である。岡崎（1989）では、「1980年代に入る以前、つまり学習者が多様化する前の日本語教育においては、教材とは、主に教科書及び文法のハンドアウト、そして宿題及び録音テープであった。教科書はコースデザインのすべてであった。しかし、学習者のニーズが単一のものであったため、教材も単

一のセットで十分機能できたのだ」(p. 10)と述べられている。このことから、教材の役割は学習者の多様化と密接な関係があり、中国の大学日本語専攻教材を論じる際も、まず学習者の多様化について考える必要があるといえよう。岡崎(1989)では、学習者の多様化について、以下の要素が挙げられている(p. 9)。a. 目的、b. 職業、c. 出身地域、文化、言語、d. 年齢、e. 日本語学習経験、f. 日本語学習環境及び学習期間。そこで、中国の大学日本語専攻教育の学習者をこれらの要素に照らし合わせて検討してみる。

まず目的に関していえば、学習ニーズとも関連していると思われるが、近年、特に2000年半ば頃から、中国における日本語学習者が急激に増加し、それに伴い、学習者の目的も多様化してきた。国際交流基金が運営するウェブマガジンである『をちこち Magazine』³⁴の2013年12月の記事においては、次のように述べられている。

中国の日本語学習者の学習目的として、日系企業等への就職、日本留学、受験、日本語でのコミュニケーション、今の仕事での必要など、実利・実用を目的にあげる学習者が多いことである。もう一つは、日本のアニメ・マンガ・ファッションなどポップカルチャーへの関心が高いことは他の諸外国と同様であるが、そのほかにも、言語としての日本語、歴史・文学、政治・経済・社会、科学技術への関心などを学習目的としてあげていることからわかるように、中国の学習者は日本への興味・関心が広範かつ具体的で、より深い対日理解を求めているといえる。

上述したことから、中国における日本語学習者の多様な目的がうかがわれるが、その中で本研究の対象である大学における日本語専攻の学習者に関しても、田中・張(2011)では、学習者が多様なニーズを抱えているため、それに対応する日本語教材開発の必要性が訴えられている。すなわち、目的の面における中国の大学日本語専攻教育の学習者の多様化が近年現れつつあるといえよう。

次に、職業に関しては、中国では在職中の社会人が正規の4年制大学に在籍するのが一般的に認められていないため、中国の大学日本語専攻教育の学習者は、ほぼ全員大学生であると考えるよくだろう。そのため、様々な職業を持つ日本国内の学習者とは異なり、職

³⁴ 前身である『をちこち(遠近)』は、日本で唯一の国際交流専門誌で、国際交流基金(ジャパンファウンデーション)が隔月で発行していたが、2010年8月よりWEBマガジン『をちこち Magazine』として新しく発刊することとなった。

業の面における多様化はあまり見られないといえよう。そして、出身地域、文化、言語に関しては、近年他国籍の大学生もまれにいと報告されているものの、中国の大学日本語専攻教育の学習者は、ほぼ全員中国籍であるのが現状である。よって、出身地域、文化、言語の面においてもそれほど多様化が見られないといえよう。次の年齢に関しては、中国教育部は2000年以降、大学入学の年齢制限を撤廃したため、中国の大学日本語専攻教育の学習者は年齢層も今後多様化してくると予想されるが、現状ではまだ18歳～25歳に集中している傾向が見られる。よって、年齢の面においては、まだ顕著な多様化が現れていないと考えられる。

次に、日本語学習経験に関しては、国際交流基金（2014）によると、中国の大学日本語専攻教育の学習者について、大学入学時に日本語をゼロから始めて、3年次に日本語能力試験N1に達する者が多い。一方、大学に進学する前に、初等または中等教育として、日本語を学習した者もいる。そのため、中国の大学日本語専攻教育の学習者も入学前に学習経験がない者とある者という二つのパターンに分けられ、人数的に前者のほうが多いと推察される。最後に、日本語学習環境及び学習期間に関しては、中国の正規4年制大学のほとんどが、全日制となっているため、学習者は大学に提供されている宿舎に住んでおり、学習環境がほぼ同様であると予想される。学習期間についても学習者全員ほぼ同じ授業を受講しているため、大きな多様化は見られないといえよう。

以上をまとめると、中国の大学日本語専攻教育の学習者は、近年、目的をはじめ各要素から多様化が現れ始めているものの、日本国内の日本語学習者と比べ、多様化がそれほど進んでいないとことが分かる。この結果を踏まえて考えると、6.2.4で明らかとなった教科書はコースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配しているという現状にも一理があるのではないかと思われる。一方、近年学習目的の多様化が著しくなってきたことと、今後他の要素の多様化も今まで以上に進んでくる可能性が高いことに備え、今は中国の大学日本語専攻教育における教材について見直すときかもしれない。

2点目は、中国の大学日本語専攻教育の画一性が教材と教師に与える影響である。学習者の多様化以外に、中国の大学日本語専攻教材を論じる際、無視できない要素として、教育の画一性が挙げられる。譚（2004）では、中国の大学日本語専攻教育現場に『教育要綱』が多大な影響を与えていることが指摘されている。また、葛（2012）においても、『教育要

綱』は中国の大学日本語専攻教育のスタンダードに当たり、大学4年間にわたるマクロな教育理念や目標から、半年ごとの各学期のシラバスまで記載されていることが指摘されている。更に、譚他（2008）では、『教育要綱』は中国の大学日本語専攻教育において最も重視されており、中国の大学日本語専攻教育における唯一の「基準」であることは疑う余地はないと述べられている。

以上の先行研究からは、『教育要綱』が中国の大学日本語専攻教育に与えている多大な影響が確認されたと同時に、日本語専攻教育の画一性もうかがわれるだろう。すなわち、日本における日本語教育においては、教育理念や目標、シラバスが教育機関によって様々であるのに対し、中国の大学日本語専攻教育においては、あらかじめ『教育要綱』によって全国统一されている。「はじめに」の【中国の大学における日本語専攻教育の指導要綱】で示されているように、基礎段階（1・2年次）と高学年段階（3・4）に分け、目標が規定されているほか、大学4年間にわたり、各学期で扱うべきシラバスも明記されており、基本的には各大学はそれに従うことが多い。本研究ではこれを大学間の画一性と呼んでいる。

大学間の画一性と対照に、大学内の画一性も見られるが、それは主にカリキュラムに反映されている。まず使用する教材は、高学年段階の選択科目以外は、多くの場合大学から指定されることになっている。また、クラス間の統一を図るために、スケジュールもあらかじめ規定されており、教師は基本的に指定された教科書とスケジュールに従って教えているのが現状である。唯一決定権が教師側にあるのは、教え方であるといえよう。筆者の調べた限りでは、教育目標、シラバス、教科書とスケジュールに関する規定を守れば、具体的にどのような授業活動を行い、どのように練習させるのかといった教え方まで指定する大学は恐らく少ないだろう。しかし、第5章の意見を見ると、特に教師自身も強い苦手意識を抱いている敬語を教える場合、準備の負担や授業時間の制限などが原因となり、教え方まで画一的になってしまっている傾向が見られる。

以上をまとめると、日本語国内の日本語教育と比べ、中国の大学日本語専攻教育においては、教育目標やシラバス、カリキュラムにおける画一性が求められている傾向が強いといえよう。その結果、大学から指定された教科書は、『教育要綱』に規定されている教育目標やシラバスを反映させ作成された上に、スケジュールにも明確な目安を提示しているため、それが使えば問題はないだろうという教師の意識が次第に強まると予想されよう。すなわち、中国の大学日本語専攻教育において求められている画一性も、教科書はコースデザインほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとん

どを提供し、支配しているという現状を招いてしまった要因の一つであると考えられる。教科書における扱い方を見直す際、これも考慮に入れる必要があるといえよう。

3 点目は、中国の大学日本語専攻教育におけるコースデザインに対する教師の意識である。【図 5】に示しているように、国際交流基金（2006）では、コースデザインを調査・分析→計画→実行→評価という四段階に分けており、このすべてが教師の役割であると位置付けられている。すなわち、教師は調査と分析を踏まえた上でコースの目標を決め、それに基づき、教える内容を確定し、スケジュール、教材と教え方を決定した後、授業を実行し、最後に評価を行うという一連のことを担当しなければならない。

しかし、中国の大学日本語専攻教育においては、自分の役割について、教え方を考え、授業を実行した後、評価するという部分しか認識していない教師が多いのではないだろうか。これには、一つ目と二つ目の問題が関わっていると推察される。学習者が急増する 2000 年半ばまでは、いわゆる岡崎（1989）でいう単一の時代では、教科書はコースデザインのすべてであるため、教師はいかに教え方を工夫し、指定されて教科書を有効に使えるかだけを考えればよいといえる。また、教育全体の画一性も求められるため、教師は教え方を考え、授業を実行した後、評価するという部分しか考える権利は与えられていないといってもよいだろう。その結果、教師はコースデザインという概念もあまり知らず、その全体が自分の役割であるということも認識していない可能性が高い。従来の教育事情から考えれば、ある意味では当然のことであるかもしれない。

しかし、修・李（2011）では、中国の大学日本語専攻教育は前代未聞の転換期を迎えており、様々な新課題に直面していると指摘されているように、2000 年半ば以降では、学習者の多様化が進むにつれ、様々な面において、中国の大学日本語専攻教育の改革が急務となってきた。その一つが教材に対する捉え方であり、例えば教師にコースデザインという概念を認識させ、コースデザインの中で自分の役割や教材の関係について見直させるなどが挙げられるだろう。これについては、次節で詳しく述べることにする。

以上で述べてきた 3 点を簡潔にまとめると、「学習者の多様化がそれほど進んでいない」、「中国の大学日本語専攻教育には画一性が求められる」、「コースデザインなどに対する教師の認識がまだまだ低い」という三つの事情が、中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）における教科書が、いまだに学習者が多様化する前の役割を果たしているという現状

の背景にあるのではないかと筆者は見ている。

そこで、筆者は次のようなヒントを得ることができた。中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）においては、教科書は決定的な役割を果たしているという現状を逆手にとれば、敬語教育の改善を目指すためには、まず教科書に焦点を当てるべきだという本研究の提案の必然性が示唆されるのではないだろうか。つまり、敬語教育において、教科書の担っている決定的な役割を逆利用すれば、敬語教育の改善を大きく促進することができるのではないかということである。

まとめると、中国の大学日本語専攻教育は独自の事情を抱えているため、敬語教育の実施において、教科書が決定的な役割を果たしていることが確認された。今後、学習者の多様化が進むにつれ、教科書の果たすべき役割についての見直しが求められる一方で、現状では、敬語教育の改善を目指すためには、教科書の担っている決定的な役割を逆利用する必要性が示唆される。すなわち、コースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配している教科書における敬語の扱い方を再考しなければ、敬語教育の改善は始まらないと思われる。このことから、中国の大学における日本語専攻教育における敬語教育を改善する第一歩として、教科書に焦点を当てるべきだと考えられるのである。

第3節 教科書の観点が敬語教育に改善をもたらす可能性

第2節では、まず第3章から第5章の調査結果及び先行研究からうかがわれる教材の重要な位置づけが契機となり、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善するためには、まずは教科書に焦点を当てるべきだと主張した。その後、日本語教育における教材論を踏まえた上で、教科書は中国の大学日本語専攻教育における敬語教育においては、決定的な役割を果たしていることが明らかとなった。更に、その背景には、「学習者の多様化がそれほど進んでいない」、「中国の大学日本語専攻教育には画一性が求められる」、「コースデザインなどに対する教師の認識がまだまだ低い」という三つの事情が関わっていることを指摘した。こうした現状から、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の改善を目指すためには、まず教科書に焦点を当てるべきだという本研究の主張の必然性を示した。

本節では、教科書の観点が中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に如何なる改善

がもたせるのかについて検討したい。具体的には、教科書における敬語の扱い方を再考することにより、敬語教育のコースデザインの「何ニ基ヅキ」（目標）、「何ヲ」（内容）、「イツ・ドノヨウニ」（時期と期間・方法）、そして、教材・教師・学習者のそれぞれが、どのように見直され、それがどのように敬語教育に改善をもたらすのかについて述べる。すなわち、本研究が敬語教育を改善する糸口として選んだ教科書という観点は、第1節で指摘した七つの問題点とどのようにつながっているのかについて、筆者の考えを述べたい。

なお、最初に述べておきたいのは、教科書における敬語の扱い方を再考することは、最終目的ではなく、あくまでも敬語教育の改善を目指すための糸口だということである。そのため、教科書を再考すればすべて解決するのではなく、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の全体がよりよい方向に向かうよう、次につなげていかなければならない。つまり、教科書における敬語の扱い方を再考するだけでは敬語教育に存在する七つの問題点がすべて解決されるわけではないが、それぞれの問題点が改善される方向に導く大事な第一歩となるということなのである。

6.3.1 教科書を通して敬語教育の目標を見直す

岡崎（1989）では、コースデザインの主要素として、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」という三つが挙げられている。6.2.4では、第3章から第5章の調査結果に基づき、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の場合、教科書はコースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配していることが判明した。このことから、現行の教科書における敬語の扱い方を再考することにより、敬語教育の「何ニ基ヅキ」（目標）、「何ヲ」（内容）、「イツ・ドノヨウニ」（時期と期間・方法）も、それに影響され、見直されると期待できるだろう。以下、6.3.1から6.3.4にかけて、教科書を通して、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の目標・内容・時期と期間・方法のそれぞれを具体的にどのように見直せばよいのかについて述べていく。

一つ目、「何ニ基ヅキ」つまり敬語教育の目標については、以下の見直しを実現できるよう、教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと提案する。形式面に偏っている現状から、学習者が実際の場面において、適切に敬語を使う能力を育成することを目指すよう見直されるべきである。これは、6.1.1で指摘した「一貫しない教育目標」という問題点と関連しているといえよう。

「一貫しない教育目標」については、6.1.1でも述べているように、元々は『教育要綱』の2段階方針に起因しているが、教科書と教師用指導書における敬語に関する記述を見ると、1段階目（表現形式を身につける）にとどまっており、2段階目（運用能力を育成する）が反映されていないことが分かる。その結果、多くの教師は教科書に従い、表現形式に偏る敬語教育を行っているため、学習者に共通して見られる運用能力を高めたいというニーズとずれてしまっているのが現状である。しかし、言うまでもないが、表現形式の記憶は、あくまでも敬語を使うための準備段階であり、表現形式を覚えたからといって、敬語が適切に使えるとは限らない。

そこで、第3章で共通して挙げられた敬語の運用力を高めたいという学習者のニーズに合わせ、教科書における敬語の扱い方を再考しなければならない。具体的には、以下のような試みが考えられるだろう。例えば、表現形式の記憶は、敬語学習の最終目的ではなく、あくまでも敬語が使えるようになるための準備段階であることや、敬語教育の最終目標は、学習者が様々な場面において、適切に敬語が使えるようになることを教科書または教師用指導書の記述を通して明記することなどである。

もちろん、根本的には『教育要綱』における2段階方針を見直す必要があると思われるが、6.2.1でも述べたように、『教育要綱』の作成や改訂などは、中国の教育部高等教育機関日本語専攻教育指導委員会によって行われるため、提案を試みることはできるが、記述を改めることは難しいと予想される。また、『教育要綱』は中国の大学日本語専攻教育のスタンダードとして、マクロな視点に立って教育全体の方向性などを示すために作成されており、敬語に関する具体的な記述は極めて少ない。したがって、本研究では『教育要綱』ではなく、まずは現場教師により影響を与えやすいと思われる教科書と教師指導書における敬語の扱い方を再考すべきだと考える。

なお、6.2.3で確認したように、日本語教育教材論におけるコースデザインの観点からみれば、本来であれば、コース目標というのは、教師が学校・教師・学習者という三つの要素を調査・分析した上で、設定するものであることが分かる。しかし、中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）においては、教科書が決定的な役割を果たしているため、「何ニ基ヅキ」教えるかを提供し、支配しているのが現状である。また、現場教師の多くもほぼ教科書どおりに敬語を指導していることから、自分が教育目標を設定するという認識はあまりないと予想される。したがって、6.1.1で指摘した「一貫しない教育目標」という問題点を改善するためには、まずは教科書の観点から取り組みを検討すべきだと提案した

い。

6.3.2 教科書を通して敬語教育の内容を見直す

コースデザインの二つ目の要素、「何ヲ」つまり敬語教育の内容については、以下の見直しが実現できるよう、教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと提案する。表現形式に関する説明や練習が授業内容のほとんどを占めている現状から、意識面・形式面・運用面をバランスよく扱うことを目指すよう見直されるべきである。これは、6.1.3 で指摘した「表現形式に偏る教育内容」という問題点とつながっていると思われる。

「表現形式に偏る教育内容」については、現状では、中国の大学日本語専攻教育のシラバスは、基本的には全国統一で、『教育要綱』に規定されている。そのため、教科書も教師用指導書も、表現形式に主眼を置く『教育要綱』における敬語教育のシラバスから影響を受け、意識面と運用面についてあまり扱っていない傾向が見られる。その結果、教科書に頼って敬語を教えている教師も形式面に偏ってしまい、意識面と運用面にあまり触れていないという現状を招いてしまっているといえよう。

そこで、本研究で提案したいのは、『教育要綱』における敬語教育のシラバスに束縛されず、表現形式重視の敬語教育にならないよう、教科書と教師用指導書における敬語の扱い方を再考することである。具体的には、以下のような試みが考えられるだろう。例えば、敬語の意識面・形式面・運用面の全般を考慮に入れた新たなシラバスを教科書と教師用指導書を通して示すことである。表現形式だけでなく、どうして日本語社会では敬語が必要なのかといった敬語を使う前提となる意識面も、実際の場面でどのように敬語を適切に使うのかといった運用面も、敬語を教える際、重要で不可欠な内容であるため、教科書及び教師用指導書においてそれと関連する説明や練習問題を取り入れることが挙げられる。

なお、6.2.3 で確認したように、日本語教育教材論におけるコースデザインの観点からみれば、「何を教えるのか」というのはシラバスデザインの範疇に入ることが分かる。理想的なのは、現場教師がコース目標に基づき、計画段階で自ら決めることである。しかし、中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）においては、教科書は決定的な役割を果たしているため、「何ヲ」教えるかを提供し、支配しているのが現状である。また、現場教師の多くもほぼ教科書どおりに敬語を指導していることから、自ら教育内容を決めなければならないとは認識していないことがうかがえる。したがって、6.1.3 で指摘した「表現形式に偏る教育内容」という問題点を改善するためには、まずは教科書の観点から取り組みを

検討すべきだと考える。

6.3.3 教科書を通して敬語教育の時期と期間を見直す

コースデザインの三つ目の要素のうち、「イツ」つまり敬語教育の時期と期間については、以下の見直しが可能であるよう、教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと提案する。初級最後の1～2週間で、集中的・短期的に指導している現状から、初・中・上級にわたり、段階的に、分散的に敬語を取り上げるよう見直されるべきである。これは、6.1.2で指摘した「不適切な教育時期と期間」という問題点と重なっていると思われる。

「不適切な教育時期と期間」については、第5章の調査結果を通して、敬語教育が初級最後の短期間に集中している主な原因が、教科書における敬語の扱いが初級の最後にしか現れていないためであることが明らかとなった。したがって、現場教師が中・上級で敬語教育を行いたくても、教科書において扱われていないため、授業時間も指導内容も配分されていないのが現状である。

そこで、本研究で提案したいのは、教科書と教師用指導書において敬語を扱う際、初級の最後に集中的・短期的に出現させるのではなく、初・中・上級にわたり、段階的・分散的に敬語を取り上げるよう再検討することである。具体的には、以下のような試みが考えられるだろう。例えば、学習者の日本語レベルや学習ニーズなどに応じ、初級の教科書においては、比較的使いやすい「丁寧語」と「美化語」を扱い、中級の教科書においては、「尊敬語」と「謙譲語」を導入し、上級の教科書においては、理解しにくい「丁寧語」を取り上げることや、就職活動などに備え、敬語を必要とする学習者を想定し、中・上級の教科書においては、面接やインターンシップなどの場面における敬語の会話例や文章などを取り入れることなどである。

なお、6.2.3で確認したように、日本語教育教材論におけるコースデザインの観点から見れば、授業のスケジュールは、教材・教え方と並び、カリキュラムデザインの一部であることが分かる。一般的には、調査・分析に基づき、設定したコース目標に基づき、次の計画段階では、教師が教える内容を決め（シラバスデザイン）、教えるスケジュールや使用する教材、及び教え方を決める（カリキュラムデザイン）という流れとなっている。しかし、中国の大学日本語専攻教育においては、ほとんどの現場では教科書はあらかじめ指定されており、スケジュールも教科書に合わせて、大学から規定されることが多いのが現状である。そのため、それを打ち破り、教師自身が授業のスケジュールを立て直すという

のは、なかなか容易にできることではないと予想される。したがって、6.1.2 で指摘した「不適切な教育時期と期間」という問題点を改善するためには、まずは教科書の観点から取り組みを検討すべきであろう。

6.3.4 教科書を通して敬語教育の方法を見直す

コースデザインの最後の要素、「ドノヨウニ」つまり敬語教育の方法については、以下の見直しを実現できるよう、教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと提案する。教師主導型で、知識の一方的教授を中心とした教え込みの授業が主流であるという現状から、学習者が敬語について自ら考え、主体的・自律的に敬語を学び、授業に関わるよう見直されるべきである。これは、6.1.4 で指摘した「学習者の主体性を重んじない教育方法」という問題点と関わっていると思われる。

「学習者の主体性を重んじない教育方法」については、現状の敬語教育は、教師主導型の講義式が主流であり、練習問題も言い換え・書き換えなどが多く、学習者の主体性が重んじられていない傾向が見られる。その背景には、関連教材における敬語の体系知識、説明項目、練習問題は、教師による一方的な説明が中心となる講義式授業、つまり教師主導型に適しているものが多いことと直接関わっていることが、第5章の分析を通して明らかとなった。

そこで、本研究で提案したいのは、教師主導型に適するという従来の教科書と教師用指導書における敬語の扱い方を改め、学習者主体型に適する扱い方を考案することである。具体的には、以下のような試みが考えられるだろう。例えば、教師による知識伝授式の文法説明の代わりに、学習者が主体となって自ら考え、学んでいけるような発見型課題を設定することや、表現形式を機械的に練習するための言い換え・書き換えなど、教師主導型の練習の代わりに、敬語をコミュニケーション場面において扱うことのできる活動型練習を積極的に教材に取り入れることなどが挙げられる。

なお、前項で述べたように、日本語教育教材論におけるコースデザインの観点からみれば、教え方もカリキュラムデザインの一部であることが分かる。本来であれば、教師がカリキュラムデザインの段階で、教えるスケジュールや使用する教材と一緒に決めなければならないのが教え方である。前述したように、中国の大学日本語専攻教育の現状では、教える内容もスケジュールも、そして用いる教科書も、教師が自由に決められず、規定される場合が多い。それに対し、教え方まで指定する大学は恐らく少ないのではないかと思

われる。つまり、内容、スケジュールと教科書に関しては規定に従えば、具体的にどのような授業活動を行い、どのように練習させるのかといった教え方に関しては、教師が自由に決められるといえよう。にもかかわらず、準備の負担や授業時間の制限などが原因となり、教科書に従うのに慣れてしまっている教師は、教え方まで教科書に支配されてしまい、改善しようと思っても、なかなか実行できていないのが現状である。この現状を改善するためにも、教科書の観点から取り組みを検討すべきであると考えられる。

6.3.5 教科書を通して敬語教育の教材を見直す

以上の四項では、コースデザインの主要素である「何ニ基ヅキ」、「何ヲ」、「イツ・ドノヨウニ」を軸に、教科書における敬語の扱い方を再考することにより、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の目標・内容・時期と期間・方法のそれぞれが見直され、最終的には敬語教育に改善をもたらす可能性について詳しく述べた。

本項では、6.1.5 で指摘した「再考すべき教材における敬語の扱い方」という問題点の改善について、教科書の観点から検討してみる。明らかなことではあるが、教科書は教材の中に含まれているため、教科書における敬語の扱い方を再考することは、「再考すべき教材における敬語の扱い方」という問題点の改善に直結しているといえよう。例えば、第5章の第1節で明らかとなった現行の教科書における敬語に関する記述（「敬語の必要性と重要性について記述されていない」、「敬語の種類に関する記述の不統一さ」、「人間関係が不明な例文が多く、場面との関連性が薄い」、「言い換え・書き換えといった形式面に着目した練習問題がメインである」などの問題点が存在する）を改めることは、そのまま敬語教育の教材の見直しとなり、敬語教育の改善につながると考えられるだろう。

そして、ここでは、教材について、教科書以外にも一つの観点を取り入れたい。6.2.3でも述べているが、岡崎（1989）や『新版日本語教育事典』（日本語教育学会，2005）をはじめ、日本語教材論においては、教科書を代表とする主教材だけでは、対応しきれない部分について、副教材と補助教材を活用することで補われるという指摘が多く出されている。特に、敬語の場合、意識面・形式面・運用面にわたり、学習内容が多いため、教科書ですべて扱うのがなかなか難しいと予想される。そこで、学習者の多様なニーズに対応し、適宜に副教材と補助教材を使用することで、教科書の不足を補う効果が期待される。また、授業で扱わなくても、自律学習の材料として、学習者が教室外において自律的に敬語を学ぶ機会を提供するためにも、副教材と補助教材の活用は求められるだろう。

しかし、中国の大学日本語専攻教育においては、現場教師が敬語を指導する際、教科書だけに頼る傾向が見られる。そのため、副教材と補助教材に関する情報は不足していると予想される。そこで、本研究で提案したいのは、教科書を通して、適宜に副教材と補助教材を示すことである。具体的には、教科書において敬語を扱う際、敬語学習に役に立つと思われる参考書、DVD、ウェブサイトなどを紹介したり、学習者の多様なニーズを想定し、それぞれのニーズに合わせ、必要な情報源を提供したりするなどの工夫が挙げられる。

以上をまとめると、現行の教科書における敬語に関する記述を改めることと教科書を通して適宜に副教材と補助教材を示すことにより、敬語教育の教材が見直され、最終的には敬語教育に改善をもたらすことになるということである。

6.3.6 教科書を通して教師に気づきを与える

本項では、教師に着目し、教科書における敬語の扱い方を再考することにより、どのような見直しが可能となるのか、またそれが敬語教育の改善にどうつながっているのかについて検討したい。

まずは、6.1.6 で指摘した「敬語教育に苦手意識を抱く教師」という問題点については、第4章の語りを見て分かるように、教師自身も大学時代、従来の教え方で敬語を教わったため、学習者と同様な困惑点と困難点を感じているという。そのため、自分の行っている敬語教育に不満を感じつつも、苦手意識があるゆえに、どのように改善すればよいのかが分からず、最終的には教科書に従って敬語を教えているというやり方に戻るといった繰り返しになっているようである。

教師の苦手意識を改善するためには、6.1.6 においても述べたように、敬語や敬語教育の専門家を招き、特別講義やワークショップなどを開催したり、現場の教師によって定期的に研究会や勉強会を行い、互いに敬語や敬語教育に関する悩みや心得を共有したりするなど、教師勉強会や研修会を行うという方法が挙げられる。しかし、その実現には、多大な人力・財力・物力が必要となり、なかなか容易にできることではないといえよう。

そこで、本研究で提案したいのは、教師にとってより身近にある存在を利用する方法、すなわち敬語教育を行う際、拠り所となっている教科書と教師用指導書を通して、知識や情報を提供し、気づきや示唆を与えることである。具体的には、以下のような試みが考えられるだろう。例えば、教師の敬語教育に対する苦手意識が解消されるよう、まずは教科書における敬語の扱い方に見られる問題点と不足点を訂正・補足すること。また、教師に

徐々に自分自身の敬語、そして敬語を指導することに自信を持ってもらえるよう、教師用指導書においても、敬語教育を行う際、生じうる悩みなどを取り上げることで、気づきや示唆を与えること。更には、教師用指導書などを通して、敬語教育の改善に役立つと思われる情報や資料などを提供し、教師に自分の敬語教育について考え直すきっかけを作ることなど。このように教師の苦手意識を考慮し、教科書と教師指導書における敬語の扱い方を再考することで、敬語教育の改善につながると思われる。

そして、教科書や教師用指導書を通して、教師に気づきや示唆を与えるという提案については、ここで一つ補足しておきたい。これは敬語教育に対する苦手意識の改善に結びつくだけでなく、教師にとって、自身の教育観や教科書に対する捉え方、教師の役割に対する認識など、様々な面において、意識変化を促す重要な手段にもなるのではないかと思われる。一つ具体的な例を挙げると、例えば6.2.5でも述べているが、日本語教育教材論においては、教科書を中心とする教材は、教師の役割の一つとされるコースデザインの一部だと位置付けられるのに対し、中国の大学日本語専攻教育（殊に敬語教育）においては、いまだに教科書は、コースデザインのほぼすべてであり、決定的な役割を果たしている。その裏には、「コースデザインなどに対する教師の認識がまだまだ低い」ということが関係しているのではないかと指摘した。

教師の認識を高めるためには、どうすればよいのか。まず考えられるのは、専門家を招き、特別講義やワークショップ、または教師研究会や勉強会の開催であるといえよう。実際に、国際交流基金（2014）においても、「2013年8月に、中国日本語教学研究会が主催した「教師の専門性の発展を目指す大学日本語中核的教師の研修プロジェクト」の開催を機に、同研究会の附属組織である「日本語教育専門分会」が設立された。今後、日中両国の専門家を巻き込みながら、中国における日本語教育研究及び日本語教育支援事業の持続的・計画的な発展に向けて、中核的役割を担うことが期待される」と報告されている。また、近年中国では教師研修の必要性和重要性が注目されるようになるにつれ、「国際交流基金北京日本文化センターによる全国大学日本語教師向け研修会」、「国際交流基金北京日本文化センターによる地域巡回教師研修会」、「オンライン大学教師研修」などが定期的に行われているようである。しかし、前述したように、このような研修プロジェクトの開催には、多大な人力・財力・物力が必要となるため、なかなか容易に、そして頻繁にできることではないと推察される。また、研修会への参加は、各大学から代表者が派遣されるが、教師自身の意思に任せることが多く、実施期間も扱うテーマや参加人数なども限られてい

ると予想される。

そこで、本研究で提案したいのは、教師が日常的に拠り所としている教科書と教師用指導書を通して気づきや示唆を与えることにより、徐々に教師の意識変化を促すという方法である。例えば、コースデザインの考え方にに基づき、教科書の構成や内容を考えたり、教師用指導書においてコースデザインに関する知識を取り上げたりするなど。教師はそれを使用することで、コースデザインについて考えさせられ、徐々に意識化が促進されると期待される。

6.3.7 教科書を通して学習者の自律学習を促す

本項では、学習者に着目し、教科書における敬語の扱い方を再考することにより、どのような見直しが可能となるのか、またそれが敬語教育の改善にどうつながっているのかについて検討したい。

まずは、6.1.7 で指摘した「教室内の指導に強く依存する学習者」という問題点については、第3章の語りを見て分かるように、多様かつ煩雑な表現形式に嫌悪感と抵抗感を抱いてしまった学習者は、敬語の必要性和重要性に対する認識が低い。そのため、多くの困惑点と困難点を抱えているにもかかわらず、敬語学習を教科書の記述と教師の指導に任せており、教室外における自律学習をあまり行っていない傾向が見られる。

学習者の自律学習能力の重要性が指摘されている中、今後中国の大学日本語専攻教育も、学習者の自律学習能力の育成を重要な課題とすべきだといえる。そのため、敬語教育もすべて教室内で終結させるのではなく、教室外における学習者の自律学習につなげていくことが期待される。しかし、現行の教科書における敬語の扱いは、教室外の自律学習という点は全くといっていいほど考慮されていないことが第5章の分析結果を通して明らかとなった。教師も教科書に従って敬語を教えている結果、教室内に教育を完結させてしまい、教室外の自律学習へは、うまく連携していないのが現状である。

そこで、本研究で提案したいのは、学習者が教室を離れた後でも自律的に敬語が学べるよう、教科書における敬語の扱い方を再考することと、教科書以外に、それぞれのニーズに合わせ、学習者に副教材と補助教材にも目を向けさせることである。例えば、学習者の興味や関心に合わせ、各自で教室外でも調べたり、考えたりすることのできる自由課題を設定することや、学習者の多様なニーズに対応しきれない部分について、知識や情報を得られる副教材や補助教材の存在を教科書で示すことなどが挙げられるだろう。

第7章 中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するための前提

第6章では、第3章から第5章までの調査結果及び教材論に関する先行研究を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善する糸口として、まずは教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと主張した。ここからは四章にわたって、研究【課題5】（中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか）について探りたい。まず本章では、教科書における敬語の扱い方の再考を試みる前に、以下のことについて、あらかじめ前提として整理してみたい。

第1節では、教科書における扱い方を再考すべきなのは敬語だけなのか、他の学習項目に関してはどうなのか、敬語に焦点を絞ることの一般性と個別性について述べる。第2節では、第3章から第5章の調査結果と第6章の考察に基づき、現行の教科書における扱い方からうかがわれる問題点について整理を行う。第3節では、教科書における敬語の扱いは何に準拠しており、どうして現行のようになったのか、その原因について探る。第4節では、従来の敬語に対する捉え方を整理し、本研究における敬語観及び敬語教育観を示す。

第1節 敬語の扱い方を再考することの一般性と個別性

本研究の出発点は、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育である。その問題点を探るために調査を行い、得られた結果について分析・考察を行った。その結果、見えてきた七つの問題点を解決する糸口として、教科書における敬語の扱い方を再考すべきだという主張にたどり着いた。しかし、第6章の第2節でも推察したように、教科書自体がコースデザインのほぼすべてとなっており、教師は教科書のみを即して教育を行っているという問題点は、敬語教育に限らず、中国の大学日本語専攻教育全体に共通し、他の学習項目にも存在している可能性が高いとかがわかる。つまり、教科書における扱い方の再考は、敬語に限らず、他の学習項目も必要とされるものだといえよう。本節では、敬語の扱い方を取り上げる一般性と個別性について、筆者の考えを述べたい。

7.1.1 他の学習項目に共通する一般性

5.1.3 でも示したように、中国の大学日本語専攻教育のスタンダードである2冊の『教育要綱』においては、敬語は基礎段階に当たる2年次の学習項目であり、文型文法の一つとして挙げられている。第5章の分析対象となった教科書を見比べてみると、敬語は共通して1年次の最後または2年次の最初に現れている。教科書によっては、出現順番には多少の差異が見られるものの、基礎段階（1・2年次）で扱う学習項目はほぼ同様であることが明らかとなった。例えば、敬語以外には意向、状態、仮定、使役、受け身などが学習項目の定番であるといえる。

では、教科書における扱い方を再考すべきだという本研究の提案は、敬語教育に限るものなのだろうか、あるいは敬語以外の学習項目にも共通するものなのだろうか。他の学習項目については、元学習者と現場教師を対象に直接インタビュー調査を行っていないため、敬語教育のように明確な根拠を示すことは困難である。しかし、6.2.3でも触れたように、敬語教育に限らず、中国の大学日本語専攻教育においては、教科書はほぼコースデザインのすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配しており、決定的な役割を果たしている傾向が見られる。以下では、関連文献及び筆者が中国の大学日本語専攻教育に関わった際の見聞に基づき、コースデザインの「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」という三つの要素と教科書との関わりについて探ってみる。そして、それによって、教科書における扱い方を再考すべきだという主張は、敬語に限らず、他の学習項目にも共通するものである可能性を示したい。

まず、「何ニ基ヅキ」つまりコースの目標については、繰り返しになるが、中国の大学日本語専攻教育の目標は、あらかじめ2冊の『教育要綱』によって全国统一されており、基本的には教科書にも反映させ、各大学はそれに従うことが多い。国際交流基金（2006）では、コース目標を設定する上で、ニーズ調査・分析（学習したいことは何か）、レディネス調査・分析（学習者にできることは何か）、目標言語調査（学習者にとって目標言語はどのようなものか）という三つの調査を行うべきであると指摘されている。しかし、中国の大学日本語専攻教育においては、筆者の調べた限りでは、現場では上述した調査は行われることなく、大学4年間における多くのコースは、2冊の『教育要綱』に規定されている目標を反映した教科書に従って行われている。特に、基礎段階（1・2年次）では、「学習者が日本語に関する基礎的な知識をしっかりと学び、身につけるよう指導する。「聞く・話す・読む・書く」という4技能の基本に関する訓練を行う。学習者の実践的に言語を運用する能力を育成する。」ことが主目的とされている。そのため、どの大学も日本語ゼロスタ

ートの学習者に日本語による基本的なコミュニケーションを行う際、必要な語彙や文法を身に付けさせることを主目標としていることが推察される。

したがって、教育目標も単一化されてしまい、「何ニ基ヅキ」がほとんど教科書に支配されている傾向がある。もちろん、教師によっては、現場の状況に合わせ、目標を微調整する場合もあるかもしれない。しかし、多くの現場では、コース目標は学期が始める前に既に決定されており、それに対応して教科書も指定されているため、教師はそれに従うのが一般的である。このことから、中国の大学日本語専攻教育において教科書が「何ニ基ヅキ」を提供・支配している現象は、敬語教育に限らず、他の学習項目にも広く存在しているといえよう。

次に、「何ヲ」つまりシラバスデザインについては、中国の大学日本語専攻教育においては、取り上げられている学習項目はほとんど教科書によって与えられている。堀口(2003)で、中国の大学日本語専攻教育について、「多くの大学では中国の大学で作成した教科書を使い、授業はかなり忠実に教科書に従って進められる」(p. 12)と指摘されているように、教師が敬語以外にも、授業中教科書に書かれている内容を一つ一つ取り上げる傾向が見られる。

田中・斎藤(1993)では、シラバスデザインを考える際、シラバスの調整が重要であると指摘されている。具体的には、ある学習項目に関して教えるべき項目がたくさんあるときには、取捨選択をしなければならないことや、各項目間に順序性のない話題シラバスなどでは、学習者の興味や関心にしたがって、学習者に決定させることなどが提案されている。しかし、筆者の調べた限りでは、中国の大学日本語専攻教育においては、教師は内容も順番も教科書どおりに教えるのが一般的である。そのため、たとえ第5章で語られたように、学習項目が多すぎて授業時間が足りない場合でも、取捨選択や順番調整をせずに、教科書に書かれている内容をすべて、そして順番どおりに教えるのが主流のようである。

特に、基礎段階(1・2年次)では、多くの大学において、文型積み上げ方式をとっているため、教科書も文型シラバスのものがほとんどである。『総合日語』のような各課のタイトルを見て、機能シラバス、場面シラバスまたは話題シラバスのように見える教科書でも、詳細に中身を見てみると、やはり文型シラバスで支えられている傾向が見られる。よって、教科書の内容と順番を調整してしまうと、習っていない語彙や文法で学習者を混乱させてしまう恐れがあるため、教師は教科書どおりに教えるのが無難であると認識しているようである。このことから、中国の大学日本語専攻教育においては、敬語以外の学習項目も、

教科書が「何ヲ」を提供・支配していることが分かる。

そして、「イツ・ドノヨウニ」つまりカリキュラムデザインについては、中国の大学日本語専攻教育においては、まずどの学習項目をどの段階でどのぐらいの期間で教えるかも、教科書に規定されていることが多い。というのは、特に基礎段階（1・2年次）で使用されている教科書を見ると、4冊シリーズになっているものが多く、半年で1冊を終わらせるために、1課は大体どのぐらいの時間をとればよいのかについては、あらかじめ計算されている。そのため、教師はその規定に従わなければならないのが一般的である。

また、どのように教えているのかについて、冷（2005）は、中国の大学日本語専攻教育、特に基礎段階の現場で行われている授業の中心をなす活動は、「文法の説明」、「本文の説明」、「単語の説明」となっており、言語運用能力よりも、言語知識を重視する傾向があって、創造性の高いコミュニケーション練習が行われていない場合が多いと指摘している。この現象が生じた原因の一つとして、教科書の扱い方が挙げられると思われる。具体的には、第5章の分析対象となった教科書を見ると、敬語に限らず、他の学習項目にも共通しているが、ほとんどの教科書は、「本文→単語→文法→練習」という流れで編集されており、また教師による伝授型の知識説明や教師主導型の練習問題が多く、創造性の高いコミュニケーション練習はあまり見当たらない。つまり、冷（2005）で指摘されている教え方の背後には、教科書における扱い方があると推察される。このことから、中国の大学日本語専攻教育においては、敬語のみならず、他の学習項目に関しても、教科書は「イツ・ドノヨウニ」を提供・支配しているとうかがわれる。

以上で述べたことを踏まえると、中国の大学日本語専攻教育全体、特に基礎段階で行われている教育では、敬語のみならず、他の学習項目に関しても、教科書の役割は大きく、ほぼコースデザインのすべてであり、「何ニ基ツキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配しているという傾向が見られる。よって、本研究の教科書における扱い方を再考すべきだという主張は、敬語教育に限るものではなく、敬語以外の学習項目にも共通するものであることが確認され、この意味では、6.3.2で述べた提案も、一般性のある課題であるといえよう。

7.1.2 他の学習項目とは異なる個別性

7.1.1では、中国の大学日本語専攻教育におけるコースデザインの「何ニ基ツキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」という三つの要素と教科書との関わりについて述べた上で、本研究

の教科書における扱い方を再考すべきだという提案は、敬語教育に限るものではなく、敬語以外の学習項目にも共通するものであることを指摘した。つまり、教科書における扱い方の再考は、中国の大学日本語専攻教育において一般性のある課題であることが確認されたといえよう。

この項では、その一般性を踏まえた上で、本研究では教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと提案したことの位置づけ、つまり他の学習項目と比べどのような個別性があるのかについて述べたい。第3章から第5章の調査結果に基づき、主に以下の3点が挙げられる。

まず、他の学習項目に比べ、学習者がより困難な課題だと感じているためである。これは第3章の調査で確認されたことであるが、元学習者の多くは、他の学習項目と比べ、敬語に対し、より多くの困惑点と困難点を感じているという。そして、第5章の分析結果を見ると、その多くは関連教材における敬語の扱い方に起因していることが明らかとなった。しかし、7.1.1でも触れたように、中国の大学日本語専攻教科書においては、他の学習項目も文法説明や練習問題などの面において、敬語とほぼ同様な扱い方をされているのに、敬語ほど学習者の困惑点と困難点を引き起こしていないのはなぜだろうか。このことから、敬語は他の学習項目と比べ、現行の教科書における扱い方ではうまく対応できない部分がより多いということがうかがわれるだろう。

次に、他の学習項目と比べ、教師がより苦手意識を抱いていることである。これは第4章の調査で確認された点であるが、現場教師の多くは、他の学習項目と比べ、敬語を指導する際、自分の敬語に対する自信のなさゆえに、より苦手意識を抱いているという。その結果、他の学習項目を指導する際と比べ、より教科書に頼ってしまうという傾向が見られた。しかし、第5章の分析結果を見て分かるように、現行の教科書における敬語の扱い方には多くの問題点と不足点が存在している。そのため、教科書どおりに行われている敬語教育は、長年改善されないままとなっていると推察される。このことから、教師の自信のなさや苦手意識を補い、解消させるためには、他の学習項目と比べ、教科書における敬語の扱い方の再考がより期待されるといえよう。

そして、他の学習項目と比べ、教科書において扱うべき内容が多いということである。第5章の分析対象となった教科書を調べてみると、他の学習項目と比べ、敬語の扱いは明らかに多いことが分かる。例えば、他の学習項目の場合、状態や様態、伝聞などは二つを、使役や受け身などは一つを1課で扱うのに対し、一つの学習項目で2~3課を占めているの

は敬語だけである。その理由は、敬語を扱うには、尊敬語、謙譲語と丁寧語に関するそれぞれの説明や練習問題が必要である上に、他の学習項目より表現形式のバリエーションが多様であるということが挙げられるだろう。

更に、第3章と第4章の調査結果に基づくと、敬語が他の学習項目より教科書における扱いが必要とされる理由として、形式面のほかに、意識面と運用面に関しても扱うべき内容が多いということがある。まずは、日中両国の言語体系と文化背景が異なるため、各表現形式に触れる前に、敬語の必要性と重要性など意識面に関する内容を扱う必要があると思われる。そして、各表現形式を提示した後、様々な場面における実際の使い分けなど運用面に関する扱いも不可欠であるといえよう。

しかし、第5章の調査結果を見て分かるように、現行の教科書における敬語の扱い方では、上述した内容が十分に扱われていない傾向が見られる。これが第3章と第4章で明らかとなった学習者の意識面・形式面・運用面による困惑点と困難点とつながっているのではないかと考えられる。

以上を踏まえると、教科書における扱い方の再考は、他の学習項目にも共通する課題であるとはいえ、上述したように、学習者・教師・教材という三つの観点からみえてきた中国の大学日本語専攻教育における敬語の特性を考えると、敬語の扱い方を再考することは、他の学習項目とは異なる個別性を持っているともいえよう。そのため、本研究では、数多くの学習項目の中から、教科書における扱い方の再考が最も必要であり、緊急課題であると思われる敬語を代表として選び、その扱い方から着手したい。もちろん、敬語以外の学習項目にも共通する課題であるため、最終的に目指したいのは、中国の大学日本語専攻教科書における扱い方全体の見直しであるが、その実現を促進するために、本研究ではまず敬語に関する部分の再考を試みるものである。

第2節 現行の教科書における敬語の扱い方に見られる問題点

第1節では、敬語を他の学習項目と比べて分析した結果、第6章で提唱している教科書における扱い方の再考は、敬語だけに限る課題ではなく、他の学習項目にも共通する課題であることが確認された。しかしその一方、他の学習項目とは異なる個別性も持っているため、本研究では敬語の扱い方を再考することから着手したいという考えを述べた。

この項では、第5章の分析結果と第6章の考察を踏まえ、現行の教科書における敬語の扱い方には、具体的にどのような問題点が存在しているのかを再度整理してみる。ここでは、前節で述べたことに基づき、他の学習項目に共通する問題点と、他の学習項目とは異なる問題点という二つに分け、それぞれの問題点を示す。

7.2.1 他の学習項目に共通する問題点

7.1.1でも述べたように、教科書における扱い方については、他の学習項目でも文法説明や練習問題などの面において、敬語とかなり類似していることから、互いに共通する問題点が存在しているとうかがわれる。具体的には、主に以下の3点は、他の学習項目にも共通するが、現行の教科書における敬語の扱い方に見られる問題点ではないかと思われる。

(1)教科書における扱い方には、①教師や学習者の困惑や誤解を招くようなものがある、②文法説明や練習問題など、教師主導型に適するものがほとんどである、③学習者の多様なニーズや自律学習が考慮されていない、といった問題点がある。

(2)教師用指導書における扱い方には、教科書の問題点を補うような内容はほとんどなく、あまり機能していない。

(3)教科書と教師用指導書以外に、学習者の多様なニーズに対応したり、自律学習を促したりするための副教材や補助教材の導入はあまり見られない。

7.2.2 他の学習項目とは異なる問題点

7.1.2においては、学習者・教師・教材という三つの観点から、敬語は他の学習項目とは異なる特性について述べ、敬語の扱い方を再考することの個別性を指摘した。それを踏まえ、更に第3章の元学習者と第4章の現場教師によって語られた敬語による困惑点と困難点と照らし合わせた結果、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方には、他の学習項目と比べ、大きくいえば、以下の三つの問題点があるのではないかと推察される。

(1)敬語とは何か、その必要性和重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している。

(2)敬語の分類や各種類の敬語の性質、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い。

(3)各敬語項目の文法説明や練習問題は、「誰が誰にどこで何のために」といった運用面を考慮した記述が行われていない。

(1)の問題点は、敬語の意識面に焦点を当てたものであり、「母語には敬語が少ないため、日本語の敬語の必要性と重要性には気づきにくい」や「使う機会が少ないから、学習者は敬語の必要性と重要性を感じない」といった元学習者と現場教師が語った困惑点と困難点と深く関わっていることが分かる。(2)の問題点は、敬語の形式面に着目したものであり、「表現形式が煩雑で、混用してしまう」や「表現形式が煩雑であるため、覚えられない学習者が多い」といった元学習者と現場教師が語った困惑点と困難点とつながっているといえよう。(3)の問題は、敬語の運用面に目を向けたものであり、「表現形式を覚えても、実際の場面でどう使うのか分からない」や「テストで高い点数を取れる学習者でも、話す際敬語がうまく使えない」といった元学習者と現場教師が語った困惑点と困難点と関連していると思われる。

第3節 現行の教科書における敬語の扱い方の来歴

第2節では、現行の教科書における敬語の扱い方に見られる問題点について、他の学習項目に共通するものと他の学習項目とは異なるものという二つに分け、それぞれ3点ずつ指摘した。これらの問題点を具体的に検討する前に、その前提として、現行の扱い方の来歴を明らかにする必要があると思われる。そもそも中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱いは、何に準拠しており、どうして現行のようになったのだろうか。本節では、この問題について探った結果、内部の要因と外部の要因がともに影響していることが明らかとなった。

7.3.1 内部の要因—『教育要綱』からの影響

ここまでの議論では、何度も繰り返しているように、中国の大学日本語専攻教育においては、2冊の『教育要綱』がスタンダードとなる存在であり、教科書の編集に大きな影響を及ぼしていると推察される。『基礎段階教育要綱』においては、「教材の編集は、形式に拘る必要はない。しかし、『教育要綱』の理念や規定などを遵守しなければならない」(p. 10)と述べられていることから、教科書における敬語の扱い方も2冊の『教育要綱』から大きな影響を受けていると示唆される。

また、同要綱では、「教師は知識の伝授者であるとともに、教室活動の指導者でもある。

教師は主導的な役割を果たすべきである」(p. 10) と述べている。このような教師の位置づけは、文法説明や練習問題など、教師主導型に適するものがほとんどであるという教科書の扱い方と直結している可能性が高いといえよう。

また、7.2.2 で指摘した敬語の扱い方に見られる問題点のいずれも、2冊の『教育要綱』における敬語に関する記述と深く関わっていることがうかがえる。すなわち、(1) 意識面に関する扱い方の欠落は、『教育要綱』においては意識面について全く記述されていないことと関係しており、(2) 形式面に関する扱い方の混乱は、『教育要綱』においては形式面に関する記述には多くの問題点が潜んでいることと関わっており、(3) 運用面に関する扱い方の無考慮は、『教育要綱』においては運用面についてはほとんど言及されていないことと結びついていると考えられるだろう。

上述したこと以外にも、敬語の出現時期や箇所など、2冊の『教育要綱』が教科書と教師用指導書における敬語の扱い方に大きな影響を与えているが、それについては第5章の第2節で詳細に述べているため、ここでは省略する。以上を踏まえると、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方が現行のようになった要因の一つとして、2冊の『教育要綱』に準拠しているためであることが挙げられる。本研究では、『教育要綱』を内部の要因だと捉える。

7.3.2 外部の要因—日本国内の日本語教科書からの影響

国際交流基金(2014)では、次のように報告されている。

広く使われている教材としては、『新編日語』(上海外国語大学)、『新編基礎日語』(北京大学) などがある。東京外国語大学の初級用教材(旧版)に中国語の説明をつけたもの(『新編日語』吉林教育出版社、『新日本語』山西教育出版社)も広く使われている。また、1998年に『新日本語の基礎』が、2002年には『みんなの日本語』が、中国国内でも正式に出版された(外語教学与研究出版社)ことから、初級用教材として採用するところもある。

以上の記述を見て分かるように、中国の大学日本語専攻教科書(主に1・2年次用)の中では、日本で出版されている教科書に準拠し、中国語版に翻訳されたものが多いようである。また、中国の大学などで編集され、出版された教科書を見ても、基礎段階の学習項

目や学習順序、説明内容、練習問題など、日本国内で使われている初級教科書とかなり類似していることが分かる。以上のことから、敬語が出現している基礎段階における中国の大学日本語専攻教科書は、記述を行う際、日本国内で使われている日本語教科書を参考にすることが多いのではないかと考えられる。

以上を踏まえると、日本国内の日本語教科書における敬語の扱い方に準拠した結果、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱いは現行のようになったのではないかと考えられる。この仮説を裏付けるために、日本国内の教育機関で広く使われている『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）、『新文化初級日本語』（文化外国語専門学校）、『新日本語の基礎』（スリーエーネットワーク）、『日本語初歩』（凡人社）などの総合教科書を選定し、敬語はどのように扱われているのかについて調べてみた。

その結果、敬語の分類や性質などに関する説明や例文の提示方法、練習問題の種類など、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方との共通点が多いことが確認された。このことから、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱いは、日本国内の日本語教科書に準拠して行われており、大きな影響を受けているとかがわれる。本研究では、日本国内の日本語教科書を外部の要因だと捉える。

なお、以上のことから、日本国内の日本語教科書における敬語の記述にも、7.2.2 でまとめた三つの問題点が存在していることが示唆される。しかし、同様な問題点が存在しても、教科書への依存度が異なると思われるため、日本にいる学習者より、中国にいる学習者に与える問題点のほうが大きいのではないかと考えられる。というのは、日本にいる学習者の場合、教室以外にも敬語を習得する機会が多く、教室外の経験を通して教科書の記述に見られる問題点を補うことができるからである。

具体的には、問題点（1）「敬語とは何か、その必要性和重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している」については、日本にいる学習者の場合、学校生活やアルバイト経験などによって、敬語を多く見聞きしているため、教科書における記述以外にも、敬語の必要性和重要性に気づくきっかけが多いだろう。そして、問題点（2）「敬語の分類や各種類の敬語の性質、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い」については、中国にいる学習者より、日本にいる学習者のほうが、敬語に関する参考文献をより入手しやすく、身近にいる母語話者の教師にも確認できるため、混乱が解消されやすいと予想される。最後に、問題点（3）「各敬語項目の文法説明や練習問題は、「誰が誰にどこで何のために」といった運用面を考

慮した記述が行われていない」については、実生活において敬語を使うことが多く求められるため、日本にいる学習者は、教室以外でも敬語の使い方を覚えたり、練習したりできると思われる。

その一方、中国にいる学習者の場合、実生活において敬語を使う機会が限られているため、教室内の教師による指導や教科書における説明に頼ってしまうことが多い。また、4.4.5で明らかとなった「教師が教材に強く依存している」という事実と照らし合わせて考えると、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方に見られる問題点の改善は、重要かつ喫緊の課題であるといえよう。

第4節 従来の敬語論と本研究の敬語観・敬語教育観

本節では、まず日本国内の日本語教科書における敬語の扱いは、従来の日本国内における敬語に関する研究に則っていることを推察し、敬語の扱い方に投影されている従来の敬語論について検討する。そして、従来の敬語論を踏まえた上で、本研究における敬語観・敬語教育観について述べる。

7.4.1 敬語の扱い方に投影されている従来の敬語論

日本国内の日本語教科書における敬語の扱い方の背後には、従来の日本国内における敬語に関する文献が深く関わっていると思われる。日本語の特徴を表す一つであるといわれている敬語に関する研究は多く見られ、「敬語とは何か。敬語をどのように捉えているのか」といった敬語論に関する議論も、数多くの研究者によって行われてきた。代表的なものには、山田（1924）、松下（1930）、辻村（1963）、宮地（1968）、渡辺（1971）、大石（1975）、宮地（1982）、辻村（1992）、菊地（1997）などが挙げられる。これまでの論考を踏まえ、一般的には敬語は以下のように定義されている。

- ・聞き手や話の中に出てくる人に対する、話し手の敬意（丁寧な気持）を表す言葉。（『新明解国語辞典』第六版，2004）
- ・話し手または書き手が相手や話題の人物に対して敬意を表す言語表現。（『デジタル大辞泉』，2013）

- ・相手や話中の人物に対する敬意を表わす言語的表現。(『日本国語大辞典』第二版, 2003)
- ・敬語とは、最も一般的には、話し手(書き手)が聞き手(読み手)または話題の人物に対する敬意に基づいて用いる特定の言語形式をいう。(『国語学大辞典』, 1980)
- ・敬語とは、同じ事柄を述べるのに、述べ方を変えることによって敬意あるいは丁寧さをあらわす、そのための専用の表現である。(菊地, 1997, p. 91)

以上の定義を見ると、記述に多少の違いがあっても、「敬意」という部分は共通していることが分かる。日本と中国で使われている日本語教科書においても、上述した定義を援用していることが多いだろう。しかし、このような捉え方に対し、敬語は必ず敬意を持って使うものなのか、敬意を抱かない相手には敬語を使わなくてもよいのか、という疑問は生まれるだろう。例えば、自分の品格を保持するために使う敬語の場合、相手に敬意を持つとは限らず、母親が子供に使っている尊敬語も敬意ではなく、別の意識が働いているように思う。

滝浦(2005)では、これまでの敬語論について、大きくいえば、〈敬意〉の敬語論と〈関係認識〉の敬語論という二つに分けられると指摘している。前者の構えとは「敬語は敬意の表現である」というスタンスであり、その系譜は三橋要也、山田孝雄、金田一京助などの学者によって論じられているのに対し、後者の構えとは「敬語は人間関係についての認識の表現である」と主張し、代表的な論者として、時枝誠記や三上章などが挙げられると説明している。そして、「敬語は敬意の表現である」という前者の敬語論は、現在に至ってなお影響力を持ち続けていると述べている。よって、敬語に関する一般的な定義においても、日本語教科書における敬語に関する説明においても、共通して「敬意」という言葉が用いられているといえよう。したがって、この項の冒頭で述べているように、日本国内の日本語教科書における敬語の扱い方には、従来の敬語論が投影されているといえよう。

また、滝浦(2005)は、両者の対立が解消しない根本的な原因は、「敬語における敬意とは何か?」の問いが答えの一致を見ないことにあると指摘した上で、次のように述べている。

〈敬意〉の敬語論と〈関係認識〉の敬語論の対立は、結局のところいまだに解消されていない。「敬語とは何か」の問いに形より心だと答える〈敬意〉の敬語論者たちは、発話主体をシステムの外部に立つものとして描き出そうとするが、そのような主体の心と敬語

の形との関係は解き明かされない。一方、敬語をふるまいの形として描き出した〈関係認識〉の敬語論では、発話主体の位置づけが明確でなかった。おそらくこの対立を解消する道は、〈敬意〉か〈関係認識〉か「心か形か」の選択をすることではなく、その両者を含みこんで、システムの内において主体的に発話する行為が捉えられるような、新たな議論の平面へと更新することであるように思われる。(pp. 100-101)

そこで、以上の問題意識に基づき、同書では、〈距離〉と「ポライトネス」を手がかりにし、新たな議論の平面を探った結果、次の知見が得られた。

「敬語とは何か？」この問いに対する答えとして同書は、「敬語は敬意の表現である」に代わる定義「敬語は距離の表現である」を置きたいと思う。日本語の「敬語」という言語形式は、話し手・聞き手・言及される登場人物の三者間の関係を〈距離〉の関係として表示するシステムである。人は誰かに対して敬語を用いることによって、敬語の対象との間に距離を表し、誰かに対して敬語を用いないことによって、その人びとを脱距離的な関係に置き入れる。そうして、誰から見て誰が“ウチ”的であり誰から見て誰が“ソト”的であるかの線引きを、そのつどの発話において表現する。敬語は、人間関係を相対的な距離の関係として構成的に表現する。(p. 258)

そして、敬語と〈敬意〉の関係については、次のように見直されている。すなわち、媒介項〈距離〉によって、滝浦（2005）は、敬語論とポライトネス論を同じ平面の上で接続し、新たな議論の平面へと更新したといえよう。

たしかに敬語は敬意を表現する。しかし、敬語というシステムが直接表示するのは〈距離〉であり、距離が第一義的に示すのは、対象人物との関係が〈視点〉を介して“ソト”的（疎遠）であるか、“ウチ”的（親密）であるかの対立である。敬語において表現される敬意とは、話し手が距離を置き“相手の領域を侵さないこと”によって間接的に示される、結果ないしは効果としての含みのことなのである。(p. 258)

次に、蒲谷（2013）の敬語論を見てみよう。同書においては、まず敬語論の違いは言語観の違いに基づくものであると指摘した。具体的には、以下のように述べられている。

敬語（の構造・体系）＝言語，だと規定すると，言語としての敬語についての記述の中に，話し手や聞き手といった人間関係や，話し手の意識なども取り込まざるを得なくなるのである。これまでの敬語分類では，敬語の分類基準の中に「敬意」や人間関係までを含めるものが多いのも，その意味では止むを得ない措置だったといえる。

これに対して，「〈言語＝行為〉観」における敬語の扱いは，まずは，敬語＝言材と捉え，その「言材としての敬語」を使って表現することが言語だと規定することになり，「言材としての敬語」の記述と，敬語を使って表現する行為である言語としての記述とを段階的に行うことが可能になる。それによって，待遇コミュニケーションにおける敬語や敬語表現の本質を明らかにできるということが，本研究での提言なのである。（p. 69）

これに基づき、蒲谷（2013）は「敬語そのものの性質を説明する記述の中に，相手や話題の人物といった「人間関係」や，敬意といった「意識」の問題を取り込んでしまうことで，その敬語の持つ基本的な「敬語的性質」が見えにくくなってしまい，その結果，敬語を整理，分類するときの基準もわかりにくいものになり，混乱が生じてしまう」（p. 69）と指摘し、「言材としての敬語」と「敬語表現における敬語」を区別すべきだと主張した上で、「敬語に関する四つの段階³⁵」を提唱した。

蒲谷（2013）で指摘されているように、従来の敬語に対する捉え方は、「人間関係」や「意識」などの要素が混入しており、使われる前の敬語が持つ本来の性質と、使われた敬語が実際に果たしている役割が明確に区別されていないため、「敬語は必ず敬意を持って使うものなのか、敬意を抱かない相手には敬語を使わなくてもよいのか」といった疑問を生じさせてしまうのだといえよう。

以上をまとめると、日本国内の教科書における敬語の扱い方には、山田孝雄を代表とする「敬語は敬意の表現である」という〈敬意〉の敬語論が投影されていることが判明した。しかし、滝浦（2005）や蒲谷（2013）が批判しているように、従来の敬語論については、疑問点も残る。そして、蒲谷（2013）の敬語論を踏まえて考えると、従来の敬語観からの

³⁵ ①「言材としての敬語」の基本的な性質，②コミュニケーション主体がその待遇コミュニケーションにおいて「言材としての敬語」を用いようとする意識，③適切な敬語を選択しようとする意識，④その待遇コミュニケーションによって成立した表現において用いられた敬語が持つ意味や機能，という段階を区別しつつ、それぞれの関連を考えていきたいと思う。…①が「言材としての敬語」，④が，②③に基づく「敬語表現における敬語」の段階ということになる。（蒲谷（2013）pp. 70-71）

影響により、現行の日本語教科書における敬語の扱いは、意識面・形式面・運用面において混在している傾向が強く、そしてこれが教師と学習者の敬語に対する理解を阻害してしまう要素として働いていることがうかがわれる。したがって、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するには、まず「敬語とは何か。敬語をどのように捉えるべきなのか」という根本的なところから考え直す必要があるといえよう。

7.4.2 本研究における敬語観

以上を踏まえ、本研究における「敬語」の範囲は、「敬語の指針」(文化審議会答申, 2007, p. 13) に従い、以下の5種類³⁶とする。

尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型
謙譲語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型
謙譲語Ⅱ (丁重語)	「参る・申す」型
丁寧語	「です・ます」型
美化語	「お酒・お料理」型

次に、本研究における敬語の捉え方については、基本的には蒲谷(2013)の敬語論を支持し、それを受け継ぐ形をとっている。つまり、「言材としての敬語」と「敬語表現における敬語」に区別し、敬語を二段階で検討する。ただ、理解上の便宜を図るために、本研究では、それぞれ「語としての敬語³⁷」と「敬語表現における敬語」と呼ぶ。それぞれの定義は、次のようである。

【語としての敬語】とは、

具体的な表現の中に用いられる敬語ではなく、抽象的に捉えた敬語のことである。

【敬語表現における敬語】とは、

具体的な談話や文章の中に用いられている敬語のことである。

³⁶ 「お/ご～いたす」のような謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱの敬語も含む。

³⁷ 本研究では、理解の便宜を図るため、「言材としての敬語」を「語としての敬語」に言い換える。「語としての敬語」は具体的な表現の中に用いられている敬語(「敬語表現における敬語」)ではなく、抽象的に捉えた敬語である。例えば、「おっしゃる」「申し上げる」など、個々の敬語を抽象的に採り上げ、その敬語としての性質を押さえることが大切であるとする。

以上を踏まえると、教科書において敬語を扱う際に、①「語としての敬語」の場合、重要となるのは敬語の分類、働き、表現形式といった体系的な知識を正確に記述することであるのに対し、②「敬語表現における敬語」の場合、重要となるのは「人間関係や場に合わせ、どのように適切に敬語を用い、コミュニケーションを行うのか」を明確に記述することであると考えられる。したがって、それぞれの観点からの記述が不可欠でありつつも、互いに混淆してしまわないように区別し、記述を行う必要もあるといえよう。そして、③殊に本研究のような海外にいる学習者を対象とする場合、上記両者の前提を基盤として、日本語の敬語の特徴や母語との比較、敬語を学ぶ必要性と重要性といった認識面を考慮した記述も必要になるといえるだろう。

上述した①、②、③は、それぞれ、7.2.2 で指摘した問題点（2）敬語の分類や各種類の敬語の性質、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い、（3）各敬語項目の文法説明や練習問題は、「誰が誰にどこで何のために」といった運用面を考慮した記述が行われていない、（1）敬語とは何か、その必要性と重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足していると対応していることが明らかとなった。

そこで、ここからは7.2.2で指摘した三つの問題点をそれぞれ「敬語の基本認識に関する記述の不足」、「語としての敬語に関する記述の混乱」、「敬語表現における敬語に関する記述の無考慮」としたい。

7.4.3 本研究の敬語教育観

上述した二段階の「敬語観」を踏まえ、次は教師の視点から「敬語を教える」とは何かという、本研究の敬語教育観を明確にする。

まず、「語としての敬語」を考えるために、重要となるのは敬語の分類、性質、表現形式といった体系的な整理であるため、教育を行う際、上述した敬語の仕組みに関する基礎知識を学習者に提示し、理解してもらう必要がある。例えば、「日本語の敬語には何種類あるのか」、「尊敬語はどのような性質を持つのか」、「謙譲語の代表的な表現形式にはどのようなものがあるのか」などの課題は、これに含まれる。

次に、「敬語表現における敬語」を考えるために重要となるのは、「人間関係や場に合わせ、適切に敬語を用い、コミュニケーションを行う」ことであるため、教育を行う際、学習者が様々な場面に対応し、適切に敬語を使ってもらおう工夫が大事であるといえる。例え

ば、「この場面では、どの種類の敬語が使えるか」、「目上を褒めたり、ねぎらったりするのは失礼なのか」、「「～てさしあげる」をどのように使うのか」などの課題は、これに含まれる。

7.4.2 で述べた敬語観に基づくと、「語としての敬語」に関する教育では、敬語の持つ基本的な性質など仕組みに関する知識を教えることであり、当然必要な基礎ではあるが、それだけにとどめてはいけないことが示唆される。「敬語表現における敬語」を「語としての敬語」と区別し扱うことにより、コミュニケーション行為における敬語の働きを明確にし、「敬語を用いてコミュニケーションを行う」ということも教育の範囲になってくるといえる。

そして、上述した2点以外に本研究で補足したいのは、敬語の基本認識に関する教育である。つまり、学習者の敬語に対する基本認識を育成することも敬語教育の範疇に入れるべきだということである。具体的には、「日本語の敬語は、どのような特徴があるのか」、「中国語の敬語との共通点と相違点は、何なのか」、「敬語はどのようなときに必要なのか」などの課題が、これに含まれる。まとめると、教科書における敬語に関する記述を行う際、敬語の基本認識、「語としての敬語」、「敬語表現における敬語」の三つを考慮に入れ、教師がより指導しやすい記述を目指すべきだといえる。

最後に、以上で述べたことを踏まえ、本研究が考えている敬語教育の目的や目指したい敬語教育について述べたい。そして、それに関連する以下の問いに対する筆者の考えをまとめてみた。続く第8・9・10章で提案する新たな教科書における敬語の扱いは、すべてこれらの考えに基づくものである。

一つ目は、敬語を含む日本語教育全体の目的については、学習者の日本語能力を育成することであり、具体的には、学習者が日本語によって適切にコミュニケーションを行う力を育てることであると考え。それを実現するためには、中国で行われている従来の日本語教育のように、教師が主導的に一方的に教えるのではなく、いかに学習者自身がコミュニケーションの主体となって自らコミュニケーションを行うことにより、その力を身につけ、高めてもらえるのかということ重要な課題として考えなければならない。

二つ目は、敬語教育の目的については、上述した日本語教育の目的を踏まえて考えると、学習者が敬語を用いて、適切にコミュニケーションを行う力を育てることを目指すべきだ。一つ目と同様、学習者自身がコミュニケーションの主体となって自らコミュニケーションを行うことにより、その力を身につけ、高めてもらう必要がある。そのために

は、敬語の仕組みなどに関する知識を学ぶことが基礎となるといえよう。しかし、敬語だけを習得することではなく、あくまでも、日本語によるコミュニケーション能力を高めるために敬語教育の意味があると考えている。しかし、中国で行われている敬語教育は、敬語の仕組みに関する体系的な知識の伝授にとどまっており、運用力につながらない、つまり敬語が上手に使えるようにならないのが現状である。したがって、体系的な知識を学ぶのは、あくまでも基礎であって、それだけにとどまてはいけなことも認識しなければならないだろう。表現の中で、そしてコミュニケーションの中で敬語を学び、コミュニケーション能力全体を高めることが、今後中国の敬語教育が目指すべき方向ではないだろうか。

三つ目は、本研究でいう学習者の主体性については、日本語を用いてコミュニケーションを行う際にももちろんであるが、授業で日本語を学ぶ際も、コミュニケーションの主体である学習者によるコミュニケーション行為であると捉える。よって、学習者自らコミュニケーション主体として日本語を学んでいくということが重要である。例えば、敬語教育の場合、中国で行われている従来の教育は、教師主導型の講義式授業が主流であるため、学習者は敬語を学ぶ際、受け身の立場で一方的に教えられており、コミュニケーション主体にはなっていないことが分かる。そのため、教室外で敬語を用いてコミュニケーションを行う際も、うまくいかず躓いてしまう。今後、教室内で敬語を教える際も、なるべく学習者がコミュニケーションの主体になって、自ら学んでもらうよう工夫する必要があると考える。

四つ目は、学習者にとって敬語ができるようになるというのは、どういうことなのかという点である。それは、まず敬語の仕組みなどに関する知識を理解した上で、コミュニケーション主体として、他者を尊重しつつ、自分らしく、その場面にふさわしいコミュニケーションを行う能力が身に付くことであると考え。日本語母語話者のような使い方ができればよいと考えている人も多いが、本研究ではこれに賛同しない。目指したい敬語教育は、学習者自身が日本語のコミュニケーション主体となって、自らコミュニケーションを行うことであるため、母語話者の真似をすることは目標にはならないのである。

五つ目は、本研究が目指したい敬語教育における教材の位置づけについてであるが、次の立場を示したい。敬語について完璧にまとめた教材を作成し、それに頼る教師や学習者を育てるために、扱い方を再考するのではない。教師が教材を使って一方的に学習者に敬語の表現形式などに関する知識を教えたり、主導的に言い換えや書きかえの練習問題を与

え、唯一の正解を教えたりするという従来の敬語教育を支えるための教科書における扱い方を見直さなければならない。学習者が主体的・自律的に敬語について考え、コミュニケーションの中で敬語を学び、教師がそれを支援するとともに、学習者と一緒に考えたり、よりよい解決策を探したりすることで、ともに成長していく敬語教育の実現を促進したいという考えに基づき、教科書における敬語の扱い方を再考したいのである。そのためには、教科書における扱い方を変えるだけでは、敬語教育の問題点がすべて改善されるわけではない。あくまでも改善する第一歩として位置付けたい。教科書における扱い方を再考することにより、中国の日本語教育現場で、従来目が向けられてこなかった大事な観点について、新たな記述を通して提示するのが目的である。

第8章 敬語の基本認識に関する記述の提案

第7章の第2節では、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方からうかがわれる問題点として、他の学習項目に共通するものと他の学習項目とは異なるものという二つに分け、以下の3点ずつ指摘した。

他の学習項目に共通する問題点：(1)教科書における扱い方には、①教師や学習者の困惑や誤解を招くようなものがある。②文法説明や練習問題など、教師主導型に適するものがほとんどである。③学習者の多様なニーズや自律学習が考慮されていない。(2)教師用指導書における扱い方には、教科書の問題点を補うような内容はほとんどなく、あまり機能していない。(3)教科書と教師用指導書以外に、学習者の多様なニーズに対応したり、自律学習を促したりするための副教材や補助教材の導入はあまり見られない。

他の学習項目とは異なる問題点：(1)敬語とは何か、その必要性和重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している。(2)敬語の分類や各種類の敬語の働き、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い。(3)各敬語項目の文法説明や練習問題では、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった運用面を考慮した記述が行われていない。

その中で、敬語が他の学習項目に共通する三つの問題点に関しては、第5章の分析を通して得られた結果であるため、改めて検証するする必要はないだろう。一方、他の学習項目とは異なる三つの問題点に関しては、もちろん第5章の分析結果と重なる部分もあるが、敬語の基本認識、「語としての敬語」、「敬語表現における敬語」という三つは、第7章で新たに立てた観点であるため、新たに検証する必要があると思われる。

そこで、第8章から第10章にかけて、この三つの新観点に基づき、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方について、それぞれ以下の3ステップを踏んで、検討していきたい。

ステップ① それぞれの観点から敬語の扱い方の実態を明らかにし、第7章の第2節で推察した問題点が本当に存在するのかを検証する。

ステップ② もし存在するのであれば、先行研究を踏まえ、それぞれの問題点を改善するための本研究の提案を行う。

ステップ③ 本研究の改善案を踏まえ、目指したい敬語に関する新たな記述を試案例という形で、具体的に示す。

例えば、第8章については、第1節では、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の基本認識に関する扱い方の実態を明らかにし、不足しているかどうかを検証する。第2節では、先行研究を踏まえ、敬語の基本認識に関する扱い方の不足という問題点を改善するための本研究の提案を行う。第3節では、本研究の改善案を踏まえ、目指したい敬語の基本認識に関する扱い方を具体的に示す。

第1節 現行記述の実態と問題点

韓国などの学習者とは異なり、母語には体系的な敬語が存在しないことから生まれた敬語に対する認識の低さは、中国人日本語学習者の敬語学習を難しくする原因の一つであると多くの先行研究（佐治，1992；宮岡，2005など）に指摘されている。

代名詞、動詞の一部など、中国語にも敬語的な要素が存在するとはいえ、日本語の敬語と比べ、数も少ない上に、必要性もそれほど高くない。その影響で、中国人学習者は日本語の敬語をより複雑に感じる一方、その必要性和重要性をあまり認識していない可能性が高いと考えられる。殊に中国国内にいる学習者の場合、敬語に触れる機会が限られているため、その傾向がより強いのではないかと推察できる。

したがって、中国の大学日本語専攻教育において敬語を導入する際、意識面における工夫は大事であるといえよう。しかし、第3章の元学習者へのインタビュー調査では、「中国語には敬語がほとんどないから、日本語の敬語とはどのようなものなのか、なかなか理解できなかった」、「大学の時、です・ます体以上の敬語を使わなくても注意されたことはなかったから、尊敬語や謙譲語の必要性和重要性を知らなかった」、「来日してからはじめて敬語ができないことによる不利益を知った」、「大学の授業で敬語を教わったとき、日本語の敬語は難しすぎて、母語話者でもうまく使えないという先生の話聞いて、敬語に嫌悪感と抵抗感を覚えた」など敬語の意識面における困惑点と困難点を訴えている者が多かった。

一方、第4章の現場教師へのインタビュー調査においても、「自分も大学時代、敬語について習ったものの、学習期間も短かったため、あまり理解できなかった」、「中国にいる場合、特に教師の立場にいると、敬語を使う機会はほとんどないから、正直必要性和重要性を感じない」、「日本人の中でも最近敬語がうまく使えない人が増えていると聞くから、敬語学習は社会に出てから、職場で覚えればいいと思う」、「実は自分も学習者と同じで、

敬語が苦手、上手に使えないから、教科書どおりに教えるのが一番無難」など学習者と類似した意見が多かった。以上に挙げた元学習者と現場教師の語りから、中国の大学日本語専攻教育現場においては、敬語に関する基本認識の低さがうかがわれ、認識を促すための教育は、十分に行われていないことが示唆される。

中国の大学日本語専攻教科書において、敬語の基本認識について、どのように記述されているのかを【表 15】にまとめた。なお、ここでは、各種類の敬語の仕組みや各表現形式の使い方以外の記述は、すべて敬語の基本認識に関する記述とする。例えば、以下のようなものが含まれる。

- (1) 敬語の定義：日本語の敬語とは何か。
- (2) 敬語の特徴：日本語の敬語には、どのような特色があるのか。
- (3) 敬語の必要性：日本語の敬語の必要性は、どのくらいあるのか。
- (4) 敬語の重要性：日本語の敬語は、本当に重要なのか。
- (5) その他：中国語の敬語との比較やほかに敬語全体に関する注意事項など。

分析した結果、以下の問題点と不足点が見受けられる。

【問題点・不足点① 敬語の定義と特徴があまり記述されていない】

『教育要綱』も含め、敬語の定義と特徴に関する記述はほとんど見られなかった。学習者にとっては、「敬語とは何か、日本語の敬語にはどんな特徴があるのか」も分からないまま、敬語を学び始めることになる。また、『上海新編日語』と『大家的日語』における敬語の定義を見ると、「敬意を表す」というのがキーワードとなっているが、果たして「敬語＝敬意を表すことば」という考え方でよいのか、敬語には別の性質がないのかといったところにも疑問を感じる。

【問題点・不足点② 敬語の必要性和重要性が十分に明記されていない】

「日本社会では敬語は本当に必要なのか」、「なぜ日本語の敬語がなくなるのか」「敬語ができることで何か利点があるのか」、「敬語ができないとどうなるのか」といった敬語の必要性和重要性を導入する際、十分に理解してもらう必要がある。そうしないと、複雑で母語話者にとっても難解な敬語を学ぼうとする学習者のモチベーションが下がると予想される。記述の欠落が「敬語ができなくても困らない」という敬語の必要性和重要性に対する認識の低さを引き起こす要因の一つであると考えられる。

【表 15】 現行の敬語の基本認識に関する記述

教科書	敬語の定義と特徴	敬語の必要性と重要性	その他
『上海新編日語』 『新編日語教学指南』 (改訂版)	敬語とは話し手が聞き手や第三者に敬意を表すために用いる表現形式である。	教育目的と到達目標：日本語における敬語の重要な位置付けと敬語に含まれる日本文化を理解すること。	敬語は、時と場合によって使い分けないと、かえって相手に失礼になることもあるので、気をつけて話そう。
『新編基礎日語』 『新編基礎日語学習参考書』 (改訂版)	記述なし	記述なし	日本語における敬語の使い方は非常に発達しているため、敬語は日本語の特徴の一つともいえる。中国人日本語学習者にとって難点の一つであるといわれている。
『吉林新編日語』 (改訂版)	記述なし	記述なし	待遇表現。現代日本語の敬語は、身分、社会地位、世代順、年齢によって言い方が異なるだけでなく、親疎関係をより重視している。したがって、最近「敬語」の代わりに「待遇表現」という言葉がよく使われるようになった。待遇表現とは、主に親疎関係を重んじ、相手によって異なる言葉遣いで対応することである。親しい関係は敬語を使わず、特にソトの人に自分の家族や身内の年長者、自分の会社の上司に敬語を使ってはいけない。逆に、ソトの人とは疎の関係であるため、敬語を使う必要がある。身内の年長者や自分の会社の上司には、内部で話す際敬語を使うが、親しい場合使わなくてもいい。同輩の間は、親疎関係を重視し、疎の場合敬語を使用し、親の場合使わないのが一般的である。年長者や上司は下の人には親疎関係で判断し、使っても使わなくてもいい。

教科書	敬語の定義と特徴	敬語の必要性と重要性	その他
<p>『大家的日語』 『大家的日語学習輔導要書』</p>	<p>「敬語」は話し手が聞き手や話題の人物に敬意を表すために用いる。</p>	<p>記述なし</p>	<p>話し手は、聞き手や話題の人物の人との社会的人間関係を考慮して、敬意を表すべき人に「敬語」を用いなければならない。敬語の使用は主に三つの要素に関わる。(1) 話し手の年齢や社会的地位が下位の場合、上の人に対し敬意を表すために敬語を使う。(2) 初対面の際、話し手と聞き手の関係は親しくない場合、聞き手に対し敬意を表すために敬語を使う。(3) 「ウチ・ソト」の関係も考慮しなければならない。「ウチ」とは、家族や会社など話し手の属するグループに属する人を指す。「ソト」とは、話し手の属するグループに属さない人を指す。話し手は「ソトの人」に「ウチの人」のことについて話す際、「ウチの人」を自分同様に扱う必要があるため、地位の高い「ウチの人」に対しても敬意を示す敬語を使ってはいけない。</p>
<p>『基礎日語総合教程』 『基礎日語総合教程教学参考書』</p>	<p>記述なし</p>	<p>記述なし</p>	<p>記述なし</p>
<p>『総合日語』 『総合日語教師要書』 (改訂版)</p>	<p>記述なし</p>	<p>記述なし</p>	<p>日本語の敬語は相当発達しており、名詞や形容詞、動詞などほぼ全般にわたって、体系的で複雑なシステムとなっている。その中で、動詞の敬語形式は最も複雑かつ多様で、敬語を表す動詞もあれば、文法的な手段で敬意を表す表現形式もある。</p>

【問題点・不足点③ 敬語に関する誤解や注意点など、中国人学習者の視点を考慮していない】

場面による使い分けの大切さや、日本語の敬語の難しさ、複雑さなど敬語に関する誤解や注意点は多少記述されているが、充実したものとは言いがたい。元学習者と現場教師へのインタビュー調査で語られた敬語による困惑点と困難点は、全く扱われていない。外国人日本語学習者向けの一般的な記述より、中国人日本語学習者の立場に立ち、中国語を母語とする学習者によく見られる誤解や注意点に関する記述を加えたほうが役に立つと考えられる。

【問題点・不足点④ 中国語における敬語の知識を完全に度外視している】

現代中国語には体系的な敬語が存在しないとはいえ、先生や上司、客など立場の上の人に使う言葉は、友達への言い方とは異なり、会議や学会など改まった場面での言葉遣いは普段より気を使うなど、日本語ほどではないが、敬語的な要素は残留している。日本語の敬語も古代の中国語から大きく影響を受けたといわれるように、中国語における敬語を積極的に生かし、比較しつつ記述することで、学習者に親近感とより深い印象を与える効果が期待される。

第2節 関連する先行研究と本研究の提案

一言で「敬語に関する基本的な認識」といっても、多岐にわたる問題が関わっていると見えよう。従来出版された敬語に関する書籍や先行論文においても、この部分に関する記述は散見されつつも、案外まとめられていない傾向が見られる。

「敬語の指針」(文化審議会答申, 2007)においては、「敬語についての考え方」と名づけられ、敬語についての基本的認識と留意すべき事項が第1章で記述されている。以下にその概要を転載する。(p. 63)

敬語についての考え方

基本的な認識

○敬語の重要性は、次の点にある。

- ① 相手や周囲の人と自分との間の関係を表現するものであり、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きを持つ。
- ② 相手や周囲の人、その場の状況についての、言葉を用いる人の気持ち（「敬い」「へりくだり」「改まった気持ち」など）を表現する言語表現として、重要な役割を果たす。

○敬語は、人と人の「相互尊重」の気持ちを基盤とすべきものである。

○敬語の使い方については、次の二つの事柄を大切にしなければならない。

- ① 敬語は、自らの気持ちに即して主体的に言葉遣いを選ぶ「自己表現」として使用するものである。
- ② 「自己表現」として敬語を使用する場合でも、敬語の明らかな誤用や過不足は避けることを心掛ける。

留意すべき事項

(1) 方言の中の敬語の多様性

全国共通語の敬語と並ぶものとして、将来にわたって大切にしていこうが必要である。

(2) 世代や性による敬語意識の多様性

敬語の使い方の違いには、その敬語についての理解や認識の違いが反映していることを考慮するとともに、他者の異なる言葉遣いをその人の「自己表現」として受け止めることが大切である。

(3) いわゆる「マニュアル敬語」

場面ごとに過度に画一的な敬語使用を示す内容とならないよう注意する必要がある。ただし、マニュアル自体は敬語に習熟していない人にとっては有効である。

(4) 新しい伝達媒体における敬語の在り方

社会の各方面で、それぞれの目的や状況に即した工夫や提案がなされることを期待する。ここでも「自己尊重」と「自己表現」が原則である。

(5) 敬語についての教育

人が社会生活において敬語を活用できるようになる過程では、学校教育や社会教育での学習と指導が重要な役割を果たす。

「敬語の指針」の「敬語についての考え方」においては、まず、現代日本社会における敬語の重要性、敬語使用の基盤となる「相互尊重」と「自己表現」について述べた後、現代日本社会における敬語に関して、特に留意すべき事項について記述している。

いずれも日本語の敬語を考える上で重要な観点ではあるが、日本語母語話者を対象とした記述であるため、そのまま中国の日本語教育現場に適用できるとは考えにくい。中国人日本語学習者の立場に立ち、彼らが日本語の敬語をより容易に受け入れ、理解を促すような記述を行う必要がある。

以上を踏まえつつ、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の基本認識に関する新たな記述には、以下のような改善が求められるのではないかと考える。

①敬語の定義と特徴に関する記述を加える。

具体的には：

- ・日本語の敬語はどういうものなのか。
- ・日本語の敬語はどんな特徴があるのか。
- ・日本語の敬語と中国語の敬語との共通点や相違点は何なのか。

②敬語の必要性和重要性を明記する。

具体的には：

- ・日本社会では、敬語はなぜ欠かせないのか。
- ・敬語が使えることのメリットは何なのか。
- ・敬語を使わないことによるデメリットは何なのか。

③敬語に関する誤解や注意点をまとめる。

具体的には：

- ・中国人日本語学習者が敬語を学ぶ際、生じやすい誤解。
- ・中国人日本語学習者が敬語を使う際、注意したほうがよいところ。

以上に挙げた項目は、いずれも中国人日本語学習者にとって必要でありながら、現行の記述では欠如している情報であるといえる。敬語を本格的に学ぶ前に「日本語の敬語とは？その特徴は？」を概観し、「なぜ学ぶ必要があるのか」を十分理解してもらうことで、安心感を与えると同時に、学習のモチベーション向上にもつながると考える。更に、既存の母語知識との比較も親近感を与えたり、注意を引き付けたりする上で重要な役割を果たすと思われる。

第3節 目指したい新たな記述試案例

中国の大学日本語専攻教科書における敬語の基本認識に関する記述の不足という問題点について、第2節の最後でまとめた改善案に基づき、以下のように見出しを立て、それぞれについて記述試案を試みた。本節では、その中から重要なもの（網掛け箇所）を抽出し、記述試案例その①～その③として示したい。以下、教科書体で示すものが記述試案例である。

第1部 【認識編】—敬語の基本認識について

☞ 日本語の敬語とは → → → 記述試案例その①

☞ 日本語の敬語の特徴

☞ 中国語の敬語と日本語の敬語 → → → 記述試案例その②

☞ 敬語は必要なのか → → → 記述試案例その③

☞ 敬語は重要なのか

なお、第9章と第10章の記述提案にも共通することであるが、各記述試案例は学習者向けの教科書と教師向けの指導手引書という2種類に分けられている。前者では教科書をイメージし、学習者に基本的な説明を行いながら、様々な課題を設定し、それを学習者が主体的にクリアすることで、敬語について自ら考え、学ぶことを目指す。一方、後者では教師用指導手引き書の形を想定し、課題の解答例のほかに、学習者の主体的・自律的な学びを支援するために、教師が指導する際参考になると思われるポイントを示す。

記述試案例その① ☞ 日本語の敬語とは

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の談話または文章の中で、敬語だと思う箇所に下線を引いてみましょう。

(1) (研究室にいない先生のことについて、事務員に尋ねる)

学生：すみません。山田先生はもうお帰りになりましたか。

事務員：はい、10分ぐらい前にご帰宅なさったようです。

(2) (面接結果の通知書)

拝啓 時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、先日は当社入社試験にご応募いただき、誠にありがとうございました。厳正なる選考の結果、残念ながら採用を見送りましたことをご通知申し上げます。(後略)

(3) (駅の放送)

間もなく1番線に電車が参ります。危ないですから白線の内側にお下がりください。

間もなく2番線を快速電車が通過いたします。危険ですので白線の内側までお下がりください。

(4) (アルバイト応募の電話で)

応募者：採用担当の方でいらっしゃいますか。

採用担当：はい、そうですが、どちら様でいらっしゃいますか。

応募者：あ、申し遅れました。先日、面接に伺いました王明でございますが…

(5) (友達間の会話)

A：おなかが空いたね。

B：昼ごはんを食べようか。今日は、お弁当持ってきたんだ。

A：私も。お天気いいから、外で食べよう。

【課題2】 敬語の定義について、辞書などで調べてみましょう。

出典：

敬語とは、_____

【課題3】 以下の使い方を見て、「敬語」と「敬意」の関係を考えてみましょう。

【1】 (個人指導の時、指導教官に)

先生がおっしゃるとおりです。

【2】 (学会で、大勢の前で友達に質問する時)

今おっしゃったことについて、お聞きしたいのですが…

【3】（夫婦喧嘩の時、妻が夫に）

何をおっしゃってるの？

【4】（母親が子供に）

早くおっしゃい。

「敬語」と「敬意」の関係は？ _____

【課題4】 以下の定義と自分の調べてきた定義は、どう違うのかを考えてみましょう。

敬語とは、相手や第三者を高くしたり、相手に対する丁寧さや丁寧さを表したり、物事を美化して述べたりする性質を持つ言葉である。

【課題5】 次の説明を読んで、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」の区別について、理解してみましょう。

敬語は、もともとは相手や第三者を高くしたり、相手に対する丁寧さや丁寧さを表したり、物事を美化して述べたりするという性質を持つが、談話や文章の中に用いられることで、相手や第三者に敬意を示したり、距離を置いたり、改まり度を高めたり、冗談・皮肉・怒りを表明したり、品格を保持したりといった表現主体（話し手または書き手）の様々な意識を表すという機能を果たすことができます。

例えば、【課題3】の用例を見ると、同じく相手や第三者を高くするという性質を持つ「おっしゃる」（「言う」の尊敬語）を使っていますが、それぞれ異なった機能を果たしています。場面に合わせて、どのような機能なのか考えてみましょう。

【1】の「おっしゃる」は _____ という学生の意識を表す。

【2】の「おっしゃる」は _____ という質問者の意識を表す。

【3】の「おっしゃる」は _____ という妻の意識を表す。

【4】の「おっしゃる」は _____ という母親の意識を表す。

すなわち、敬語が持つ本来の性質は固定的なものであるのに対し、果たす機能はそれぞれの場面によって、流動的であるといえます。この試案では本来の性質に着目し、用いられる前の敬語を「語としての敬語」と呼ぶのに対し、談話や文章における機能に焦点を当て、用いられた後の敬語を「敬語表現における敬語」と呼ぶことにします。それぞれ第2

部（【形式編】）と第3部（【運用編】）に分けて扱います。両者を区別することで、「敬語は必ず敬意を表すものなのか」、「尊敬できない目上の人になぜ敬語を使う必要があるのか」、「改まった場面では、親しい友達にも敬語を使うのはなぜなのか」、「敬語を使うことで、なぜ怒りを表せるのか」などの疑問が解けるでしょう。

【自由研究】

映画やドラマ、アニメなどから、敬語が使われたシーンを集めてみましょう。
そして、誰が誰に、どういう状況で、どの敬語を使っているのかを見てみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

蒲谷・坂本（1991）によると、「待遇表現」とは、「表現主体」が、ある「表現意図」を、「自分」・「相手」・「話題の人物」相互間の関係、「表現場」の状況・雰囲気、「表現形態」等を考慮し、それらに応じた「表現題材」、「表現内容」、「表現方法」を用いて、表現する言語行為であると定義している。教育の場や標準としての言語の中で相手を卑下し、悪口する表現が取り上げられることは少ないため、狭義には敬語表現を指して待遇表現と呼称する場合もあるが、通常は自身の持つ感情や思想を直接的に表現するのではなく人間関係や場に配慮して選択的に表現する言語行為全般を指している。

例えば、自身に「水を飲みたい」という欲求があり、これを相手に伝えたい場合、相手が誰で、現在がどういう状況なのかによって選択される表現が異なる。相手が友人で表現場が友人の家であった場合、「依頼」という表現機能が選択され、「水ちょうだい」や「お水をください」といった表現が選択される。相手が目上の上司で場所が仕事場であった場合、「許可」という表現機能が選択され、「水を飲みに行っても良いですか」などといった表現が選択される。

【参考文献】

蒲谷宏・坂本恵（1991）「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』3、pp.23-44

国立国語研究所（1990）『敬語教育の基本問題〈上〉』大蔵省印刷局

国立国語研究所（1992）『敬語教育の基本問題〈下〉』大蔵省印刷局

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

敬語を本格的に学ぶ前に、ウォーミングアップとして、学習者に少し敬語に触れる機会を提供し、興味を持ってもらうこと。敬語はどのような形をするのか、どのような場面で用いられるのかなどについて、学習者に自ら発見してもらうことにより、主体的・自律的な学び、そして学習意欲の向上にもつながると思われまます。

使い方

導入の段階であるため、ここでは詳しく説明する必要はありません。ただ教師側から最初から解答例を示すのではなく、学習者が自ら考え、敬語に気づくよう仕掛けましょう。この時点では、迷いや間違いがあってもかまいません。

解答例

(1) (研究室にいない先生のことについて、事務員に尋ねる)

学生：すみません。山田先生はもうお帰りになりましたか。

(「帰る」の尊敬語＋丁寧語(ました))

事務員：はい、10分ぐらい前にご帰宅なさったようです。

(「帰宅」の尊敬語＋丁寧語(です))

(2) (面接結果の通知書)

拝啓 時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

(「健勝」の尊敬語) (「慶ぶ」の謙讓語＋丁寧語(ます))

さて、先日は当社入社試験にご応募いただき、誠にありがとうございました。

(「応募してもらう」の謙讓語) (丁寧語(ました))

厳正なる選考の結果、残念ながら採用を見送りましたことをご通知申し上げます。

(丁寧語(ました)) (「通知する」の謙讓語＋丁寧語(ます))

(3) (駅の放送)

間もなく1番線に電車が参ります。危ないですから白線の内側にお下がりください。

(「来る」の丁寧語＋丁寧語(です)) (丁寧語(です)) (「下がってください」の尊敬語)

間もなく2番線を快速電車が通過いたします。

(「通過する」の丁寧語+丁寧語(ます))

危険ですので白線の内側までお下がりください。

(丁寧語(です)) (「下がってください」の尊敬語)

(4) (アルバイト応募の電話で)

応募者：採用担当の方でいらっしゃいますか。

(「人」の尊敬語) (「だ」の尊敬語+丁寧語(ます))

採用担当：はい、そうですが、どちら様でいらっしゃいますか。

(丁寧語(です)) (「誰」の尊敬語) (「だ」の尊敬語+丁寧語(ます))

応募者：あ、申し遅れました。

(「言い遅れる」の丁寧語+丁寧語(ました))

先日、面接に伺いました王明でございますが…

(「行く」の謙讓語+丁寧語(ました)) (丁寧語「でございます」)

(5) (友達間の会話)

A：おなかが空いたね。

(「腹」の美化語)

B：昼ごはんを食べようか。今日は、お弁当持ってきたんだ。

(「飯」の美化語) (「弁当」の美化語)

A：私も。お天気いいから、外で食べよう。

(「天気」の美化語)

【課題2】

ねらい

敬語の定義について、学習者の主体的・自律的な学びを期待します。

使い方

できれば授業の前に学習者に事前に調べてもらいましょう。そして、授業では従来のように、教える側から定義を与えるのではなく、2、3人の学習者に発表してもらいましょう。

「敬意」という共通点が見られるかどうかについて、他の学習者にも確認しましょう。

解答例

敬語は、一般的には次のように定義されています。学習者の回答も類似したものになると予想されます。

出典：『新明解国語辞典』（第六版） 聞き手や話の中に出てくる人に対する、話し手の敬意（丁寧な気持）を表す言葉。
出典：「デジタル大辞泉」 話し手または書き手が相手や話題の人物に対して敬意を表す言語表現。
出典：『日本国語大辞典』（第二版） 相手や話中の人物に対する敬意を表わす言語的表現。
出典：『国語学大辞典』（初版） 話し手（書き手）が聞き手（読み手）または話題の人物に対する敬意に基づいて用いる特定の言語形式。

補足説明

ほとんどの日本語教科書における敬語の定義も類似したものです。言い方が多少違って、「敬意」という部分は共通しています。しかし、「敬語は必ず敬意を表すものなのか」、「敬意はないが、敬語を使う場合はないのか」といった疑問が生じます。中国語の敬語も同様ですが、敬意というのは、表現主体（話し手または聞き手）の意識の問題であり、本心から尊敬していない相手にも敬語を使うことはあるでしょう。したがって、本試案は、従来の敬語の定義に対し、疑問を抱き、「敬意」の観点から敬語を定義することの不適切さを指摘します。

【課題3】

ねらい

具体的な使用例を通して、学習者に「敬語」と「敬意」の関係について考え、従来の敬語の定義を見直してもらうこと。

使い方

学習者にそれぞれの使用例において、なぜ「おっしゃる」が使われているのかについて考えてもらいましょう。それを通して、「敬語」と「敬意」の関係について説明してもらいましょう。

解答例

いずれも「言う」の尊敬語「おっしゃる」が使われていますが、【1】の場合、先生を相

手にしているため、敬意が含まれる可能性が高いと考えられます。一方、【2】は改まった場面に配慮するための「おっしゃる」で、【3】はわざと距離を置き、怒った気持ちを伝えるための「おっしゃる」で、【4】は自分の言葉を上品にするための「おっしゃる」で、いずれも敬意と関係はないといえます。更に言うと、【1】も敬意があるかどうかは、学生によるでしょう。心から先生を尊敬し、敬意を持って敬語を使う学生もいれば、内心では全然尊敬していないが、立场上敬語を使わざるを得ない学生もいるでしょう。すなわち、**「敬語」は必ずしも「敬意」を表すとは限らない**ということが示唆されます。

補足説明

本試案では、「おっしゃる」は尊敬語として持つ本来の性質と、様々な場面で表現主体の意識によって果たす機能とは異なり、切り分けて考える必要があると主張します。ほかの敬語も同様です。しかし、従来の敬語教育では、その区別を無視し、両者を混淆している傾向があります。

また、各使用例の場面にも目を向けるよう働きかけましょう。敬語の性質は固定的なものであるのに対し、場面によって果たす機能が異なるということから、敬語を使う際、場面の大切さがうかがえます。これについては、第3章の【運用編】で詳しく述べることにします。

【課題4】

ねらい

従来のように「敬意」の観点からではなく、本試案が提唱する敬語の持つ本来の性質に着目した敬語の定義について理解してもらうこと。そして、辞書などに載っている定義とどう異なるのかについて、考えてもらうこと。

使い方

自分の調べた定義と本試案の定義を比較し、その違いについて、考えを述べてもらいましょう。特に「敬語」と「敬意」はイコールの関係ではないことを改めて学習者に認識させましょう。

補足説明

本試案では、日本文化審議会が2007年に公表した「敬語の指針」を参照に、尊敬語（直接的に相手や第三者を高くする）・謙譲語（間接的に相手や第三者を高くする）・丁重語（相手に対する丁重さを表す）・丁寧語（相手に対する丁寧さを表す）・美化語（物事を美化し

て述べる)のそれぞれが持つ性質に着目し、【課題4】に示したように敬語を定義しました。

【課題5】

ねらい

「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」の区別を理解してもらうこと。

使い方

説明を学習者に読んでもらい、【課題3】で示した具体例【1】～【4】を用いて、両者の違いについて理解し、説明できるよう問いかけてみましょう。ここは、従来の敬語に対する考え方とは大きく異なるところなので、丁寧に説明し、理解してもらう必要があります。

解答例

【1】の「おっしゃる」は相手である先生に敬意を示したいという学生の意識を表す。

【2】の「おっしゃる」は学会という改まった場の雰囲気に合わせてたいという質問者の意識を表す。

【3】の「おっしゃる」は相手である夫に怒りを表明したいという妻の意識を表す。

【4】の「おっしゃる」は自分の品格を保持したいという母親の意識を表す。

補足説明

「敬語は敬意を表すとは限らない」という事実に基づき、本試案では、各種類の敬語(尊敬語・謙讓語・丁重語・丁寧語・美化語)の持つ性質に着目し、敬語を定義します。蒲谷(2013)³⁸は「敬語そのものの性質を説明する記述の中に、相手や話題の人物といった「人間関係」や、敬意といった「意識」の問題を取り込んでしまうことで、その敬語の持つ基本的な「敬語的性質」が見えにくくなってしまい、その結果、敬語を整理、分類するときの基準もわかりにくいものになり、混乱が生じてしまう」と指摘しています。

本試案もこの考え方に賛同します。従来の敬語に対する捉え方は、「人間関係」や「意識」などの要素が混入しており、使われる前の敬語が持つ本来の性質と、使われた敬語が実際に果たしている機能が明確に区別されていないため、「敬語は必ず敬意を持って使うものなのか、敬意を抱かない相手には敬語を使わなくてもよいのか」といった疑問が生じ

³⁸ 蒲谷宏(2013)『待遇コミュニケーション論』大修館書店

てしまうと思われます。

そこで、本試案では、蒲谷（2013）に基づき、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」を区別します。前者は、表現主体とは関係なく、言葉として敬語本来の性質を重視するのに対し、後者は常に表現主体の意識と連動して考える必要があります。そして、「語としての敬語」を教える/学ぶのは、敬語の種類や、性質、表現形式といった仕組みに関する体系知識が主な課題となります。具体的には、【形式編】で述べます。一方、「敬語表現における敬語」を教える/学ぶのは、「敬語はどのように適切に使われているのか」など敬語運用に関する問題に重点が置かれます。具体的には、【運用編】で述べます。従来の教科書では、形式に偏る傾向が見られますが、本試案では、その両方を射程に入れます。

以上は、「日本語の敬語とはどういうものなのか」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の5点について、工夫を凝らしてみた。①教師主導型の講義式に適するという従来の教科書とは異なり、様々な課題を設定し、それを学習者が主体的にクリアすることで、敬語について自ら考え、学ぶことを目指す。教師は知識を与える役目ではなく、学習者の主体的・自律的な学びを支援する役目となっている。②学習者がより自然に敬語が受け入れられるよう、直接知識伝授から導入するという従来の扱い方を避け、具体的な使用例を通して、学習者に自らの発見により、敬語に興味を持ってもらうことを狙う。③敬意に収束された従来の敬語の定義について、具体的な使用例を通して、学習者に自ら疑問を感じさせた上で、本研究の定義を示す。④敬語の持つ性質と果たす機能を区別し、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」に分けて扱うことで、敬語の使用は人間関係などの要素と深く関わり、実際の場面と切り離せないということに学習者に理解してもらう。⑤教室を離れた後、学習者の自律学習を促進するために、「自由研究」や「もっと知りたい人のための豆知識」を設ける。

記述試案例その② 中国語の敬語と日本語の敬語

学習者向けの教科書

【課題1】 中国語にも敬語があると思いますか。具体例を考えてみましょう。

【課題2】 次の場面にふさわしい中国語と日本語の言い方を考えましょう。

(1) (相手に年を尋ねるとき)

中国語 (親しい後輩に) _____

(初対面の年配の人に) _____

日本語 (親しい後輩に) _____

(初対面の年配の人に) _____

(2) (自分を待ってほしいと頼むとき)

中国語 (仲のいい友達に) _____

(取引先のお客さんに) _____

日本語 (仲のいい友達に) _____

(取引先のお客さん) _____

(3) (相手に聞きたいことがあるとき)

中国語 (家で自分の家族に) _____

(就職説明会で担当者に) _____

日本語 (家で自分の家族に) _____

(就職説明会で担当者に) _____

(4) (相手に忙しいかどうかを尋ねるとき)

中国語 (高校時代の同級生に) _____

(会社の上司に) _____

日本語 (高校時代の同級生に) _____

(会社の上司に) _____

(5) (学校に来るかどうかを尋ねるとき)

中国語 (クラスメートに) _____

(担任の先生に) _____

日本語（クラスメールに） _____

（担任の先生に） _____

【課題3】 【課題2】を踏まえ、以下の文章を読んで、中国語と比べ、日本語の敬語の特徴を理解してみましょう。

近年、敬語または敬語的な要素は世界の多くの言語に存在するという説³⁹が広まる中、日本語の敬語は以下の特徴を持つことで、世界的に見ても珍しい存在です。

① 広汎性：

名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞など、多くの品詞は敬語の形にすることができます。英語の場合、「would、should、might、could」が丁寧な表現としてよく指摘されます。フランス語やドイツ語の場合、人称代名詞を使い分けることで、相手との間柄を表すようです。中国語の場合、人称代名詞「您」と依頼表現の「請～」などが敬語に当たります。しかし、日本語の敬語と比べ、非常に限られているといえます。日本語の場合、人称代名詞や依頼表現はもちろん、ほとんどの動詞と多くの名詞、形容詞、形容動詞に敬語の形が幅広く存在しています。

② 体系性：

種類ごとに敬語の形にするためのルールが組織化されており、その体系は非常に発達しています。具体的には、名詞、形容詞、形容動詞、副詞の場合、接頭辞の「お/ご」を付けることで敬語の形にすることができます。動詞の場合はやや複雑ですが、それでも尊敬語と謙讓語に分け、それぞれの変形ルールが決まっており、それに従えば敬語の形が作れます。この意味では、日本語の敬語体系はきちんと整理されており、大きな発展を遂げていると考えられます。

③ 複雑性：

動詞の多くは、対応する敬語の形が唯一ではなく、同時に2、3種類も存在します。具体的には、名詞、形容詞、形容動詞、副詞にも見られる現象ですが、最も典型的なのは動詞です。主語によって尊敬語の形と謙讓語の形は別々で、更に尊敬語の形にもバリエーション

³⁹ 詳細は菊地（1997）（p.92）を参照。

ンが何種類もあり、謙讓語も同様です。つまり、動詞の普通の言い方一つに対し、敬語の形は唯一ではなく、場合によっては10種類以上に上ることもあるほど複雑です。

【自由研究】

周りで使われている中国語（談話または文章）を観察し、敬語または敬語的な要素（丁寧な言い方など）だと思われるものを集めてみましょう。

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

学習者に母語である中国語にも敬語が存在することに気づいてもらうこと。

使い方

最初から、教師側から教えるのではなく、学習者が自ら考え、調べ、集めるようにしましょう。

解答例

よく使う例として、以下のものが挙げられます。名詞における敬語が発達しており、尊敬表現としては貴・尊・令など、謙讓表現としては敝・拙などの接頭辞があります。例えば、貴姓（お名前）、貴体（お体）、尊夫人（奥方）、令郎（相手の息子）、敝舎（自分の家）、拙見（自分の意見）などです。

また、動詞においても敬語が存在します。例としては、久仰（お名前はかねて承っております）、久违（ご無沙汰しております）、恭候（お待ちしております）、恭喜（おめでとうございます）、拜访（訪問させていただきます）、拜托（お願いいたします）などが挙げられます。ほかにも、よく指摘されるのは人称代名詞の「您」や動詞の前に付ける「请」、何かを依頼するときの疑問形（「～することができますか/してもいいですか」に相当する「能不能」、「可不可以」）なども敬語の範囲に入るでしょう。

ほかにも次のようなものがあります。

借光、劳驾、费心、请教、赐教、指教、承蒙、久闻、赏光、屈尊、怠慢、失礼、令尊、

令愛、再會、留步、慢走、恭賀、托福、不敢、過獎、大駕、閣下、承蒙照顧。不勝感激。
光臨寒舍。有失遠迎。悉聽尊便。多有得罪。請多關照。承蒙錯愛。多有怠慢。煩您照看。

補足説明

多くの日本語教科書においては、敬語を導入する際、「現代中国語には敬語が存在しない」という見解を持っています。確かに古文と比べ、現代中国語では多くの敬語が消滅しています。また日本語におけるだ体とです・ます体といった文体の違いもありません。しかし、**解答例**に示したように、まだ残留しており、場面によっては、今でもよく使うものもあるでしょう。

よって、中国語話者にとっても、実は敬語は遠い存在ではなく、母語の知識を生かせば、日本語の敬語をより身近に感じ、より深く理解することができるのではないかと考えます。両者の共通点として、中国語の敬語も日本語の敬語も目上の人や改まった場面で使うことが多く、尊重や丁寧などの気持ちを表す役割を果たしています。その一方、中国語の敬語と比べ、日本語の敬語は【課題3】に挙げた三つの特徴を持つため、日本語を母語とする人でも、敬語に悩まされます。また、敬語は日本語の特色として重要な位置を占めているため、日本人は中国人より敬語に対する意識も高く、日常生活において敬語を使用する頻度も高いといえます。すなわち、日本社会においては中国社会より敬語がより一般的に使われており、その必要性も高いといえるかもしれません。

日本語教科書における敬語に関する記述を見ますと、中国語の敬語について全く触れていないことが分かります。しかし、中国語の敬語と比較しながら説明したほうが、親近感を与えられるし、より印象深くなるのではないのでしょうか。そのため、母語である中国語における敬語に関する知識を積極的に生かしたいというのが、本試案の基本的な姿勢です。

【課題2】

ねらい

文章を読んで、学習者に日本語の敬語の「広汎性」、「体系性」、「複雑性」について理解してもらうこと。

使い方

人間関係など、場面を十分に確認した上で、学習者に自ら考え、答えてもらうようにしましょう。解答は同じでなくてもかまいません。どの敬語を使っているのかという形式の問題より、人間関係に合わせ、敬語を使うかどうかという調整能力に着目しましょう。

解答例

解答は唯一ではありません。あくまでも参考例として、以下に示します。

(1) (相手に年を尋ねるとき)

中国語 (親しい後輩に) 你多大?

(初対面の年配の人に) 请问, 您多大岁数?

日本語 (親しい後輩に) いくつ?

(初対面の年配の人に) 失礼ですが、おいくつですか。

(2) (自分を待ってほしいと頼むとき)

中国語 (仲のいい友達に) 等我一下。

(取引先のお客さんに) 请您稍等。

日本語 (仲のいい友達に) ちょっと待って。

(取引先のお客さん) 少々お待ちください。

(3) (相手に聞きたいことがあるとき)

中国語 (家で自分の家族に) 有个事想问一下。

(就職説明会で担当者に) 可以请教您一个问题吗?

日本語 (家で自分の家族に) 聞きたいことがあるんだけど…

(就職説明会で担当者に) お伺いしてもよろしいでしょうか。

(4) (相手に忙しいかどうかを尋ねるとき)

中国語 (高校時代の同級生に) 你最近忙吗?

(会社の上司に) 您最近忙吗?

日本語 (高校時代の同級生に) 最近、忙しい?

(会社の上司に) 最近、お忙しいですか。

(5) (学校に来るかどうかを尋ねるとき)

中国語 (クラスメートに) 你明天来吗?

(担任の先生に) 老师, 您明天来吗?

日本語 (クラスメールに) 明日、来る?

(担任の先生に) 明日、いらっしゃいますか。

補足説明

使い方でも述べたように、中国語も日本語も解答が唯一ではありません。この課題を通して、以下の2点を学習者に理解してもらいましょう。①(1)～(3)のように、中国語にも敬語が存在します。年上や目上の相手に使うなどの共通点があります。(4)と(5)のように、中国語では敬語を使わなくても、日本語では敬語を使う必要のある場合もたくさんあります。

【課題3】

ねらい

文章を読んで、日本語の敬語の「広汎性」、「体系性」、「複雑性」という三つの特徴について、理解してもらいましょう。

使い方

ただ読むだけでなく、文章で説明している三つの特徴について、学習者にそれぞれ具体例を挙げて、説明してもらいましょう。

補足説明

【課題3】は、まだ敬語をあまり学んでいない導入段階で扱う際、学習者にとって少しイメージしにくい可能性が高いです。そのため、ここでは簡単に触れるだけで、授業時間の余裕があれば、敬語学習が一通りに終わってから、ディスカッションなどの形で、再度学習者の意見を確認するという使い方もあります。

いずれにしても、従来の教科書のように、中国語には敬語はないため、比較しようもないという扱い方ではなく、日本語ほど発達していないが、中国語にも敬語や敬語的な要素が存在しています。そして、日本語の敬語との共通性もあるということを学習者に気づかせ、母語の知識を生かしてもらえよう導きましょう。

以上、「中国語と日本語の敬語」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考察してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。なお、記述試案例その①と重複するところを省略する(以下同様)。①中国語の敬語を無視するという従来の教科書とは異なり、学習者が敬語をより身近に感じてもらうよう、母語である中国語の敬語を積極的に取り入れ、学習者の敬語に対する意識を高めることを目指す。②具体的な場面を提供し、それにふさわしい中国語と日本語の言い方をそれぞれ考えてもら

うことにより、学習者に自ら中国語と日本語の敬語に見られる共通点と相違点に気づいてもらう。③日本語の敬語の特徴をまとめ、学習者に示すことで、マクロ的な視点から、敬語に対する全体的な印象を与え、次の敬語学習につながる。

記述試案例その③ 敬語は必要なのか

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の調査結果は、何を意味していますか。

平成23年度「国語に関する世論調査⁴⁰」における敬語に関する調査結果

日常生活で、どの程度敬語を使っているか <問9> (P.37)
—「使っている(計)」は7割台半ば—

【全体・過去の調査との比較】

日常生活で、どの程度敬語を使っているかを尋ねた。

「いつも使っている」と「ある程度使っている」を選んだ人を合わせた「使っている(計)」は76.3%、「余り使っていない」と「使っていない」を合わせた「使っていない(計)」は23.6%であった。

過去の調査(平成17年度調査)と比較すると、「使っている(計)」は2ポイント増加している。ただし、そのうち「いつも使っている」は4ポイント減少し、「ある程度使っている」は7ポイント増加している。

(数字は%)

使っている(計)		使っていない(計)		分からない
76.3 [73.9]		23.6 [25.9]		
いつも使っている 12.9	ある程度使っている 63.4	余り使っていない 20.8	使っていない 2.8	

[17.3]

[56.6]

[22.9]

[3.0]

[0.1]

【 】内は平成17年度調査

平成25年度「国語に関する世論調査」における敬語に関する調査結果

⁴⁰ 文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起することを目的としている。調査対象・規模は全国の16歳以上の男女約3,000人で、調査方法は個別面接方式で、調査時期は毎年度異なる。日本語の特徴であり、かつまた用法が特に難しいとされる敬語を中心とした言葉遣い、あるいは慣用句・熟語などの誤用が多数派になっていくことを捉えた調査結果が日本語の乱れや変化の例としてますコミなどで数多く取上げられる。

(http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/最終アクセス：2015年12月1日)

今後とも敬語は必要だと思うか。〈問 16〉 (P56)

— 「必要だと思う (計)」と、98.0%が回答。 —

(数字は%)【 】内は平成 15 年度調査

必要だと思う (計)		必要だと思わない (計)		分からない
98.0	【96.1】	1.4	【3.3】	
必要だと思う	ある程度必要 だと思う	余り必要だ とは思わない	必要だとは思 わない	
84.5	13.6	1.0	0.4	
【67.8】	【28.3】	【2.6】	【0.7】	

〔全体・過去の調査との比較〕

今後とも敬語は必要だと思うかを尋ねた。

「必要だと思う (計)」の割合が 98.0%で、「必要だと思わない (計)」の割合が 1.4%となっている。

過去の調査結果 (平成 15 年度) と比較する

と、「必要だと思う (計)」の割合は余り変化がないが、そのうち、「必要だと思う」の割合が 67.8% (平成 15 年度) から 84.5% (今回調査) へと、17 ポイント増加している。

二つの調査から分かったことは？

【課題 2】 「敬語は必要なのか？」と先輩や日本人の友達に聞いたり、インターネットで調べたりしてみましょう。そして、収集した意見を次のようにメモしてください。ほかの人と意見交換もしましょう。

例：

情報源：日本に留学している先輩からの意見

見解：敬語は 必要 必要でない

理由：特に将来日本語を用い、仕事する可能性が高い日本語専攻生にとって、敬語はとても必要だと思う。自分の場合、まずアルバイトの時や、先生や先輩たちと話すときなど、敬語を使うようにしている。中国にいた頃、長くて複雑な敬語を使わなくても、意味が通じれば問題はないと思っていたが、それは誤解だった。敬語は相手に与える印象を左右する大事な要素だ。また、敬語を使わなければ、相手に敬意を表すこともできない。

情報源：_____からの意見

見解：敬語は 必要 必要でない

理由：_____

情報源： _____ からの意見

見解：敬語は **必要** **必要でない**

理由： _____

【課題3】 「敬語を使うのは、どんなときか」について、次の調査結果を予想してみましょう。そして、予想外の項目があれば、教えてください。

平成23年度「国語に関する世論調査」における敬語に関する調査結果

・ _____ と話すとき	83.3%
・ _____ と話すとき	81.9%
・ 知らない人（同年輩又は年齢が上と思われる人）と話すとき	79.3%
・ _____ と話す時とき	64.7%
・ 相手のことを立てたいとき	39.1%
・ _____ を円滑にしたいとき	38.5%
・ 知らない人（明らかに年齢が下と思われる人）と話すとき	36.2%
・ 意識的に _____ を出したいとき	33.5%
・ ものを頼みたいとき	33.1%
・ 有利に話を進めたいとき	10.5%
・ _____ を表したいとき	10.3%

【自由研究】

文化庁のホームページ (http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/) に、平成7年以降の「国語に関する世論調査」の結果が開示されています。その中で敬語に関するものを集めてみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

日本人の中でも、敬語を嫌い、敬語不要論を唱える人がいる。主な理由として、以下の意見はよく耳にする。

- ・封建的な考え方にに基づき、上下関係を生む敬語は、人格対等の考えに合わない。
- ・形が複雑で、使い方も難しいし、うまく使えない人が増えている。
- ・敬語がない言語もたくさんある。日本人は礼儀や形式にこだわりすぎて、よくない。
- ・言葉よりも態度のほうが大切なので、敬語を使わなくても態度で十分示せる。

その一方、2007年に日本文化審議会によって公表された「敬語の指針」では、敬語の重要性について、詳細に記述されており、要点をまとめると、次のようになる (p.63)。

①相手や周囲の人と自分との間の関係を表現するものであり、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きを持つ。②相手や周囲の人、その場の状況についての、言葉を用いる人の気持ち（「敬意」「へりくだり」「改まった気持ち」など）を表現する言語表現として、重要な役割を果たす。

皆さんは、どう思いますか。

【参考文献】

文化審議会（2007）「敬語の指針」文化審議会答申

蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

学習者世論調査の結果を通して、日本社会における敬語の必要性を学習者に察知させること。

使い方

教師側が結論を示すのではなく、学習者に自ら敬語の必要性に気づき、語ってもらいましょう。

解答例

調査結果によると、7割以上の日本人が日常生活で敬語を必要としていることが分かります。そして、「今後とも敬語は必要だ」という意見が回答者の98%によって支持されていることが明らかとなりました。

補足説明

従来の教科書を見ると、敬語の複雑な表現形式について、詳細に紹介されている一方、敬語の必要性についてはほとんど何も記述されていません。そのため、現場では敬語の必要性に関する指導はあまり行われていないのではないかと予想されます。実際に、筆者の行った調査（任 2012⁴¹を参照）では、大学時代敬語を教わったものの、その必要性と重要性を教えてもらえず、就職後または来日後はじめて気づいたと語る元学習者が多かったです。

確かに社会人と比べ、大学という環境の中で自然に敬語の必要性に気づく機会は少ないかもしれません。だからこそ、授業で特別に扱う必要があり、学習者に敬語の必要性に気づかせる工夫が求められます。特に、母語には体系的な敬語が存在しない中国人学習者にとっては、より不可欠だといえましょう。しかし、従来のような教え方だと、敬語の必要性を感じないまま、複雑な表現形式ばかり教わっても、嫌悪感と抵抗感を抱いてしまう学習者が多いのが現状です。

【課題2】

ねらい

世論調査の結果を確認した後、「敬語は必要なのか？」という問いについて、学習者に身近にいる人やインターネットから情報を収集してもらうこと。自ら意見を収集することにより、学習者が敬語の必要性について、より身近に感じることができると期待されます。

使い方

この課題も自律学習の一環として、学習者に事前に課すことをすすめます。学習者に自分の収集した意見について、発表させ、それをクラスで確認しましょう。なお、学習者が収集した意見の中には、敬語は必要ではないという意見も現れるかもしれません。その際、聞き流すのではなく、なぜそういう意見が出たのか、その根拠などについて、

⁴¹ 任麗潔(2012)「中国高等教育の専攻日本語教育における「敬語教育」に関する調査報告—学習者・教科書・教師という三つの視点から」『待遇コミュニケーション研究』9、pp.113-128

教師も学習者と一緒に考え、探求する姿勢が求められます。

補足説明

必要に応じて、教師から以下の意見を紹介することもできます。

・インタビュー調査で明らかとなった来日中国人による生の声⁴²

Aさんの意見：中国の大学にいるとき、周りのクラスメートと中国人の先生には中国語で話し、日本人の先生にはいつもです・ます体だけだった。尊敬語や謙譲語を使う機会はほとんどなく、です・ます体以上の敬語の必要性を知らなかった。来日後、アルバイトの面接で敬語（尊敬語と謙譲語も含めて）レベルについて聞かれて、初めて敬語が使えないことの不利益を感じた。また、就職活動する際には、面接官は面接者の敬語を重視しているという日本人先輩の体験談を聞いて、改めて敬語の必要性と重要性を実感した。

Bさんの意見：日本社会では年上や先輩、先生、上司などに対し、敬語を使わなければならないという文化がある。「郷に入れば郷に従え」、日本に来たり、日本人と接触したりする以上、それを受け入れるしかない。留学の時、学校では先生や先輩と話すときや、アルバイト先では接客するときなど、なるべく敬語を使うように心がけていた。就職後、上司や取引先の人に敬語で話すのが当たり前だから、使えないと印象が悪くなる。

Cさんの意見：中国の大学にいるとき、敬語の必要性を知らなかった。日系企業に就職後、日本人と接触しているうちに、敬語は欠かせないものだと少しずつ気づき始めた。親しくなりたくて、上司にも非です・ます体で話していた。その後、日本人女子社員が上司に敬語で話すのを見て、敬語は目上を高くする手段だと分かって、自分も真似し始めた。上司に非です・ます体を使う自分が恥ずかしかった。

Dさんの意見：自分の生活では、敬語は欠かせない。初対面の人には敬語を使わないといけないし、学会などの改まった場でも敬語を使う必要がある。大雑把で気にしない人は使わなくてもいいかもしれないが、自分は礼儀正しい人だと思われたいから敬語を使うようにしている。また、役所、銀行、スーパーなどに行くときも、敬語で話されてい

⁴² 筆者が2011年～2013年に行った中国の大学日本語専攻教育の元学習者と現場教師へのインタビュー調査から、代表的な意見を選び、ここに記載する。

るから、理解できないととても困る。

Eさんの意見：敬語は必要だということは、大学の時から知っていたが、使ったことがなかったから、実感はなかった。卒業後、中国の日系企業に勤めたとき、取引先宛のメールで、敬語がうまく使えなくて、上司に怒られた。大学の授業で習ったものの、ほとんど忘れていた。母語にはあまり敬語がない中国人学習者にとって、日本語の敬語の必要性は気づきにくいと思う。

以上の意見を見て分かるように、来日した中国人も敬語の必要性を強く認識しており、普段の生活において、様々な場面で敬語を必要としていることが分かります。しかし、このような敬語の必要性に関する考え方は、就職や来日がきっかけで変化していたことも確認されました。すなわち、大学時代、敬語（特に尊敬語と謙譲語）を教わったものの、使う機会が少ないため、その必要性に気づかず、就職後や来日後の体験により、初めて敬語の必要性を知ったという意識変化が共通に見られました。このことから、教師側としては、大学の授業で敬語を教える際、まずその必要性を学習者に十分理解してもらい、敬語を使う機会を与える必要があると示唆されるでしょう。

【課題3】

ねらい

敬語の必要性を確認した上で、「敬語を使うのは、どんなときか」について、学習者に考えさせ、意識させることにより、より敬語の必要性に対する意識を高めること。

使い方

なるべく学習者が自ら答えに気づくよう、ここまで教科書に出ている具体例を使い、ヒントなどを与えましょう。答えが全部出た後、学習者にとって、特に予想外の項目について、説明を加えましょう。また、学習者からは他の答えが出る可能性もあります。調査結果にはない答えが出た場合、教師も一緒になって考えましょう。

解答例

平成23年度「国語に関する世論調査」における敬語に関する調査結果

敬語を使うのは、どんなときか <問11> (P.44)
— 「年上の人と話すとき」「目上の人と話すとき」を8割以上の人が選択 —

		【平17年度】
・年上の人と話すとき	83.3%	82.7%
・目上の人と話すとき	81.9%	76.4%
・知らない人（同年輩又は年齢が上と思われる人）と話すとき	79.3%	67.2%
・尊敬する人と話しているとき	64.7%	64.8%
・相手のことを立てたいとき	39.1%	45.8%
・人間関係を円滑にしたいとき	38.5%	38.8%
・知らない人（明らかに年齢が下と思われる人）と話すとき	36.2%	32.3%
・意識的に改まった感じを出したいとき	33.5%	40.4%
・ものを頼みたいとき	33.1%	33.1%
・有利に話を進めたいとき	10.5%	21.7%
・上品さを表したいとき	10.3%	12.7%

補足説明

以上の調査結果を見ると、日本社会においては、敬語が必要とされる場面として、「年上の人と話すとき」、「目上の人と話すとき」、「知らない人と話すとき」、「尊敬している人と話しているとき」という四つが最も多く挙げられていることが分かります。ほかにも「人間関係を円滑にしたいとき」、「意識的に改まった感じを出したいとき」、「ものを頼みたいとき」などの意見も示されています。これらの意見を通して、日本人の敬語に対する意識、日常生活において敬語の果たす働きがうかがわれるでしょう。

以上をまとめると、現代の日本社会では、様々な場面で敬語が必要とされていることが分かります。敬語を導入する段階で、この事実を学習者に知ってもらうことにより、彼らの敬語学習のモチベーションの向上につながると考えられます。

以上、「敬語は必要なのか」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。①教師から一方的に敬語の必要性を学習者に押し付けるのではなく、学習者が自ら世論調査の結果を分析し、気づくことを目指す。②学習者がより敬語の必要性が実感できるよう彼らにとって、遠い存在である専門書などから引用するのではなく、学習者の身近にある情報を収集してもらう方法を考えた。③より敬語の必要性に対する意識を高めるために、ただ敬語は必要だと伝えるのではなく、留学生による生の意見を紹介したり、具体的にどういふときに必要なのかについて考えさせたりするようにした。

第9章 「語としての敬語」に関する記述の提案

本章も前章同様、三つのステップを踏み、論じていきたいと思う。まず、第1節では、中国の大学日本語専攻教科書における「語としての敬語」に関する記述の実態を明らかにし、混乱しているかどうかを検証する。次に、第2節では、先行研究を踏まえ、「語としての敬語」に関する記述の混乱という問題点を改善するための本研究の提案を示す。最後に、第3節では、本研究の改善案を踏まえ、目指したい「語としての敬語」に関する記述を具体的に示す。

第1節 現行記述の実態と問題点

筆者が大学時代に敬語を教わったとき、以下のことについて疑問に感じ、教科書を読んでも、担当教師に聞いても、納得のいく答えは得られなかった。①尊敬していない目上の相手に、なぜ敬語を使うのか。②「ご連絡」や「お手紙」は、尊敬語？謙譲語？丁寧語？③「申す」と「申し上げる」は、どう違うの？④「ただいま、電車が参ります」とは、電車を低くしているの？⑤「お金」や「ご飯」などは、誰に敬意を表しているのか。

当時、これらの敬語の形式面における困惑点と困難点は個別の問題であると考えていた。しかし、1.2.2の調査においても、同じような疑問を抱えている調査協力者がいた。更には、第3章と第4章の調査協力者に確認した結果、元学習者に限らず、上述した疑問を抱えている現場教師も多いことが明らかとなった。

そこで、これらの疑問は個別の問題ではなく、中国の日本語教育現場に共通しているものである可能性が高いと推測し、その背景には敬語の仕組み、つまり敬語の種類、性質、表現形式などに対する理解が十分ではないことが原因ではないかと考えた。更に、第5章の関連教材の分析結果を通し、このような理解の不十分を招いたのは、現行の「語としての敬語」に関する記述が混乱しているためであると察知する。

本研究では、中国の大学日本語専攻教科書における「語としての敬語」に関する記述を主に以下の三つの側面から検討する。

- (1) 敬語の種類：敬語は何種類に分けて紹介されているのか。
- (2) 敬語の性質：各種類の敬語の性質について、どのように書かれているのか。
- (3) 敬語の表現形式：各種類の敬語の表現形式は、どのようにまとめられているのか。

【表 16】 現行の「敬語の仕組み」に関する記述

教科書	分類	性質					表現形式
		尊敬語	謙譲語	丁寧語	丁重語	美化語	
『上海新編日語』 『新編日語教学指南』 (改訂版)	三分法	話し相手や話題の人に対し、尊敬の気持ちを表す敬語。	話し手が聞き手に対し、自分自身または話題になっている自分の身近の人の行為を謙遜して言う敬語。	物事を丁寧に言うことで相手に敬意を表す言葉。また、物事を上品に、やさしく言い表す場合にも用いられる。			5.2.3の(2)の①の「敬語の表現形式」を参照
『新編基礎日語』 『新編基礎日語学習参考書』 (改訂版)	三分法	年長者や目上の人の動作・行為に対し、尊敬の気持ちを表す言葉。	話し手が謙遜の言い方で、間接に相手への敬意を表す言葉。	話し手が、聞き手に物事を丁重に言うときに用いる言葉。	「おる」、「まいる」などは「丁重語」と呼ばれるときもある。		まとめなし
『吉林新編日語』 (改訂版)	三分法	外部者や年長者、上位者に尊敬の気持ちを表す言葉。	外部者や年長者、上位者に、自分のことを謙遜し、相手への敬意を表す言葉。	相手と関係なく、物事を丁重に、上品に述べる気持ちを表す言葉。			まとめなし
『大家的日語』 『大家的日語学習輔導要書』	三分法	話し手が聞き手や話題の人に敬意を表すために、聞き手や話題の人の行動や状態、所有物などを高めて表す。また、聞き手や話題の人に所属する物や人などにも使える。	話し手が聞き手や話題の人に対して敬意を表すために、話し手自身の行為を低めて述べる表現である。敬意を示す相手は目上の人か「ソトの人」である。また、話し手は「ソトの人」に対し、「ウチの人」について話す際も謙譲語を使う。	話し手が聞き手に敬意を示すために用いる丁寧な表現である。			まとめなし
『基礎日語総合教程』 『基礎日語総合教程教学参考書』	二分法	相手や話題の主、また、その動作、状態やその所有物などを敬い高めて言う語。	自分や自分の側にあるものをへりくだって言うことで、相対的に相手に敬意を表す語。		動作の相手ではなく、聞き手に対して配慮する敬語。		まとめなし
『総合日語』 『総合日語教師要書』 (改訂版)	四分法	相手や話題の人物へ直接に敬意を表す言葉。	話し手が謙遜の言い方で、間接に相手や話題の人物へ敬意を表す言葉。	記述なし		記述なし	まとめなし

【表 16】にまとめた現行の「語としての敬語」に関する記述を分析した結果、以下の問題点と不足点が見られた。

【問題点・不足点① 敬語の分類がまちまちで統一されていない】

敬語は二・三・四分法で紹介されており、従来の三分法が主流である。それにより、丁重語と美化語の扱い方に関しては、かなりの不統一が見られた。文化審議会が 2007 年に「敬語の指針」を公表し、敬語五分法が提唱されて 7 年経った今でも、中国の大学日本語専攻教科書においては、まだ取り入れられていないことが分かる。二・三・四分法から生じる敬語の誤解や混乱を解消するための記述が求められる。

【問題点・不足点② 尊敬語と謙譲語の働きに関する記述が意識に偏りすぎている】

尊敬語の働きには、「尊敬」、「敬意」、「敬う」など、謙譲語の働きには「謙遜」、「謙る」といった言葉が多く現れている。蒲谷他（2010）は、敬語の性質と敬語を使うときの意識とは別のものであると指摘したように、敬語は必ずしも尊敬の気持ちを表す際に使われるとは限らず、「人間関係」、「場」、「内容」とも連動しているといえる。「相手と距離を置く」や「改まった場面」、「品格を保つ」などの場合にも敬語を用いることがあるため、性質の記述を行う際、これらの要素も考慮に入れるべきだと考える。

【問題点・不足点③ 敬語の使用対象に関する記述が矮小化されている】

尊敬語や謙譲語の使用対象者として、「目上」や「年長者」、「上位者」、「外部者」が多いことから、「人間関係」（「上下・親疎関係」と「ウチ・ソト関係」）が敬語を使うかどうかを判断する主な基準とされている傾向が観察される。しかし、「人間関係」は敬語を使う際、欠かせない要素ではあるが、唯一の要素ではないことも学習者に理解してもらう必要がある。また、「ウチ・ソト」と「第三者・話題の人物」という二つの概念の導入も、ばらつきが見られたため、改めて検討し、統一する必要があると思われる。

【問題点・不足点④ 丁寧語、丁重語や美化語の位置付けが不明】

丁寧語の範囲はあいまいであり、丁重語と美化語の位置付けも混乱している傾向が見られる。丁重語は謙譲語と分類されたり、丁寧語と分類されたりするなど記述が矛盾している。丁重語の概念を導入し、補足知識として名称を挙げている教科書もあるが、その特徴や謙譲語及び丁寧語との区別に関しては、十分言及されていないことが分かる。美化語に

関しても、丁寧語に分類されたり、全く触れられなかったりするため、敬語における位置付けが明確に記述されていない。

【問題点・不足点⑤ 敬語の表現形式が明確に整理されていない】

各教科書における敬語の表現形式に関する記述を載せると非常に多くの紙幅を要するため、ここでは問題点のみ挙げることにする。現行の提示方法として、種類ごとに一般化された形を表でまとめるタイプと、種類ごとに使用例文とともに代表例のみを挙げるタイプが主流である。前者に関しては、分散して習った敬語の各表現形式を最後に種類ごとにまとめることにより整理が付きやすいが、具体的な使い方がイメージしにくいという欠点がある。一方、後者に関しては、具体例が挙げられているため、一般化されたものより具体的にどのように使われているのかを示せるが、全体像が見えないため、それぞれの表現形式の位置付けが把握しにくいという欠点がある。複雑で数多い敬語の形をより学習者に理解し、記憶してもらうために、新たなまとめ方を検討する必要があると考える。

第2節 関連する先行研究と本研究の提案

敬語は日本語の特徴として、その仕組みについて昔から盛んに議論されてきた。代表的なものには、山田（1924）、松下（1930）、時枝（1941）、辻村（1963）、宮地（1968）、渡辺（1971）、大石（1975）、宮地（1982）、辻村（1992）、菊地（1997）、蒲谷他（1998）などが挙げられる。これらの論考は、いずれも敬語の分類や性質、形などについて、独自の見解を示し、本研究に貴重な示唆を与えてくれた。ここでは、本研究ととりわけ深い関わりを持つ、蒲谷（2013）における「言材としての敬語⁴³」と「敬語の指針」（文化審議会答申，2007）における「敬語の仕組み」について、詳細に紹介したい。

まず、第2章の「理論的枠組み」に挙げた蒲谷（2013, p. 89）においては、「語としての敬語の体系」として、以下のように敬語の種類・性質・形が示されている。

⁴³ 本研究では「語としての敬語」とする。

敬語分類表

敬語例	11 分類 敬語的性質	5 分類	3 分類
オッシャル・イラ ッシャル・オ帽 子・オ美シイ・オ 書キニナル	直接尊重 動作・状態・所有の主体を高くする	尊敬語	尊敬語
クダサル・教エテ クダサル・ゴ説明 クダサル	恩恵直接尊重 動作の主体を高くする＋恩恵		
御社・玉稿	相手尊重 相手に関する事物を高くする		
伺ウ・オ会イスル	間接尊重 動作の主体を高くしない ＋動作に関する関係する人物を高くする	謙讓語 I	謙讓語
イタダク・ゴ説明 イタダク・サシア ゲル	恩恵間接尊重 動作の主体を高くしない ＋動作に関する関係する人物を高くする ＋恩恵		
イタス・マイル	丁重 動作の主体を高くしない＋改まり	謙讓語 II (丁重語)	
弊社・拙稿	自己卑下 自分に関する事物を低くする		
ゴ説明イタス・拝 見イタス	尊重丁重 動作の主体を高くしない ＋動作に関する関係する人物を高くする ＋改まり	謙讓語 I ＋ 謙讓語 II (丁重 語)	
オ花・ゴ褒美	美化 事物を美化する	美化語	丁寧語
です・ます	丁寧文体 文章・談話全体を丁寧にする	丁寧語	
デアリます・デゴ ザイます	丁重文体 文章・談話全体を丁重にする		

次に、「敬語の指針」における「敬語の仕組み」に関する記述を【表 17】にまとめた。

【表 17】 「敬語の指針」における「敬語の仕組み」

分類	五分法																
	尊敬語					謙讓語 I		謙讓語 II (丁重語)			丁寧語		美化語				
働き	相手側又は第三者の行為・物事・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。					自分側から相手側または第三者に向かう行為・物事などについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。		自分側の行為・物事などを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。			話や文章の相手に対して丁寧な述べるもの。		ものごとを、美化して述べるもの。				
形	動詞		名詞	形容詞	形容動詞	名詞+だ	動詞		名詞	動詞			名詞	です・ます	(で)ございます	名詞	名詞+する
	特定形	一般形					特定形	一般形		特定形	一般形	謙讓語 I+II の一般形					
	いらっしゃる、なさる…	お/ごになる、(お)れる、お/ごくださる…	ご住所、お名前、貴社…	お忙しい、細くていらっしゃる…	ご立派、積極的でいらっしゃる…	名詞+でいらっしゃる	伺う、差し上げる…	お/ごする、お/ご申し上げる、お/ごいただく…	お手紙、ご説明、拝顔…	参る、申す、いたす…	くいたす	お/ごいたす	愚見、拙著、弊社…	高いです、食べます…	田中でございます、おいしゅうございます…	お料理、お天気…	お料理(する)…

蒲谷（2013）においては、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」を区分し、前者については、代表的な敬語例を示しつつ敬語的性質を記述した後、記述した性質に基づき、敬語の11分類を提唱した。

第6章の第3節で述べたように、本研究は基本的には蒲谷（2013）の敬語観を受け継いでいる。そのため、11分類に対しても賛同する立場をとるが、やや専門的であるため、そのまま中国の日本語教育現場に持ち込むと、現場教師や学習者に抵抗されてしまう可能性が高い。それに対し、「敬語の指針」の五分法は、簡潔明瞭である上に、現行の二・三・四分法により生まれた誤解や不明点を解消できるという利点もあるため、中国の大学日本語専攻教育現場により適していると考える。

以上を踏まえつつ、中国の大学日本語専攻教科書における「語としての敬語」に関する新たな記述を目指すために、以下の改善策を提案する。

① 敬語の種類に関する記述を訂正する。

具体的には：

- ・「敬語の指針」の五分法を取り入れる。
- ・謙譲語と丁重語を区別する。
- ・美化語を丁寧語から独立させる。

② 敬語の性質に関する記述を再考する。

具体的には：

- ・人間関係や意識などの要素を外し、客観的に記述する。
- ・謙譲語と丁重語の性質の違いを明記する。
- ・丁寧語と美化語を区別し、それぞれの性質を補足する。

③ 敬語の形に関する記述を整理する。

具体的には：

- ・5種類ごとに、代表例のほかに、一般化された表現形式をまとめる。
- ・一般化された表現形式に、具体的な使用例も添える。
- ・各表現形式の適用範囲を記載する。

無論、分類や働き、表現形式など「語としての敬語」を整理し、記憶することが敬語教育の最終目標ではない。いくら体系的な知識が理解できても、実際の場面で敬語が使えなければ、敬語を身につけたとはいえないだろう。しかし、正しく敬語を分類し、それぞれの種類の敬語の働きと表現形式を把握することは、敬語に対する様々な誤解を防ぎ、より

スムーズに敬語が使えるようになるための前提であると考え。昨今よく耳にする「ご利用できません」や「担当者に伺ってください」などの誤用も、よく考えると「語としての敬語」を正しく整理できていないことと関係していることが分かる。

第3節 目指したい新たな記述試案例

中国の大学日本語専攻教科書における「語としての敬語」に関する記述の混乱という問題点について、第2節の最後でまとめた改善案に基づき、以下のように見出しを立て、それぞれについて記述試案を試みた。本節では、その中から重要なもの（網掛け箇所）を抽出し、記述試案例その①～その⑦として示したい。以下、教科書体で示すものが記述試案例である。

第2部 【形式編】—「語としての敬語」について

敬語五分法 → → → 記述試案例その①

尊敬語とは → → → 記述試案例その②

【1】語としての尊敬語動詞特殊形

【2】語としての尊敬語動詞「～(ら)れる」

【3】語としての尊敬語動詞「おだ～になる」 → → → 記述試案例その③

【4】語としての尊敬語動詞「おだ～だ」

【5】語としての尊敬語動詞「おだ～なさる」

【6】語としての尊敬語動詞「おだ～くださる」

【7】語としての尊敬語形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」

【8】語としての尊敬語形容動詞「おだ～」と「(おだ)～でいらっしゃる」

【9】語としての尊敬語副詞「おだ～」

【10】語としての尊敬語名詞「おだ～」

【11】語としての尊敬語名詞接頭辞「御・貴・玉…」と接尾辞「様、方、殿…」

【12】語としての尊敬語名詞「～でいらっしゃる」

⇨ 謙讓語とは → → → 記述試案例その④

【1】語としての謙讓語動詞特殊形

【2】語としての謙讓語動詞「おだ〜する」

【3】語としての謙讓語動詞「おだ〜申し上げる」

【4】語としての謙讓語動詞「〜ていただく」、「おだ〜いただく」

【5】語としての謙讓語動詞「〜(さ)せていただく」 → → → 記述試案例その⑤

【6】語としての謙讓語名詞「おだ〜」

⇨ 丁重語とは → → → 記述試案例その⑥

【1】語としての丁重語動詞特殊形 → → → 記述試案例その⑦

【2】語としての丁重語名詞接頭辞「愚・小・拙・弊…」

⇨ 謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱとは

【1】語としての謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱ 動詞特殊形

【2】語としての謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱ 動詞「おだ〜いたす」

⇨ 丁寧語とは

【1】語としての丁寧語「〜です・ます」

【2】語としての丁寧語「〜であります・でございます」

⇨ 美化語とは

【1】語としての美化語「おだ〜」

記述試案例その① ⇨ 敬語五分法

学習者向けの教科書

【課題1】 日本語の敬語は何種類あるのかを調べてみましょう。

_____種類

それぞれの名称： _____

【課題2】 ここでは、敬語を5種類で紹介します。以下の表に合わせ、自分の調べた結果と5種類の関係性を確認しましょう。

五分法	四分法	三分法
尊敬語	尊敬語	尊敬語
謙讓語	謙讓語	謙讓語
丁寧語		
丁寧語	丁寧語	丁寧語
美化語	美化語	

【課題3】 5種類の敬語のそれぞれの性質を紹介します。「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている敬語は、それぞれどれにあたるのかを当ててみましょう。

・尊敬語：相手や第三者の行為・状態・物事などに用いることで、直接的にその人を高くするという性質を持つ敬語である。中国語の「光临」、「指教」、「劳驾」、「笑纳」、「贵姓」、「令堂」、「高见」⁴⁴などの言い方と性質が近いです。

「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている**尊敬語**：

・謙讓語：自分や自分側⁴⁵の行為・物事などに用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという性質を持つ敬語である。中国語の「请问」、「拜托」、「荣幸」、「恭喜」、「免费」、「家父」、「拙见」などの言い方と性質が近いです。

「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている**謙讓語**：

・丁寧語：自分や自分側の行為・物事、または高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁寧に述べるという性質を持つ敬語である。会議やスピーチ、ビジネス

⁴⁴ 中国語の敬語は、直接相手に使うことが多く、第三者に使用するケースは、日本語ほど一般的ではないという傾向が見られる。

⁴⁵ 自分側とは、家族や友人など、自分に近い人物を指す。

ス文章など正式の場面で使われる正式な中国語と類似しています。

「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている**丁寧語**：

・**丁寧語**：聞き手や読み手に対して**丁寧に述べる**という性質を持つ敬語である。日本語とは異なり、中国語には、「だ・である調」のような常体と「です・ます調」のような敬体の違いは存在しません。

「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている**丁寧語**：

・**美化語**：物事や言葉をきれいに、または上品にするという性質を持つ敬語である。中国語の（「厕所」の代用である）「卫生间」、「洗手间」、（「手紙」の代用である）「卫生纸」、（「吃饭」の代用である）「用餐」、（「饱」の代用である）「吃好」などの言い方と性質が近いです。

「日本語の敬語とは」の【課題1】に現れている**美化語**：

【自由研究】

映画やドラマ、アニメなどから、敬語だと思われるものを集めてみましょう。
そして、五分法に基づき、【課題3】を参考に、集めたものを分類してみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

蒲谷（2013）では、敬語を更に細分化し、以下のように11分類が提唱されている。

敬語分類表

敬語例	11分類 敬語的性質	5分類	3分類
オッシャル・イラッシャル・オ帽子・オ美シイ・オ書キニナル	直接尊重 動作・状態・所有の主体を高くする	尊敬語	尊敬語
クダサル・教エテクダサル・ゴ説明クダサル	恩恵直接尊重 動作の主体を高くする+恩恵		
御社・玉稿	相手尊重 相手に関する事物を高くする		
伺ウ・オ会イスル	間接尊重 動作の主体を高くしない +動作に関する関係する人物を高くする	謙讓語Ⅰ	謙讓語
イタダク・ゴ説明イタダク・サシアゲル	恩恵間接尊重 動作の主体を高くしない +動作に関する関係する人物を高くする +恩恵		
イタス・マイル	丁重 動作の主体を高くしない+改まり	謙讓語Ⅱ (丁重語)	
弊社・拙稿	自己卑下 自分に関する事物を低くする		
ゴ説明イタス・拝見イタス	尊重丁重 動作の主体を高くしない +動作に関する関係する人物を高くする +改まり	謙讓語Ⅰ + 謙讓語Ⅱ (丁重語)	
オ花・ゴ褒美	美化 事物を美化する	美化語	丁寧語
です・ます	丁寧文体 文章・談話全体を丁寧にする	丁寧語	
デアります・デゴザイます	丁重文体 文章・談話全体を丁重にする		

【参考文献】

蒲谷宏（2013）『待遇コミュニケーション論』大修館書店

【課題1】

ねらい

敬語の種類について、学習者の主体的・自律的な学びを期待します。

使い方

自律学習を促すために、学習者に事前に調べてくるよう呼びかけましょう。授業では、学習者に自分の意見を発表し、他の学習者と比較してもらいましょう。五分法がそれほど認識されていない中国の日本語教育現場では、従来の教科書の影響を受け、学習者の解答にも三分法（尊敬語・謙讓語・丁寧語）または四分法（尊敬語・謙讓語・丁寧語・美化語）が多いと予想されます。五分法という意見が出るかどうかを確認しましょう。

補足説明

従来、日本社会では敬語三分法が主流でした。そのため、多くの日本語教科書においても、敬語を3種類で紹介しています。しかし、三分法に対する批判や異論などが、長年にわたり多くの敬語専門家により発表されています。それを踏まえ、2007年に出された文化審議会答申「敬語の指針」においては、**尊敬語・謙讓語・丁寧語⁴⁶・丁寧語・美化語**という五分法が提唱されました。本試案も五分法を支持し、中国の日本語教育現場に取り入れるべきだと提案します。ほかにも、四分法も広く知られていますが、三分法と四分法によって生じる問題点については、「☞ 丁寧語」、「☞ 丁寧語」と「☞ 美化語」のところで詳しく述べています。

【課題2】

ねらい

学習者に三分法・四分法・五分法の関係について理解し、特に「丁寧語」、「丁寧語」、「美化語」という異なるところに注目してもらおうこと。

使い方

三分法・四分法・五分法の関係性について、表で確認し、特に異なるところについて、学習者が自ら気づくよう仕掛けましょう。

補足説明

⁴⁶ 謙讓語Ⅱと呼ぶこともできる。その場合、謙讓語を謙讓語Ⅰと呼ぶ。

「謙讓語」と「丁重語」、そして「丁寧語」と「美化語」のそれぞれの性質が異なるため、分別する必要があります。従来の教科書のように混同して扱うと、「「電車が参ります」とは電車に謙讓語を使うの?」とか、「母親が子供にも「ご飯」、「お弁当」などを使うけど、丁寧にするためなの?」といった困惑点が生じやすいと思われます。ただ、ここで三分法と四分法による誤解や疑問などの詳細について説明しても、学習者にとって理解困難であると予想されるため、【形式編】の続きで詳しく述べることにします。

【課題3】

ねらい

それぞれに関する詳しい説明は、【形式編】で順に行っていきませんが、ここでは、五分法について再度学習者に認識させましょう。そして、それぞれ異なる性質を持っていることを理解してもらおうこと。

使い方

各種類の敬語の性質を確認し、学習者が自ら以下の5点に気づくよう導きましょう。①従来とは違い、敬意という言葉を使いません。②謙讓語とは、自分を低くするのではなく、間接的に相手または第三者を高くするものです。(詳しくは記述試案例その④で述べます。)③丁重語は謙讓語とは異なる性質を持っています。④丁寧語と美化語を区別する必要があります。⑤学習者の母語である中国語と比較することで、親近感を与えます。

解答例

学習者にただ形式を見て判断するのではなく、各種類の敬語の持つ性質に基づき、文脈や場面に合わせて、判断するよう働きかけましょう。この時点では、迷いや納得できないところがあってもかまいません。ここは、続く説明のイントロダクションとなります。

尊敬語：

お帰りになる、ご健勝、お下がりください、方、～でいらっしゃる、どなた様

謙讓語：

ご帰宅なさる、お慶び申し上げます、ご応募いただく、ご通知申し上げます、伺う

丁重語：

参る、通過いたす、申す

丁寧語：

～ました、～です、～ます、～でございます

美化語：

おなか、ご飯、お弁当、お天気

以上、「敬語五分法」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の5点について、工夫を凝らしてみた。なお、第8章の記述試案例と重複するところを省略する(以下同様)。①従来の三分法・四分法を踏まえた上で、五分法を取り入れてみた。②学習者に分かりやすく示すために、3種類の分類法を表にまとめ、関係性を比較した。③5種類の敬語を本格的に学ぶ前に、一度全体像を示し、それぞれの定義を列挙することで、学習者に安心感を与える。④中国における敬語を積極的に取り入れることで、学習者に親近感を与え、彼らの敬語に対する意識と興味を高める。⑤各種類の敬語の性質について、学習者に主体的に考えてもらうよう、教師から用例を一方的に示すのではなく、前の課題と関連し、自ら用例を分類してもらうようにした。

記述試案例その② 尊敬語とは

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の定義を読んで、尊敬語の性質について、確認しましょう。

相手や第三者の行為・状態・物事などに用いることで、直接的にその人を高くするという性質を持つ敬語である。

中国語の「光临」、「指教」、「劳驾」、「笑纳」、「贵姓」、「令堂」、「高见」などの言い方と性質が近いです。

【課題2】 【課題3】の例から、それぞれ「行為」、「状態」、「物事」に当てはまる尊敬語を選んでみましょう。

「行為」の例： _____

「状態」の例： _____

「物事」の例： _____

【課題3】 尊敬語の表現形式には、主に以下のものがあります。

確認の上、例を参考に、線を埋めてみましょう。

動詞	特殊形	例：来る・行く→いらっしゃる する→なさる
	～（ら）れる	例：来る→来られる 書く→_____ 出席する→出席される 購入する→_____
	お/ご～になる	例：使う→お使いになる 立つ→_____ 利用する→ご利用になる 説明する→_____
	お/ご～だ	例：呼ぶ→お呼びだ 帰る→_____ 利用する→ご利用だ 出発→_____
	お/ご～なさる	例：話す→お話なさる 出かける→_____ 結婚する→ご結婚なさる 到着する→_____
	お/ご～くださる	例：読む→お読みくださる 話す→_____ 指導する→ご指導くださる 確認する→_____
形容詞	お～ (お)～くていらっしゃる	例：忙しい→お忙しい/ (お) 忙しくていらっしゃる 美しい→_____
形容動詞	お/ご～ (お/ご)～でいらっしゃる	例：立派→ご立派/ (ご) 立派でいらっしゃる 熱心→_____
副詞	お/ご～	例：互いに→お互いに 早めに→_____ ゆっくり→ごゆっくり もっとも→_____
名詞	お/ご～	例：電話→お電話 名前→_____ 住所→ご住所 意見→_____
	接頭辞（御・貴・尊…）～ ～接尾辞（さん・様・方…）	例：（相手の）会社→御社/貴社 皆→皆さん/皆様
名詞+だ	～でいらっしゃる	例：学生だ→学生でいらっしゃる 鈴木部長だ→_____

【自由研究】

映画やドラマ、アニメなどから、尊敬語が使われたシーンを集めてみましょう。
そして、誰が誰に、どういう状況で、どのバリエーションの尊敬語を使っているのかを検討してみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

尊敬語といえば、特殊形、「～（ら）れる」、「お/ご～になる」が三大形式と呼ばれている。しかし、この三大形式以外に、敬語上級者の間で特に人気があるのは、「お/ご～だ」（「だ体」より「です体」で使われることが多い）という形である。形はスマートでありつつも、「～（ら）れる」より高める性質を持ち、特殊形と「お/ご～になる」に準じるため、使いやすい敬語だといわれ、敬語を使い慣れた人に愛用されている。

接続規則は「お/ご～になる」と全く同様であるが、時制ははっきりしておらず、場面や文脈で決まるのが大きな特色である。

- ①（秘書が部長に）お客様が応接室でお待ちですが…（＝待っていますが）
- ②（近所の主婦同士）今からお出かけですか。（＝出かけますか）
- ③（ガイドが観光客に）お食事、もうお済みでしょうか。（済んだでしょうか）

そして、「お/ご～＋の＋名詞」のように、連体修飾語の使い方もある。例えば、お持ちの方（持っていいらっしゃる方）、ご出発の便（ご出発になる便）など。更に、「お持ちでない方」、「お持ちなら」などの形も派生できる。

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

従来とは異なり、尊敬語の性質に着目した尊敬語の定義を学習者に理解してもらうこと。特に、定義の中に「敬意」が含まれていることを再度学習者に認識させましょう。

使い方

尊敬語の定義で示している性質は、すべての尊敬語に共通しており、固定的なものであるため、具体的な場面から独立しているということを教師側から改めて説明しましょう。

そして、第2部の【形式編】では、敬語の種類、性質、表現形式に焦点を当てるため、具体的な場面における運用には触れませんが、人間関係などに合わせ、様々な場面における敬語の運用に関しては、第3部の【運用編】で扱うということも学習者に提示しましょう。

補足説明

必要に応じて、以下の例を説明に使うこともできます。

例えば、自分＝学生、相手/第三者＝先生の場合、先生の行為について「先生も行く」と述べる際、先生は高める必要のある目上の人物であるため、「先生もいらっしゃいます⁴⁷」と尊敬語を用いることで、直接的に先生を高くすることができます。状態の例としては、「先生は忙しいようだ。→先生はお忙しいようです。」など、物事の例としては、「先生の住所→先生のご住所」などが挙げられます。

【課題2】

ねらい

尊敬語の定義の中に現れた「行為・状態・物事」とは、それぞれどのようなものを指すのか学習者に理解してもらうこと。

使い方

行為は動詞、状態は形容詞、形容動詞、副詞、そして物事は名詞を指すということを学習者に自ら気づき、正しく選んでもらうよう、教師側が必要に応じて、支援しましょう。

解答例

「行為」の例：いらっしゃる、なさる、来られる、出席される、お使いになる、ご利用になる、お呼びだ、ご利用だ、お話しなさる、ご結婚なさる、お読みくださる、ご指導くださる

「状態」の例：お忙しい/(お)忙しくていらっしゃる、ご立派/(ご)立派でいらっしゃる、お互いに、ごゆっくり

「物事」の例：お電話、ご住所、御社/貴社、皆さん、皆様

【課題3】

ねらい

⁴⁷ 基本的には、敬語を用いる際、です・ます体になることが多いが、詳しくは丁寧語のところで説明する。

尊敬語の表現形式の全体像を学習者に示し、それぞれのバリエーションの位置づけを把握させること。そして、例を参考し、接続規則にしたがって、自分で変形練習をやることで、少しでも早く複雑な表現形式を記憶してもらうこと。

使い方

最初から教師側から解答を示すのではなく、なるべくそれぞれの例に基づき、学習者が自ら変形できるよう、支援しましょう。

解答例

動詞	特殊形	例：来る・行く→いらっしゃる ⁴⁸ する→なさる
	～(ら)れる	例：来る→来られる 書く→書かれる 出席する→出席される 購入する→ <u>購入される</u>
	お/ご～になる	例：使う→お使いになる 立つ→お立ちになる 利用する→ご利用になる 説明する→ <u>ご説明になる</u>
	お/ご～だ	例：呼ぶ→お呼びだ 帰る→お帰りだ 利用する→ご利用だ 出発→ <u>ご出発だ</u>
	お/ご～なさる	例：話す→お話をなさる 出かける→ <u>お出かけなさる</u> 結婚する→ご結婚なさる 到着する→ <u>ご到着なさる</u>
	お/ご～くださる	例：読む→お読みくださる 話す→お話しくださる 指導する→ご指導くださる 確認する→ <u>ご確認くださる</u>
形容詞	お～ (お)～ていらっしゃる	例：忙しい→お忙しい/ (お) 忙しくていらっしゃる 美しい→ <u>お美しい/ (お) 美しくていらっしゃる</u>
形容動詞	お/ご～ (お/ご)～ていらっしゃる	例：立派→ご立派/ (ご) 立派でいらっしゃる 熱心→ <u>ご熱心/ (ご) 熱心でいらっしゃる</u>
副詞	お/ご～	例：互いに→お互いに 早めに→ <u>お早めに</u> ゆっくり→ごゆっくり もっとも→ <u>ごもっとも</u>
名詞	お/ご～	例：電話→お電話 名前→ <u>お名前</u> 住所→ご住所 意見→ <u>ご意見</u>
	接頭辞(御・貴・尊…)～ ～接尾辞(さん・様・方…)	例：(相手の)会社→御社/貴社 皆→皆さん/皆様

⁴⁸ 話し言葉では、「いらす」という言い方もある。

名詞+だ	～でいらっしゃる	例：学生だ→学生でいらっしゃる 鈴木部長だ→ <u>鈴木部長でいらっしゃる</u>
------	----------	--

以上、「尊敬語とは」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の4点について、工夫を凝らしてみた。①従来のように敬意に収束され、矮小化された尊敬語の定義を改め、尊敬語の持つ性質に着目し定義を行った。②定義の中の「行為・状態・物事」のそれぞれについて、学習者に深く考えてもらうよう、課題を設けた。③学習者が少しでも早く多種かつ複雑な表現形式が記憶できるよう、尊敬語の表現形式の全体像を表にまとめ、それぞれのバリエーションの位置づけを示した。④学習者により深い印象を与えるために、例を参考し、接続規則にしたがって、自分で変形してみる練習を設けた。

記述試案例その③ 語としての尊敬語動詞「お/ご～になる」

学習者向けの教科書

【課題1】 尊敬語動詞「お/ご～になる」の性質を考えてみましょう。

尊敬語動詞「お/ご～になる」は、
 という性質も持っている。

【課題2】 接続規則を確認し、線を埋めてみましょう。

そして、三つずつ補足してみましょう。

(1) お+一段/五段動詞の連用形+になる

・ 帰る→お帰りになる ・ 話す→
 ・
 ・

(2) ご+サ変名詞+になる

・ 訪問する→ご訪問になる ・ 卒業する→
 ・ 利用する→

【課題3】 例にしたがって、以下の文を言い換えてみましょう。

例：本を読みますか→本をお読みにになりますか。

- ・ 部屋に入りました→
- ・ 毎日何時頃出かけますか→
- ・ 昨日6時頃帰りました→
- ・ 旅行で疲れたでしょう→
- ・ 少し休みませんか→
- ・ こちらで待ってください→

例：いつ出発しますか→いつご出発になりますか。

- ・ 明日の会議で説明します→
- ・ 1時間前に帰宅しました→
- ・ 祝日は利用できません→
- ・ 他の目的で使用しないでください→

【課題4】 以下の言い方ができるかどうか、調べてみましょう。

そして、「お/ご～になる」はすべての動詞に適用できるのかを考えてみましょう。

- ・ 見る→お見になる
- ・ 寝る→お寝になる
- ・ 来る→お来になる
- ・ 行く→お行きになる
- ・ 言う→お言いになる
- ・ 食べる→お食べになる
- ・ 死ぬ→お死になる
- ・ 殺す→お殺しになる
- ・ 失敗する→ご失敗になる

「お/ご～になる」の形が作れない動詞： _____

【自由研究】

尊敬語の三大形式と呼ばれる特殊形、「～(ら)れる」、「お/ご～になる」は、同じく「相手や第三者の行為・状態・物事などに用いることで、直接的にその人を高くする」という性質を持っているが、どのような差がありますか。例えば、以下の違いについて、本やインターネットなどで調べてみましょう。

- ・「言う」の尊敬語：「おっしゃる」と「言われる」
- ・「出かける」の尊敬語：「出かけられる」と「お出かけになる」
- ・「聞く」の尊敬語：「お耳に入る」と「聞かれる」と「お聞きになる」

もっと知りたい人のための豆知識

同じ尊敬語として、「お/ご～になる」と「お/ご～くださる」の違いを考えたことはありますか。例えば、学生が先生のことについて、「(先生が) 推薦書をお書きになりました」と「(先生が) 推薦書をお書きくださいました」は、どちらのほうが適切なのでしょうか。

確かに、同じ尊敬語として、「相手や第三者の行為・状態・物事などに用いることで、直接的にその人を高くする」という性質を持っているため、先生を高くすることで、敬意を表したいという学生の意識は、両方の言い方からうかがえます。しかし、「お/ご～くださる」はもともと授受表現から生まれた言い方で、相手から恩恵を受けているという表現主体の意識を表現することもできます。

つまり、「(先生が) 推薦書をお書きになりました」と比べ、「(先生が) 推薦書をお書きくださいました」という言い方のほうが、「先生が忙しい中で、自分のために書いてくれたので、自分にとってうれしい、ありがたい、助かる」といった気持ちが伝わります。もちろん、先生が推薦書を書くことが、自分とは無関係で、ただ高くするだけでよいような場面では、「(先生が) 推薦書をお書きになりました」の言い方のほうが適切だといえましょう。

【参考文献】

菊地康人(1997)『敬語』講談社学術文庫

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

尊敬語としての「お/ご～になる」が持つ本来の性質について、学習者に復習してもらう

こと。

使い方

第2部を貫く大切な概念なので、学習者が自ら考え、答えるようにしましょう。

解答例

尊敬語動詞「お/ご～になる」は、相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くするという性質も持っている。

【課題2】

ねらい

記述試案例その①の【課題5】でも述べたように、「語としての敬語」を教える/学ぶのは、敬語の種類や、性質、表現形式といった仕組みに関する体系知識が主な課題となります。そのため、語としての尊敬語動詞「お/ご～になる」を扱う際、まだ運用面に触れず、形式面に焦点を当て、学習者にそれを正しく覚えさせることを目的とします。

使い方

「お/ご～になる」は尊敬語の特殊形（「おっしゃる」、「召し上がる」など）同様、相手や第三者を高くする性質を持っており、特殊形、「～（ら）れる」と並び、最もよく使われる三大尊敬語と呼ばれています。この課題では、「お/ご～になる」の接続規則を学習者に記憶させるために、線を埋めてもらったり、新しい例を挙げてもらったりしましょう。

解答例

(1) お+一段/五段動詞の連用形+になる

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| ・ 帰る → お帰りになる | ・ 話す → <u>お話しになる</u> | ・ 書く → <u>お書きになる</u> |
| ・ <u>読む</u> → <u>お読みになる</u> | ・ <u>待つ</u> → <u>お待ちになる</u> | ・ <u>作る</u> → <u>お作りになる</u> |

(2) ご+サ変名詞+になる

- | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| ・ 訪問する → ご訪問になる | ・ 卒業する → <u>ご卒業になる</u> | ・ 利用する → <u>ご利用になる</u> |
| ・ <u>参加する</u> → <u>ご参加になる</u> | ・ <u>出席する</u> → <u>ご出席になる</u> | ・ <u>出発する</u> → <u>ご出発になる</u> |

補足説明

「お/ご～になる」もかなり多くの動詞に適用できますが、適用できない動詞もあり、「～（ら）れる」より制約が厳しいです。ある程度敬語を見聞きし、慣れた人には、なんとなく感覚が培われますが、敬語を見聞きする機会の少ない外国人にとっては、使えるかどうかを判断するのが難しいといえます。学習者に挙げられる例には、適用できないものがある

るかどうかを確認しましょう。

【課題3】

ねらい

他の文型と合わせた「お/ご~になる」の形を学習者に示し、慣れてもらうこと。

使い方

言い換えの練習として、学習者に「お/ご~になる」の形に変えてもらいましょう。

解答例

例：本を読みますか→本をお読みにになりますか。

- ・ 部屋に入りました→部屋にお入りになりました。
- ・ 毎日何時頃出かけますか→毎日何時頃お出かけになりますか。
- ・ 昨日6時に帰りました→昨日6時にお帰りになりました。
- ・ 旅行で疲れたでしょう→旅行でお疲れになったでしょう。
- ・ 少し休みませんか→少しお休みになりませんか。
- ・ こちらで待ってください→こちらでお待ちになってください。

例：いつ出発しますか→いつご出発になりますか。

- ・ 明日の会議で説明します→明日の会議でご説明になります。
- ・ 1時間前に帰宅しました→1時間前にご帰宅になりました。
- ・ 祝日は利用できません→祝日はご利用になれません。
- ・ 他の目的で使用しないでください→他の目的でご使用にならないでください。

補足説明

注意すべきなのは、「お/ご~になる」を可能形にする際、「書く→書ける→お書けになる」ではなく、「書く→お書きになる→お書きになれる」が正しいということです。「お使いになれる」、「ご利用になれる」など、つまり先に「お/ご~になる」にしてから、可能形を作るわけです。尊敬語の可能形として「お/ご~になれる」を学習者に覚えさせましょう。

【課題4】

ねらい

「お/ご~になる」はかなり多くの動詞に適用できますが、適用できない動詞もあることを学習者に伝えること。

使い方

授業の時間が限られているため、この課題は自律学習の材料として、学習者に授業以外の時間で調べさせ、授業ではその確認とまとめを行いましょ。【課題4】の例は、すべて誤用です。学習者に自ら気づき、そしてほかにも適用できない動詞を集めてもらうよう働きかけましょ。

補足説明

参考までに、簡単に適用できない主な制約を取り上げます。なお、これらの制約は、「お/ご～だ」、「お/ご～なさる」、「お/ご～くださる」、「お/～ください」にも応用がききます。

制約① 連用形が単音節の動詞

例：×お来になる ×お見になる ×お寝になる

制約② 特殊形がある動詞

例：×お言いになる ×お行きになる ×お食べになる⁴⁹

制約③ 謙讓語の動詞

例：×おいたしになる ×お伺いになる ×お申しになる

制約④ 外来語や擬態語、擬音語系の動詞

例：×おノックになる ×おのんびりになる ×おバクバクになる

制約⑤ 人間またはその集まり（会社・団体など）を主語としない動詞

例：×（雨や雪が）お降りになる ×（花が）お咲きになる

制約⑥ 意味がよくない、または品のない動詞

例：×ご失敗になる⁵⁰ ×お殺しになる ×お死にになる⁵¹

制約⑦ 複合動詞の多く⁵²

例：×お読みはじめになる ×お使い慣れになる ×お探し出しになる

以上、主な制約を例とともに示しましたが、実を言うと、日本人の間でも使えるかどうかの判断基準は、個人差があり、意見が分かります。上述した七つの制約は敬語専門家の見解を参考に、大学の日本語専攻生として知っておいたほうがいいものを選び、まとめたものです。紙幅の関係で、すべての例を提示することができませんが、興味があれば、菊

⁴⁹ 正しい敬語として使っている人もいるが、基本的には食べられる/召し上がるを使うべきである。

⁵⁰ 「失敗される」や「失敗なさる」は使える。

⁵¹ 「死ぬ」を避け、「なくなる」の尊敬語である「なくなられる/おなくなりになる」を使う。

⁵² 適用できる複合動詞も存在する。例えば、「お申し込みになる」、「お受け取りになる」、「お立ち寄りになる」など。

地（1997）の『敬語』（pp.156-170）を参照してください。

なお、基本的には「お/ご～になる」より「～（ら）れる」の使える範囲が広いため、使えるかどうかは自信がない、でも尊敬語を使いたいときは、「～（ら）れる」を選べば無難だということも学習者にすすめましょう。高くする性質が多少弱っても、尊敬語であることに変わりはありません。この意味では、「～（ら）れる」はとても使いやすい形だといえます。

ただ、一つだけ「～（ら）れる」は使えないですが、「お/ご～になる」なら使えるケースがあります。それは可能形の尊敬語です。「～（ら）れる」は可能形と形式上共通点が多いため、例えば尊敬語の「来られる」を更に可能形にすることはできません。「書かれる」や「起きられる」、「参加される」などに関しても同じことがいえます。「お/ご～になる」の可能形については、【課題2】においては述べたため、ここでは繰り返しません。

以上、「語としての尊敬語動詞「お/ご～になる」」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。①形式面と運用面に関する説明が混ざっているという従来の扱い方ではなく、学習者がより理解しやすいよう、段階を踏み、ここでは、性質と表現形式に特化している。②ただ与えられた動詞を言い換え・書き換えをするのではなく、学習者の主体性を生かし、自ら用例が集められるよう課題を設けた。③適用できる動詞だけでなく、できない動詞も学習者に考えてもらうことにより、「お/ご～になる」を使う際、生じ得る困惑点が解消される効果が期待される。

記述試案例その④ ⇨ 謙讓語とは

学習者向けの教科書

【課題1】 謙讓語の定義について、辞書などで調べてみましょう。

出典：

謙讓語とは、_____

【課題2】 自分の調べた定義を次の定義と比較し、共通点と相違点について考えてみましょう。

謙譲語とは、自分や自分側の行為・物事などに用いることで、間接的に相手や第三者を高くする性質を持つ敬語である。

中国語の「请问」、「拜托」、「荣幸」、「恭喜」、「免贵」、「家父」、「拙见」などの言い方と性質が近いです。

共通点： _____

相違点： _____

【課題3】 謙譲語の表現形式には、主に以下のものがあります。

そして、例を参考に、線を埋めてみましょう。

動詞	特殊形	例：行く・聞く・尋ねる→伺う もらう・食べる→いただく
	お/ご～する	例：会う→お会いする 手伝う→ _____ 案内する→ご案内する 連絡する→ _____
	お/ご～申し上げる	例：願う→お願い申し上げます 詫びる→ _____ 連絡する→ご連絡申し上げます 挨拶する→ _____
	お/ご～いただく	例：書いてもらう→お書きいただく 知らせてもらう→ _____ 理解してもらう→ご理解いただく 説明してもらう→ _____
	～(さ)せていただく ⁵³	例：帰る→帰らせていただく 答える→ _____ 報告する→報告させていただく 確認する→ _____
名詞	お/ご+名詞	例：手紙→お手紙 電話→ _____ 説明→ご説明 相談→ _____

【自由研究】

以下の課題から一つ選んで、調べてみましょう。

① 「お/ご」がつく謙譲語の名詞を集めてみましょう。

例えば：お礼、ご挨拶

⁵³ 話し言葉では、「～(さ)していただく」と言うこともある。

②敬語（尊敬語、謙讓語、美化語）の中で「お+和語名詞」の例を集めてみましょう。

例えば：お茶、お勉強

もっと知りたい人のための豆知識

以下の言い方について、正しいと思うのはどれですか。

①（上司へのメール）

表題の件で、早速のお返事、ありがとうございます。

②（先生への返信メール）

表題の件で、お返事が遅くなり、申し訳ございません。

③（幼稚園で先生が幼児に）

大きい声でお返事をしましょう。

恐らく①だと答える人が最も多いでしょう。しかし、実は三つとも正しいです。「お返事」は、尊敬語、謙讓語、美化語の形を兼用しています。①の「お返事」は「上司からの返事」に対する尊敬語で、直接的に上司を高くするためです。②の「お返事」は「自分が先生への返事」の謙讓語で、間接的に先生を高くするためです。③は「子供向けの言葉遣い」をきれいに、上品にするための「お返事」です。

ほかにも、「お手紙」、「お電話」、「ご説明」、「ご相談」などがあります。兼用できない「お/ご+名詞」のほうが多いですが、興味があれば、調べてみましょう。

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

謙讓語の定義について、学習者の主体的・自律的な学びを期待します。

使い方

学習者に事前に調べた定義を発表させ、以下の定義と類似しているかどうかを確認しましょう。

解答例

『デジタル大辞泉』より

話し手が、自分または自分の側にあると判断されるものに関して、へりくだった表現をすることにより、相対的に相手や話中の人に対して敬意を表すもの。

『大辞林』（第三版）より

話し手が聞き手や話中の人に対して敬意を表すために、自分または自分の側に立つと思われるものや動作などをへりくだって言い表すもの。

『三省堂』（ウェブ辞書）より

動作（存在）の主体を低め、動作の客体または聞き手に話し手が敬意を表すもの。

補足説明

日本語教科書においても、以下に示しているように、辞書と類似した定義が行われています。

教科書	謙讓語の定義
『上海新編日語』 (改訂版)	話し手が聞き手に対し、自分自身または話題になっている自分の身近の人の行為をへりくだって言う敬語。
『新編基礎日語』 (改訂版)	話し手がへりくだった言い方で、間接的に相手への敬意を表す言葉。
『吉林新編日語』 (改訂版)	外部者や年長者、上位者に、自分のことをへりくだって、相手への敬意を表す言葉。
『基礎日語総合教程』	自分や自分の側にあるものをへりくだって言うことで、相対的に相手に敬意を表す語。
『総合日語』 (改訂版)	話し手がへりくだった言い方で、間接的に相手や話題の人物へ敬意を表す言葉。

【課題2】

ねらい

従来の定義と比較し、本試案が提唱する謙讓語の定義について、理解してもらうこと。

使い方

教師側が教えるのではなく、学習者が自ら考え、気づくよう仕掛けましょう。

解答例

従来の定義と比較した結果、最も大きな相違点としては、以下の2点が挙げられます。

①「敬意」という言い方を使わないこと。②「へりくだる」または「低くする」という言い方を使わないこと。相違点①に関しては、記述試案例その①において詳しく述べたため、省略します。相違点②についてですが、従来の定義を見ると、「へりくだる」や「低くする」

などがキーワードとなっています。しかし、そういう言い方に対し、自ら卑屈になり、自分を卑下しているように感じてしまい、嫌悪感と抵抗感を覚え、謙譲語を消極的、否定的に捉える意見が多く出ています。そのため、本試案では、自分を「へりくだる/低くする」のではなく、相手や第三者を「間接的に高くする」と記述することにします。

補足説明

本試案では、2007年に文化審議会答申「敬語の指針」を参考し、【課題2】に示したように謙譲語を定義しています。具体的に説明すると、例えば、自分＝学生、相手/第三者＝先生の場合、自分の行為について「私も行く」と述べる際、先生は高める必要のある目上の人物であるため、「私も伺います」と謙譲語を用いることで、間接的に先生を高く位置付けることができます。物事の例としては、「先生への手紙→先生へのお手紙」などが挙げられます。なお、尊敬語とは異なるのは、一般的には状態を表す形容詞・形容動詞・副詞には謙譲語が存在しないといわれます。

【課題3】

ねらい

謙譲語の表現形式の全体像を学習者に示し、それぞれのバリエーションの位置づけを把握させること。そして、例を参考し、接続規則にしたがって、自分で変形練習をやることで、少しでも早く複雑な表現形式を記憶してもらうこと。

使い方

最初から教師側から解答を示すのではなく、なるべくそれぞれの例に基づき、学習者が自ら変形できるよう、支援しましょう。

解答例

動詞	特殊形	例：行く・聞く・尋ねる→伺う もらう・食べる→いただく
	お/ご～する	例：会う→お会いする 手伝う→ <u>お手伝い</u> する 案内する→ご案内する 連絡する→ <u>ご連絡</u> する
	お/ご～申し上げる	例：願う→お願い申し上げます 詫びる→ <u>お詫び</u> 申し上げます 連絡する→ご連絡申し上げます 挨拶する→ <u>ご挨拶</u> 申し上げます
	お/ご～いただく	例：書いてもらう→お書きいただく 知らせてもらう→ <u>お知らせ</u> いただく

【課題2】 接続規則を確認し、線を埋めてみましょう。

そして、三つずつ補足してみましょう。

(1) 一段/五段/カ変動詞の未然形+させていただく

・ 使う → 使わせていただく ・ 帰る → _____ ・ 作る → _____
・ _____ ・ _____ ・ _____

(2) サ変名詞+させていただく

・ 案内する → 案内させていただく ・ 卒業する → _____
・ 利用する → _____ ・ _____
・ _____ ・ _____

【課題3】 例にしたがって、以下の文を言い換えてみましょう。

例：本日は休む → 本日は休ませていただきます。

→ 本日は休ませていただきたいんですが…

→ 本日は休ませていただいてもよろしいでしょうか。

・ 辞書を使う →

→

→

・ 写真を撮る →

→

→

・ 本を読む →

→

→

・ コピーをとる →

→

→

例：会議を欠席する → 会議を欠席させていただきます。

→ 会議を欠席させていただきたいんですが…

→ 会議を欠席させていただいてもよろしいでしょうか。

・ ブログで紹介する →

-
-
- ・ 予定を変更する→
-
-
- ・ 荷物を確認する→
-
-

【課題4】 例を参考に、以下の動詞をそれぞれの形に言い換えてみましょう。

そして、二つの言い方がどう違うのかについて、考えてみましょう。

例：買う→買っていただく ⇔ 買わせていただく

参加する→参加していただく ⇔ 参加させていただく

会う→ _____ ⇔ _____

区別： _____

待つ→ _____ ⇔ _____

区別： _____

答える→ _____ ⇔ _____

区別： _____

報告する→ _____ ⇔ _____

区別： _____

準備する→ _____ ⇔ _____

区別： _____

コピーする→ _____ ⇔ _____

区別： _____

【自由研究】

インターネットなどで調べて、「～（さ）せていただく」（例：休ませていただく）が使われている例文を10個集めましょう。そして、「誰が、誰に、どこで、なぜ」、それを使っ

ているのかについて考えてみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

近年、日本社会における「～（さ）せていただく」の過剰使用がしばしば批判されている。丁寧な言い方だと思い、自分の動作すべてに「～（さ）せていただく」がつけられるという誤解が見られる。例えば、入学式や就職式で、「この度は、入学/就職させていただきました」という言い方をする人が増えていることに対し、蒲谷他（2010）では、「何か特別な口利きをしてもらったかのように聞こえてしまう恐れがある」と指摘されている。

そして、「敬語の指針」では、「～（さ）せていただく」の適用条件として、「自分が行うことを、ア）相手側または第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵を受けるといふ事実や気持ちのある場合」というポイントが示されている。

したがって、以上の条件に照らし合わせて、「～（さ）せていただく」が使われた表現の適切さを判断する必要があるといえよう。（具体例に関しては、第3部の「敬語表現における「～（さ）せていただく」」を参照。）

【参考文献】

文化審議会（2007）「敬語の指針」文化審議会答申

蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

謙譲語としての「～（さ）せていただく」が持つ本来の性質について、学習者に復習してもらおうこと。

使い方

第2部を貫く大切な概念なので、学習者が自ら考え、答えるようにしましょう。

解答例

謙譲語動詞「～（さ）せていただく」は、自分や自分側の行為に用いることで、間接的

に相手や第三者を高くするという性質も持っている。

【課題2】

ねらい

語としての謙譲語動詞「～(さ)せていただく」の形式面に焦点を当て、学習者にそれを正しく覚えてもらうこと。

使い方

謙譲語動詞「～(さ)せていただく」は、外国人学習者にとって、なかなか難しいと予想されます。この課題を通して、その接続規則を学習者に覚えてもらった上で、線を埋めてもらったり、新しい例を挙げてもらったりしましょう。

解答例

(1) 一段/五段/カ変動詞の未然形+せていただく

- ・使う→使わせていただく ・帰る→帰らせていただく ・作る→作らせていただく
・言う→言わせていただく ・送る→送らせていただく ・来る→来させていただく⁵⁴

(2) サ変名詞+させていただく

- ・案内する→案内させていただく ・卒業する→卒業させていただく
・利用する→利用させていただく ・発表する→発表させていただく
・欠席する→欠席させていただく ・コメントする→コメントさせていただく

【課題3】

ねらい

「～(さ)せていただきます」のほかに、「～(さ)せていただきたいんですが…」、「～(さ)せていただいてもよろしいでしょうか」といった形も学習者に示し、慣れてもらうこと。

使い方

言い換えの練習として、学習者にそれぞれの形に変えてもらいましょう。

解答例

例：本日は休む→本日は休ませていただきます。

⁵⁴ 「こさせていただく」と発音するが、あまり使われない。

- 本日は休ませていただきたいんですが…
 - 本日は休ませていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ 辞書を使う→辞書を使わせていただきます。
 - 辞書を使わせていただきたいんですが…
 - 辞書を使わせていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ 写真を撮る→写真を撮らせていただきます。
 - 写真を撮らせていただきたいんですが…
 - 写真を撮らせていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ 本を読む→本を読ませていただきます。
 - 本を読ませていただきたいんですが…
 - 本を読ませていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ コピーをとる→コピーをとらせていただきます。
 - コピーをとらせていただきたいんですが…
 - コピーをとらせていただいてもよろしいでしょうか。
- 例：会議を欠席する→会議を欠席させていただきます。
- 会議を欠席させていただきますんですが…
 - 会議を欠席させていただいてもよろしいでしょうか。
- ・ ブログで紹介する→ブログで紹介させていただきます。
 - ブログで紹介させていただきますんですが…
 - ブログで紹介させていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ 予定を変更する→予定を変更させていただきます。
 - 予定を変更させていただきますんですが…
 - 予定を変更させていただいてもよろしいでしょうか。
 - ・ 荷物を確認する→荷物を確認させていただきます。
 - 荷物を確認させていただきますんですが…
 - 荷物を確認させていただいてもよろしいでしょうか。

補足説明

【課題3】で示した3パターン以外に、「～(さ)せていただけますか/いただけませんか」、「～(さ)せていただけますでしょうか/いただけないでしょうか」、「～(さ)せていただけると嬉しいです/ありがたいです/助かります」、「～(さ)せていただきますようお願い

願います/お願い申し上げます」などの形があります。学習者のレベルに合わせ、必要に応じて、適宜に示しましょう。

【課題4】

ねらい

形が似ている尊敬語動詞「～ていただく」と謙譲語動詞「～(さ)せていただく」の区別を学習者に理解してもらうこと。

使い方

まずは、言い換え練習として、学習者に正しく変形してもらった後、両者の違いについて、学習者に考えてもらいましょう。その際、動作の主語の違いに目を向けさせましょう。

解答例

例：買う→買っていただく ⇔ 買わせていただく

参加する→参加していただく ⇔ 参加させていただく

会う→会っていただく ⇔ 会わせていただく

区別：「会っていただく」も「会わせていただく」も「会う」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「会う」のは相手または第三者であるのに対し、後者の場合、「会う」のは自分である。

待つ→待っていただく ⇔ 待たせていただく

区別：「待っていただく」も「待たせていただく」も「待つ」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「待つ」のは相手または第三者であるのに対し、後者の場合、「待つ」のは自分である。

答える→答えていただく ⇔ 答えさせていただく

区別：「答えていただく」も「答えさせていただく」も「答える」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「答える」のは相手または第三者であるのに対し、

後者の場合、「答える」のは自分である。

報告する→報告していただく ⇔ 報告させていただく

区別：「報告していただく」も「報告させていただく」も「報告する」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「報告する」のは相手または第三者であるのに対し、後者の場合、「報告する」のは自分である。

準備する→準備していただく ⇔ 準備させていただく

区別：「準備していただく」も「準備させていただく」も「準備する」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「準備する」のは相手または第三者であるのに対し、後者の場合、「準備する」のは自分である。

コピーする→コピーしていただく ⇔ コピーさせていただく

区別：「コピーしていただく」も「コピーさせていただく」も「コピーする」の謙譲語なので、自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという同様な性質を持っています。しかし、前者の場合、「コピーする」のは相手または第三者であるのに対し、後者の場合、「コピーする」のは自分である。

補足説明

同じ「いただく」を含む謙譲語ですが、「～ていただく」や「お/ご～いただく」と構造上大きな相違点があるため、度々学習者の混乱を招きます。「～ていただく」と「お/ご～いただく」の「～」に入る動作をするのは恩恵を与える相手/第三者であるのに対し、「～（さ）せていただく」の「～」に入る動作をするのは恩恵を受ける自分側ということになります。例えば、「使っていただく/お使いいただく」と言う場合、「使う」のは相手/第三者ですが、「使わせていただく」と言う場合、「使う」のは自分側になります。外国人学習者の場合、「「～（さ）せていただく」を使うと、時々主語が誰なのか分からなくなる」と悩む人が多いのではないかと思います。

構造は複雑に見えますが、実は「(自分側は)～する」と同じ意味です。「使わせていた

「聞く＝使う」、「聞かせていただきたい＝聞きたい」、「言わせていただいてもいい？＝言ってもいい？」など、「～（さ）せていただく」の主語は常に自分側であることを覚えましょう。それならどうしてもわざわざ複雑な「～（さ）せていただく」を使うのかについてですが、「敬語の指針」では次のように記述しています。基本的には①自分側が行うことを、②相手/第三者の許可を受けて行い、③そのことで恩恵を受ける気持ちがある、という三つの条件が必要です。なお、高める必要のある相手/第三者の場合、「～（さ）せていただく」を用いますが、高くしなくてもいい相手/第三者には「～（さ）せてもらう」という言い方でも十分です。

以上、「語としての謙譲語動詞「～（さ）せていただく」」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。①従来の扱い方では、ほかの表現形式と比べ、「～（さ）せていただく」に関する記述は少ない傾向が見られる。しかし、中国人学習者にとって、難しいと予想されるため、詳細に記述するよう工夫した。②ただ語彙レベルの言い換え・書き換えに限らず、関連するほかの文型（「～（さ）せていただいてもよろしいでしょうか」など）と組み合わせさせて練習させることで、学習者により広い使い方を示した。③学習者にとって混同しやすいと思われる「～ていただく」と「～（さ）せていただく」について、具体的な例を通して、詳細に扱うようにした。

記述試案例その⑥ ⇨ 丁寧語とは

学習者向けの教科書

【課題1】 「丁寧語」という言葉を聞いたことがありますか。調べてみましょう。

出典：

丁寧語とは、_____

【課題2】 謙譲語の定義と比較し、両者の共通点と相違点について、考えてみましょう。

謙讓語とは、自分や自分側の行為・物事などに用いることで、間接的に相手や第三者を高くするという性質を持つ敬語である。(中国語の「請問」、「拜托」、「荣幸」、「恭喜」、「免贵」、「家父」、「拙見」などの言い方と性質が近いです。)

丁重語とは、自分や自分側の行為・物事、または高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べるという性質を持つ敬語である。(会議やスピーチ、ビジネス文章など正式の場面で使われる正式な中国語と類似しています。)

・共通点： _____

・相違点： _____

【課題3】 以下の表に示している主な丁重語の表現形式を確認しましょう。

動詞	特殊形	普通の言い方	丁重語
		言う・話す	申す
		来る・行く	参る
		～てくる/いく	～てまいる
		いる	おる
		～ている	～ておる
		思う・知る	存じる
		ある	ござる
		(～)する	(～)いたす
	～いたす	例：利用いたす、連絡いたす	
名詞	接頭辞「愚・小・拙・弊…～」	例：愚見、小生、拙著、弊社	

【自由研究】

「高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる」という丁重語の性質について、ドラマやチラシなど、具体的な用例を集めてみましょう。

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

丁重語の定義について、学習者の主体的・自律的な学びを期待します。

使い方

前述したように、従来の分類では、丁重語は謙讓語と区別せず、謙讓語に含まれることが多いです。そのため、学習者は丁重語の定義を調べる際、困難を感じるかもしれません。学習者に事前に調べるよう指示し、授業ではそれを確認し、本試案の定義と比較してもらいましょう。

補足説明

重要なのは、謙讓語と丁重語の性質が異なるため、混同してしまわないよう学習者に意識化させることです。例えば、以下のような疑問を抱いたことがありますか。「朝晩寒くなってまいりました」とは、天気に謙讓語？、「私は王と申します」の代わりに「王と申し上げます」といえないのはなぜ？、「連絡いたします」と「ご連絡します」は、どう違うのか」など。これらの疑問に答えるためには、丁重語を謙讓語から分離させて考える必要があります。

丁重については、蒲谷他（2009）⁵⁵では、「丁重＝丁寧＋改まり」と定義され、式典でスピーチをするときや大きな会議で報告をするときなどに感じられる意識が「改まり」で、これには、同時に「形式的・かたい」という感じもあると述べられています。この意味では、丁重語は、会議やスピーチ、ビジネス文章など正式の場面で使われる正式な中国語と類似しているといえましょう。

例えば、自分＝学生、聞き手/読み手＝先生の場合、自分の行為について「私も行く」と述べる際、「私も参ります」と丁重語を用いることで、丁寧に改まった印象を与えることができます。また、物事の例としては、「自分の会社」を「弊社」と言うことで、聞き手/読

⁵⁵ 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店

み手に丁寧に改まって述べる感じがします。更には、「電車が参ります」や「(天気が) 暖かくなってまいりました」などのように、高める必要のない「電車」や「天気」などの物事を主語にする場合、丁重語は聞き手/読み手に丁重に述べる性質を持ちます。なお、動詞と名詞以外の品詞には丁重語は存在しません。

【課題2】

ねらい

謙譲語と丁重語の定義を比較し、両者の共通点と相違点について、理解してもらうこと。

使い方

謙譲語と丁重語の定義を並べることにより、両者の共通点と相違点について、なるべく学習者に自ら考え、気づいてもらいましょう。難しい場合、教師は必要に応じて、具体例など、ヒントを提供しましょう。

解答例

なぜ両者を区別する必要があるのか、まずその相違点について説明します。例えば、自分=学生、相手=A先生、第三者=B先生の場合、A先生に自分もB先生の家に行くということを伝える際、「私も伺います」も「私も参ります」も使えますが、性質が異なります。「伺う」は「行く」の謙譲語で、それをを用いることで、間接的にその対象となるB先生を高く位置付けることとなります。一方、「参る」は「行く」の丁重語で、それをを用いることで、自分の話を聞いているA先生に丁重な気持ちを示すことができます。もっと極端な例を挙げますと、「(先生に) これから父のところへ伺います」は誤用ですが、「(先生に) これから父のところへ参ります」は問題なく使えます。前者は自分の動作である「行く」の向かう先にいる父親を高めてしまうため、使えませんが、後者は父親とは関係なく、自分の発話を聞いている先生に丁重に述べるために使う丁重語で、特に問題はないわけです。

すなわち、謙譲語は自分/自分側の行為・物事などが向かう先となる人物を間接的に高めるための敬語ですが、丁重語は自分/自分側の行為・事物などを述べる際、聞き手/読み手となる人物に丁重さを表すための敬語です。また、丁重語は高める必要のない物事について、読み手や書き手に丁重に述べる際にも使えますが、謙譲語にはそのような使い方はありません。以上述べたように、両者の性質が異なるため、従来のように区別せずに扱うのは、理解の混乱を引き起こす恐れがあります。

一方、両者には共通点も存在します。それはどちらも基本的には自分/自分側の行為・物

事にしか使えず、相手/相手側の行為・物事には使えないことです。よって、丁重語の別称は謙讓語Ⅱとなります。

補足説明

従来、丁重語の存在は多くの敬語専門家に指摘されていたものの、日本社会では「尊敬語・謙讓語・丁寧語」という敬語三分法が主流であったため、日本語教育現場においても、長年謙讓語と区別せずに扱われてきました。「敬語の指針」により、丁重語の存在は明示され、謙讓語と区別する方針が示されました。本試案においても丁重語を謙讓語から独立させて扱います。

【課題3】

ねらい

丁重語の表現形式の全体像を学習者に示し、それぞれのバリエーションの位置づけを把握させること。

使い方

中には、謙讓語として認識されているものも多いため、学習者の混乱を想定し、教師から注意を呼びかけましょう。

補足説明

中国語の影響で、「愚・小・拙・弊…」が接頭辞に付く名詞を謙讓語だと思ふ学習者が多いかもしれません。「自分や自分側の行為・物事、または高める必要のない物事について述べる際に、聞き手/読み手に丁重さを示すことができます」という性質を持っているため、「敬語の指針」においては丁重語に分類されています。詳しくは、「語としての丁重語名詞接頭辞「愚・小・拙・弊…」」で述べています。

なお、【形式編】では、表現形式に重点を置くため、使用上の問題については触れませんが、謙讓語と丁重語を使用する際の注意点などについては、【運用編】においては用例とともに、詳しく述べることにします。

以上、「丁重語とは」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。①従来のような曖昧な扱い方を避け、丁重語を性質の異なる謙讓語から独立させ、積極的に五分法を取り入れ

た。②謙譲語と丁重語の定義を並べ、両者の共通点と相違点について、学習者に考えてもらうことで、より深い印象を与える。③学習者が少しでも早く多種かつ複雑な表現形式が記憶できるよう、丁重語の表現形式の全体像を表にまとめ、それぞれのバリエーションの位置づけを示した。

記述試案例その⑦ 語としての丁重語動詞特殊形

学習者向けの教科書

【課題1】 丁重語動詞の特殊形として、主に以下のものがあります。確認しましょう。

普通の言い方	丁重語の特殊形
言う・話す	申す
来る・行く	参る
～てくる/いく	～てまいる
いる	おる
～ている	～ておる
思う・知る	存じる
ある	ござる
(～) する	(～) いたす

【課題2】 以下の表を埋めてみましょう。

そして、それぞれの性質に着目し、二つの言い方の違いを考えましょう。

普通の言い方	丁重語の特殊形	謙譲語の特殊形	両者の違い
言う・話す			
来る・行く			
思う・知る			

【課題3】 以下の言い方ができるかどうかを判断してみましょう。

そして、理由も考えてみましょう。

(1) (自己紹介で) 私は王と申します。

理由： _____

(2) (自己紹介で) 私は王と申し上げます。

理由： _____

(3) (駅のアナウンス) ただいま電車が参ります。

理由： _____

(4) (お手紙で) 暖かくなってまいりました。

理由： _____

(5) (メールで) 楽しみにお待ちしております。

理由： _____

(6) (講演で) 近年、人口が減少しております。

理由： _____

(7) (電話で) その件なら、存じ上げておる。

理由： _____

(8) (シンポジウムで) ご質問がございますか。

理由： _____

【自由研究】

それぞれの性質に着目し、「報告する」、「ご報告する」、「ご報告いたす」という三つの敬語の違いについて、考えてみましょう。

もっと知りたい人のための豆知識

丁寧な自己紹介として、「～と申します」という名乗り方は定番だといえましょう。しかし、日本社会では、「～と申します」は、初対面などあまり面識がない方に使う表現で、よく知った方に使うのは失礼な表現だとされている傾向があるようです。つまり先方と会ったこと、話をしたことは忘れてしまったという誤解を受けかねません。例えば、菊地（1997）では、次のように述べられている。

「〇〇と申します」と言うのは、本来「〇〇と申します/〇〇という者です」の敬語なのだから、会ったことがない場合や、しばらく会っていないので相手が忘れていたであろうというような場合にはよいが、よく知っている間柄の場合には、本当はおかしい。ところが、そのような区別をせずに、電話をかける時の名乗りの表現をすべて一律に「〇〇と申します」と言う人が近年増えているような気がする。あるいは、一部のビジネスマナーなどで、電話をかける時はそう言うものと機械的に教えているのかもしれないが、つい先程別れたばかりの相手から「私、〇〇と申しますが、先程は……」という電話をもらったりするのは、どうも奇異なものである。

【参考文献】

菊地康人（1997）『敬語』講談社学術文庫

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

学習者に丁寧語動詞の特殊形の全体像を把握してもらうこと。

使い方

中には、謙譲語として認識されているものも多いため、学習者の混乱を想定し、教師から用例も挙げつつ、区別するよう、徹底的に呼びかけましょう。

【課題 2】

ねらい

謙譲語と丁寧語の両方を持つ動詞を比較し、両者の共通点と相違点について、学習者に

理解してもらうこと。

使い方

最初から教師側から解答を示すのではなく、謙譲語と丁重語の性質に目を向けさせ、なるべく学習者が自ら気づくよう導きましょう。

解答例

普通の言い方	丁重語の特殊形	謙譲語の特殊形	両者の違い
言う・話す	申す	申し上げる	丁重語のほうは、聞き手や読み手に対して丁重に述べるための敬語である。 謙譲語のほうは、間接的に相手や第三者を高くするための敬語である。
行く	参る	伺う	
思う・知る	存じる	存じ上げる	

補足説明

学習者により理解してもらうために、理屈で説明するのではなく、例文の中で示し、それぞれの違いを明らかにしましょう。例えば、「**☐**丁重語とは」の【課題2】の**☐**解答例を参照しましょう。なお、運用面にも関わる問題であるため、第3部の【運用編】では更に詳しく述べています。

【課題3】

ねらい

謙譲語と丁重語の共通点と相違点について、学習者により深く理解してもらうこと。

使い方

最初から教師側から解答を示すのではなく、謙譲語と丁重語の性質に目を向けさせ、なるべく学習者が自ら判断・説明できるよう導きましょう。

解答例

(1) (自己紹介で) 私は王と申します。○

理由：自己紹介の聞き手や読み手に対して丁重に述べているため。

(2) (自己紹介で) 私は王と申し上げます。×

理由：ここでは、「申し上げる」の相手や第三者にが存在しないため。

(3) (駅のアナウンス) ただいま電車が参ります。○

理由：丁重語の「参る」は、高める必要のない物事にも使えるため。

(4) (お手紙で) 暖かくなってまいりました。○

理由：丁重語の「～てまいる」は、高める必要のない物事にも使えるため。

(5) (メールで) 楽しみにお待ちしております。○

理由：メールの読み手に対して丁重に述べているため。

(6) (講演で) 近年、人口が減少しております。○

理由：講演の聞き手に対して丁重に述べているため。

(7) (電話で) その件なら、存じ上げておる。×

理由：電話の聞き手に対して丁重に述べることとタメロが矛盾しており、丁寧語と組み合わせる(「存じ上げております」)必要があるため。

(8) (シンポジウムで) ご質問がございますか。×

理由：丁重語の「ござる」は自分や自分側に用いるものであるため、高くする必要のある相手や第三者に使うのが失礼であるため。

.....

以上、「語としての丁重語動詞特殊形」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のものと比べ、主に以下の3点について、工夫を凝らしてみた。

①学習者が少しでも早く丁重語動詞特殊形の表現形式が記憶できるよう、その全体像を表にまとめ、それぞれのバリエーションの位置づけを示した。②謙譲語と丁重語の両方の形を持つ動詞を取り上げ、その違いについて、学習者に考えてもらうことで、より深い印象を与える。③丁重語と謙譲語の共通点と相違点について、学習者により深く理解してもらうために、具体的な用例を通して、自ら判断・説明を求めた。

第10章 「敬語表現における敬語」に関する記述の提案

第1節では、中国の大学日本語専攻教科書における「敬語表現における敬語」に関する記述の実態を明らかにし、機能しているかどうかを検証する。第2節では、先行研究を踏まえ、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮という問題点を改善するための本研究の提案を示す。第3節では、本研究の改善案を踏まえ、目指したい「敬語表現における敬語」に関する記述を具体的に示す。

第1節 現行記述の実態と問題点

第3章の元学習者への調査においては、敬語に対する基本認識の不足（意識面）と敬語の体系知識の混乱（形式面）以外に、「表現形式を覚えていても、誰にどこでどう使うのかは分からない」という敬語の運用面における困惑点と困難点が最も多く訴えられた。また、学習者のみならず、現場教師の間においても、「敬語の知識が分かっている、どう使うのか自信がない」という悩みが多いことが第4章の調査で明らかとなった。

宮岡他（1999）においては、敬語が外国人にとって難しいのは、文法事項を理解し記憶するだけでなく、話し手が聞き手や話題の人物と自分との人間関係を把握しながら、様々な場面で使い分けなくてはならないと指摘されている。確かに筆者も学習者の一人として、学習経験を振り返ると、自分も敬語の難しさに対する考え方が変わっていった。敬語を教わった最初の頃は、複雑な表現形式に悩まされたが、次第に表現形式に慣れるにつれ、敬語の真の難しさは様々な場面に合わせ適切に使うことであると気づいた。

言うまでもなく、学習者に敬語が適切に使えるようになってもらうためには、最終的には実際の場面における運用を通し、その力を身につけさせる必要がある。しかし、その前に、実際の場面における適切な敬語使用例を示し、理解してもらうよう工夫することも大事であると考え。特に日常生活において、自然に敬語を見聞きする機会が極めて少ない中国国内にいる学習者にとって、様々な場面で敬語が使われている例をたくさんインプットすることにより、徐々に敬語に慣れ、次第に適切に使うことへつながっていくと考えられる。インプットの提供には、教科書の役割が大いに期待されるだろう。

そこで、中国の大学日本語専攻教科書においては、敬語の使用例はどのように示され、本研究でいう「敬語表現における敬語」は、どのように記述されているのかを調べること

にした。すべての敬語項目を列挙するには、紙幅が足りないため、ここでは、尊敬語の代表的な形式である「お/ご～になる」を一例として、それに関連する記述を【表 18】にまとめてみた。なお、「敬語表現における「お/ご～になる」」に関する記述は、主に以下の三箇所に現れている。

- (1) 本文の会話文や文章
- (2) 文型に関する説明
- (3) 練習問題

【表 18】に示されている記述を分析した結果、以下の問題点と不足点が見られた。

【問題点・不足点① 表現形式の単一化】

提示された例文や練習問題を見ると、「～ますか」または「～ました」のように敬語が文末に終わる表現形式に偏っていることが明らかとなった。実際の場面においては、様々なバリエーションで敬語が使われているにもかかわらず、このように表現形式の単一化は、学習者の習得に悪い影響を与え、運用範囲を狭めてしまう可能性があるといえよう。

【問題点・不足点② 語彙や文法としてしか扱われない】

文型説明は変形規則が中心であり、練習問題もオーディオリンガル法に基づいた語彙レベルの言い換え・書き換えが多かった。表現形式を理解し、練習することも大切であるが、それだけでは日常生活の色々な場面で適切に敬語を運用する力が身に付きにくいという声は、多くの学習者と現場教師からもよく耳にするだろう。このような記述は学生の関心を表現形式に向けさせてしまい、運用能力の養成につながりにくいと思われる。

【問題点・不足点③ 人間関係設定の乏しさ】

会話文や練習問題で設定された人間関係を見ると、先生と学生によるものがほとんどであり、非常に乏しいことが明らかとなった。確かに大学における学習者にとって、最も身近にいる敬語の使用相手は教師かもしれない。しかし、卒業後社会に出たら、様々な場面で敬語が必要とされるため、大学の授業で予習として事前に触れる必要がある。就職活動の面接や会社での会話など、練習問題を通し、様々な場面における敬語の使用例を示す工夫が求められるだろう。

【表 18】 現行の敬語表現における「お/ご～になる」に関する記述

教科書	本文における記述	文型説明における記述	練習問題における記述
<p>『上海新編日語（改訂版）』 『新編日語（改訂版）教学指南』</p>	<p>(学校へ来る途中で) 李 先生は毎朝何時にお目覚めになりますか。 村松 毎朝六時ごろ起きます。(中略) 李 先生はご出勤の前に新聞をお読みになりますか。 村松 時間がないので、簡単に目を通すだけです。重要な記事は学校から帰ってじっくり読むことにしています。 李 先生のお宅は何という新聞をお取りになっていますか。 村松 わたしのうちでは、「人民日報」と「チャイナデーリー」を取っています。 李 朝、ラジオをお聞きになりますか。 村松 支度をしなければなりませんから、聞くのは天気予報とニュースぐらいです。(中略) 李 どこお乗りになりますか。 村松 家の近くで地下鉄に乘ります。(中略) 李 先生はご出勤のたびに切符をお買いになりますか。 村松 いいえ、交通カードを持っていますから。 李 お宅を七時ちょっと前に出られると、何時ごろ学校にお着きになりますか。(後略) (職員室で) 李 先生は今日何時ごろお帰りになりますか。 村松 四時ごろ帰ろうと思っています。(中略) 李 何にお書きになったんでしょうか。 村松 『日本語ジャーナル』という雑誌です。(中略) 李 大きなお荷物がありますね。お持ち帰りになるのですか。 村松 ええ、持って帰ります。(後略)</p>	<p>「お(ご)…になる」で構成された敬語 村松先生は毎朝六時ごろお目覚めになります。 「お+動詞連用形」「ご+サ変動詞語幹」に「になる」を付ける形は、尊敬する目上の人の行為に用いられる。尊敬の程度は「(ら)れる」より高い。ほぼすべての動詞に適用できるが、連用形が1音節の動詞(例えば「見る」など)には使えない。 ・ここでちょっとお待ちになってください。 ・先生はまだお帰りになっていません。 ・先生は何時ごろご出勤になりますか。 接続と用例: お+動詞連用形+になる 読む→お読みになる 教える→お教えになる ご+サ変動詞語幹+になる 心配する→ご心配になる 出席する→ご出席になる ・田中先生は8日にイギリスからお帰りになります。 ・お客さんがお見えになったらすぐ始めましょう。 ・ご家族の方は半額の会費ですべてのスポーツ施設をご利用になれます。</p>	<p>・例のように言い換えなさい。 例：本を読みますか。一本をお読みになりますか。 ①毎日何時ごろ出掛けますか。 ②毎日何時ごろ帰りますか。 ③お宅は『朝日新聞』を取っていますか。 ④先生は三時間も続けて教えてください。 ⑤長い旅行で疲れたのでしょうか。</p>
<p>『新編基礎日語（改訂版）』 『新編基礎日語（改訂版）学習参考書』</p>	<p>(待ち合わせ) 田中：やあ、どうも おそくなりました。 山田：いやあ、込みますねえ。 田中：ええ、地下鉄はいいんですが、バスを 何かか 待ちました。 山田：そうでしょう。わたしは 駅から タクシーで きました。 田中：お待ちになったでしょう。申し訳ございません。(後略) (講演会の最終打ち合わせ) (前略) 三浦：ご講演が終わりましてから質疑応答ということで、5時には終わると思います。 それから先生を囲んでの懇親会ということになっております。 原田：それは先生もお喜びになることでしょう。</p>	<p>敬語の表現形式：「お～になる」 「お+動詞連用形+になる」は尊敬語の表現形式であり、行為の主体に尊敬の意を表す際用いられる。 例： ・お待ちになったでしょう。申し訳ございません。 ・山田先生はあしたおたちになります。 ・先生はもうお帰りになりました。</p>	<p>・言い換え(例) 待つ→お待ちになったでしょう。 ①きく→ ②やすむ→ ③はなす→ ④飲む→ ⑤帰る→ ・表埋め 例：飲む おのみになる おのみにならない 書く 急ぐ 話す 呼ぶ 乗る 帰る 作る 入る 買う 降る 借りる 疲れる 見える 忘れる 考える 出かける ・例にならって言いなさい。 例：先生はお酒は飲まない。→先生はお酒はお飲みにならない。 ①先生は今まだ帰らない。→ ②社長は何時に出かけますか。→ ③どうすればよいのかよく考えてください。→ ④今日は疲れたでしょう。→</p>
<p>『吉林新編日語（改訂版）』</p>	<p>学生：先生は毎朝何時ごろお起きになりますか。 先生：わたしは毎朝六時半ごろ起きます。 学生：お起きになってから、何か運動をなさいますか。(中略) 学生：先生のおたくでは何という新聞をおとりになっていますか。 先生：わたしのうちでは朝日新聞をとっています。 学生：学校へおいでになる前に、新聞をお読みになりますか。 先生：時間がないのでかんたんに目を通すだけです。 学生：朝のごはんをめしあがりながら、お読みになりますか。 先生：食べながら読むこともありますが、たいてい食べる前に読みます。 学生：朝テレビをごらんになることがありますか。 先生：したくをしなければなりませんから、テレビなど見ているひまはありません。 学生：何時ごろおたくをお出になりますか。 先生：八時ちょっと前にうちを出ます。(中略) 学生：どこで電車にお乗りになりますか。 先生：さくらがおか駅で電車に乘ります。 学生：電車に乘られるたびにきつぷをお買いになりますか。</p>	<p>お～になる 接頭辞+動詞連用形+になる(補助動詞) ・へやにお入りになりますか。 ・ちょっとお待ちになってください。</p>	<p>・言葉の使い方 ①へやへお入りになりますか。 ②けさの新聞をお読みになりましたか。 ③どこかで少しお休みになりますか。 ④ここでちょっとお待ちになってください。 ⑤そんなにおおりにならないでください。 ⑥これはもうお持ちになっていますか。 ⑦先生はまだお帰りになってはいません。 ⑧もうお使いになってもいいです。 ⑨まだお立ちになってはいけません。 ⑩この薬は食後にお飲みにならないと書かれています。 ・言い換え 例：本を読みますか。一本をお読みになりますか。 ①手紙を書きますか。 ②うちへ帰りますか。</p>

	<p>先生：いいえ、ていきけんを持っていますから、電車に乗るたびに買いません。 学生：さくらがおか駅を何時に出る電車にお乗りになりますか。 先生：さくらがおか駅を八時十五分に出る急行に乗ります。 学生：さくらがおか駅を八時十五分に出られると、何時ごろ学校にお着きになりますか。 先生：電車に乗っている時間が二十五分かかりますから、学校に着くのは、九時十分前です。 学生：先生はきょう何時ごろお帰りになりますか。 先生：四時ごろ帰ろうと思っています。(中略) 学生：先生はどうぞそでお休みになってください。 先生：どうもありがとう。 学生：先生は明日も同じ時間においでになりますか。 先生：はい、来ます。(中略) 学生：もうお帰りですか。大きい荷物がありますね。お持ち帰りになるのですか。(後略)</p>		<p>③薬を飲みますか。 ④たばこを吸いますか。 ⑤バスに乗りますか。 ⑥少し待ちますか。 ⑦手をあらいますか。 ⑧くつをぬぎますか。 ⑨花子さんと会いますか。 ⑩駅前を通りますか。 ⑪電話をかけますか。 ⑫早くをうちを出ますか。 ⑬どこでバスをおりますか。 ⑭としよ室から本をかりますか。 ⑮来年しけんを受けますか。</p>
<p>『大衆的日語』 『大衆的日語学習輔導用書』</p>	<p>文型 ・社長はもうお帰りになりました。 例文 ・すみません。その灰皿、お使いになりますか。 ……いいえ、使いません。どうぞ。 ・よく映画をご覧になりますか。 ……いいえ。でもたまにテレビで見ます。</p>	<p>お動詞ます形に なります 尊敬動詞より高い敬意を表す。「みます」「ねます」など、「ます」の前に1音節の動詞と第三類動詞はこの形が作れない。また、特殊尊敬語のある動詞に関しては、尊敬動詞と「お動詞ます形になります」より特殊尊敬語を優先に使われる。 ・社長は もう お帰りに になりました。</p>	<p>練習A ・社長は もう おかえり に になりました。 やすみ 練習B 例：先生は新しいパソコンを買いました →先生は新しいパソコンをお買いになりました。 1) 部長はたばこを吸いません→ 2) この料理は松本部長の奥様が作りました→ 3) この本は社長が書きました→ 4) 会議の予定はいつも部長が決めます→ 例：いつ佐藤さんに会いましたか(きのう) →いつ佐藤さんにお会いになりましたか。 …… きんのう会いました。 1) バス停の場所がわかりますか(いいえ)→ 2) 疲れましたか(ええ、ちょっと)→ 3) 日光ではどんな所に泊まりましたか(古い旅館)→ 4) どちらでお金を換えますか(空港の中の銀行)→ 練習C A: ①会社をやめられたそうですね。 B: ええ。 A: いつ①おやめになったんですか。 B: ②2ヶ月まえに①やめました。 1) ①新しい仕事を始めます ②先月 2) ①うちを建てます ②去年</p>
<p>『基礎日語総合教程』 『基礎日語総合教程教学参考書』</p>	<p>記述なし</p>	<p>お/ごーVになる ・お帰りになる ・お話になる ・ ・ご訪問になる ・ご卒業になる</p>	<p>記述なし</p>
<p>『総合日語(改訂版)』 『総合日語(改訂版)教師用書』</p>	<p>(遠足の日、香山公園で) 王：あのう、先生、日本語教師の道をお選びになったきっかけを教えてくださいませんか。 遠藤：きっかけですか。(中略) 王：先生、お疲れになりませんか。お荷物、お持ちします。 遠藤：どうもありがとう。(後略) (日本語の授業の休憩時間、教室で) 古屋：みなさん、何をしているんですか。 王：あつ、先生。遠足のときの写真なんですが、先生もご覧になりませんか。 古屋：ええ、ぜひ。(中略) 王：遠藤先生に何かちょっとしたお礼をさし上げたいなあ…。 将来についていろいろアドバイスもいただいたし。 古屋：じゃあ、みんなで撮った写真をアルバムにして、さし上げたらどうですか。 きつとお喜びになると思いますよ。 王：あ、それはいい考えですね。ありがとうございます。</p>	<p>和語動詞(Ⅰ・Ⅱ類動詞)： お+動詞の第一連用形+になる 漢語動詞(Ⅲ類動詞「～する」)： ご+動詞語幹+になる (1) 遠藤先生、日本語教育の道をお選びになったきっかけを教えてくださいませんか。 (2) これは山田先生がお書きになった日本語文法の本です。 (3) 李先生はその問題を詳しくご研究になりました。 (4) 今回のシンポジウムには、遠藤先生もご参加になりました。</p>	<p>B. 文型練習 尊敬 2 例 辞書を買う(先生) →わたしは辞書を買いました。先生もお買いになりました。 (1) 5時に帰る(古屋先生) (2) ケーキを作る(友達のお母さん) (3) 本を読む(趙先生) (4) 日本の歌を歌う(遠藤先生) C. 会話練習 例 パソコンを使う あなた：先生は、パソコンをお使いになりますか。 先生：ええ、ときどき使いますよ。 (1) 日本の雑誌を読む (2) 胡先生と話す (3) インターネットで本を買う (4) 中国語で手紙を書く</p>

【問題点・不足点④ コミュニケーション場面と切り離されている】

文型説明の例文も練習問題も、明確な場面が設定されておらず、単文提示または簡単な問答形式が多数であった。「誰が、誰に、どこで、なぜ」この表現を用いるのかに関する情報は一切なく、コミュニケーション場面からは切り離されていることが分かる。このような記述は、たとえ敬語で文が作れたとしても、どこでどう使うのかが分からず、運用につながらない可能性が高いと思われる。

第2節 関連する先行研究と本研究の提案

従来の「敬語」とは区別し、「敬語表現」という言葉を述語として提唱したのは、蒲谷他（1998）の『敬語表現』である。同書では、次のように定義されている。

「敬語表現」とは、ある「表現意図」を持った「表現主体」（「話し手」「書き手」）が、「自分」「相手」「話題の人物」相互の「人間関係」や、「場」の状況を認識し、「表現形態」（「音声表現形態」あるいは「文字表現形態」）を考慮した上で、その「表現意図」を叶えるために、適切な「題材」「内容」を選択し、適切な「敬語」を用いることによって「文話」（「談話」あるいは「文章」）を構成し、「媒材化」する、といった一連の「表現行為」である。（p. 38）

そして、同書においては、「言材としての敬語」と「語（句）としての敬語」という二つの概念が新たに生み出された。前者については、「いわば「抽象的な言葉」として考えられる段階での「敬語」のことであり、具体的な「人間関係」や「場」の条件などを伴っていない、すなわち「敬語表現」とは一応切り離して捉えることのできる「敬語」である」（p. 47）といえる。それに対し、後者については、「例えば、「オッシャル」や「…マス」という言材としての敬語が、「社長がそうおっしゃいました」という「敬語表現」において、「おっしゃいー」「ましー」という姿で用いられている「敬語」のことであり」（p. 60）と述べられている。また、「言材としての敬語」の基本的な「敬語的性質」は「語（句）としての敬語」においても生きているわけであるが、その「敬語的性質」が「敬語表現」において、「敬語的機能」（例えば「おっしゃいー」は〈話題の人物である社長を高める〉）を果た

していることも指摘された上で、「おっしゃる」や「申し上げる」など代表的な例を通して、「語（句）としての敬語」における基本的な「敬語的性質」や「敬語的機能」についての整理が行われた。

その後、蒲谷他（2009）では、「敬語表現とは、敬語を用いた表現のことです。これは、敬語を用いて表現するという行為と、その結果としての表現の両者を示す用語です」（p. 2）と述べられている。そして、敬語表現においては、人間関係・場・意識・内容・形式という五つの要素が、それぞれ大きな役割を果たし、常にこれら要素の連動の中で敬語表現を捉えていく必要があると指摘されている。

更に、蒲谷（2013）では、蒲谷他（1998）の基本的な趣旨が受け継がれているが、「語（句）としての敬語」は「敬語表現における敬語」だと新たに名づけられた。そして、具体的な敬語使用例を通し、「言材としての敬語」が待遇コミュニケーションにおいてはどのような意識で用いられ、そこでどのような意味を持ち、どのような働きをするのかについても検討されている。

以上の先行研究からは、「敬語表現における敬語」を記述する際、どのような意識で用いられ、そこでどのような意味を持ち、どのような働きをするのかについても検討し、人間関係・場・意識・内容・形式などの要素の連動の中で行う必要があるといえる。しかし、中国の大学日本語専攻教科書における「お/ご～になる」に関する現行の記述を見ると、言材（本研究でいう語）としての「お/ご～になる」は扱われているが、敬語表現における「お/ご～になる」については、ほとんど扱われていない傾向が見られる。

「お/ご～になる」に限らず、ほかの敬語項目を見ても、中国の大学日本語専攻教科書における「敬語表現における敬語」に関する記述は、語彙や文法に重点が置かれており、「実際のコミュニケーションにおいてどのような意識で用いられ、表現の中でどういう意味を持ち、どのような働きをするのか」といった記述がきちんと行われていないことが分かる。以上の問題点を踏まえ、今後目指す新たな「敬語表現における敬語」に関する記述には、コミュニケーションの観点を取り入れ、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった実際の場面の中で、敬語使用例や練習問題を示すべきだと考える。

そして、本研究では、蒲谷他（2010）で提唱されている「敬語化」、「敬語表現化」、「敬語コミュニケーション化」という三つの概念を援用し、教科書において、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化という三つの段階に分け、練習問題を示す方法を提案する。「語彙としての敬語化」とは、「行く→（尊敬語）行かれ

る/いらっしゃる/お出でになる、(謙讓語) 伺う、(丁重語) 参る、(丁寧語) 行きます」のように、語彙を敬語にすることを指すが、従来の日本語教育現場では最も盛んに行われているといえよう。このような場面と切り離れた記述は、具体的な場面における敬語の運用力にはつながりにくいと批判したものの、全く必要ないともいえない。批判したいのは、語彙としての敬語化だけで終わるという記述であり、表現の中、コミュニケーションの中で敬語を考えるべきだといっても、まず表現形式を正しく覚えなければ何も成り立たない。殊に、海外にいる学習者の場合、母語話者と比べ、日常的に敬語を見聞きする機会は少ないため、いきなり表現やコミュニケーションの中で敬語を覚えるのは現実的ではないと思われる。語彙としての敬語化は敬語を使う大事な第一歩だと位置付けたい。

しかし、「表現形式が分かっている、実際の場面ではどのように使うのかが分からない」という声は、教育現場ではよく耳にするとと思われる。ここから、敬語化された語彙は具体的に「だれが、だれに、どう使われているのか」に関する記述を行う必要性がうかがわれるが、残念ながら、従来の教育現場においては、あまり行われていない傾向が見られる。本稿では、これを「表現における敬語化」と名づけ、敬語の運用力を高めるために欠かせない記述であると考え、「行く」を正しく敬語化できる上に、話し手/書き手と、聞き手/読み手や第三者との人間関係、置かれている場、表現意図、表現内容などの要素に応じ、「行かれる」、「いらっしゃる」、「お出でになる」、「伺う」、「参る」、「行きます」などから、最も適切だと思われる言い方を選び、更に表現全体を敬語化する力を養うには、例文を提示する際、関連する記述を加え、練習問題もそういった観点を考慮に入れる工夫が必要とされる。

更に、日常生活における敬語使用は、話し手/書き手による一方通行ではなく、聞き手/書き手とのやりとりの中で行われるため、コミュニケーションの中で敬語を扱う観点も次第に必要となってくる。蒲谷他(2010)では、敬語コミュニケーションは、相手とのやりとりに応じてコミュニケーションを考え、作っていくこと、あらかじめ決めておいた言葉ではなく、コミュニケーションにおける諸要素とその要素の動きに応じ、適切に対応していくこと、その中で敬語と敬語表現をどのように表現・理解するかということが、最も重要だと述べられている。コミュニケーションにおいて敬語の使い方を示したり、やりとりの中で「コミュニケーションにおける敬語化」を練習させたりといった記述が、中国の日本語教育現場では求められるのではないかと考える。

第3節 目指したい新たな記述試案例

中国の大学日本語専攻教科書における「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮という問題点について、コミュニケーションの観点を取り入れ、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった実際の場面を提示しながら、敬語使用例や練習問題を示す。そして、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化という三つの段階に分け、練習問題を示す方法を提案した。これに基づき、以下のように見出しを立て、それぞれについて記述試案を試みた。本節では、その中から重要なもの（網掛け箇所）を抽出し、記述試案例その①～その⑥として示したい。以下、教科書体で示すものが記述試案の記述試案例である。

なお、この部分に関しては、目次上、第3部の【運用編】と第4部の【練習編】という二つに分けて扱うことにする。

第3部 【運用編】—「敬語表現における敬語」について

☞ 尊敬語

【1】敬語表現における尊敬語動詞特殊形

【2】敬語表現における尊敬語動詞「～(ら)れる」→→→記述試案例その①

【3】敬語表現における尊敬語動詞「おだ～になる」

【4】敬語表現における尊敬語動詞「おだ～だ」

【5】敬語表現における尊敬語動詞「おだ～なさる」

【6】敬語表現における尊敬語動詞「おだ～くださる」

【7】敬語表現における尊敬語形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」

【8】敬語表現における尊敬語形容動詞「おだ～」と「(おだ)～でいらっしゃる」

【9】敬語表現における尊敬語副詞「おだ～」

【10】敬語表現における尊敬語名詞「おだ～」

【11】敬語表現における尊敬語名詞接頭辞「御・貴・玉…」と接尾辞「…様、方、殿」

【12】敬語表現における尊敬語名詞「～でいらっしゃる」

⇨ 謙讓語

【1】敬語表現における謙讓語動詞特殊形

【2】敬語表現における謙讓語動詞「おだ〜する」

【3】敬語表現における謙讓語動詞「おだ〜申し上げる」

【4】敬語表現における謙讓語動詞「〜ていただく」、「おだ〜いただく」 →→→記述試案例その②

【5】敬語表現における謙讓語動詞「〜(さ)せていただく」

【6】敬語表現における謙讓語名詞「おだ〜」

⇨ 丁重語

【1】敬語表現における丁重語動詞特殊形 →→→記述試案例その③

【2】敬語表現における丁重語名詞接頭辞「愚・小・拙・弊…」

⇨ 謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱ

【1】敬語表現における謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱ 動詞特殊形

【2】敬語表現における謙讓語Ⅰ 兼謙讓語Ⅱ 動詞「おだ〜いたす」

⇨ 丁寧語

【1】敬語表現における丁寧語「〜です・ます」

【2】敬語表現における丁寧語「〜であります・でございます」

⇨ 美化語

【1】敬語表現における美化語「おだ〜」

第4部【練習編】—敬語化の三段階について

➤ 語彙としての敬語化とは →→→記述試案例その④

- 【1】練習①穴埋め問題—動詞特定形
- 【2】練習②言い換え・書き換え練習—授受補助動詞
- 【3】練習③穴埋め問題—「～(ら)れる」
- 【4】練習④言い換え練習—「おだ～になる」
- 【5】練習⑤線埋め問題—「おだ～(た)」
- 【6】練習⑥穴埋め問題—「～される/～なされる/～なされる/～になる」
- 【7】練習⑦言い換え練習—「おだ～する」、「おだ～いたす」
- 【8】練習⑧穴埋め問題—「おだ～する」、「おだ～いたす」、「おだ～申し上げる」
- 【9】練習⑨言い換え練習—「～(さ)せていただく」
- 【10】練習⑩言い換え練習—名詞「おだ～」
- 【11】練習⑪言い換え練習—形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」、形容動詞「おだ～」と「(おだ)～でいらっしゃる」、副詞「おだ～」
- 【12】練習⑫穴埋め問題—改まり語

➤ 表現における敬語化とは →→→記述試案例その⑤

- 【1】練習①それぞれの場面における敬語表現を考えましょう。

➤ コミュニケーションにおける敬語化とは →→→記述試案例その⑥

- 【1】クラスでの個人発表
- 【2】先生への欠席メール
- 【3】懇親会における司会
- 【4】先生への手紙
- 【5】初対面における自己紹介
- 【6】お礼状メール
- 【7】就職活動の面接
- 【8】指導教授とのコンタクトメール
- 【9】送別会における挨拶
- 【10】先生への内定報告

記述試案例その① 敬語表現における尊敬語動詞「～（ら）れる」

学習者向けの教科書

【課題1】 次の敬語の使い方について、質問に答えてみましょう。

(学会の懇親会で、初対面の日本人学生に)

自分：韓国に行かれたことはありますか。

相手：はい、何回かあります。

質問(1) 下線部の「行かれる」の性質を選んでみましょう。

- A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。
- B 自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする。
- C 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。
- D 言葉をきれいに、または上品にする。

質問(2) 下線部の「行かれる」は、ここではどのような機能を果たしていると思いますか。最も可能性が高いと思われるものを選んでください。

- A 初対面の日本人学生に敬意を表している。
- B 初対面の日本人学生に親しさを表している。
- C 初対面の日本人学生に丁寧さを示している。
- D 自分の言葉遣いを上品にしたい。

質問(3) 下線部の「行かれる」は、ほかにどのような言い方ができると思いますか。その違いについても考えてみましょう。

【課題2】 次の敬語の使い方について、質問に答えてみましょう。

(研究室で、親しくないゼミの先輩に)

自分：夜の懇親会に(参加する?→) _____。

相手：はい、王さんは?

質問(1) 自分の発話について、線を埋めてみましょう。

質問(2) 自分の選んだ言い方の性質を選んでみましょう。

- A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。
- B 自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする。
- C 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。
- D 言葉をきれいに、または上品にする。

質問(3) 自分の選んだ言い方は、ここではどのような機能を果たしていると思いますか。

質問(4) 「参加する」に関する以下の言い方について、考えてみましょう。

- ・参加される
- ・参加なさる
- ・ご参加なさる
- ・ご参加になる
- ・ご参加くださる

.....
【課題3】 次の敬語の使い方について、質問に答えてみましょう。

(ホテルのホームページで)

(チェックインした→) _____後のキャンセルにつきましては、受付致しかねますので予めご了承願います。

質問（1）下線部にふさわしいと思われる言い方を選んでください。

- A チェックインされた B おチェックインになった
C チェックインいたしました D チェックインさせていただいた

質問（2）自分の選んだ言い方は、どのような性質を持っていますか。

質問（3）自分の選んだ言い方は、ここではどのような機能を果たしていると思いますか。

【自由研究】

以下の動詞を例に、それぞれ可能、受け身、尊敬語の形を考えてみましょう。そして、どこで重なっているのかを確認しましょう。

	可能	受け身	尊敬語
書く			
教える			
指導する			
来る			

もっと知りたい人のための豆知識

「先生がおっしゃられたように」、「社長がお帰りになりましたか?」、「どうぞ、お越しになってください」などの言い方を聞いたことはありませんか。つまり、特殊形、「～(ら)れる」、「お/ご～になる」という三大尊敬語を併用している現象です。日本人も使っているから、正しいと判断し、真似する学習者もいるでしょう。

恐らくもっと高い敬意を表したいという気持ちで生まれたこれらの言い方ですが、実は「二重敬語」で、「敬語の指針」では、以下のように述べられています。

「一つの敬語について、同じ種類の敬語を二重に使ったものを「二重敬語」という。例えば、「お読みになられる」は、「読む」を「お読みになる」と尊敬語にした上で、更に尊敬語の「……れる」を加えたもので、二重敬語である。「二重敬語」は、一般的に適切ではないとされている。ただし、語によっては、習慣として定着しているものもある。例：(尊敬語) お召し上がりになる、お見えになる。(謙譲語) お伺いする、お伺いいたす、お伺い申し上げます。」

【参考文献】

文化審議会 (2007) 「敬語の指針」文化審議会答申

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

「行く」の尊敬語「行かれる」の使用例を通して、学習者に尊敬語動詞の「～(ら)れる」の性質を復習し、その使い方を身につけてもらうこと。

使い方

三つの質問について、学習者が自ら考え、答えにたどり着くよう、教師が必要に応じて支援しましょう。

解答例

質問 (1) A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。

質問 (2) A 初対面の日本人学生に敬意を表している。

質問 (3)

「行かれる」のほかに、「行く」の尊敬語である「いらっしゃる」または「お出でになる」という言い方もできます。性質上はほぼ同じですが、二つとも「行かれる」より相手や第三者を高くする性質が強いため、表される敬意の程度もより高いと思われます。自分と同年代の相手には、「行かれる」でも十分ですが、自分より年上の相手なら、「いらっしゃる」または「お出でになる」のほうがもっと適切かもしれません。

補足説明

日本では、同年輩の相手に対しても、初対面でいきなり非です・ます体で話すのは、慣れなれない印象を与えてしまいます。中国人はすぐに親しくなりたいのに対し、日本人は距離感を保ちたい傾向があります。認識のずれから生じる失礼を避けるために、最初はです・ます体を使います。相手の言葉遣いや態度に応じ、徐々にです・ます体ははずすことをすすめます。

また、立場や年齢が同じような相手には、知り合った当初は「～（ら）れる」を使うのもいいかもしれません。というのは、特殊形や「お/ご～になる」などほかの表現形式と比べ、「～（ら）れる」はそれほど高くする性質を持っておらず、軽いレベルの尊敬語として使えます。ただ、受け身、可能、自発の形と重なっているため、文脈に合わせて判断する必要があります。

【課題2】

ねらい

「参加する」の尊敬語「参加される」の使用例を通して、学習者に尊敬語動詞の「～（ら）れる」の性質を復習し、その使い方を身につけてもらうこと。

使い方

三つの質問について、学習者が自ら考え、答えにたどり着くよう、教師が必要に応じて支援しましょう。

解答例

質問（1）参加されますか。

質問（2）

A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。

C 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

質問（3）

ここでは、「参加する」の尊敬語「参加される」を使うことにより、ゼミの先輩に敬意を表したいという話し手の意識がうかがえます。

質問（４）

この五つは、すべて「参加する」の尊敬語で、持つ性質も果たす役割も基本的には同じですが、程度が異なります。「参加される」→「参加なさる」→「ご参加なさる」、「ご参加になる」、「ご参加くださる」という順に高くする性質が強くなっているため、【課題２】の場面に合わせると、表される敬意の程度も高くなります。そして、「ご参加くださる」だけ、自分にとってありがたいという相手への感謝の気持ちが含まれています。ほかの言い方には、含まれていません。

補足説明

注意すべきなのは、「ご参加される」という形です。日本人でもこれを尊敬語だと思い、使っている人もいます。これは「参加される」の前に「ご」を付け、更に丁寧に表現したい意図が伺いますが、「ご参加される」を全体的に見ますと、「ご参加する」が元の形となるため、問題を感じます。既に敬語の知識のある方なら分かりますが、「お/ご～する」は謙譲語の表現形式で、相手に使うのはおかしいです。つまり、謙譲語を尊敬語にするという矛盾した言い方なので、誤用だといえます。したがって、「○サ変名詞+される」、「×ご+サ変名詞+される」、「○サ変名詞+なさる」、「○ご+サ変名詞+なさる」というふうに一度頭で整理したほうがよいと思います。

【課題３】

質問（１）A チェックインされた

質問（２）相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。

質問（３）

ここでは、「チェックインする」の尊敬語「チェックインされる」を使うことにより、ホームページの読み手であるお客様に敬意を表したいという書き手の意識がうかがえます。

補足説明

【課題３】は談話ではなく、文章における敬語の使用です。蒲谷他（2009, p.93）では、談話は音声、文章は文字という媒材によるコミュニケーションだと捉えています。文字を媒体とする媒体の例として手紙、メール、メモ、チラシなどが、音声を媒体とする媒体の例として対面会話、電話、発表などがあります。両者における敬語の使用には、基本的に

は大きな違いはありませんが、一般的には表情や態度、語気などが確認できない文字の場合が、敬語への注目度がより高いと思われます。対面で話すときは何とかありますが、手紙やメールで伝えようとするとう敬語の使い方で悩む経験を持つ方も多いでしょう。一方、メリットとしては考える時間があり、何度でも書き直せることです。音声の場合、その場で臨機応変に対応しなければなりません。また、書き言葉専用の敬語もありますが、詳細は後述します。

記述試案例その② 敬語表現における謙譲語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただく」

学習者向けの教科書

【課題 1】 次の用例を見て、敬語の使い方について考えてみましょう。

(学会の受付でスタッフが来場者に)

スタッフ：こちらにお名前とご所属を（書いてもらえる？→）_____。

来場者：分かりました。

質問（1）スタッフの発話について、下線の部分に書いてみましょう。

質問（2）自分の選んだ敬語は、どのような性質を持っているのかを考えてみましょう。

質問（3）自分の選んだ敬語はどのような機能を果たしているのか、場面などに合わせて説明しましょう。

【課題2】 次の用例を見て、敬語の使い方について考えてみましょう。

(店内のアナウンス)

本日はご来店いただきまして、誠にありがとうございます。ご来店のお客様にご案内申し上げます。当店は、終日禁煙となっておりますので、所定の場所以外での喫煙は、ご遠慮くださいますようお願い申し上げます。

質問(1) 下線部の「ご来店いただく」はどのような性質を持っているのかを考えてみましょう。

質問(2) 下線部の「ご来店いただく」はどのような機能を果たしているのか、場面などに合わせて説明しましょう。

質問(3) 用例の中に使われた他の敬語を抽出し、分類した上で、それぞれの持つ性質と果たしている機能について考えましょう。

【課題3】 次の用例を見て、敬語の使い方について考えてみましょう。

(飲食店の閉店看板)

本日も多くの方々にお越しいただきました。誠にありがとうございます。明日は夕方にイベントが入っておりますが、ランチ時間帯 11 時～15 時は通常営業致します。またよろしくお願ひ致します。

質問（1）下線部の「お越しいただく」はどのような性質を持っているのかを考えてみましょう。

質問（2）下線部の「お越しいただく」はどのような機能を果たしているのか、場面などに合わせて説明しましょう。

質問（3）下線の部分は、ほかにどのような言い方ができると思いますか。その違いについても考えてみましょう。

【自由研究】

「～ていただく」または「お/ご～いただく」を使い、依頼を行う際、どのようなバリエーションがありますか。以下の言い方に続き、なるべくたくさん加えてみましょう。

- ・書いていただけますか。
- ・書いていただけませんか。

もっと知りたい人のための豆知識

「くださる系」と「いただく系」の違いに悩まされたことはありませんか。まず、分かりやすいのは、文法上の違いです。「くださる系」は尊敬語であるため、文の主語は相手または第三者であるのに対し、「いただく系」は謙譲語であるため、文の主語は自分または自分側となります。したがって、「先生は私に本を貸してくださいました。」あるいは「私は先生に本を貸していただきました」と言うべきでしょう。

では、次の疑問として、この二つの言い方が両方正しいとして、どちらが丁寧なのでしょうか。蒲谷他（2009）では次のように述べています。

両者の丁寧さの優劣を付けることは非常に難しく、個人の感じ方や表現の焦点をどこに当てるかによって捉え方が違ってきます。焦点を相手（側）の行為に当てるなら「くださる系」を、自分（側）の恩恵に当てるなら「いただく系」を選ぶということになります。基本的には、丁寧さに大きな違いがあるとはいえませんが、ただし、例えば「先生、ご説明くださいますか」と「先生、ご説明いただけますか」というような例で考えると、「くださる系」があくまでも相手の動作として捉えたものであるのに対し、「いただく系」は自分が相手をお願いして説明してもらうという認識が示せるという点で、く相手を動かすのではなく、自分の動作として示すほうが丁寧である」という丁寧さの原理⁵⁶に即した敬語であると考えられることもできます。依頼表現として「くださる系」を用いるか、「いただく系」を用いるかという点では、「いただく系」のほうがより丁寧に感じられることがあるということと関連しているといえるでしょう。

【参考文献】

蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

謙譲語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただく」は、本来どのような性質を持っている

⁵⁶ 丁寧さは、行動と決定権と利益という三つの観点で構造的に説明することができる。こうした丁寧さの構造を「丁寧さの原理」と呼ぶ。詳しくは蒲谷他（2009）『敬語表現ハンドブック』（pp.97-98）を参照。

のかを復習した上で、具体的な場面において、どのように使われ、どのような機能を果たしているのかについて、学習者に考えてもらうこと。

使い方

三つの質問について、最初から教師側から解答を示すのではなく、なるべく学習者が主体的に考え、自ら答えを見つけるよう、ヒントを提供しながら導きましょう。解答例以外の答えも学習者によって示される可能性がありますので、学習者に唯一の正解を与えるのではなく、学習者と一緒によりよい答えを探していくことが、教師に求められる重要な役割だと考えます。

なお、「いただく系」は日本語母語話者の間ではよく使われますが、恩恵意識の違いという母語の影響なのでしょうか、なかなか使い慣れない中国人学習者が多いようです。そのため、特別な注意喚起が必要だといえます。

解答例

質問（1）

「こちらにお名前とご所属を書いていただけます（でしょう）か/お書きいただけます（でしょう）か。」

質問（2）

【形式編】で述べたように、「書いていただく/お書きいただく」は、「自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする」という性質を持っています。後者のほうが高くする性質がより高いです。

質問（3）

学会のスタッフにとって、来場者は高くする必要がある相手です。「書く」のは来場者である相手ですが、「書いてもらう」のはスタッフ自身で、その対象となるのはまた相手となります。そのため、「書いていただく/お書きいただく」に言い換えることで、間接的に相手を高め、来場者に敬意を示したいというスタッフの意識がうかがえます。それと同時に「ありがたい、感謝、うれしい、助かる」といった気持ちも相手に伝わることでしょう。

補足説明

「いただく系」の疑問形である「～ていただけますか/いただけませんか/いただけますでしょうか/いただけないでしょうか/いただけませんか/いただけますでしょうか/いただけないでしょうか/いただけませんか」や「お/ご～いただけますか/いただけませんか/いただけますでしょうか/いただけないでしょうか/いただけませんか」などの形も依頼表現としてよく使われます。丁寧さは順に増しますが、肯

定疑問のパターンより、否定疑問のパターンのほうが、依頼用件が難しい場合に使うことが多いといわれます。恐らくやらしてもらえそうな場合には「～いただけますか」で十分ですが、逆に相当無理な願いをする場合は、「～いただけませんか」を使ったほうが、「無理を知っている上で仕方なく」という気持ちが伝わります。

【課題2】

ねらい

【課題1】同様

使い方

【課題1】同様

解答例

質問（1）

下線部の「ご来店いただく」は、「自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする」という性質を持っています。

質問（2）

店側にとっては、顧客は高くすべき人物なので、敬意を示す必要があることと、顧客の来店がありがたいことであるため、謙譲語の「ご来店いただく」を用いていると思われます。

なお、「来店していただく」も同じ性質を持つため、同じ機能を果たせますが、高くする性質は「ご来店いただく」より弱いため、ここで使うと、多少物足りない感じがします。

質問（3）敬語分類の復習です。

尊敬語：ご来店、お客様、ご遠慮くださる

謙譲語：ご来店いただく、ご案内申し上げる、お願い申し上げる

丁寧語：なっております

丁寧語：ます

補足説明

すべての「敬語表現における敬語」に関わる問題ですが、「語としての敬語」が持つ性質は固定的であるのに対し、「敬語表現における敬語」が果たす機能は、表現主体の意識によって様々で、流動的なものだといえます。実際の場面や文脈に合わせ、具体的に判断しなければならないため、一概にまとめることはできません。したがって、本試案では、「敬語表現における敬語」について記述する際、あくまでもこの場面におけるこの敬語の働き

を表現主体の立場になって推定したものを示します。場面が変わると、別の働きをする可能性があり、それを判断する力は敬語力とつながっているのです、ぜひ学習者自身に学んでもらいましょう。

【課題3】

ねらい

【課題1】同様

使い方

【課題1】同様

解答例

質問(1)

下線部の「お越しいただく」は、「自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする」という性質を持っています。

質問(2)

これは、飲食店が顧客への知らせとなります。書き手である店側にとっては、顧客は高くしなければならない存在なので、「来てもらう」の謙譲語「お越しいただく」を使うことで、その対象となる「顧客の方々」に敬意を示すと同時に、店側として感謝の気持ちも表現されています。

質問(3)

【形式編】の「語としての尊敬語動詞特殊形」でまとめた「来る」の尊敬語に基づき、「お越しいただきました」のほかに、「いらっしゃっていただきました」、「お出でいただきました」、「お見えいただきました」などの言い方も考えられます。ただ間違いではないですが、「お越しいただきました」ほど一般的に使われていないようです。また、「来ていただきました」も言えますが、高くする性質は多少弱いため、物足りない感じがします。そして、「来る」の代わりに「来店」を使い、「ご来店いただきました」もよく耳にする言い方で、「お越しいただきました」との違いはほとんどないと思われれます。

補足説明

【形式編】では、「語としての敬語」に焦点を絞って、敬語の種類や性質、表現形式といった仕組みに関する体系知識を扱います。その一方、【運用編】では、「敬語表現における敬語」に着目し、敬語は実際にどのように使われ、どのような働きをするのかといった

運用面における問題を検討します。従来の教科書では、前者を重視するあまり、後者については十分に考慮されていない傾向が見られますが、本試案ではその両方を考慮に入れます。

蒲谷他(2009)では、「敬語表現」とは、敬語を用いた表現のことであり、これは、敬語を用いて表現するという行為と、その結果としての表現の両者を示す用語であると述べられています。そして、敬語表現においては、人間関係・場・意識・内容・形式という五つの要素が、それぞれ大きな役割を果たし、常にこれら要素の連動の中で敬語表現を捉えていく必要があると指摘されています。

したがって、【運用編】では、【形式編】で紹介した敬語の様々な表現形式を使用例の中で示します。実際にどのような場面(人間関係と場)で使われており、そして表現主体のどのような意図を表し、どのような機能を果たしているのかなど、敬語を運用する際の問題について、学習者に考えてもらうことを目的としています。その際、教師も学習者と一緒に考え、よりよい答えを探すことを期待します。

記述試案例その③ 敬語表現における丁重語動詞特殊形

学習者向けの教科書

【課題1】 下線部の敬語の使い方を確認し、質問に答えてみましょう。

(駅の放送)

間もなく1番線に電車が参ります。危ないですから白線の内側にお下がりください。

間もなく2番線を快速電車が通過いたします。危険ですので白線の内側までお下がりください。

質問(1) 下線部の「参ります」の性質を選んでみましょう。

- A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。
- B 自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする。
- C 高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる。

D 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

質問（2）下線部の「通過いたします」の性質を選んでみましょう。

- A 相手や第三者の行為に用いることで、直接的にその人を高くする。
- B 自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする。
- C 高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。
- D 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

質問（3）下線部の「通過いたします」の代わりに、「ご通過します」または「ご通過いたします」を使うことができますか。その理由についても考えましょう。

【課題2】 次の敬語の使い方について、質問に答えてみましょう。

（初対面の人に自己紹介）

はじめまして。王と（言います→）_____。

中国から（来ました→）_____。

どうぞ、よろしく（お願いします→）_____。

質問（1）下線部について、ふさわしいと思われるを言い方を考えましょう。

質問（2）自分の選んだ言い方の性質について、考えましょう。

質問（3）自分の選んだ言い方は、ここではどのような機能を果たしていると思いますか。

【課題3】 次の敬語の使い方について、質問に答えてみましょう。

(お世話になっている方への残暑見舞い状)

残暑お見舞い申し上げます。

立秋とはいえ、連日の猛暑が(続いている→) _____ が、皆様はいかがお過ごしでしょうか。紅葉の頃にぜひお越してください。今年は鮮やかな色づきが期待できそうですので、私達も楽しみに(している→) _____。

この暑さも当分続きそうですが、くれぐれもご自愛ください。

質問(1) 下線部にふさわしいと思われる言い方を選んでください。

- A 続いています しています
B 続いております しております
C 続いていらっしゃいます いらっしゃいます

質問(2) 自分の選んだ言い方は、どのような性質を持っていますか。

質問(3) 自分の選んだ言い方は、ここではどのような機能を果たしていると思いますか。

質問(4) 下線部以外に、【課題3】に現れている敬語を選び出し、それぞれが持つ性質及び果たす機能について、考えましょう。

【自由研究】

以下の場面において、下線部の言い方は適切なかどうかを考えてみましょう。

場面：鈴木先生の研究室で、田中先生のことを話題にしている。

鈴木先生：いつ田中先生のところに行くの？

学生：明日の午後、参ります。

もっと知りたい人のための豆知識

自分の行為である「連絡する」を敬語で表現したい場合、「連絡します」、「連絡いたします」、「ご連絡します」と「ご連絡いたします」という4種類がありますが、具体的な場面に合わせ、それぞれの違いを見てみましょう。

場面①（会議で課長Aが課長Bに言う）社員に連絡する。→社員に連絡します。

場面②（会議で社員Aが課長に言う）社員Bに連絡する。→社員Bに連絡いたします。

場面③（会議で社員Aが社員Bに言う）課長に連絡する。→課長にご連絡します。

場面④（会議で社員が課長に言う）部長に連絡する。→部長にご連絡いたします。

場面①では、立場が同等である課長同士の会話だと想定しますが、普段もです・ます体で話している可能性もあれば、会議という多少改まった場であるから、丁寧語が選ばれる可能性もあります。第三者の社員を高くする必要がないと思われるため、「連絡します」でよいでしょう。場面②では、話し手の社員Aにとって、聞き手である上司の課長を高くする必要がありますが、第三者である社員Bを高くする必要はありません。そのため、聞き手に丁重に述べるために、「連絡いたします」が適切だといえます。場面③では、話し手と聞き手の人間関係は場面①と類似しますが、第三者である課長は、話し手にとって高める必要のある人物なので、謙譲語の「ご連絡します」が選ばれます。場面④では、話し手と聞き手の人間関係は場面②と同様で、更に話し手は第三者である部長を高める必要があるため、謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱの「ご連絡いたします」が最もふさわしい言い方となります。

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

「来る」の丁重語「参る」と「通過する」の丁重語「通過いたす」の使用例を通して、学習者に丁重語動詞特殊形の性質や謙讓語との区別を復習し、その使い方を身につけてもらうこと。

使い方

四つの質問について、学習者が自ら考え、答えにたどり着くよう、教師が必要に応じて支援しましょう。

解答例

質問（1）

C 高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる。

D 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

質問（2）

C 高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる。

D 聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

質問（3）

できません。「ご通過する」は「通過する」の謙讓語で、「ご通過いたす」は「通過する」の謙讓語Ⅰ＋謙讓語Ⅱの形なので、両方「高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる」という性質を持っていないため。

補足説明

筆者が来日している中国人を対象に行った調査では、【課題1】の使い方に疑問を感じる方が多かったです。「電車に「参る」や「いたす」を使うのは、電車を低くしているの？」と首を傾げます。この疑問を招いたのは、敬語三分法であり、更にいえば丁重語を謙讓語と区別しなかったことだと考えられます。

丁重語の性質で紹介したように、この例では「来る」を「参る」に、「する」を「いたす」に言い換えることで、放送を聞いている乗客に丁重に述べる働きをします。また、丁重語はただ丁重さや改まりを示すだけの性質と機能を持つことから、高める必要のない人物や動物、物事を主語にすることができます。したがって、【課題1】のように、電車を主語にすることができたわけです。

同時に、丁重語は聞き手/読み手に丁重さや改まりを示すため、です・ます体で使うことが必要とされます。例えば、「○（友達に）昨日先生の家に伺った。」は使えますが、「×（先生に）昨日友達の家へ参った」とはいえません。前者は、「先生」を高めますが、友達

に非です・ます体で話すパターンで、問題はありません。後者は「先生」に非です・ます体で話すことになるため、せっかく丁寧語「参る」を使っている意味がなくなります。つまり、丁寧語は丁寧さや改まりを示す必要のある人物（です・ます体で話す人物）に使うもので、非です・ます体で話す人物に使えません。

【課題2】

ねらい

「言う」、「来る」、「願ひする」のそれぞれの丁寧語の使用例を通して、学習者に丁寧語動詞特殊形の性質や謙譲語との区別を復習し、その使い方を身につけてもらうこと。

使い方

三つの質問について、学習者が自ら考え、答えにたどり着くよう、教師が必要に応じて支援しましょう。

解答例

質問（1）申します、参りました、願ひいたします

質問（2）

「申します」は「言う」の丁寧語＋丁寧語の形で、自分や自分側の行為について、聞き手や読み手に対して丁寧にかつ丁寧に述べるという性質を持っている。

「参りました」は「来た」の丁寧語＋丁寧語の形で、自分や自分側の行為について、聞き手や読み手に対して丁寧にかつ丁寧に述べるという性質を持っている。

「願ひいたします」は「願ひする」の謙譲語Ⅰ＋謙譲語Ⅱ＋丁寧語の形で、自分や自分側の行為について、聞き手や読み手に対して丁寧にかつ丁寧に述べるという性質のほかに、間接的に相手や第三者を高くするという性質も持っている。

質問（3）

「申します」と「参ります」は、ここでは自己紹介の聞き手に対して、丁寧さかつ丁寧さを表したいという話し手の意識を示す役割を示している。

「願ひいたします」は、「申します」、「参ります」と同じ機能を果たしているほかに、間接的に聞き手に敬意を示したいという話し手の意識も示しています。

【課題3】

ねらい

「～ている」の丁寧語の使用例を通して、学習者に丁寧語動詞特殊形の性質や果たす機能について考え、その使い方を身につけてもらうこと。そして、ほかの敬語についても復習してもらうこと。

使い方

三つの質問について、学習者が自ら考え、答えにたどり着くよう、教師が必要に応じて支援しましょう。

解答例

質問（１）

B 続いております	しております
-----------	--------

質問（２）

「～ております」は「～ている」の丁寧語＋丁寧語で、高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁寧にかつ丁寧に述べるという性質を持っている。

質問（３）

ここでは手紙の読み手に対して、丁寧さかつ丁寧さを表したいという書き手の意識を示す役割を果たしている。

質問（４）

①「お見舞い申し上げます」：謙譲語＋丁寧語

性質：自分や自分側の行為に用いることで、間接的に相手や第三者を高くする、そして聞き手や読み手に対して丁寧に述べるという二つの性質を持っている。

機能：手紙の読み手に対して、敬意かつ丁寧さを表したいという書き手の意識を示す役割を果たしている。

②「皆様」：尊敬語

性質：相手や第三者に用いることで、直接的にその人を高くする性質を持っている。

機能：手紙の読み手や第三者に対して、敬意を表したいという書き手の意識を示す役割を果たしている。

③「お過ごしでしょうか」：尊敬語＋丁寧語

性質：相手や第三者に用いることで、直接的にその人を高くする、そして聞き手や読み手に対して丁寧に述べるという二つの性質を持っている。

機能：手紙の読み手や第三者に対して、敬意かつ丁寧さを表したいという書き手の意識を示す役割を果たしている。

④「お越してください」、「ご自愛ください」：尊敬語

性質：相手や第三者に用いることで、直接的にその人を高くするという性質を持っている。

機能：手紙の読み手や第三者に対して、敬意を表したいという書き手の意識を示す役割を果たしている。

補足説明

「残暑見舞い状」とは、日頃お世話になっている方々やご無沙汰している方、これからもずっとお付き合いしていきたい大切な方に、立秋（8/7）から8月末までに、送るはがきです。その前に7/20前後の梅雨明けから立秋（8/7）の前日までに送る「暑中見舞い状」もあります。中国ではあまり聞きませんが、日本では時期に合わせ、年賀状や暑中見舞い状、残暑見舞い状を互いに送る習慣があります。

これらのはがきの書き方には、書式があります。【課題3】は残暑見舞い状によく見られる書き方ですが、まず冒頭に「残暑お見舞い申し上げます」と書きます。「お見舞い申し上げます」は、「語としての「お/ご～申し上げる」」で挙げられていますが、自分の行為「見舞う」が向かう先にいる人物、この例でははがきの送り先を間接的に高く位置付ける機能を果たしています。この場合「申す」はあまり使われません。

次に書くのは季語です。「連日の猛暑が続いております」の中に使われている「～ておる」は「～ている」の丁重語で、人間以外の主語となる猛暑に使うことで、はがきの読み手に丁重さを表しています。また、その後「私達も楽しみにしております」と再度現れた「～ておる」も「～ている」の丁重語で、はがきの読み手に丁重さを示す機能も同じですが、ただここでは自分と自分側を主語にしています。つまり、丁重語の主語になれるのは、自分、自分側、高める必要のない人物、動物、事物です。

書く内容としては、季語→先方の安否をたずねる言葉→自身の近況を伝える言葉→先方の無事を祈る言葉という流れが基本ですが、例③のように途中で相手への誘いなどの用件を入れることもできます。

以上、尊敬語動詞「～（ら）れる」、謙譲語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただく」及び丁重語動詞特殊形という三つを例に、「敬語表現における敬語」について、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。従来のもものと比べ、主に以下の4点について、工夫を凝らしてみた。なお、第8、9章の記述試案例と重複するところを省略する（以下同

様)。①学習者が具体的な場面において敬語が使えることを目指すために、従来のように場面が不明な単文を提示するのではなく、明確な場面における談話または文章という形で敬語の使い方を示した。②それぞれの敬語はどのような性質を持っているのか、そして具体的な場面において、どのような機能を果たしているのかを学習者に自ら考え、理解してもらうよう多くの課題を設けた。③学習者に具体的な場面におけるそれぞれの使い分けについて、より深く理解してもらうために、同じ性質も持つ表現形式にも言及し、比較も行った。④中国語話者の視点に立ち、誤解しやすいところや注意したほうがいいところなどについて詳細に記述してみた。

記述試案例その④ 語彙としての敬語化とは

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の説明を読んだ上で、なぜ「語彙としての敬語化」が必要なのかについて、自分の言葉で説明してみましょう。

語彙としての敬語化とは、普通の言葉を敬語に変えることである。

例えば、「言う→（尊敬語）おっしゃる、（謙譲語）申し上げる、（丁重語）申す、（丁寧語）言います」のようなものです。語彙としての敬語化するには、【形式編】で示した各種類の「語としての敬語」が持つ性質を理解し、それぞれの表現形式を覚える必要があります。まず表現形式を正しく覚えなければ、敬語を使うことはできません。つまり、これは敬語を使うこと的前提であり、大事な第一歩となります。

.....

【課題2】 以下の普通の言葉を敬語化してみましょう。穴を埋めてください。

普通の言葉	尊敬語	謙譲語	丁重語	謙譲語 兼謙譲語 II
会う				
ある				

言う				
行く				
いる				
思う				
借りる				
聞く				
着る				
来る				
くれる				
知る				
(～)する				
訪ねる・尋ねる				
食べる・飲む				
寝る				
見る				
もらう				
やる・あげる				
読む				
～ている				
～てくれる				
～てくる/いく				
～てもらう				

～てやる/あげる				
----------	--	--	--	--

【課題3】 例にしたがって、敬語化の練習をしてみましょう。

例：読む→読んでくれる→（尊敬語）先生が読んでくださいます/お読みくださいます

→読んでもらう→（謙讓語）先生に読んでいただきます/お読みいただきます

・ 書く→書いてくれる→（尊敬語）先生が _____ / _____

→書いてもらう→（謙讓語）先生に _____ / _____

・ 話す→話してくれる→（尊敬語）先生が _____ / _____

→話してもらう→（謙讓語）先生に _____ / _____

・ 言う→言ってくれる→（尊敬語）先生が _____

→言ってもらう→（謙讓語）先生に _____

・ 見る→見てくれる →（尊敬語）先生が _____

→見てもらう →（謙讓語）先生に _____

・ 指導する→指導してくれる→（尊敬語）先生が _____ / _____

→指導してもらう→（謙讓語）先生に _____ / _____

・ 利用する→利用してくれる→（尊敬語）先生が _____ / _____

→利用してもらう→（謙讓語）先生に _____ / _____

・ デザインする→デザインしてくれる（尊敬語）先生が _____

→デザインしてもらう（謙讓語）先生に _____

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

本試案が提唱する敬語化三段階の第一段階となる「語彙としての敬語化」について、学習者に理解してもらい、語彙の敬語化ができることの必要性について考えてもらうこと。

使い方

学習者に読ませて終わりではなく、自分の言葉で説明できるかどうか確認しましょう。

補足説明

語彙としての敬語化を行うには、各種類の「語としての敬語」が持つ性質を理解し、それぞれの表現形式を覚える必要があります。例えば、「言う→（尊敬語）おっしゃる、（謙讓語）申し上げる、（丁寧語）申す、（丁寧語）言います」という変形練習ですが、これは従来の日本語教育現場では最も盛んに行われている練習方法だといえましょう。

しかし、このような場面と切り離れた機械的な練習は、具体的な場面における敬語の運用力にはつながりにくいと考えます。従来のように敬語を語彙や文法として扱うのではなく、表現の中で、更にコミュニケーションの中で扱うべきだと本試案では主張します。とはいえ、語彙としての敬語化の練習は全く必要ないとも思っていません。批判したいのは、敬語を語彙や文法としてしか見ておらず、変形練習だけで終わるというやり方です。

表現の中、コミュニケーションの中で敬語を考えるべきだといっても、まず表現形式が分からなければ、何も始まりません。つまり、語彙としての敬語化は敬語を使うこと的前提であり、変形練習は大事な第一歩となります。殊に、海外にいる学習者の場合、母語話者のように日常的に敬語を見聞きする機会はありません。いきなり表現やコミュニケーションの中で敬語を覚えるのは現実的ではないと思われます。もちろん最終的に目指したいのは、表現形式の記憶にとどまらず、適切に敬語を使ってコミュニケーションすることですが、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化と段階を踏んで、学習者に意識し、練習させていきましょう。

【課題2】

ねらい

語彙としての敬語化の練習を通して、以下の動詞の敬語特殊形を学習者に覚えてもらうこと。

使い方

教師側からそのまま解答例を示すのではなく、学習者に自ら考え、答えてもらいましょう。

解答例

普通の言葉	尊敬語	謙讓語	丁寧語	謙讓語 兼謙讓語 II
会う		お目にかかる		

ある			ござる	
言う	おっしゃる	申し上げる	申す	
行く	いらっしゃる お出でになる	伺う	参る	
いる	いらっしゃる		おる	
思う			存じる	
借りる		拝借する		拝借いたす
聞く	お耳に入る	伺う 拝聴する		拝聴いたす
着る	召す お召しになる			
来る	いらっしゃる お出でになる 見える お見えになる お越しになる		参る	
くれる	くださる			
知る	ご存知(だ)	存じ上げる	存じる	
(～)する	(～)なさる		(～)いたす	お/ご～いたす
訪ねる・尋ねる		伺う		
食べる・飲む	召し上がる	いただく		
寝る	お休みになる			
見る	ご覧になる	拝見する		拝見いたす
もらう		いただく 頂戴する		頂戴いたす
やる・あげる		差し上げる		
読む		拝読する		拝読いたす
～ている	～ていらっしゃる		～ておる	
～てくれる	～てくださる お/ご～くださる			
～てくる/いく			～てまいる	
～てもらう		～ていただく お/ご～いただく		
～てやる/あげる		～て差し上げる		

【課題3】

ねらい

語彙としての敬語化の練習を通して、尊敬語の「～てくださる」、「お/ご～くださる」と謙讓語の「～ていただく」、「お/ご～いただく」を学習者に覚えてもらうこと。

使い方

教師側からそのまま解答例を示すのではなく、学習者に自ら考え、答えてもらいましょう。

解答例

- 例：読む→読んでくれる→（尊敬語）先生が読んでくださいます/お読みくださいます
→読んでもらう→（謙讓語）先生に読んでいただきます/お読みいただきます
- ・ 書く→書いてくれる→（尊敬語）先生が書いてくださいます/お書きくださいます
→書いてもらう→（謙讓語）先生に書いていただきます/お書きいただきます
 - ・ 話す→話してくれる→（尊敬語）先生が話してくださいます/お話しくださいます
→話してもらう→（謙讓語）先生に話していただきます/お話しいただきます
 - ・ 言う→言ってくれる→（尊敬語）先生が言ってくださいます
→言ってもらう→（謙讓語）先生に言っていただきます
 - ・ 見る→見てくれる →（尊敬語）先生が見てくださいます
→見てもらう →（謙讓語）先生に見ていただきます
 - ・ 指導する→指導してくれる
→（尊敬語）先生が指導してくださいます/ご指導くださいます
→指導してもらう
→（謙讓語）先生に指導していただきます/ご指導いただきます
 - ・ 利用する→利用してくれる
→（尊敬語）先生が利用してくださいます/ご利用くださいます
→利用してもらう
→（謙讓語）先生に利用していただきます/ご利用いただきます
 - ・ デザインする→デザインしてくれる（尊敬語）先生がデザインしてくださいます
→デザインしてもらう（謙讓語）先生にデザインしていただきます

記述試案例その⑤ 表現における敬語化とは

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の説明を読んだ上で、なぜ「表現における敬語化」が必要なのかについて、自分の言葉で説明してみましょう。

表現における敬語化とは、場面などを考慮し、**表現全体を適切な敬語表現に変えること**である。

例えば、敬語を使いたい相手に「何時に（来る）_____か」と直接に尋ねたい場合、語彙としての敬語化の練習であれば、「来ます」、「来られます」、「見えます」、「お見えになります」、「いらっしゃいます」、「お出でになります」、「お越しになります」のいずれも正解になりますが、表現における敬語化の観点で検討すると、少々複雑になります。表現主体が認識している自分と相手との人間関係や会話が行われる場の雰囲気などの要素によって、最もふさわしい言い方を選ばなければなりません。具体的には、初対面で同年輩の相手と普通に会話する場面なら、丁寧語の「来ます」、あるいは尊敬語の「来られます」で十分だと思われます。年上の相手でもっと高める必要があれば、尊敬語の「見えます」あるいは「いらっしゃいます」を選べばよいでしょう。更に、高くする必要のある先生などの人物なら、「お見えになります」、「お出でになります」、「お越しになります」のほうがより適切だといえましょう。

このように、適切に表現における敬語化するには、**語彙としての敬語化が正しくできる**上で、**人間関係や場、表現意図、伝える内容などの要素と連動して考えなければなりません**。つまり、普通の言葉を敬語にするという語彙としての敬語化の問題は、更に広げて、だれが、だれに、どういう状況で伝えようとするものか、ということまでを考える必要があります。実際の場面で敬語を使う際、語彙としての敬語化できるだけでは不十分で、いくつかの選択肢から、自分が置かれている場面に最もふさわしいと思われる言い方を選ぶという表現における敬語化の力が重要となります。

【課題2】 以下のそれぞれの場面にふさわしい言い方に変えてみましょう。そして、自分の答えについて、持つ性質と果たす機能の観点から説明してみましょう。

(1) (会議でプレゼンテーションをする)

皆さん、手元の資料を見てください。

→

(2) (メールで先生と相談する)

明日、午後3時に研究室に行ってもいい？

→

(3) (新入生歓迎会での自己紹介)

中国の大連から来た李紅だ。

→

(4) (ホームページで美容院の宣伝)

お客さんに満足してもらえるサービスを提供する。

→

(5) (ネットの書き込み)

少子高齢化について、皆さんはどう考えている？

→

(6) (受付が社内の人に伝える)

ABC証券の山田さんが受付で待っている。

→

(7) (結婚式で新郎の謝辞挨拶)

今日は雨の中、私たちの結婚披露宴に出席してくれた皆さんに深く感謝する。

→

(8) (取引先へのお詫び)

今回自分の会社のミスで、迷惑をかけて本当にすまない。

→

(9) (目上の相手の誘いを断る)

せっかく誘ってもらったのにすまないが、また次回ぜひ誘ってもらえると嬉しい。

→

(10) (母親が子供に)

彩ちゃん、掃除が終わったら、ママと一緒に料理しようか。

→

教師向けの指導手引書

【課題 1】

ねらい

本試案が提唱する敬語化三段階の第二段階となる「表現における敬語化」について、学習者に理解してもらい、表現における敬語化できることの必要性について考えてもらうこと。

補足説明

蒲谷他（2010）では、「普通の言葉を敬語にするという敬語化の問題は、さらに広げて、だれが、だれに、どういう状況で伝えようとする 것인가、ということまでを考える必要があります」（p.69）と述べられています。そして、「ただ通常の言葉を語のレベルで敬語化するだけでなく、「人間関係」や「場」に関する認識も含めて適切な敬語化を行い、表現していくことを「敬語表現化」と呼ぶことにします。「敬語表現化」においては、表現全体としてどの敬語化を選ぶか（あるいは選ばないか）ということが大切になります。さらに、敬語だけではなく、敬語ではないが敬語的な言葉や表現を用いることも重要な課題です」（p.70）と指摘されています。

蒲谷他（2010）でいう「敬語化」と「敬語表現化」は、本試案でいう「語彙としての敬語化」と「表現における敬語」に当たります。日本語教科書を見ますと、語彙としての敬語化を練習するための言い換え・書き換え問題が多いのに対し、表現における敬語化の力を鍛えるための練習問題は極めて少ないことが分かります。「だれが、だれに、だれのことを、どこで、どういう状況で、何のために」などが不明な例文や練習問題が散見しており、実際の場面と切り離されている傾向が見られます。「語彙としての敬語化」でも述べたように、敬語の運用力を高めるには、語彙としての敬語化だけでは不十分で、いくつかの選択肢から自分が置かれている場面に最もふさわしいと思われる言い方を選ぶという表現における敬語化の力が問われます。これが敬語の真の難しさだといわれています。

【課題 2】

ねらい

学習者に「だれが、だれに、だれのことを、どこで、どういう状況で、何のために」など、それぞれの場面を確認した上で、表現全体を適切に敬語化できるよう練習させること。

使い方

以下に示す解答例は、あくまでも一つの選択肢にすぎません。答えは唯一ではありません。最初から教師が解答例を示すのではなく、学習者と一緒によりよい答えを探してみましょう。そして、自分の答えについて、ちゃんと説明できるよう学習者に問いかけてみましょう。

解答例

※試案では50問となっていますが、記述試案例(学習者用)では10例を抽出しました。

紙幅の関係で、ここでは、4例の解答例のみ示す。

(1) → 皆様、お手元の資料をご覧ください。

尊敬語：皆さん→皆さま、手元→お手元、見てください→ご覧ください

持つ性質：相手や第三者の行為・状態・物事などに用いることで、直接的にその人を高くする。

果たす機能：会議でプレゼンする場では、たとえ普段非です・ます体で話す相手がいっても、上司や取引先もいる大勢の前なので、「皆様」、「お手元」、そして「ご覧ください」を使うことで、上司や取引先に敬意を示すと同時に、改まった場の雰囲気を作るという機能を果たしていると思われます。

補足：「ご覧になってください」も使えます。両者の違いはほとんどありません。

(2) → 明日、午後3時に研究室にお伺いしてもよろしいでしょうか。

謙讓語：行く→伺う

持つ性質：自分や自分側の行為・物事などに用いることで、間接的に相手や第三者を高くする。

果たす機能：先生に敬意を示すために、自分の「行く」という行為を謙讓語の「伺う」に表現における敬語化しています。【形式編】で述べているように、「お伺いする」が定着したことで、「伺う」を物足りないと感じる人が多くなっているようです。

補足：許可を求める際に使う「～でもいい？」を「～てもよろしいでしょうか」に表現における敬語化しています。「☞ 表現における敬語化とは」で述べているように、「よろしい」は改まり語で、そして「～ですか」より「～でしょうか」のほうがより丁寧に聞こえ

ます。更に、談話の場合、同じ「明日」でも、「あした」と発音するより「あす/みようにち」と発音したほうが丁寧に聞こえます。

なお、「行く」の「参る」を使う意見もあるかもしれませんが、丁重語の「参る」は先生を高くする性質を持っておらず、ただ丁重さを伝えるだけなので、ここでは少々物足りない感じがします。

(3)→中国の大連から参りました李紅でございます。

丁重語：来る→参る

持つ性質：自分や自分側の行為・物事、または高める必要のない物事について、聞き手や読み手に対して丁重に述べる。

果たす機能：新入生歓迎会での自己紹介は、知り合っていない複数の聞き手を対象に行われることが多いため、丁重さを示すという機能を果たしていると思われます。

丁寧語：だ→でございます

持つ性質：聞き手や読み手に対して丁寧に述べる。

果たす機能：丁重語に合わせ、丁寧に話しているという表現主体の意識がうかがえます。

補足：「参りました」の代わりに「来ました」を使うこともできますが、丁重さが消えます。また、「でございます」の代わりに、「と申します」を使うと、丁寧さの代わりに丁重さが加わりますが、「です」を使うと、丁寧さが多少弱まります。

(10)→彩ちゃん、お掃除が終わったら、ママと一緒に料理をしようか。

美化語：掃除→お掃除、料理→お料理

持つ性質：物事や言葉をきれいに、または上品にする。

果たす機能：自分の言葉をきれい、上品にしたいという表現主体の意識がうかがえます。

補足：「お掃除」も「お料理」も尊敬語の名詞としても使えますが、ここでは、子供を高める必要はないため、美化語の使い方になります。

記述試案例その⑥ ☞ コミュニケーションにおける敬語化とは

学習者向けの教科書

【課題1】 以下の説明を読んだ上で、なぜ「コミュニケーションにおける敬語化」が必要なのかについて、自分の言葉で説明してみましょう。

コミュニケーションにおける敬語化とは、コミュニケーションにおいては相手とのやりとりに応じ、語彙としての敬語化、表現における敬語化を行うことである。

例えば、先生の研究室を訪ね、クラスの遠足に誘う場面における以下のやりとりを考えてみましょう。

学生：先生、今よろしいでしょうか。

先生：あ、李さん、何でしょうか。

学生：(クラスのみんなで中山公園へ遠足に行くことを伝え、先生を誘う)

実は今度クラスのみんで、中山公園へ遠足に行きたいんですが、先生もいらっしやいませんか。

先生：中山公園ですか。いいですね。いつですか。

学生：(先生の都合に合わせることを伝えた上で、先生の都合を聞く)

先生のご都合のいい時にしたいと思います、いつがよろしいでしょうか。

先生：そうですね。来週の土曜日なら大丈夫ですよ。

学生：(来週の土曜日に決定し、クラスのみんに伝えることを表明する)

では、来週の土曜日にしましょう。早速、クラスのみんに伝えます。

先生：誘ってくれてありがとう。楽しみです。

学生：(感謝の気持ちを表し、みんなが喜ぶことを伝える)

ありがとうございます。みんなもきっと喜ぶと思います。

この例のように、あらかじめ予測できない先生とのやりとりの中で、適切に敬語を用い、コミュニケーションを行う必要があります。敬語化するかどうか、どの敬語を使うのかは、表現主体が決めることであり、もちろん個人差も否定できません。この意味では、【認識編】で述べたように、敬語は自らの気持ちに即して主体的に言葉を選ぶ「自己表現」として使用するものだといえます。

日常生活における敬語使用は、話し手/書き手による一方通行ではなく、聞き手/書き手とのやりとりの中で行われるため、コミュニケーションの中で敬語を扱う観点も次第に必要となってきます。相手とのやりとりに応じてコミュニケーションを考え、作っていくこと、あらかじめ決めておいた言葉ではなく、コミュニケーションにおける諸要素とその要

素の動きに応じ、適切に対応していくこと、その中で敬語と敬語表現をどのように表現・理解するかということが重要となります。

語彙としての敬語化においては、普通の言葉を敬語にする練習をしました。表現における敬語化においては、人間関係や場、表現意図、表現内容などに合わせ、表現全体を敬語化する練習をしました。コミュニケーションにおける敬語化においては、相手とのやりとりに応じながら、コミュニケーションを敬語化する練習をします。

【課題2】クラスでの個人発表

() 内の説明を参考に、下線部の言い方を考えましょう。

(日本語の授業で、先生とクラスメートの前で5分間スピーチをした後、3分間質疑応答を行う。)

先生：では、今日の発表者は王明さんです。よろしくお願ひします。

王明：(教室の前に出て、挨拶してから、発表テーマを述べる)

学生：お願ひします。

王明：(新しい用語の意味について、聞き手に確認する)

学生：(分からない顔をする)

王明：(配布資料を見るよう指示し、新しい用語の説明を行う)

【発表内容を省略】

王明：(スピーチを終わらせ、質問を呼びかける)

学生：(感想を述べた後、質問する)

王明：(質問を受け、回答する)

【回答内容を省略】(ほかに質問はないか確認する)

学生：(感想を述べた後、ある箇所についてもっと詳しい説明を求める)

王明：(質問を受け、回答する)

【説明内容を省略】(ほかに質問はないか確認する)

先生：事前に色々調べてとてもよかったです。では、私のほうから一つ質問したいと思います。【質問内容を省略】

王明：(質問を受け、今後の課題とすることを伝える)

先生：分かりました。では、時間になりましたので、王明さんの発表はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

学生：(拍手)

王明：(感謝の言葉を述べる)

【課題3】お礼状メール

自分の状況に合わせて、以下の説明を参考に、メールを書いてみましょう。

(インターンシップが終わり、お世話になった担当者宛に、以下の内容を入れてメールを送る。)

- ・冒頭のあいさつ。
 - ・お礼を言う。
 - ・勉強になったことや具体的な感想などを述べる。
 - ・重ねてお礼を表し、結びの挨拶を言う。
-

教師向けの指導手引書

【課題1】

ねらい

本試案が提唱する敬語化三段階の第三段階となる「コミュニケーションにおける敬語化」について、学習者に理解してもらい、コミュニケーションにおける敬語化できることの必

要性について考えてもらうこと。

補足説明

語彙としての敬語化においては、普通の言葉を敬語にする練習をしました。表現における敬語化においては、人間関係や場、表現意図、表現内容などに合わせ、表現全体を敬語化する練習をしました。コミュニケーションにおける敬語化においては、相手とのやりとりに応じながら、コミュニケーションを敬語化する練習をします。例のように、あらかじめ予測できない先生とのやりとりの中で、適切に敬語を用い、コミュニケーションを行う必要があります。敬語化するかどうか、どの敬語を使うのかは、表現主体が決めることであり、もちろん個人差も否定できません。この意味では、【認識編】述べたように、敬語は自らの気持ちに即して主体的に言葉を選ぶ「自己表現」として使用するものだといえます。

コミュニケーションにおける敬語化の力を育成する方法として、コミュニケーションにおいて敬語の使い方を示したり、やりとりの中でコミュニケーションにおける敬語化を練習させたりといった記述がまず求められます。しかし、中国の日本語教育現場で使用されている日本語教科書を見ますと、敬語が使われている会話例は本文の一つか二つしかなく、語彙としての敬語化を練習するための言い換え・書き換え問題がほとんどであることが分かります。「だれが、だれに、だれのことを、どこで、どういう状況で、何のために」などの情報が分かるような表現における敬語化を意識した説明や練習はあまり見られず、相手とのやりとりにおけるコミュニケーションにおける敬語化の観点に基づいた説明や練習はますます少ないです。

この現状では、「表現形式が分かっているけど、どう使うのか分からない」、すなわち「語彙としての敬語化ができて、表現における敬語化、更にコミュニケーションにおける敬語化はできない」という学習者の悩みを引き起こしてしまいます。実際筆者が行ったインタビューでもそう語る学習者や現場教師が多かったです。この悩みを改善するために、本試案では中国の大学にいる日本語学習者にとって、比較的に実用性の高いと予想される場面を選定し、コミュニケーションにおける敬語化の練習を行います。

なお、蒲谷他（2010）によると、実際のコミュニケーションでは、自分で考え、自分で選び、自分で決めていく、それは言葉の選択だけではなく、表情も、態度も、服装も、電話かメールかも、色々なことをすべて考慮しながら、判断していく必要があります。確かにコミュニケーションにおける非言語的な要素も大事な役割を果たしています。ただ、本試案ではまず言葉に注目し、言語的な部分を中心に検討することにします。

【課題2】

ねらい

学習者にとって、馴染みのある授業における発表場面を取り上げ、そこで展開されるやり取りの中で、学習者が人間関係や場などを考慮しながら、適切に敬語を使う能力を育成すること。

使い方

以下に解答例を示しますが、あくまでも一つの選択肢にすぎません。答えは唯一ではありません。最初から教師が解答例を示すのではなく、学習者の答えに耳を傾け、学習者と一緒によりよい答えを探してみましょう。そして、自分の答えについて、ちゃんと説明できるよう、学習者に問いかけてみましょう。

解答例

先生：では、今日の発表者は王明さんです。よろしくお願いします。

王明：(教室の前に出て) 皆さん、おはようございます。王明でございます。本日は「(発表のテーマ)」について発表いたします。よろしくお願いいたします。

学生：お願いします。

王明：皆さんは「(新しい用語)」という言葉の意味をご存知ですか。

学生：(分からない顔をする)

王明：お手元の資料をご覧ください。まず「(新しい用語)」について説明いたします。

【発表内容を省略】

王明：これで発表を終わります。ご質問、ご意見、よろしくお願いいたします。

学生：ご発表、ありがとうございました。とても勉強になりました。一つだけお聞きしたいんですが【質問内容を省略】

王明：ご質問、ありがとうございます。【回答内容を省略】ほかにいかがでしょうか。

学生：興味深いご発表、ありがとうございます。「(分からないところ)」についてもう少し詳しく説明していただけますか。

王明：ありがとうございます。では、説明いたします。【説明内容を省略】ほかによろしいでしょうか。

先生：事前に色々調べてとてもよかったです。では、私のほうから一つ質問したいと思います。【質問内容を省略】

王明：ご質問、ありがとうございます。先生のおっしゃるとおり、私もそれについて疑問に思っております。今後の課題として調べてみたいと思います。

先生：分かりました。では、時間になりましたので、王明さんの発表はこれで終わりにしましょう。ありがとうございました。

学生：(拍手)

王明：ご清聴、ありがとうございました。

【課題3】

ねらい

高学年段階の学習者にとって、役に立つと思われるメールの書き方を取り上げます。学習者が人間関係や場などを考慮しながら、敬語を使って適切にメールを書く練習をすること。

使い方

メールの内容に関しては、細かく指定していないため、学習者が実際に書きたいことを書いてもらいましょう。学習者の意思を尊重し、練習のためだけでなく、自分の実際に置かれている状況に基づき、学習者が本当の気持ちになって、敬語を使ってメールを書いてもらいましょう。

解答例

以下に解答例を示しますが、学習者からは異なる内容のメールが提出されることを想定し、解答例を参考程度にしましょう。そして、自分の選んだ言い方について、ちゃんと説明できるように、学習者に問いかけてみましょう。

以上、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化という三段階に分け、教科書と教師用指導書における扱い方を考案してみた。学習者が段階を踏み、徐々に敬語を使うことに慣れていくよう本試案を活用してもらいたい。なお、繰り返しとなるが、本試案の解答例は唯一の解答ではなく、学習者より出された異なる解答を教師も一緒に考え、ともに学び、よりよい解答を探していくことを期待したい。それが本研究の求める教師の役割であり、教師の成長にもつながると考えられる。

第 11 章 教科書における敬語の新たな記述に対する現場教師のフィードバック

本章では、研究【課題 6】（本研究が提案する敬語教育の改善案（教科書における敬語の新たな記述）について、現場教師からはどのようなフィードバックが得られるのか）を明らかにすることを目的とする。まず、第 1 節では、フィードバック調査の概要について説明する。第 2 節では、フィードバック調査で得られた教師たちの意見を示す。第 3 節では、明らかになったことや気づいた反省点、及び今後の課題など、フィードバック調査から得られた示唆について述べる。

第 1 節 フィードバック調査の概要

本研究では、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の改善を目指すためには、まずは教科書における敬語の扱い方を再考すべきだと主張し、第 8 章から第 10 章にわたって再考するための提案を行った上で、新たな記述試案例も示した。本章では、第 8 章から第 10 章の記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師たちに見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得るための調査を行った。第 1 節では、その概要について説明したい。

11.1.1 調査目的

本章のフィードバック調査では、主に次の 2 点を目的とする。

- 【1】本研究が考案した敬語に関する新たな記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師に見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得る。
- 【2】記述試案例に対する現場教師のフィードバックを分析し、評価されたところや気づいた反省点をまとめ、今後敬語の新たな記述を模索するための課題を検討する。

11.1.2 調査期間と調査協力者

2015 年 8 月～10 月に、中国各地（北京、上海、天津、広州、西安、山東、大連、深圳、秦皇島）の大学で、日本語専攻教育現場に携わっている中国人教師 9 名に調査に協力してもらった。以下では調査協力者 C4-01～C4-09 と名付ける。なお、調査協力者全員は知人

を通して依頼した人で、調査者とは特に面識がない。

11.1.3 調査手順

フィードバック調査は、主に以下の六つのステップを踏んで、実施した。

- ステップ① 調査実施の前に、早稲田大学大学院日本語教育研究科設置の研究調査倫理委員会に申請を行い、承認を受けた。
- ステップ② 知人に依頼し、9名の調査協力者を集め、彼らに研究目的・内容・方法などについて丁寧に説明し、調査協力の承諾をもらった。
- ステップ③ 9名の調査協力者にそれぞれ電子メールにて、調査概要説明、本研究が考案した敬語に関する新たな記述試案の全体目次と試案例（学習者向けと教師向けの2種類）、及びインタビュー調査の質問シートを送付した。
- ステップ④ 約1週間の間、敬語に関する新たな記述試案例を読んでもらった後、質問シートに基づき、評価や感想、助言などについて考えてもらい、簡単に記入してもらった。
- ステップ⑤ インタビュー調査の質問シートに記入されたことに基づき、スカイプにて、フォローアップインタビュー調査を行った。
- ステップ⑥ 質問シートに記入されたこととインタビュー調査の内容を録音し、文字化したものを分析データとした。

11.1.4 調査内容

調査内容として、次の5種類の資料を用いた。①調査概要説明、②記述試案の全体目次、③学習者向けの教科書記述試案例、④教師向けの指導手引書記述試案例、⑤インタビュー調査の質問シート。③と④に関しては、第8章～第10章で示している記述試案例をそのまま使用したため、ここでは省略する。①の調査概要説明は、以下のものである。

はじめに 調査にご協力いただく教師の皆さんへ

日々の教育活動において、敬語学習や敬語指導について、何か感じることはありますか。筆者の場合、中国の大学で日本語を専攻として4年間学んだ後でも、敬語に強い苦手意識を抱えていました。卒業後、自分が教壇に立ち、敬語を指導する立場になると、なかなかうまく教えられず、ずい

ぶん悩まされました。その後、周りの教師に話を聞いても、筆者と似た悩みを持つ人が多く、改善したくてもどうすればよいのか分からないという声が多かったです。例えば、以下のような悩みをよく耳にします。

- ・母語の中国語には、日本語のような体系的な敬語は存在しないため、学習者は敬語に対する意識が低く、その必要性和重要性には気づきにくい。

- ・普段の大学生活において、タメ口またはです・ます体でカバーできることがほとんどであるため、学習者の尊敬語や謙譲語を学習するモチベーションが上がらない。

- ・尊敬語や謙譲語など、バリエーションが多く、複雑な表現形式に嫌悪感と抵抗感を持つ学習者が多く、覚えさせても、なかなか定着しない。

- ・言い換え・書き換え練習を繰り返し、一時的に表現形式を覚えさせたとしても、様々な場面で適切に使えるレベルには、なかなかならない。

- ・教師としての自分自身も敬語に自信が持てないため、各バリエーションの使い分けなどについて、学習者に質問されてもうまく答えられない。

- ・敬語の定義や分類などに関する説明は、教科書によっては異なるため、「丁寧語」、「美化語」に関する説明はうまくできない。

- ・教科書における敬語に関する説明や練習問題などは、表現形式に重点を置く傾向があるため、学習者が敬語が使えるような工夫が少ない。

- ・授業時間が限られているため、どうしても教師による一方的な教え込みが主流になってしまい、学習者の主体性を重んじる余裕はない。

以上の悩みについて、皆さんはどう思いますか。共感できるものがありましたか。どのように乗り越えましたか。それとも改善方法が見つからず、目を背け続けていますか。筆者が中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師を対象に行った調査では、多くの現場教師は、上述した悩みを抱えつつも、いい改善案がなかなか見つからず、諦めて、最終的に大学から指定された教科書どおりに敬語を指導しているという。「とりあえず教科書どおりに指導すれば、一番無難なので」という意見が多かったです。

一見すると問題のなさそうに見えるこの教え方ですが、本当にこれで問題解決になるのでしょうか。実はそこには大きな落とし穴があるということが、筆者の行った教科書の分析調査で明らかとなりました。中国の大学日本語専攻教育現場で広く使われている教科書（7種類全27冊）、及び教科書に対応する教師用指導書（4種類全16冊）を分析対象とし、それぞれから敬語に関する記述をすべて抽出し、分析・考察を行いました。その結果、様々な問題点と不足点が確認され、それらが

上述した数々の悩みと深く関わっていることが判明しました。

例えば具体的には、敬語の必要性と重要性に関する記述は、どの教科書においてもあまり扱われていないですし、教科書における敬語に関する記述は、形式面ばかりが重視されており、運用面に関しては、あまり考慮されていません。また各教科書を見ると、「丁寧語」に関する説明は、十分に行われておらず、「丁寧語」と「美化語」を混同している傾向が見られますし、学習者が主体的に敬語を学べるような材料は、現行の教科書からは全くないといっていいほど見つかりません。

したがって、教科書に頼って敬語を教えるというやり方は、教科書の不備をそのまま現場に広げていくことになり、その結果、上述した数々の悩みにつながっているのではないかと思います。すなわち、教師自身も敬語に自信が持てず、敬語教育に苦手意識を持つ→教科書に頼って、そのまま敬語を教える→さまざまな問題点が生まれてくる→なかなか改善できず、ますます苦手意識を持つ→ますます教科書に頼ってしまうという循環に陥っている傾向が、中国における日本語の敬語教育からは見られるのではないかと推察されます。

そこで、筆者は、敬語教育の改善を目指すためには、まずは現場教師が拠り所としている教科書に着目すべきだと考えました。つまり、現行の教科書における敬語に関する記述を見直し、少しでも敬語教育の改善につながるよう敬語の扱い方を改めるべきだと提案したいです。

では、現行の教科書における敬語の扱い方には、具体的にはどのような問題点が存在しているのでしょうか。筆者の行った調査（元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から）の結果を踏まえ、大きくいえば、以下の四つを指摘しました。（１）敬語とは何か、その必要性と重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している。（２）敬語の分類や各種類の敬語の性質、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い。（３）各敬語項目の文法説明や練習問題は、「誰が誰にどこで何のために」といった運用面を考慮した記述が行われていない。（４）教師主導で知識伝授型の敬語教育に適する記述が散見され、学習者の主体的・自律的学びを考慮する記述は見られない。

少し説明を加えると、（１）は敬語に対する認識に関わる問題で、「敬語はいつも敬意を表すものなのか」、「敬語が使えることのメリット、または使えないことによるデメリットは何なのか」などの困惑点につながります。（２）は形式面レベルの問題で、「一体敬語は何種類あるのか」、「丁寧語とは何か」、「「お/ご～になる」はすべての動詞に適用できるのか」などの疑問と関わります。（３）は運用レベルの問題で、「表現形式を覚えても、実際の場面で敬語をスムーズに使えないのはなぜなのか」、「どの程度の敬語を使うべきなのか、それぞれのバリエーションの使い分けが分からない」などの困難点に関係しています。（４）は（１）、（２）、（３）にまたがる問題で、「授業で一方向的に

敬語を教え込まれても、すぐに忘れてしまい、使えるようにはならない」といった学習者の声と結び付いているのではないかと考えます。

以上を踏まえ、筆者は上述した四つの問題点を補うような敬語に関する新たな記述を提案したいと考え、実際にその試案の執筆を試みました。この調査では、ご協力いただく教師の皆さんに、ご自身の教育経験を踏まえた上で、試案の一部を読んでいただきたいです。そして、別紙の質問シートにご評価やご感想、ご助言などについて、ご自由にご回答いただきますようお願いいたします。

なお、筆者が考案した試案は全4章（【認識編】・【形式編】・【運用編】・【練習編】）で構成されており、分量が多いため、本調査ではまず全体の目次を示した後、各章から代表となる一部を抽出し、合計16個の試案例を取り上げます。各試案例は「学習者向けの教科書」と「教師向けの指導手引書」という2部に分けられており、前者では教科書をイメージし、学習者に基本的な説明を行いながら、様々な課題を設定し、それを学習者が主体的にクリアすることで、敬語について自ら考え、学ぶことを目指します。一方、後者では教師用指導手引き書の形を想定し、課題の解答例のほか、学習者の主体的な学びを支援するために、教師が指導する際参考になると思われるポイントを示しています。

従来の教科書に見られる問題点を改善することを目的としているため、本試案における敬語に関する記述は、皆さんが普段使い慣れているものとは異なるところが多々あります。主に中国の大学で日本語を専攻として学ぶ学生を対象としています。使い方としては、以下の2パターンが考えられます。①1・2年次で、精読など敬語を扱う授業で、補助教材として用いる。②3・4年次で、敬語に関連する専門授業で、主教材として用いる。

現場に携わっている皆さんの試案例に対する貴重な声を集め、分析・考察を行い、その結果を試案の修正に活かし、最終的には教材及びそれに対応する教師用指導手引き書として出版したいと考えています。中国の日本語教育現場で行われている敬語教育の改善に貢献できるような教材開発を目指します。そのためには、教育の当事者である皆さんのお知恵が不可欠であると考えます。ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

次に、②記述試案の全体目次については、第8章から第10章において、三つに分けてそれぞれの部分を示しているが、ここで調査協力者に添付した目次の全体像を開示する。

目 次

はじめに 本書の目指したい敬語教育とは—

第1部 【認識編】—敬語の基本認識について

☞ 日本語の敬語とは→→→記述試案例その①

☞ 日本語の敬語の特徴

☞ 中国語の敬語と日本語の敬語→→→記述試案例その②

☞ 敬語は必要なのか→→→記述試案例その③

☞ 敬語は重要なのか

第2部 【形式編】—「語としての敬語」について

☞ 敬語五分法→→→記述試案例その①

☞ 尊敬語とは→→→記述試案例その②

【1】語としての尊敬語動詞特殊形

【2】語としての尊敬語動詞「～(ら)れる」

【3】語としての尊敬語動詞「お/ご～になる」→→→記述試案例その③

【4】語としての尊敬語動詞「お/ご～だ」

【5】語としての尊敬語動詞「お/ご～なさる」

【6】語としての尊敬語動詞「お/ご～くださる」

【7】語としての尊敬語形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」

【8】語としての尊敬語形容動詞「お/ご～」と「(お/ご)～でいらっしゃる」

【9】語としての尊敬語副詞「お/ご～」

【10】語としての尊敬語名詞「お/ご～」

【11】語としての尊敬語名詞接頭辞「御・貴・玉…」と接尾辞「様、方、殿…」

【12】語としての尊敬語名詞「～でいらっしゃる」

☞ 謙讓語とは→→→記述試案例その④

【1】語としての謙讓語動詞特殊形

【2】語としての謙讓語動詞「お/ご～する」

【3】語としての謙讓語動詞「お/ご～申し上げる」

【4】語としての謙譲語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただく」

【5】語としての謙譲語動詞「～(さ)せていただく」→→→記述試案例その⑤

【6】語としての謙譲語名詞「お/ご～」

☞ 丁重語とは→→→記述試案例その⑥

【1】語としての丁重語動詞特殊形→→→記述試案例その⑦

【2】語としての丁重語名詞接頭辞「愚・小・拙・弊…」

☞ 謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱとは

【1】語としての謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱ動詞特殊形

【2】語としての謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱ動詞「お/ご～いたす」

☞ 丁寧語とは

【1】語としての丁寧語「～です・ます」

【2】語としての丁寧語「～であります・ございます」

☞ 美化語とは

【1】語としての美化語「お/ご～」

第3部【運用編】—「敬語表現における敬語」について

☞ 尊敬語

【1】敬語表現における尊敬語動詞特殊形

【2】敬語表現における尊敬語動詞「～(ら)れる」→→→記述試案例その①

【3】敬語表現における尊敬語動詞「お/ご～になる」

【4】敬語表現における尊敬語動詞「お/ご～だ」

【5】敬語表現における尊敬語動詞「お/ご～なさる」

【6】敬語表現における尊敬語動詞「お/ご～くださる」

【7】敬語表現における尊敬語形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」

【8】敬語表現における尊敬語形容動詞「お/ご～」と「(お/ご)～でいらっしゃる」

【9】敬語表現における尊敬語副詞「お/ご～」

【10】敬語表現における尊敬語名詞「お/ご～」

【11】敬語表現における尊敬語名詞接頭辞「御・貴・玉…」と接尾辞「…様、方、殿」

【12】敬語表現における尊敬語名詞「～でいらっしゃる」

☞ 謙讓語

【1】敬語表現における謙讓語動詞特殊形

【2】敬語表現における謙讓語動詞「お/ご～する」

【3】敬語表現における謙讓語動詞「お/ご～申し上げる」

【4】敬語表現における謙讓語動詞「～ていただく」、「お/ご～いただく」 →→→記述試案例その②

【5】敬語表現における謙讓語動詞「～(さ)せていただく」

【6】敬語表現における謙讓語名詞「お/ご～」

☞ 丁重語

【1】敬語表現における丁重語動詞特殊形 →→→記述試案例その③

【2】敬語表現における丁重語名詞接頭辞「愚・小・拙・弊…」

☞ 謙讓語 I 兼謙讓語 II

【1】敬語表現における謙讓語 I 兼謙讓語 II 動詞特殊形

【2】敬語表現における謙讓語 I 兼謙讓語 II 動詞「お/ご～いたす」

☞ 丁寧語

【1】敬語表現における丁寧語「～です・ます」

【2】敬語表現における丁寧語「～であります・でございます」

☞ 美化語

【1】敬語表現における美化語「お/ご～」

第4部 【練習編】—敬語化の三段階について

☞ 語彙としての敬語化とは →→→記述試案例その④

【1】練習①穴埋め問題—動詞特定形

【2】練習②言い換え・書き換え練習—授受補助動詞

【3】練習③穴埋め問題—「～(ら)れる」

【4】練習④言い換え練習—「お/ご～になる」

【5】練習⑤穴埋め問題—「お/ご～(だ)」

【6】練習⑥穴埋め問題—「～される/～なさる/ご～なさる/ご～になる」

【7】練習⑦言い換え練習—「お/ご～する」、「お/ご～いたす」

【8】練習⑧穴埋め問題—「お/ご～する」、「お/ご～いたす」、「お/ご～申し上げる」

【9】練習⑨言い換え練習—「～(さ)せていただく」

【10】練習⑩言い換え練習—名詞「お/ご～」

【11】練習⑪言い換え練習—形容詞「お～」と「(お)～くていらっしゃる」、形容動詞「お/ご～」と「(お/ご)～でいらっしゃる」、副詞「お/ご～」

【12】練習⑫穴埋め問題—改まり語

☞ 表現における敬語化とは→→→記述試案例その⑤

【1】練習①それぞれの場面における敬語表現を考えましょう。

☞ コミュニケーションにおける敬語化とは→→→記述試案例その⑥

【1】クラスでの個人発表

【2】先生への欠席メール

【3】懇親会における司会

【4】先生への手紙

【5】初対面における自己紹介

【6】お礼状メール

【7】就職活動の面接

【8】指導教授とのコンタクトメール

【9】送別会における挨拶

【10】先生への内定報告

そして、⑤インタビュー調査の質問シートは、以下の通りである。なお、その使い方として、次のようになっている。まずは記述試案例を読んでもらった後、インタビュー調査を実施する前に、各質問項目に対する回答について、要点まとめて書いてもらった⁵⁷。次に、インタビュー調査を実施する際、自分の書いたことに基づき、評価や感想、助言などについて詳しく述べてもらった。最後に、インタビュー調査が終わった後、再度自分の書いたことを読んでもらい、補足などないか確認・整理の上、メールにて質問シートを提出してもらった。

⁵⁷ 箇条書きでもよい。そして中国語でも日本語でもかまわない。

インタビュー調査の主な質問項目

【1】学習者向けの教科書記述し試案例について

- 質問① 本記述試案例について、全体的にどう思いましたか。
(例えば、学習者にとって分かりやすいかどうかなど)
- 質問② 質問①の回答について、具体的にお聞かせください。
(例えば、どこが分かりやすかったか、または分かりにくかったかなど)
- 質問③ ご自身が把握している学習者の敬語による困惑点や困難点について、本記述試案では扱われていると思いますか。
- 質問④ 質問③の回答について、具体的にお聞かせください。
(どういうところは扱われていて、または扱われていないのかなど)
- 質問⑤ 現在使っている教科書における敬語に関する記述については、どう思っていますか。
(例えば、満足しているかどうか、問題点や不足点があるかどうかなど)
- 質問⑥ 質問⑤の回答を踏まえ、敬語を教える際、どのような教材を望んでいますか。本記述試案を使ってみようと思いますか。
- 質問⑦ 本記述試案について、修正や改善すべきところなど、感想や意見があれば、自由にお話してください。

【2】教師向けの指導手引書記述試案例について

- 質問① 本記述試案例について、全体的にどう思ったのか。
(例えば、教師にとって使いやすいかどうかなど)
- 質問② 質問①の回答について、具体的にお聞かせください。
(例えば、どこが使いやすかったか、または使いにくかったかなど)
- 質問③ ご自身が敬語を指導する際、感じている困惑点や困難点について、本記述試案では扱われていると思いますか。
- 質問④ 質問③の回答について、具体的にお聞かせください。
(どういうところは扱われていて、または扱われていないのかなど)
- 質問⑤ 現在敬語を指導する際、指導手引書を使っていますか。
使っているものについて、どう思っていますか。使わない方は、理由を教えてください。
- 質問⑥ 質問⑤の回答を踏まえ、敬語を教える際、指導手引書を使う必要があると思いますか。本記述試案を使ってみようと思いますか。
- 質問⑦ 本記述試案について、修正や改善すべきところなど、感想や意見があれば、自由にお話してください。

第2節 フィードバック調査の結果

フィードバック調査は9名であったが、インタビューを通して、様々な意見を得ることができた。第2節では、質問項目順にフィードバック調査で得られた教師の評価や感想、助言を紹介する。

11.2.1 学習者向けの教科書記述試案例について

七つの質問に対する調査協力者の回答をまとめると、以下のようになる。なお、より詳しく正確な情報を得るために、インタビューは調査者と調査協力者の母語である中国語で行った。調査協力者の語りを整理・理解した上で、質問シートに記入されたことと合わせ、その要点をまとめたものを以下に示す⁵⁸。

[1] 記述試案例に対する全体的な印象

まず、学習者向けの教科書記述試案例を読んだ後、全体的な印象として、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。

C4-01 さん

形式はとても斬新で、設計のアイデアも十分盛り込まれており、かなりの工夫がうかがわれる。啓発型・探求型の練習が多く、学習者の好奇心を喚起しやすい。

説明も丁寧に行われており、練習問題に使っている例文もとても実用的なものが多い。敬語に関する知識は全面的にカバーしており、練習問題も多く、とてもよかった。敬語が学べるだけでなく、読解力（例えば、日本語で書かれている説明文を読む）や作文力（例えば、自由記述型練習の解答を書く）、コミュニケーション力（例えば、意見を収集するためにインタビュー調査を実施する）など、日本語能力を全体的に高めることもできる教科書となっている。特に、教師側から与えるのではなく、学習者が自ら調べたり、まとめたりしなければならない課題がほとんどであるため、学習者の主体性と好奇心を引き起こすことができると予想される。

C4-02 さん

内容が分かりやすく、構造上段階を踏んで進んでいるので、とてもよかった。まずは学習者の

⁵⁸ 中国語による回答が多いため、以下に引用する内容は、筆者が翻訳したものである。

感性的な認識を育成した上で、理性的な分析を行うという考案は素晴らしい。これは現行の教科書には見られない特徴で、分かりやすかった。

C4-03 さん

【認識編】・【形式編】・【運用編】・【練習編】という四つの部分から構成されており、とても分かりやすかった。教材として構想も明確で、構造も充実しており、精緻に設計されているという印象を受けた。内容も分かりやすく、学習者にとって学びやすいと思う。そしてどのような場面でどのように敬語を使うべきなのかも示しているので、学習後直接使うことができると思われる。私の見ている限りでは、類似した教材はまだ見当たらない。

特に、それぞれの用例に場面の説明もついており、イメージしやすく、とても的確だ。学習者にとって遭遇・想像しやすい場面が多く、日常生活において、様々な場面において、どのように敬語が使えばよいのかを示しているので、学習者に実際の場面に合わせて、表現形式を選ばなければならないということを気づかせることができる。

C4-04 さん

中国国内では、敬語に関する参考書はまだまだ少なく、文法書の一部として、簡単な説明しか載っていない。こんなに詳細に紹介している教材は、まだ見たことがない。学習者が本試案を使って、敬語を学べば、敬語に対する理解を深め、意識を高めることができると思う。

そして、具体的には以下のところが特によかった。①学習者が自ら考え、判断し、調べるなど、主体性を高める課題が多く、学習者の興味と関心を喚起しやすい。②従来の三分法を批判し、最新の五分法を積極的に取り入れ、丁寧に分かりやすく説明している。③「お/ご+名詞」は尊敬語・謙譲語・美化語を兼用する場合もあるということは本試案を通して、初めて知った。具体例も挙げられており、とても分かりやすかった。

初級の学習者にとっては、少し難しいかもしれないが、中・上級の学習者にとっては、内容はとても分かりやすいので、受け入れられやすいと予想される。中・上級で敬語を扱う際の教材として最適だと思う。

C4-05 さん

全体的には非常によかったという印象だった。

具体的には、主に次の4点が挙げられる。①難易度は少しずつ上げていき、学習者にとってちょうどいい。②使っている例文や会話の場面など、日常的によくある場面なので、とても実用的だ。③学習者に調べさせ、考えさせながら勉強することができるので、学習力をアップさせることができる。④敬語分類のほうで、中国語と関連付けながら紹介しているので、とても分かりやすい。

C4-06 さん

初級の限られた授業時間で、すべての内容を扱うのは時間的に厳しいが、教師が必要に応じて、部分的に扱うのは可能だと思う。特に中・上級の学習者を対象とするビジネス授業などで、教材として使用することをすすめる。練習問題は実用的なものが多く、とりわけ「コミュニケーションにおける敬語化」の部分は、運用を重視しているので、とてもよかった。

C4-07 さん

従来の敬語に関する教材とは大きく異なっており、新しい敬語の習い方を示したものだと感じた。特に導入のところで、敬語と敬意の区別について整理されているので、新鮮で分かりやすかった。そして、学習者にとって親しみやすく、使いやすいと思う。表現形式ばかりを重視する従来の教科書とは違って、具体的な場면을導入し、学習者に臨場感を与えることができる。実用性の高い教科書だと評価したい。

「認識編、形式編、運用編、練習編」というふうに、まず学習者の敬語に対する認識を改めて、それから筆者の提唱する敬語及び敬語の使い方を紹介し、更に学習者に練習させ、上手に運用できるように課題をデザインするのが、大変勉強しやすい構成になっている。

C4-08 さん

全体的にはとても斬新な印象を受けた。内容も充実かつ詳細で、構想も明確で、段階を踏んで進んでいるので、とても理解しやすかった。特に、学習者の敬語に対する意識、敬語の必要性和重要性に関する認識を高めようとする部分が、非常によかった。

最新の研究成果が取り上げられており、示された用例も実用的で、説明も具体的だった。現行の教科書に見られる問題点を補うことができると思われる。ただ、内容が多少多いため、限られている授業時間ですべて取り上げるのは難しい感じがした。

C4-09 さん

教材として、内容の全体構成は明確な段階性を持っている。単なる知識の積み重ねではなくて、細部まで丁寧に工夫されている印象を受けた。本試案を用いることで、学習者は明確な目標を掲げ、総括的に敬語を学ぶことができると思われる。そして、学習者の正確かつ適切に敬語を使う意識を育成することも実現できるだろう。学習者にとって使いやすい教科書になると思う。

理論的な知識に偏って知識伝授型という従来の敬語に関する教材とは違って、具体的な場面における敬語の使い方について丁寧に取り上げている。そして、学習者が自ら考え学べるよう工夫しているので、学習者にとって親しみやすいと思う。また、従来のように、いきなり尊敬語に入るのではなく、敬語と敬意の関係や敬語の必要性など、学習者の敬語に対する認識を着目し、徐々に導入するという構成はとてもよかった。

[2] 学習者の敬語による困惑点と困難点及び本試案のカバー力

次に、教師の視点からみる学習者の敬語による困惑点と困難点を語ってもらい、本試案ではどれぐらいカバーできているのかについて、意見を求めた結果、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。

C4-01 さん

学習者は時々尊敬語と謙譲語を混用してしまう。また、敬語の多様な表現形式も覚えられず、敬語に形にスムーズに変形できない学習者が多い。そして、学習者にとって、何よりも難しいのは、様々な場面で敬語を使うことだ。敬語に関する内容は、幅広くカバーしているので、今のところ、足りないというところは思いつかない。

C4-02 さん

授業で習っている知識と日常生活における運用は、うまくつながっていない状態だ。敬語を2年次で習った後、授業で扱われることがほとんどないため、四年次の就職活動で敬語を使わなければならない場面では、使い方をすっかり忘れている学習者が多い。また、韓国人とは違って、母語には敬語が少ないため、学習者の多くは敬語意識が低い。

学習者が変形規則しか分かっておらず、敬語とはどのようなものなのか、その背景に隠されている日本の文化や日本人の考え方などあまり理解できていないと思う。そして、様々な場面でのように敬語が使えばよいのかという判断力が身につけていないのが、最大の困難点だといえる。

本試案は、初級で敬語を教える際、使うには十分カバーできている。ただ学習者が自由自在に敬語を使いこなすことを目指すのであれば、もう少し工夫が必要があるかもしれない。

C4-03 さん

例えば、「敬語」と「敬意」の関係について、疑問を抱いている学習者はいる。

「敬語」と「敬意」の関係も含め、学習者が敬語を学ぶ際、感じている困難点、そして教師として学習者に区別・理解してほしいところは、本試案はすべてカバーしている印象だった。

特に、【練習編】では、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語という三つの段階に分けて、学習者に練習させることで、「実際の場面で敬語がうまく使えない」という学習者の困難点の解決にきつとつながると思う。

C4-04 さん

敬語が使われている文章を読めば、意味も分かるし、ある動詞を尊敬語や謙譲語に変形するのも問題はないと思う。しかし、実際に使おうとすると、スムーズに使えない。です・ます体だけで十分だと思って、尊敬語や謙譲語が使えないまたは使わない学習者が多い。

また、尊敬語を使うべきなのか、謙譲語を使うべきなのかという迷いも学習者の間によく見られる。例えば、店員さんがお客さんに、「本日お越しいただきました」を使うべきなのに、学習者は「本日いらっしゃいました」を選ぶ。文法的には正しいので、うまく説明できない教師も多いと思う。

そして、多様なバリエーションを持つ尊敬語または謙譲語を使う際、学習者はどれが使えるのか分からない。人間関係や場面に合わせて使い分けができず、どの場面でも同じバリエーション（例えば「お/ご～になる」）の敬語を使うという問題点が見られる。正直、教師もうまく使い分けができないので、学習者に質問されても説明できない。

自分が把握している学習者の問題点は、すべてカバーできていると思われる。例えば、「～て差し上げる」の使い方を間違える学習者が多いが、本試案で詳しく扱われているので、とてもよかった。

C4-05 さん

学習者の困惑点と困難点は、主に次の5点である。①尊敬語や謙譲語を見れば、理解できるが、聞いたり、話したりするときは、すぐには反応できず、分からなくなる。②敬語はどんなときに使い、どれぐらいの敬意をこめて使えばよいのかが分からない。③中国語には、敬語が少ないため、敬語を使用する意識がなかなか高まらない。④敬語と使役（「～（さ）せていただく」）や授受表現（「～ていただく」）などを合わせる形は、ますます混乱してしまう。⑤「～ていただく」と「～くださる」の区別や使い分けが分からない。

C4-06 さん

多くの困惑点と困難点はカバーできていると思うが、次の2点について、記述試案例にも目次にも反映されていないため、カバーできていない可能性がある。①敬語の使いすぎに注意すべき。本試案では敬語の必要性和重要性について、丁寧に述べられており、敬語を使うことのメリットに焦点が当てられているが、その反面敬語を使いすぎることによるデメリット（距離感を作ってしまう、仲良くなれないなど）についても、学習者に知ってもらう必要があると思う。②スピーチレベルシフトの問題。同一の場面で、同一の話者が文体を変えることもあるが、文体の違いのない中国語話者にとって、特に難しいので、扱う必要があると思う。

C4-07 さん

敬語を短期間で教えているため、学習者はスムーズに消化できず、敬語に対する認識が浅はかである。表現形式のバリエーションが多いので、言い換え・書き換への練習を上手にできて、実際の運用力がまだまだ低い。時間をかけて練習すれば、ある言葉を敬語にするのは、特に問題はないが、それを具体的な場面でどのように使えばよいのかは分からない学習者が多い。4年次になると、敬語でメールを書くのはできるが、話すときやはりスムーズに使えない。そして、三分法で習っているため、謙譲語と美化語についてあまり理解できていない。

本試案は、敬語について幅広くカバーしている。丁寧語や美化語なども詳細に説明しており、ほかの教科書より、カバー率が高くなる。

C4-08 さん

調査概要書で書かれている学習者の困惑点と困難点に同感する。学習者は敬語を面倒な存在だと思っている。バリエーションが多いので、嫌悪感と抵抗感を抱いている学習者が多い。言い換え・書き換え練習は問題なくできるが、実際の場面ではうまく使えない状態である。

本試案が十分に活用することができたら、上に挙げた困惑点と困難点が改善されると思う。

C4-09 さん

まずは学習者の敬語意識が低い。例えば、学習者からもらったメールでは、「教えてくれて、ありがとう」と書かれている。先生に敬語を使う意識を持たない学習者が多い。そして、敬語の表現形式が複雑なので、学習者はなかなか覚えられない。具体的な場面において、適切に使うのがますます難しい。

3年生を担当することが多いが、1・2年次で敬語を習ったはずなのに、ほとんどの学習者は敬語が使えない。日常的な挨拶をはじめ、授受補助動詞の使い方、各種類の敬語の使い方によくの誤用と非用が見られる。中には形式面によるものと運用面によるもの、両方含まれる。

これらの誤用と非用について、本試案ではすべてカバーしていると思われる。例えば、五分法が詳細に取り上げられており、各種類の敬語の使い方についても詳しく説明されている。各章の練習問題も合理的かつ総括的で、具体的な場面も示されていることで、学習者がその場に身を置くような感覚で練習できるので、とても必要でありがたいことだと思う。

[3] 現在使用中の教科書における敬語に関する扱い方への評価及び期待

更に、現在使っている教科書における敬語の扱い方に対し、どのように評価しており、どのような改善が望まれているのかについて、調査協力者はそれぞれ以下のような意見を持っている。

C4-01 さん

前は上海外国語大学編『新編日本語』を使っていたが、敬語を三分法で扱っており、解釈と例文も添えられている。しかし、文法に重点が置かれているものが多く、あまり実用的でなかった。今は北京大学出版社の『総合日本語』を使っているが、敬語に関する扱いは極めて少なく、説明もほとんどないため、あまり満足できない。

C4-02 さん

現行の教科書における敬語の扱いは、変形規則の説明や練習がほとんどを占めている。大量な言い換え・書き換え練習を通して、学習者は表現形式を覚えることができても、どのように使えばよいのかが分からない。今の扱いは、知識と使用をうまくつなげておらず、あまり実用的ではないと思う。教科書の影響を受けているだろうか、学習者は教科書で見たことのある例文を暗唱して、使うことができるが、実際の場面では、自分で判断して適切に敬語を使う能力を持っていない。

C4-03 さん

現行の教科書における敬語に関する扱い方には満足していない。今使っている教科書では、敬語に関する内容は、分散的に表れており、まとめは行われていない。学習者にとっても、教師にとっても、とても使いにくい。

そして、本試案と比べ、主に以下のところに不満を感じている。まずは表現形式以外に、敬語に関する説明（認識面や運用面）が少ないこと。そして学習者が主体的に練習する機会は設けていないこと。本試案のように、学習者が自ら考えたり、調査したりすることで、敬語に対する認識を深め、使い方をマスターするよう、現行の教科書を再考する必要がある。

C4-04 さん

『教育要綱』の影響で、多くの教科書では、三分法を採用している。北京大学出版社の『総合日本語』を使っているが、第二冊で敬語に関するすべての表現形式を1年次後半の学習者に一気に提示している。もう少し段階を踏んで、徐々に扱うべきだと思う。今、2年次のクラスを担当しているが、学習者が敬語を習ったのに、多くの誤用（例えば、「～ていただく」の使い方）が見られる。教科書の扱い方が簡単すぎることに集中しすぎることに不満を感じている。

C4-05 さん

現在北京大学出版社の『総合日本語』を使っているが、敬語についての記述は今までの教科書より詳しい。しかし、字数などの制限があるだろうか、本試案ほど詳しくない。また、練習問題やタスクも本試案のようにバリエーションが多くない。そして、敬語関連の内容は各課に分布し

ているので、集中して勉強することができない。

中国の日本語教育現場では、いまだに三分法を採用している教科書がほとんどで、本試案が提唱している五分法のほうが、学習者にとって分かりやすいと思うので、早く取り入れてほしい。

C4-06 さん

現行の扱い方は、理論が古い等、様々な問題点が見られる。教科書の編集者は、日本語教育ではなく、言語学出身者が多いため、日本語教育の観点があまり取り入れられていない気がする。また、三分法がいつまでも主流となっていて、日本国内の新理論を全然導入していない。

本試案は、三分法を批判し、五分法を積極的に取り入れているので、新鮮な感じがした。説明も丁寧で、例も示されているし、具体的で分かりやすかった。例えば、謙譲語と丁重語の区別について、理論的に説明するのではなく、具体的な例を通して、分かりやすく説明しているので、とてもよかった。

C4-07 さん

今使っている教科書では、ほかの文型と比べ、敬語に関する紹介は多い。しかし、やはり三分法を採用しており、説明も十分とは言い難い。表現形式に関する説明は詳細であるが、場面はあまり示されておらず、具体的な場面における敬語の使用についてはほとんど扱っていない。多くの教科書では、敬語は文法の一つとして扱われており、運用にはあまり目が向けられていないのが現状である。

C4-08 さん

今使っている教科書における敬語の扱いは、従来のものであるため、理論も古しいし、学習者の主体性も重んじられていない。

C4-09 さん

今使っている教科書では、1年次の最後に敬語が現れている。理論的な説明が行われているが、それほど詳しくないことと、実際の運用と切り離されていることが問題点として挙げられる。今の扱い方だと、実際に場面で適切に敬語を使いたいという学習者の要望には応えられない。

[4] 本試案への期待度及び今後の修正や改善へのアドバイス

最後に、現在使っている教科書における敬語の扱い方を踏まえ、本試案への期待度はどれくらいあるのか、そして修正や改善すべきところについて、意見を求めた結果、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。

C4-01 さん

とても使いやすい教科書だと思う。今度、敬語を指導する際、本試案から例文や説明などを選んで、参考にしようと思う。そして、教科書として出版されたら、ぜひ使ってみたい。教師の役に立つ教科書になると思う。

ただ、初級の段階では、授業時間が限られているため、教科書としてすべて扱うのが難しいと予想される。中・上級で敬語に関する科目を設け、その教科書として使用することをすすめたい。

C4-02 さん

出版されるのが楽しみだ。敬語を指導する際、参考にしたいと思う。

今後のためのアドバイスとして、主に次の2点がある。①アウトプットさせるためには、インプットは欠かせない。例えば、ドラマなどから敬語が使われている映像や音声を収集し、扱うことにより、敬語のインプットを増やすことができる。そして、学習者にまねさせる練習も取り入れてほしい。②学習者の敬語使用に見られる誤用を集め、教科書で取り上げ、教師が学習者と一緒にその誤用について、客観的に評価・分析する。例えば、どうしてこのような誤用が生まれたのか、どのように訂正すればよいのかなど、誤用例をたくさん扱ってほしい。

C4-03 さん

本試案を使ってみようと思う。

今後のためのアドバイスとして、以下の2点を補足してほしい。①インターネットまたはドラマから、敬語が使われるシーンを選出し、音声または映像付きで扱ってほしい。②就職活動を控えている高学年次の教科書として使用するのであれば、面接や職場でよく使われる敬語の扱い方や会話例を多く取り入れてほしい。

C4-04 さん

もし出版されたら、ぜひ使ってみようと思う。本試案は非常に詳細で、内容も充実している。長年敬語に関するいい教材を探していたが、なかなか見つからなかった。本試案を読んだとき、やっと見つけたという感じだった。敬語学習に最適な教科書として、本当に楽しみだ。そして、学習者の敬語意識を高めようという明確なねらいを持っており、実現できる可能性は大いにある。

ただ、私の知っている限りでは、中国国内では、もっぱら敬語を扱う科目を開講している大学がまだ少ない。現状では、1年次最後の2・3週間という短い期間でこの教科書を使うのは、現実的ではない。教師が部分的に選択して、授業で使うしかない。

そして、アドバイスとして、場面設定は日本国内のものが多い気がする。学習者が日本社会に馴染ませるためには有効だと思うが、中国国内にいる学習者にとって、想像しにくい可能性もある。国内にいる学習者の身近にある場面を増やしてほしい。

C4-05 さん

本記述試案を読んで、わくわくした。チャンスがあれば、使ってみようと思う。中国では、学習者が自ら考えたりしないで、ただ暗唱するだけの教育が主流である。しかし、本試案はただ暗誦するのではなく、自分で考えたり調べたりすることができるので、学習者にとって新鮮だと思う。

今後のためのアドバイスとして、できれば「バイト敬語」も取り上げてほしい。例えば、「こちらは中華そばでございます」ではなく、「こちらは中華そばになります」のような言い方は、文法的に普通ではないので、学習者は戸惑うかもしれない。豆知識のような形で、学習者に少し説明することをすすめたい。

C4-06 さん

敬語に関する新しい理論や研究成果を積極的に取り入れようとする姿勢を評価すべきだ。そして、実用性の高い本試案を読んで、多くの示唆を得ることができた。例えば五分法の導入、とても賛同できる。そして、印象的なのは、「コミュニケーションにおける敬語化」という部分である。従来の教科書とは違って、言い換え・書き換え練習にとどまらず、具体的な場面で敬語を使う練習をたくさん設けている。表現形式を覚えても、具体的にどのように使えばよいか分らないという学習者の問題点が改善されると期待できる。

今後のためのアドバイスとしては、中国語の敬語について、もう少し深く触れること。日本語敬語を学ぶ際、母語の中国語による正の転移と負の転移について、詳しく述べることにより、学習者にとって、より理解しやすいかもしれない。

C4-07 さん

学習者には使いやすい教科書になるに間違いはない。自分は使ってみたい。

ただ初級の1~2週間で敬語を教えるという現状が変わらない限り、本試案をそのまま初級で使うのは難しいと思う。教師が部分的に選択して使うしかない。一番理想なのは、中・上級で敬語に関する科目を設け、その主教材として使用することである。

そして、教師が大きく関与する必要があると感じた。例えば、「敬語の定義」及び「敬語と敬意との関係」についての課題では、初級学習者の場合、すぐには理解できないかもしれない。教師による詳しい説明や適切な導きが大きな比率を占めることになる。今まで以上に教師の役割が求められると思う。

「コミュニケーションにおける敬語化」の練習には、先生と学生の設定が多いような気がする。もちろん学習者にとって親しみやすいかもしれないが、「会社における上司への欠席メール」、「会社における入社挨拶」など、他の場面の例も取り入れてほしい。

C4-08 さん

学習者が主体的に学ぶことに重点を置いている本試案の方針を高く評価したい。日本語教育の新しい理念や教授法を取り入れているので、現行の教科書の足りないところを補っている。使ってみたいと思う。

今後のためのアドバイスとして、以下の3点がある。①自由記述型の課題が多いが、初級の学習者にとっては多少難しいと思われる。穴埋めや選択問題など出題形式で難易度を調整することを提案したい。②【運用編】の使用例は、1対1（発話の順序交代が1回だけ）のものが多く、もう少し長い会話例も扱ってほしい。③「表現における敬語化」と「コミュニケーションにおける敬語化」という二つの概念の区別について、十分に理解できなかったため、説明を加えてほしい。

C4-09 さん

今まで中国国内の敬語に関する教材の問題点を補うような存在になると期待している。出版されたら、使ってみたいと思う。特に高学年で敬語に関する科目を設け、本試案を主教材として使用することをすすめたい。

可能であれば、映像なども扱ってほしい。敬語が使われている映像を学習者に見てもらうことにより、敬語の使い方に対する理解も印象も深くなると思う。そして、コラムなどの形で、日常生活の挨拶に現れている敬語について、説明などを加えたら、学習者にとって勉強になると思う。

11.2.2 教師向けの指導手引書記述試案例について

[1] 記述試案例に対する全体的な印象

まず、教師向けの指導手引書記述試案例を読んだ後、全体的な印象として、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。10.2.1同様、要点をまとめたものを以下に示す。

C4-01 さん

詳細に記述されており、とても使いやすいという印象を受けた。導入の仕方や練習方法など、丁寧に記述しているところがよかった。一番よかったのは解答例も添えられているところだ。敬語に自信が持てない教師でも安心して使えると思う。

C4-02 さん

現行の指導手引書とは違って、とても詳細で使いやすい。全体的にとってもよかった。

C4-03 さん

学習者用に対応し、セットとなっているため、とても使いやすいと思う。それぞれの課題には、解答例や解釈、そして関連知識も示されているので、教師としてとても助かる。

C4-04 さん

全体的にとってもよかった。実用性が高く、内容も非常に充実している。特に各課題の最後に付け加えられている「補足説明」を読むのは、教師として本当にいい勉強になる。

C4-05 さん

とても詳しく記述されていて、使いやすいと思う。具体的には、次の3点がある。①解答例だけでなく、課題のねらいや導入のタイミング、使い方なども丁寧に記述されていて、教師としてとてもありがたい。②解答例を省略する指導手引書は多いが、本試案の解答例はとても詳しいので、教師は自信を持って、指導できると思う。③補足説明では、敬語関連の知識や情報が書かれていて、教師にとってとても勉強になるし、授業の準備も楽になると思う。

C4-06 さん

とても参考になった。現場の教師にとって、絶対役に立つと思う。例えば、「敬語」は必ずしも「敬意」を表すとは限らないという指摘が印象的だった。また、敬語の五分法に関する説明も大変勉強になった。教師研修の材料として使うことを強くすすめたい。

C4-07 さん

各課題に、ねらいや使い方、解答例が添えられているので、詳細でとてもよかった。筆者の意図が明確に示されており、教師がどのように学習者に提示すればよいのかまで詳しく書かれているので、とても使いやすいという印象だった。

C4-08 さん

内容な詳細で、説明も丁寧で、細かいところも工夫されているので、とてもよかった。本試案例を読んで、自分が今まで知らなかった知識、曖昧だった疑問点、間違った理解について、いい勉強となった。例えば、五分法に関する説明や各種類の敬語の区別など、敬語に関する知識が深まった。特に、【運用編】の課題には詳細な解答例と説明が載っており、教師としてとても参考になると思う。教師の敬語レベルを高め、教え方の改善、更には教師自身の成長にもつながると思う。

C4-09 さん

全体的には、要点が絞られているし、内容も詳細で、説明も丁寧なので、教師にとって、牽引的かつ補助的な役割を担っている指導手引書になると思う。各課題の「ねらい」と「使い方」が書かれてあるので、それぞれの課題が果たしたい役割や目標、そしてすすみたい利用方法に対する教師の理解が促進されると思われる。「補足説明」には、各課題を使う際、遭遇しやすい問題点や関連する知識など付記されているので、教師の理解と知識がより深まることが期待できる。

[2] 敬語指導の際感じる困惑点と困難点及び本試案のカバー力

次に、現場教師が敬語を指導する際、感じる困惑点と困難点を語ってもらい、教師用記述試案例では、どれくらいカバーできているのかについて、意見を求めた結果、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。

C4-01 さん

敬語について、私自身もうまく使えないため、使い方について学習者に質問されて、いつも困っている。解釈も詳細で、例文も豊富で、そして解答例も示されている本試案は、教師にとって、本当にありがたい存在である。目次を見ると、普段自分が疑問に思うところも扱われているので、とても使いやすいと思った。

C4-02 さん

一応教科書どおりに教えているが、それ以外に何をどう教えればよいのか分からず、困っている。学生はどれくらい消化できているのか、授業で習った後、どれくらい敬語が使えるようになっているのかについては、あまり把握できていないのが現状である。とりあえず、一つのミッションとして、教科書どおりに終わらせれば無難だと思っていた。

個人的には、学習用より教師用の記述試案を高く評価したい。敬語を指導する際、感じている疑問をたくさん扱っており、知識だけでなく、教師に多くの示唆と気づきを与えることができると推察される。

C4-03 さん

自分の困惑点と困難点がカバーできていると思う。

例えば、蒲谷(2013)に基づいた「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」という分け方は、とてもよかった。このように区別することによって、学習者がより理解しやすくなると思う。敬語の使用は、具体的な人間関係や場面に合わせて、表現形式を選ばなければならないということを学習者に分かってもらえらると思う。

C4-04 さん

自分の困惑点と困難点は、ほとんど学習者と同じである。「本日も越しいただきました」と「本日もいらっしゃいました」の例のように、尊敬語を使うべきなのか、謙譲語を使うべきなのか、時々自分もよく分からない。文法的に正しいのに、どうして適切ではないのかと学習者に質問されるとうまく答えられない。敬語は正しいだけではだめで、適切でなければならないので、それをうまく説明できる知識は十分に持っていない。

「お/ご~になる」をすべての動詞に適用できるわけではないことを知っているが、具体的にど

のような動詞に適用できないのか、教科書には明確に書いていないので、指導する際うまく説明できなかった。

本試案を見ると、自分が疑問に思っているところや自信のないところについて、詳細に説明されているので、十分にカバーできているという印象だった。

C4-05 さん

自分が敬語を教える際、尊敬語や謙譲語の表現形式の変形に偏っている。しかし、学生にとって、表現形式の記憶より、具体的な場面において敬語をどのように使えばよいのかというのがもっと難しいようだ。本試案を通して、今後敬語を指導する際、運用に重点を置いて、指導を行いたいと思うようになった。

自分は教科書どおりに、敬語を三分法で教えている。そして、教科書の例文をそのまま使って説明をしている。自分でも「こんなやり方では、学生はきつとつまらないだろうな」といつも思っている。敬語の持つ性質や果たす機能について考えたことはなかったもので、今までの自分の説明は不十分だと思う。

本試案は、まず敬語の分類について、詳細に紹介しているし、三分法の問題点が補える五分法も取り入れているので、自分の困惑点をカバーしてくれている。そして、敬語の持つ性質や果たす機能などについて詳しく紹介していて、本試案を通じて、今まで知らなかった知識を身に付けることができた。

C4-06 さん

以下のことについて、疑問に思ったことがある。①教科書の敬語と日常会話における敬語の違い。例えば「いらしてください」はよく使われるが、どの教科書にも載っていない。②謙譲語と丁重語の区別。例えば「参る」と「伺う」。③「～てください」と「お/ご～ください」の区別。④二重敬語と多重敬語の使い方。例えば×「いらっしゃってください」×「お越しになられてください」。

以上の疑問について、本試案は、例を挙げつつ、説明を行っているので、とてもよかった。

C4-07 さん

中国国内の教科書や参考書は、まだ敬語三分法にとどまっているので、その影響で、教師の敬語に対する認識も十分ではない。学習者の感じている困惑点と困難点の多くは、教師も同様に抱えていると予想される。参考になる本や資料が少ないため、学習者に質問されて、どう説明すればよいのか分からない教師が多い。本試案は十分に詳しいので、自分の感じている疑問について、カバーできている。

C4-08 さん

学習者と似たような困惑点と困難点を抱えている。自分にとっても敬語は難しいので、教える自信はない。学習者に質問されると困るので、指導の際なるべく難しいものを取り上げないようにしている。本試案は、自分が今まで知らなかった知識、曖昧だった疑問点、間違った理解について、詳細に扱っているので、とても参考になると思う。

C4-09 さん

自分が敬語を教える際、最も難しく感じているのは、それぞれの場面において、最もふさわしい敬語を使うよう、学習者を指導することである。同じ場面において、学習者からは様々な敬語の使い方が出される。表現形式だけを見ると、どれも文法的に正しいが、その場面に適切なものかどうかを教師が判断しなければならない。しかし、自分も敬語の使い方に十分に自信が持てず、正しく判断できるかどうかいつも不安だ。

本試案では、課題の解答例が唯一ではないことと他の解答との区別も示されているので、自分の不安を解消してくれた。教師が事前にそれを読んで、しっかりと準備すれば、学習者の疑問に答えることができると思う。そして、いつも考えさせられているうちに、徐々に自ら判断する力も高まるに違いない。

[3] 敬語指導の際、指導手引書の使用状況及び必要性

更に、敬語を指導する際、指導手引書を使っているかどうか、使うまたは使わない理由、そして使う必要性について、調査協力者はそれぞれ以下のような意見を持っている。

C4-01 さん

教科書以外に、ネットから、ビジネスの会話例を探して、授業で学習者に提示することがある。基本的には指導手引書をあまり使っていない。本試案のような、使いやすいくて、実用性の高い指導手引書があれば、使う必要があると思う。

C4-02 さん

敬語に関する記述がとても少ないので、指導手引書を使っていない。練習問題の回答や本文の訳文しか載っておらず、教師にとって、敬語を指導する際、参考になるような情報が見当たらない。文法の一つとして、表現形式に重点を置く指導手引書及びその他の参考書は、教科書とほぼ同様であるため、使ってもあまり参考にはならない。

C4-03 さん

教科書に対応する指導手引書を使っていないが、敬語に関する参考書を使っている。主に劉金

才編の『敬語』を参考にしたことがあるが、本試案と比べ、以下の不足点が見られる。①理論が古い(敬語三分法を採用など)、②理論知識に偏っており、運用にはあまり目を向けていない。③知識伝授型の専門書なので、学習者が主体的に学ぶための課題がなく、教師の気づきや内省を促すような内容も見られない。

敬語を教える際、自信が持てない教師が多いので、いい指導手引書があれば、使う必要があると思う。

C4-04 さん

今使っている『総合日本語』には、指導手引書も作られているが、教科書以外の情報がほとんどないので、あまり使っていない。時々文法や言語学の書籍を参照することもあるが、本試案のように詳細で、使いやすいものを見たことはなかった。いまだに三分法で敬語を紹介しており、理論が古いものが多い。

自分も敬語に自信がないため、学習者に質問されたら困るので、指導手引書を使う必要があると思う。

C4-05 さん

使ったことはない。色々と探してみたが、三分法や変形規則を中心に扱うものが多く、本試案のように、指導に役立つものが見つからなかったので、教科書を中心に説明していた。

参考になるようなものがあれば、指導手引書を使う必要があると思う。現場では、敬語に自信を持たない教師が多いため、本試案のようないい指導手引書が出版されたら、きっと売れると思う。

C4-06 さん

使っていない。教科書とほとんど変わらないので、使う意味はあまりない。今は指導手引書より、自分の実体験を生かしながら、敬語を教えている。

参考になるものがあれば、使う必要があると思う。実用的で役に立つ参考書は見つからないし、自分が会社で働いた経験があるので、今は自分の実体験に基づき、敬語を指導している。しかし、本試案にとっても興味がある。詳細で総括的に敬語を扱っているため、参考にしたいと思う。

C4-07 さん

新人の頃、指導手引書を使ったことがあるが、今はほとんど使っていない。書いてあることを既に把握しているのと、教科書とほぼ同じ内容なので、あまり参考にならないという二つが主な原因である。文法の例文補足や練習問題の解答しか載っておらず、教師の立場に立って、どのように指導すればよいのかについては触れていない。

教師も敬語について詳しくないので、いい指導書があれば、使う必要があると思う。まずは教

師が敬語について学びなおすこと、そしていかに学習者を導き、指導すればよいのかを明確に示す指導手引書と出会いたい。

C4-08 さん

今使っている教科書に対応して作られた指導手引書は、練習問題の解答と本文の訳文しかなく、あまり詳しくない。教師にとって、実用性も指導性も欠けているので、自分はあまり使っていない。自分も敬語について、多くの疑問点を抱えているので、それを解決してくれる指導手引書を使いたい。

C4-09 さん

現場で使われている教科書に対応した教師用の指導手引書は、内容が簡単すぎて、教師にとってほとんど参考にならない。教師の立場になって、教師の視点から、指導に役立つアドバイスなどあまり見当たらない。大学では教科書と一緒に購入されているが、自分だけでなく、ほかの教師もあまり利用していないようだ。そして、自分の知っている限りでは、中国国内では、敬語に特化した指導手引書はまだない。

[4] 本試案への期待度及び今後の修正や改善へのアドバイス

最後に、本試案への期待度はどれくらいあるのか、そして修正や改善すべきところについて、意見を求めた結果、調査協力者はそれぞれ以下のように答えている。

C4-01 さん

説明も詳細かつ総括的で、例文も豊富かつ実用的で、更に書き方も分かりやすいので、非常ありがたい。使用を強く希望する。

ただ自由記述型の課題が多いため、初級で使用する場合、多少難しいのではないかと思われる。学習者のレベルに合わせ、選択問題に変えるなど、課題の難易度を考慮する必要があるとアドバイスする。

C4-02 さん

学習者用も同様であるが、映像や音声などを通して、学習者の感性的な認識を養うことが大切だと思う。従来の教え方だと、理性的な知識（主に表現形式）の育成を重視しすぎる傾向がある。特に敬語の場合、いくら頭で分かっている、人間関係や場面に合わせて、適切に使えなければ意味はない。敬語教育の実用性を高めるために、学習者の目や耳に刺激が与えられるよう、教師の教え方を見直すべきだと思う。今後本試案にそれを取り入れてほしい。

C4-03 さん

本試案が出版されたら、必ず購入する。そして、敬語を指導する際、使ってみたい。今後のためのアドバイスとして、各章または各部分の後ろに、敬語を指導する際、役に立つと思われる参考書やホームページなどを紹介してほしい。教師が学習者のレベルやニーズなどに合わせ、選択して、授業で扱うことができる。

C4-04 さん

今までは、教科書に対応する指導手引書は、あまり役に立たないので、自分でほかの参考書を探して参考にしてきた。学習者用の教科書に対応し、これほど詳細に作成されている教師指導手引書は、中国国内では本試案は初めてだと思う。とても期待している。

C4-05 さん

本試案を使いたいと思う。とても使いやすそうで、きっと勉強になる。
アドバイスとしては、今のところは特にない。

C4-06 さん

とても参考になった。教師研修会の資料として使してほしい。
今後のためのアドバイスとして、敬語に限らず、待遇表現についても紹介してほしい。中国国内では、敬語＝待遇表現だと誤解している教師が多く、待遇表現を知らない教師も少なくない。コラムなどの形で、敬語の隣接知識についても触れてほしい。

C4-07 さん

本試案は、書き方をはじめ、教師の視点に立って進めているので、とても受け入れられやすいと思う。教師が本試案を使うことで、徐々に敬語について考え直し、今までの教え方を反省し、そして新たな気づきや示唆を得ることができると思う。

今後のためのアドバイスとして、内容が膨大であるため、例えば敬語五分法など、それぞれの話題に特化し、簡易版を作成すること。教師が学習者のレベルやニーズに合わせ、必要な部分を選んで、授業で扱うこともできるし、学習者の自律学習の材料としても使えると思う。

C4-08 さん

本試案なら、きっといい参考になると思う。次回敬語を教える際、早速参考にしたいと思う。
今後のためのアドバイスについては、今のところ特にない。

C4-09 さん

個人的には本試案の必要性は非常に高く、出版されたら、大いに参考にしたいと思う。専門的な知識が得られるだけでなく、教育目標の明確化や教育効果の向上にもつなげていけると思う。そして、自分が教育現場で実際に使うことで、今後よりよいものになるよう、有益なフィードバ

ックを提供したいと思う。

今後のためのアドバイスとして、「補足説明」の内容を学習者用の教科書に少し分散させたらどうかと提案したい。今の書き方だと、「補足説明」は教師しか把握できないため、授業時間の制限により、割愛される可能性が高い。せっかく重要な情報なのに、学習者に伝わらないければ、もったいないと思う。

第3節 フィードバック調査から得られた示唆

本節では、第2節で示した意見を通して、明らかになったことや気づいた反省点、及び今後の課題など、フィードバック調査から得られた示唆についてまとめる。まずは主に以下の二つが明らかとなった。

一つ目は、学習者向けの教科書記述試案例に対しても、教師向けの指導手引書記述試案例に対しても、調査協力者からは概ね好評な意見が寄せられていることである。まずは教科書記述試案例については、意見をまとめると、①敬語に関する新しい理論を学習者に分かりやすく提示している、②形式面以外に認識面と運用面にも学習者に着目させている、③学習者の主体性を重んじる課題が多く設けられているという3点が最も高く評価されていることが分かる。

具体的には、それぞれ次のような意見が代表的であるといえよう。①については、「「おっしゃる」の使用例を通し、敬語と敬意の関係性を分かりやすく示している」、「従来の三分法と比較しながら、五分法を導入し、両者の関係性についても明記している」、「謙譲語と丁重語の区別についての説明には、具体例も挙げられている」など。②については、「敬語と敬意の関係や敬語の必要性など、認識面から導入するのがよかった」、「敬語が使われている場面も具体的に示されているので、学習者にとってイメージしやすい」、「実際の場面における敬語の使い方に関する練習が多く、学習者の運用力の向上につながる」など。③については、「自ら考えたり、調べたりすることで、学習者の興味や関心を喚起しやすい」、「教師に教え込まれ、ただ暗唱するより、学習者が主体的に学んだほうが、印象深く、敬語を使う力がつくと思われる」など。

一方、指導手引書記述試案例については、意見をまとめると、①学習者用に対応して作られており、解答例が詳細に示されている、②教師の立場に立って、指導を行うためのポ

イントが明記されている、③関連知識など、教師にとって役立つ情報が満載しているという3点が共通して高く評価されたことが確認された。

具体的には、それぞれ次のような意見が代表的であるといえよう。①については、「教科書から独立した参考書ではなく、学習者用と一体化しているので使いやすい」、「解答例が省略されることなく、詳細に示されているので助かる」など。②については、「ねらいや使い方なども提案されており、教師の視点からの記述が多く、とても参考になる」、「教師が敬語を指導する際、感じる困惑点と困難点や遭遇しやすい疑問・質問なども扱われているので、いい勉強になる」など。③については、「各課題に付記されている補足知識を通し、敬語に関する知識や理解がより深まる」、「解答だけでなく、敬語に関する知識や情報も提供されているので、多くの気づきや示唆が得られる」など。

二つ目は、調査協力者からは、本研究の第3章から第5章の調査結果と一致する意見が得られたことである。まずは、学習者の敬語による困惑点と困難点については、語られた意見をまとめた結果、やはり意識面（「母語の影響で、敬語を使う意識が低い」など）・形式面（「表現形式が複雑であるため、なかなか覚えられない」など）・運用面（「具体的な場面では、どのように敬語が使えばよいのか分からない」など）に分けられることが明らかとなった。

そして、教師が敬語を指導する際、感じる困惑点と困難点として、「自分も敬語に自信は持てず、学習者と同様な困惑点と困難点を抱えているため、質問されると困る」との意見が多かった。そこで、教師指導書やほかの参考書を使う必要性を感じているにも関わらず、使いやすく、参考になるものが少ないため、教科書を抛り所にし、敬語を指導する教師が多いという結果となっている。一方、教科書における敬語の扱い方に対し、多くの不満が語られている。主には、①初級の最後に集中的に出現している、②いまだに三分法など古い理論を取り上げている、③表現形式に偏りすぎている、④運用面には目が向けられていない、⑤学習者が主体的に学べないなどの問題点が挙げられている。

次に、調査協力者から得られた意見に基づき、今回の反省点として、初級の精読授業における使い方の検討、場面のバリエーション上の考慮、課題の出題形式の多様化、音声や映像の取り入れという4点が挙げられる。1点目については、敬語教育が初級（1年次の最後または2年次の最初）の精読授業で集中的に行われているという現状に合わせ、本試案の使い方を更に事細かに検討すべきだということである。具体的には、10.1.4の調査概要

説明でも述べているように、本試案は主に中国の大学で日本語を専攻として学ぶ学生を対象としているが、使い方としては、以下の2パターンが考えられる。①1・2年次では、精読など敬語を扱う授業で、補助教材として用いる。②3・4年次では、敬語に関連する専門授業で、主教材として用いる。しかし、フィードバック調査では、①の使い方については、現場の教師に丸任せするのではなく、もう少し詳細かつ明確に示してほしいという意見が多かった。確かに中国の日本語教育現場では、②の場合より①の場合のほうが、一般性と汎用性が高いというのが現状である。そのため、①の使い方について、具体的に触れられていないところが反省点となった。

2点目については、日本社会における敬語の使用例を多く取り上げているが、中国にいる学習者にとって身近な場面を増やすべきだということである。具体的には、中国にいたがらも日本社会に親しみが持てるよう、本試案で取り上げている場面は、日本社会のものが多かった。しかし、フィードバック調査では、中国にいる大学生が身近に経験している場面（先生との会話や面接のやりとりなど）を増やしてほしいという要望があった。確かに日本社会に馴染みを持つことも大事であるが、まだ経験していないためイメージしにくいという欠点も避けられない。学習者が日常的に経験している場面を多く取り上げることで、より印象的で効果が得やすいかもしれないと気づかされた。

3点目については、自由記述型の代わりに、選択問題や穴埋め、判断問題など、課題形式の多様化を図るべきだということである。フィードバック調査では、自由記述型の課題は、学習者に心理的負担を与えてしまう恐れがあり、特に初級の学習者にとって、難しいのではないかという意見が多かった。確かに自由記述型の課題を通し、学習者が自分の考えたことについて、まとめて書く力が高まる効果が期待される一方、ヒントが示されていないため、難しく感じてしまい、抵抗感を抱き、やる気がなくなる可能性が考えられる。各レベルの学習者を考慮し、初級の学習者にもスムーズに関われるよう、課題形式を再吟味する必要があると示唆された。

4点目については、文字媒体だけでなく、CDやDVDを視野に入れ、音声や映像の導入を検討すべきだということである。フィードバック調査では、学習者により深い印象をつけるために、音声や映像によるインプットも大事であるという意見をもらった。本記述試案を作成する際、敬語が使われているシーンをドラマからカットするなど、取り組みを試みたが、著作権の問題で断念してしまった。また自作教材という方法も考えられるが、資金の問題で実現できなかった。調査協力者の意見を通し、改めてその必要性和重要性を認識

した。

最後に、以上で述べた反省点を踏まえ、今後の課題として、次の5点を示す。①本試案は初級の精読授業でも活用されるよう、その使い方について詳しく検討した上で、教案などの形で詳細かつ明確に示す。②中国にいる学習者がよりイメージしやすくなるよう、彼らにとって身近にある場面を多く取り上げ、敬語の使い方を扱う。③各レベルの学習者を考慮し、初級の学習者にもスムーズに関われるよう、課題形式の多様化を模索する。④学習者により直感的なインプットを提供できるよう、CDやDVDを視野に入れ、音声や映像の導入を検討する。⑤今回のフィードバック調査の結果に基づき、記述試案を修正した後、それを使って授業実践を行い、その効果を検証する。

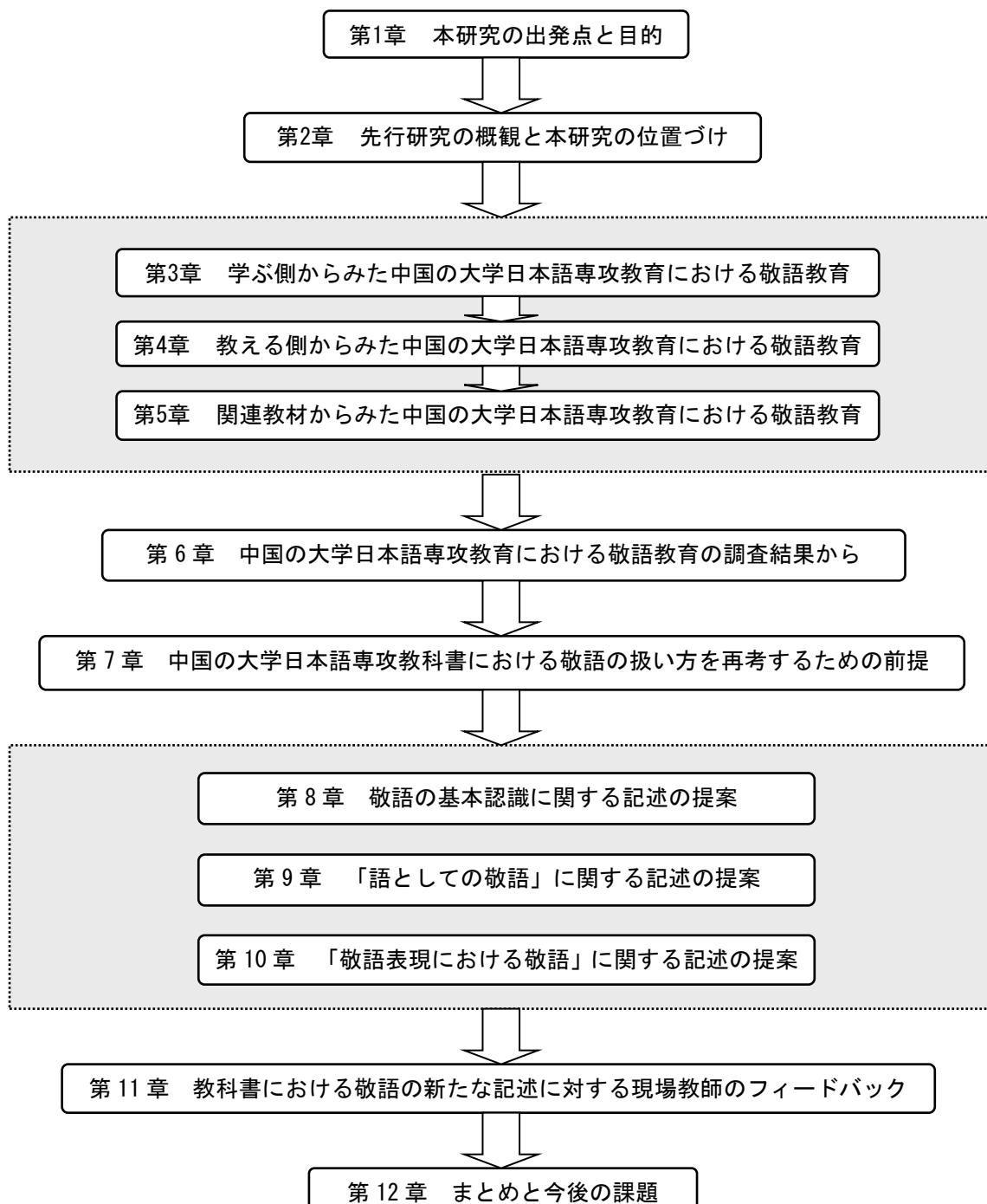
第12章 まとめと今後の課題

第12章では、本論文をまとめ、その特徴や意義、限界点及び今後の課題について述べることを目的とする。まず、第1節では、全体まとめとして、各章の概要を述べる。第2節では、日本語教育の分野において、本論文がどのような学術的な特色を持ち、その研究成果はどのような意義があるのかについて論じた。第3節では、本論文の限界について言及し、それを乗り越え、今後更に研究を深めていくための課題を挙げる。

第1節 本研究のまとめ

本研究は、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善することを目的とし、元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から現状の問題点を指摘した上で、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」とを区分する考え方（蒲谷他 1998、蒲谷 2013）に基づき、敬語の捉え方の問題点を理論的に整理することによって、教科書における敬語に関する新たな記述を構想するとともに、その具体的な記述について提言するものである。

本研究は、以下の全12章より構成されている。その全体像を【図6】に示す。以下、順に概要を述べる。



【図 6】 本研究の全体像

第1章 本研究の出発点と目的

国際交流基金（2014）によると、中国にいる日本語学習者数が世界1位となった。2000年以降、日本語学科の新設や既存学科の定員増などにより、日本語を専攻とする学部生の増加が特に著しい。彼らの多くは、大学入学時に日本語をゼロから始め、3年次には日本語能力試験N1に達することが要求されており、卒業後は、日系企業への就職や渡日留学を進路として選ぶ人が多いと報告されている。日本語を用いて日本人や日本社会と接触する以上、敬語は避けられない課題だといえよう。しかし、現代中国語には体系的な敬語が存在しないため、中国人日本語学習者にとって、敬語は最も難しい学習項目の一つだといわれている。特に、日本人との接触も少なく、敬語を見聞きする機会が限られている中国国内にいる学習者の場合、敬語習得がますます困難であると予想される。

日中両国の文化背景や言語体系が異なるという現実を変えられない以上、教育面における工夫がより重要となってくる。しかし、中国の大学で日本語専攻を卒業した元学習者を対象として、敬語及び敬語教育に関するインタビューを行った結果、調査協力者らが敬語の必要性和重要性を認識している一方、敬語に関する様々な困惑点と困難点を抱えており、また自分の大学時代に受けた敬語教育に対し、多くの不満を抱き、改善の必要性を強く感じていることが明らかとなった。

以上の研究背景と動機を踏まえ、本研究では次の2点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか。
- (2) 問題点を改善するためには、どうすればよいのか。

第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

先行研究を概観した結果、主に五つの傾向が見られた。

- ①2000年以降、中国の大学日本語専攻教育に関する研究が様々な角度から行われているが、中国人日本語学習者にとって最も難しいといわれる敬語に関する教育に着目するものはほとんどない。
- ②日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究が多く見られる中で、その多くは日本にいる留学生を対象としており、中国にいる学習者、殊に大学における専攻

学習者に注目する研究はほぼ見当たらない。

③従来の敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、教育経験を持つ研究者による内省研究や、学習者を対象とするアンケート調査を研究方法とする量的研究、また近年では実践報告が主流であり、教育の当事者の意識面に注目する質的研究は少ない。

④敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究には、学習者や教師を対象に調査し、その結果を論文に反映させたものが多く、教科書を中心とする教材に関する議論はあまり行われていない。

⑤中国人日本語学習者を対象とする敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまる研究がほとんどであり、具体的にどのように実現させるのかについては詳しく言及されていない。

上述した先行研究の限界を踏まえつつ、研究目的と照らし合わせ、目的(1)のために、次の四つの課題を設定した。

【課題1】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、学ぶ側はどのように考えているのか(→第3章)。

【課題2】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教える側はどのように考えているのか(→第4章)。

【課題3】中国の大学日本語専攻用の教科書を中心とする教材において、敬語はどのように扱われているのか(→第5章)。

【課題4】課題1・2・3を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には、どのような問題点が存在しているのか(→第6章)。

そして、目的(2)のために、次の二つの課題を設定した。

【課題5】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか(→第7、8、9、10章)。

【課題6】本研究が提案する敬語教育の改善案(教科書における敬語の新たな記述)について、現場教師からはどのようなフィードバックが得られるのか(→第11章)。

第3章 学ぶ側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学で日本語専攻を卒業後来日している元学習者を対象に、敬語及び敬語教育について半構造化インタビューを行い、学ぶ側からみた敬語教育の問題点を探った。調査協

力者の語りを質的に分析した結果、「敬語に対する苦手意識」、「敬語に関する意識変化」、「高い敬語レベルへの憧憬」、「受けた敬語教育への不満」、「敬語教育の改善への期待」という五つのカテゴリーが浮かび上がった。具体的には以下のようなことである。

大学時代に敬語教育を受けたものの、元学習者らは長い間、敬語に対し嫌悪感と抵抗感を抱いているという。それは、表現形式が複雑でバリエーションも多く、混同せずに記憶するのが苦痛であることと、初級の短期間で教わったため、体系知識に対しても、使い方に対しても、多くの困惑点と困難点を抱えていることに起因している。また、大学の時、丁寧語以外の敬語を使う機会はあまりなく、使わなくても困らなかったため、元学習者らは尊敬語や謙譲語の必要性和重要性を認識していなかった。

しかし、大学卒業後、就職や来日の失敗体験を通し、丁寧語以外の敬語が使えないことによる不利益を知り、徐々に尊敬語や謙譲語の必要性和重要性に気づき、元学習者らの敬語意識に顕著な変化が見られた。同時に、他人の使っている敬語を理解できても、自分がスムーズに使いこなせないことを悔やみ、自分の敬語レベルへの不満を感じ始めた。次第に、敬語が上手に使う人に好印象を抱き、どんな場面でも適切に敬語が使える人へ憧れるようになった。

一方、敬語への苦手意識は大学時代と変わらず、就職または来日してからも改善されなかったようである。敬語による困惑点と困難点は意識面・形式面・運用面と広範囲にわたっており、いずれも大学時代に受けた敬語教育と深く関わっていることが判明した。大学で受けた敬語教育について、導入方法・練習方法・教育時期・教育期間・授業内容・授業形態をめぐり、様々な不満が語られた。そして、これらの不満を改善するためにそれぞれ期待やアドバイスが寄せられた。

第4章 教える側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている中国人教師を対象に、敬語及び敬語教育について半構造化インタビューを行い、教える側からみた敬語教育の問題点を探った。調査協力者の語りを質的に分析した結果、「パターン化された敬語教育」、「満足できない学習者の敬語レベル」、「目指したい敬語教育の改善」、「抱えている現実的な悩み」、「教材への強い依存」という五つのカテゴリーが浮かび上がった。具体的には以下のようなことである。

現場教師が行っている敬語教育は、元学習者らが受けた敬語教育とかなり合致している。それぞれの教育現場では、敬語は初級に当たる1年次の最後または2年次の最初の1~2週間で、集中的に指導されている。また、教師主導型の講義式授業が主流であり、授業内容に関しては、敬語の種類や働き、表現形式などの説明に重きが置かれており、練習としては、言い換え・書き換えや短文通訳、本文暗誦がメインであるという。このことから、敬語教育がある程度パターン化されていると考えられる。

20年以上も上述した敬語教育を繰り返す教師もいるが、現場教師たちは学習者の反応や敬語レベルについては、授業の内容を十分に消化できず、多くの困惑点と困難点を抱え、敬語に対する強い苦手意識を持つ学習者が多いと語っている。学習者の困惑点と困難点を詳細に挙げてもらったところ、元学習者の意見と重なっており、やはり意識面・形式面・運用面という三つに分かれている。学習者の敬語レベルに満足できない教師は、自分の行っている敬語教育に疑問を抱いた。目指したい敬語教育については、元学習者同様、主に教育時期・教育期間・授業形態・授業内容・練習方法という五つに集中していることが分かった。そして、教師たちも大学時代に元学習者と類似した敬語教育を受けたという事実が判明し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点は、改善されないまま、長年にわたり存在している可能性が示唆される。

教師たちも改善の必要性を強く認識しているにもかかわらず、抱えている様々な現実的な悩みが、目指したい敬語教育の実現を妨げていることも浮き彫りとなった。具体的には、シラバスやカリキュラムの制限・教科書における敬語の扱い方・授業時間の限界・教師自身の敬語レベル・授業準備の便宜・敬語使用率の低さなどが共通して挙げられている。これらの悩みが原因となり、現場教師の多くは改善しなければならないと思いつつも、最終的には教材に頼って敬語を教えるという消極的な結果となった。

第5章 関連教材からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学日本語専攻教育の関連教材（『教育要綱』・教科書・教師用指導書）における敬語の扱われ方を分析し、敬語教育の問題点を探った。その結果、それぞれ以下のことが明らかとなった。

『基礎段階教育要綱』（1・2年次）においては、敬語は名詞やテンスなどと並び、2年次の語彙・文法レベルの学習項目として位置づけられている。また、一般的な表現形式が

身に付くことを主目的としており、形式に重点を置く傾向が見られる。その一方、『高学年段階教育要綱』（3・4年次）においては、基礎段階における「形態論」という扱われ方から一転し、場面や相手に合わせ、適切に敬語を使用する能力が要求されており、敬語はコミュニケーションレベルで扱われている。そして、敬語三分法を採用しており、各種類の敬語の表現形式がまとめられているが、必要性和重要性、働きや使い方などその他の記述は全く行われていなかった。

教科書における敬語に関する記述は、主に初級の最後に集中しており、中・上級ではほぼ現れていない。また、敬語の仕組みに関する記述には、「敬語の種類に関する記述の不統一性」、「尊敬語と謙譲語の働きに関する記述の狭小化」、「表現形式の示し方の不明確さ」、「敬語の必要性和重要性に関する記述の欠落」などの問題点が潜んでいる。更に、敬語の各項目に関する説明を見ると、「接続ルールなどの文法説明がメインであり、使い方に関する説明が不十分」や「人間関係が不明な例文が多く、場面との関連性が薄い」などの問題が指摘できる。最後に、敬語に関する練習問題からは、「模範例にならない、敬語の表現形式に言い換える・書き換えるといった練習が最も多い」、「先生と学生の会話がほとんどであり、場面が非常に乏しい」、「言い換え・書き換えのほかに、穴埋めや質問応答、中文和訳といった教師主導型の出題形式に集中している」などの傾向が見られた。

教師用指導書における敬語の扱い方には、①教育時間や到達目標、教育内容など、教師が指導を行う際に、目安となるような記述は見られたものの、いずれも一程度であった。②単語の説明や例文補足、練習問題の解答例がメインであり、教科書の記述における問題点を補うような記述は見られなかったという二つの傾向が見られたことから、教師用指導書はあまり機能していない可能性が浮上した。

以上の分析結果を第3章と第4章の調査結果に照らし合わせた結果、以下の関連性がうかがえる。『基礎段階教育要綱』では表現形式、『高学年段階教育要綱』では運用能力という2段階の敬語指導方針が示されているが、教科書と教師用指導書を見ると、1段階目の方針は反映されているのに対し、2段階目の方針は全く反映されていないことが分かる。第3章と第4章の調査においても、調査協力者が受けたまたは行っている敬語教育は、1年次の最後または2年次の最初に集中しており、3・4年次では敬語教育をほとんど受けていなかった・行っていないことが明らかとなった。よって、敬語教育が表現形式重視の初級にとどまっており、運用能力の育成にはつながっていないと考えられる。適切に使うことを教育目標とせず、初級の最後で集中的に表現形式を中心に敬語を教えるのは、学習

者の心理的負担を増やす一方、実用性への認識を低くしてしまうことが懸念される。

そして、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方は、教科書と教師用指導書の分析で指摘した問題点と深く関わっていることも確認された。更に、これらの問題点は、第3章の元学習者による「受けた敬語教育への不満」と第4章の現場教師による「パターン化された敬語教育」にも現れている。よって、関連教材の問題点がそのまま学習者に教えられており、敬語教育に悪影響を及ぼしていると考えられる。このことは、「多くの現場教師が教材に頼って敬語を指導する」ということの裏付けとなり、関連教材が敬語教育の拠り所となっていることがうかがえる。

第6章 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の調査結果から

第3章から第5章の調査結果を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点について、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つを指摘した。しかし、中には敬語教育のみならず、中国の大学における日本語教育全体に共通する問題点も含まれており、それぞれの原因と改善の取り組みも実に多岐にわたっているため、七つの問題点をすべて解決するには、教育システム全体を見直す必要があり、とても容易に解決できる問題ではない。そこで、敬語教育を改善するための糸口を探ることにした。

まずは、第3章から第5章の調査結果を通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育において、教科書が極めて重要な位置づけを占めていることを確認した上で、敬語教育の改善はまず教科書に焦点を当てるべきだという推論を立てた。次に、日本語教育における代表的な教材論を概観した結果、教科書を中心とする教材は、教師の教育指導にとっても、学習者の学習活動にとっても、大きな拠り所であり、重要な役割を担っていることが確認され、教科書に焦点を絞るべきだという推論の理論的根拠となった。

更に、教材に対する捉え方やその役割については、以下の相違点が見られた。日本語教育教材論においては、教科書を中心とする教材は、教師の役割の一つとされるコースデザインの一部であり、シラバスをどう学習者に教えるかを計画するというカリキュラムデザインの段階に属し、コースデザインの柔軟化を可能にする役割を持つべきだとされている。

その一方、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育においては、教科書はコースデザインほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配している傾向が見られる。

以上の相違点の背景には、「学習者の多様化がそれほど進んでいない」、「中国の大学日本語専攻教育には画一性が求められる」、「コースデザインなどに対する教師の認識がまだまだ低い」という中国の大学日本語専攻教育が抱えている独自の事情が関わっている可能性が高いことを指摘した上で、敬語教育を改善するためには、まずは決定的な役割を果たしている教科書に焦点を絞るべきだという推論の必然性を訴えた。

最後に、教科書の観点が敬語教育に改善をもたらす可能性については、七つの問題点と絡みつつ、次の4点を指摘した。①教科書における敬語の扱い方を再考すれば、敬語教育のコースデザインの「何ニ基ヅキ」（目標）、「何ヲ」（内容）、「イツ・ドノヨウニ」（時期と期間・方法）のそれぞれが見直され、「一貫しない教育目標」、「表現形式に偏る教育内容」、「不適切な教育時期と期間」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」という四つの問題点の改善につながると指摘し、再考するための具体的な試みについても提案した。②教科書における敬語に関する記述を改めることと教科書を通して適宜に副教材と補助教材を示すことにより、敬語教育の教材が見直され、「再考すべき教材における扱い方」という問題点の改善につながると指摘し、具体的な試みについても提案した。③教師が敬語教育を行う際拠り所としている教科書と教師用指導書を通し、知識や情報を提供し、気づきや示唆を与えることにより、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」という問題点の改善に結びつくだけでなく、自身の教育観や教科書に対する捉え方、教師の役割に対する認識などにおいて、教師の意識変化を促す重要な手段にもなると指摘し、具体的な試みについても提案した。④学習者が教室を離れた後でも自律的に敬語が学べるよう、教科書における敬語の扱い方を再考することと、それぞれのニーズに合わせ、学習者に副教材と補助教材にも目を向けさせることにより、「教室内の指導に強く依存する学習者」という問題点の改善につながると指摘し、具体的な試みについても提案した。

第7章 中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するための前提

教科書における扱い方を再考すべきだという本研究の主張は、敬語に限らず、他の学習項目にも共通する課題であると述べた上で、その一方、他の学習項目とは異なる個別性も

持っていることを論じた。それを踏まえ、現行の教科書における敬語の扱い方からうかがえる問題点として、それぞれ以下のように3点ずつ指摘した。

他の学習項目に共通する問題点：(1)教科書における扱い方には、①教師や学習者の困惑や誤解を招くようなものがある。②文法説明や練習問題など、教師主導型に適するものがほとんどである。③学習者の多様なニーズや自律学習が考慮されていない。(2)教師用指導書における扱い方には、教科書の問題点を補うような内容はほとんどなく、あまり機能していない。(3)教科書と教師用指導書以外に、学習者の多様なニーズに対応したり、自律学習を促したりするための副教材や補助教材の導入はあまり見られない。

他の学習項目とは異なる問題点：(1)敬語とは何か、その必要性和重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している。(2)敬語の分類や各種類の敬語の働き、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い。(3)各敬語項目の文法説明や練習問題では、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった運用面を考慮した記述が行われていない。

次に、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱いは、『教育要綱』における記述という内部の要因と、日本国内の日本語教科書における扱い方という外部の要因の両方から影響を受けていることが確認された。更に、日本国内の日本語教科書における敬語の扱い方には、山田孝雄を代表とする「敬語は敬意の表現である」という〈敬意〉の敬語論が投影されていることが判明した。そこで、先行研究の知見と筆者自身の経験を踏まえ、この敬語論を批判した上で、現行の日本語教科書における敬語の扱いは、その影響により、意識面・形式面・運用面が混在している傾向が強いことと、それが教師と学習者の敬語に対する理解を阻害してしまう要素として働いていることを指摘した。したがって、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するには、まず「敬語とは何か。敬語をどのように捉えるべきなのか」という根本的なところから見直す必要があると提案した。

以上を踏まえ、本研究では蒲谷(2013)の敬語論を受け継ぎ、敬語を「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」という二段階で捉える。これに基づき、教科書において敬語を扱う際、前者にとって重要となるのは、敬語の分類、働き、表現形式といった体系的な知識を正確に記述することに対し、後者にとって重要となるのは、人間関係や場に合わせ、どのように適切に敬語を用い、コミュニケーションを行うのかを明確に記述することであると考え、両方の観点が不可欠でありつつも、互いに混淆してしまわないように区別して記述を行う必要があると述べた。そして、殊に本研究のような海外にいる学習者を対象と

する場合、上記両者の前提と基盤として、日本語の敬語の特徴や母語との比較、敬語を学ぶ必要性と重要性といった認識面を考慮した記述も必要であると主張した。よって、ここからは現行の記述からうかがえる三つの問題点を「敬語の基本認識に関する記述の不足」、「語としての敬語」に関する記述の混乱」、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮」と新たに名づけた。

そして、敬語を教える際も、上述した三つの問題点をすべて射程に入れる必要があると指摘した上で、最後に敬語教育の目的(学習者自身がコミュニケーションの主体となって、自ら敬語を用いて、適切にコミュニケーションを行うことにより、その力を身につけ、高めてもらう力を育てること)や目指したい敬語教育(学習者が主体的・自律的に敬語について考え、コミュニケーションの中で敬語を学び、教師がそれを支援するとともに、学習者と一緒に考えたり、よりよい解決策を探したりすることで、ともに成長していく教育)などについて、本研究の考えを示した。

第8章 敬語の基本認識に関する記述の提案

意識面に焦点を当て、敬語の基本認識に関する記述の不足という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における敬語の基本認識に関する記述を分析した。その結果、「敬語の定義と特徴があまり記述されていない」、「敬語の必要性和重要性が十分に明記されていない」、「敬語に関する誤解や注意点など中国人学習者の視点を考慮していない」、「中国語における敬語の知識を完全に度外視している」という四つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、以下の改善策を提案した。①敬語の定義と特徴に関する記述(例えば、日本語の敬語はどのようなものなのか、日本語の敬語はどのような特徴があるのか、日本語の敬語と中国語の敬語との共通点や相違点は何なのか、等)を加える。②敬語の必要性和重要性(例えば、日本社会では敬語はなぜ欠かせないのか、敬語が使えることのメリットは何なのか、敬語を使わないことによるデメリットは何なのか、等)を明記する。③敬語に関する誤解や注意点(例えば、中国人日本語学習者が敬語を学ぶ際生じやすい誤解、敬語を使う際注意したほうがよいところ、等)をまとめる。そして、以上の改善策に基づき、目指したい敬語の基本認識に関する記述について、新たな試案を構想し、具体的に示した。

第9章 「語としての敬語」に関する記述の提案

形式面に焦点を当て、「語としての敬語」に関する記述の混乱という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における「語としての敬語」に関する記述を分析した。その結果、「敬語の分類がまちまちで統一されていない」、「尊敬語と謙讓語の働きに関する記述が意識に偏りすぎている」、「敬語の使用対象に関する記述が矮小化されている」、「丁寧語、丁寧語や美化語の位置づけが不明である」、「敬語の表現形式が明確に整理されていない」という五つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、以下の改善策を提案した。①敬語の種類に関する記述を訂正する（具体的には、『敬語の指針』の五分法を取り入れる、謙讓語と丁寧語を区別する、美化語を丁寧語から独立させる、等）。②敬語の働きに関する記述を再考する（具体的には、人間関係や意識などの要素を外し、客観的に記述する、謙讓語と丁寧語の働きの違いを明記する、丁寧語と美化語を区別し、それぞれの働きを補足する、等）。③敬語の形に関する記述を整理する（具体的には、種類ごとに代表例のほか一般化された表現形式をまとめる、一般化された表現形式に具体的な使用例も添える、各表現形式の適用範囲を記載する、等）。そして、以上の改善策に基づき、目指したい「語としての敬語」に関する記述について、新たな試案を構想し、具体的に示した。

第10章 「敬語表現における敬語」に関する記述の提案

運用面に焦点を当て、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における「敬語表現における敬語」に関する記述を分析した。その結果、「表現形式の単一化」、「語彙や文法としてしか扱われない」、「人間関係設定の乏しさ」、「コミュニケーション場面と切り離されている」という四つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、コミュニケーションの観点を取り入れ、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった実際の場面の中で、敬語使用例や練習問題を示すべきだということを提案した。そして、蒲谷他（2010）で提唱されている「敬語化」、「敬語表現化」、「敬語コミュニケーション化」という三つの概念を援用し、教科書において、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化という三つの段階に分け、練習問題を示す方法を提示した。最後に、以上の改善案に基づき、目指したい「敬語表現における敬語」に関する記述について、新たな試案を構想し、具体

的に示した。

第11章 教科書における敬語の新たな記述に対する現場教師のフィードバック

第11章では、第8章から第10章の記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師たちに見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得るための調査を行った。フィードバック調査の概要や結果及び得られた示唆について、簡潔にまとめると、以下のようになる。

まず調査目的は、以下の2点である。【1】本研究が考案した敬語に関する新たな記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師に見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得る。【2】記述試案例に対する現場教師のフィードバックを分析し、評価されたところや気づいた反省点をまとめ、今後敬語の新たな記述を模索するための課題を検討する。調査においては、中国各地の大学で、日本語専攻教育現場に携わっている中国人教師9名に協力してもらった。具体的には、調査倫理の承認取得→調査協力者の許可取得→調査者の資料(5種類)送付→調査協力者の資料閲読→インタビュー調査の実施→データの整理という六つのステップを踏んで、調査を実施した。

その結果、学習者向けの教科書記述試案例についても、教師向けの指導手引書記述試案例についても、調査協力者からは様々な意見を得ることができた。それらを整理した結果、主に以下の二つが明らかとなった。一つ目は、学習者向けの教科書記述試案例に対しても、教師向けの指導手引書記述試案例に対しても、調査協力者からは概ね好評な意見が寄せられていることである。二つ目は、調査協力者からは、本研究の第3章から第5章の調査結果と一致する意見が得られたことである。

そして、調査協力者から得られた意見に基づき、初級の精読授業における使い方の検討、場面のバリエーション上の考慮、課題の出題形式の多様化、音声や映像の取り入れという4点が反省点として挙げられる。更に、反省点を踏まえ、今後の課題として、次の5点を示した。①本試案は初級の精読授業でも活用されるよう、その使い方について詳しく検討した上で、教案などの形で詳細かつ明確に示す。②中国にいる学習者がよりイメージしやすくなるよう、彼らにとって身近にある場面を多く取り上げ、敬語の使い方を扱う。③各レベルの学習者を考慮し、初級の学習者にもスムーズに関われるよう、課題形式の多様化を模索する。④学習者により直感的なインプットを提供できるよう、CDやDVDを視野に入

れ、音声や映像の導入を検討する。⑤今回のフィードバック調査の結果に基づき、記述試案を修正した後、それを使って授業実践を行い、その効果を検証する。

第2節 日本語教育分野における本研究の特徴と意義

日本語教育分野における本研究の学術的な特色については、第2章の第3節で述べた先行研究の限界を踏まえると、以下の4点が挙げられるのではないかとと思われる。

第一に、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、従来研究されていないという学術的な空白を埋めることができた。新中国成立後、約60年間の大学日本語専攻教育の歴史を振り返ると、2000年以降の発展がとりわけ速く、学習者も倍増し、前代未聞の転換期を迎えているといわれている。それにつれ、近年日本語教育の世界で多くの関心が寄せられ、様々な角度から中国の大学日本語専攻教育に関する研究が行われている。特に教育現場に焦点を当て、学習者へのアンケート調査や教師へのインタビュー、授業観察などの調査法を用い、教育の具体的な状況を探るものは2000年以前より大幅に増えている。これらの研究成果によって、中国の大学日本語専攻教育に潜んでいる様々な課題が浮き彫りとなり、教育の改善に貢献していると思われる。

しかし、先行研究を概観すると、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に着目した研究はあまり見当たらない。1.2.2でまとめた調査結果を見ても分かるように、学習環境に恵まれていない中国にいる学習者にとって、敬語は最も難しい学習項目でありつつも、教育上様々な問題点が潜んでおり、その改善が大いに期待されている。そこで、本研究は中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を研究対象とし、その問題点を明らかにし、生じた原因も探った上で、改善するための具体的な取り組みまで提言できたことで、従来の学術的な空白を埋めることができたといえよう。

第二に、従来の主流である内省研究や量的研究ではなく、質的手法を用い、調査協力者である学習者と教師の語りに耳を傾け、彼らの発見や洞察、理解を尊重した研究である。従来の日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する研究を概観すると、研究者が自分の教育経験に基づき、感想や気づきなどをまとめる内省研究や、学習者を対象にアンケート調査を実施し、量的に分析するもの、そして近年では実践報告が主流であることが

分かる。これらの研究により、様々な教育現場で行われている敬語教育・待遇表現教育の実態や問題点、または成果が報告されており、多くの示唆を得ることができた。

しかし、教育の当事者である学習者と教師の意識面に注目し、彼らは実際に教育を経験している中で、どのようなことを考え、悩みを抱えているのかなどを深く掘り下げる研究は少なかった。本研究では、中国の大学日本語専攻教育を受けた学習者と現場に携わっている教師を対象にインタビュー調査を実施し、彼らの語りに耳を傾けることにより、中国の大学日本語専攻教育を実際に経験していた/いる彼らの意見を把握することができた。アンケート調査などで得られない深い発見や洞察、理解などを得ることができ、そしてそれを論文の中に忠実に反映させることを心がけた。

第三に、従来の研究ではあまり目を向けられてこなかった教科書を中心とする教材も視野に入れ、詳細に分析することにより、新たな示唆を得ることができた。従来の敬語教育・待遇表現教育に関する研究を概観した結果、もう一つ明らかとなった傾向は、教科書を中心とする教材に関する議論はあまり行われていないことである。教材が教育の実施に与える影響は決して無視できないといえよう。特に、本研究の研究対象のような海外で行われている教育の場合、教科書を中心とする教材が及ぼす影響はますます大きいことが予想される。

よって、本研究では中国の大学日本語専攻教育の実態を把握するために、教育現場で広く使われている教科書を中心とする教材を対象に、敬語の扱い方について分析調査を行った。その結果、教科書における敬語の扱いは、現場で行われている敬語教育を左右するほどの影響力を持っており、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の改善においては、教科書における敬語に関する記述が鍵となる存在であるという重要な示唆を得ることができた。この示唆は本研究に極めて大切なものであり、研究目的の達成を可能にした決め手となった。

第四に、指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまるという従来の研究を乗り越え、改善案に基づき、具体的な記述試案を示した。従来、中国人日本語学習者を対象とする敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、研究者の内省や学習者によるアンケート調査の結果に基づき、指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまっているものがほとんどである。教育現場において具体的にどのように

提言を実現させるのかについては、十分に検討されていなかった。そのため、せっかくの研究成果があまり生かされておらず、教育現場における実用性が低いということをよく耳にする。

本研究では、「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか」、「問題点を改善するためには、どうすればよいのか」という2点を明らかにすることを目的とした。その結果、七つの問題点が存在していることが判明し、それぞれが生じた原因が多岐にわたり様々であるが、教科書が教育現場で果たしている決定的な役割を利用し、敬語に関する新たな記述を目指すことを改善の第一歩にすべきだと指摘し、その具体的な記述試案を試みた。

そして、本研究の研究成果の意義については、第1章の第3節で述べた本研究の研究目的に照らし合わせた結果、以下の五つにまとめることができる。

一つ目に、「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか」、「問題点を改善するためには、どうすればよいのか」という二つの研究目的を達成したことで、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の実態を解明し、あり方を改善することを目指したいという直接的な目標を果たすことができたといえよう。

具体的には、本研究では、元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から調査を行った結果、敬語教育の現状に見られる七つの問題点を明らかにした。その後、現状調査の結果及び教材論の先行研究を踏まえ、教科書の観点が敬語教育の改善にとって極めて重要な意味を持っているということについて論じた。更に、理論に基づき、教科書における敬語に関する新たな記述を構想し、その具体的な記述について提言した。最後に、本研究が提唱する敬語に関する新たな記述に対する現場教師の評価についても調査した。すなわち、本研究は教育現場に根ざしたものであるため、その研究成果がすぐに実用化につながり、現場に還元することができると思われる。

二つ目に、今回行った調査は、敬語教育に特化したものであるとはいえ、本研究を通して、中国の大学における日本語専攻教育の一端を推察し、その全体に存在する問題点の究明と改善に寄与することが期待される。第6章でも述べているように、本研究の調査を通して明らかにした七つの問題点やコースデザインにおける教科書の決定的な役割は、敬語

教育に限らず、中国の大学日本語専攻教育全体に共通している可能性が高いと推察される。このことから、教科書における扱い方を再考すべきだという本研究の提案は、敬語教育に限るものではなく、中国の大学日本語専攻教育全体においても、一般性のある課題であることが示唆される。

そして、第7章では、現行の教科書における敬語の扱い方からは、他の学習項目とは異なる問題点が見られた一方、共通する問題点も多く確認された。これを踏まえ、敬語に関する新たな記述を提案する際、他の学習項目にとっても、参考になれるよう、共通する問題点の改善にも力を入れた。すなわち、敬語教育に着目している本研究は、ある意味では、中国の大学における日本語専攻教育全体の縮図であるともいえよう。

三つ目に、大学における専攻教育に着目している本研究を通して、初・中等日本語教育や高等日本語非専攻教育など、中国における他の日本語教育現場で行われている敬語教育に対しても、示唆を与えることができたなら幸いである。第1章でも述べているように、中国国内では日本語人材を育成するための主要ルートとされる大学における日本語専攻教育は、他の教育と比べ、教育目標も高く、教育時間数も長く、教育内容も豊富などの特徴を持っているため、中国の日本語教育においては牽引的な役目を果たしている。

確かに教育対象や教育時間数、教育目標、使用教材など様々な面において、他の教育と異なるため、本研究で得られた知見は、そのまますべての敬語教育現場に応用できるとは考えにくい。しかし、本研究で明らかにした七つの問題点は、他の敬語教育現場にも存在し、本研究が提案した教科書の観点に基づいた改善案は、他の敬語教育現場にも適用できる部分があると推察される。したがって、本研究の成果が、それぞれの教育現場に合わせ、学習者のニーズなどを考慮し、部分的に参考になることを期待したい。

四つ目に、本研究で得られた知見は、中国国内で行われている敬語教育だけに限定しない可能性を秘めており、日本国内における敬語教育、殊に中国語話者を対象とする敬語教育にも貢献できると見込まれる。『教材事典』（日本教材学会、2013）によると、日本の教育現場では、「教師は教材研究する時間がとれないほど多忙である。このような状況では、新任を中心とした教師は、教科書をなぞり、教師用指導書に頼るような授業になってしまう」（p. 31）という現状がある。実際に周りの日本語教師に話を聞くと、現場ではいまだに教科書がコースデザインのほぼすべてを支配している現象が見られるという。そして、第

7章でも触れているように、本研究で明らかとなった敬語の扱い方に見られる問題点は、日本国内で使われている日本語教科書にも重なる部分が多いため、本研究の研究成果は、日本国内における敬語教育の現場にも役立つと思われる。

無論、学習環境などの要素が異なるため、日本国内にいる学習者に応用する際、適宜な修正や工夫が必要とされるだろう。その一方、中国語における敬語との比較やその干渉など、母語からの視点を重視しているため、中国語を母語とする学習者を対象に敬語を指導する際、有用な手助けを提供することができるのではないかと考えられる。

五つ目に、学習環境に恵まれていない中国国内の教育現場に着目している本研究を通して、海外にいる学習者を対象に行われている敬語教育に何らかの手掛かりが提供できることを期待したい。第6章と第7章で繰り返しているように、海外における日本語教育の場合、学習環境が不利であることや非母語話者教師がほとんどであることにより、教科書の役割はとりわけ重要であると考えられる。そのため、教科書における敬語の扱い方に着目すべきだという本研究の提案は、他の海外の日本語教育現場にとっても、不可欠な観点であるといえよう。

そして、教科書における敬語に関する新たな記述を構想し、その具体的な記述について提言する際、学習環境が不利であることや非母語話者教師がほとんどであることによって生じやすい問題点が解消されるよう、色々と工夫を凝らしてみた。そのため、本研究を海外の日本語教育における敬語教育の一つの事例として捉え、その研究成果をそれぞれの教育現場に合わせ、適宜に取り入れることもできるのではないかとと思われる。

第3節 本研究の限界と今後の課題

本節では、本研究の限界について言及するとともに、今後更に深めていくための課題を挙げる。主に以下の3点にまとめた。

まず、本研究における元学習者と現場教師への調査結果は、質的な手法により得られたものであるが、その一般性と共通性をより広く検証する必要がある。本研究の第3章と第4章で行った元学習者と現場教師へのインタビュー調査は、人数が限られているため、これで中国の大学日本語専攻教育の全体像を把握できたとは言いがたい。得られた意見の一

般性と共通性をより広く検証するためには、今後より多くの調査協力者を集め、語ってもらいたい。

次に、敬語に関する新たな記述試案を示したが、具体的にどのように大学4年間のシラバスに織り込んでいくのかについては、個々の教育現場で学習者のレベルやニーズなどに合わせて活用されるため、本研究では詳しく言及していない。授業の実践に関する検討も進めていく必要がある。中国の大学日本語専攻教育における教科書と教師用指導書においてはどのように敬語を記述すべきなのかについて、具体的な記述試案を示したが、それをどのように大学4年間のシラバスに反映させたらいいのかについては、今後の課題にしていきたい。

最後に、本研究では研究成果を実践に応用するまでには至らなかった。今後、本研究で提唱した新たな記述試案を用いた授業実践を行い、よりよいものになるよう工夫していきたい。本研究は、中国の大学における日本語専攻教育における敬語教育の問題点を明らかにし、生じた原因を探り、改善策を提言し、その実現を試みることを目的としているため、今回は教科書における新たな記述試案を示すことにとどまっているが、今後、教育現場での授業実践を通して、記述試案の効果を検証した上で、出版に向けて修正を重ねていきたい。

おわりに—教科書を通じて教師も学習者もともに学ぶ敬語教育へ

以上、研究目的と合わせ、本研究の結論を簡潔にまとめると、以下のようになる。

研究目的（１）中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。

あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか。

→元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から調査を行った結果、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つの問題点が存在していることが確認された。

研究目的（２）問題点を改善するためには、どうすればよいのか。

→中国の大学日本語専攻教育において決定的な役割を果たしている教科書に焦点を当て、敬語に関する新たな記述を目指すことを改善の第一歩にすべきだと主張する。具体的には、現状の記述に見られる他の学習項目に共通する問題点（「教科書における扱い方の不十分」、「教師用指導書における扱い方の不機能」、「副教材や補助教材の不使用」）、及び他の学習項目とは異なる問題点（「敬語の基本認識に関する記述の不足」、「語としての敬語」に関する記述の混乱、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮）が改善されるよう、教科書における敬語に関する記述を新たに行うべきだということである。

そこで、本研究に対して「敬語に関する新たな記述を行えば、敬語教育はすべてうまくいくのか」、「教師は新たな記述試案に頼ってしまい、ますます成長しないのでは？」などの疑問が生じることが予想される。これらの疑問は、本研究が考えている敬語教育における教材と教師が果たすべき役割と深く関わっており、以下に筆者の考えを述べる。

まずは繰り返し述べてきたように、教科書における敬語に関する記述を新たに行うことは、最終目的ではなく、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育を改善する糸口として位置付けたい。そのため、新たな記述を行えば、敬語教育に見られる七つの問題点がすべて解決されるとはもちろん考えていない。ただ、中国の大学日本語専攻教育（主に敬語

教育)において教科書が果たしている決定的な役割を利用し、敬語の扱い方を再考することで、七つの問題点がそれぞれ改善され、よりよい敬語教育の実現に大きく貢献することが可能だと考える。

しかし、だからといって教師は教材に依存していいという意味ではない。教育がうまくいくかどうかの決め手となるのは、教材ではなく、その教育を行う教師と受ける学習者であるべきだと考えている。教師も学習者同様、敬語に自信が持てないという傾向が見られる中、本研究が目指したいのは、教師も学習者もともに学ぶことのできる敬語教育であり、教材がそれを実現させるために、重要な手助けをしてくれる存在にしたい。

したがって、従来のように、教師があらかじめ用意していた知識や答えを一方向的に教え込み、学ぶのは学習者のみである敬語教育ではなく、学習者が主体的・自律的に敬語について考え、コミュニケーションの中で敬語を学び、教師がそれを支援するとともに、学習者と一緒に考えたり、よりよい解決策を探したりすることで、ともに成長していく敬語教育の実現を促進したいという考えに基づき、新たな記述試案を試みた。

具体的には、学習者向けの教科書記述試案例では、従来のような知識伝達型の教材とは区別し、学習者が主体的・自律的に敬語が学べるよう工夫を凝らしてみた。また、教師向けの指導手引書記述試案例は、説明を主とする知識伝達型ではあるが、使い方としては学習者にそのまま示すのではなく、学習者が自ら考え、気づき、そして一緒によりよい解決策を探すよう、部分的に示したり、自律学習の材料として扱ったりすることをすすめている。そして、教師自身が敬語や敬語教育について気づきや示唆が得られるよう、ヒントや補足説明、参考資料なども多く載せるように工夫してみた。

新たな記述試案に頼って教えるのではなく、記述試案を通じて、教師自身が敬語や敬語教育について考え直し、自信を増すことで、学習者を支援するとともに、学習者とともに成長していくこと、それこそ本研究が求めている教師の役割である。

教材の誤った使い方を恐れるのが、教材を改善しないことの原因になってはいけない。そして、誤った使い方をする教師が生まれぬよう、教材を作成する際工夫することが重要だと考える。本研究が考案する新たな記述試案の方針を理解し、活用することが、きっと教師の成長につながっていくと信じる。

参考文献一覧

- 荒井直美 (2011) 「授受補助動詞「～てやる、～てあげる、～てさしあげる」の使用についての一考察」『第9回日本語教育研究集会予稿集』 pp. 26-29
- 荒川洋平 (2004) 「教材論の射程」『日本語教育教材ブックレット』1号、pp. 31-34
- 尹松 (2002) 「中国における日本語の聴解授業の実態と課題—4大学の担当教師へのインタビューを通して」『言語文化と日本語教育』23、pp. 38-51
- 易洪艶・金春子 (2010) 「日本語と中国語における敬語表現の比較」『福井工業大学研究紀要』40、pp. 545-554
- 伊月知子 (2009) 「日本語専攻で学ぶ学生の教科書に対する満足度—中国の大学における日本語学習調査から」『日本語教育方法研究会誌』16 (1)、pp. 38-39
- 稲熊美保 (2005) 「韓国人日本語学習者による「～てあげる」「～てさしあげる」の使用について」『愛知文教大学論叢』8、pp. 107-123
- 岩崎秀樹 (2008) 「教えるから学ばない、という皮肉—授業分析の視点と方法の課題」『学校教育』1096号、pp. 12-17
- ウォーカー泉 (2013) 「「敬語」導入のための待遇コミュニケーション教育」『待遇コミュニケーション研究』10、pp. 1-17
- 于曉渦 (2002) 「中国の大学における日本語教育の展開と今後のあり方について—大連外国語大学における日本語専攻カリキュラムの分析を通じて」『教育学論集』28、pp. 31-42
- 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る」『言語と文化』12、pp. 59-77
- 遠藤織枝 (1990) 「日本語学習者の望む敬語教育—アンケート調査から」『言語と文化』3、pp. 1-16
- 袁莉萍 (2014) 「中国の大学における日本語教育の現状—中国南東部の一国立大学を事例に」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』(10)、pp. 81-93
- 大石初太郎 (1975) 『敬語』筑摩書房
- 大石初太郎 (1983) 『現代敬語研究』筑摩書房
- 王婉莹 (2014) 「日本語専攻シラバスにおける実質語機能語について」『日本語日本文学』24、pp. 63-76
- 王慧雋 (2014) 「中国において日本語の使役表現はどのように指導されているのか—教師に

- に対するインタビューを通して」『日本語教育研究会誌 21(2)、pp. 12-13
- 王秀文 (2007) 「日本語教育改革と人材育成モデルの構築」『貴州民族学院学报』総第 101 期、pp. 57-61
- 王冲 (2005) 「中国の大学の日本語教育における副詞の指導への考え—「きっと」と「必ず」の場合」『人間文化論叢』8、pp. 259-266
- 大谷尚 (2007) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』54 (2)、pp. 27-44
- 太田陽子 (2004) 「文型指導における「文脈欠如」の問題点—日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』17、pp. 53-69
- 大野敬代 (2007) 「待遇コミュニケーションとしての日本語の謙遜—日本語教科書での扱いと談話分析による比較から」『国際交流センター紀要』1、pp. 25-37
- 大橋敦夫 (2009) 「中国出版の日本語教科書の教材分析」『上田女子短期大学紀要』32、pp. 117-127
- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材—分析・使用・作成』アルク
- 小川誉子美 (2005) 「日本語教育における待遇表現指導の現状と課題—学習者が遭遇する問題」『日本語学』24(11)、pp. 76-85
- 尾崎学 (2006) 「台湾における第三者敬語表現の指導の一試案—『新文化日本語初級 4』を例にして」『日本語教育研究』50、pp. 87-100
- 尾崎学 (2007) 「台湾における「尊敬語表現」の指導法について—人間関係に応じた尊敬語動詞の使い分け」『日本語教育研究』52、pp. 107-126
- 尾崎学 (2008) 「台湾における「謙讓語表現」の指導法について—東呉大学日本語学科日間の学生を例にして」『日本語教育研究』53、pp. 104-136
- 尾崎学 (2012) 「台湾の大学における敬語表現教育の現状報告—アンケート調査を通して」『日本語教育研究』58、pp. 79-101
- 尾崎学 (2014) 「表現意図を活かした敬語表現の符号化の指導について」『日本語教育研究』60、pp. 133-159
- 尾崎喜光 (2008) 「援助申し出場面における授恵表現「～てやる/～てあげる/～てさしあげる」の使用」『待遇コミュニケーション研究』5、pp. 83-94
- 夏素彦 (2010) 「中国における日本語専攻学習者の日本人イメージ—日本語学習動機との関

- 連を中心に」『言語文化と日本語教育』39、pp. 112-121
- 葛茜 (2012) 「中国の大学日本語専攻教育は何を目指しているか—『教学大綱』の分析から」
『日本語・日本学研究』2、pp. 33-45
- 葛茜 (2014a) 「中国の大学日本語専攻教育における教師の言語教育観とその教育の再考—
四大学の日本語教師への調査をもとに」『日本語・日本学研究』4、pp. 53-70
- 葛茜 (2014b) 「中国の大学日本語専攻教育における言語教育の実態とその課題—「精読」
という授業を中心に」『早稲田日本語教育学』14-16、pp. 25-47
- 加納陸人 (2002) 「日本語教科書と教授法への影響—中国高校日本語教科書作成を通して」
『文学部紀要』15(2)、pp. 40-52
- 蒲谷宏 (1999) 「「敬語」を乗り越える—「敬語表現」という考え方」『月刊言語』28 (11)、
pp. 52-55
- 蒲谷宏 (2003a) 「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座日本語教育』39、pp. 1-28
- 蒲谷宏 (2003b) 「「待遇コミュニケーション」の研究と教育」『待遇コミュニケーション研
究』創刊号、pp. 1-6
- 蒲谷宏 (2006) 「「待遇表現教育」の歴史と展望—「敬語」の教育から「待遇コミュニケー
ション」の教育へ」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と
展望』第7章、アルク
- 蒲谷宏 (2007) 『大人のコミュニケーション』（ちくま新書 694）筑摩書房
- 蒲谷宏編 (2009) 『敬語使い方辞典』新日本法規出版
- 蒲谷宏 (2011) 「待遇コミュニケーションから見た日本語能力の育成」『早稲田日本語教育
学』9、pp. 9-14
- 蒲谷宏 (2012) 「待遇コミュニケーション教育の構想（Ⅱ）」『早稲田日本語教育学』11、
pp. 1-19
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』大修館書店
- 蒲谷宏 (2014) 『敬語マスター：まずはこれだけ三つの基本』大修館書店
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子 (2006) 『敬語表現教育の方法』大修館書
店
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉 (2009) 『敬語表現ハンドブック』大修館書店
- 蒲谷宏・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子 (2010) 『敬語コミュニケーション』

朝倉書店

- 蒲谷宏・坂本恵 (1991) 「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』
3、pp. 23-44
- 蒲谷宏・細川英雄 (2012) 『日本語教育学序論』朝倉書店
- 川合理恵 (1999) 「ビジネスにおける敬語的表現の使用意識についての日中対照研究—「伺
う」と「拜访」を中心に」『日本語教育研究』37、pp. 36-58
- 川上郁雄 (2008) 「実践と「教材」はどう結びつくのか—年少者日本語教育における「実践
的教材論」の試み」『WEB版リテラシーズ』5(2)、pp. 10-19
- 川上郁雄 (2009) 「実践と「教材」はどう結びつくのか—年少者日本語教育における「実践
的教材論」の試み」『リテラシーズ』4、pp. 3-18
- 川上郁雄・池上摩希子 (2006) 「年少者日本語教育の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語
教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第3章、アルク
- 川口義一 (1986) 「日本語初級教科書における敬語の扱われかた」『国語学研究と資料』9、
pp. 1-5
- 川口義一 (1987) 「日本語初級教科書における敬語の扱われかた」『日本語教育』61、
pp. 126-139
- 川口義一 (1991) 「敬語指導から見た日本語教育と敬語教育—プロジェクトワークの可能性」
『日本語学』10、pp. 37-41
- 川口義一 (2002a) 「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前
課題」分析(1)」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』15、pp. 15-28
- 川口義一 (2002b) 「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前
課題」分析(2)」『講座日本語教育』第38分冊、pp. 1-15
- 川口義一 (2003) 「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課
題」分析(3)」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』16、pp. 37-50
- 川口義一 (2004) 「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課
題」分析・番外編」『早稲田大学日本語教育研究』4、pp. 1-13
- 川口義一 (2006) 「日本語教育における文法—構造から機能へ、さらにその先へ」早稲田大
学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第6章、アルク
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (2002) 「「敬語表現」と「ポライトネス」—日本語研究の立場
から」『社会言語科学』5(1)、pp. 21-27

- 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸（1992）『日本語教材概説』北星堂書店
- 菊地康人（1997）『敬語』講談社学術文庫
- 菊地康人（2010）『敬語再入門』講談社学術文庫
- 菊地康人編（2003）『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店
- 北原保雄・久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・松井栄一・渡辺実（2003）
『日本国語大辞典 第2版』小学館
- 金華（2004）「中国と日本の大学における日本語の敬語の使い方の比較」『日中言語対照研究論集』6、pp. 162-175
- 金華（2006）「中国朝鮮族における新しい日本語教科書作り—敬語説明部分を中心に」『日本語教育研究』50、pp. 43-62
- 金玉花（2014）「中国の大学の精読授業における協働学習の試み—学生の内省に基づき授業を振り返る」『日本語教育研究』60、pp. 160-177
- 金田一春彦・柴田武・林大（1995）『日本語百科大事典 縮刷版』大修館書店
- 金東奎（2005）「「待遇コミュニケーション」における「表現における敬語化」に関する考察—待遇表現教育のあり方への視座」『早稲田大学日本語教育研究』7、pp. 67-80
- 窪田富男（1990）『敬語教育の基本問題<上>』国立国語研究所
- 窪田富男（1992）『敬語教育の基本問題<下>』国立国語研究所
- 倉持益子（2005）「授受動詞テアゲルの機能—受益者に直接言う場合」『言語と交流』8、pp. 1-15
- 見城悌治（2007）「現代中国における日本語専攻大学生の「日本」イメージ」『国際教育』1、pp. 1-20
- 小泉保（2004）『日本語教師のための言語学入門』大修館書店
- 黄小麗（2005）「敬語に関する指導的意見の変化—「これからの敬語」から「現代社会における敬意表現」へ」『東アジア日本語教育・日本文化研究』8、pp. 355-363
- 河野理恵（2010）「中国の大学における日本文化に関する授業の現状—上海の大学の調査から」『一橋大学国際教育センター紀要』1、pp. 57-66
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 国際交流基金（2006）『日本語教師の役割・コースデザイン(国際交流基金日本語教授法シリーズ第1巻)』ひつじ書房
- 国際交流基金（2014）日本語教育—調査研究・情報提供—国・地域別の情報—中国

<http://www.jpfr.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/china.html>

(最終アクセス：2015年6月1日)

- 国立国語研究所 (1990) 『敬語教育の基本問題<上>』 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1992) 『敬語教育の基本問題<下>』 大蔵省印刷局
- 小林ミナ (1993) 「日本語教科書の教師用指導書のあり方」『名古屋女子大学紀要. 人文・社会編』、39、pp. 321-329
- 小林ミナ (2000) 「「何を」教えるかの再吟味へー日本人評価研究の意義と限界」『北海道大学留学生センター紀要』4、pp. 149-159
- 小林ミナ (2007) 「コミュニケーションから文法をみるーこれからの文法教育がめざすもの」『アジャルト』30、pp. 23-27
- 小林ミナ (2011) 「日本語は誰のものかー「私の日本語」を支える言語能力」『早稲田日本語教育学』9、pp. 15-20
- 駒井裕子 (2006) 「日本語学習者のロールプレイに現れる敬語ー敬語教育への一提言として」『日本語・日本文化研究』12、pp. 25-33
- 小宮千鶴子 (2006) 「語彙教育の歴史と展望ー語彙の研究から語彙教育の研究へ」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第5章、アルク
- 胡躍華 (2001) 「中国人留学生における日本語敬語表現の難点についての一考察」『言語センター広報 (小樽商科大学言語センター)』9、pp. 29-36
- 近藤安月子・姫野伴子 (2008) 「日本語教科書に見る事態把握の傾向ー中国で出版された教科書を例として」『日本認知言語学会論文集』8、pp. 296-306
- 呉少華 (2008) 「談話分析理論による敬語・待遇表現指導の試論ー中国における日本語教育への提言ー」『武蔵文化論叢』8、pp. 13-25
- 蔡全胜 (2006) 『敬語通』 大连出版社
- 佐内かおる (2013) 「初級日本語教科書における会話文の調査と小考ー配慮表現を中心として」『日本語と日本語教育』41、pp. 145-159
- 坂本恵 (2002) 「日本語教育の中での敬語表現の扱い方」『東京外国語大学留学生教育センター論集』28、pp. 61-67
- 坂本恵 (2012) 「「敬意コミュニケーション」教育の試み」『早稲田日本語教育』10・11、pp. 21-35
- 坂本恵 (2013) 「敬語コミュニケーションの基本的な考え方」『待遇コミュニケーション研

- 究』10、pp. 35-51
- 佐久間まゆみ (2006) 「読解・作文教育の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第10章、アルク
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 佐藤勢紀子 (1990) 「中級段階における敬語指導—日本語教育の一環として」『東北大学教養部紀要』55、pp. 1-18
- 佐渡島沙織・吉野亜希子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 島田徳子・柴原智代 (2005) 「日本語教材作成のための三つの視点—教授設計論の適用、学習過程への注目、教室活動の分析指標」『国際交流基金日本語教育紀要』(1)、pp. 53-67
- 修剛・李運博 (2011) 『中国日語教育概覧 I』外研社
- 秦松梅 (2012) 「中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたか—中国の大学における日本語専攻クラスの場合」『言語文化と日本語教育』44、pp. 21-30
- 秦松梅 (2013) 「内容上の事前準備は会話参加をどのように促し支えるか—中国の日本語専攻大学生を対象とした会話活動におけるやりとり分析から」『人間文化創成科学論叢』16、pp. 87-95
- 鈴木義昭 (2006) 「漢字教育・日中対照研究の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第9章、アルク
- 関氷氷・山田香尾里 (2001) 「中国における日本語教育の歴史的発展—大学専門教育について」『日本語日本文学』第11号、pp. 55-65
- 曹大峰 (2005) 「日语专业精读课教学与教材改革研究」北京师范大学日文系編『日语教育与日本学研究论丛』第二辑、民族出版社、pp. 121-130
- 曹大峰 (2008) 「中国における日本語教科書作成—歩み・現状・課題」『言語文化と日本語教育』35、pp. 1-9
- 孫彦瑩 (2014) 「中国人日本語学習者における接頭辞「お・ご」を用いた敬語名詞に関する研究—日本語教育の視点から」『比較日本文化学研究』7、pp. 82-99
- 孫成志 (2013) 「中国人日本語教師による授受補助動詞の指導方略について」『日本語・日本文化研究』23、pp. 48-59

- 高木美嘉・川口義一 (2007) 「企業の重役への敬語表現教育の理念と方法—社会生活の内省を通じた敬語表現教育の試み」『専門日本語教育研究』9、pp. 3-8
- 高澤信子 (2006) 「中国人母語話者に対する「敬語表現」指導についての一考察—行動展開表現を中心に」『日本学研究』16、pp. 154-164
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
- 館岡洋子 (2002) 「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律学習」『東海大学紀要 留学生教育センター』第22号、pp. 1-20
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発』大修館書店
- 田中祐輔 (2012) 「中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷」『国語教育史研究』13、pp. 11-18
- 田中祐輔 (2013) 「中国の大学専攻日本語教科書の現代史—国語志向と文学思想」『言語文化教育研究』11、pp. 70-94
- 田中祐輔 (2014) 「日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教育においてどのように用いられているのか—教科書の設問に表れた指導内容の比較分析を中心に」『文学・語学』210、pp. 26-38
- 田中祐輔・張玥 (2011) 「学習ニーズの多様化に対応する日本語教材開発の取り組み—復旦大学日本語学習状況調査による「学習当事者ニーズ」の検討とその効果」『神奈川大学大学院言語と文化論集』17、pp. 169-185
- 譚蓓・陳月吾 (2005) 「中国人日本語学習者の書く物における誤用について(続編)—専攻学部生の誤用傾向を中心に」『福井工業大学研究紀要』第二部 35、pp. 87-96
- 譚晶華 (2004) 「中国大学日本語専攻のシラバスと四、八級試験要領について」『世界の日本語教育. 日本語教育事情報告編』7、pp. 47-58
- 譚晶華・楊拙人・王建宜・陸留弟・杜鳳剛 (2008) 「日语专业的发展」『高校外语专业教育发展报告 1978-2008』pp. 279-325
- 中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组编 (2001) 《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》大连理工大学出版社
- 中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组编 (2000) 《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》大连理工大学出版社

- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例』 スリーエーネットワーク
- 陳岩 (2007) 「望ましい日本語教材の必須条件」『東アジア日本語教育・日本文化研究』10、pp. 81-90
- 辻村敏樹 (1963) 「敬語の分類について」『国文学・言語と文芸』5-2、大修館書店
- 辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』明治書院
- 坪根由香里・鈴木理子・阪本史代 (2001) 「学習者から見た効果的な語彙の指導法・学習法—アンケート結果より」『小出記念日本語教育研究会論文集』9、pp. 107-130
- 鶴田洋子 (2005) 「日本語教師の教材作成能力をいかに養成するか」『新潟産業大学人文学部紀要』17、pp. 79-90
- 翟東娜・吳麗楠 (2012) 「中国で刊行された日本語教科書における口頭発表について」『応用言語学研究論集』6、pp. 14-39
- 寺尾裕子 (2000) 「日本語教育教材論」『学校教育学研究』12、pp. 1-6
- 東会娟 (2009) 「中国の大学日本語教育における縮約形の指導について」『言葉と文化』10、pp. 151-164
- 董慧穎 (2006) 「現代中国語における敬語的表現」『千葉大学社会文化科学研究』12、pp. 157-166
- 唐麗燕・易洪艷 (2011) 「日本語と中国語の敬語に関する一考察」『福井工業大学研究紀要』41、pp. 521-528
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 時枝誠記 (1955) 『国語学原論 続編』岩波書店
- 徳間晴美 (2010) 「中上級日本語学習者が抱く敬語使用不安の様相—学習者のことばに基づく質的分析による事例」『言語文化と日本語教育』40、pp. 41-50
- 徳間晴美 (2012) 「日本語学習者の「人としての成長」を考える待遇コミュニケーション教育」『早稲田日本語教育学』10・11、pp. 93-107
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2011) 総合案内—各種統計等—平成 23 年度外国人留学生在籍状況調査結果 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html (最終アクセス: 2012 年 10 月 1 日)
- 戸田和子・小柳津智子 (2013) 「外国語としての日本語の敬意表現学習における問題点—大学留学生別科日本語教育課程の事例から」『湘南工科大学紀要』47(1)、pp. 85-90

- 戸田貴子 (2006) 「音声教育研究の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第4章、アルク
- 伴野崇生 (2010) 「待遇コミュニケーションの教科書に対する理論的考察—教科書における「<5つの要素>の連動」」『待遇コミュニケーション研究』7、pp. 49-64
- 西原鈴子 (2007) 「日本語教育に生かす答申「敬語の指針」」『教育委員会月報』59(2)、pp. 18-21
- 日本教材学会 (編) (2013) 『教材事典:教材研究の理論と実践』東京堂出版
- 日本語教育学会 (編) (1986) 『日本語教育』59号、凡人社
- 日本語教育学会 (編) (1991) 『日本語教育におけるコースデザイン』凡人社
- 日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 任麗潔 (2009) 「「～てさしあげる」に見られる対人意識に関する考察—映画・ドラマにおける使用例の分析から」『社会言語科学会第26回大会発表論文集』pp. 174-177
- 任麗潔 (2011) 「中国の日本語専攻教育における「敬語教育」に関する考察—学習者へのインタビューと教科書分析を中心に」『日本学研究』21、pp. 171-187
- 任麗潔 (2012a) 「中国高等教育の専攻日本語教育における「敬語教育」に関する調査報告—学習者・教科書・教師という三つの視点から」『待遇コミュニケーション研究』9、pp. 113-128
- 任麗潔 (2012b) 「話し言葉における「～てさしあげる」に関する考察—映画・テレビドラマの使用例と母語話者への調査に基づいて」『早稲田日本語研究』21、pp. 25-36
- 任麗潔 (2012c) 「話し言葉における「～(て)差し上げる」の使用に関する考察—テレビ・ドラマの使用例に基づいて」『日本学刊』15、pp. 170-181
- 任麗潔 (2013a) 「中国の日本語教科書における「丁重語」の扱い方に関する考察—大学の専攻用教科書を中心に」『待遇コミュニケーション研究』10、pp. 86-102
- 任麗潔 (2013b) 「中国の日本語教育における「敬語教育」に関する考察—現場の日本語教師へのインタビュー調査から」『日語日文学研究』第84号(1)、pp. 437-459
- 任麗潔 (2013c) 「中国の大学日本語専攻教育における「敬語の仕組み」—『教育要綱』と教科書の分析を通して」『日本語学研究と資料』36、pp. 24-36
- 任麗潔 (2013d) 「关于日语中敬语动词的教学探讨—基于日剧中敬语动词的定量调查」『日语学习与研究』2013年04期、総167号、pp. 56-62
- 任麗潔 (2014) 「中国の大学日本語専攻教育における敬語教育に関する研究—敬語に関する

- 新たな記述を改善の第一歩に」『日本語教育研究』60、pp. 72-96
- 長谷川榮（2006）「教材学とは」『「教材学」現状と展望（上）』共同出版
- 樋口裕子（2008）「留学生に対するビジネス場面を意識した敬語教育の重要性」『大阪大谷国文』38、pp. 47-60
- 皮細庚（1998）『大学日語専業教学国際研究会論文集』上海外語教育出版社
- 皮細庚（2005）「学科建設と人材養成目標」『日本語教育と日本語学研究論叢』第4期、pp. 33-41
- 母育新（2002）「中国人日本語学習者を対象とする日本語の文法的文体選択の指導—ポライトネス理論の視点からのアプローチ」『麗沢大学紀要』75、pp. 129-154
- 母育新（2011）「将礼貌策略理論引入待遇表現教学的实证研究」『日语学习与研究』2011年04期、総155号、pp. 111-119
- 古川雅子（2004）「就職面接場面を取り上げた日本語教材の現状分析」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2、pp. 118-127
- 文化庁（1971）『日本語教育指導参考書：待遇表現』大蔵省印刷局
- 文化庁（平成7年～平成25年）「国語に関する世論調査の結果について」
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/（最終アクセス：2014年12月7日）
- 文化庁（2000）「現代社会における敬意表現」国語審議会答申
- 文化庁（2007）「敬語の指針」文化審議会答申
- 文化庁「平成25年度国内の日本語教育の概要」
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h25/（最終アクセス：2015年12月1日）
- 鮑頭陽（2004）「中国における日本語教育の問題点—《標準日本語》という教科書をめぐって」『朝日大学一般教育紀要』30、pp. 47-59
- 鮑頭陽（2011）「中国の主要大学日本語学部における日本語教科書の使用状況」『朝日大学一般教育紀要』37、pp. 55-65
- 細川英雄（2006）「言語文化教育の歴史と展望—ことばと文化を結ぶ教育へ」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第8章、アルク
- 堀口純子（1983）「授受表現に関わる誤りの分析」『日本語教育』52、pp. 91-103
- 堀口純子（2003）「中国の大学における日本語教育の最近の動向」『明海日本語』(8)、

pp. 11-19

益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『月刊言語』2001年4月号「特集：授受の言語学」pp. 26-32

松下大三郎 (1930) 『改選標準日本文法』 中文館書店

松嶋緑 (2003) 「中国のビジネス日本語教材における待遇表現の扱われ方—教科書の分類と教科書中の「待遇表現」の扱われ方」『別科日本語教育:大東文化大学別科論集』5、pp. 55-66

松永彩 (2010) 「教授・学習における教科書の役割と伝達性—途上国における教科書開発に向けて」『国際教育協力論集』13(1)、pp. 15-26

松村明 (2006) 『大辞林第3版』 三省堂

松本秀輔・米澤昌子・入江さやか (2005) 「中級日本語教材に関する一試案」『同志社大学留学生別科紀要』5、pp. 73-90

南不二男 (1987) 『敬語』 岩波書店

宮岡弥生 (2005) 「中国語母語話者における日本語学習上の困難点—効果的な敬語教育に関する考察を中心に」『広島経済大学研究論集』27、pp. 15-23

宮岡弥生・玉岡賀津雄・浮田三郎 (1999) 「外国人が用いた待遇表現に対する中国地方在住の日本人の評価」『日本語教育』103、pp. 40-48

宮岡弥生・玉岡賀津雄・母育新 (2004) 「中国語を母語とする日本語学習者の文法知識が敬語習得に及ぼす影響」『広島経済大学研究論集』27(2)、pp. 35-46

宮崎里司 (1991) 「日本語教育と敬語—主として敬語回避の観点から」『世界の日本語教育、日本語教育論集』1、pp. 91-103

宮崎里司 (2005) 「日本語教科書の会話ディスコースと明示的 (explicit)、暗示的 (implicit) な調整行動—教科書談話から学べること・学べないこと」『早稲田大学日本語教育研究』7、pp. 1-25

宮崎里司 (2006) 「言語習得研究の歴史と展望—多様な課題の解決とマクロ的視野の確立に向けて」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲田日本語教育の歴史と展望』第2章、アルク

宮地裕 (1968) 「現代敬語の一考察」『国語学』72

宮地裕 (1982) 「「待遇表現」その他の項目」『日本語教育事典』大修館書店

村尾恵一 (2012) 「日本語敬語教育試論」『人文学論叢』14、pp. 105-117

- 村尾恵一 (2013) 「日本語リテラシー教育としての敬語—日本語学習者への実践を通して」
『人文学論叢』 15、pp. 149-160
- 守屋三千代 (2002) 「日本語の授受動詞と受益性—対照的な観点から」『日本語日本文学』
12、pp. 1-22
- 守屋三千代 (2003) 「日本語の配慮表現—中国で作成された日本語教科書を参考に」『日本
語日本文学』 13、pp. 37-50
- 安田矩子 (2010) 「日本語教育における敬語その捉え方と教材分析による敬語教育の考察—
初級日本語教科書から」『言語コミュニケーション文化』 8(1)、pp. 169-189
- 谷部弘子 (1999a) 「海外日本語教育実習—北京師範大学での試み」『学芸日本語教育』 2、
pp. 44-50
- 谷部弘子 (1999b) 「中国の大学における日本語教育の質的变化—言語教育と専門性」、『日
本語教育』 103、pp. 99-108
- 山上明・宋協毅 (2010) 『日語敬語新解』 大连理工大学出版社
- 山口隆正 (2009) 「留学生の敬語表現—効果的な指導法について」『拓殖大学日本語紀要』
19、pp. 89-102
- 山田孝雄 (1924) 『敬語法の研究』 宝文館
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (2004) 『新明解国語辞典第6版』 三省
堂
- 山本実佳 (2010) 「海外における待遇表現教育に関する一考察—ロシア人学習者のインタビ
ュー調査を中心に」『待遇コミュニケーション研究』 7、pp. 97-112
- 山本実佳 (2011) 「海外における待遇表現教育の現状と課題—ロシアの日本語教師への調査
を中心に」『待遇コミュニケーション研究』 8、pp. 81-96
- 山本裕子 (2003) 「「～テアゲル」の対人的な機能についての一考察」『世界の日本語教育』
13、pp. 143-158
- 熊林紅 (2009) 「日本語の敬語—中国人学習者の犯しやすい間違いをめぐって」『帝京日本
文化論集』 16、pp. 197-219
- 杨彩虹・董鑫 (2013) 『敬語』 大连理工大学出版社
- 吉岡英幸 (2006) 「教材・教具の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編『早稲
田日本語教育の歴史と展望』 第1章、アルク
- 吉岡英幸 (2008) 『徹底ガイド 日本語教材』 にほんごの凡人社

- 吉岡英幸 (2009) 「最近の日本語教材の動向」『日本語学』28(10)、pp. 4-11
- 吉岡英幸 (2011) 「日本語教材から見た日本語能力観」『早稲田日本語教育学』8・9、pp. 1-7
- 吉岡英幸・田中祐輔 (2010) 「前略 先生お尋ねします……。師弟よもやま対談(第5回)日本語教材の過去、現在、未来(前編)」『月刊日本語』23(12)、pp. 36-38
- 吉岡英幸・田中祐輔 (2011) 「前略 先生お尋ねします……。師弟よもやま対談(第5回)日本語教材の過去、現在、未来(後編)」『月刊日本語』24(1)、pp. 38-40
- 吉岡英幸・細川英雄・蒲谷宏・古屋 憲章・高木美嘉・舘岡洋子 (2013) 「鼎談 日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を基点として」『早稲田日本語教育』12・13、pp. 1-25
- 李欣(1993) 「日本語の敬語について—中国の日本語学習者と中国で日本語を教える人のために」『言語学論叢』12、pp. 79-91
- 李光貞(2013) 「グローバル化の中の教材土着化問題について—中国の日本語教材をめぐって」『東アジア評論』5、pp. 115-121
- 李倍建 (2007) 「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」『中央学院大学社会システム研究所紀要』8(1)、pp. 209-244
- 李平・宋岩岩 (2011) 「日本語学習者敬語誤用種類・原因についての分析」『東アジア日本語教育・日本文化研究』14、pp. 605-619
- 劉宇楠・袁秀傑 (2014) 「日本語複合動詞の習得実態の調査研究—中国における日本語専攻大学生を対象に」『日本語教育方法研究会誌』21(1)、pp. 72-73
- 劉佳琦(2014) 「中国における日本語音声教育の現状と課題—復旦大学日本語学科の取組みから」『早稲田日本語教育学』16、pp. 105-116
- 劉金才 (1998) 『敬語』 外语教学与研究出版社
- 林春(2009) 「第三者敬語表現の教育における村上春樹の短編小説の利用—中国の大学における日本語学習者を対象として」『日本語教育方法研究会誌』16(2)、pp. 46-47
- 林春(2010) 「村上春樹の短編小説を用いた敬語の教材開発—中国の大学における日本語学習者を対象として」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』(13)、pp. 103-112
- 林春(2011) 「敬語教育における学習者の現状分析—中国の大学における日本語学習者を対象に」『滋賀大國文』(48)、pp. 25-40
- 林璋(2009) 「福建師範大学における日本語教育—日本語専攻の伝統と変革を中心に」『留学生教育』6、pp. 1-6

- 冷麗敏 (2005) 「中国の大学における『総合日本語 (精読)』に関する意識調査—学習者と教師の回答を比較して」『日本語文化研究会』創刊号、pp. 59-73
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- 渡邊裕子 (1994) 「日本語初級教科書における敬語の扱いについての一考察」『学校教育学研究』6、pp. 15-23
- S. B. メリアム (2004) 『質的研究法入門—教育における調査法とケーススタディー』ミネルヴァ書房
- Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press (awarded the Duke of Edinburgh prize for the best book in applied linguistics)
- UNESCO (2005) “A Comprehensive Strategy for Textbooks and Learning Materials” Paris : UNESCO

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご指導とご協力をいただきました。この場をお借りして感謝の言葉を申し上げます。

まず、本研究を遂行し、論文をまとめるに当たり、6年間終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻をいただきました早稲田大学大学院日本語教育研究科教授、指導教員の蒲谷宏先生に心より感謝申し上げます。先生は、私が大きな山にぶつかり、目標と自信をすっかり失ってしまったときに、いつも勇気づけてくださり、相談に乗ってくださいました。先生のおかげで諦めずに頑張れました。このご恩は生涯忘れられません。

また、副指導として貴重なご指導、ご助言をいただきました早稲田大学大学院日本語教育研究科小宮千鶴子教授、鈴木義昭教授に心より感謝申し上げます。ご多忙中、お時間を割いてくださり、相談に応じてくださり、誠にありがとうございました。

次に、博士後期課程の正規課程に在籍した3年間、学費を免除していただきました早稲田大学大学院日本語教育研究科、奨学金を支給していただきました中国留学基金委に心より感謝申し上げます。博士号を取得後、母校の大学に戻り、教壇に立ちます。本研究の研究成果を自らの教育現場に生かすとともに、中国における日本語教育全体、更に日本語教育全体に貢献できるよう努力します。

そして、博士後期課程在学中の5年間、早稲田大学大学院日本語教育研究科蒲谷宏研究室の皆様には有益なアドバイスをいただき、励ましていただきましたことをここに記すとともに心より感謝申し上げます。特に、原稿の母語話者チェックをしてくださった植草浩史氏に深く感謝申し上げます。

更に、調査の実施にあたり、調査協力者となってくださいました元学習者（20名）と現場教師（15名）から熱心な協力を得たことを記すとともに心より感謝申し上げます。そして、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力をいただきながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々には心より感謝申し上げます。

最後に、いつも心の支えになってくれた中国にいる祖父、両親に心から感謝します。そして、どのような状況においても応援してくれた優しい夫に心から感謝します。

この研究成果をお世話になったすべての方々に捧げます。

本当にありがとうございました。